

山梨県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

—北巨摩郡長坂・明野・葦崎地内—

1975. 3

山梨県教育委員会  
日本道路公団東京第二建設局

# 序 文

中央道韮崎～小淵沢間の埋蔵文化財発掘調査もすでに3年目を迎え、調査完了した遺跡数も小淵沢町2、長坂町5、明野村2、須玉町1、韮崎市2ヶ所の計12ヶ所に達しております。この12ヶ所の遺跡で昭和48年度に調査した長坂町、明野村、韮崎市の9ヶ所の報告が本年度まとめられ、刊行されることになりました。

長坂町で発見された柳坪遺跡や頭無遺跡では、縄文時代から平安時代の竪穴住居跡が57軒発見され、多数の土壙や集石遺構などがあり、長野県富士見町の井戸尻遺跡や、曾利遺跡にも匹敵する豊富な遺物が出土しております。八ヶ岳周辺の文化が県境を越えて等しくつながり、祖先の足跡がかくも明瞭に残されている驚きと喜びは言葉に表すことができないものであります。

土中に数千年もの長い間眠っていたこれらの文化遺産を決しておろそかにできないのはもちろん、広く県民の皆様にもご高覧いただき、埋蔵文化財保護の手引きとして、又、学習、研究の書としてご利用いただきたいと思います。

国土開発が活発な今日では埋蔵文化財の保護は非常に困難な仕事であり、行政だけではなく、県民全体の協力なしには達成してゆくことができません。埋もれている為に、建造物や古墳のように直接目にする事ができず、耕作中や工事中に破壊されてしまうことが多いのですが、事前に調査ができれば、この報告書のように永く後世に残してゆくことができると考えます。

調査を担当された先生方をはじめ、参加した学生や地元の方々の御協力により、これらの遺跡が数千年の眠りからさめ、今日の私達にその姿を現わしたことは、筆舌に尽くしがたい喜びであります。

八ヶ岳の強い光の中の夏から、霜柱の立つ冬まで、長期にわたり調査に労をおしむことなく御尽力下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和50年3月1日

山梨県教育委員会教育長

丸 茂 高 男



# 凡 例

1. 本書は昭和48年度に日本道路公団と山梨県教育委員会との委託契約により実施された韮崎～小淵沢間埋蔵文化財発掘調査報告書で、この作成経費委託契約は昭和49年度に行なわれた。
2. 本書の作成は県教育委員会で行なったが、長坂、韮崎地内は末木、明野地内は森本が執筆責任者で、編集は末木による。
3. 長坂町、韮崎市内遺跡の執筆は各担当者により提出された住居址カードを要約し、文末に担当者名を記してあるが、遺跡説明その他説明は末木が加えた。
4. その他の執筆については文末に執筆者名を記した。
5. 明野地内を除いた遺物洗浄、ナンバリング、復原作業は整理員全員で行ない、遺構トレースは末木、遺物実測及びトレースは末木、井川、野口、米田、堀内が行なった。  
又、写真撮影は末木、井川による。
6. 長坂町地内出土遺物の全部を図化することができず、主なものだけ記載しているため、遺物出土数と挿図中の数が不一致である。又、遺物図と出土遺物説明のNo.が異なるため対照表が巻末にのせてあるので参考にしていただきたい。
7. スリ石を表現した条線はその方向を示すものではなく面を示す。
8. 遺物及び実測図は県教育委員会文化課に保管してある。

# 目 次

第1章	調査状況	1
1.	発掘調査事務経過	1
2.	調査組織	2
第2章	調査の概況	6
第1節	長坂町所在遺跡について	6
第2節	遺跡の概況	7
1.	下フノリ平遺跡	7
2.	葛原遺跡	8
3.	西下屋敷遺跡	9
4.	柳坪遺跡A地区	10
5.	柳坪遺跡B地区	70
6.	頭無遺跡	141
7.	早道場遺跡	213
8.	西田遺跡	215
9.	三百水遺跡	218
10.	タカノス城址	219
第3章	考 察	220
第1節	縄文時代	220
1.	移動の所産としての吹上パターン	220
2.	土器型式について	224
3.	柳坪B地区10号住居址出土土器について	227
第2節	弥生時代出土遺物について	228
第3節	古墳時代	228
1.	古墳時代後期の住居址について	228
2.	古墳時代出土土器について	230
第4節	歴史時代の土師器について	235
おわりに		241

# 插图目次

第1图	遺跡位置図	4
2.	長坂町遺跡分布図	5
3.	下フノリ平遺跡地形図	7
4.	西下屋敷遺跡地形図	8
5.	葛原遺跡地形図	8
6.	柳坪遺跡地形図	10
7.	柳坪A地区遺構配置図	12. 13
8.	“ 1号住居址平面図	14
9.	“ “ 遺物図	15
10.	“ “ 出土遺物図(1)	16
11.	“ “ “ (2)	17
12.	“ 2号住居址平面図	19
13.	“ “ 遺物図	20
14.	“ “ 出土遺物図(1)	21
15.	“ “ “ (2)	22
16.	“ “ “ (3)	23
17.	“ “ “ (4)	24
18.	“ 4.6号住居址平面図	25
19.	“ “ 遺物図	26
20.	“ 4号住居址出土遺物図(1)	27
21.	“ 4号住居址出土遺物図(2)	28
22.	“ 6号住居址出土遺物図	30
23.	“ 8号住居址平面図	31
24.	“ “ 遺物図	32
25.	“ “ 出土遺物図(1)	33
26.	“ “ “ (2)	34
27.	“ 10号住居址平面図	36
28.	“ “ 遺物図	37
29.	“ “ 出土遺物図(1)	38
30.	“ “ “ (2)	39
31.	“ 15号住居址平面図	41
32.	“ “ 出土遺物図	41

第33図	柳坪A地区土壤実測図	42
34.	"    "    出土遺物図(1)	43
35.	"    "    (2)	43
36.	"    16号住居址遺物図	45
37.	"    "    出土遺物図	46
38.	"    3号住居址平面図	48
39.	"    "    出土遺物図	49
40.	"    5号住居址平面図、遺物図	50
41.	"    7号住居址平面図	51
42.	"    "    遺物図、カマド図	52
43.	"    "    出土遺物図	53
44.	"    9号住居址平面図、カマド図	55
45.	"    "    出土遺物図(1)	56
46.	"    "    "    (2)	57
47.	"    11号住居址平面図、カマド図	58
48.	"    "    出土遺物図	59
49.	"    12号住居址平面図	60
50.	"    "    出土遺物図	61
51.	"    13号住居址平面図、カマド図	62
52.	"    "    出土遺物図	63
53.	"    14号住居址平面図、カマド図	64
54.	"    "    出土遺物図	65
55.	"    各グリッド出土遺物(1)	66
56.	"    "    "    (2)	67
57.	柳坪B地区遺構配置図	68、69
58.	"    1号住居址平面図	70
59.	"    "    遺物図	71
60.	"    "    出土遺物図	72
61.	"    3号住居址平面図	74
62.	"    "    遺物図	75
63.	"    "    出土遺物図(1)	76
64.	"    "    "    (2)	77
65.	"    4号住居址平面図	78
66.	"    7号住居址平面図	80

第67図	柳坪B地区7号住居址遺物図	81
68.	" " 出土遺物図(1)	82
69.	" " " (2)	83
70.	" 10号住居址平面図	85
71.	" " 遺物図	86
72.	" " 出土遺物図(1)	87
73.	" " " (2)	88
74.	" " " (3)	89
75.	" 11号住居址平面図	90
76.	" " 出土遺物図	91
77.	" 12号住居址平面図	92
78.	" " 出土遺物	93
79.	" 13号住居址平面図	94
80.	" " 出土遺物図	95
81.	" 14号住居址平面図	95
82.	" " 出土遺物図	96
83.	" 15号住居址平面図	97
84.	" " 出土遺物図	98
85.	" 16号住居址平面図	100
86.	" " 遺物図	101
87.	" " 出土遺物図(1)	102
88.	" " " (2)	103
89.	" 23号住居址平面図	104
90.	" " 遺物図	105
91.	" " 出土遺物図	106
92.	" 24号住居址平面図	107
93.	" 26号住居址出土遺物	108
94.	" 土拡実測図	109
95.	" 3号土拡出土遺物	110
96.	" グリッド出土遺物	110
97.	" 2号住居址平面図	112
98.	" " 遺物図	113
99.	" " 出土遺物図	114
100.	" 5号住居址平面図、カマド図	116

第101図	柳坪B地区5号住居址出土遺物図	117
102.	" 6号住居址平面図	118
103.	" " カマド図	119
104.	" " 出土遺物図	120
105.	" 8号住居址平面図、カマド図	122
106.	" " 遺物図	123
107.	" " 出土遺物図	124
108.	" 9号住居址平面図、カマド図	125
109.	" " 出土遺物図	126
110.	" 17号住居址平面図	127
111.	" " 出土遺物図	128
112.	" 18号住居址出土遺物図	129
113.	" " 平面図	130
114.	" 19号住居址平面図	132
115.	" " 出土遺物図	133
116.	" 20号住居址平面図	134
117.	" " 出土遺物図	135
118.	" 21号住居址平面図、遺物図	136
119.	" " 出土遺物図	137
120.	" 22号住居址平面図	137
121.	" 22号住居址出土遺物図	138
122.	" 25号住居址平面図	139
123.	" " 出土遺物図	139
124.	" 境原古墳実測図	140
125.	頭無遺跡地形図	141
126.	" 遺構配置図	142、143
127.	" A地区溝セクション	144
128.	" 1号住居址平面図	145
129.	" " 遺物図	146
130.	" " 出土遺物図(1)	147
131.	" " " (2)	148
132.	" 2、3号住居址平面図	150
133.	" " 遺物図	151
134.	" 2号住居址出土遺物図(1)	152

第135区	頭無遺跡 2号住居址出土遺物图(2).....	153
136.	" 3号住居址出土遺物.....	153
137.	" 4号住居址平面图.....	154
138.	" " 遺物图.....	155
139.	" " 出土遺物图(1).....	156
140.	" " " (2).....	157
141.	" " " (3).....	158
142.	" " " (4).....	159
143.	" 5号住居址平面图.....	160
144.	" " 遺物图.....	161
145.	" " 出土遺物图.....	162
146.	" 6号住居址平面图.....	163
147.	" " 遺物图.....	164
148.	" " 出土遺物图(1).....	165
149.	" " " (2).....	166
150.	" " " (3).....	167
151.	" 7号住居址平面图.....	168
152.	" " 遺物图.....	169
153.	" " 出土遺物图(1).....	170
154.	" " " (2).....	171
155.	" " " (3).....	172
156.	" " " (4).....	173
157.	" " " (5).....	174
158.	" 8号住居址平面图.....	175
159.	" " 出土遺物图.....	175
160.	" 9号住居址平面图.....	176
161.	" 9号住居址遺物图.....	177
162.	" " 出土遺物(1).....	178
163.	" " " (2).....	179
164.	" " " (3).....	180
165.	" 10号住居址平面图.....	181
166.	" " 遺物图.....	182
167.	" " 出土遺物图(1).....	183
168.	" " " (2).....	184



第169図	頭無遺跡10号住居址出土遺物図(3)……………	185
170.	"        "        "        (4)……………	186
171.	"        11号住居址平面図……………	188
172.	"        "        "        遺物図……………	189
173.	"        "        出土遺物図(1)……………	190
174.	"        "        "        (2)……………	191
175.	"        12号住居址平面図、遺物図……………	193
176.	"        "        出土遺物図(1)……………	194
177.	"        "        "        (2)……………	195
178.	"        "        "        (3)……………	196
179.	"        14号住居址平面図……………	197
180.	"        "        遺物図……………	198
181.	"        14号住居址出土遺物(1)……………	199
182.	"        "        "        (2)……………	200
183.	"        16号住居址出土遺物……………	202
184.	"        18号住居址出土遺物……………	203
185.	"        集石遺構実測図……………	204
186.	"        "        他出土遺物(1)……………	205
187.	"        "        出土遺物 (2)……………	206
188.	"        "        そ の 他(3)……………	207
189.	"        その他出土遺物(4)……………	208
190.	"        13号住居址平面図……………	209
191.	"        "        出土遺物図……………	210
192.	"        15号住居址平面図……………	211
193.	"        "        出土遺物図……………	212
194.	早道場遺跡地形図……………	213
195.	"        出土遺物図……………	214
196.	西田遺跡地形図……………	215
197.	"        溝状遺構図……………	216
198.	"        出土遺物図……………	217
199.	タカノス域址地形図……………	218
200.	三百水遺跡地形図……………	219
201.	柳坪B地区10号住居址遺物出土状態……………	227
202.	柳坪A地区15号住居址拡張図……………	229

第203図	鬼高式土器編年案	232, 233
204.	土師時代晩期II編年案	238, 239

## 表 目 次

第1表	長坂町遺跡地名表	6
2.	住居出土遺物時期表	225
3.	鬼高期土師分類表	235
4.	杯整形方法	237

## 図 版 目 次

図版1.	下フノリ平遺跡	
2.	葛原遺跡	
3.	西下屋敷遺跡	
4.	西下屋敷遺跡遺物	
5.	柳坪遺跡A地区全景	
6.	"	1号住居址
7.	"	" 遺物
8.	"	" 遺物
9.	"	2号住居址及び遺物
10.	"	" 遺物
11.	"	" 遺物
12.	"	4、6号住居址
13.	"	4号住居址遺物
14.	"	6号住居址遺物
15.	"	8号住居址
16.	"	" 遺物
17.	"	10号住居址及び遺物
18.	"	" 遺物

図版19. ....	15号住居址及び遺物
20.	” 土坛出土遺物
21.	” 土坛出土遺物
22.	” 16号住居址
23.	” 3号住居址
24.	” 5号住居址
25.	” 7号住居址
26.	” ” 出土遺物
27.	” 9号住居址
28.	” ” 出土遺物
29.	” 11号住居址
30.	” 12号住居址
31.	” 13号住居址
32.	” 14号住居址
33.	” ” 出土遺物
34.	柳坪遺跡B地区全景
35.	” 1号住居址
36.	” 3号住居址
37.	” ” 出土遺物
38.	” 4号住居址
39.	” 7号住居址
40.	” ” 出土遺物
41. ....	柳坪B地区10号住居址及び遺物
42.	” ” 遺物
43.	” ” ”
44.	” ” ”
45.	” 11号住居址及び遺物
46.	” 12号住居址及び遺物
47.	” 13号住居址及び遺物
48.	” 14号住居址及び遺物
49.	” 15号住居址及び遺物
50.	” ” 遺物
51.	” 16号住居址及び遺物
52.	” ” 遺物

図版53.	……………	柳坪遺跡 B 地区16号住居址及び遺物
54.	"	23号住居址及び遺物
55.	"	" 遺物
56.	"	24号住居址、26号住居址遺物、3号土抃
57.	"	2号住居址及び遺物
58.	"	5号住居址及び遺物
59.	"	6号住居址及び遺物
60.	"	8号住居址及び遺物
61.	"	8号住居址及び遺物
62.	"	9号住居址及び遺物
63.	"	17号住居址及び遺物
64.	"	18号住居址
65.	"	" 遺物
66.	"	19号住居址及び遺物
67.	"	20号住居址及び遺物
68.	"	21号住居址及び遺物
69.	"	22号住居址及び遺物
70.	"	25号住居址及び遺物
71.	……………	柳坪遺跡 A 地区、B 地区出土石器、及び墨書土器
72.	……………	頭無遺跡全景
73.	……………	頭無遺跡 A 地区溝
74.	"	1号住居址及び遺物
75.	"	" 遺物
76.	"	2号住居址及び遺物
77.	"	" 遺物
78.	"	3号住居址及び遺物
79.	"	" 遺物
80.	"	4号住居址及び遺物
81.	……………	頭無遺跡 4号住居址遺物
82.	"	" "
83.	"	5号住居址及び遺物
84.	"	" 遺物
85.	"	6号住居址及び遺物
86.	"	" 遺物

図版87. ....	頭無遺跡 6号住居址遺物
88.	" 7号住居址及び遺物
89.	" " 遺物
90.	" " "
91.	" " "
92.	" 8号住居址及び遺物
93.	" 9号住居址及び遺物
94.	" " 遺物
95.	" " "
96.	" 10号住居址及び遺物
97.	" " 遺物
98.	" " "
99.	" 11号住居址及び遺物
100.	" " 遺物
101.	" 12号住居址及び遺物
102.	" " 遺物
103.	" " "
104.	" " "
105.	" 14号住居址及び遺物
106.	" " 遺物
107.	" " "
108.	" 16号住居址遺物
109.	" 18号住居址出土遺物、頭無石器
110.	" 集石遺構及び遺物
111.	" " 及びその他
112.	" 13号住居址及び遺物
113.	" 13号住居址遺物、15号住居址遺物
114.	" 15号住居址及び遺物
115. ....	早道場遺跡
116. ....	西田遺跡
117. ....	三百水遺跡
118. ....	調査参加者

# 第1章 調査状況

## 1. 発掘調査事務経過

昭和48年5月11日

下フノリ平、西下屋敷（葛原）、柳坪、早道場の4ヶ所について県より日本道路公団に発掘調査協議書を送付する。

昭和48年5月21日

日本道路公団より上記4ヶ所の発掘調査の委託契約書が県に送付される。

昭和48年5月23日

文化庁に上記4ヶ所の発掘届を提出する。

昭和48年6月4日

2部送付された委託契約書1部を返送する。

昭和48年6月15日

文化庁より上記4ヶ所の発掘調査承諾書が送付される。

昭和48年6月15日

長坂町下フノリ平遺跡発掘調査開始。

昭和48年6月20日

長坂町西下屋敷（葛原）遺跡発掘調査開始。

昭和48年7月1日

長坂町柳坪遺跡発掘調査開始。

昭和48年7月10日

明野村早道場遺跡発掘調査開始。

昭和48年7月14日

文化庁へ西田遺跡発掘調査届を提出。

昭和48年7月16日

西田遺跡発掘調査開始。

昭和48年7月26日

西田遺跡発掘承諾書が文化庁より送付される。

昭和48年10月1日

文化庁に頭無遺跡の発掘届を提出する。

昭和48年10月10日

長坂町頭無遺跡、韭崎市三百水遺跡の発掘調査協議書を日本道路公団に提出する。

昭和48年11月1日

日本道路公団より上記遺跡発掘調査の委託契約書が2部送付される。

昭和48年11月2日

日本道路公団に契約書1部を返送する。

昭和49年2月12日

三百水遺跡発掘届を文化庁へ提出する。

- 昭和49年2月19日 日本道路公団に委託契約金変更届を提出する。
- 昭和49年3月6日 文化庁より三百水発掘調査承諾書が送付される。
- 昭和49年3月15日 三百水遺跡発掘調査開始。
- 昭和49年3月18日 日本道路公団より委託契約金変更契約書が送付される。
- 昭和49年3月25日 柳坪遺跡等経費精算書を日本道路公団に提出する。
- 昭和49年3月29日 上記契約書を日本道路公団に返送する。
- 昭和49年3月29日 頭無遺跡等経費精算書を日本道路公団に提出する。  
上記精算了承通知が日本道路公団より送付される。
- 昭和49年4月2日 柳坪遺跡等精算書了承通知が日本道路公団より送付される。
- 昭和49年4月13日 文化庁よりトリテ遺跡の発掘承諾の通知が送付される。

## 2. 調査組織

### ○下フノリ平、西下屋敷、葛原遺跡

調査団長 井出佐重（山梨県遺跡調査団長）

調査担当者 谷口一夫（日本考古学協会員、県遺跡調査団常任幹事）

調査員 末木 健（県文化財主事）

調査補助員 蛭間真一、浦野保範、宮崎隆博、伊藤恒彦、茅野俊彦、山路恭之助、鈴木茂都代、山谷牧子、（日本大学）

作業員 板山とよ子、白倉忠男、清水金子、清水保伴、葉山たま子、板山位久恵、板山初子、清水たつじ、白倉英子、板山ほみ子、板山幸枝、板山千鶴子、長島澄子、白倉兵重、清水生一、板山はつ子、祝与親、清水すみえ、板山俊道、二木七夫、板山重光、板山栄子、（地元長坂町大井ヶ森）

### ○柳坪遺跡

調査団長 調査担当者、調査員は同上、

調査員 岡崎完樹、増田泰重、清藤一順、長野たか子、増田住名子、

調査補助員 茅野俊彦、伊藤恒彦、宮崎隆博、浦野保範、古峰孝夫、山路恭之助、香月利文、野中和夫、佐藤正、河合英夫、清水道則、金井玉枝、藤井真紀子、有田登紀、蛭間真一、永浜真理子、水口章、斉藤悟朗、野飼篤子、鈴木茂都代、庄司佳松、佐藤正、（日本大学）

大森恒美、竜前初枝、米田明訓、野口行雄、小林洋、河合章司、堀内伸浩、海老原立枝、橋本順子、小林佳子、金古美恵子、河野嘉寿恵（明治大学）

古田寧子、勝又裕子、中石和志子（東海大学）

永瀬和子、宗和子（一般）

作業員 小沢常広、根津嘉吉、清水繁子、清水きよみ、清水まこと、早矢仕ふさ子、輿石正已、清水けさえ、平島晴夫、平島義和、平島千尋、清水夏、清水やす子、小沢博子、平島次郎、小松一也、向井徳夫、古屋良男、富高照美、滝田家功、滝田武子、平島まさ子、平島篤子、浅川春子、



里吉よし子、平島はる江、平島みゆき、平島慶子、平島たけの、平島ふみ江、清水ちよ子、清水けさえ、平井美充（地元長坂町大八田）

○頭無遺跡

調査団長、調査担当者、調査員は下フノリ平と同様、

調査補助員 河合英夫、田中次郎、大塚昌彦、野中和夫、藤井真紀子、伊藤恒彦、古峰孝夫、野飼篤子、蛭間真一、茅野俊彦、香月利文、山路恭之助、宮崎隆博、有田登紀、金井玉枝、金箱文夫、齊藤悟郎（日本大学）

米田明訓、野口行雄（明治大学）

山崎由美（埼玉大学）

作業員 跡部辰雄、原五郎、堤正浩、堤孝芳、跡部和江、跡部直江、跡部とみの、中山はつ江、堤ますじ、輿石満子、輿石澄子、輿石富子、輿石久子、細木楓、堤雪子、堤幸子、堤茂子、堤かほる、一之瀬正子、輿石静香、清水将、武井かねよ、輿石保孝、輿石福子、小沢常広、細木雪子、堤たのも、堤志ずゑ、輿石豊子、輿石正子、輿石ゆう子、輿石富士子、輿石すがえ、堤まきえ、古屋ときわ、山下久代、跡部ひで子、堤ひで子（長坂町塚川、渋沢）

○三百水遺跡、タカノス城址

調査団長、調査担当者、調査員は下フノリ平と同様、

作業員 向山智恵子、砂畑文子、向山待子、北村文直、辻陸史、大柴かのえ、向山真由美、高石真、向山たつえ、向山広世、向山三樹、向山誠、大柴徳紹、大柴忠造、広瀬兼義、志村一雄、広瀬健市、大柴聡、志村幸男、広瀬亥之輔、大柴大哉、大柴進（葦崎市穂坂町）

○早道場遺跡、西田遺跡

調査団長、井出佐重（県遺跡調査団長）

調査担当者 飯島進（県遺跡調査団常任幹事）

調査員 菊島美夫（県遺跡調査団幹事、日本考古学協会員）山崎金夫（県遺跡調査団幹事）

森本圭一（県文化課主事）

調査補助員 一ノ瀬寿美子、酒井由美子、田中文江、服部弘栄、竹内清志、河合良彦、松井仁美、田村正和、梅山朋子、岡田紀子、齊藤敦子、岡下喜代恵、岡田奈美子、田村晃一、川口敏克、五十嵐晴子、高坂裕子、清水勝子、向山みどり、勝俣弥生、渡辺淳子、渡辺淳子、石川久子（都留文科大学）

作業員 石黒晃、八代英一、伊藤八十九、八代正文、伊藤等、清水秀雄、深沢ますみ、上野由美子（明野村上手）

事務局職員

事務局長 駒井二郎（文化課長）

局員 田草川 昇（文化課長補佐）

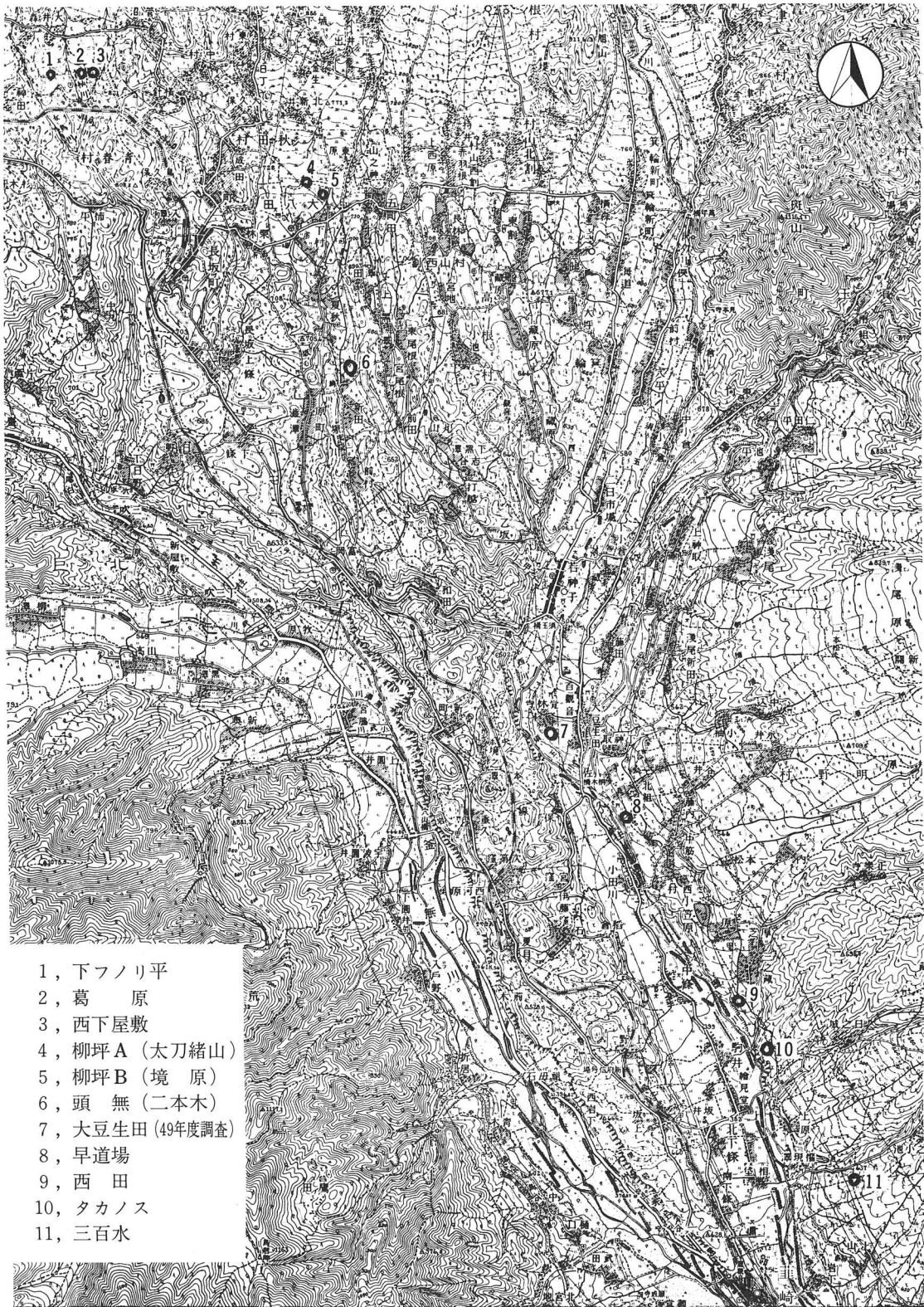
山口 善一（文化課副主幹）

波木井市郎（文化課文化財係長）

整理作業員（長坂町内遺跡）野口行雄、米田明訓、井川達雄、小林洋、堀内伸浩（明治大学）

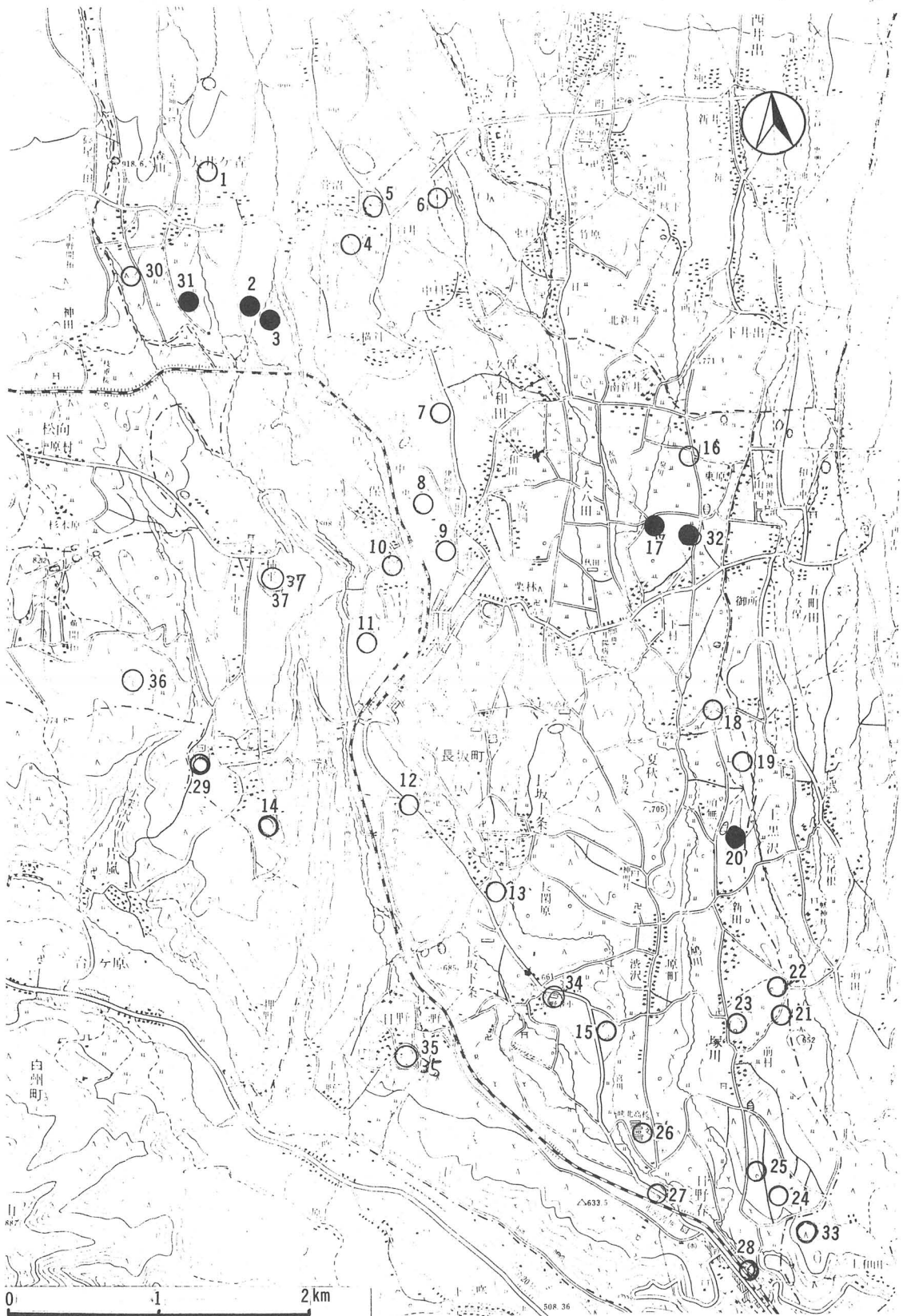
北村恵利、辻陸史、浅利千秋、保坂尚子、野中和夫（日本大学、他）

※ この他作業員代理として参加していただいた多くの人がある。



- 1, 下フノリ平
- 2, 葛原
- 3, 西下屋敷
- 4, 柳坪A (太刀緒山)
- 5, 柳坪B (境原)
- 6, 頭無 (二本木)
- 7, 大豆生田 (49年度調査)
- 8, 早道場
- 9, 西田
- 10, タカノス
- 11, 三百水

第1図 遺跡位置図



第2図 長坂町遺跡分布図

## 第2章 調査の概況

### 第1節 長坂町所在遺跡について(第2図)

長坂町は八ヶ岳の権現岳(2786m)を北端とし、南は日野春駅あたりまで、南北18.5kmの細長い町である。西は釜無川にえぐられた急崖となっており、八ヶ岳泥流が露頭して荒々しい。対岸には国道20号線が走るが、長坂町台地上と国道との比高は100m以上で交通の難所となっている。しかし台地上の地形はゆるやかな傾斜で、裾野は幾本かの河川によって南北に長い舌状台地が形成されている。遺跡はこの台地上に立地し、縄文時代の集落跡から江戸時代民間信仰の産物である十三塚や富士塚(藤塚)に類するものまで、36ヶ所発見されているが、やはり縄文時代に属するものが多く発見され、弥生時代、古墳時代～平安時代の遺跡の報告は少ない。しかし現在でも山林が多く、地図上では遺跡所在の想定がなされる場所は数多く、今後の精密な分布調査によっては連綿とした時代の流れを把握することも夢ではない。事実、北巨摩地方では少ないとされてきた弥生時代初頭の土器や古墳時代の集落跡も今回の調査で発見されており、静岡県経路の文化流入のあり方と対置できる諏訪経路の設定も、その一步手前にまで達している。古代、中世に於ても重要な位置をもつこの地域の中には、逸見荘、大八幡荘の荘園、又、源清光(1110～1168)が大泉村谷戸城跡に根柢をかまえたと言えられる遺跡などが知られることは、今後歴史分野との協力無しには解明できない多くの問題も山積されている。

#### 参考文献

- 「史跡名勝天然記念物調査報告」第5集、山梨県、1931
- 「先史原史時代調査」北巨摩教育会、1932
- 「甲斐の先史原史時代調査」仁科義男、1935
- 「郷土原始文化遺跡分布図」仁科義男、1949
- 「甲斐石器時代遺物発見地名表」山本寿々雄、1955
- 「山梨県遺跡地名表」山梨県教育委員会、1964
- 「長坂町遺跡分布台帳」山崎金夫、1972
- 「中央自動車道関係遺跡第一次調査概報」山梨県教育委員会、1969
- 史前学雑誌13の3、井出佐重他、1941
- 「山梨県の考古学」山本寿々雄 1968

1	大井ヶ森(天婦石)	縄文後～晩
②	葛原	縄文中・弥生初
③	西下屋敷	縄文中、後・弥、後
4	新田森	縄文中～後
5	菅沼	縄文中
6	牛久保	縄文中、後
7	米山	縄文中、後
8	房屋敷	縄文前、中、後
9	大林	縄文、中、
10	高松(北)	縄文、中、後・弥、後
11	高松(南)	縄文中
12	酒飲場	縄文中～後
13	藤塚	古墳時代～平安
14	下中丸	縄文中～後、弥生、
15	山本	縄文中、後、
16	弥右衛門塚	古墳(?)
⑰	太刀緒山(柳坪A)	縄文中、古墳時代
18	太太神	(時代不明)
19	天王塚	古墳
⑳	三本木(頭無)	縄文中、古墳前
㉑	東前田塚	墳丘(時代不明)
22	東前田北	縄文前、中、土師器
23	東前田南	縄文中、平安
24	競馬場	縄文中、後
25	泥里西	縄文前、中
26	泥里東	縄文中、弥生後
27	下原	縄文前、中、後
28	太古塚	古墳時代
29	清春小南	
30	下フノリ平西	縄文中
⑳	下フノリ平	縄文中
㉒	柳坪B(境原)	縄文中、平安
33	須玉町、上和田北	縄文中
34	日野春小学校々庭	縄文
35	上日野	縄文
36	燕開拓南	
37	柿木平	

第1表 長坂町遺跡地名表

# 第2節 遺跡の概況

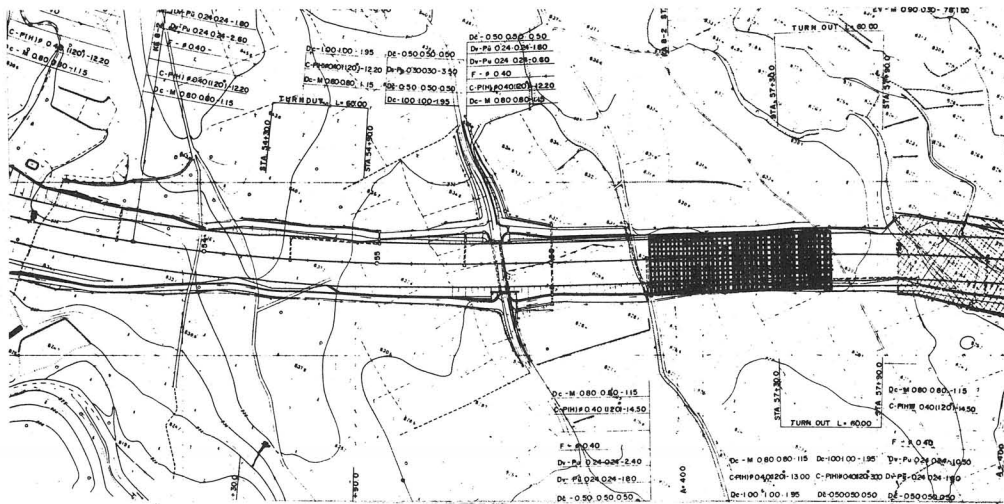
## 1. 下フノリ平遺跡 (第3図、図版1)

北巨摩郡長坂町大井ヶ森字下フノリ平に所在するこの遺跡は中央自動車道STA57～58の間に位置する。八ヶ岳の裾野に広がる幅400mの南にのびる舌状台地端に位置し、標高830mの高所にある。この幅広い舌状台地は隣県富士見町の地形と比較にならぬ程広く思われるが、台地の間には幾本もの谷が黒褐色土で埋まり平坦となっている。下フノリ平遺跡もこの埋もれ谷の端にあって、ほとんどの遺物が流失した様子で、黒色有機質土中より若干の縄文中期片及び石器等が発見されているだけである。あるいは、この遺跡西側約400mの台地端に縄文中期の良好な遺跡があるところから、これから流れ出した遺物であるかもしれない。いずれにしろ遺構は全く発見されず、土器の磨滅もはげしい。

下フノリ平遺跡発掘調査日誌

6月16日(晴れ)

鉋入式終了後除草し、グリッドを設定する。STA56+60～57+20の間60mの間に2m



第3図 下フノリ平地形図

グリッドを設定し、STA 56+60の杭を1としてSTA 57+20の杭を31とした。又、南からA、B、Cのアルファベットをふり、グリッド名をA1、B2……と呼ぶ。

表土は耕作土で約25cm、第2層は黒色土で約25cm、その下は水分を多く含む黒色有機質土である。

6月17日（曇り時々雨）

グリッド発掘を続行する。遺物量は少なく縄文土器片（M16グリッド）が出土する。又、B16グリッド、D16グリッド、I16グリッドより打製石斧がそれぞれ1点ずつ出土。P1グリッドで幅約50cmの溝が発見されたが、遺物はなく、水が湧いてきたので、掘り下げを中止する。

6月18日（雨）

STA 57+20から38m×16mグリッド拡張をする。拡張部の表土は浅く、約15cmでローム層にあたり、遺物はない。

6月19日（曇り）

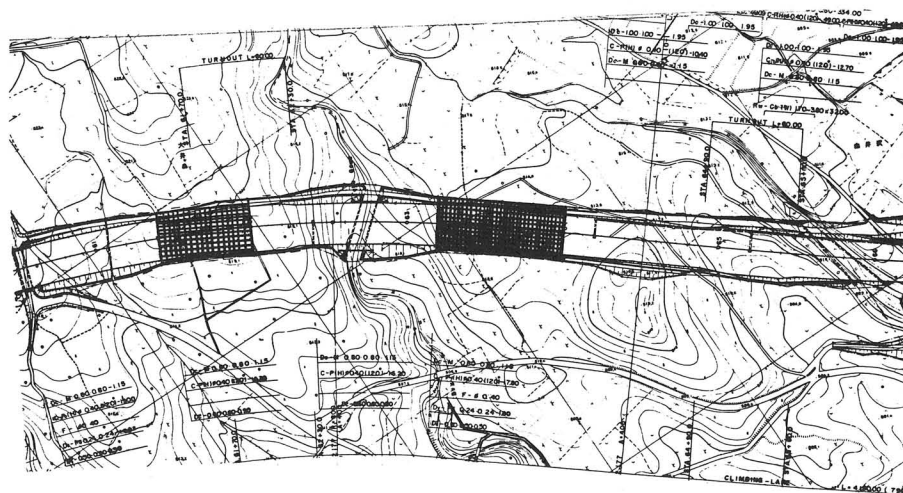
東西セクション、及び南北セクションをとり、作業を終了する。道具を整理して、西下屋敷遺跡へ移動する。

## 2. 葛原遺跡（第5図、図版2）

北巨摩郡長坂町大井ヶ森字葛原所在のこの遺跡は高川の西台地標高818mに位置し、中央道杭STA 61～62の間であって、台地幅は約100mで浅い谷がこの西側にある。地目は山林で、表土は約30～40cmあるがローム層が柔らかく、ハードロームまで約40cmの厚さを計る。

遺物の表面採集では、中央道の路線の北側に縄文時代中期の土器片、打製石斧、凹石などの他に縄文時代終末から弥生時代初期にかけての水神平系の土器片も見ることができた。しかし、路線内調査地区では何ら遺構を検出することができず、表土中より遺物が若干発掘されたのみである。

この状態から、遺構は路線北側であって、これより流出したものと推察される。



第4、5図 葛原、西下屋敷地形図



## 葛原遺跡発掘調査日誌

6月24日（晴）

西下屋敷遺跡の西側の台地で、STA61+40～STA62+20にグリッドを設定する。表採では縄文時代中期及び弥生時代水神平系土器片等が出土しているが、発掘作業中には遺物がほとんど出土しない。

表土約20cm、黄褐色土約20cmでハードロームとなる。

6月25日（晴のち曇り）

各グリッドより少数の破片は出土するが、遺構は検出されない。

6月26日（雨）

残りのグリッドを完掘し、作業を完了する。出土遺物は縄文土器片、石器等が若干出土しているのみである。

### 3. 西下屋敷遺跡 (第4図、図版3、4)

葛原遺跡と高川をはさんで東の台地上にあって、中央道杭STA63～64の間を調査した。地目は桑畑で、南にのびる台地の幅は約100mを計るが、標高814mの西側端に比較し、東側は2m程低くなっている。表土の黒褐色有機質土は30cm～50cmでローム層に達する。葛原遺跡のローム層と異なり、輝石安山岩の巨石がローム中に含まれ、遺構は発見されない。遺物も縄文時代中期のものが主で、遺構は路線北側に存在するようである。

葛原遺跡と谷をはさんではほぼ同一時期（縄文中期）であり、近接集落のあり方が柳坪遺跡、あるいは長野県尖石、寄助尾根遺跡、茅野和田東西遺跡の関係を究明するのに必要な遺跡と考える。

## 西下屋敷遺跡調査日誌

6月20日（雨）

南北32m、東西84mの発掘区を設定する。表土は浅く約30cmで、表面採集で縄文時代の土器片が多数発見されていたが、掘り始めると遺物量は少ない。E-14グリッドから石鏝が一点出土した。

6月21日（晴れ後雨）

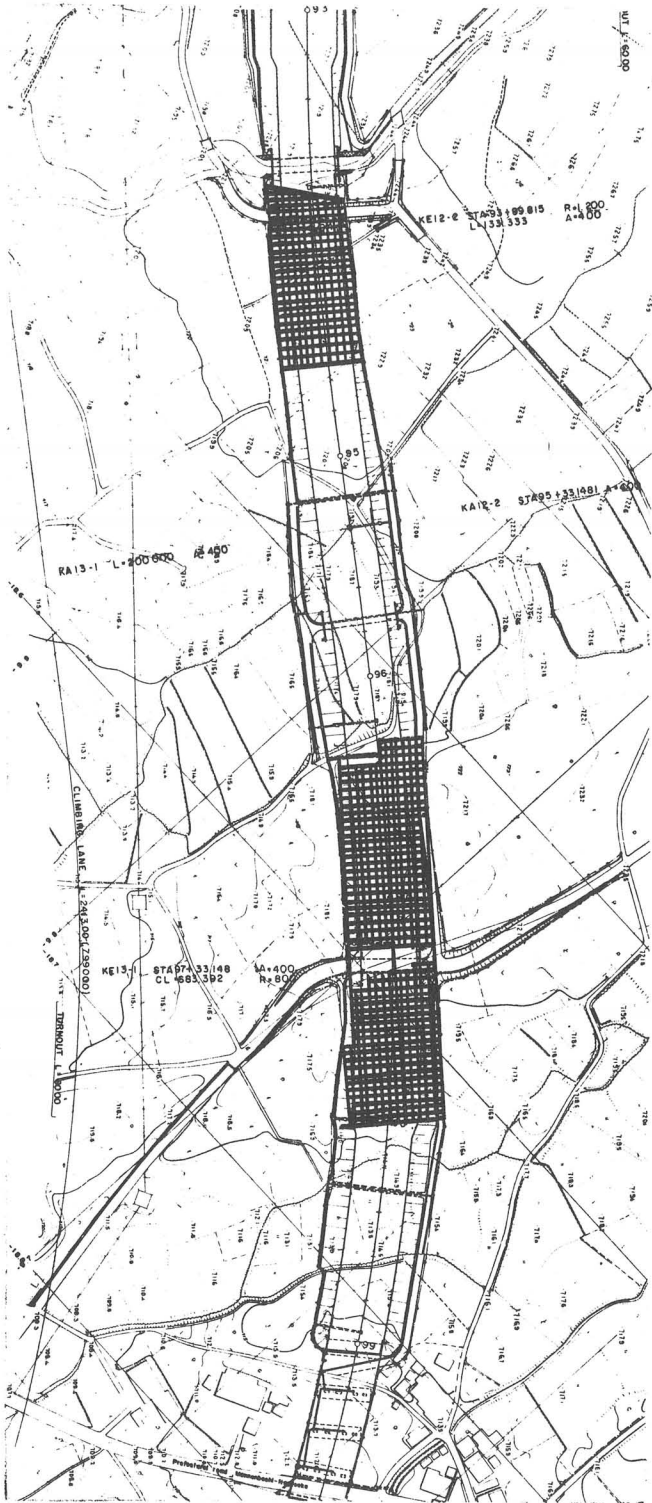
K2グリッドから焼土（径40cm）が発見され周囲のグリッドを掘り下げることが、柱穴らしいものはL2グリッドから1本発見されただけで、床面もはっきりせず住居とは認めがたい。

6月22日（曇り後雨）

作業を続行するが遺構は現われず、東側に掘り進むにしたがって石が多くなる。



#### 4. 柳坪遺跡 (第6図、図版5,34)



第6図 柳坪遺跡地形図

長坂町大八田字秋田の部落北側に高压線の鉄塔があり、これに沿って中央道が通り、台地は南に向ってゆるやかに下っている。柳坪遺跡A地区STA 94前後に、B地区は96～98の間であって、遺跡名の柳坪はA地区の小字名で、B地区は境原の小字名をもつが、遺跡の性格が判明するまでB地区とし、同一遺跡名を冠した。A地区の西側には泉沢が流れこれより西側の土壌は泉川及び衣川の氾濫によって堆積したもので、地表下約1mで砂礫層に達し、表土も砂礫を多く含んでいた。又、A地区の東側農道から溝が存在し、幅20m程が黒色有機質土で埋まり、そこからB地区西側の沢までの約100mは、表土が浅くロームまで約30cmであるが、遺構・遺物ともほとんど発見されていない。A地区とB地区の間には水田が沢に沿って造られており、B地区から発見された平安時代の集落が嘗なんだ水田の姿をうかがうことができそうである。しかし、この水田地域については時間の関係で調査することはできなかった。

A地区は標高724mで表土は浅く、約15～20cmでローム層に達する。このローム層はかたくしまり、砂礫及び輝石安山岩の巨石がローム層中あるいは上にあって住居址に接していたり、住居中に存在するのも幾軒がある。ローム層が流されているのであろうか。

B地区のロームはA地区と同様に浅く、約20cmで表土から達するが、ロームの質が西側と東側で極端に異なり、西側では砂礫を含んだジャリジャリしたロームでA地区と酷似しているが、東側は柔ら

かく、ソフトローム様である。しかし、3号土壌の壁面からすれば、やはり下の方は砂礫を多く含んだしまりのあるロームで、上のソフトロームが、下層の砂礫混入ロームの風化したものか流されているものであることが分る。又、B地区の西側は山林のため攪乱が少なく遺物も豊富であるが、道路をはさんだ両側の畑は耕作のため攪乱を受けている。

A地区で発見された遺構のうち縄文時代中期の住居址が7軒、古墳時代の住居址が7軒、弥生時代末～古墳時代初頭に位置すると考えられる隅丸方形住居址1軒の計15軒の他に小竪穴が12個発見されている。この小竪穴で、遺物が出土しているものを除いて攪乱穴もあるだろう。浅い谷をはさんでA地区より200m東にあるB地区では、縄文中期の住居址が14軒、平安時代住居址12軒、高床遺構と考えられる柱穴群が1、小竪穴4個が発見された。

縄文時代の集落としても貴重な資料となるであろうし、特に、古墳時代の集落は県内でも貴重なものと言える。

## 柳坪遺跡A地区 (第7図、図版5)

### 1) 縄文時代

#### 1号住居址 (第8、9、図 図版6)

昭和48年7月1日～7月13日

○プラン 円形、南北3.25m、東西3.15m

○主軸軸 N-4°-E

○柱穴 支柱穴4本、入口部施設(?)柱穴4本、計8本

○周溝 なし

○壁 南壁良好、東側は攪乱のため不明確

○床面 良好で一部攪乱部によって破壊されているがほぼ水平である。北西から南東にやや傾斜

○炉 円形(五角形か)石囲炉で東西70cm×南北70cm、深さ30cm

○出土遺物 住居中央部に集中して土器、石器類が出土している。覆土のものはほとんど破片となっているのに比べ、炉の縁に一括土器が口辺を炉内に向けて倒れている。また、南側には埋嚢があり、南側にはL字形の石組を伴ったピットがある。一括土器は10個体分位で、凹石やドリルも発見されている。土器は曾利II式位であろうか。

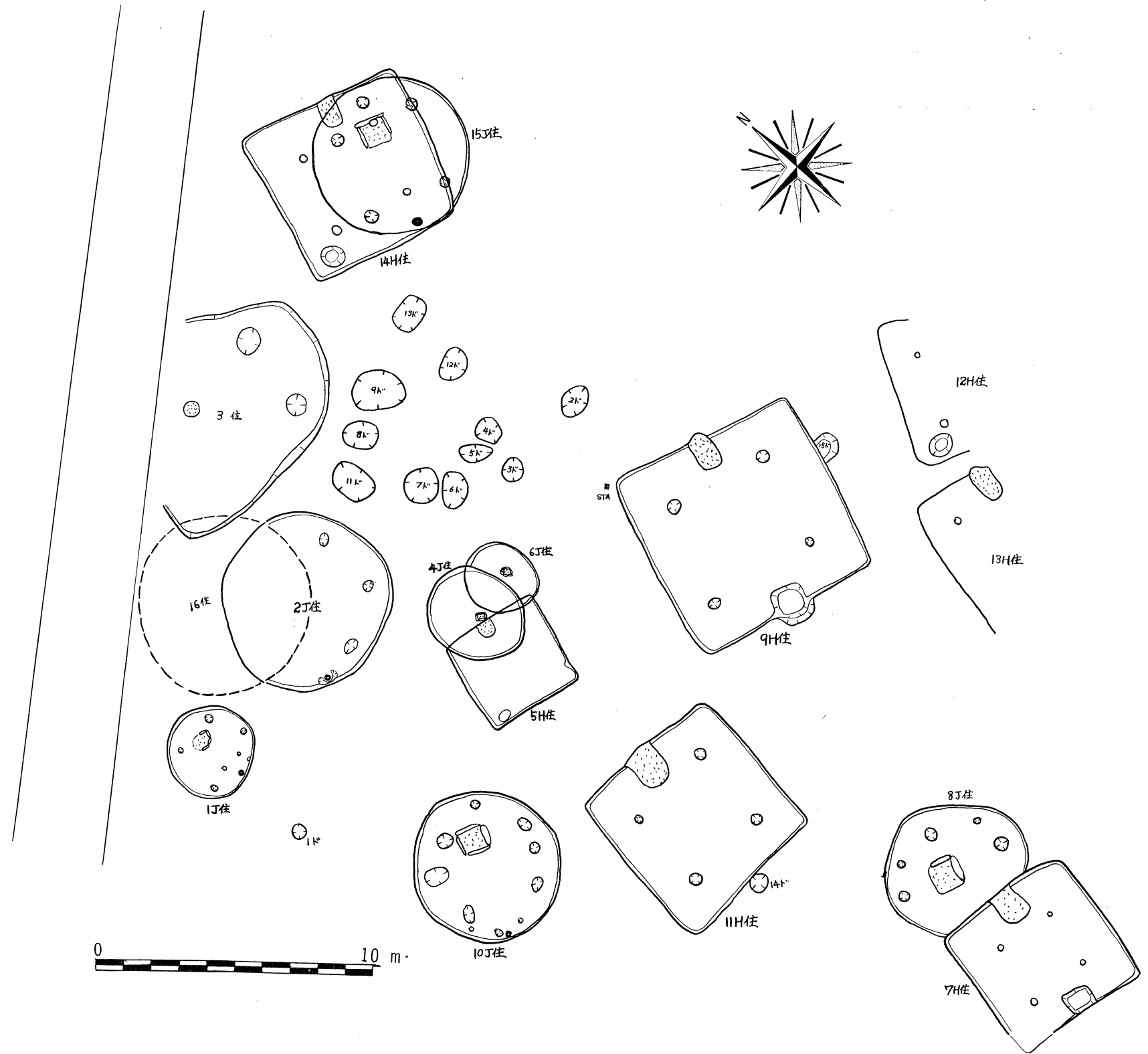
○その他 住居は比較的小さく、遺物の流れ込み状況が覆土に於て2通り見られる。即ち、西側からと東側からで、床面上の土器群と層的に分けることができる。又、埋嚢があり、原則的に把えるなら埋嚢が最も古く、次に床面一括土器、そして覆土一括土器群となる。しかし、これらの土器群を細別するには、理論的な点もふまえてゆかねばならないであろう。

埋嚢の周囲に4本の小柱穴が発見されている。L字形石組の性格は問わないこととして、この4本の柱穴は入口の階段施設のものとしてよいであろう。

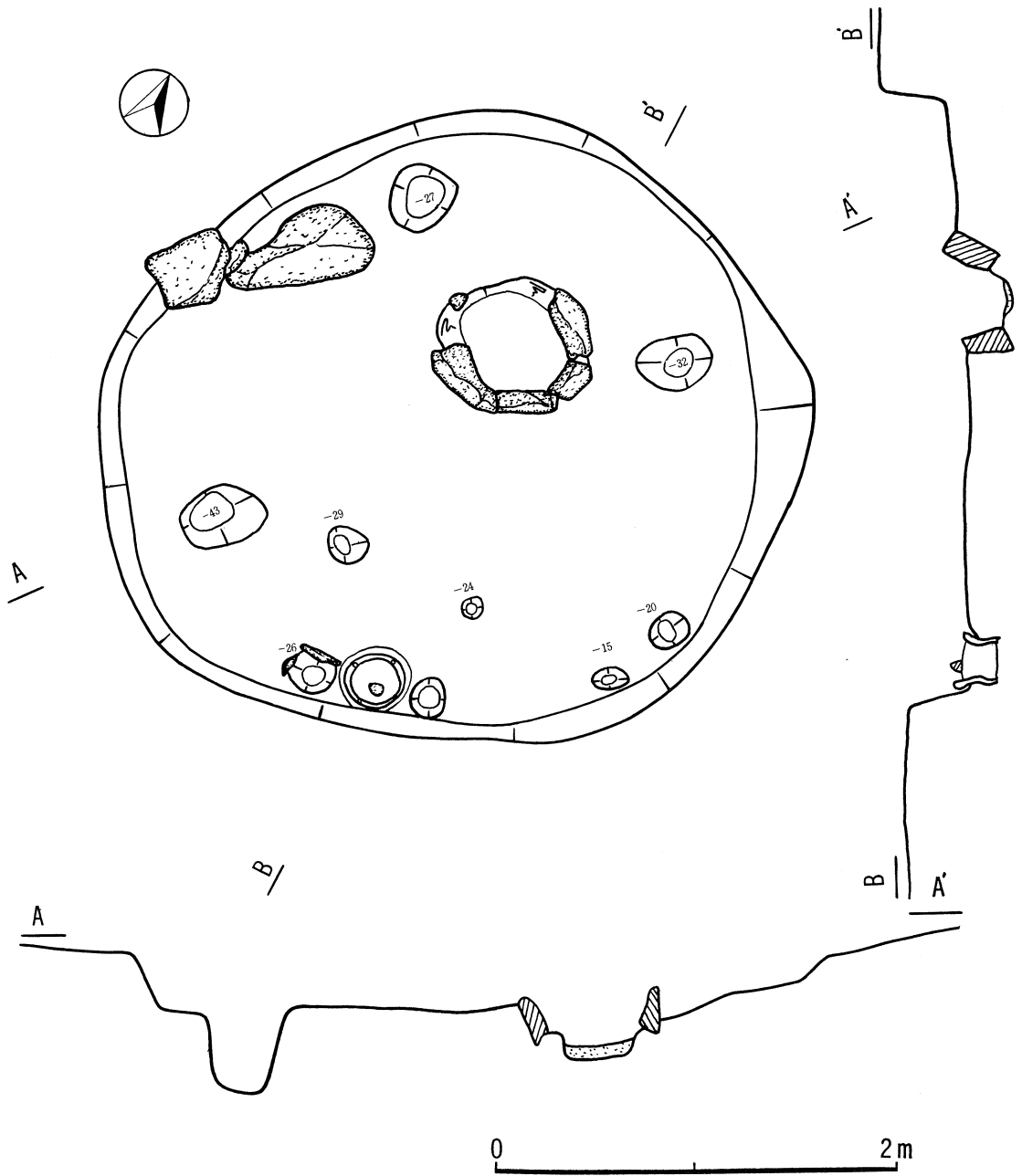
(香月)

出土遺物(第10、11図) (図版7、8)

1は住居南方入口部に正位の状態で埋設されていたもので、胴部下半が欠損している。口縁部に把手が4個つけられ、把手から粘土紐で口辺部文様帯が長方形に8区画つくられる。区画内は沈線で縦

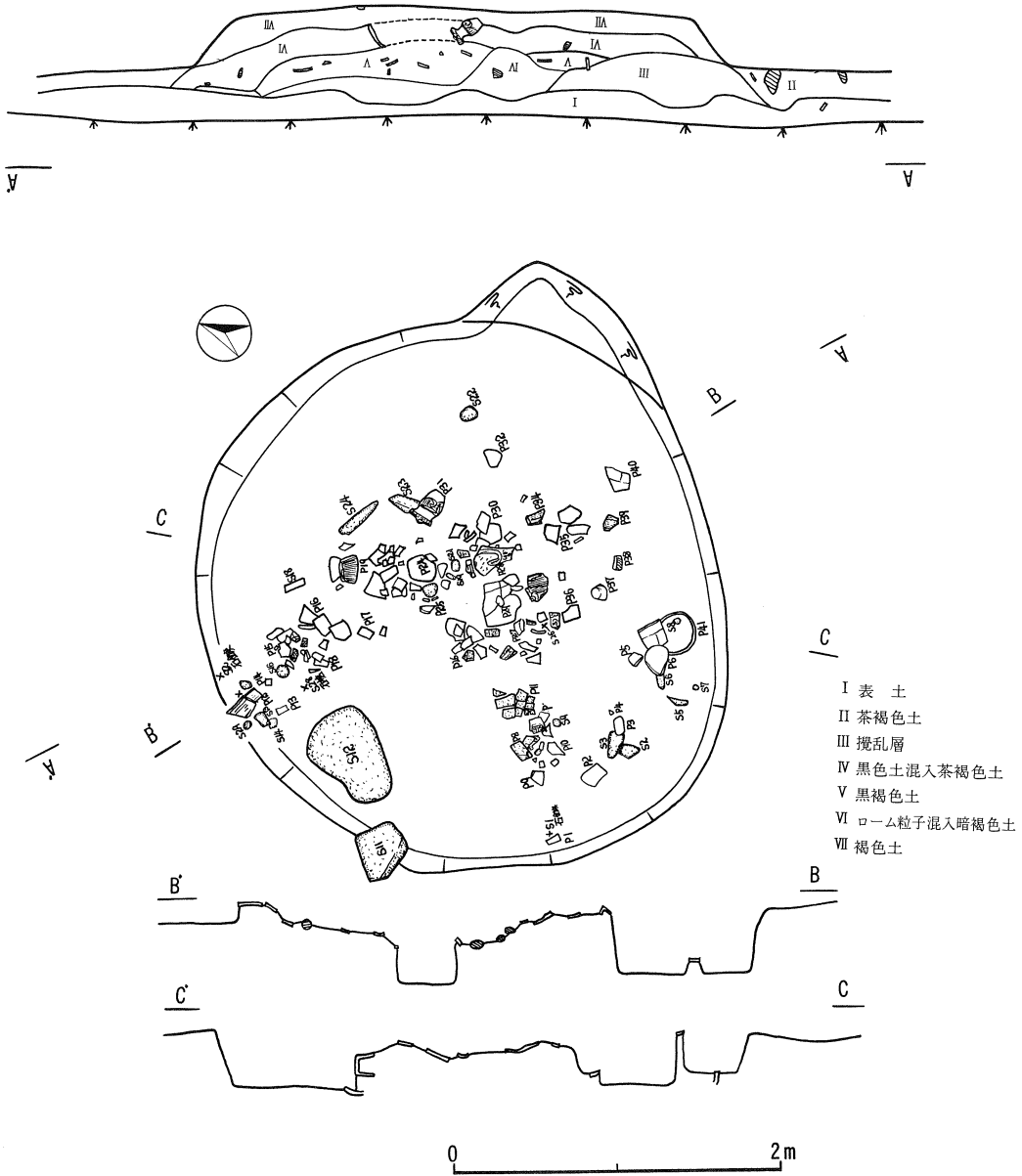


第7図 柳坪A地区遺構配置図



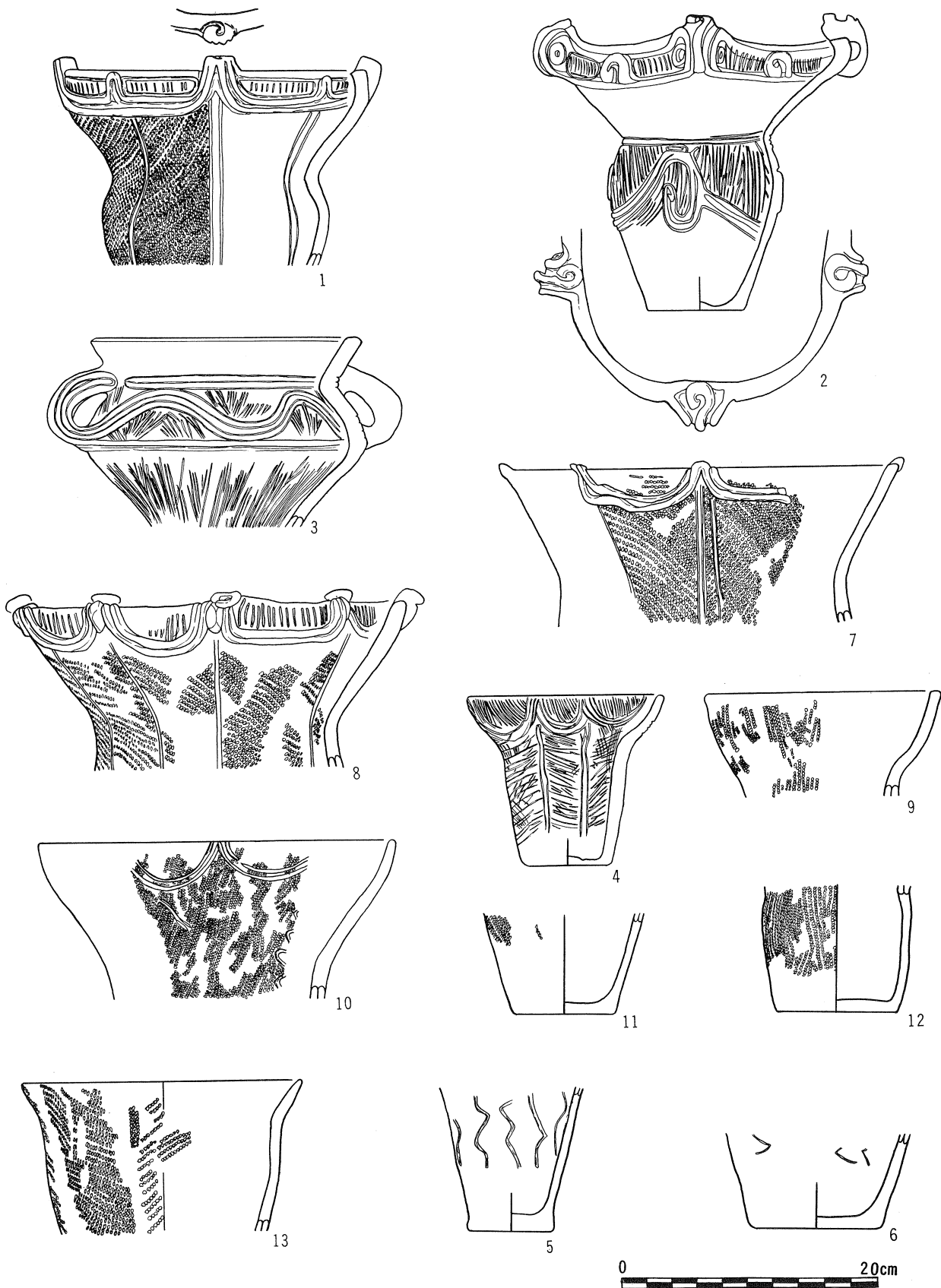
第8図 柳坪A地区1号住居址平面図

に刻まれ、胴部は縄文の地文に平行沈線の懸垂文で8区画にくぎられている。器面表面は二次焼成を受けてやや赤くザラザラしているが、内面はヘラで磨かれている。胎土には雲母及び石英の小粒子を含んでいる。2は覆土中床面やや上から出土したもので器形は1と類似するが、胴部屈曲部と口縁文様帯の間が無文である。把手は4個付けられ、口縁部文様帯は把手と把手の間に渦巻粘土貼付文を置いて方形窓状区画が8区画でき、区画内は櫛目状平行沈線で縦に刻みがある。胴部文様帯は屈曲部に

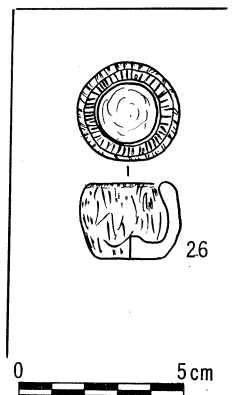
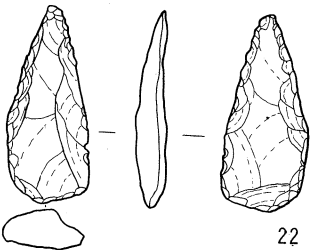
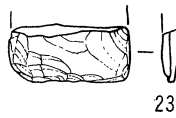
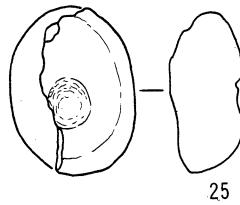
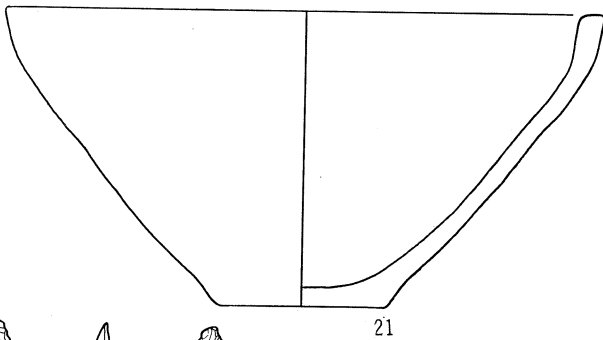
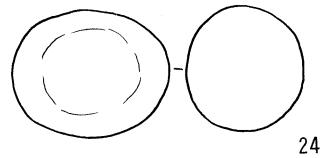
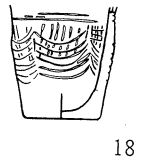
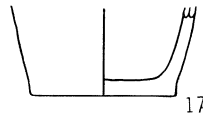
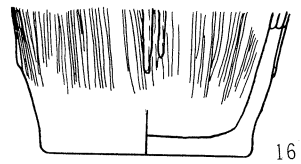
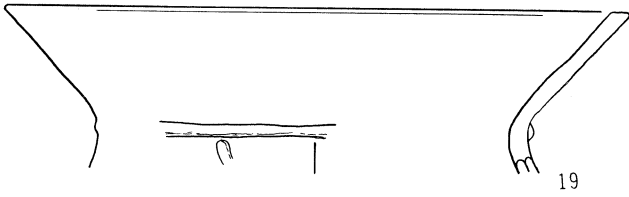
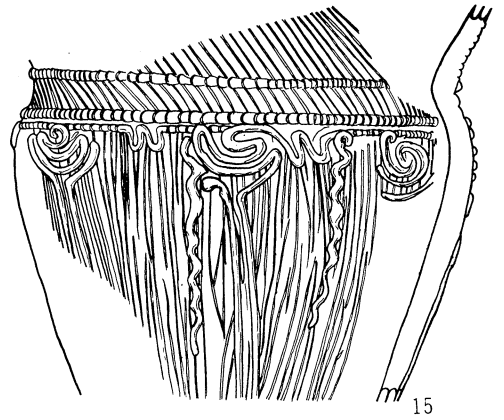
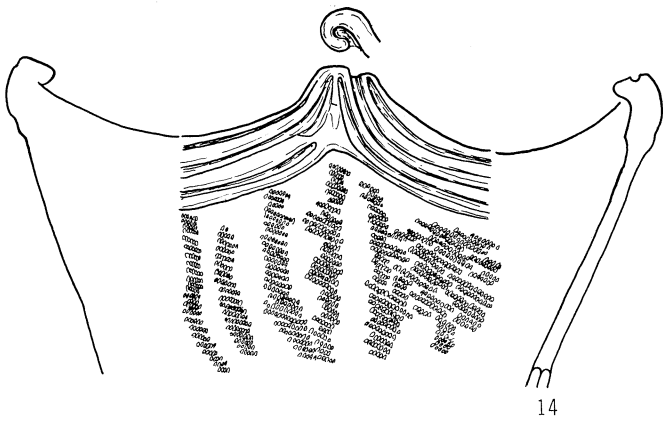


第9図 柳坪A地区1号住居遺物図

半載竹管平行沈線を一周させ、渦巻連続文と櫛目状沈線で文様構成をしている。胎土粒子は細かく赤褐色を呈しているが、器面底部近くには二次焼成を受け、内面屈曲部にはややタールが付着する。3は胴部が所謂算盤玉形に屈曲するもので口縁部無文、頸部に2ヶ所の把手を付け、把手を結ぶように大きな波状の沈線と、頸部及び胴部に一直線の半載竹管平行沈線があって、その区画内及び胴部下半を櫛目状沈線で埋められている。覆土中から出土したもので褐色胎土に石英、雲母をやや含んで荒い、4は口縁部に半円形区画を半載竹管平行沈線で6～7区画し、接合部から懸垂文を直線的に引く。口縁



第10图 柳坪A地区1号住居址出土遗物(1)



第11图 柳坪A地区1号住居址出土遗物(2)



部文様帯内部は同じ工具で縦に、胴部は横に細かく施文している。胎土はしまり、粒子も細かく、褐色を呈する。覆土中より出土する。5、6は覆土中から出土したもので、地文は無文に沈線の懸垂文が幾条か施される底部である。7～14は縄文を地文とするもので、粘土紐で半円状に8区画し、半円結合部から半載竹管文平行沈線の懸垂文がそれぞれ施されるものと、縄文地文のみのやや粗末な胎土である。15は器面全体を半載竹管文平行沈線で埋め、頸部に結節状連続文の粘土紐を二条巡らし、その下に粘土紐で渦巻文と懸垂文を施す特徴ある土器で、覆土から発見された。16も15と同様の文様構成をするものと思われる。26は15の模倣品と思われる小型土器である。19、20は大型甕の口縁と胴部で、21は無文の浅鉢である。16が石冑炉直上から出土した以外は覆土中から出土したものである。打製石斧22は安山岩製完形、23は硬砂岩製欠損品で、24は輝石安山岩製玉石、25は輝石安山岩製凹石で、表裏に1個ずつの凹のある欠損品である。

## 2号住居址 (第12、13図、 図版9)

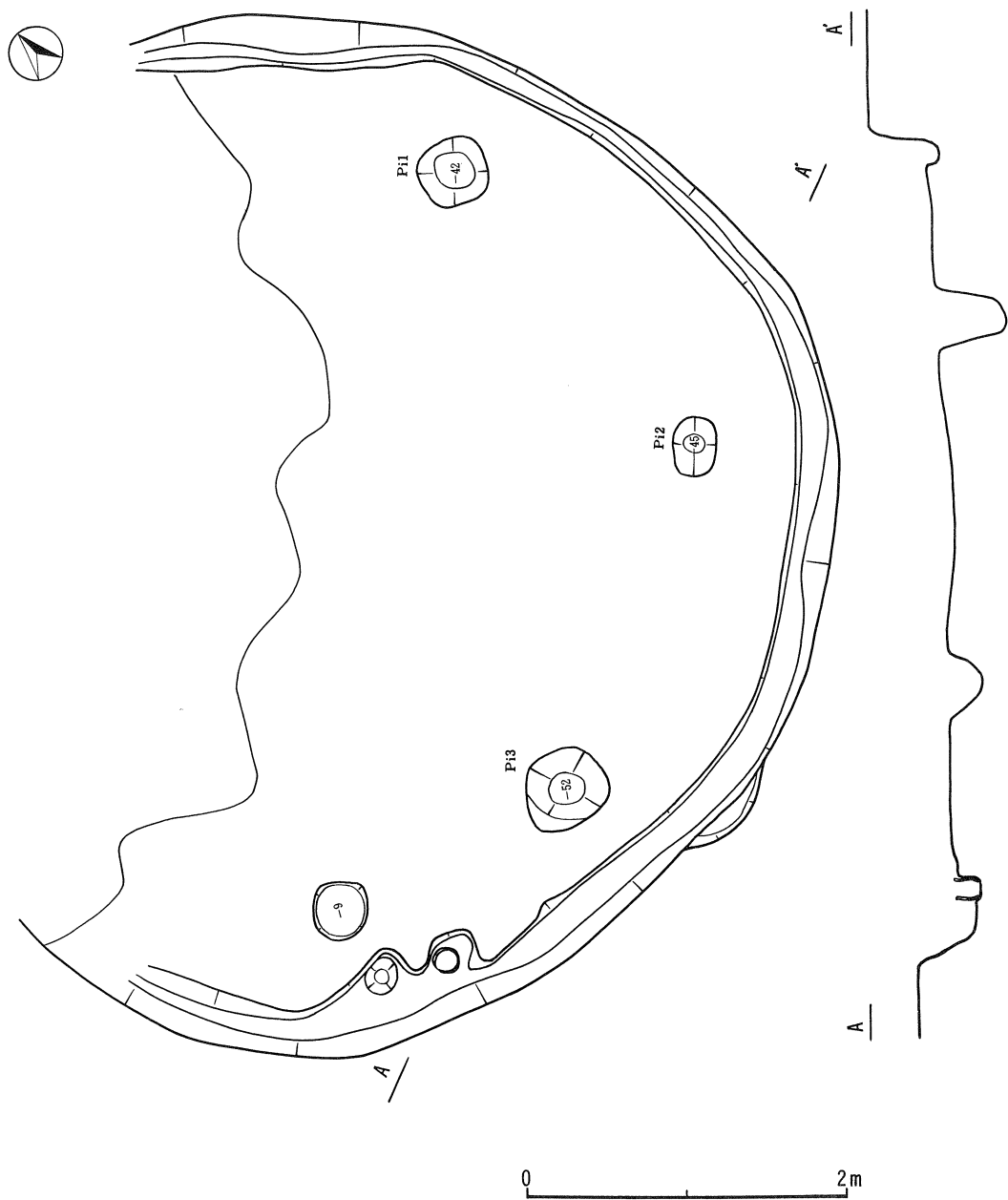
昭和48年7月3日～7月14日

- プラン 円形(推定) 6.5m、西側半分が攪乱を受けており不明
- 主 軸 N-34°-E(埋甕の中心を通過してプランの最大径の方位)
- 柱 穴 支柱穴3本、他に埋甕西に小ピット1本。又、北側に浅いピットが1本ある。計5本であるが、他は攪乱部に位置するため不明。
- 周 溝 住居が確認されている部分については一周する。最大幅30cm、深さ20cm、最小幅10cmで深さ8cmとその差は大きい。
- 壁 西側攪乱部を除いて良好であるが、南側埋甕付近と東側一部のロームが柔らかく、周溝から壁の立ち上りを見た。高さは20～30cmである。
- 床 面 全面にわたって砂利(直径1mm～3mm)混入のローム土で、かなり硬質である。床面は東西エレベーションを見れば、東側の方が10cm程低く、南北ではほぼ同一レベルである。
- 炉 攪乱により炉は切り取られている。
- 出土遺物 遺物はほとんどが第3層褐色覆土から出土し、一括土器36、凹石(スリ石)7、鉄2、石斧4である。土器形式は曾利II～III式に位置すると思われるが、埋甕はII式としてよいであろう。口縁部と底部を欠損している。
- その他 住居北西部が大きく攪乱を受けており、柱穴及びび炉が認められない。この攪乱部の性格が不明で、遺物は縄文土器や弥生前期に位置するものが出土している。

(浦野)

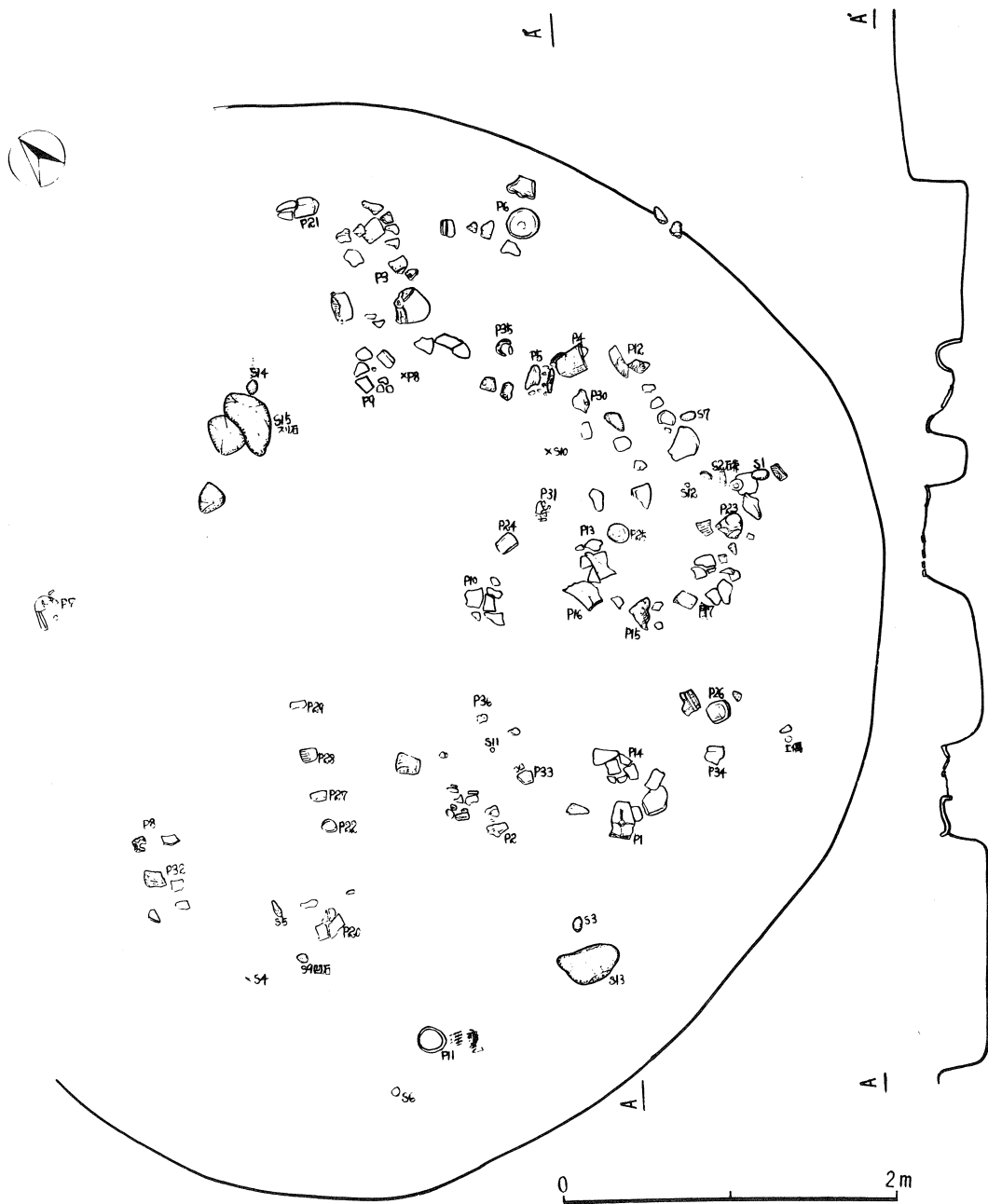
## 出土遺物 (第14～17図) (図版10、11)

1は住居南の埋甕で器面縦方向に沈線で埋め、頸部には粘土紐横帯、胴部に懸垂文を貼り付ける。口縁、底部を欠損している。2～5はいずれも同様の文様に飾られているものと推定される。6は把手が2個付けられ、器面縦方向に沈線で埋めたもので、それぞれ覆土中出土である。7は把手を4個もち、その間に渦巻の小把手が置かれ、その間は半円状に粘土紐で区画される。胴部は沈線で台形や円形に区画され、その内部は沈線で埋められている。9も7と同様の文様構成で覆土中出土である。8は粘土紐の懸垂文の間に杉綾文を施し、中央にミミズ状沈線の懸垂文がある。10～13の地文は刺突文が施され、沈線及び隆線で横帯及び懸垂文が施される。14～19は無文の土器で14～17は深鉢18、19は浅鉢と考える。20は渦巻文の施された把手の一部である。21は土偶の頭部で

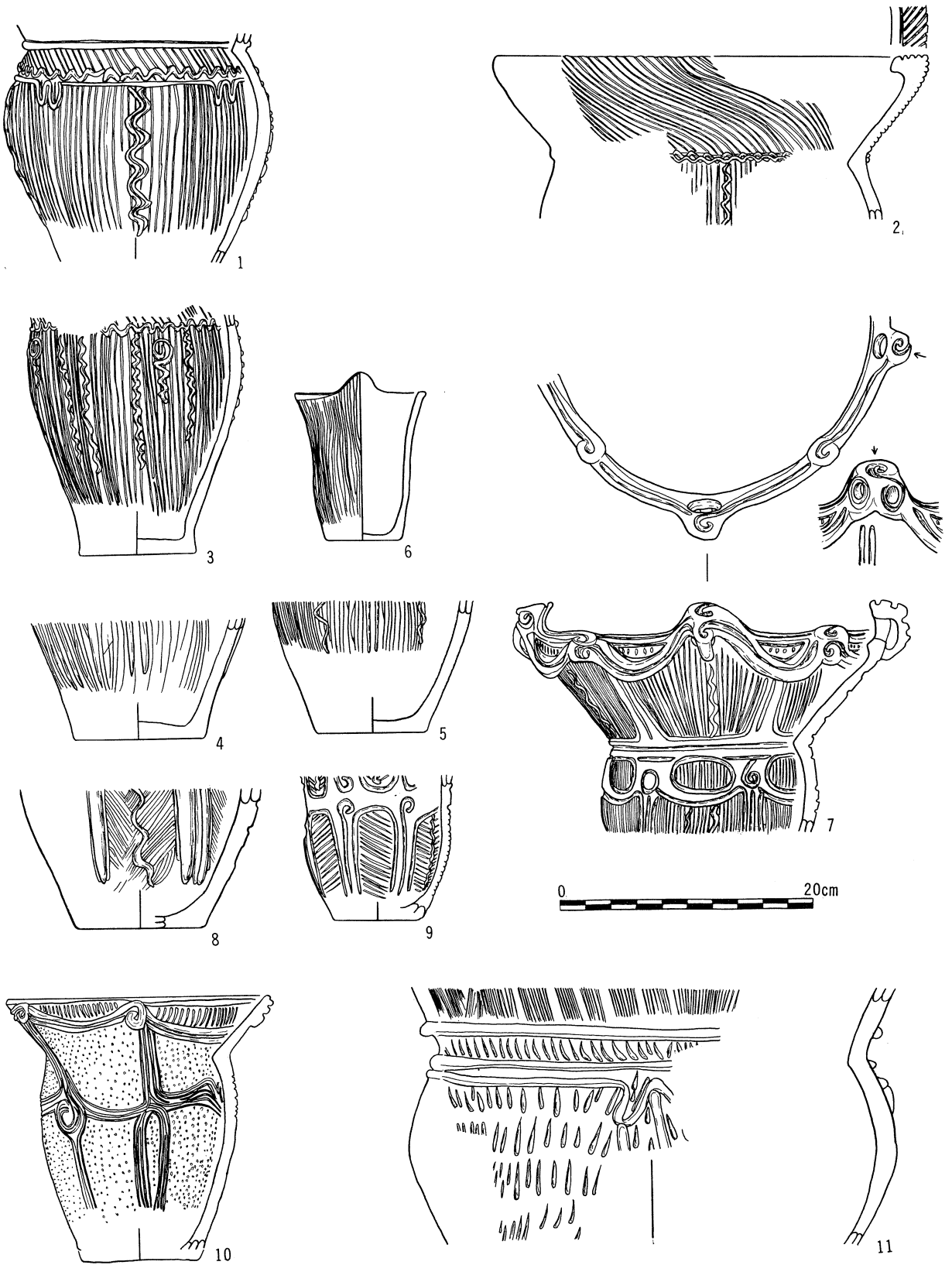


第12図 柳坪A地区2号住居址平面図

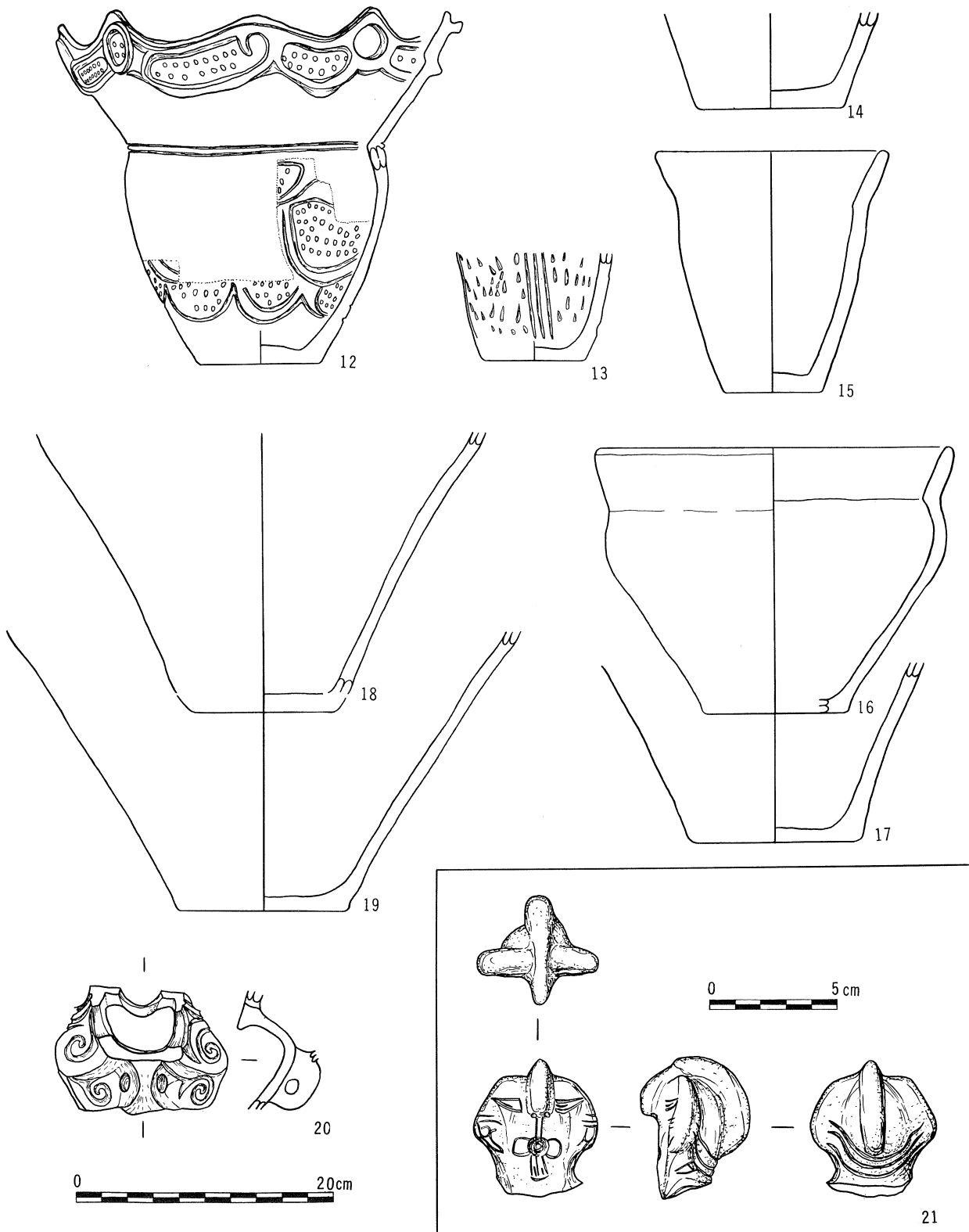
覆土中より出土した。22～30は縄文地文の深鉢形土器で、口縁部に把手及び区画を粘土紐で作るもの、又、沈線で文様を描くものや縄文の懸垂文を施するもの等があつて、いずれも覆土中出土である。これら土器の特徴として胴部屈曲部内面に突き出す稜があるが、小型土器には見られない。打製石斧31、34は硬砂岩製、32は粘板岩製、33は玄武岩製で、33、34は欠損である。凹石は7個出土しており、35、38、39、40はスリ石でもある。いずれも覆土中から輝石安山岩製。42、43の石鏃は黒曜石製で、43は先端が欠けている。



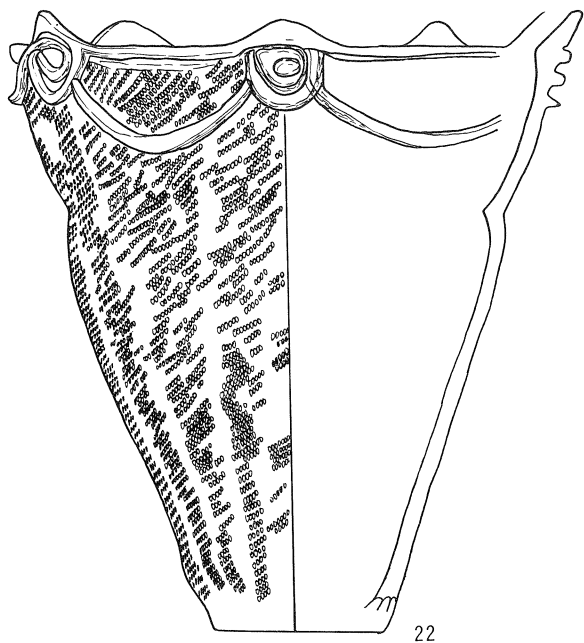
第13图 柳坪A地区2号住居址遺物図



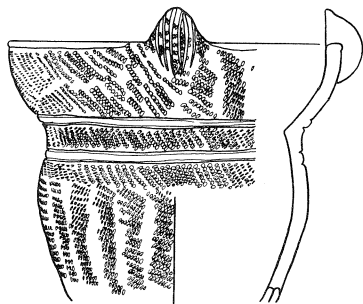
第14图 柳坪A地区2号住居址出土遗物(1)



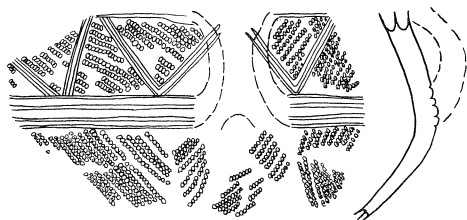
第15图 柳坪A地区2号住居址出土遗物(2)



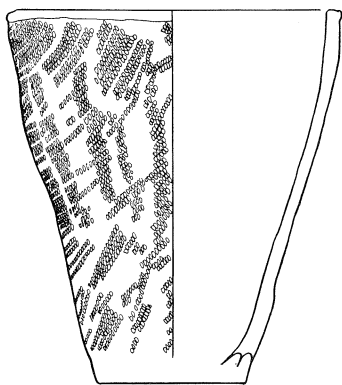
22



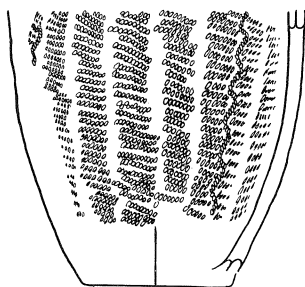
23



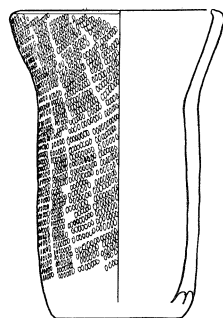
24



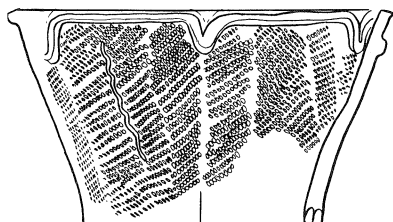
25



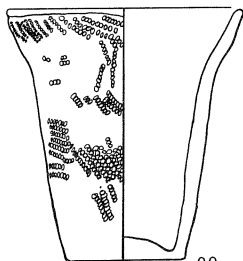
26



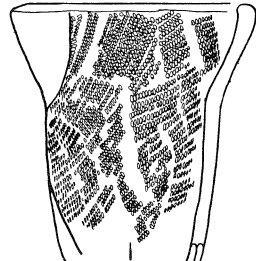
27



28



29

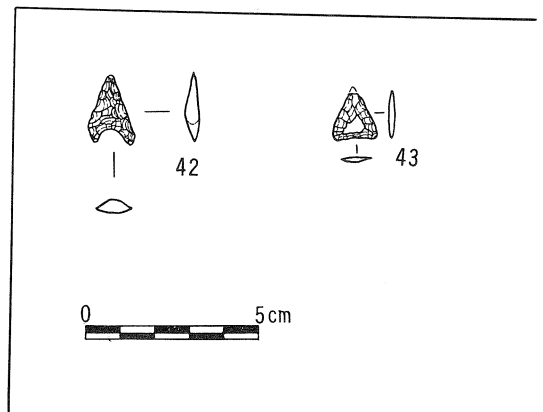
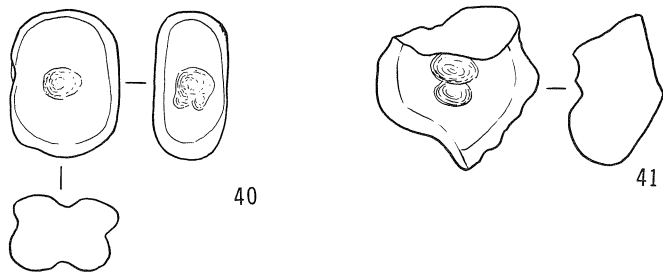
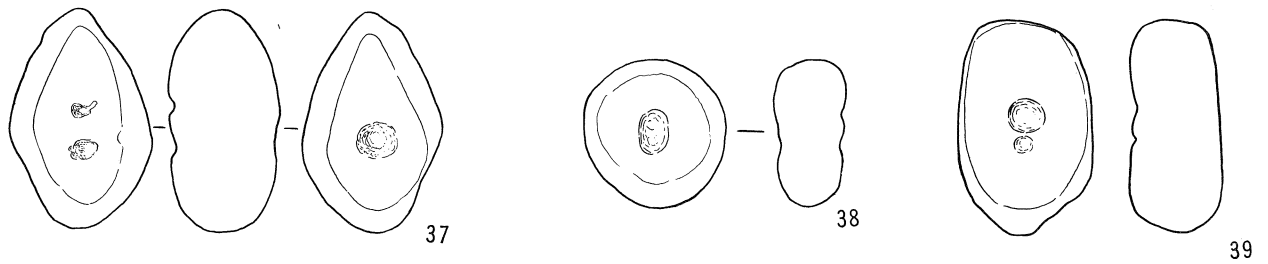
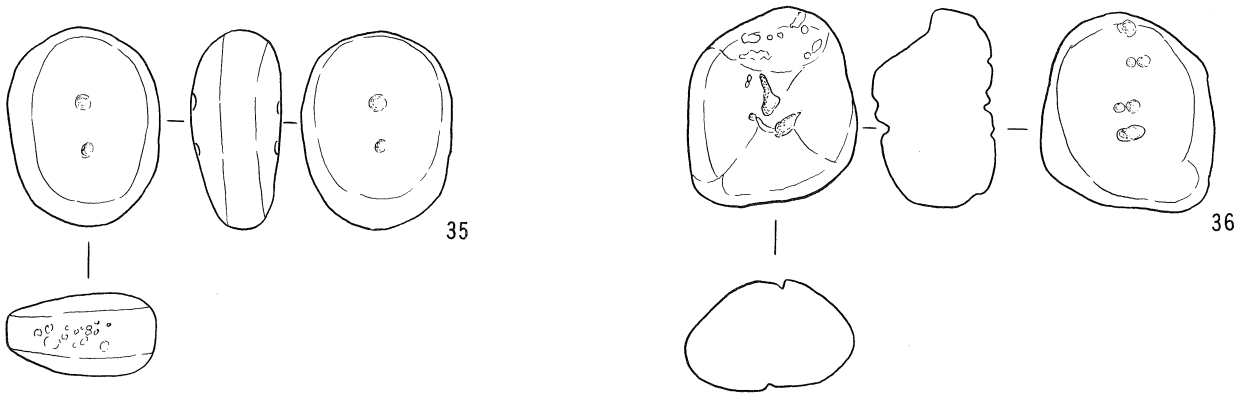
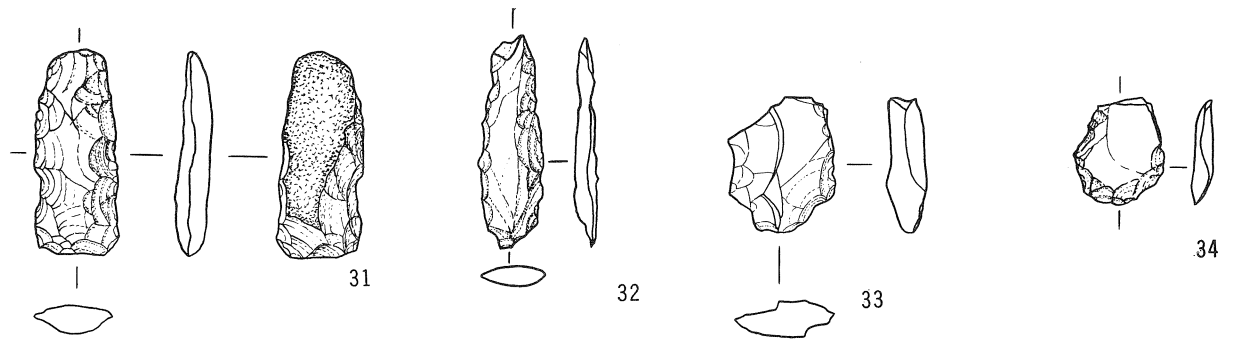


30



第16图 柳坪A地区2号住居址出土遗物(3)





第17图 柳坪A地区2号住居址出土遗物(4)

4号住居址 (第18、19図) (図版12)

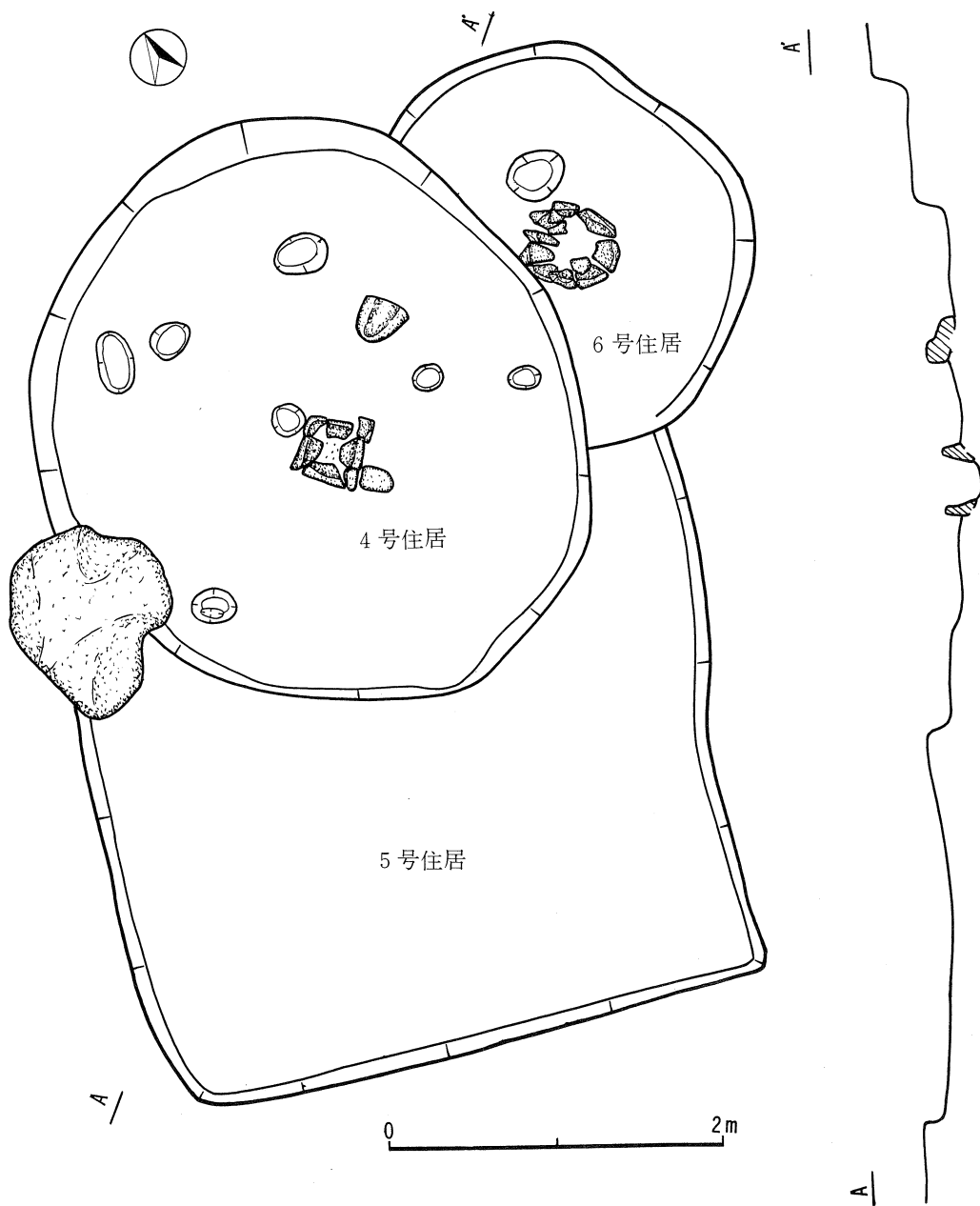
昭和48年7月7日～7月22日

○プラン 不整形円形、東西3.3m×南北3.7m

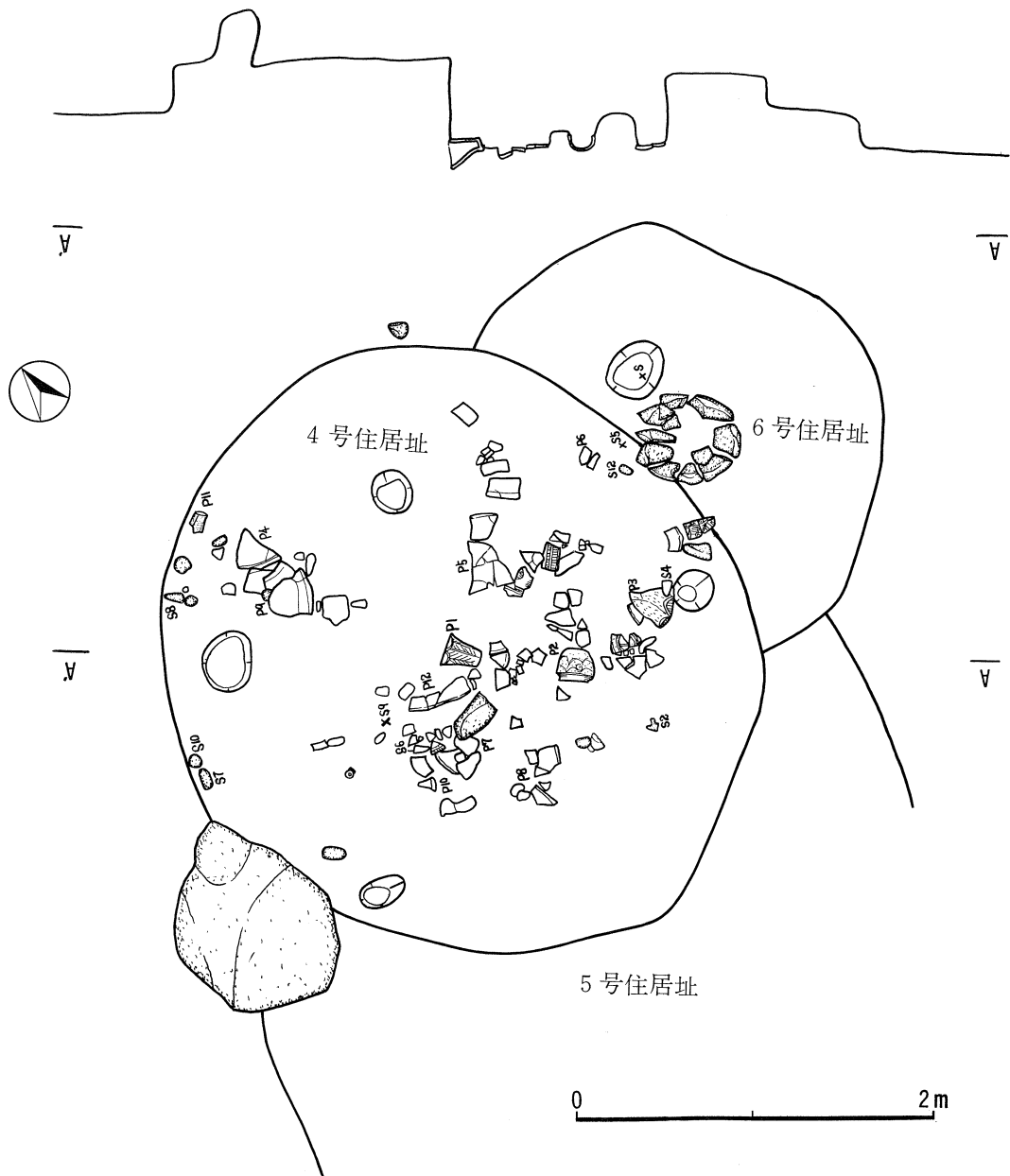
○主軸 不明

○柱穴 6号住居と重複しているのですが、ともかく住居内に存在するピットは8本ある。中期末葉の住居と異なり、柱穴の位置が不規則で、規模も小さい。

○周溝 なし

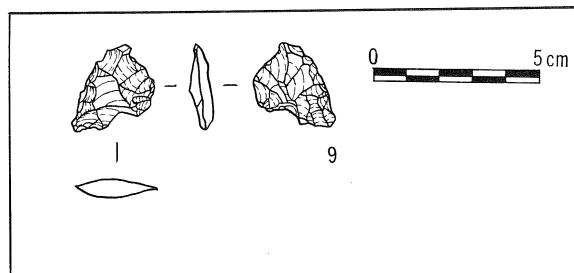
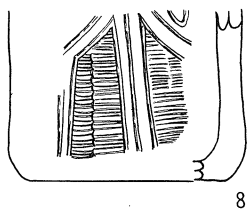
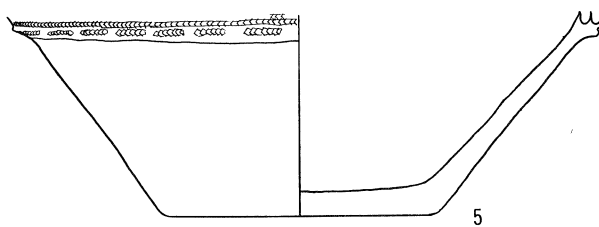
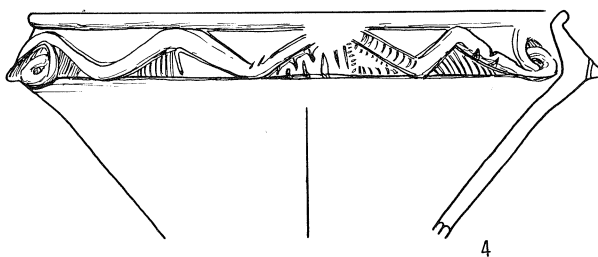
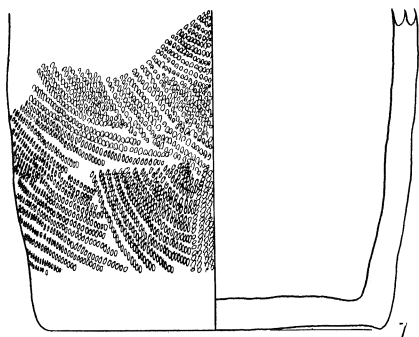
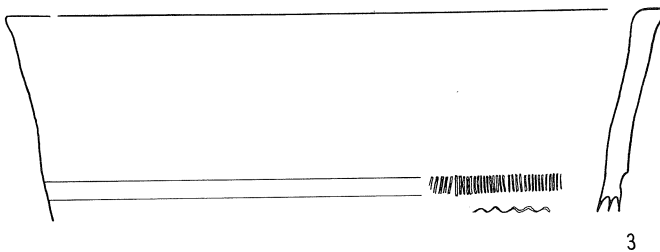
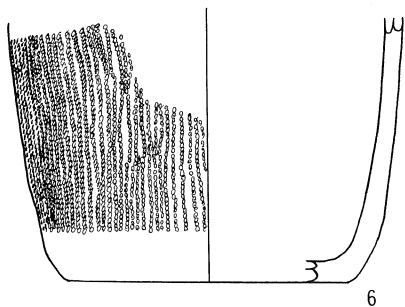
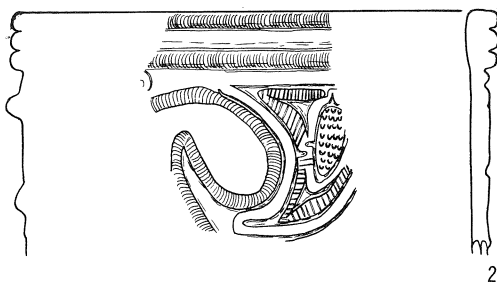
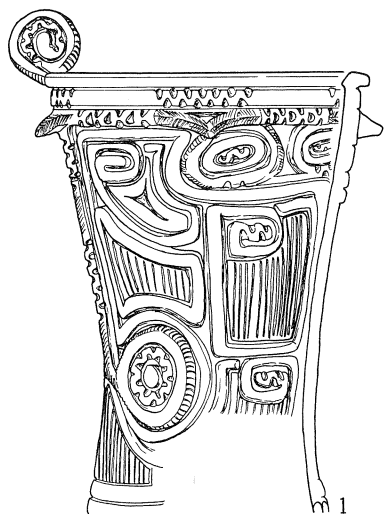


第18図 柳坪A地区4号、5号、6号住居址平面図



第19図 柳坪A地区4号、6号住居址遺物図

- 壁 西側にロームに半分程埋もれた巨石が壁にあり、6号住居、5号住居と重複しているため、全体に壁が軟弱なようである。
- 床 面 中央炉の付近は低く、壁の近くは5～8cm程高くなっている。床面のしまりも、中央部は良好なのに比べ、一段高い部分は軟弱である。
- 炉 住居のほぼ中心にあり、40cm×38cmの方形石囲炉である。石は4枚の板状石を使用しているが、焼を受けているため幾つかに割れている。
- 出土遺物 覆土上面には6号住居の曽利式土器が出土しており、東側に寄っている。床面に近い西側には藤内式の土器片が一括で2～3個出土している。又、炉東部で床面に置かれた状態



0 20cm

第20图 柳坪A地区4号住居址出土遗物(1)



第24图 柳坪A地区4号住居址出土遗物图 (2)

で、30×27cmの石皿破片が出土している。

○その他 6号住居と重複しているが、調査中、6号住居の貼床を検出することができず、4号住居との遺物の混乱が多少見られる。

出土遺物 (第20、21図) (図版13)

6号址と重複していた為にやや混在しているが、4号址の土器は1～8で、隆線の両側に連続瓜形文を施すものと、沈線で区画するもの、縄文地文のものがある。4、5は深鉢で、深鉢形土器中ほぼ復元できたのは1、4の2個体だけである。いずれも覆土中から出土したものであるが、特に1は散乱していた。石器9は未成品の黒曜石製石鏃である。10はチャート製横形石匙で二次調整が不十分なものである。11～14の打製石斧は13を除いて欠損品で、いずれも硬砂岩製である。15の乳棒状磨製石斧は刀部先端のみで、石質は緑泥岩。16、23は石皿破片で、23は炉北東床面直上から発見された。17はスリ石、18～22は凹石で、石皿、凹石、スリ石は輝石安山岩製である。

6号住居址 (第18、19図) (図版12)

昭和48年7月8日～7月22日

○プラン 円形、直径2.5m。ただし西側は4号住居と重複しており、壁は確認できなかった。

○主軸 不明

○柱穴 炉北側約16cmにピットが1本あり内から釣針形黒曜石製石器が出土している。

○周溝 なし

○壁 軟弱で黄褐色土で造られている。

○床面 軟弱で炉の周辺のみわずかに踏みかためられている。

○出土遺物 4号住居上に遺物が多く、貼床部が良好でないため、4号住居に属するものも多い。

一括土器7、石器5、

○その他 4号住居を貼り、5号住居に切られて住居のましか残っていない。

(末木)

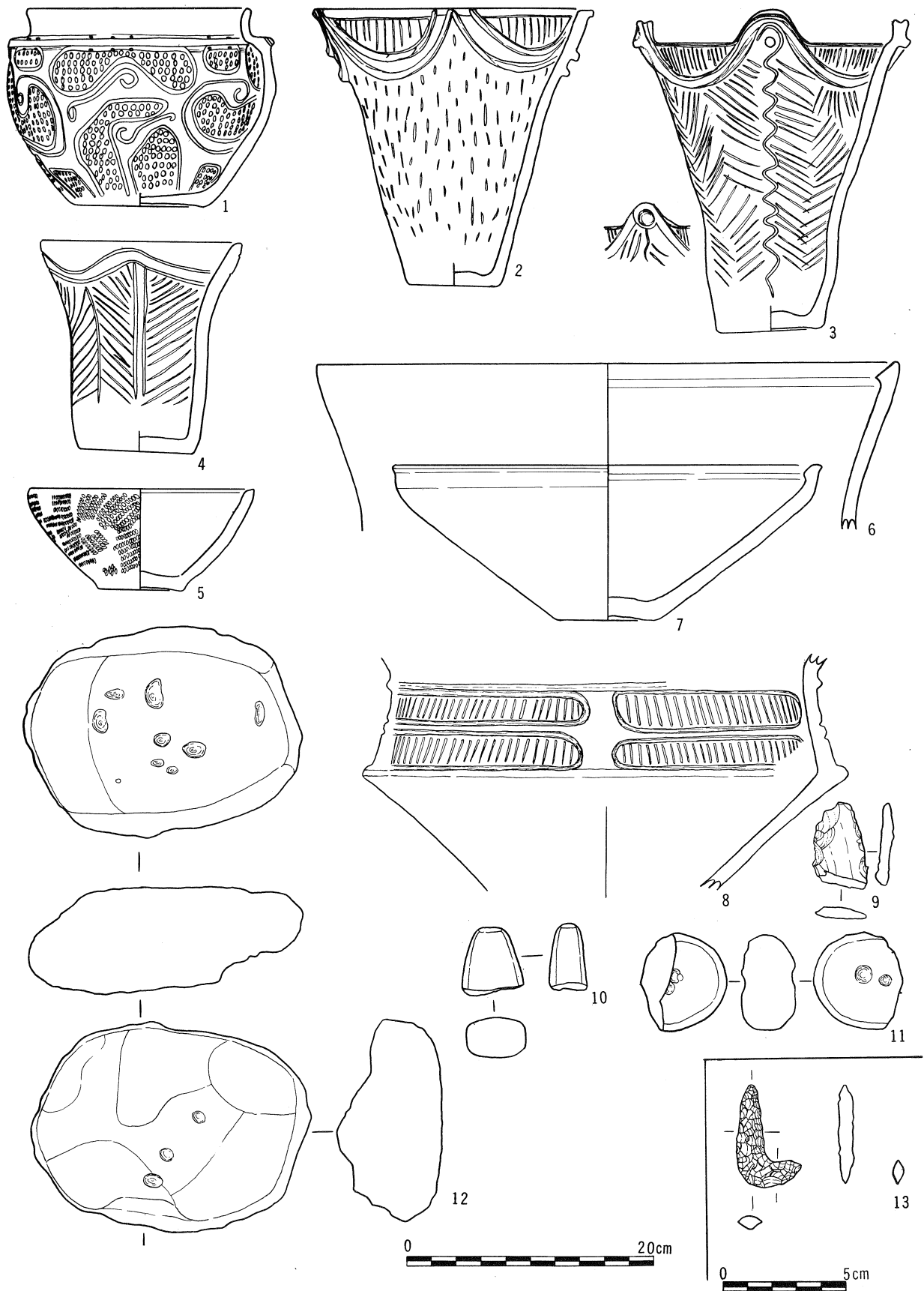
出土遺物 (第22図) (図版14)

1は沈線で曲線的文様を描き、区画内を先端の丸い棒状工具の刺突文を施した鏝付有孔土器で、孔は2～3個の対に鏝部に穿れている。胎土は精選され、焼成も良好である。2、3は粘土紐を半円状に貼り付け4～5区画に分け、口縁の間をへら状工具で縦に刻みを幾本か施す。胴部は同工具で刺突、又は杉綾状に沈線を施し、3は把手部からミミズ状懸垂文がたれ下る。4は3と同様の文様構成で、口縁部の区画が沈線による。5は炉北側にそのまま崩れていた小型浅鉢で、地文は縄文である。7は無文の浅鉢、8は胴部が算盤玉形に屈曲する土器である。5を除いて覆土中出土のもので、特に1、4は表土下約15cmで発見されたものである。石器は13の不定形石器を除いて4号との関係が不明確であるが、レベルで選出した。9は硬砂岩製打製石斧欠損品、10は定角磨製石斧の欠損品で、11は輝石安山岩製凹石、12は輝石安山岩製多凹石である。13は黒曜石製釣針形石器と呼べるもので、長野県曾利遺跡から類似品が出土している。

8号住居址 (第23、24図) (図版15)

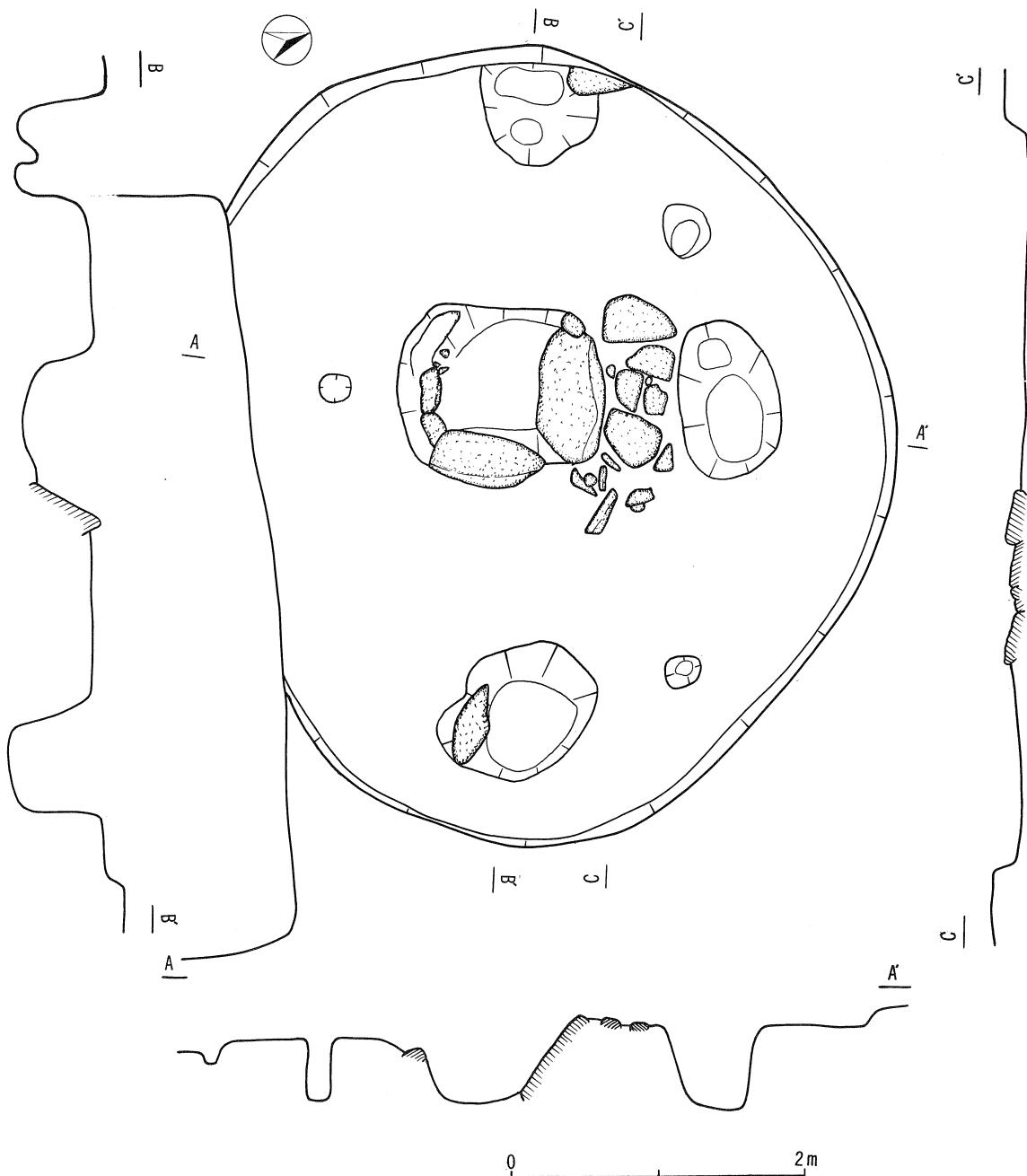
昭和48年7月11日～8月10日

○プラン 円形と推定、東西4.8m×南北4.3m。ただし南北の場合、7号住居に切られているため正確に把握できない。



第22图 柳坪A地区6号住居址出土遗物

- 主 軸 N-32° -E (炉石東辺を使用した。)
- 柱 穴 総数6本であるが、大ピットと小ピットが交互に造られており、大ピットを主柱穴、小ピットを支柱穴としてよいであろう。大ピット3本の直径は1 m前後あり、深さ60 cm前後である。小ピットは径約30 cm、深さ20~30 cmである。
- 周 溝 なし
- 壁 北側壁高15 cmで、しまりはあるが耕作の為攪乱を受け、部分的に不明確である。
- 床 面 比較的平坦で全面にわたりしまりが良い。南側は7号住居に切られて存在しないが、炉の

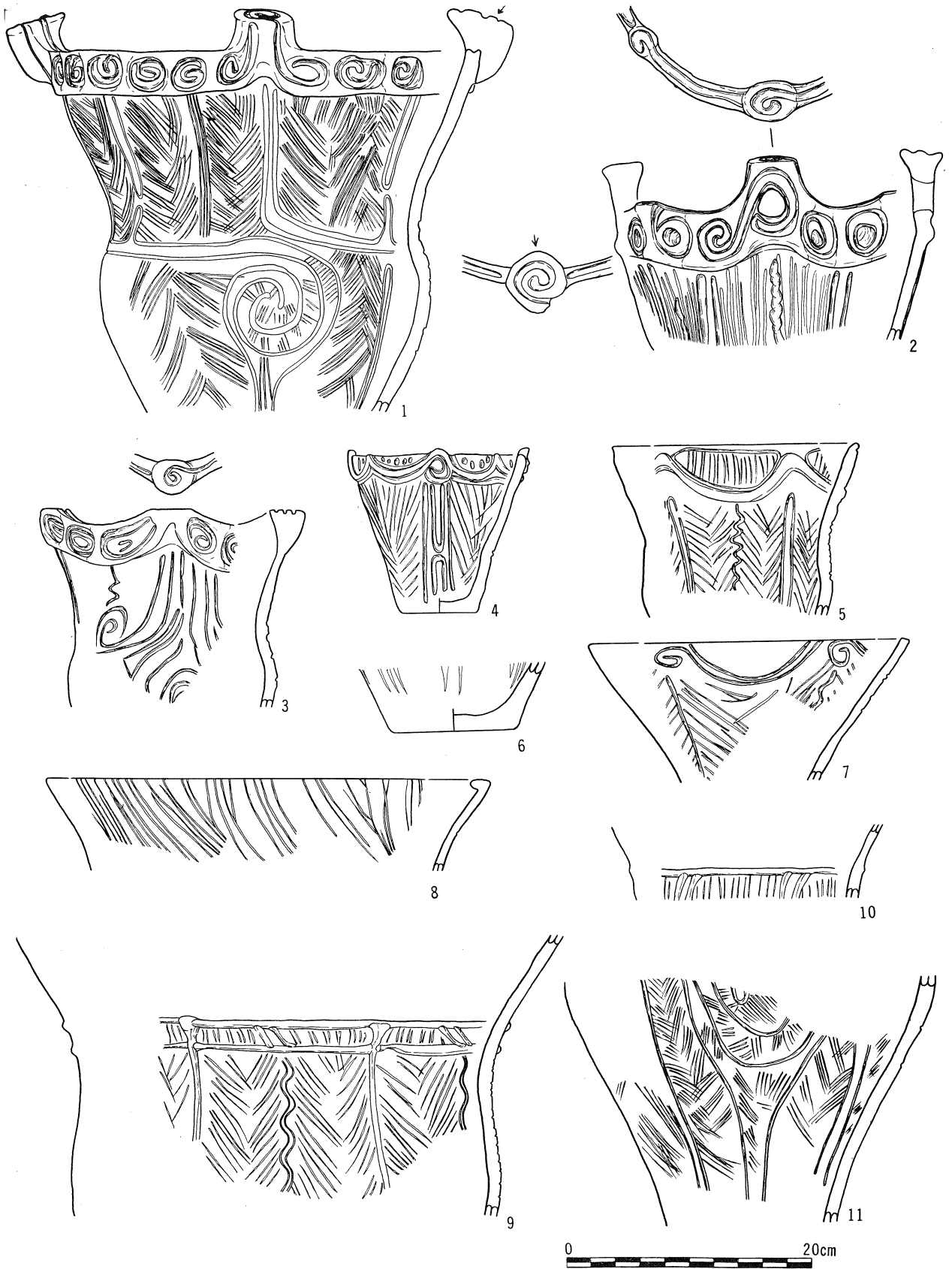


第23図 柳坪A地区8号住居址平面図

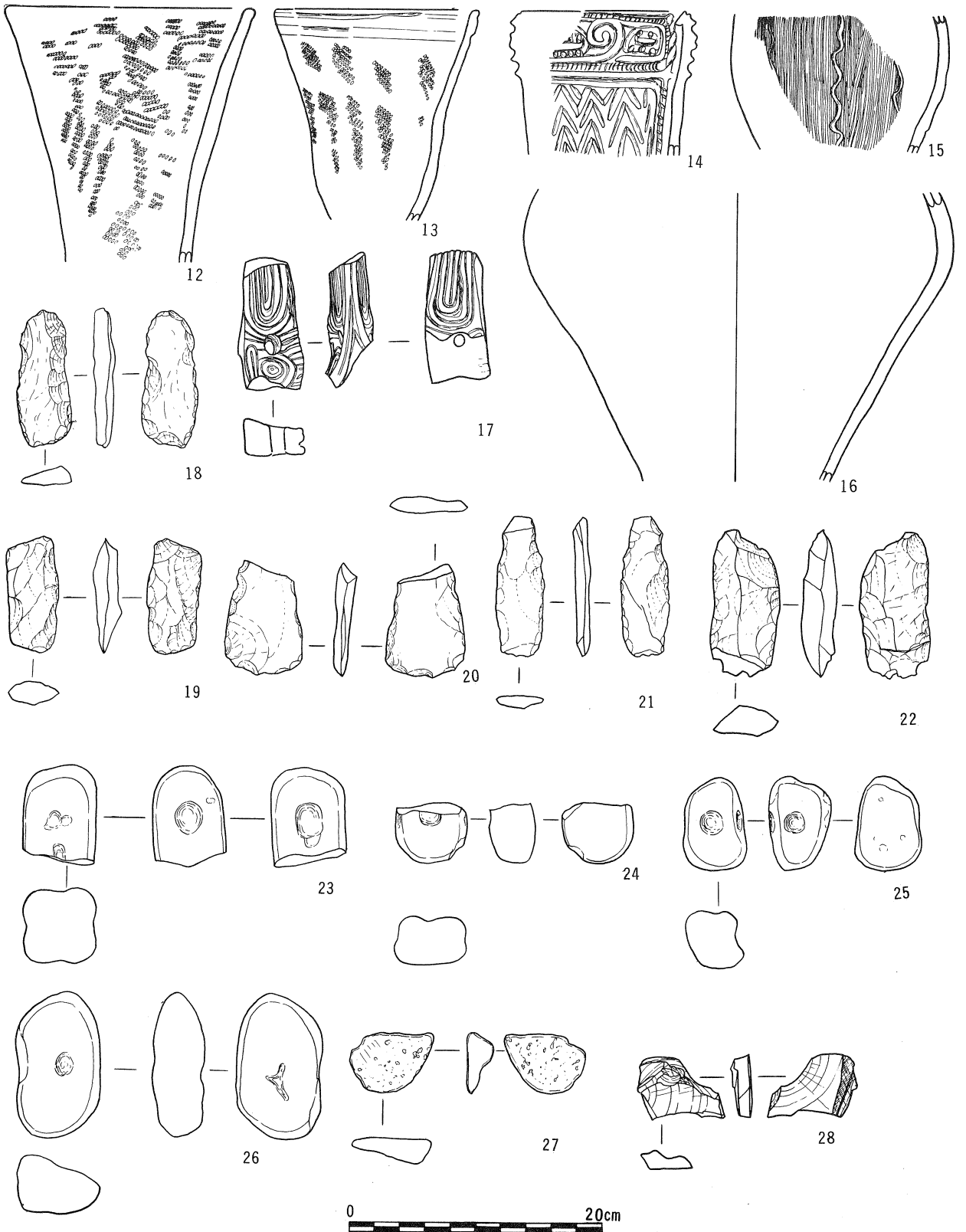




第24图 柳坪A地区8号住居址遺物图



第25图 柳坪A地区8号住居址出土遗物(1)



第26图 柳坪A地区8号住居址出土遗物(2)

周辺東側はやや高く、又、北側には部分的敷石が見られる。

- 炉 方形石囲炉で、石は北、東辺のみ残る。南北140cm×東西122cmで最大級の石囲炉であり、使用されている石も1枚板石を北、東各辺に配している。南辺は掘り込みに段がありこの部分に焼成を受けて割れたと思われる炉石が若干残っている。
- 出土遺物 中期末葉、曾利期後半の土器群が炉の周辺に出土している。表土も覆土も浅いため、比較的床面に近いが、床面より浮いている。  
一括土器2、石斧5、凹石4、軽石1、
- その他 10号住居にもみられるが、炉北側の敷石を特徴とする。又、この敷石下に入り込む様に柱穴があり、炉と柱穴の間隔が狭い点で、敷石の性格が規制されているのであろう。また、7号住居カマド下にピットがあり、このピットが8号住居に伴うものであるなら、プランが多少変更されなければならない。

(大森)

出土遺物 (第25、26図) (図版16)

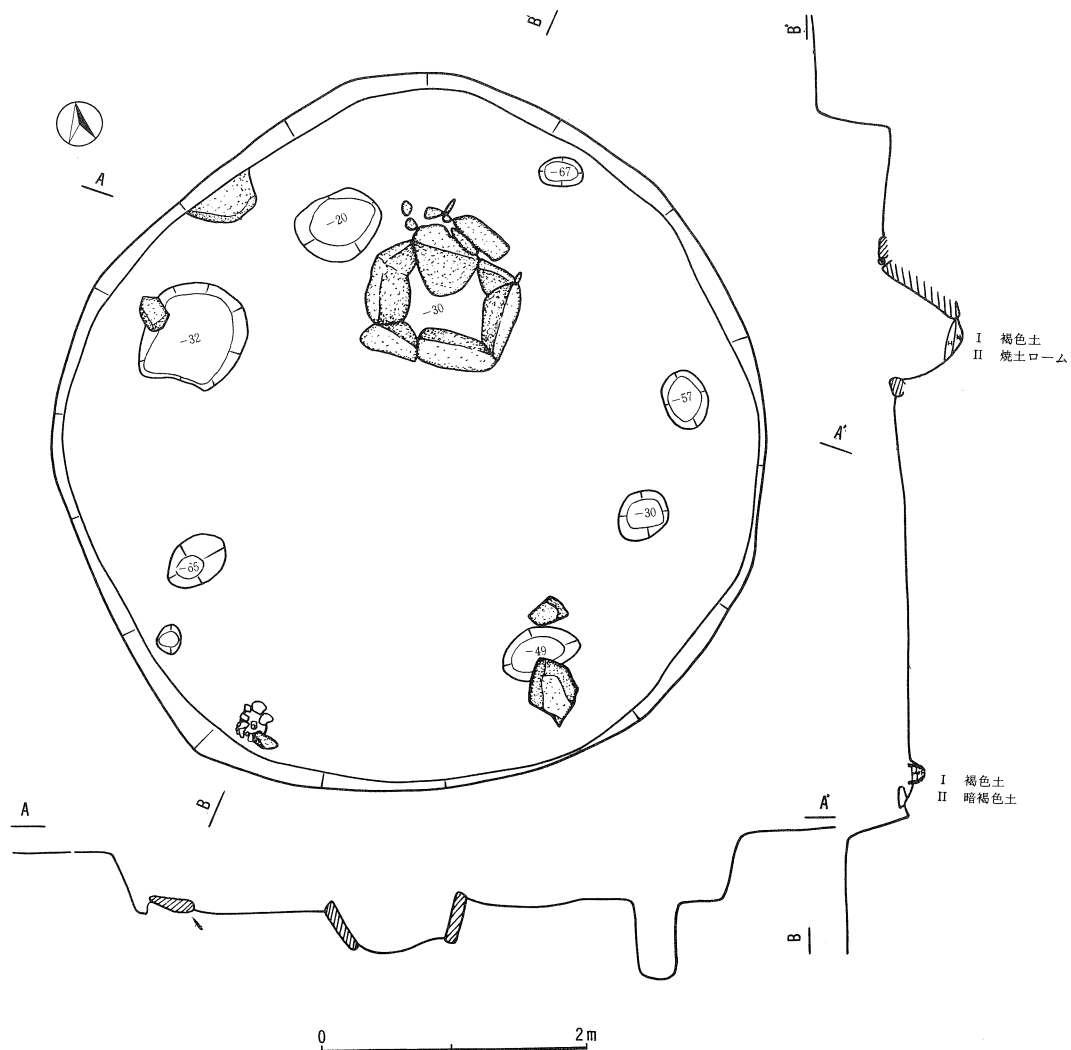
土器はいずれも覆土中であるが炉を中心に散乱し、炉内にも相当落ち込んでいた。散乱していた場所は炉から南西にかけてであり、表土から床面までが浅い為か遺物は床面よりやや浮上している程度である。

1は炉内及び炉南側で大破片数個に分かれて発見されたもので、把手を4個つけ、口縁は厚く、窓状渦巻文が施される。胴部上半は沈線で方形に区画し、胴下半に渦巻文があって、区画内を櫛目状工具の杉綾文で飾られる。胎土は良好で、焼成も良い暗褐色の土器である。2、3は1と同様の口縁部を有しているもので、4～11も含めて器面を隆線、及び沈線(平行沈線、杉綾文)で装飾する。12、13は荒い縄文を地文とした深鉢形土器である。16は1、11と器形的には同一であるが無文で、胴部の張りに特徴を有する。17は柱穴1から出土した吊手土器把手部破片であろう。18～22の打製石斧は、22が安山岩で、他は砂岩及び動力変質を受けた硬砂岩で、19～22は欠損品である。23～26の凹石は部分的にスリ石として使用された輝石安山岩製のもので、27はスリ石として使用された軽石である。28は黒曜石フレイクで、同様のものが柱穴中から幾つか発見されているが、使用痕等をもたない。

10号住居址 (第27、28図) (図版17)

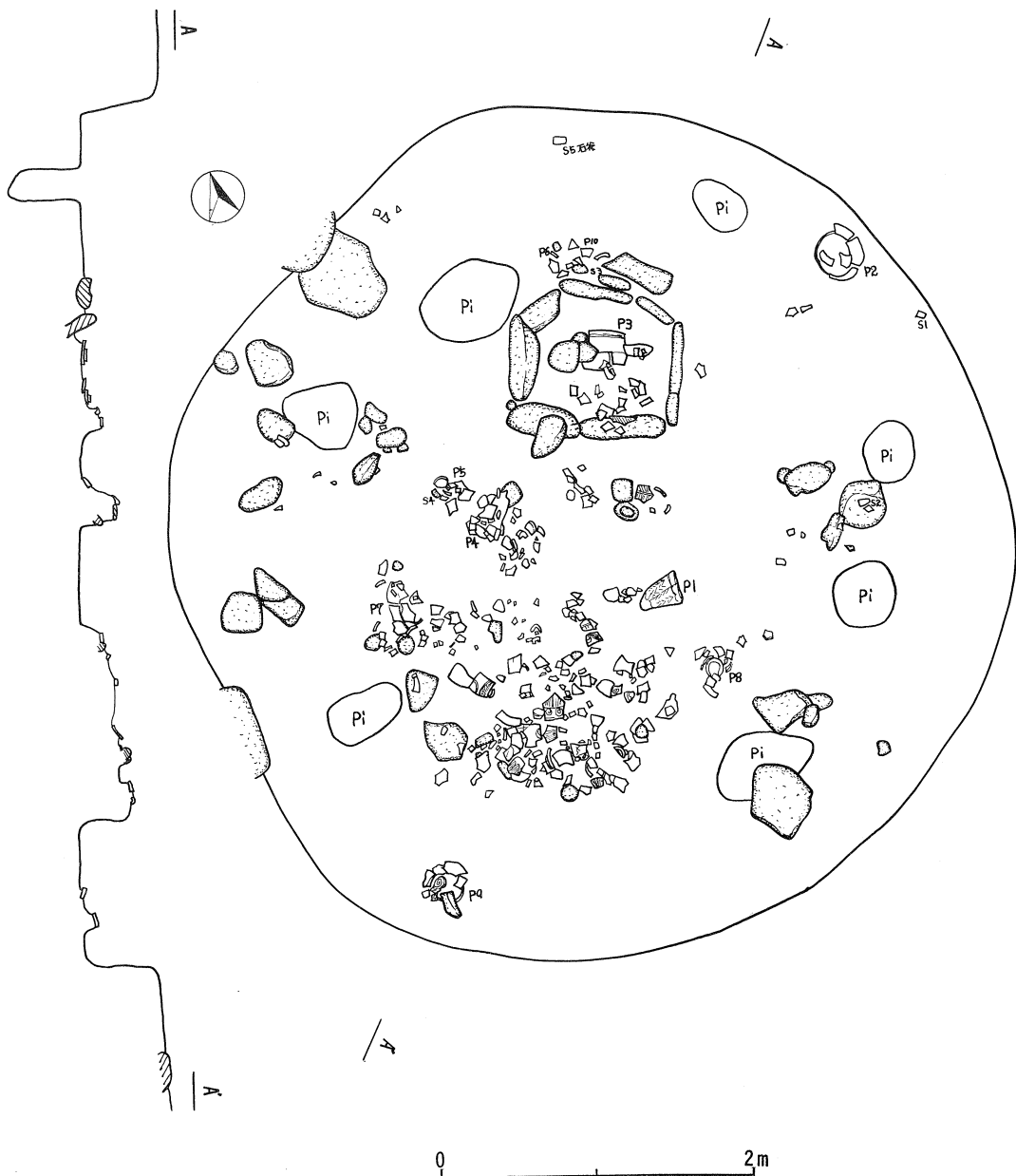
昭和48年7月14日～7月27日

- プラン 円形、南北5.3m×東西5.35m
- 主 軸 N-20°-E(埋甕と炉の中心線)
- 柱 穴 総数8本、支柱穴6本で、No.1は31×22の径で深さ49cm。No.2は37×46で深さ60cm。No.3は46×34で深さ30cm、No.4は62×50で深さ50cm、No.5は32×50で深さ69cm。No.6は45×43で深さ20cmである。No.6は深さの点で疑問である。
- 同 溝 なし
- 壁 全体的に良好であるが、北東側ローム中に礫が多少混入しており、それより西側にロームに入り込んで巨石が多数存在する。壁高面45cm、東27cm、南45cm、北55cmを計る。一部(北側pit7の付近)は黒褐色土混入で、後世の攪乱をうけている。
- 床 ほぼ水平でかたくしまっているため、検出が容易であった。



第27図 柳坪A地区10号住居址平面図

- 炉 住居中心北寄りに位置する方形石囲炉で、使用石数は7個である。又、北側に8号住居と同様の敷石部があり、立石に使用されたと思われるスリ石が組み込まれている。南北98cm×東西115cmを計る。
- 出土遺物 遺物は凹レンズ状推積をなしており、投込まれたことは明瞭である。ただ北壁に密着した状態で、高さ60cm位の大型土器が正位に立てられていたが、この住居のものであろうか。この住居北側1m位の所に焼土があり、部分的に床面と思われる様であったが、壁、ピット、炉等発見することができず、住居とすることができなかったが、あるいはこの焼土に伴うものかもしれない。一括土器（埋甕も含む）12、石斧6、石鏃1、スリ石1、凹石1で石器類は少ない。
- その他 住居北側の敷石は8号住居と同様で、祭壇的要素をもつものであろう。又、住居周辺は巨



第28図 柳坪A地区10号住居址遺物図

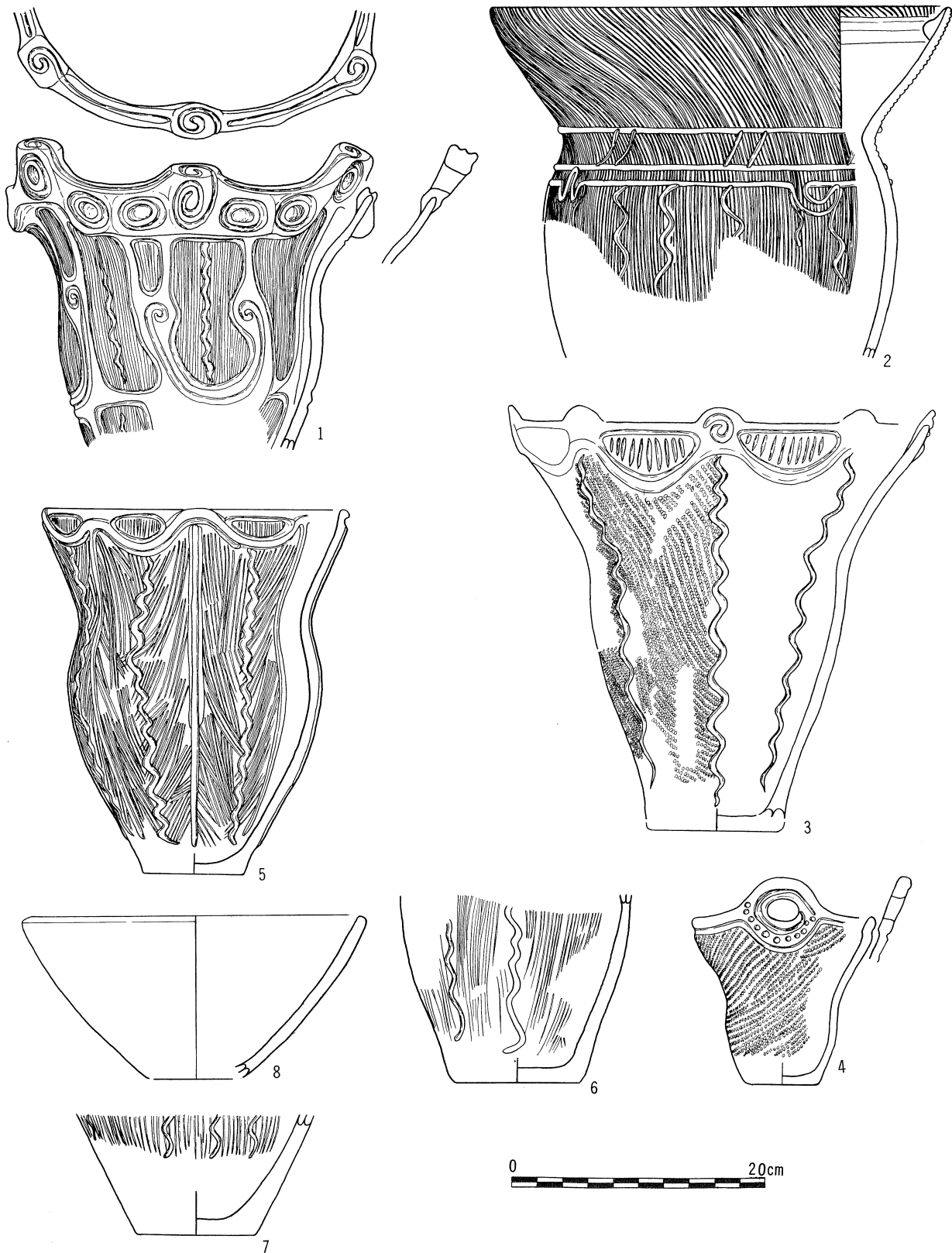
石がロームに埋まり込んでいる地点で、集落規制の強さを考えないと、このような巨石の多い地点に住居建築する意味を理解できない様である。

(香月)

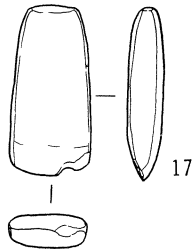
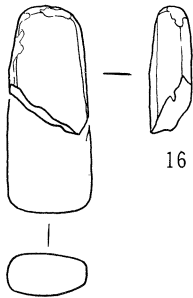
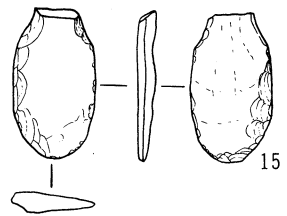
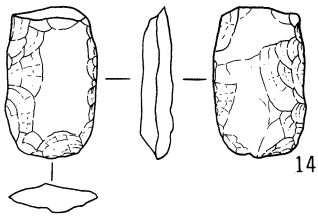
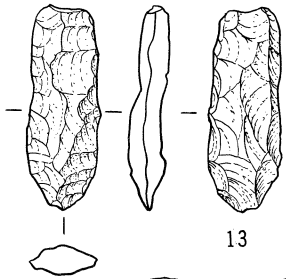
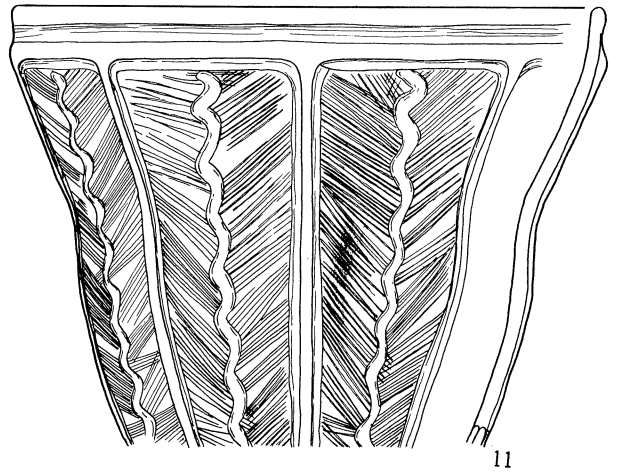
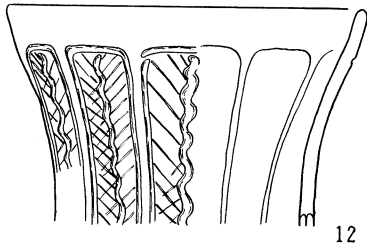
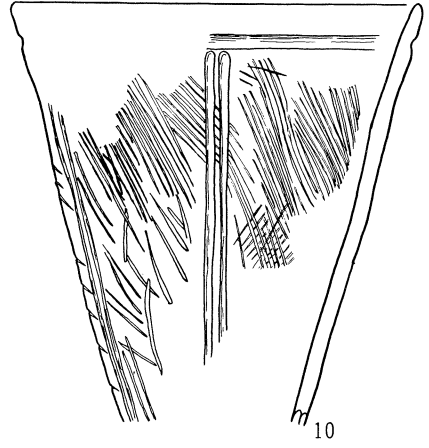
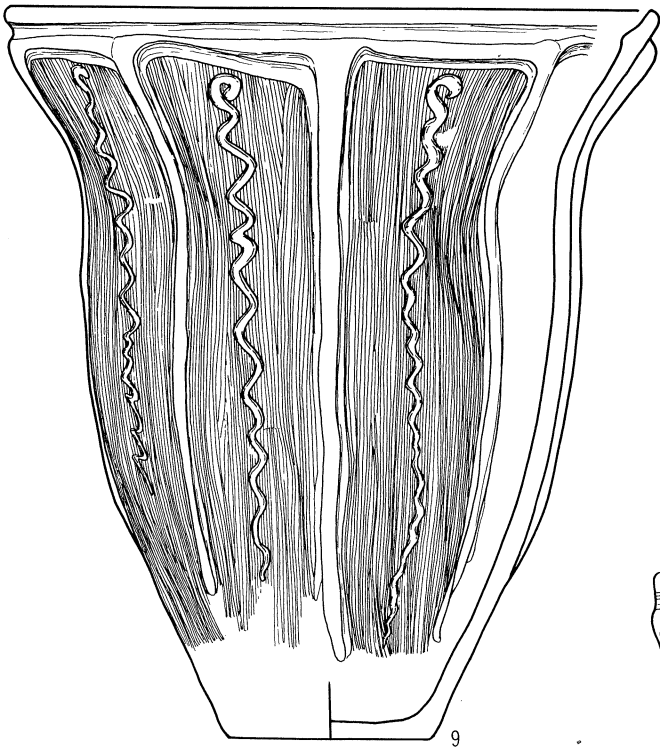
出土遺物

(第29、30) (図版18)

1の埋襲と9の大型土器を除いて覆土中から発見されたもので、南側から投げ込まれたような状態で土器堆積層が形成されていた。1は口縁部を床より上に出して埋められていたもので底部を欠損しているが、胴部はほぼ残っている。把手は大きな3個の把手の中間に小把手を置くもので渦巻文、同心円文の窓状装飾を施し、胴部は沈線で曲線的に区画し、その中を細い平行沈線で埋めたものである。



第29图 柳坪A地区10号住居址出土遗物(1)



第30图 柳坪A地区10号住居址出土遗物(2)



2は器面を平行沈線で縦方向に埋めつくし、頸部から胴部に粘土紐で横帯、及び懸垂文を施す。覆土の土器より古く考えられている土器である。3、4は縄文地文の深鉢形土器で、3は渦巻の把手を推定8個付け、口縁部下を粘土紐で半円状に区画し、把手部からミミズ状沈線の懸垂文を施す。4はアーチ状把手を対に施し、口縁部に沈線を一条廻らす。6、7は9～12の土器と同様の深鉢形土器の底部であろう。8は無文の浅鉢で底部を欠損している。9、11、12は粘土紐による懸垂文で縦に区切られた間を平行沈線、あるいは杉綾文を施し、中央にミミズ状沈線の懸垂文が施され、器形胴部にはやや膨らみが見られるが、10は直線的で櫛目状工具の沈線は荒い。打製石斧13、14は硬砂岩15は砂岩製で、14、15は欠損している。16は覆土中のもので蛇紋岩製。17は北壁下の床直から出土した蛇紋岩製定角磨製石斧である。この他にも凹石等の石器が多少出土しているが、図示できなかった。

### 15号住居址 (第31図) (図版19)

昭和48年8月8日～8月11日

○プラン 14号住居に貼られているため、その大部分の壁等について確認できないが、柱穴及び北～東壁プランより推定して円形であろう。

南北6.07m×東西5.6mと推定

○主軸 N-14°-E、炉石北辺石に直交する軸を主軸とした。

○柱穴 5本、うち炉東の柱穴は縄文の住居のものか不明である。ただし貼床下から発見されている。pit7径44×30cm深さ35cm、pit8径66×57cm深さ50cm、pit9径80×59cm深さ45cm、pit10径75×55cm深さ60cm、pit11径87×75cm深さ40cm

○壁 14号住居址にこの部分が切られているため、半分以上確認できない。確認された部分は14号住居の東壁から1m程離れた部分で、覆高は約10cmしかない。ロームは柔らかく、60度位の傾斜がある。

○床面 14号住居と15号住居床面はほぼ同一平面であるが、14号住居の床面造りの方法が荒掘り後に床を貼る方法で行なわれている為、15号住居の床面は残されていない。又、14号住居に攪乱されなかった部分は柔らかく、しまりもない。

○炉 方形面囲炉であったと思われるが、北辺を除いて各辺の石は欠損を多く受けている。東西120cm×南北150cmの大型方形炉である。この南部に焼土のある地床炉があり、径50cm位を計る。

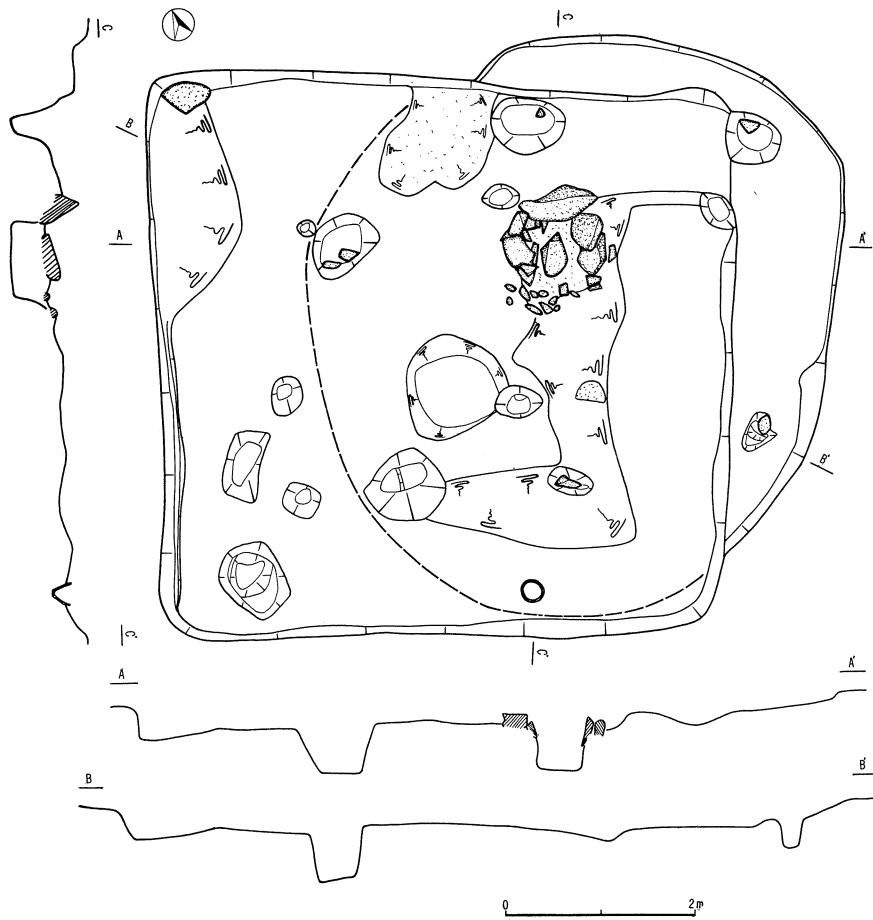
○出土遺物 遺物は土師14号住居に切られて、埋襲と若干の土器片、及び、石器2点を出土させた。埋襲は曾利Ⅳ式か。(堀内)

### 出土遺物 (第32図)

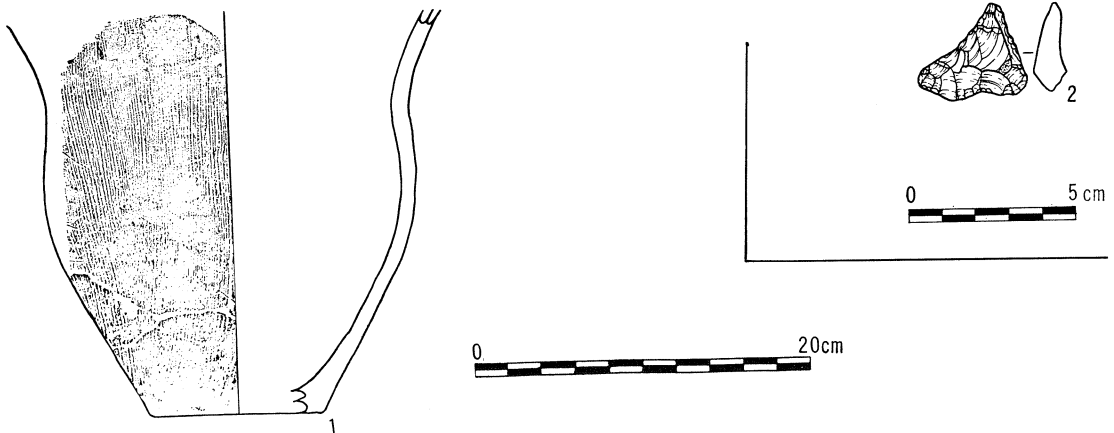
遺物は少なく、1の埋襲は細かい櫛目状工具による平行沈線で器面全体が埋められている。口縁部及び底部を欠損している。2はチャート製の不定形石器で、石匙にも考えられる。

### 土壌出土遺物 (第33～35図) (図版20、21)

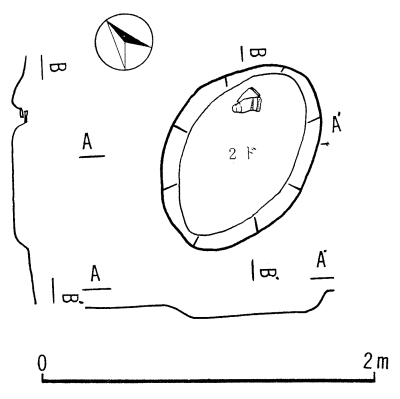
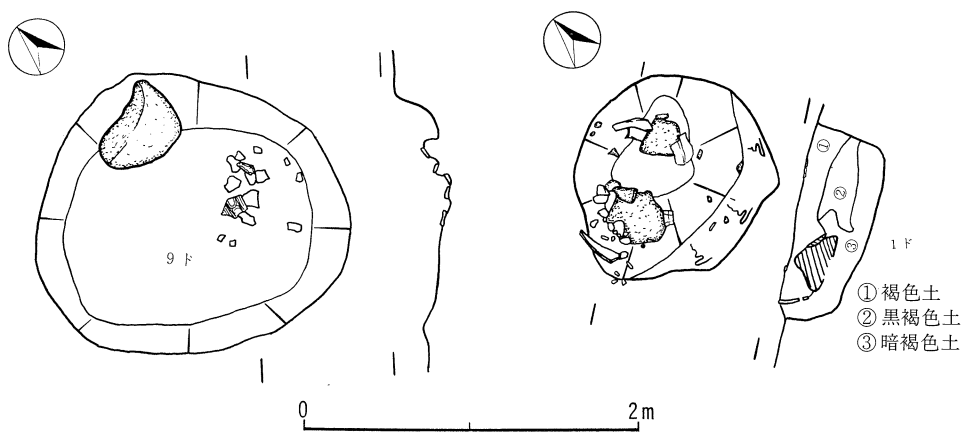
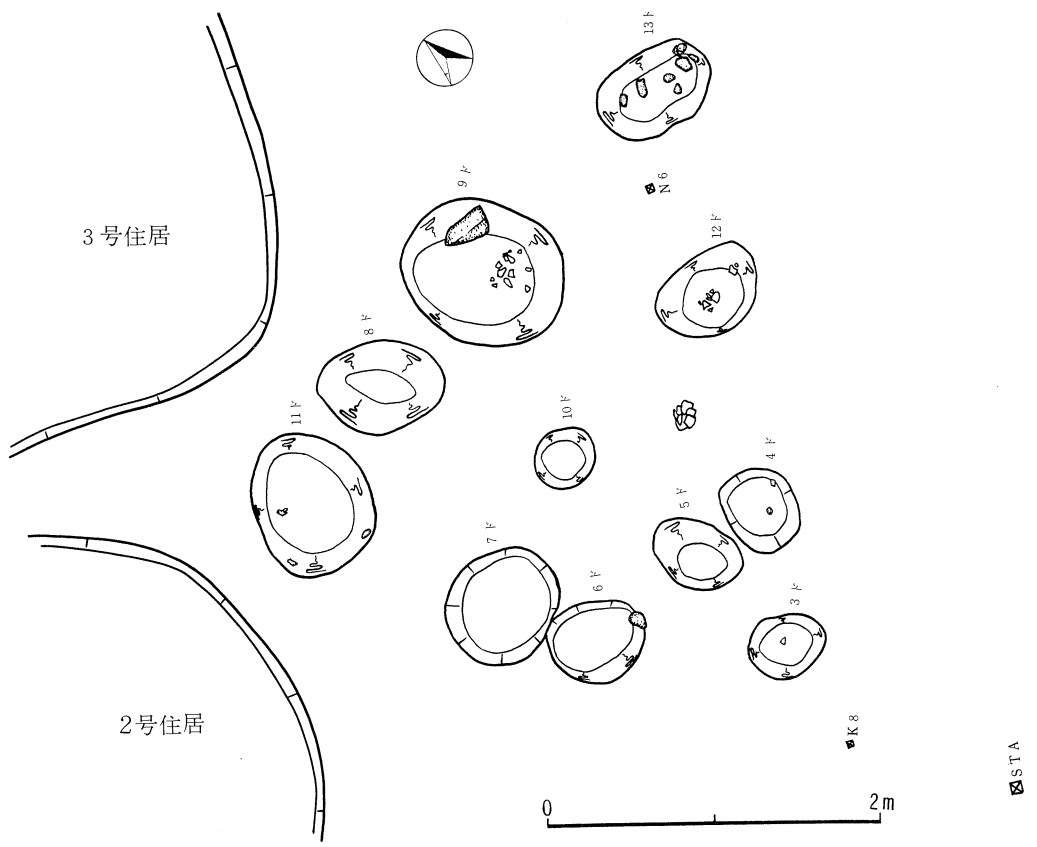
1、2は1号土拵から出土した縄文地文の土器で頸部に把手が付く1と2は内外面をヘラで良好に磨かれ、内側に把手をもち、口縁部と胴部の段に外面から内面へ斜に孔が穿れている。3、9は2号土拵出土器で、隆線の両側に連続瓜形文を施す藤内一式の深鉢形土器で、9は12号土拵出土の破片との接合資料である。4、5は9号土拵から出土した打製石斧と深鉢形土器で、5の黒褐色の胎土は



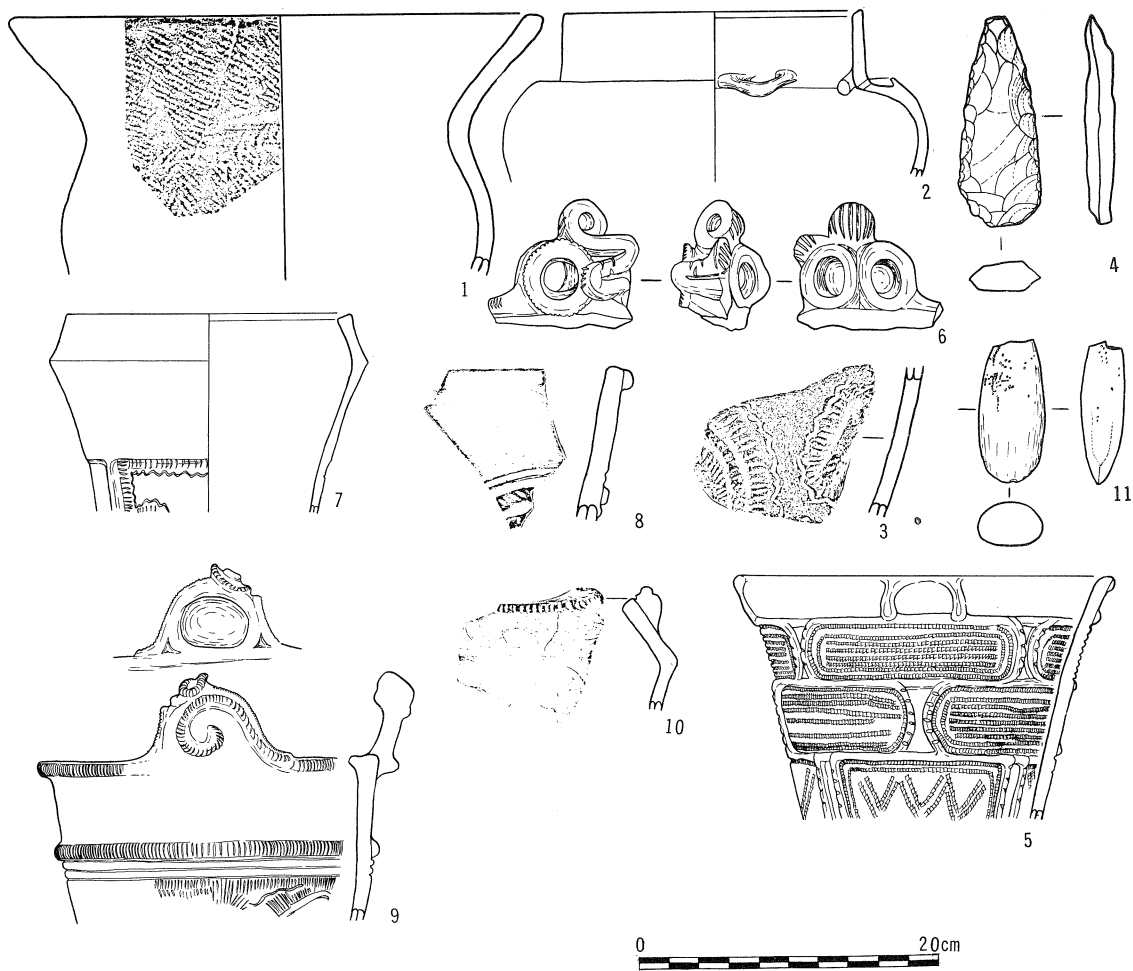
第31图 柳坪A地区15号住居址平面图



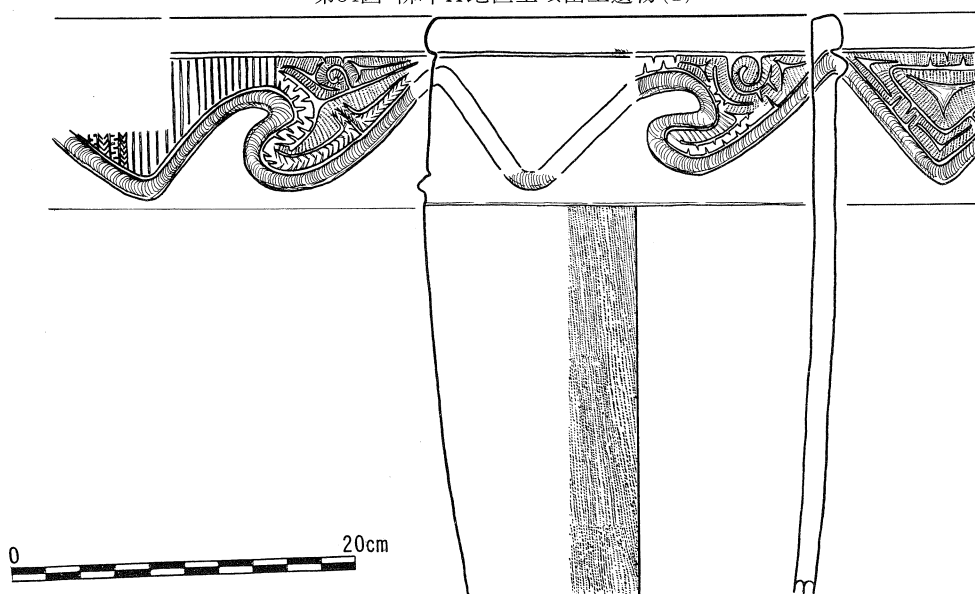
第32图 柳坪A地区15号住居址出土遺物



第33図 柳坪A地区土壌実測図



第34图 柳坪A地区土壤出土遗物(1)



第35图 柳坪A地区土壤出土遗物(2)

もろく、雲母を含む。洛沢式に比定されるものであろう。6、7、8、10、は12号土坑から出土した土器で、これらも藤内式に含まれる文様構式をもつ。

### ま と め

柳坪A地区の特徴をあげることができるなら次の通りである。

1. A地区の台地は幅40m余で、この南北に住居群が広がると思われるが、一応北、西、南へと半円状を描き、2号住居北側に小竪穴群が存在する集落形態を整えていること。
2. 時期が4号住居を除いて、曾利II式以降で、短時間の集落であること。
3. 重複し、入口部が切られている住居を除いて埋甕を持つ。
4. 8号、10号住居の炉北側敷石部を持つ住居の性格。
5. 小竪穴群の集落に於ける位置が重要と思われる。

2) 弥生時代

16号住居址

(第36図) (図版22)

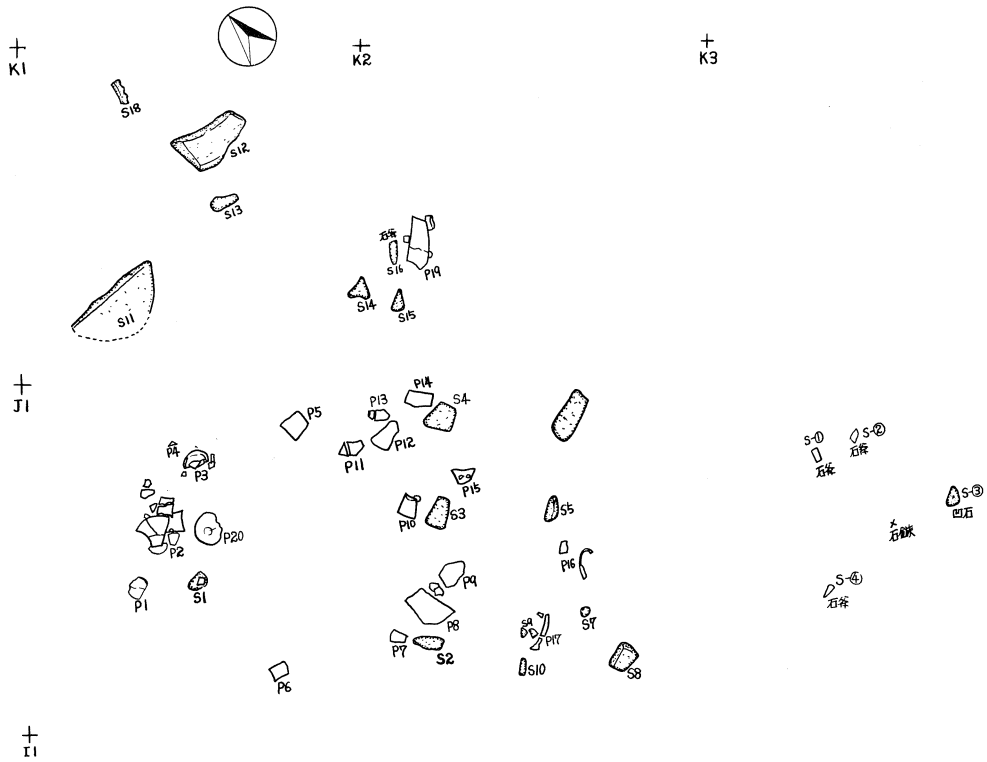
昭和48年7月20日～26日

○プラン、主軸、柱穴等、一切遺構内容が不明で、2号住居址を切っているものをこの住居とする。覆土中より弥生時代初頭の水神平系土器群が一括出土したが、諸々の事状により遺構内部を掘り下げて調査するまでに至らなかったのは残念であった。

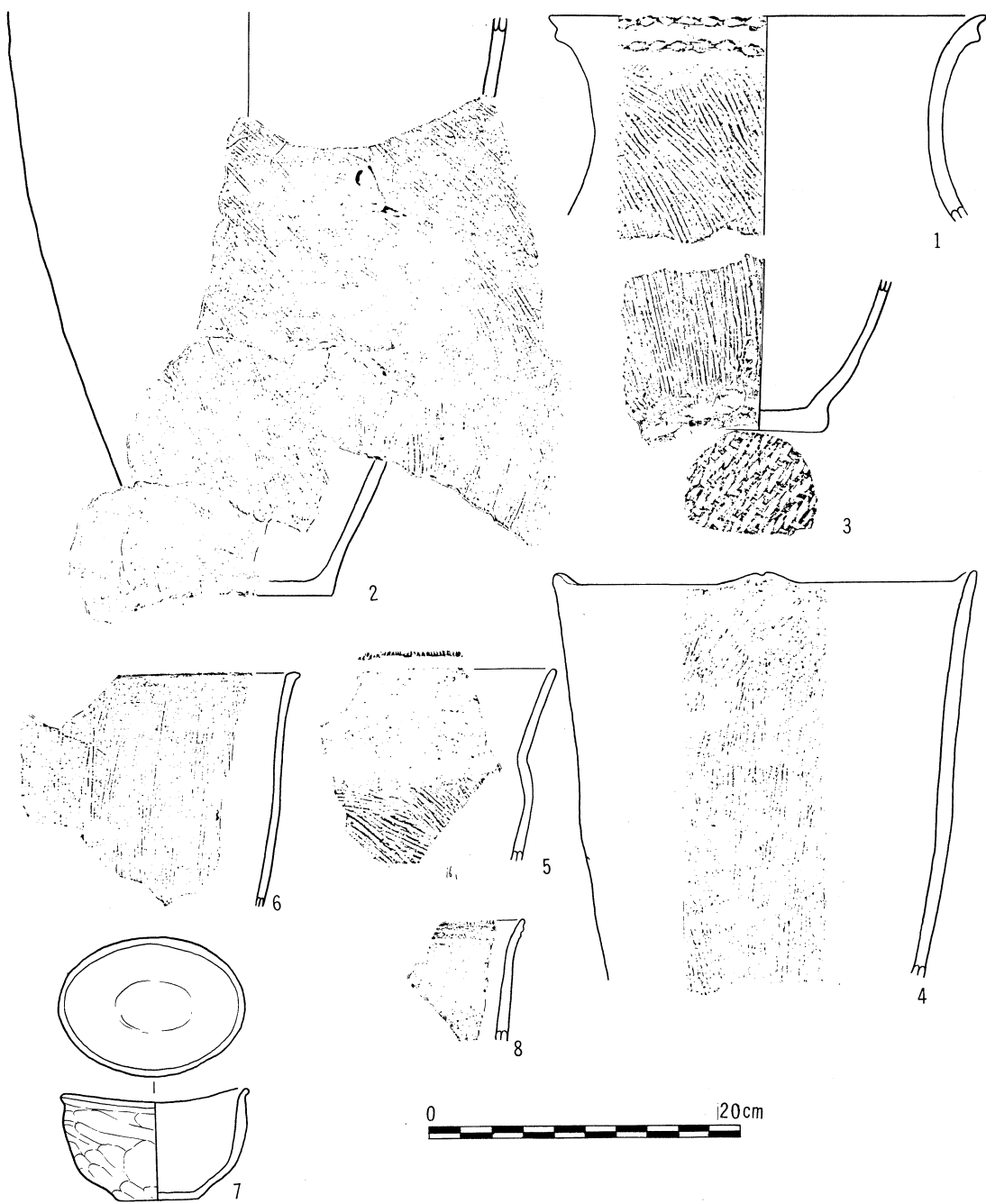
出土遺物

(第37図)

7を除いて条痕の整形痕が明瞭に器面に見える。1は広口壺の口縁で、口唇部に二条の隆線を廻らし、その上を連続指圧している。2、3は深鉢形土器(甕か)の底部から胴部で、底部は2、3ともアジロ底である。4は口縁に突起を4個持つ深鉢形土器で、突起中央に上からへらで刻みを1個施文する。5は胴部が屈曲し、口唇にへら刻みを連続させ、胴部下半には条痕文が施される。6、7は深鉢形土器の口縁破片で、やや外反し、8は無文である。7は盤形土器で、内外面ともへら整形される。



第36図 柳坪A地区16号住居址遺物図



第37图 柳坪A地区16号住居址出土遗物

### 3) 古墳時代

#### 3号住居址 (第38図) (図版23)

昭和48年7月8日～7月15日

- プラン 隅丸方形、 $6.6m \times 6.6m$  (推定)
- 主軸 N-10° -E
- 柱穴 2本
- 周溝 なし
- 壁 北側から東壁にかけてほぼ良好である。が、南側はほとんどローム面と同一となり、16号住居と重複している場合も考えられる。
- 床 中央部はかたく踏み固められており良好であるが、壁近くは柔らかい。
- 炉 地床炉で $40cm \times 40cm$ を計り、深さ $15cm$ で焼土が $3 \sim 5cm$ 残っている。
- 出土遺物 (第39図) いずれも覆土中から出土したもので、住居の時期決定が困難であるが、出土遺物の特徴から古墳時代前期に比定することができるものとした。(蛭間)

#### 5号住居址 (第40図) (図版24)

昭和48年7月7日～7月14日

- プラン 方形、 $3.4m \times 3.6m$
- 主軸 N-18° -W
- 柱穴 不明(精査不充分的為、検出できなかった可能性もある)
- 周溝 なし
- 壁 全体的に良好であるが、4号、6号縄文住居と重複している部分は壁が把握できない。カマドの位置で壁を追った。壁高 $15cm$
- 床 全体として良好であるが、南東コーナー一部で攪乱を受けている様で、凹凸がある。また、南辺中央部に方形( $70 \times 30cm$ )で約 $6cm$ 程高くなっている部分があり、八王子市中田遺跡に見られる入口部の施設とも考えられる。
- カマド ほとんど壊れて、その形態を実測することはできない。
- 出土遺物 (図版24) に示す甕破片が若干出土している。
- その他 西南コーナーに皿状ピットがあり、これが貯蔵穴となるかもしれない。

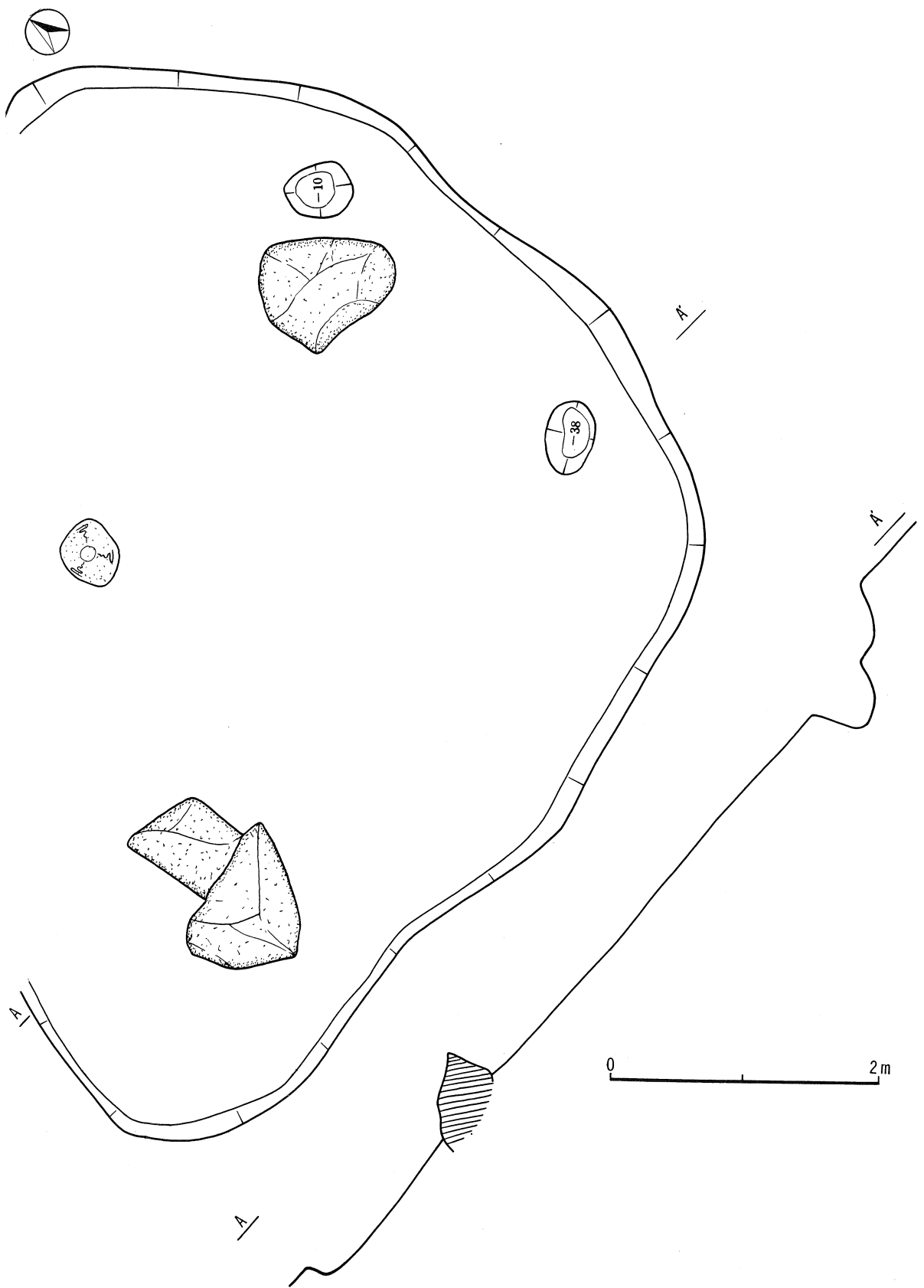
(山路)

#### 7号住居址 (第41、42図) (図版25)

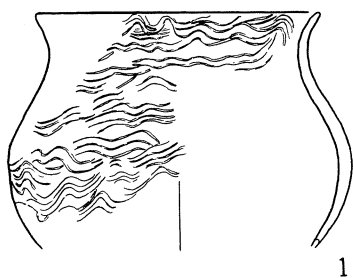
昭和48年7月11日～7月22日

- プラン 方形、南北 $5.16m \times$ 東西 $5.15m$ のほぼ正方形
- 主軸 N-16° -E (貯蔵穴の中心とカマドの中心線)
- 柱穴 主柱穴4本。各コーナー対角線上にあり、貼床があるためそれぞれ袋状を呈する。貼床の厚さは $8 \sim 15cm$ である。柱穴径 $15 \sim 30cm$ 、深さ $50 \sim 60cm$ 。
- 周溝 調査地区外、貯蔵穴、カマド部を除き全面的にまわっている。幅 $22 \sim 26cm$ で平均しているが、西南コーナー付近は周溝が切れている。
- 壁 南側はプラン確認面と表土表面との差が $5 \sim 10cm$ 程しかなく、耕作の攪乱を受けて、周溝から立ち上りを見た。北壁高は $20 \sim 32cm$ ある。

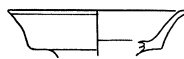




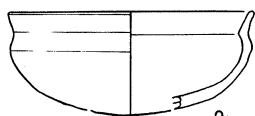
第38图 柳坪A地区3号住居址平面图



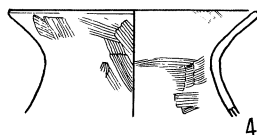
1



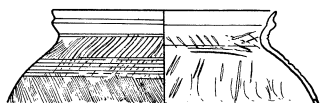
3



2



4



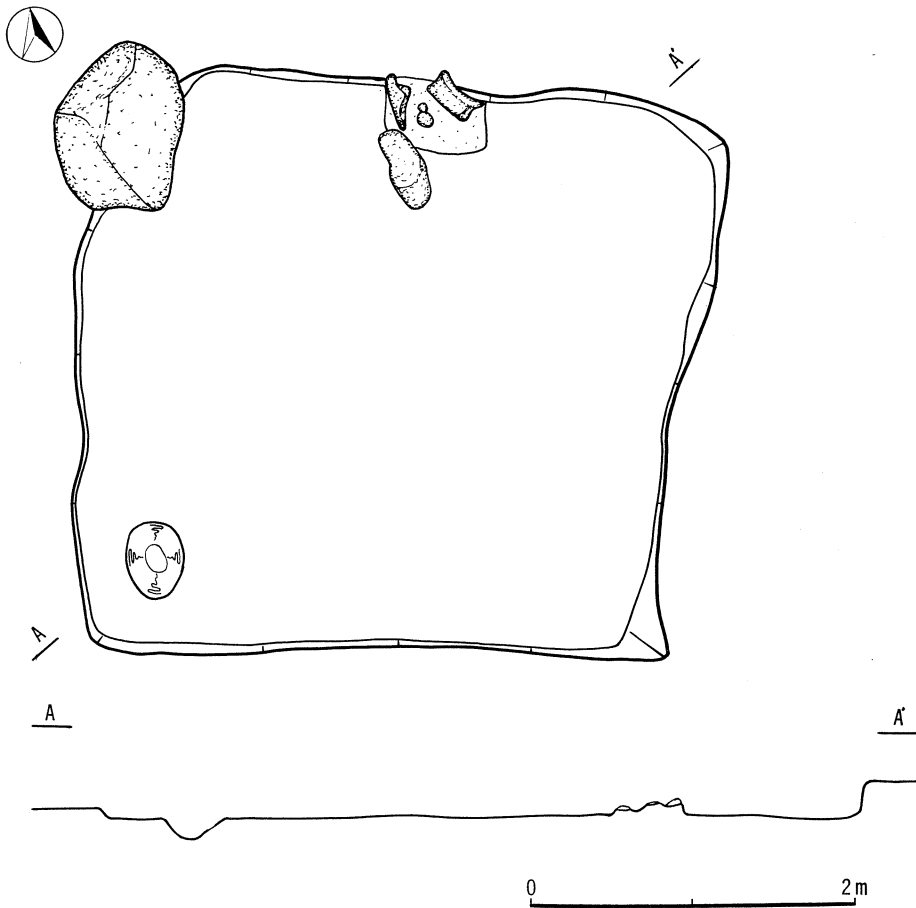
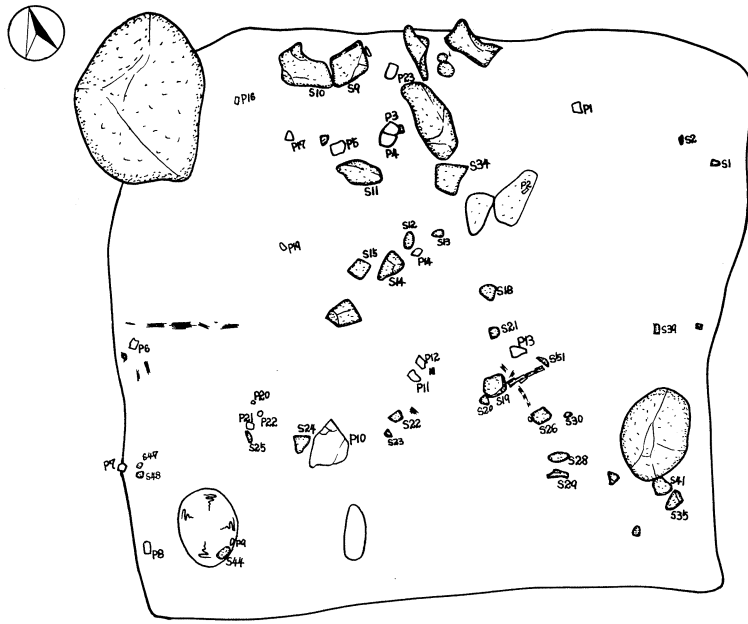
6



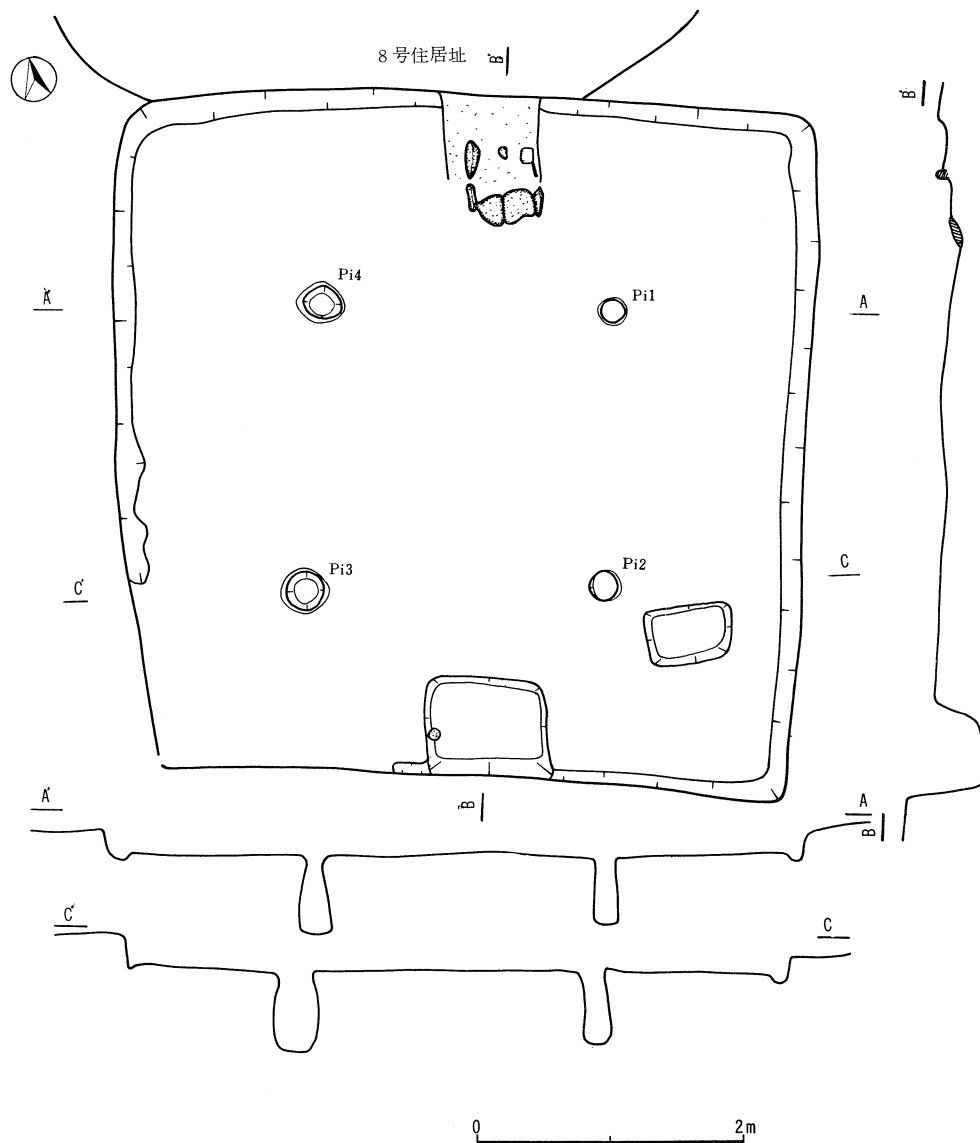
5



第39图 柳坪A地区3号住居址出土遗物

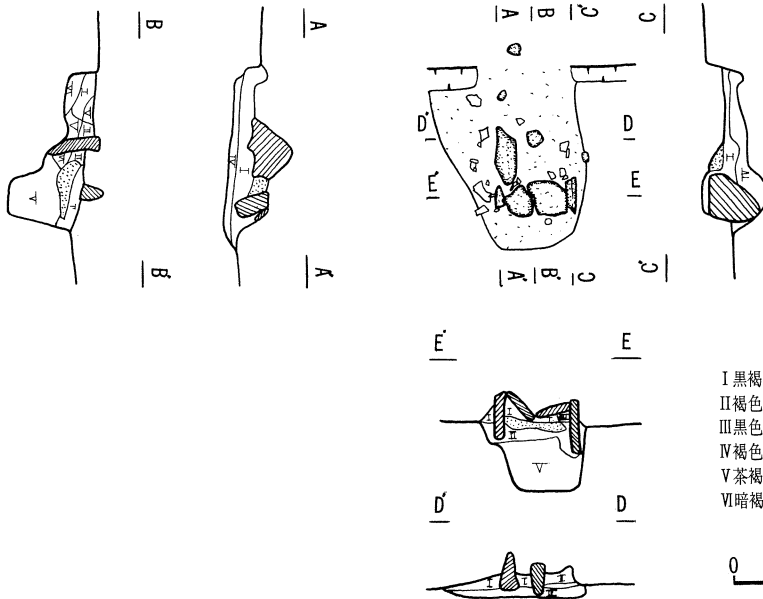
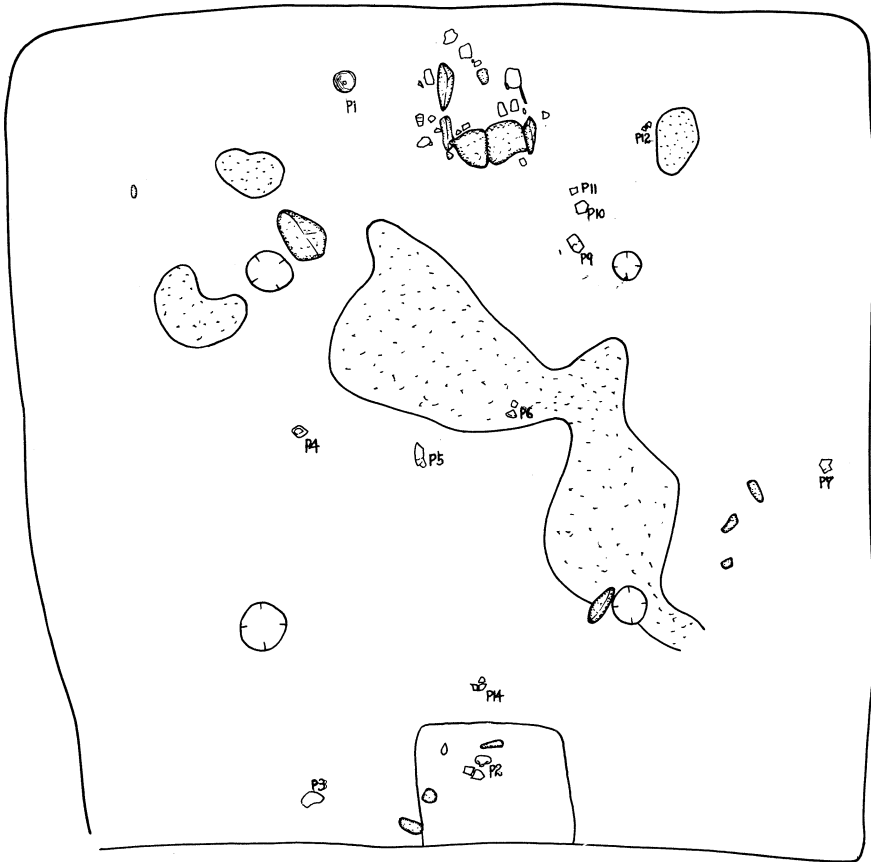


第40图 柳坪A地区5号住居平面図、遺物図



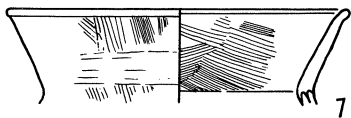
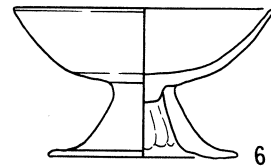
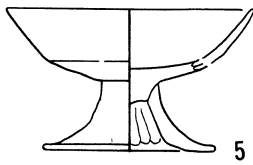
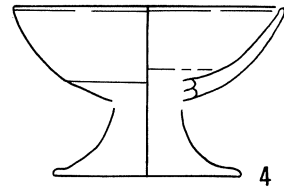
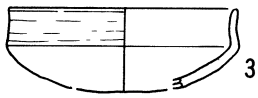
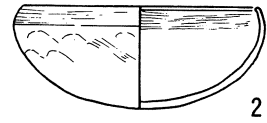
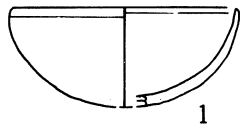
第41図 柳坪A地区7号住居址平面図

- 床 面 ほぼ全面にわたりよくしまった良好な状態であるが、南部は部分的に攪乱を受けている。又、柱穴、カマド付近は貼床が多少みられる。
- カマド 北壁中央に位置する。西側袖石2、東側袖石1は平石を立てて使用しており、焚口天井石は焼成を受けたのか、土圧で中央よりくの字形に割れている。又、中央に支脚と考えられる立石があり、焼土は底面より浮いて10cm位の層になっている。焚口部の焼土は底面にレンズ状に見られた。
- 出土遺物 (第43図、図版26) 高杯3 (一括1、脚1、杯1) 杯1、杯片9、須恵器片2、カマド



- I 黒褐色土
- II 褐色土(焼土混入)
- III 黒色土
- IV 褐色土(ロームブロック混入)
- V 茶褐色土
- VI 暗褐色土

第42図 柳坪A地区7号住居遺物図、カマド図



第43図 柳坪A地区7号住居出土遺物

周辺及びその内部より長甕に近い破片も出土している。

○その他 南壁中央に貯蔵穴（方形）があり、この内部上面より高杯が出土している。また、南東コーナーに近いところで方形のピットがある。遺物は出土していないが、ロームの貼り床があり、住居に伴ったものか明確でない。

（宮崎）

## 9号住居址

(第44図) (図版27)

昭和48年7月20日～7月27日

- プラン 方形、 $6.9\text{m} \times 7.3\text{m}$  南壁中央に張り出しピットを持つ。
- 主 軸 N-12°-E
- 柱 穴 住居址対角線上に4本発見され、No.1は西北隅に位置して径41cm、深さ58cmを計る。底面に石が敷かれている。No.2は西南隅で径40cm、深さ30cmで、覆土は柔らかく木材が腐蝕した感じである。No.3は径27.5cm、深さ40cm、No.4は径20cm、深さ40cmで、縄文土器片と土師器片が出土している。
- 周 溝 カマド、張り出しピットを除いて1周するが、北西コーナーに於て攪乱を受けているので検出されない。幅20cm前後で浅く、5～10cmである。
- 壁 全体に良好で垂直に近いが北西コーナーは攪乱を受けている。又、東壁中央に小竪穴が重複している。
- 床 面 平坦で、よく踏みかためられており良好である。
- カマド 北壁中央に位置し、袖石1個を残し、他は抜き取られた様である。 $120\text{cm} \times 120\text{cm}$
- 出土遺物 (第45、46図、図版28) ほとんどの遺物がカマド内部及びその周辺から出土している。土師器一括6個体、須恵器破片、小型土器及び縄文時代遺物が若干出土している。
- その他 張り出しピットは関東地方に於て多く見られるもので、鬼高式の大型住居に造られる。ピットは $1.5 \times 1.0\text{m}$ の規模で、底面に地山の巨石が露出している。

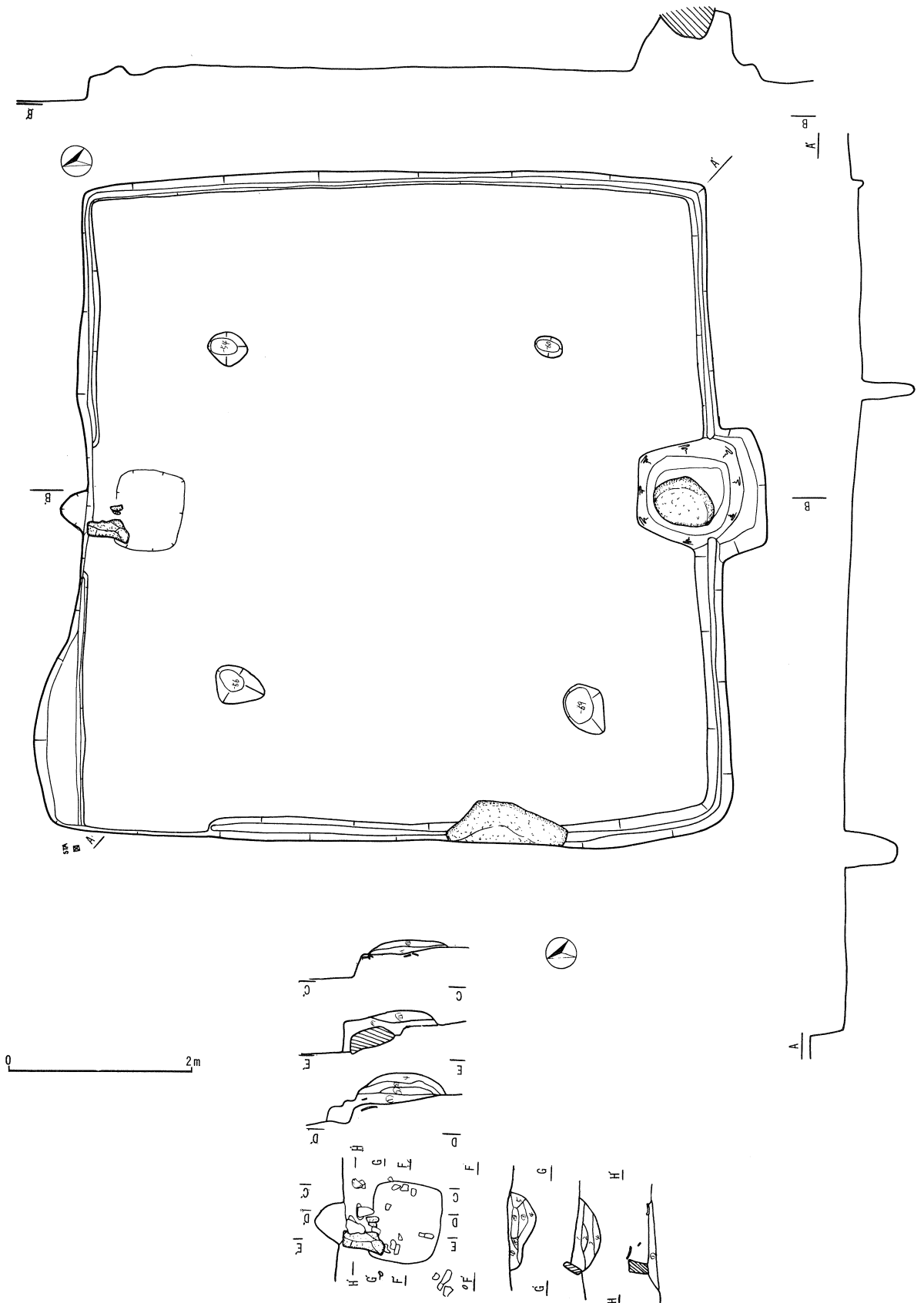
(齊藤)

## 11号住居址

(第47図、図版29)

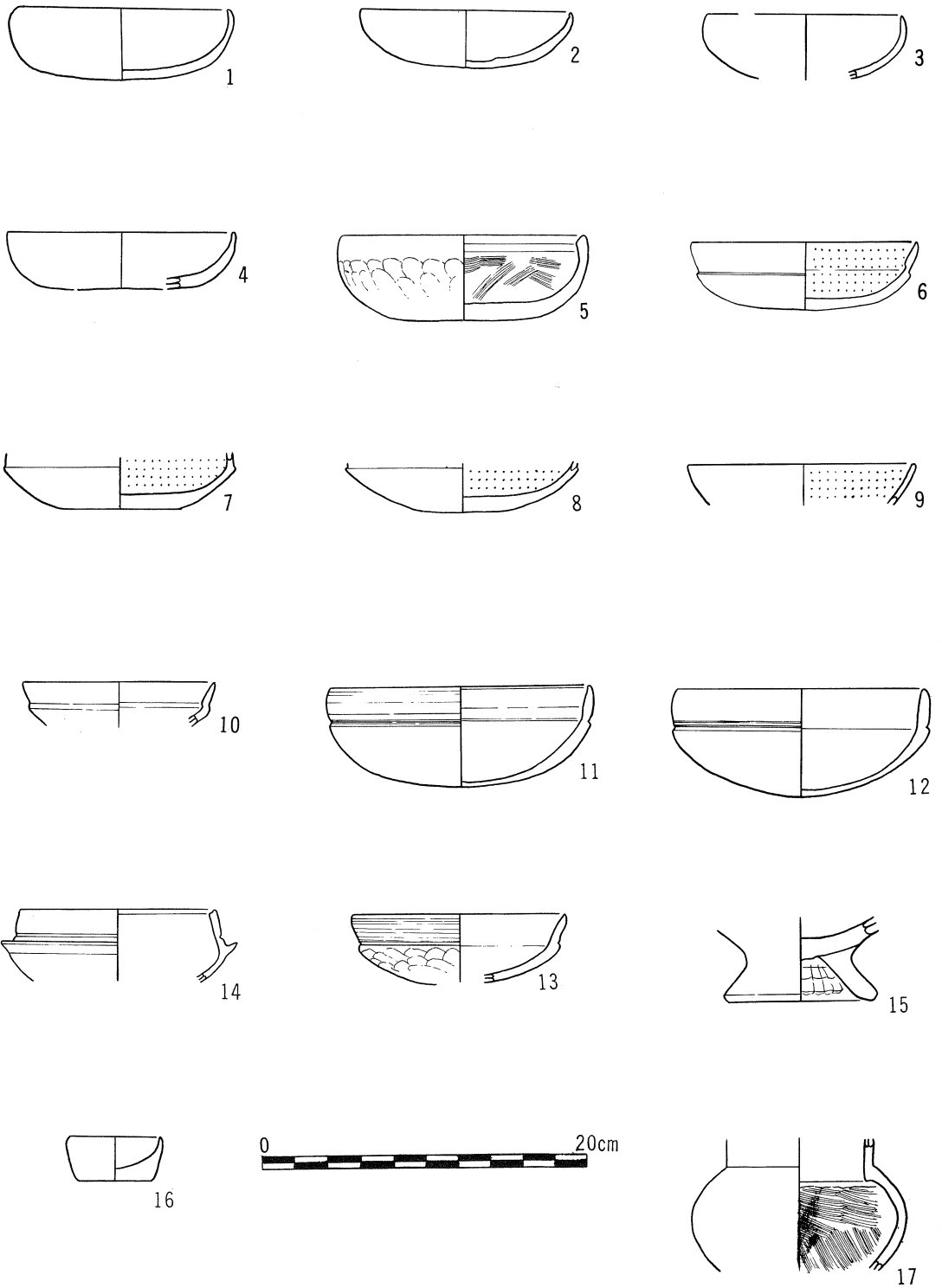
昭和48年7月15日～7月20日

- プラン 方形、東西 $6.15\text{m} \times$ 南北 $6.0\text{m}$
- 主 軸 N-6°-E
- 柱 穴 対角線上に4本ある。No.1は北西隅で径40cm、深さ44cm、No.2は北東隅で径35cm、深さ34cm、No.3は南東隅で径48cm、深さ34cm、No.4は南西隅で径54cm、深さ44cmである。それぞれの柱穴間は3m～3.2mで各コーナーからの位置も1.8～2.0mと均一に近い。
- 周 溝 なし
- 壁 南壁中央部を除き、他は確認されている。これは地形の傾斜と攪乱によるものであろう。東壁の状態は軟弱であり壁高は6cm、北壁のカマド両側は良好で、砂礫混入ローム土であり、壁高は約15cmある。西壁の土層は北壁と類似するが、南壁近くは浅く良好ではない。
- 床 面 北側と南側ではレベル差が6cm位認められる。又、東側と西側では約10cm西床が高くなっているが、全体として平坦である。北西コーナー、及び南東コーナー付近に巨石の露頭が見られる。
- カマド 北壁中央に位置し、南北 $1.3\text{m} \times$ 東西 $1.4\text{m}$ を計る。石組カマドであるが、東側袖石一部を除いて破壊されている様である。
- 出土遺物 (第48図) 出土遺物は甕3、杯3の各破片で鬼高期に属するものである。又、縄文時代の石鏃3点、凹石及び土器片が覆土より出土している。

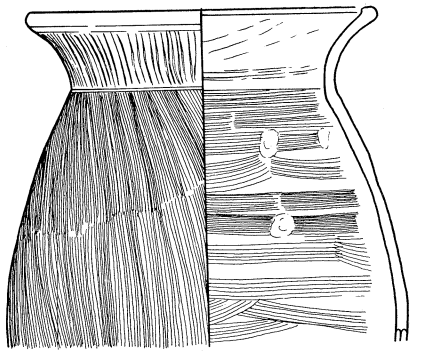


第44図 柳坪A地区9号住居址平面図、カマド図

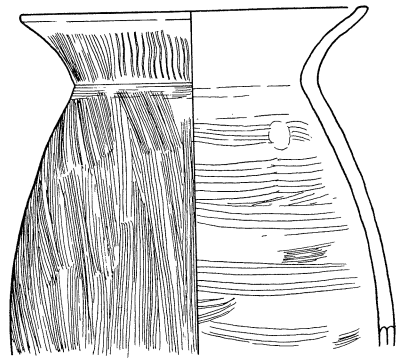




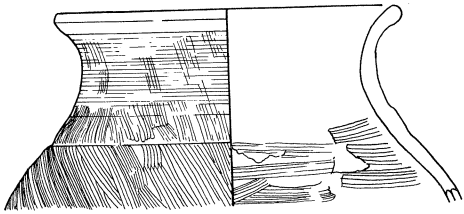
第45图 柳坪 A 地区 9 号住居址出土遗物(1)



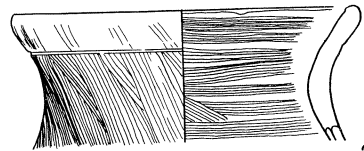
18



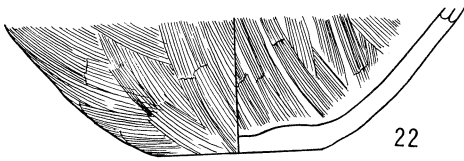
19



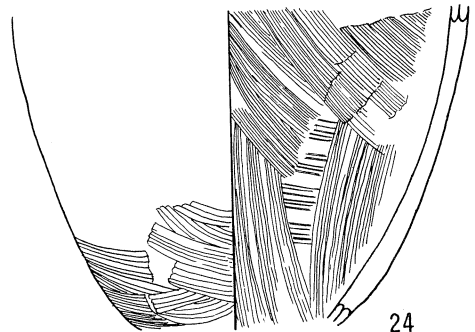
20



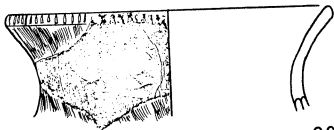
21



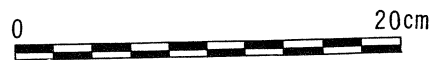
22



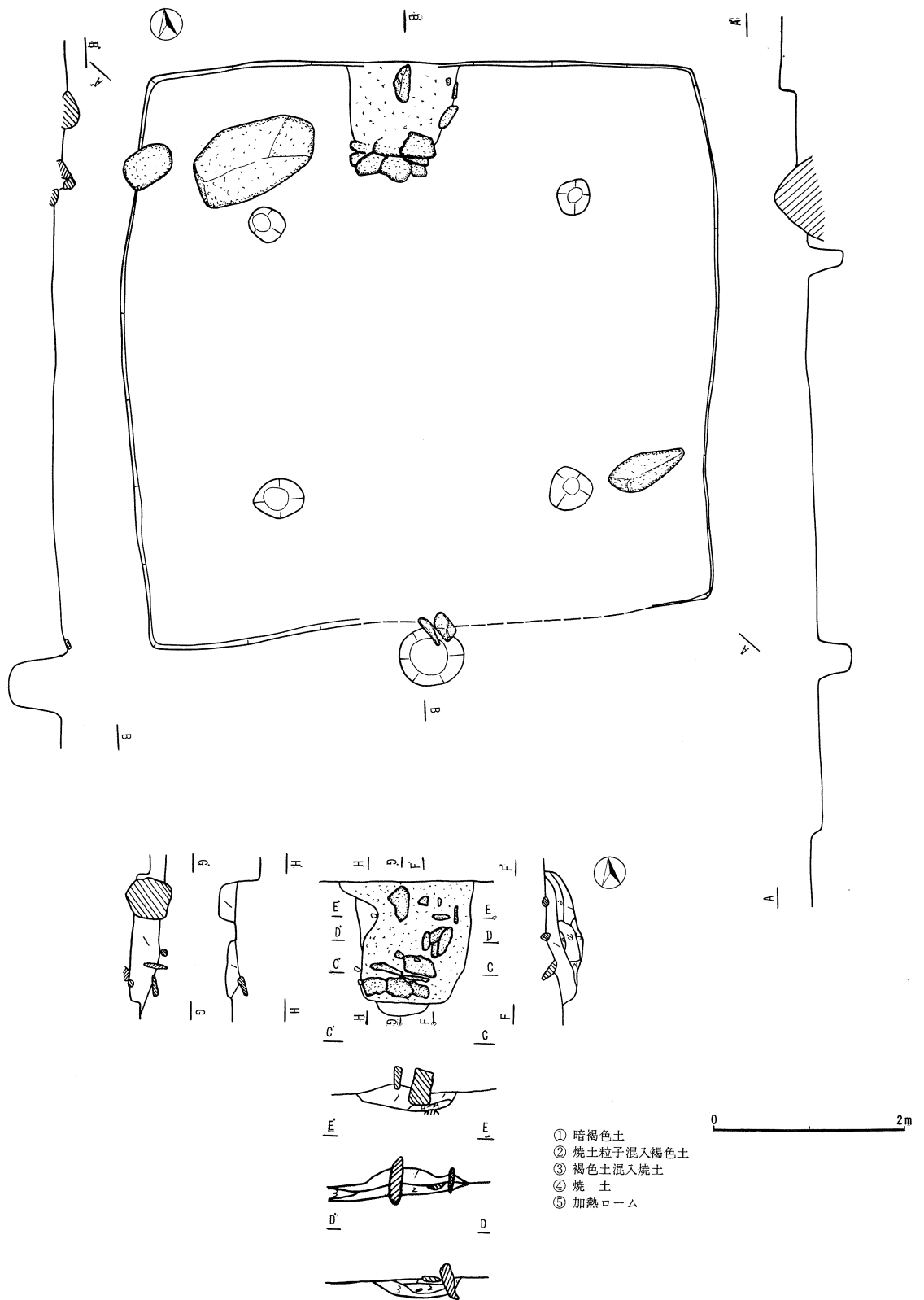
24



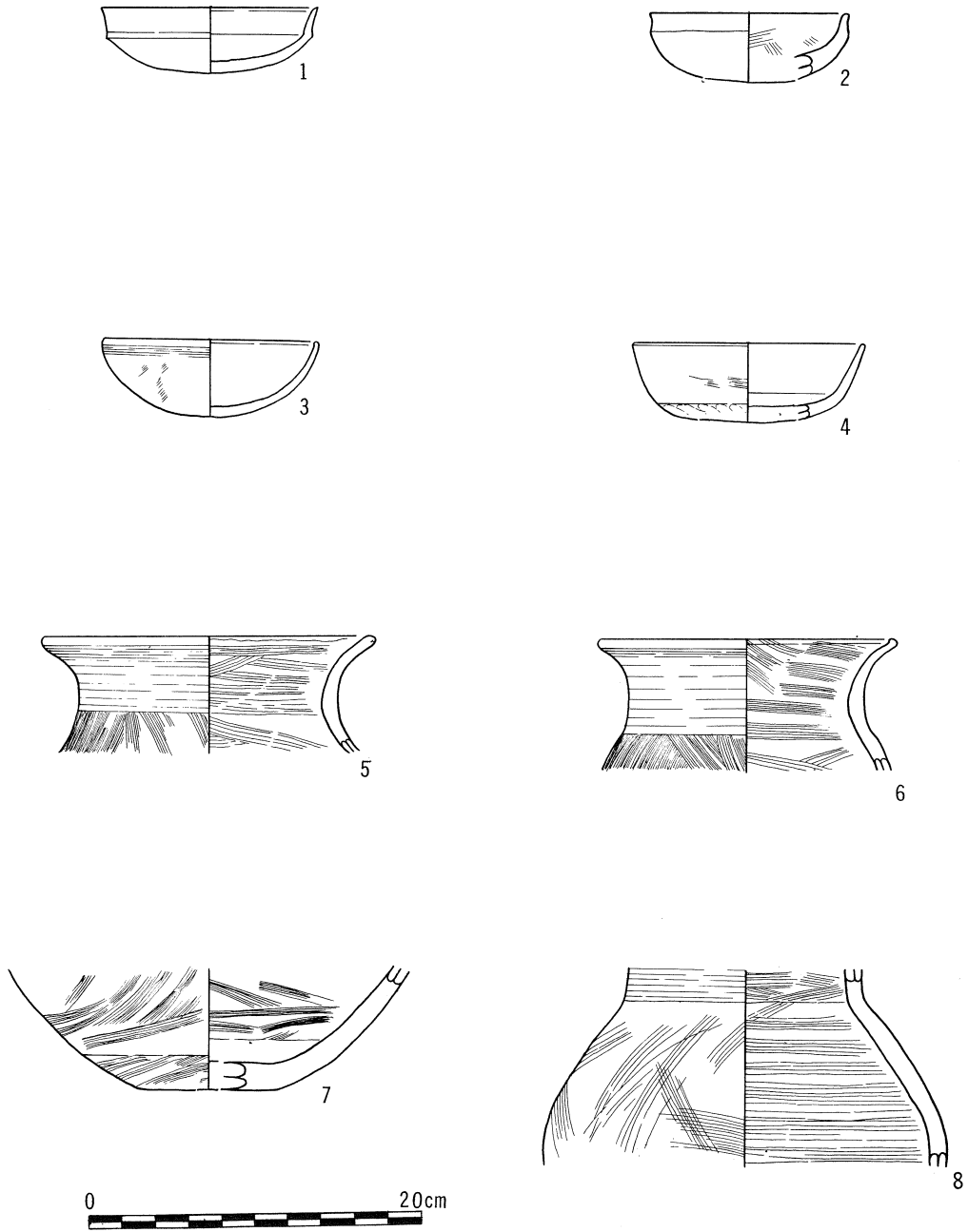
23



第46图 柳坪A地区9号住居址出土遺物(2)



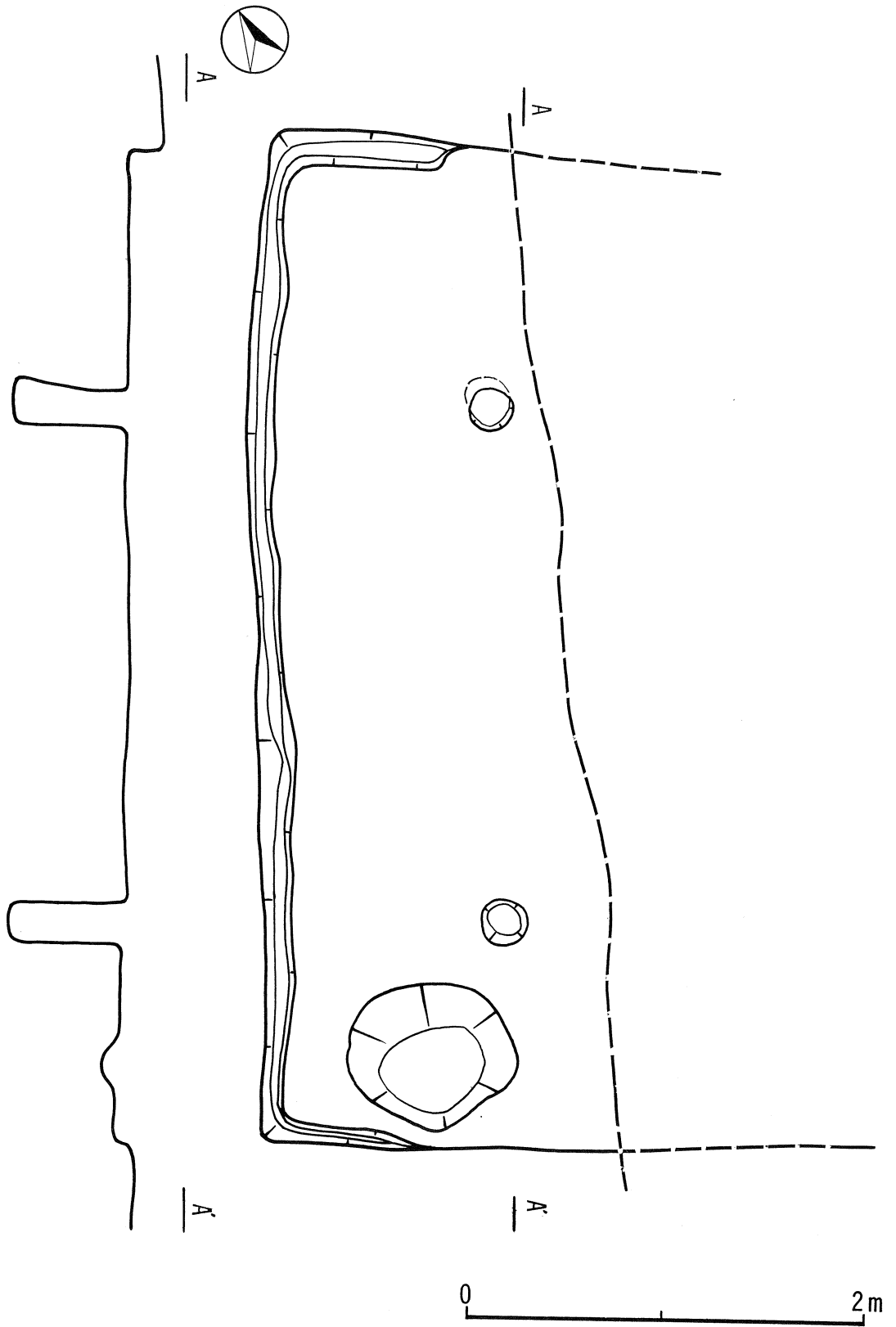
第47図 柳坪A地区11号住居址平面図、カマド図



第48図 柳坪 A 地区11号住居址出土遺物

○その他 住居南壁中央に円形の小竪穴（70×60cm、深さ51cm）があり、中から縄文土器片と黒曜石片が出土している。小竪穴の底面は円形平面で、壁は垂直である。このピットが鬼高期張り出しピットと関連があるのか、縄文期のものか現在のところ不明であるが、一応南壁中央の張り出しピットと同じ位置にあることから円形張り出しピットと考える。

（浦野）



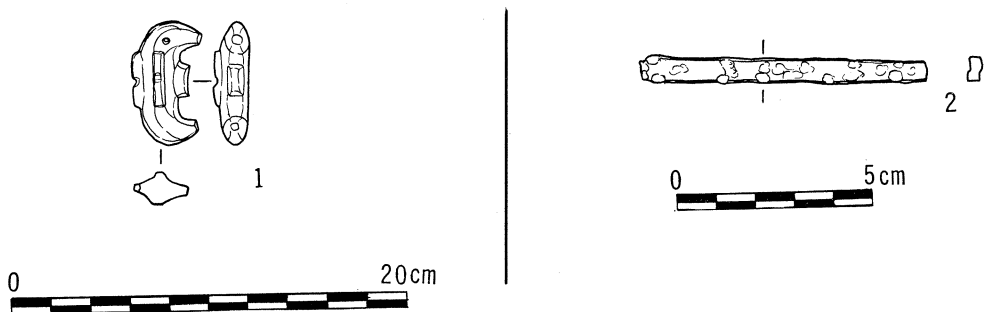
第49图 柳坪 A 地区12号住居址

## 12号住居址

(第49図、図版30)

昭和48年7月15日～7月26日

- プラン 方形(東側を道路により切られている) 西辺5.2m
- 主軸 N-31°-E
- 柱穴 2本発見されている。No.1は北側で径2.2cm、深さ5.6cm、No.2は径2.2cm、深さ5.8cmを計る。
- 周溝 プランが確認された壁下にすべて存在する。幅6～10cm、深さ3～10cmである。
- 壁 北壁1.6cm、南壁1.0cmでしまりある砂礫ロームで垂直である。
- 床面 ロームでかたくしまりがある。
- カマド 不明
- 出土遺物 (第50図) 西側周溝近くより子持勾玉1、床面上より鉄片1が出土しているのみで、覆土から縄文土器片が若干出土している。
- その他 西南コーナーに貯蔵穴と思われる皿状ピットが存在する。



第50図 柳坪A地区12号住居址出土遺物

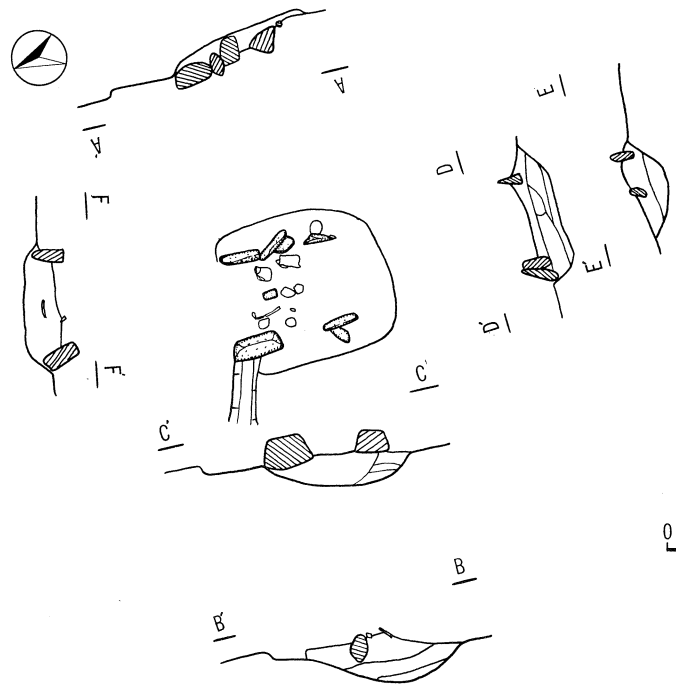
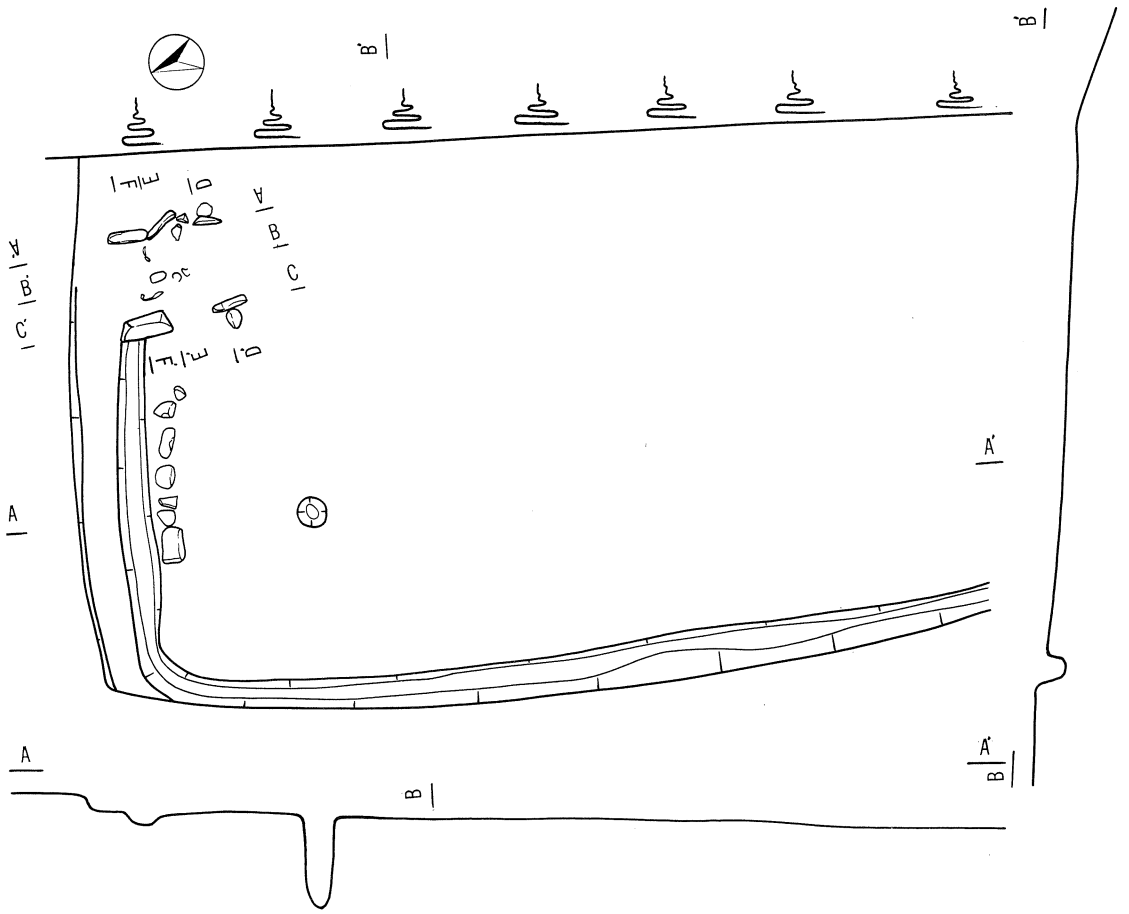
## 13号住居址

(第51図、図版31)

昭和48年7月27日～7月31日

- プラン 方形(推定) 約5m×5m (北東コーナーからカマド中心まで2.5mでその倍を北辺長とした)。
- 主軸 N-22°-E 西辺を使用した。
- 柱穴 住居を3以上が攪乱を受けており、北東コーナーの1本しか発見していない。径1.8cm、深さ5.7cmを計る。
- 周溝 壁確認部に於ては周溝が認められるが、攪乱が激しく良好でない。最大幅1.4cm、最小幅5cm、最大深1.0cm、最小深5cmである。
- 壁 北壁高1.0cm、西北壁は1.8cmである。北壁は畑の地境の溝が伴い、このため壁が削られてしまっている。又、西壁南側は周溝によって壁を把えた。
- 床面 表土上面から床面まで2.0～2.5cm程で、桑等の耕作により攪乱を受けて良好ではない。
- カマド 北壁にあり、カマド範囲は9.5×9.5cmである。カマドの残存状態は良好で、袖石は両側ともよく残っておりカマド内より一括土器2、他破片を出土させる。
- 出土遺物 (第52図) カマド内出土遺物は一括2個体のみで、他は破片である。
- その他 道路により東側大部分を切られている。

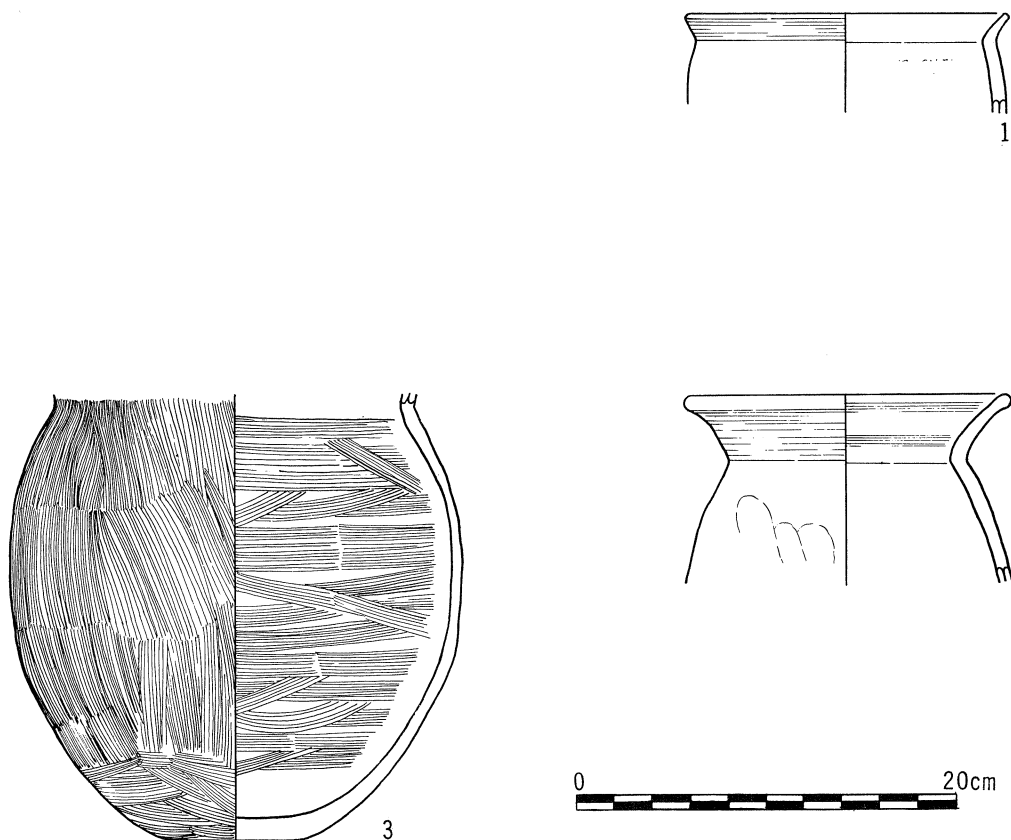
(浦野)



- I 褐色土
- II 焼土混入褐色土
- III 加熱ローム
- IV 焼土
- V 焼土混入赤褐色
- VI 黄褐色土

0 2m

第51図 柳坪A地区13号住居址、平面図、カマド図



第52図 柳坪A地区13号住居址出土遺物

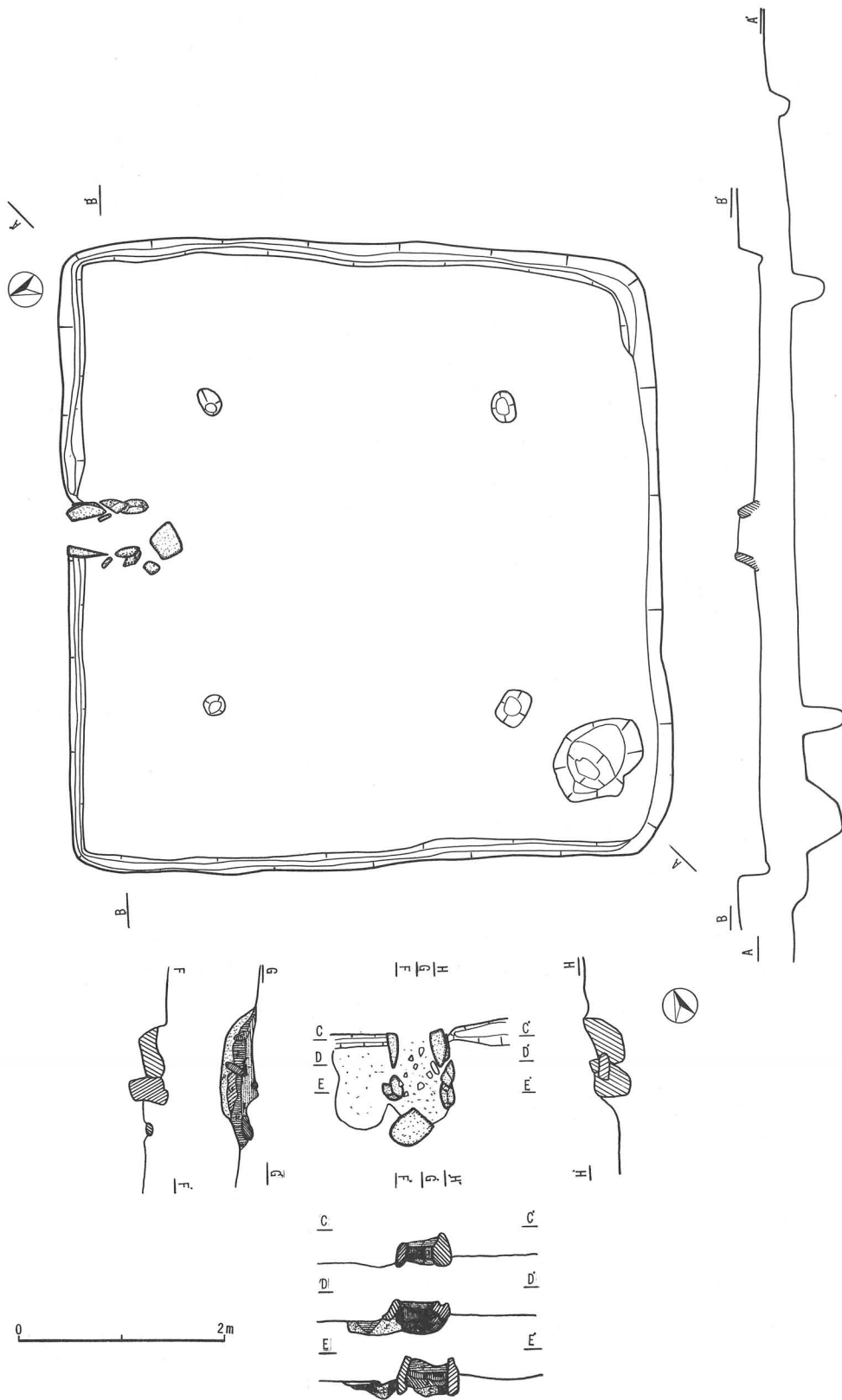
14号住居址

(第53図、図版32)

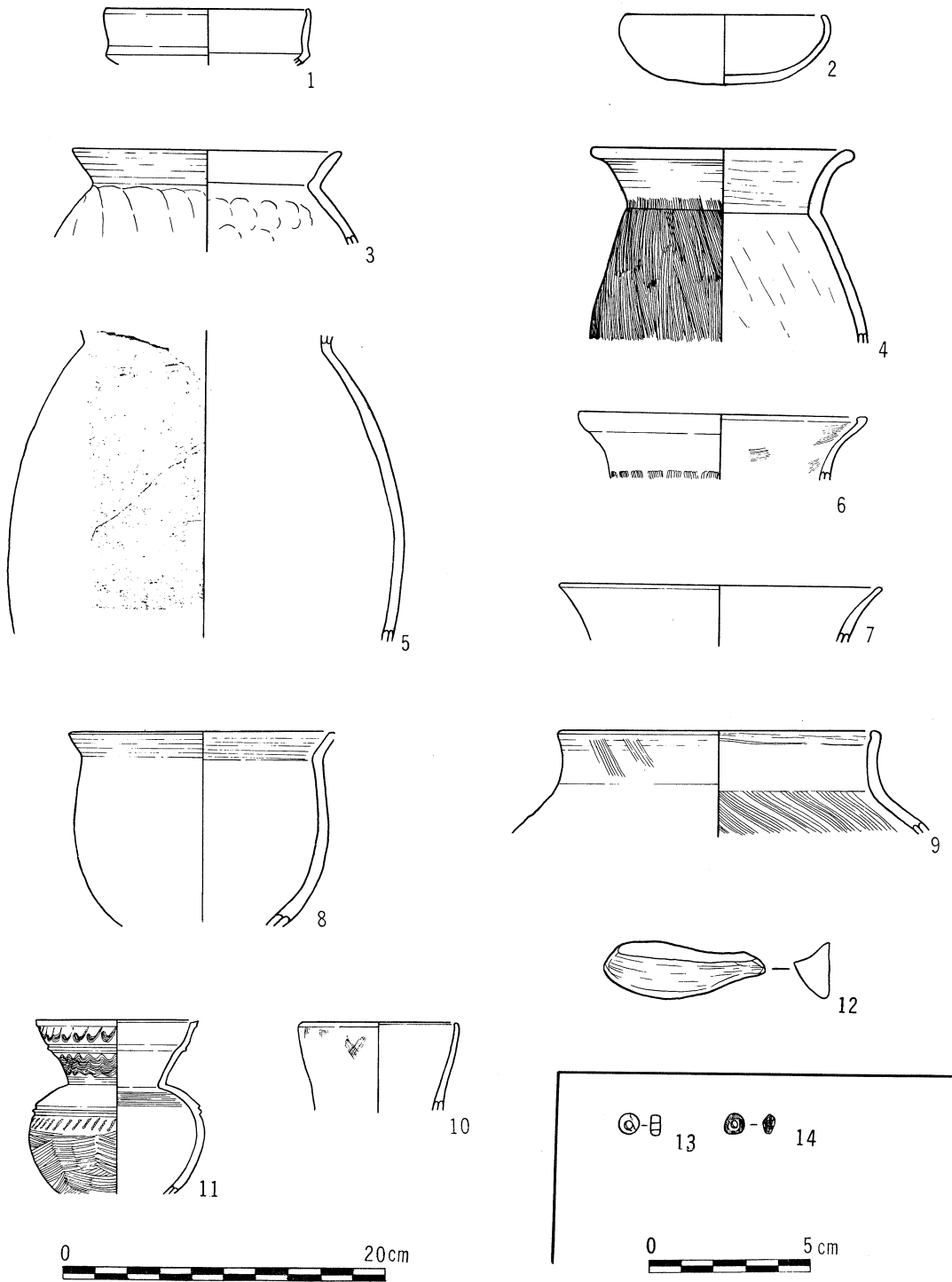
昭和48年7月26日～8月12日

- プラン 方形(台形)北6.0m、西5.8m、南5.7m、東5.6m、
- 主軸 N-21°-E
- 柱穴 対角線上に4本あり、西北隅21×18cm、深さ32cm、西南隅40×32cm、深さ41cm、東南隅32×20cm、深さ30cm、北東隅29×22cm、深さ32cmで、それぞれ径深さとも均一である。
- 周溝 カマド周辺と南辺を除いてほぼ全体に存在する。幅10～20cm、深さ5～10cmを計る。
- 壁 住居全体に良好で、垂直に認められる。壁高は北東部19cm、南東部11cm、西北側28cm、西南14cmである。ただしこの壁高は、縄文時代15号住居発掘前のデータである。
- 床 比較的平坦であるが、北東部が最も低い面より約10cm程高く、縄文時代15号住居に重複する部分に貼床が見られる。又、南側入口部と思われる南辺中央床面に円形の盛り上った部分がある。





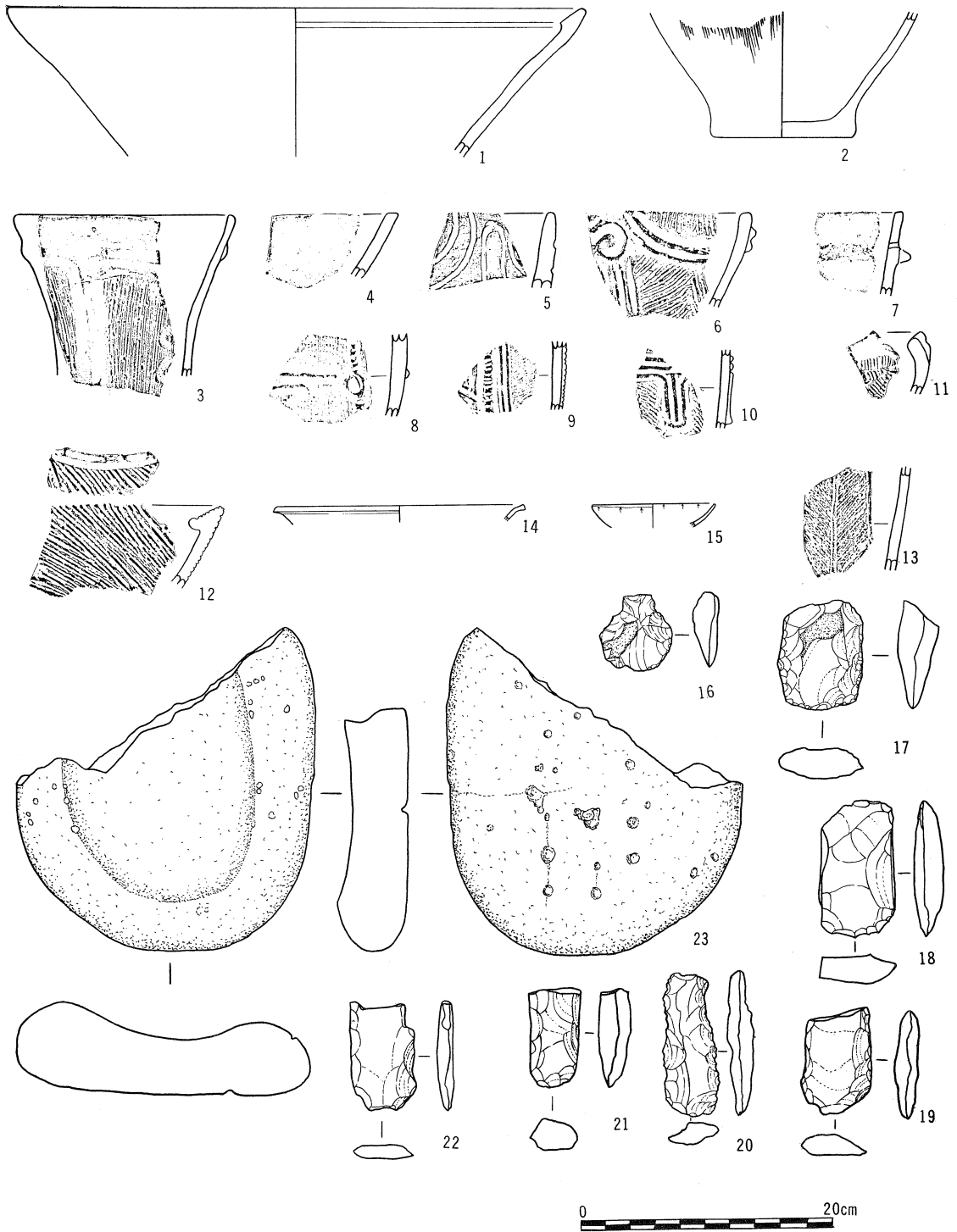
第53図 柳坪A地区14号住居址平面図、カマド図



第54図 柳坪A地区14号住居址出土遺物

- カマド 北辺中央に位置する石組カマドで、袖石は完全に残っている。石組カマド西側に厚い焼土堆積をもつ皿状ピットがあり、拡張前のカマド位置と思われる。5.5 cm × 8.5 cm
- 出土遺物 (第54図、図版33) 土師器坏1、甕2、須恵器1、他に鉄片、土師器片が出土している。縄文土器、石器も多く覆土中から発見される。

○その他 この住居は一回の拡張を行っており、その拡張方法は特筆する必要がある。即ち北西隅を起点として対角線上に拡張している。従って、貼床下より旧住居の柱穴、貯蔵穴が発見されており、住居建築の規制を知ることができる。



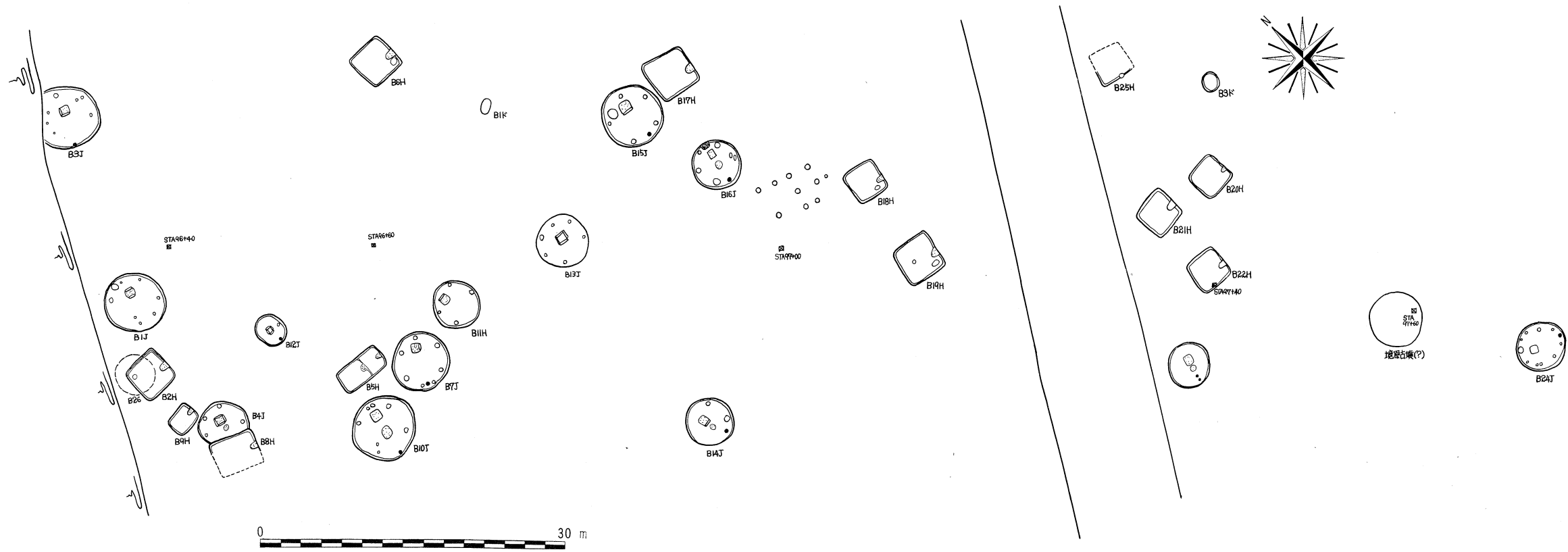
第55図 柳坪A地区その他(1)

貯蔵穴は南西隅に位置し、皿状ピットである。拡張前も、同位置、同方法による。又、張床下より小玉1、白玉1、を発見している。

(小林)



第56図 柳坪A地区その他(2)



第57図 柳坪B地区遺構配置図

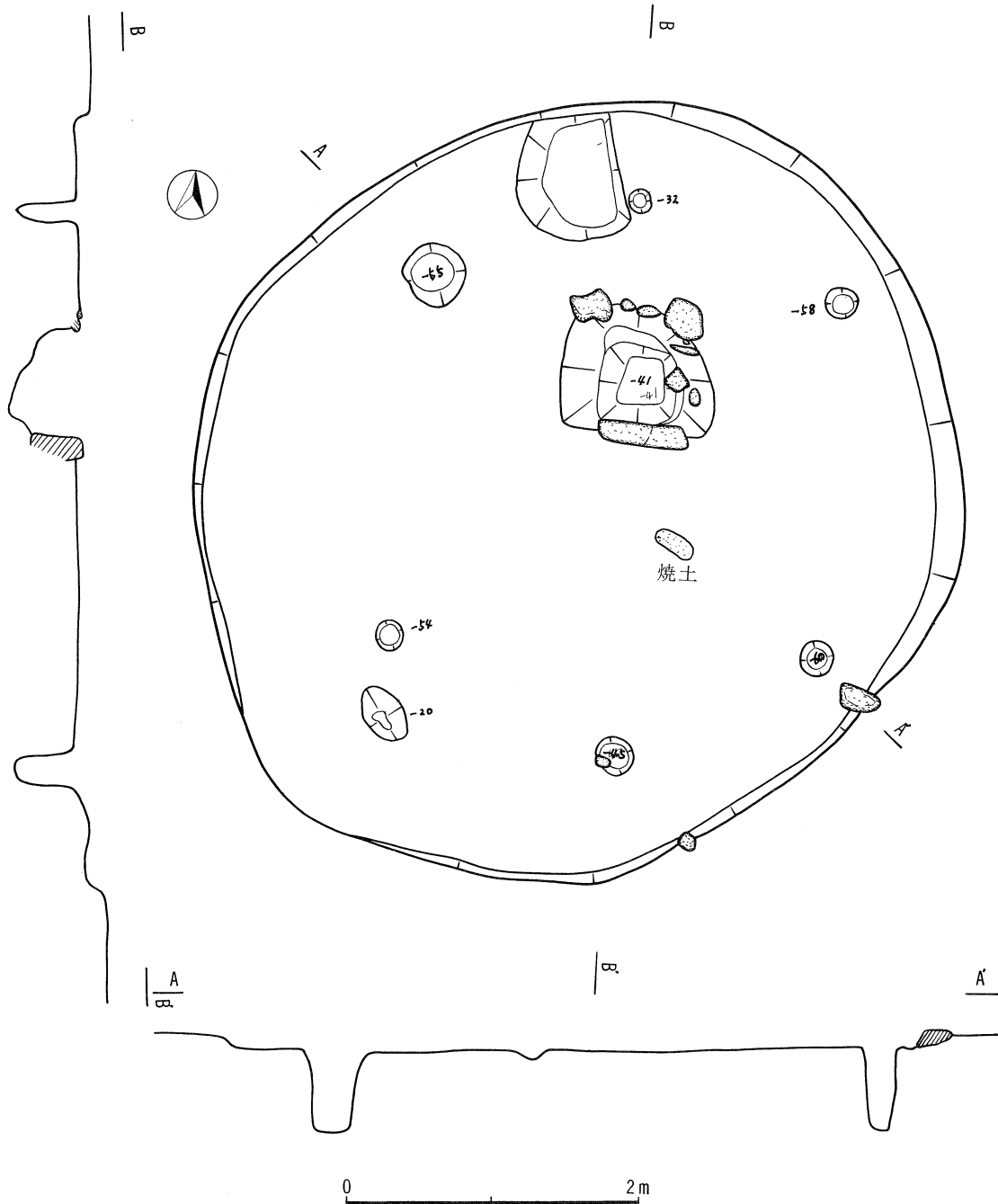
# 5 柳坪遺跡B地区 (第57図)

1) 縄文時代

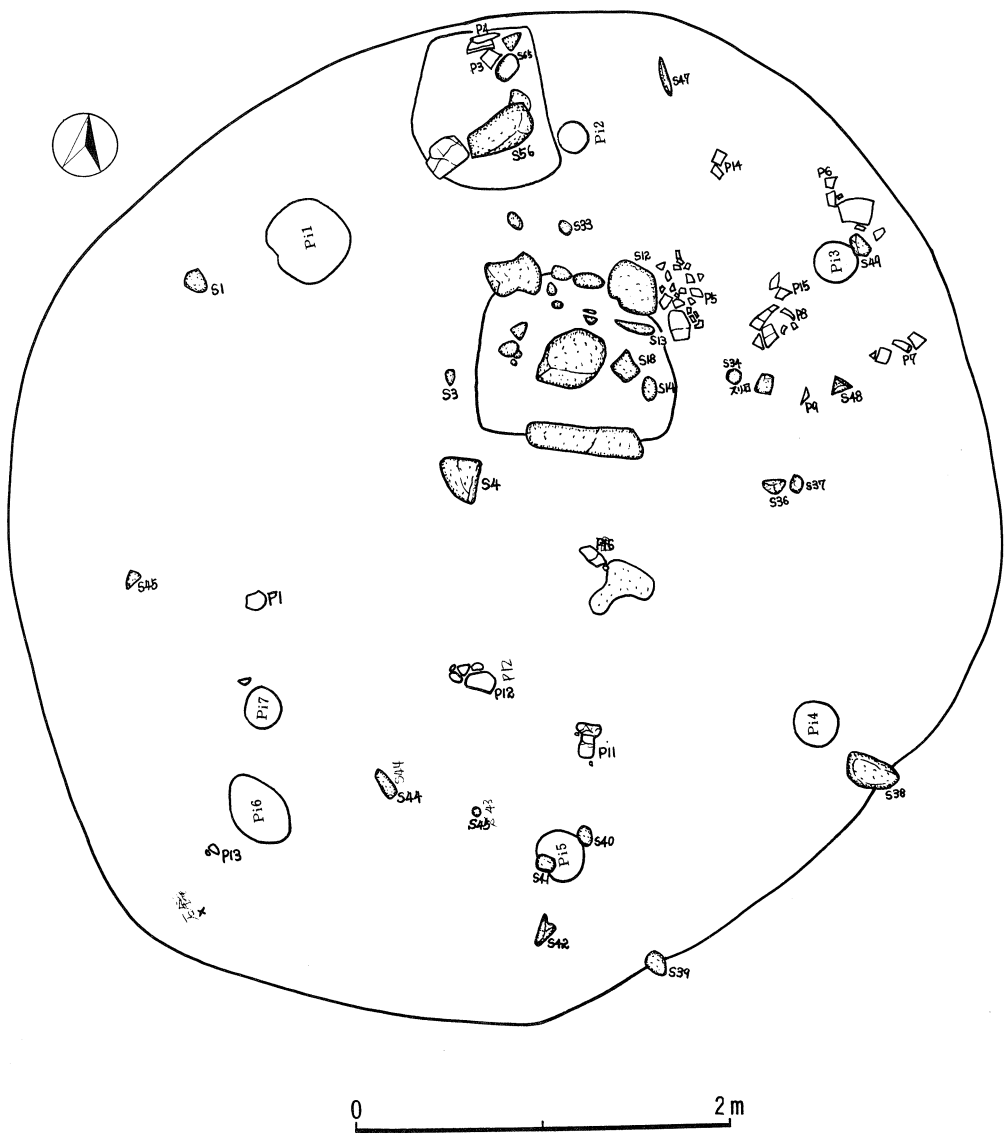
1号住居址 (第58、59図、図版35)

昭和48年8月2日～8月18日

○プラン 円形、東西5.24m、南北5.55m

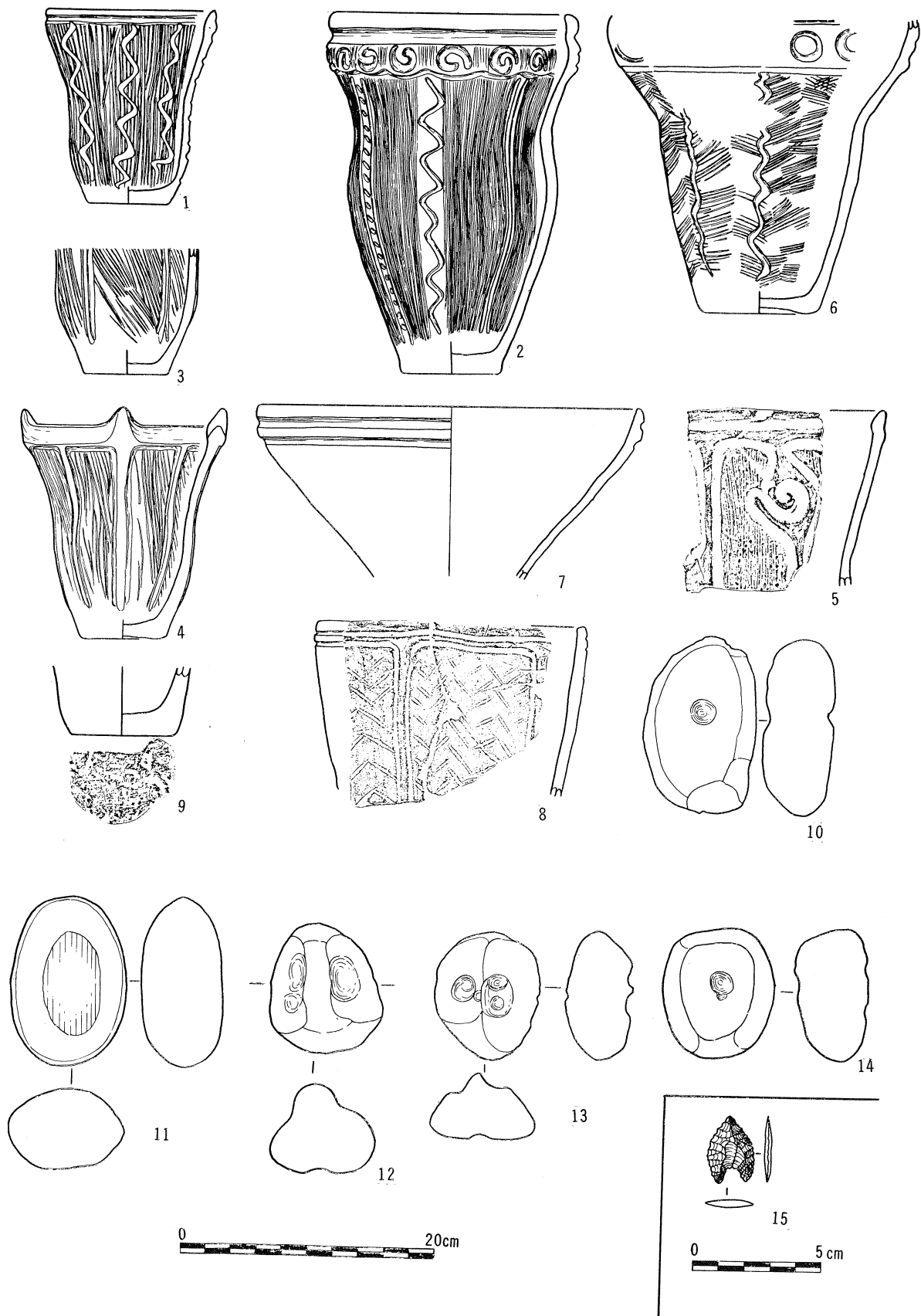


第58図柳坪B地区1号住居址平面図



第59図 柳坪B地区1号住居址遺物図

- 主 軸 N-4°-E (南辺炉石方向に直交する軸とした。)
- 柱 穴 総数7本、このうちpi 6は浅く、柱を立てた場合外側に突き出すように傾斜しており、柱穴とするのが困難ではないかと思う。
  - No.1、40×42cm、深さ54cm、
  - No.2、15×17cm、深さ33cm、
  - No.3、21×22cm、深さ57cm、
  - No.4、24×22cm、深さ59.5cm、



第60图 柳坪B地区1号住居址出土遗物



No.5、 $28 \times 26$  cm、深さ40.5cm、

No.6、 $28 \times 42$  cm、深さ22cm、

No.7、 $22 \times 19$  cm、深さ53cm、

No.2は支柱穴であろうか。主柱穴はNo.1、3、4、5、7の5本であろう。

○周溝 なし

○壁 南側は地形の傾斜のために壁は存在しないが、東北壁高20cm、西南壁5cmで高低差が相当見られる。

○床面 全体的にはほぼ平面的であるが、北から南にゆるやかに傾斜している。

○炉 住居中心北側に位置する方形石囲炉で、東西1m南北1.1mである。南辺に炉石が2、北側に2つの礫の間に小礫が並んでいる。東、西辺には炉石が見られないが掘り込みに段があり、かつて炉石が置かれていたことを示している。

○出土遺物 一括土器4、凹石4、スリ石1、石鏃1、

ほとんどが床面に近い層から出土しており、床面直上のももある。しかし、表土面と床面の間の覆土が厚くないので、このような状態で出土しているものと思われる。

○その他 石囲炉南側に地床炉がある。焼土は多くないが、床面が $30 \times 50$  cm位の範囲で焼けている。住居北側に小竪穴があり、径85cm $\times$ 73cm、深さ37cmで、焼土ブロックと礫3個が覆土中にある。住居に伴うものであろうか。

(野口)

出土遺物 (第60図、図版35)

土器はいずれも覆土中から出土したもので、床面よりやや浮いて横位に発見された。1～5は沈線、あるいは隆線により懸垂文を施し、その間を半割竹管、櫛状工具で器面を埋め尽くしている。2、6は口縁部に渦巻文、円形文を廻らしているものもある。8は覆土中に混入した中期終末期の「ハの字」文の土器片である。

3号住居址 (第61、62図、図版36)

昭和48年8月5日～8月21日

○プラン 円形(西側は農道で切られている)南北6m、東西5.7m

○主軸 N-9°-E

○柱穴 発見された柱穴は6本で、中の土はしまりがあり礫が入っているものが多い。深さは30cm～50cmで、東側1本を除いて他は30cm前後である。

○周溝 西側を除いて全体にめぐり、幅15～20cmで、深さは15cm程ある。

○壁 木の根による攪乱を多く受けているが、周溝があるためこの立ち上りを把えることができた。壁高は北側で20cm、南側で10cmを計る。

○床面 住居中央に木の根があり、又、床面をほうように根が広がっている状態は良好ではないが、全体としてしまりが良く、検出は容易であった。

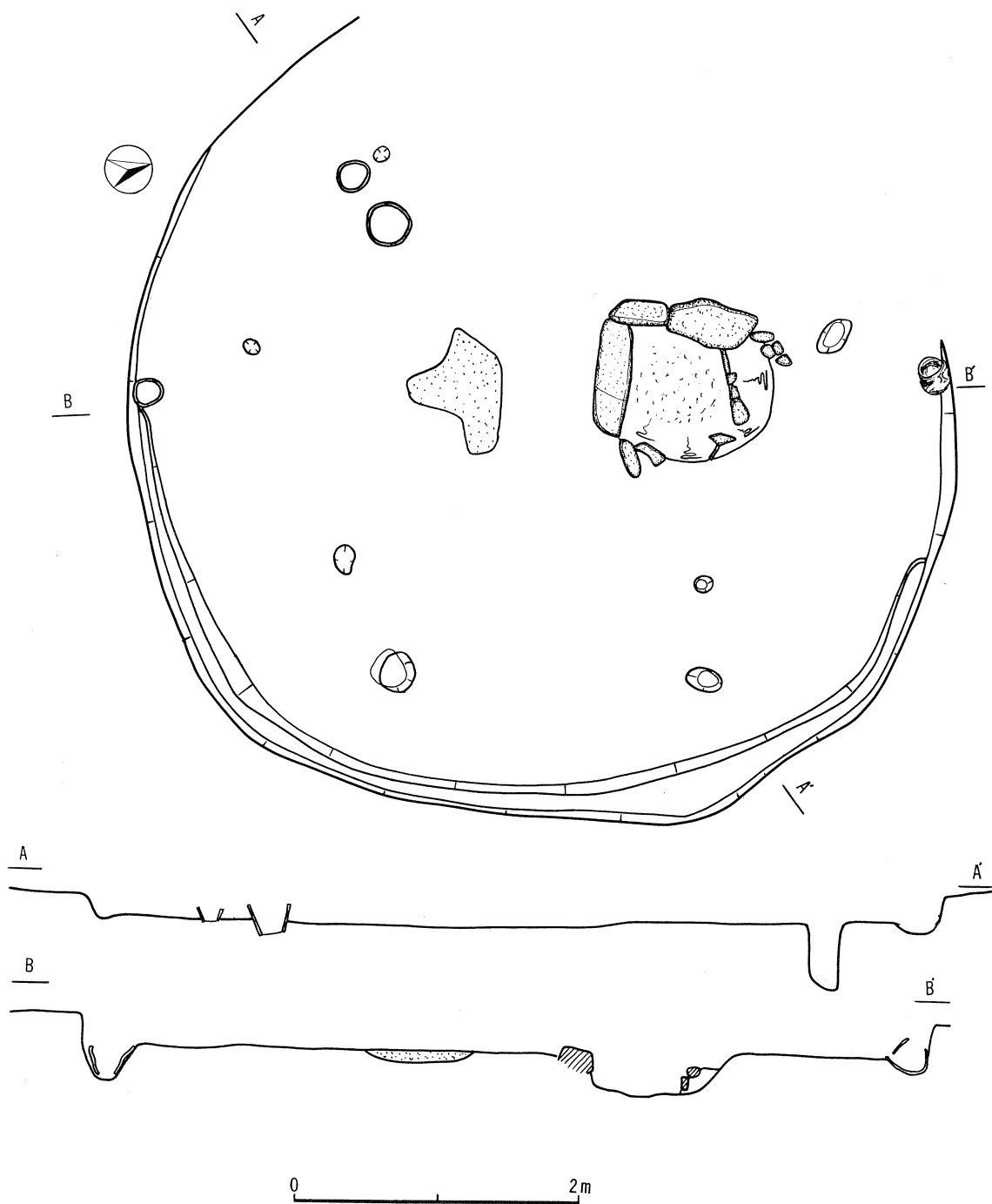
○炉 住居中央北側に方形石囲炉があり、南側と西の炉石がL字形に残っている。規模は1.3m $\times$ 1.2mで、焼土は少ない。また、石囲炉南側に地床炉があり、70cm $\times$ 60cmの範囲に広がっている。焼土のセクションは凹レンズ状になっており、床面上で焚火をしたようである。

○出土遺物 覆土内に多くの破片が散乱しているが、南側入口部に正位の埋甕があり、又、中央南西

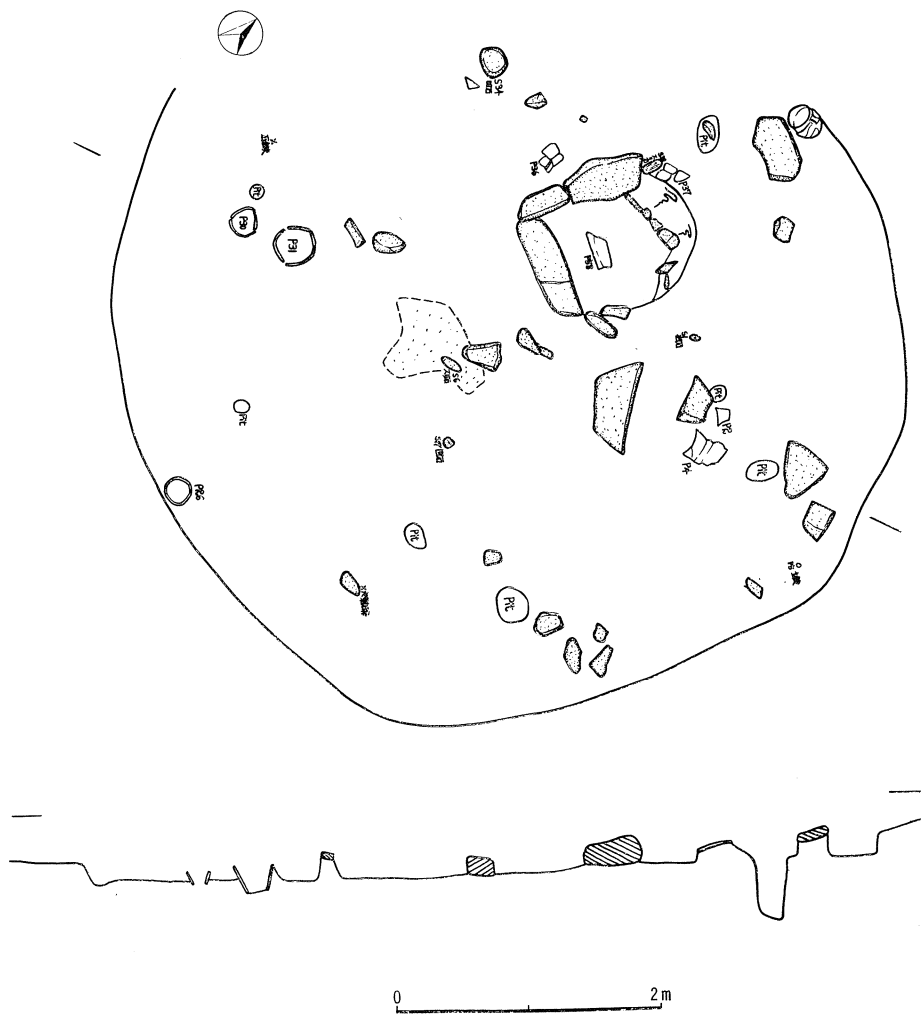
部に底部を欠く半埋嚢が2個並んで出土している。北側周溝内に壺形土器一括品が斜めの状態で出土している。

一括土器4、石鏃2、凹石、スリ石等が出土した。

○その他 この住居の特徴として半埋嚢をあぜることができる。底部を欠いている理由は判然とせず、



第61図 柳坪B地区3号住居址平面図



第62図 柳坪B地区3号住居址遺物図

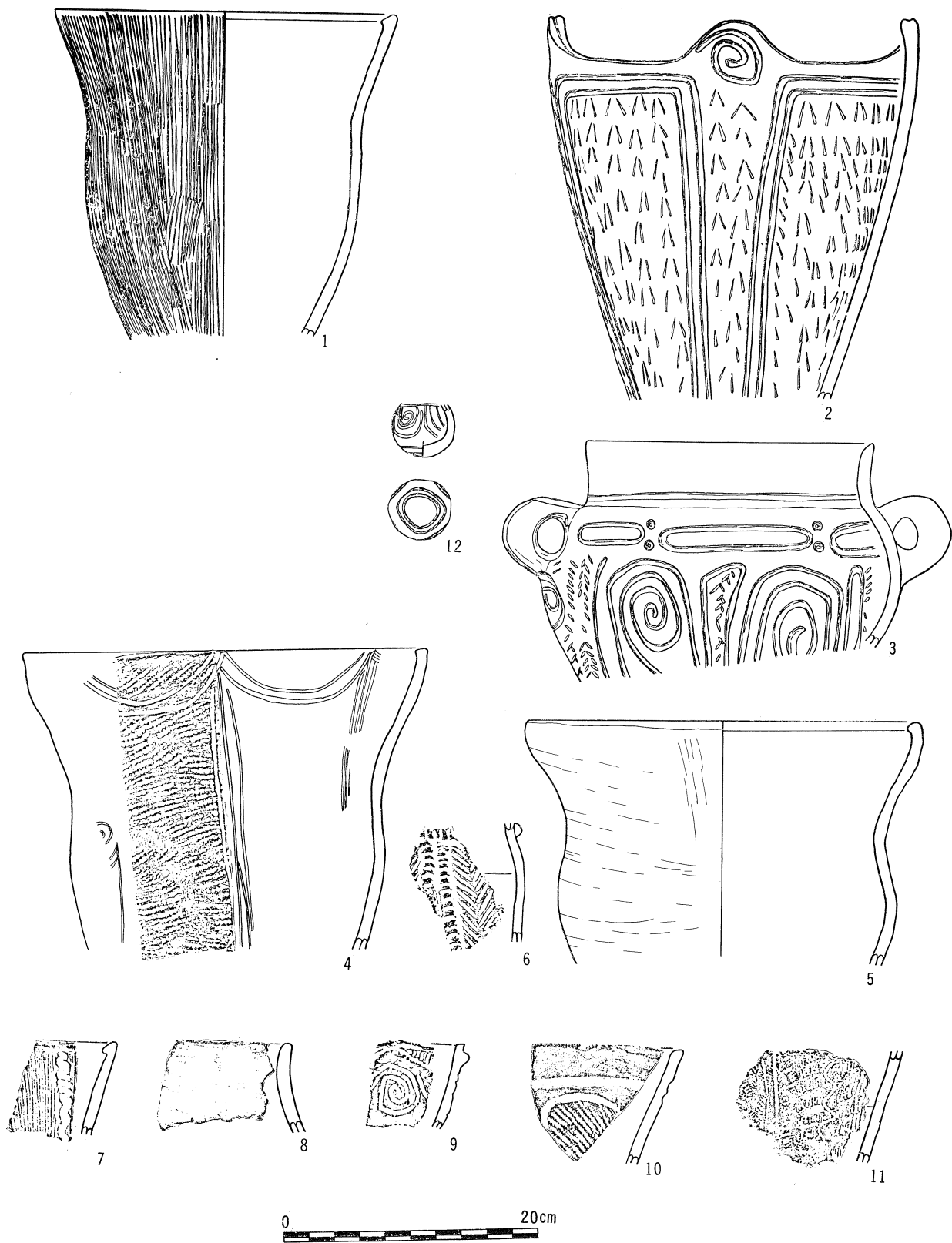
今後の資料増加をまたねばならない。

(齊藤)

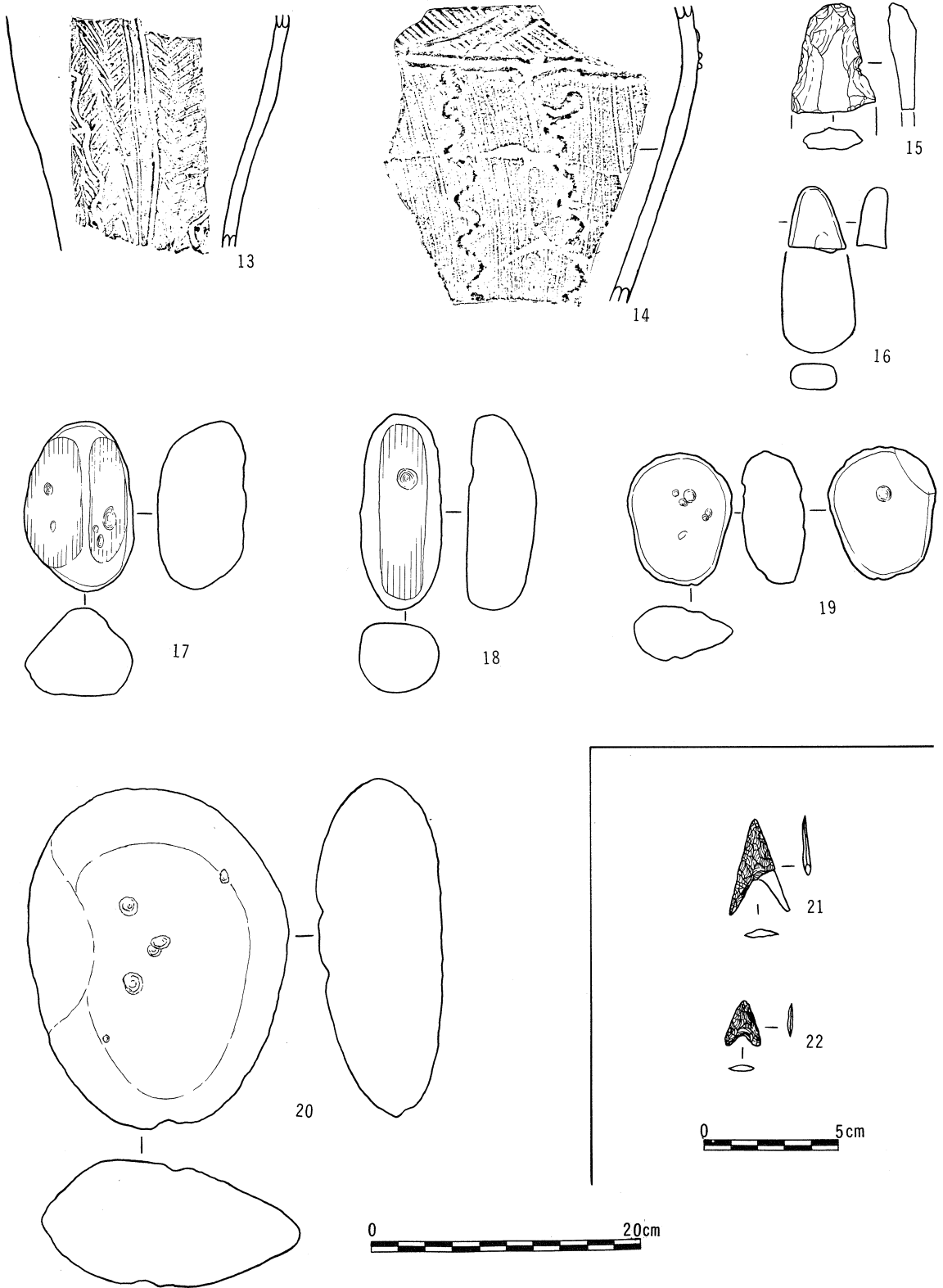
出土遺物

(第63、64図、図版37)

1は住居南端の正位埋甕で底部を欠損している。器面は櫛状工具での条線が縦に施され、その他の文様は一切施されない。内面口縁はやや内側に突き出している。この特徴は4、5、7にも若干見られる特徴である。2は図示していないが、もう一つの土器と2個並んで床面に直立して発見された土器で、底部を欠く置甕である。4個の把手に渦巻文を配し、沈線で方形に区画した内外に「ハの字」文を施す。3は左右に把手の付く直立口縁の壺形土器で、胴部上半には沈線で長円形文を配しその間に刺突文が2個上下に穿れている。4は縄文地方に沈線で口縁に半円文、胴部に懸垂文がある。又、6は隆線の上を半割竹管押し連続文が施される中期末葉前半末の破片で流れ込みのものであろう。10

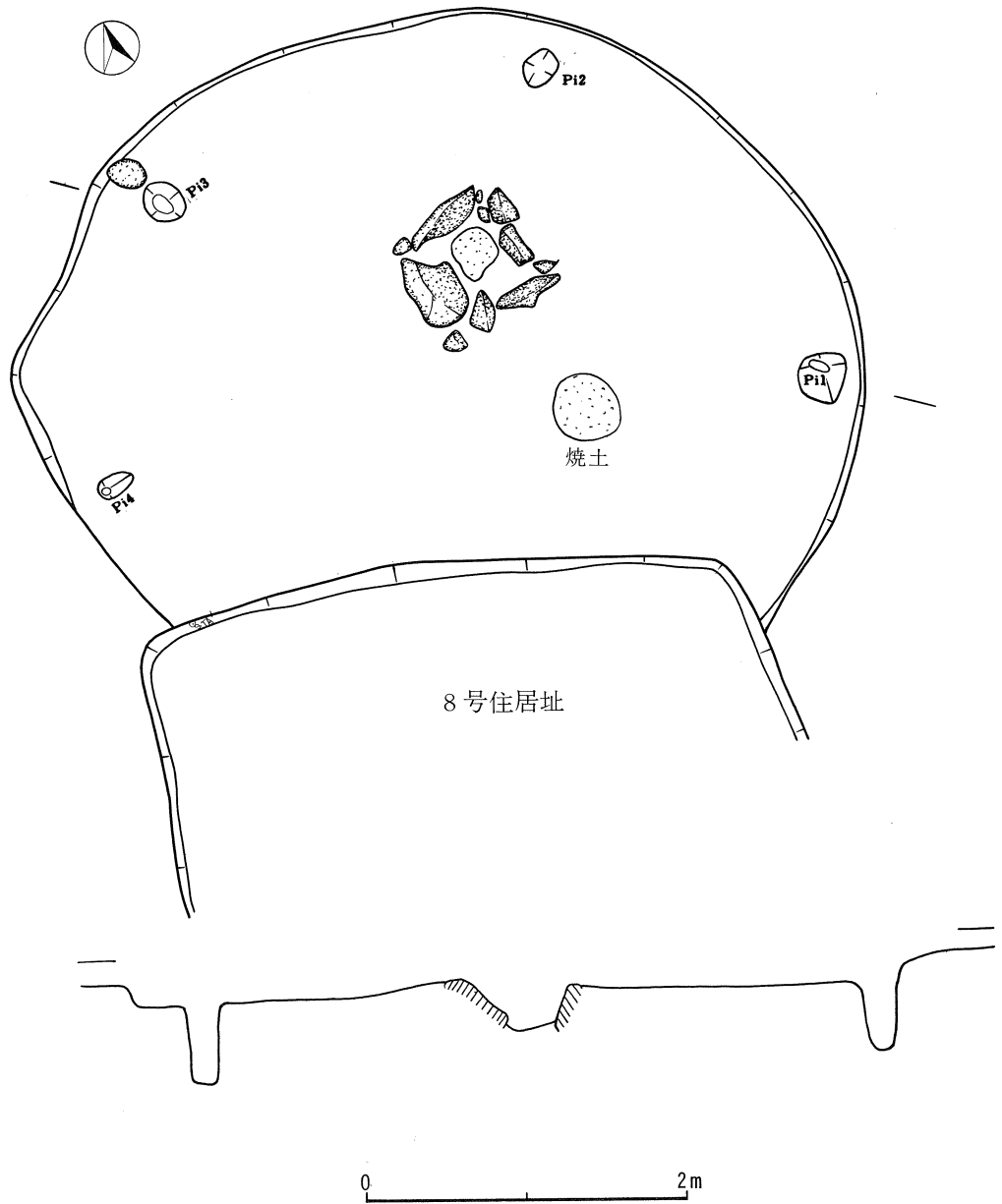


第63图 柳坪B地区3号住居址出土遗物(1)



第64图 柳坪B地区3号住居址出土遗物(2)

は関東地方加曾利 E III 式に見られる深鉢形土器波状口縁である。12 は一部欠損しているが、沈線で渦巻文、同心円文の施された土鈴と思われ、覆土の上面から出土した。14 は6 とほぼ同時期に位置付けられる破片で、沈線の条線の上に粘土紐の横帯及び懸垂文を施す。石器も覆土中から出土したもので凹石、スリ石は輝石安山岩製で、打製石斧 15 は玄武岩製。石鏃 21、22 は黒曜石製で、21 は脚が1本欠けている。



第65図 柳坪 B 地区 4 号住居址平面図

#### 4号住居址

(第65図、図版38)

昭和48年8月20日～9月8日

- プラン 円形、東西5.33m南北3.46m(8号住居まで)
- 主軸 N-4°-E(炉石を使用)
- 柱穴 総数4本であるが、このうち西側の2本について、断面が漏斗状になっており、柱穴としては疑わしい。No.1、40×38cm、深さ33.5cm、No.2、34×24cm、深さ30cm、No.3、33×31cm、深さ37.5cm、No.4、30×19cm、深さ32.5cmである。
- 壁 南側は8号住居に切られて不明で、他は傾斜のある壁である。  
東壁高、8cm、西壁高10cmで、東側、西側とも南側にゆくにしがって柔らかくなる。
- 床面 良好な部分は炉の周辺及び炉の南だけで、他は軟弱である。
- 炉 方形石囲炉で完全に残っているが、焼成を受けて割れている所もある。規模は80cm×80cmで、中央底面に径20cmの焼土がある。また、炉南側に30cm×40cmの焼土があり、1、3住居と同様の地床炉か。
- 出土遺物 (図版38) 覆土中より若干の縄文中期末葉土器片が出土している。
- その他 南側を8号住居に切られているため、埋襲等は不明である。

(大森)

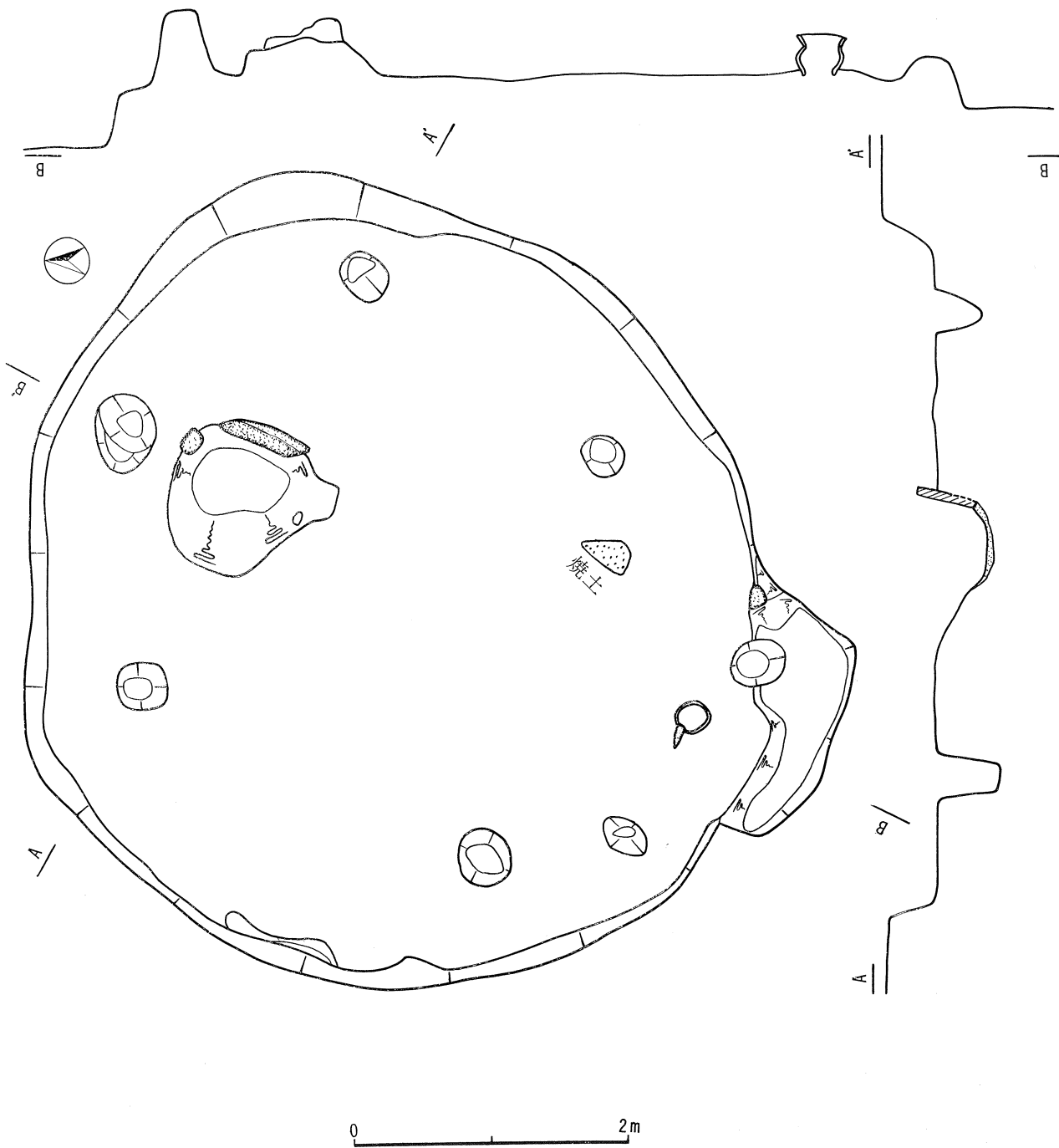
#### 7号住居址

(第66、67図、図版39)

昭和48年8月13日～9月8日

- プラン 円形、東西6.08m、南北5.4m、
- 主軸 N-23°-E
- 柱穴 柱穴は7本あるが、そのうち主柱穴は5本で残り2本は入口部の支柱穴と考える。No.1、40×40cm、深さ48.5cm、No.2、58×48cm、深さ58.3cm、No.3、37×31cm、深さ44cm、No.4、34×30cm、深さ46.2cm、No.5、25×38cm、深さ26cm、No.6、25×38cm、深さ53cm、No.7、40×42cm、深さ53cm、
- 周溝 なし
- 壁 南壁一部を除いて全体的にしまりがあり、垂直に近い良好な状態である。壁高は北壁40cm、東壁35cm、南壁30cm、西壁35cmで、南壁部は方形の張出し部があり、ロームも柔らかい。入口部の張出し遺構であるか、又は攪乱であるか明確ではないが遺物はない。
- 床面 全体的に黄褐色ロームであるが、埋襲付近ではロームブロックを含んでいる。床面の中央部及び、炉の周辺はよく踏み固められているが、壁寄りの周辺部は軟弱である。
- 炉 東辺に板状の炉石を残し、他は抜き取られている。規模は115cm×110cmで、西辺、北辺の掘り込みが段になっており、石が置かれていたことを示す。又、住居中央東南に焼土があり、他住居と同様地床炉であろうか。
- 出土遺物 遺物のうち埋襲を除いてほとんどが覆土中にある。一括土器は7個、スリ石4、凹石2、石斧3、石鎌1、が出土している。住居入口部と推定される南壁近くに埋襲が逆位で発見され、底部は切り取られている。
- その他 入口部張出しについて、住居に伴うものか結論を出すことはできなかった。

(野口)

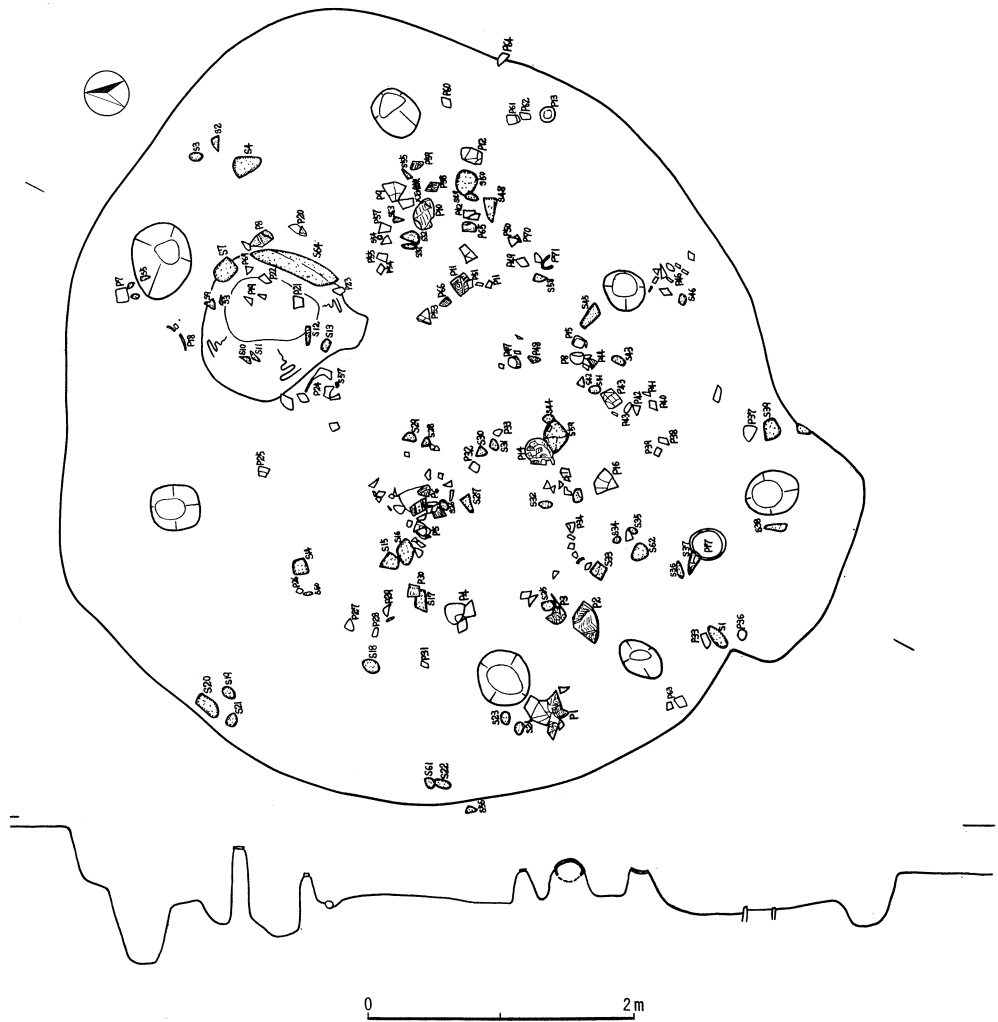


第66図 柳坪B地区7号住居址平面図

出土遺物 (第68、69図、図版40)

1は住居南の逆位埋甕で、破損部は磨かれている。胴部に5個の渦卷文を配し、懸垂文の間を半割竹管平行沈線を条線状に施文している。2、5、8は条線の地文に沈線の懸垂文があるもので、9は地文が杉綾文、7は地文縄文で沈線懸垂文が施される。4、6、10、11は隆線で懸垂文、渦卷文が施され、地文は条線で埋められる。この3は特異な片手把手付壺形土器で、把手部には穴があいて





第67図 柳坪B地区7号住居址遺物図

いる。打製石斧12、14は硬砂岩製、13は安山岩製で、15、16のスリ石、凹石は輝石安山岩製である。

**10号住居址** (第70、71、図版41)

昭和48年8月23日～9月14日

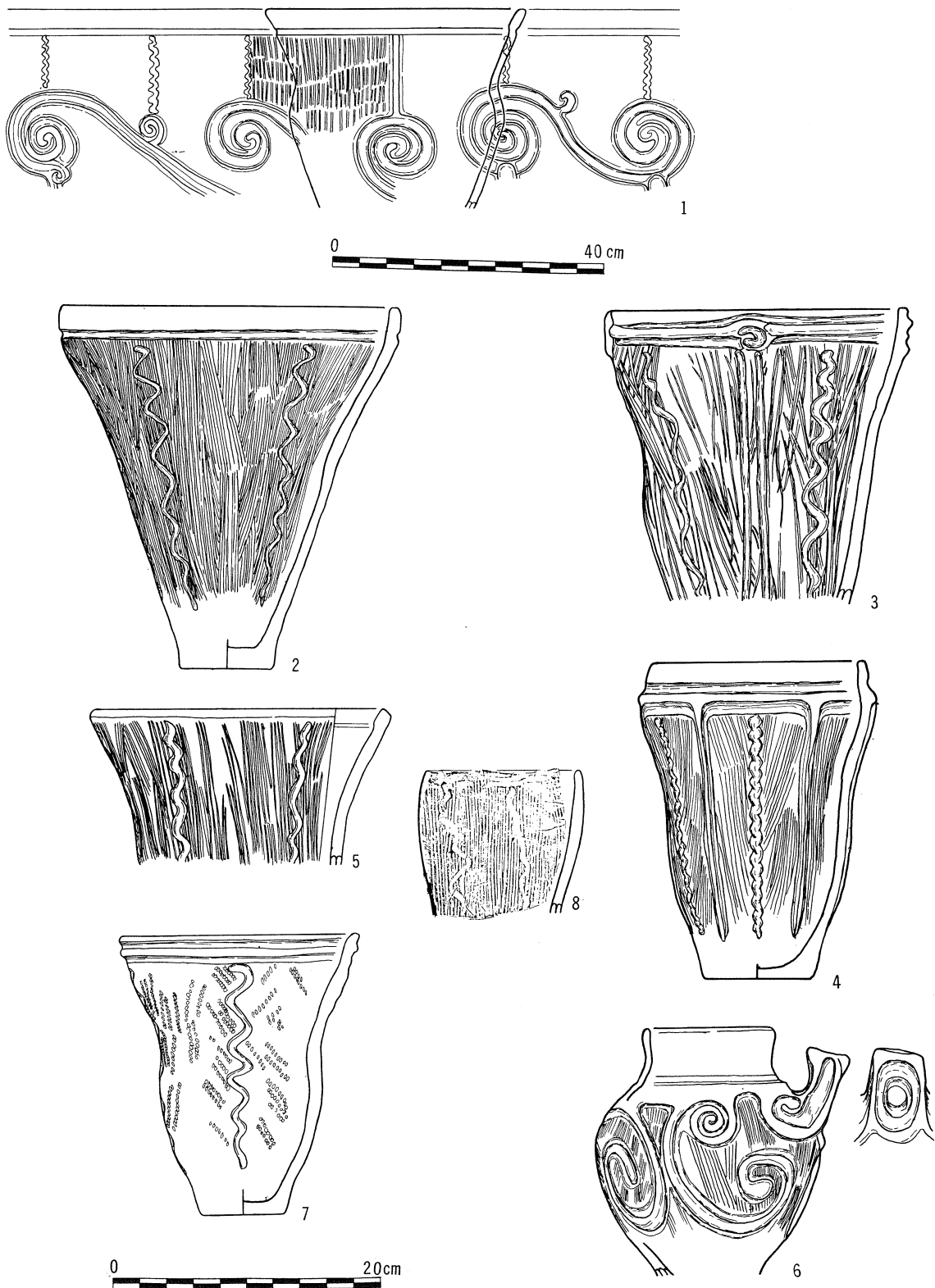
○プラン 円形(胴張り隅丸五角形)東西5.3m、南北5.4m

○主 軸 N-12°-W

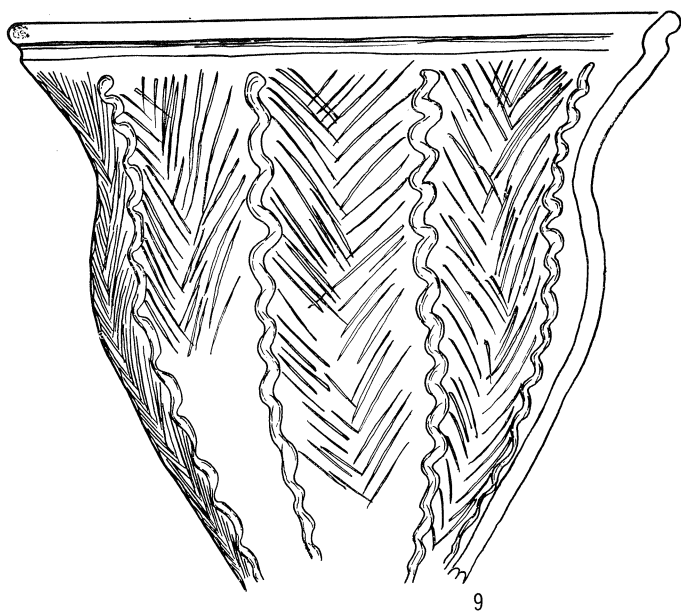
○柱 穴 ピット総数は7本であるが、支柱穴と思われるものはpit1～6までの5本で、他は支柱穴と考えられる。

No.1、 50×41cm、 深さ50cm、

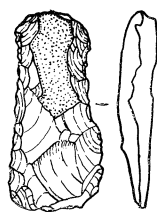
No.2、 40×30cm、 深さ50cm、



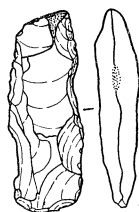
第68图 柳坪B地区7号住居址出土遗物(1)



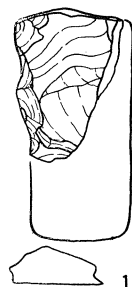
9



12



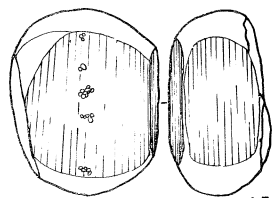
13



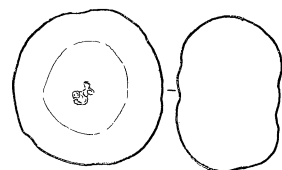
14



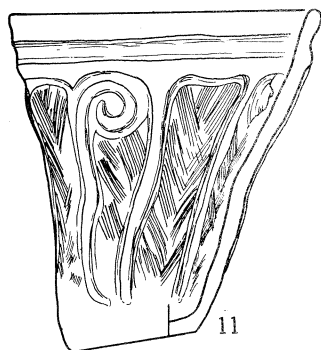
10



15



16



11



第69图 柳坪B地区7号住居址出土遗物(2)

No.3、 45×30cm、 深さ50cm、

No.4、 33×32cm、 深さ50cm、

No.5、 80×25cm、 深さ55cm、

No.6、 20×21cm、 深さ55cm、

No.7、 45×50cm、 深さ31cm、

No.5について、深いピットと浅いピットが重複している。

- 周溝 南壁に立てられた板石の所と炉の北側を除いて、全体に周溝がある。最大幅は南東部で24cm、最小幅は東部で5cmであり、平均15cm位である。最深12～14cm、浅い所で4cm、平均7～9cmを計る。
- 壁 全体的にかたいローム面に切り込んで造られているため良好で垂直である。壁高55cm～25cm、平均すると35～40cmある。
- 床面 全面にわたり砂礫、赤色粒子混入のロームでよく踏み固められており、北東から南東にかけてゆるやかに傾斜している。
- 炉 住居中央北寄りに方形の掘り込みがある。大きさは110×115cmで炉石は無いが、炉石根込石の様な礫が各辺に1～2個残っており、その部分がテラス状になっていることから方形石囲炉であったことが推察される。又、炉南側に南北120cm、東西70cmの焼土があり、地床炉と思われる。
- 出土遺物 完形一括土器10、他に一括土器が覆土に14、炉内に3個があり、覆土中のものと床面直上に逆位に置かれているものの住居内遺物の在り方が重要視される。石皿2、石匙2、打石斧7、凹石1、玉石1がある。又、鉄片が1個でているが、攪乱による混入であろう。
- その他 この住居の遺物のあり方、及び南壁の板石の役割について良好な資料と言える。

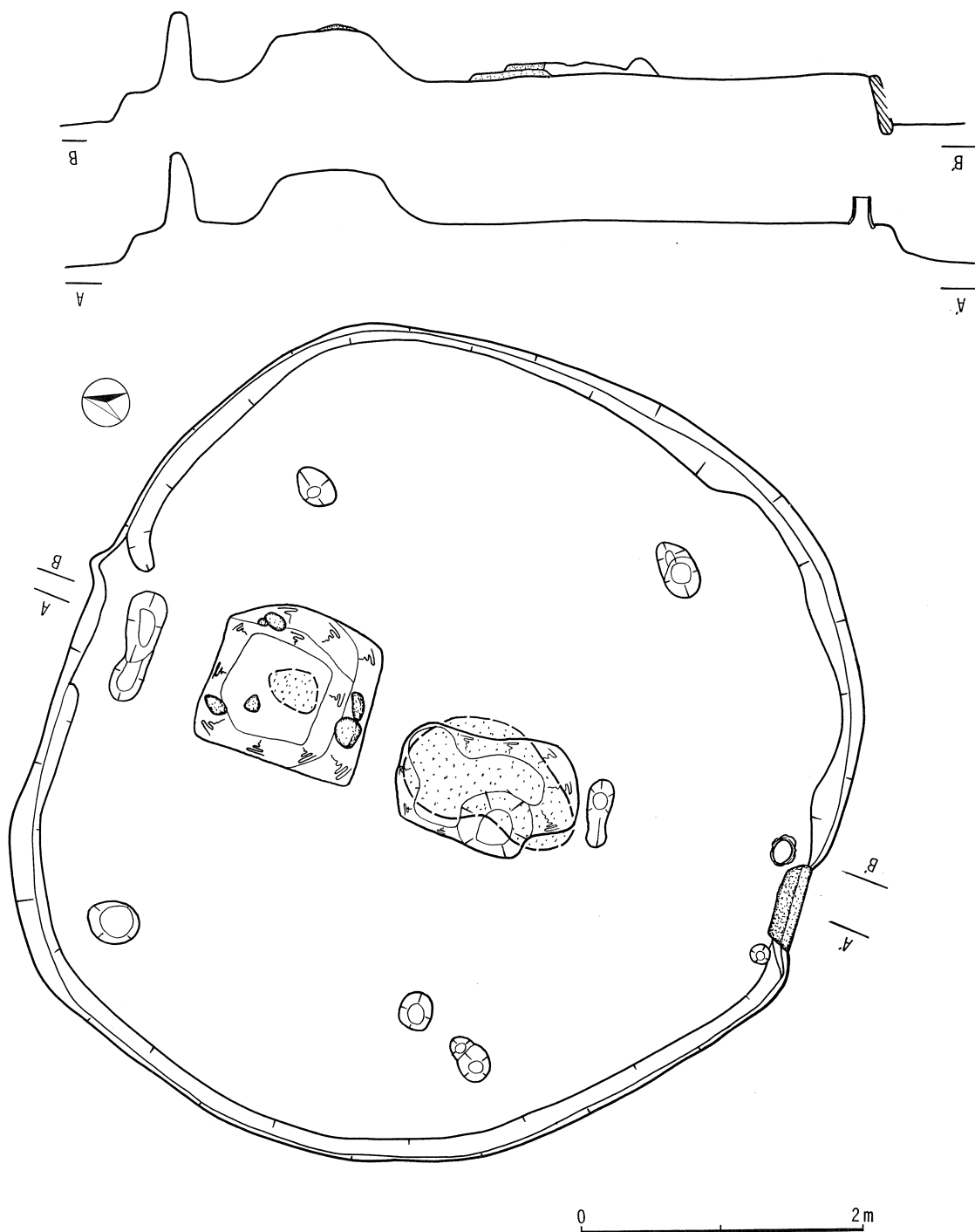
(野中)

#### 出土遺物

(第72、73、74、図版42～44)

1は住居南端の埋甕で、正位で埋められていたが底部を欠損する。口縁部文様帯には10個の小突起があり、それぞれの間の下に窓状の円形文を配し、胴部には沈線の横帯と半円状文が重視される。2は逆位で床直に出土し、3は土圧で倒れたように斜めになっており、縦に半裁した状態で出土した。伏せられていたものが、堆積土圧により住居内側に傾斜しながら半分に割れたものと考えられ、口縁を一部欠くが床面に密着していた。2、3は地文が楡目状沈線と縄文の差こそあれ、沈線のミミズ状懸垂文が施される点では同一時期に属するものとして良いであろう。4は北壁上から住居内に倒れる状態で発見された土器で、これも倒立している。1～3に比較し精巧な作りの土器で、把手を4個もち、口縁部には渦巻状連続文が配され、把手とその中間から沈線のH形懸垂文が施される。H形懸垂文の間は斜めに条線が施され、その上にミミズ状懸垂文が描かれている。底部を欠損するが、本来存在したものが、自然作用等によって落ちてしまったのかもしれない。やや粗形土器が床面直上に、精製土器が壁上スペースにそれぞれ逆位に置かれる姿は、その安定度から言って、移動期の配慮であろうか。

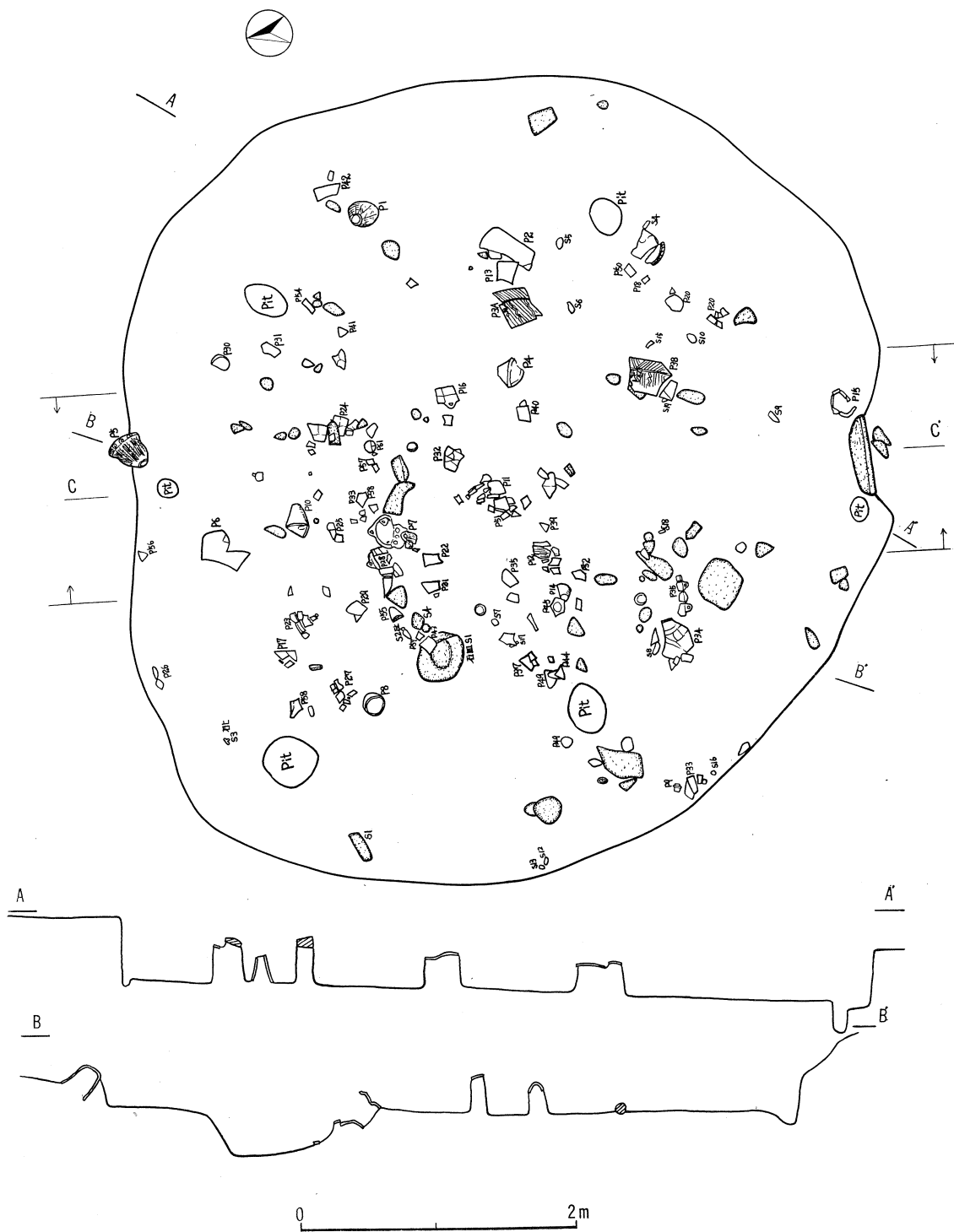
覆土中の土器は地文で沈線系、縄文系、無文系の3類に分類することができるが、沈線系土器群の中でも7、9、10、19、20、21、23、24の半円状区画を口縁にもつものと、連続渦巻文や、窓状同心円文を口縁に施す1、4、5、11、22、25があり、又、同じ沈線文系とは言って



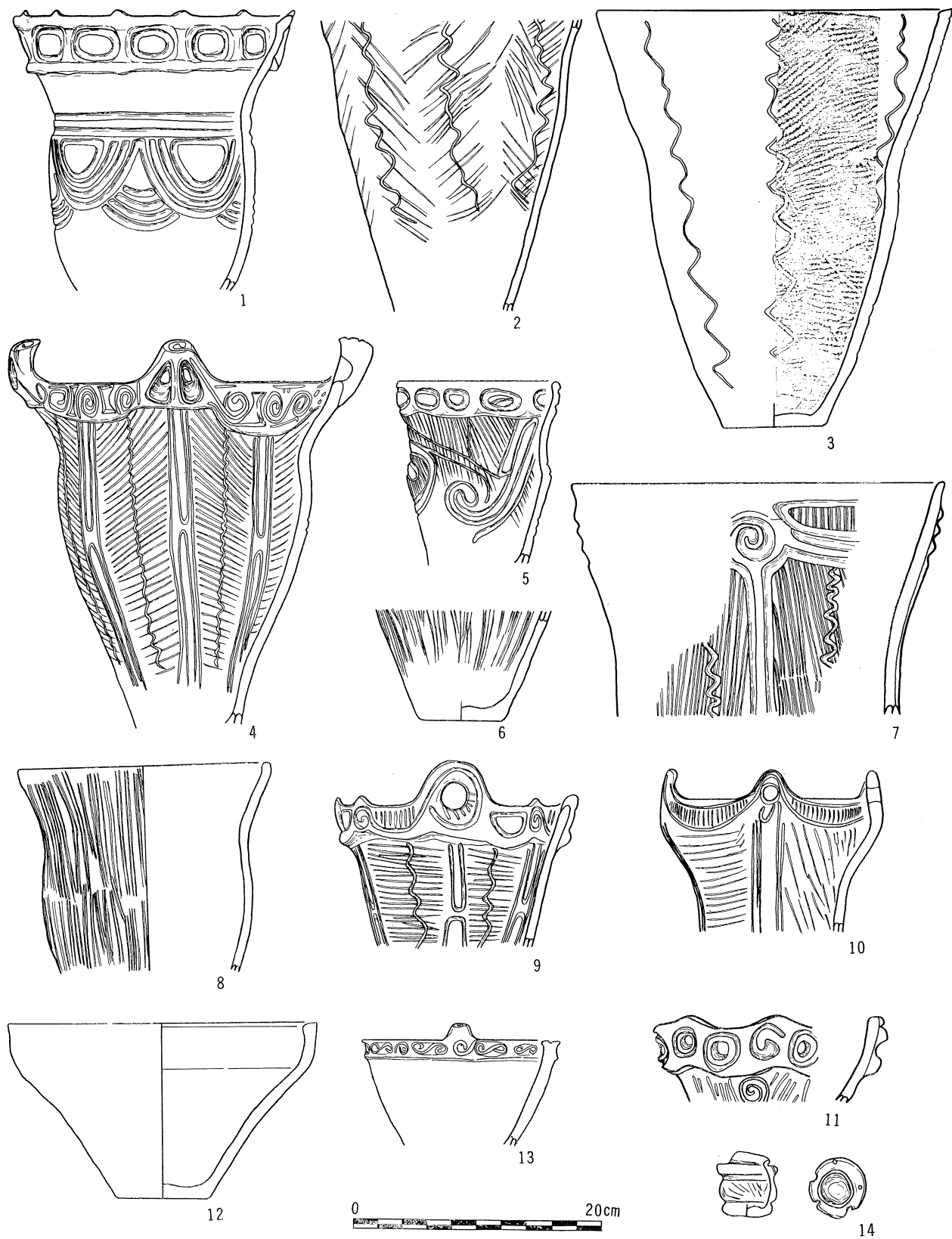
第70図 柳坪 B地区10号住居址平面図

も15～18のように、他のいずれよりも古く位置付けられている一括土器も存在する。12、13は浅鉢で、12は無文、13は口縁部に文様帯と把手が施される。27、28は50のような胴部算盤玉形土器の口縁部と推定される無文の破片である。なお14は住居西壁覆土中から出土した小型有孔鏝付土器で黒褐色を呈する。又、33は把手で内部が空洞になっており、正面、左右及び上部に窓があげられている。浅鉢に付けられるものと推定される。39は硬砂岩製縦形石匙で、チャート製横

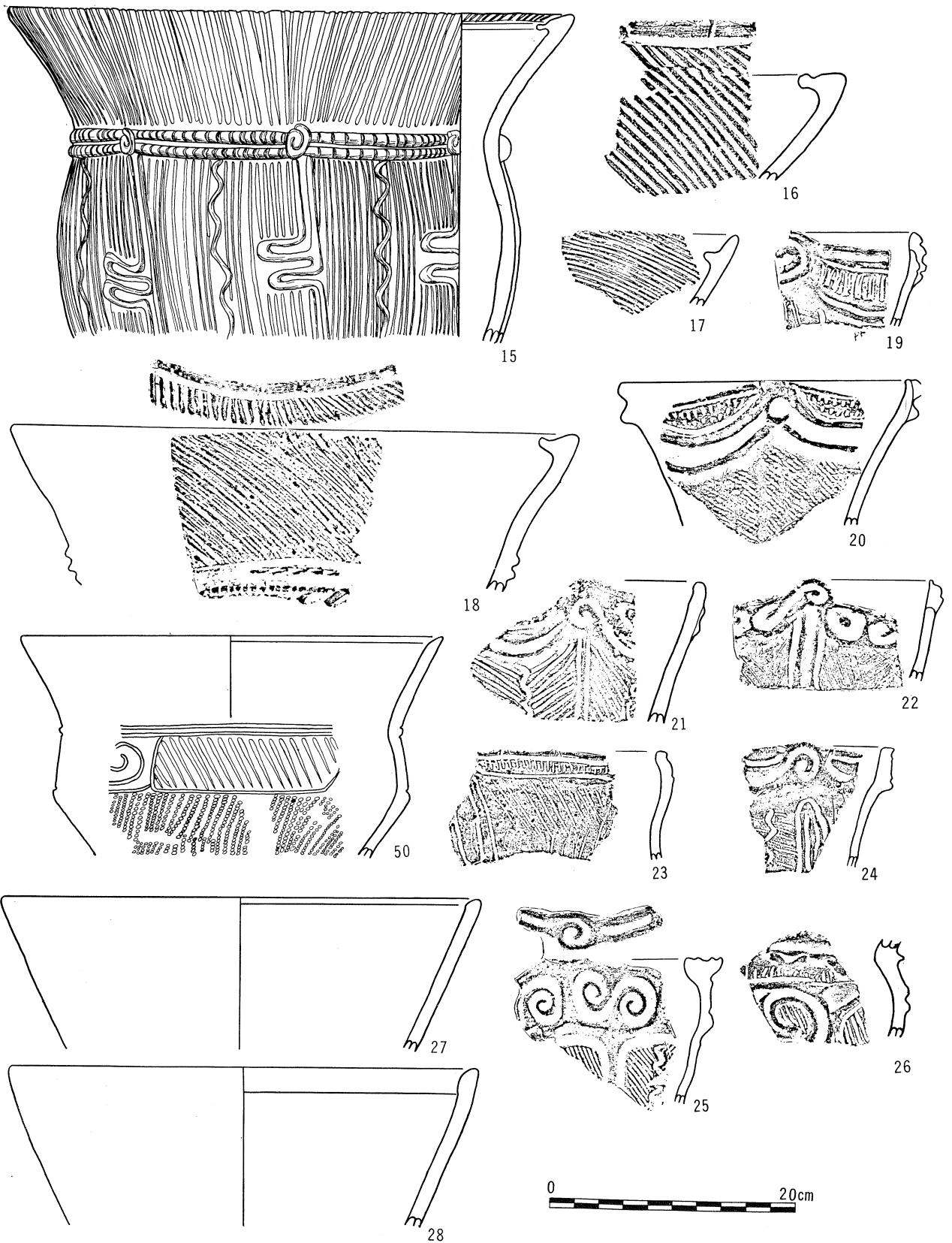
形石匙も出土しているが未整理である。打製石斧 34～37 は欠損品で破岩製である。凹石、スリ石、石皿は輝石安山岩製で、42 の石皿は床面直上出土である。



第71図 柳坪 B地区10号住居址遺物図



第72图 柳坪B地区10号住居址出土遗物(1)



第73图 柳坪B地区10号住居址出土遗物(2)





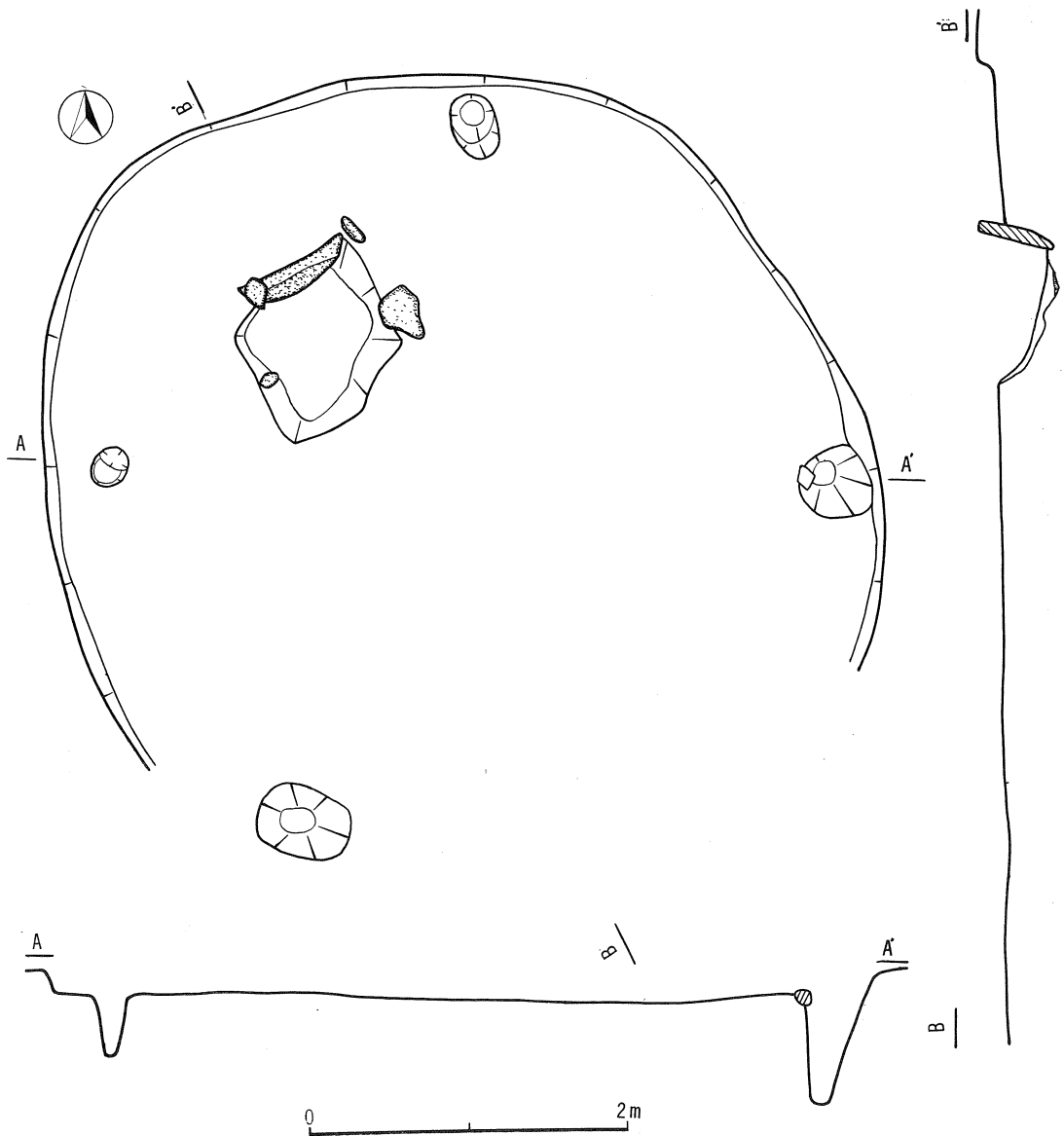
第74图 柳坪B地区10号住居址出土遗物(3)

11号住居址

(第75図、図版45)

昭和48年8月31日～9月8日

- プラン 円形(推定)南北5.5m、東西5.22m
- 主 軸 N-30°-W(北側炉石に直交する軸)
- 柱 穴 総数4本、東No.1、50×50cm、深さ65cm、北東No.2、4.5×30cm、深さ、50cm、西No.3、25×25cm、深さ38cm、南西No.4、60×45cm、深さ55cm、No.3だけがやや径も小さく、浅い。
- 周 溝 なし
- 壁 全般的に柔らかく、立ち上がりもほとんどの部分ではっきりしていない。壁の状態は東側



第75図 柳坪B地区11号住居址平面図

部分で約10cmの壁高で、45～50°の傾斜をもつ。北側では約10～15cmで傾斜は東と同様である。西側の壁高は他の部分と同様であるが、約60度位の傾斜をもつ。南側についてはローム上面と同一レベルまで床が来ており壁は無い。

- 床 面 全体的に軟弱で、炉の周囲南側一部で把えることができたが、他は攪乱等により凹凸もあり、床面としては良好でない。
- 炉 住居中心より北西に寄っている方形石囲炉であったと思われるが、北側の一枚の板状炉石が残されているだけであった。規模は110×95cmである。
- 出土遺物 比較的床面に近く、一括あるいは図上復元できるもの7、打製石斧1、磨製石斧2、石匙1、凹凸4、が出土している。
- その他 北東部住居内にロームが張り出しており、この性格が不明である。あるいは入口部か。

(古峰)

出土遺物 (第76図、図版45)

出土土器1～3は住居北東側壁寄に横形で発見されたもので、1は半分、2は底部を欠いている。1は4個の大型把手と連続渦巻文、窓状渦巻文を口縁部文様帯とし、胴部には8個のH形懸垂文の祖形となる隆線を垂らし、ミズズ状況線の懸垂文、杉綾文を施す。胴部文様は井戸尻編年では曾利Ⅱ式とされている。2は口縁部に小突起を4個付ける胴部が直線的な深鉢形土器で、地文は荒い縄文が施



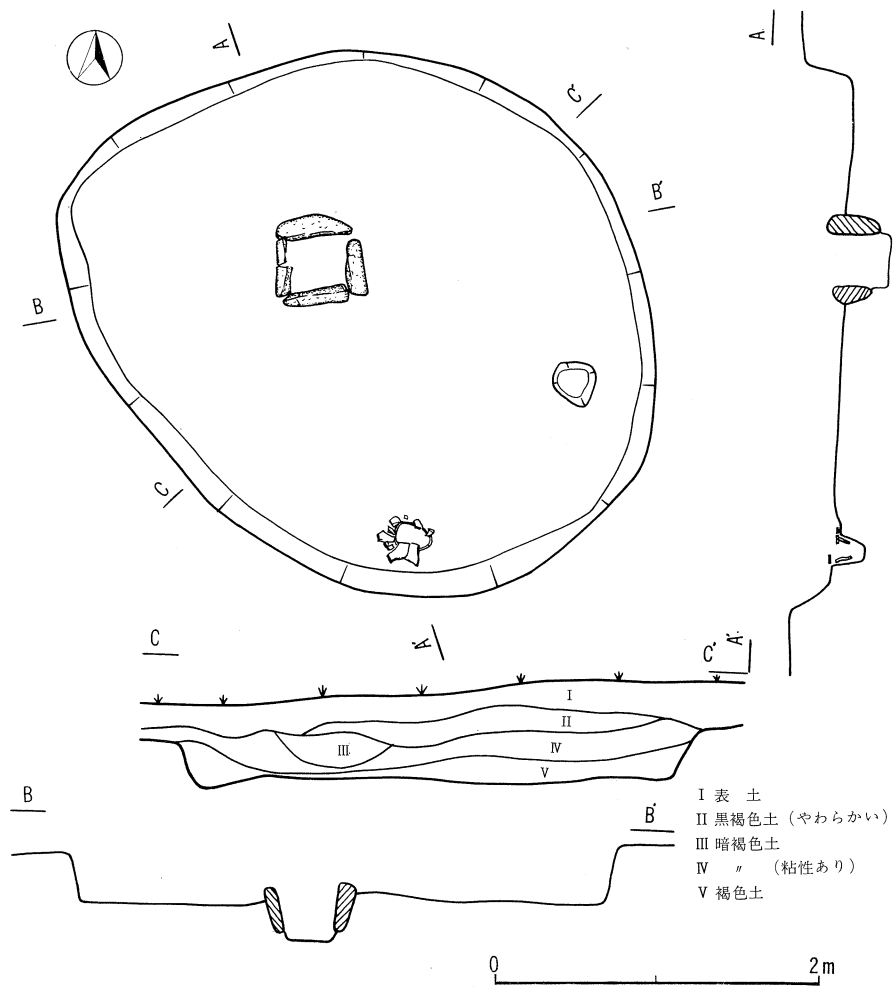
第76図 柳坪B地区11号住居址出土遺物

される。3は胴部を沈線の懸垂文と条線で飾り、口縁部は粘土貼付による半円状区画を行ない、中に円形刺突文が上下2列に施文される小形の深鉢形土器である。7、8は住居南西隅の壁直下より2本並んで発見された緑泥片岩製磨製石斧で、完形品である。土器はやや問題があるとしても、この石斧2本は住居に伴う姿と思われる。

**12号住居址** (第77図、図版46)

昭和48年8月29日～8月31日

- プラン 楕円形(卵形)東西3.7m、南北3.4m、最長3.9m、最短3.2m
- 主 軸 N-4°-E
- 柱 穴 ピット1、南西に深さ20cmのピットがあるが柱穴とは思われない。
- 周 溝 なし



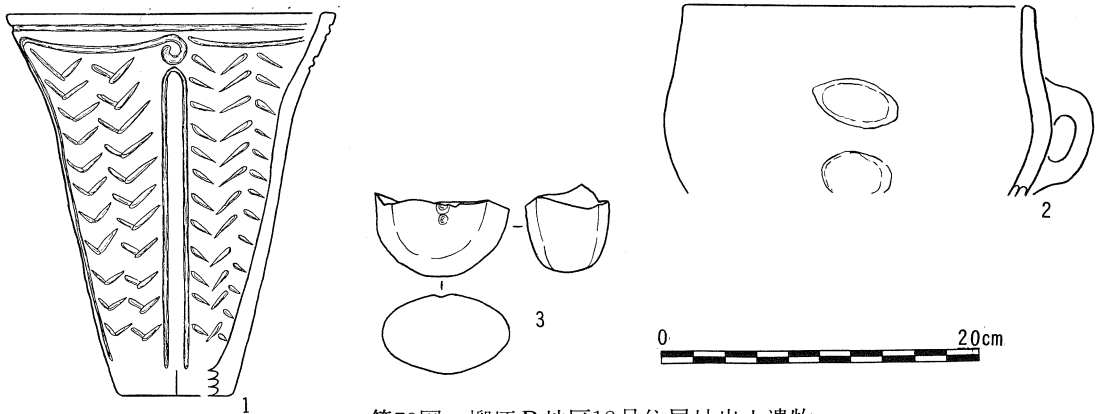
第77図 柳坪 B地区12号住居址平面図

- 壁 全体に軟弱で、壁寄り三角堆土が黄褐色覆土のため、壁が把えにくかった。
- 炉 住居北寄に偏する方形石囲炉で完存する。辺50cmで炉石上面から底面までの深さ約75cmである。
- 出土遺物 遺物は少なく一括土器埋甕1、炉内に1、の他は小破片である。凹石1、
- その他 埋甕の位置は炉に対してほぼ南であり、これを入口部として良いであろう。

(河合)

出土遺物 (第78図、図版46)

覆土中に若干の土器片が出土しているが、復元可能なものは1の埋甕だけで、底部を欠損している。文様は沈線区画に「ハの字」文が施され、胎土は軟弱で焼成も良くない黄褐色の土器である。2は無文の大破片で胴部にアーチ状把手が貼り付けられていた痕がある。



第78図 柳坪B地区12号住居址出土遺物

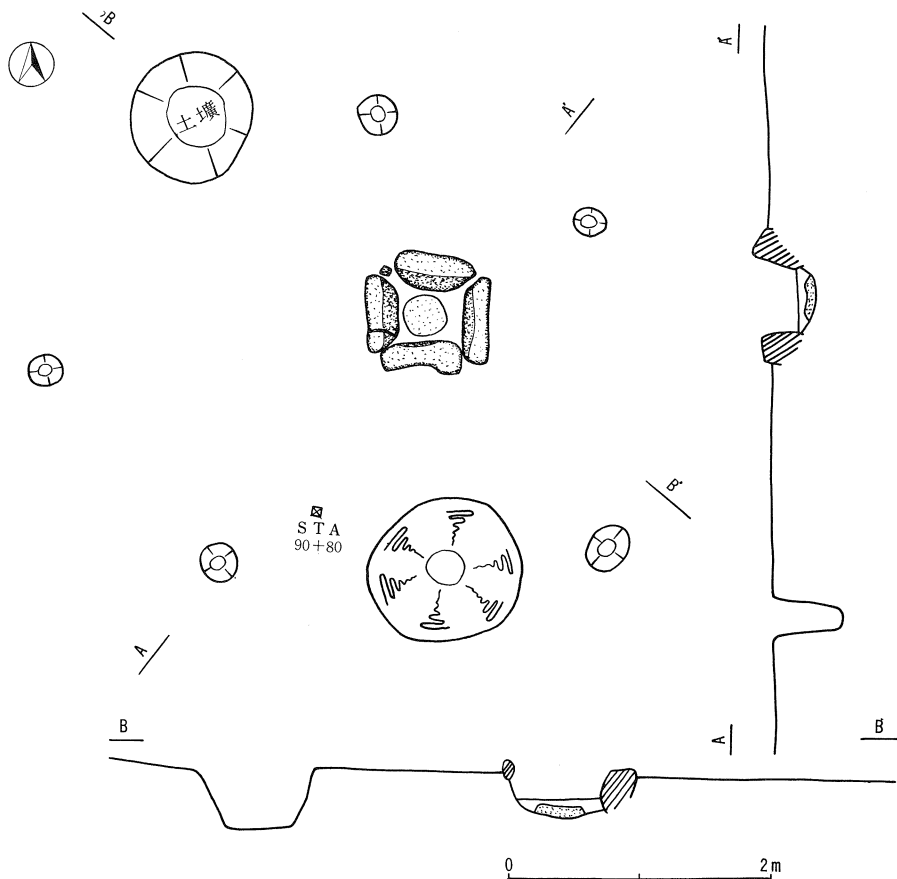
13号住居址 (第79図、図版47)

昭和48年9月24日～9月25日

- プラン 円形(柱穴の位置から推定)約5m、
- 主軸 不明
- 柱穴 5本
- 周溝 なし
- 壁 表土下約30cmで床面は確認されたが、床面上に根による攪乱がはげしく、壁の無い平地住居となっている。
- 床 炉周辺に於て部分的に良好な状態であるが、西側に細い溝が走っており、北側が他に比較し、やや高くなっている。
- 炉 住居ほぼ中央に位置する石囲方形炉で完存する。辺約1mで石は4個、それぞれの大きさも60×30cmでそろっている。
- 出土遺物 一括土器1、磨製石斧1と遺物は少ない。
- その他 住居北西に小竪穴があり、径1m、深さ約45cmの円形を呈し、中から一括土器1が出土している。

(伊藤)

出土遺物 (第80図、図版47)



第79図 柳坪B地区13号住居址平面図

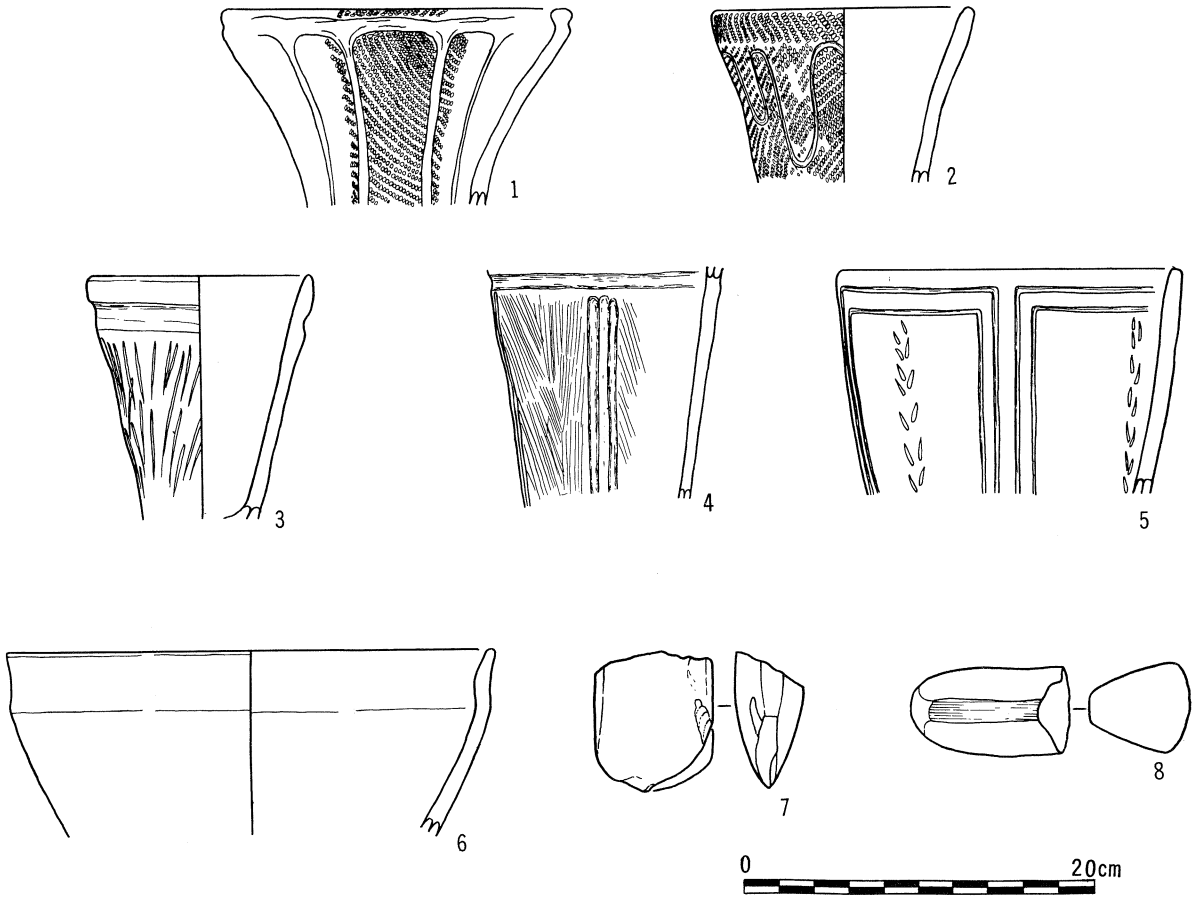
西側の土壌出土土器を除いて覆土中の小破片復元実測である。1、2は縄文を地文とし、1は隆線の区画、2は胴部に波状の沈線が一周する。3、4はやや荒い条線を胴部に施し、口縁下に太い沈線を廻らす。5は2本の沈線で方形に4区画し、その中央に「ハの字」文を懸垂文状に施文する特徴な土器である。6は無文の浅鉢か。7は緑泥片岩製磨製石斧刀部である。8は断面三角形の一つの頂点をすり潰したスリ石である。

14号住居址

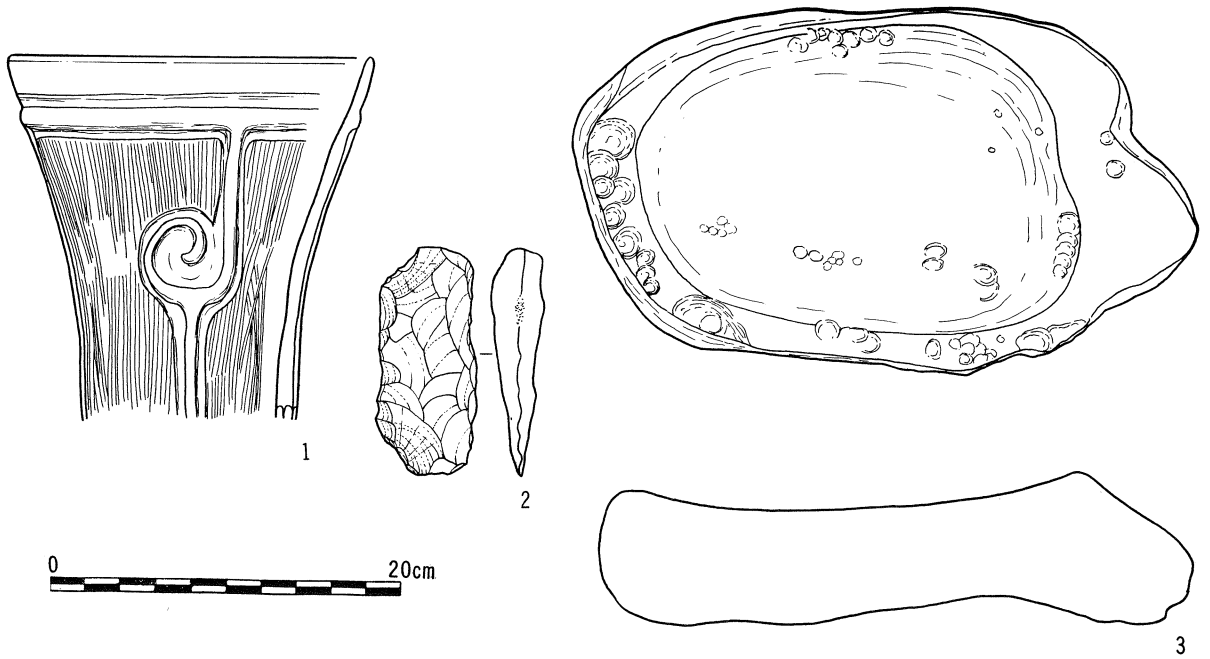
(第81図、図版48)

昭和48年9月26日～9月28日

- プラン 円形か(攪乱により不明) 5.5m×5.5m(推定)
- 主軸 N-26°-W
- 柱穴 東壁付近に1ヶ所あり90×70cm、深さ60cmの長円形で、上から25cmのところを有する。ピットの上半は褐色土混入ローム土で軟弱であるが、下部は砂礫混入ローム土でしまりもあり良好である。
- 周溝 なし
- 壁 北東一部に低くやわらかい壁が見られるが、大部分は攪乱により壁を見ることができない。
- 床面 炉南側から埋襲に至る中央部は良好であるが、他は軟弱である。又、全体的に見ればほぼ



第80图 柳坪B地区13号址出土遗物



第81图 柳坪B地区14号住居址出土遗物

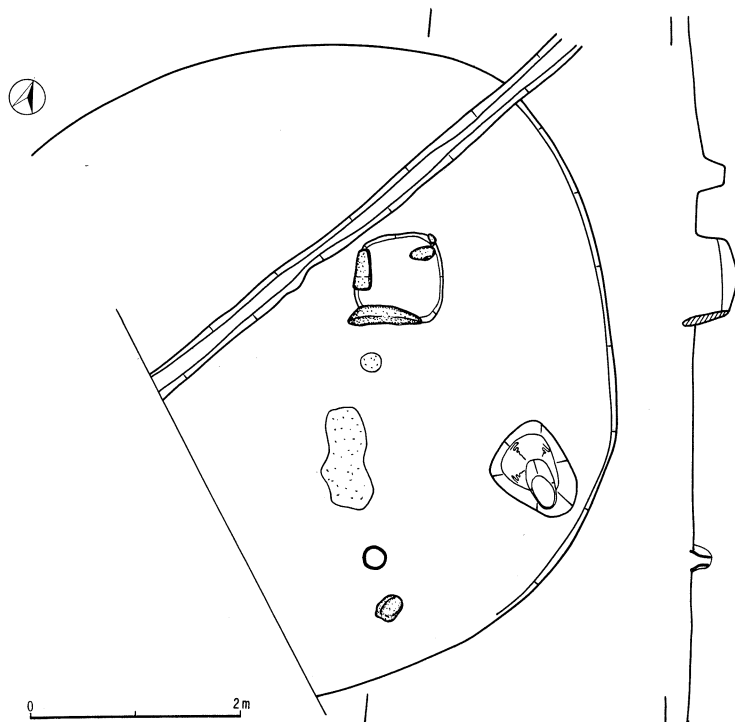
平面である。

- 炉 住居北側に偏する方形石囲炉で、南西の2石を残している。掘込内に焼土が15cm程ある。又、炉南側に1m×0.5mの焼土があり、焼土厚は2～4cmで床面が焼けていることから地床炉か。
- 出土遺物 覆土中の遺物は少なく、住居入口部の埋甕1、床面上石皿1、他に凹石3、石斧1が出土している。
- その他 住居西側を南北に細い溝が走る。

(浦野)

出土遺物 (第82図、図版48)

1は埋甕で、正位で発見された。口縁部に太い沈線を廻らし、隆線の懸垂文は胴部中央で渦卷文を形成する。2の打製石斧は硬砂岩製の完形品である。3は輝石安山岩製の石皿で、やや粗雑な作で周囲及び裏面に凹があり、多孔石の性格をも持つ。



第82図 柳坪B地区14号住居址平面図



15号住居址

(第83図、図版49)

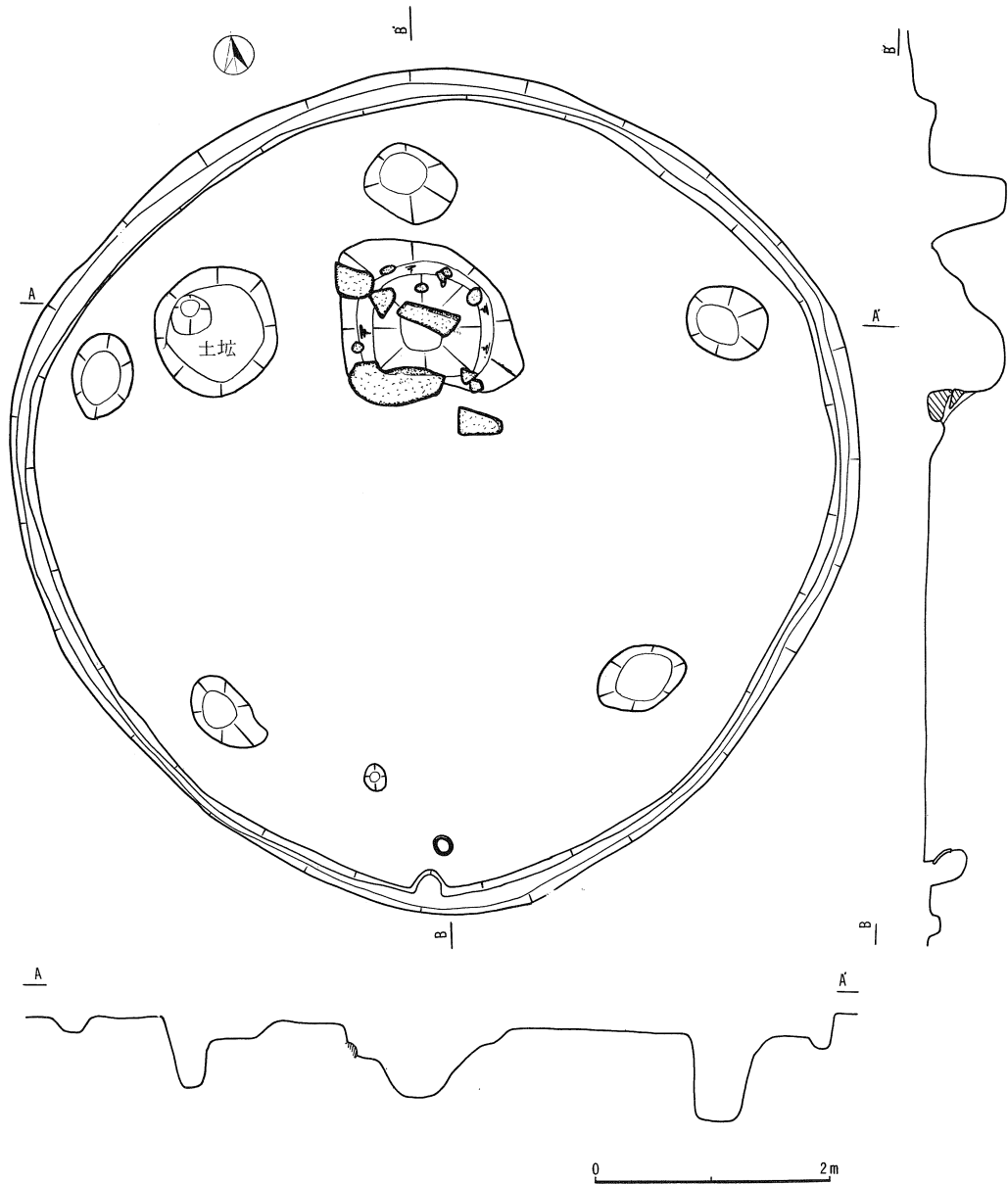
昭和48年9月23日～9月28日

○プラン 円形、南北7.2m、東西7.2m

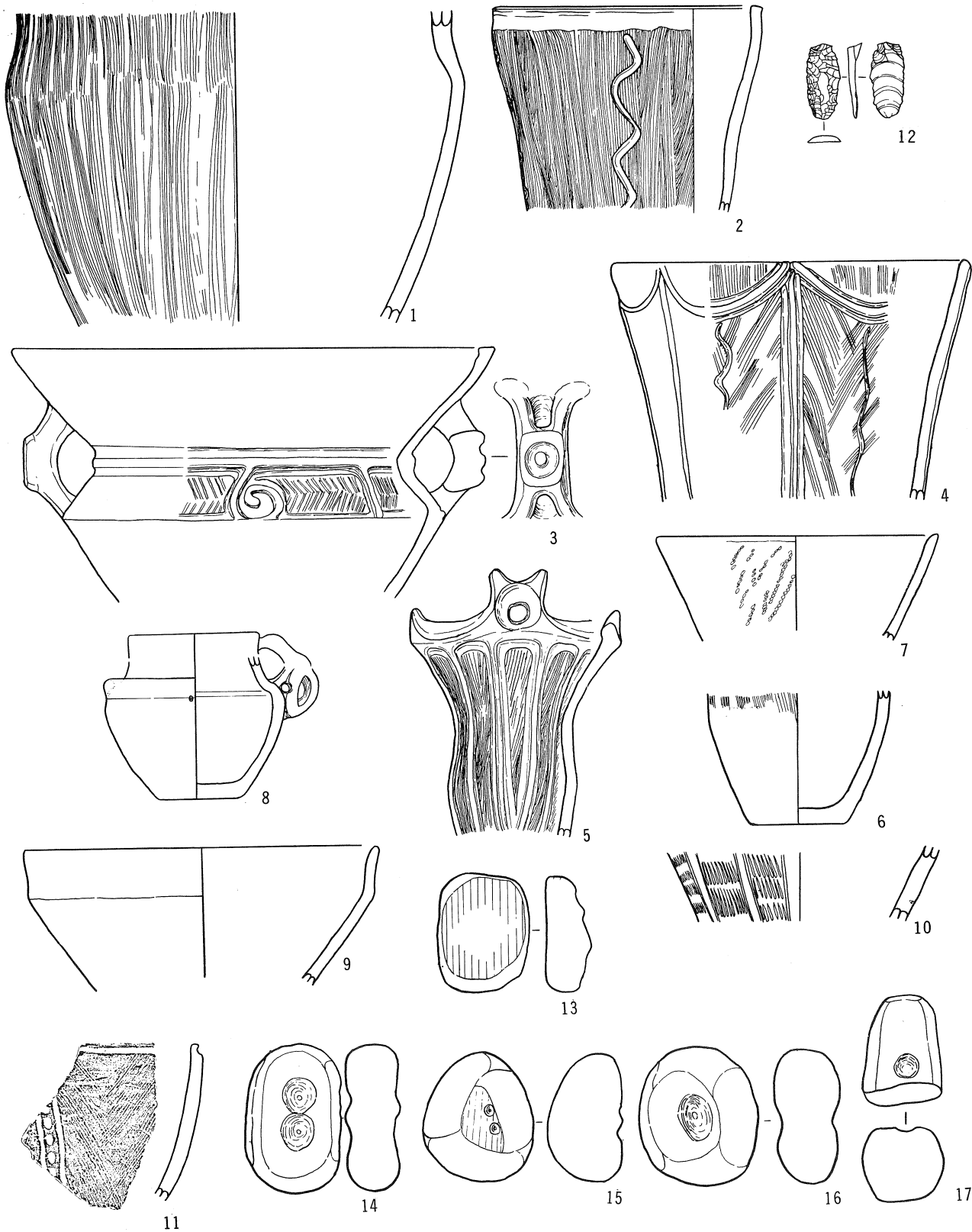
○主軸 N-7°-E

○柱穴 7本発見されており、そのうち主柱穴5本、支柱穴2本と思われる。

No.1、 70×70cm、 深さ70cm、



第83図 柳坪B地区15号住居址平面図



0 20cm

第84图 柳坪B地区15号住居址出土遗物

- No.2、 70×60cm、 深さ70cm、  
 No.3、 75×50cm、 深さ75cm、  
 No.4、 25×25cm、 深さ40cm、  
 No.5、 20×20cm、 深さ40cm、  
 No.6、 80×50cm、 深さ70cm、  
 No.7、 65×65cm、 深さ75cm、

- 周溝 東南部の一部を除いて全体に確認できる。深さは15cm～3cm、幅は25～10cmである。  
 ○壁 確認できたのは北西部から北部を経て北東部南までで、北東部壁高26.5cmを計るが、南は壁が残っていない。  
 ○床面 住居址北側はハードルームで良好であるが、南側はソフトルームのようでやや軟弱で不明瞭である。又、西側から東側にゆるやかに傾斜している。  
 ○炉 住居中心北寄りに位置する方形石囲炉で、不整形を呈する。北辺100cm、東100cm、南150cm、西130cmの台形に近いプランで、南側一部に炉石を残している。掘り込みは段をもっており、かってそこに石が置かれていたことを示している。  
 ○出土遺物 埋嚢を除いてほとんどが床面より浮いている。一括土器は比較的少なく4、石槍1、石鏃1、スリ石1、凹石4がある。  
 ○その他 炉西側に小竪穴が重複しており、この小竪穴は二重になっている。上面小竪穴は直径1mで、下面のものは径3.5cm、深さ40cmで、遺物はない。

(米田)

#### 出土遺物

(第84図、図版49、50)

1は住居南側の埋嚢で周溝にかかるが、周溝部ではほとんど壊れており、胴部上半で一周するにすぎない。口縁部、胴部半分から底部が欠けている。胴部には櫛目状条線が施される他には懸垂文も無いが、胴部上半で屈曲する点が特徴と言えよう。2は胴部にほとんどカーブの無い土器で、櫛目状条線の上からミミズ状沈線の懸垂文が等分に4本垂れる。3は胴部算盤玉形土器で、底部を欠くが、胴部屈曲上半横帯に文様が集中し、隆線の渦巻文と直線の間を半割竹管平行沈線で細かく埋めている。8は無文の有孔鍔付土器でミミズク把手が片側に付く。孔は鍔部に溜まる水を出すように鍔部に穿れている。破片のため孔の数は不明である。10、11は土堀内から出土したもので、住居覆土のものよりやや新らしい文様をもつ。12は片面にのみ二次調整のみられる黒曜石製石器である。

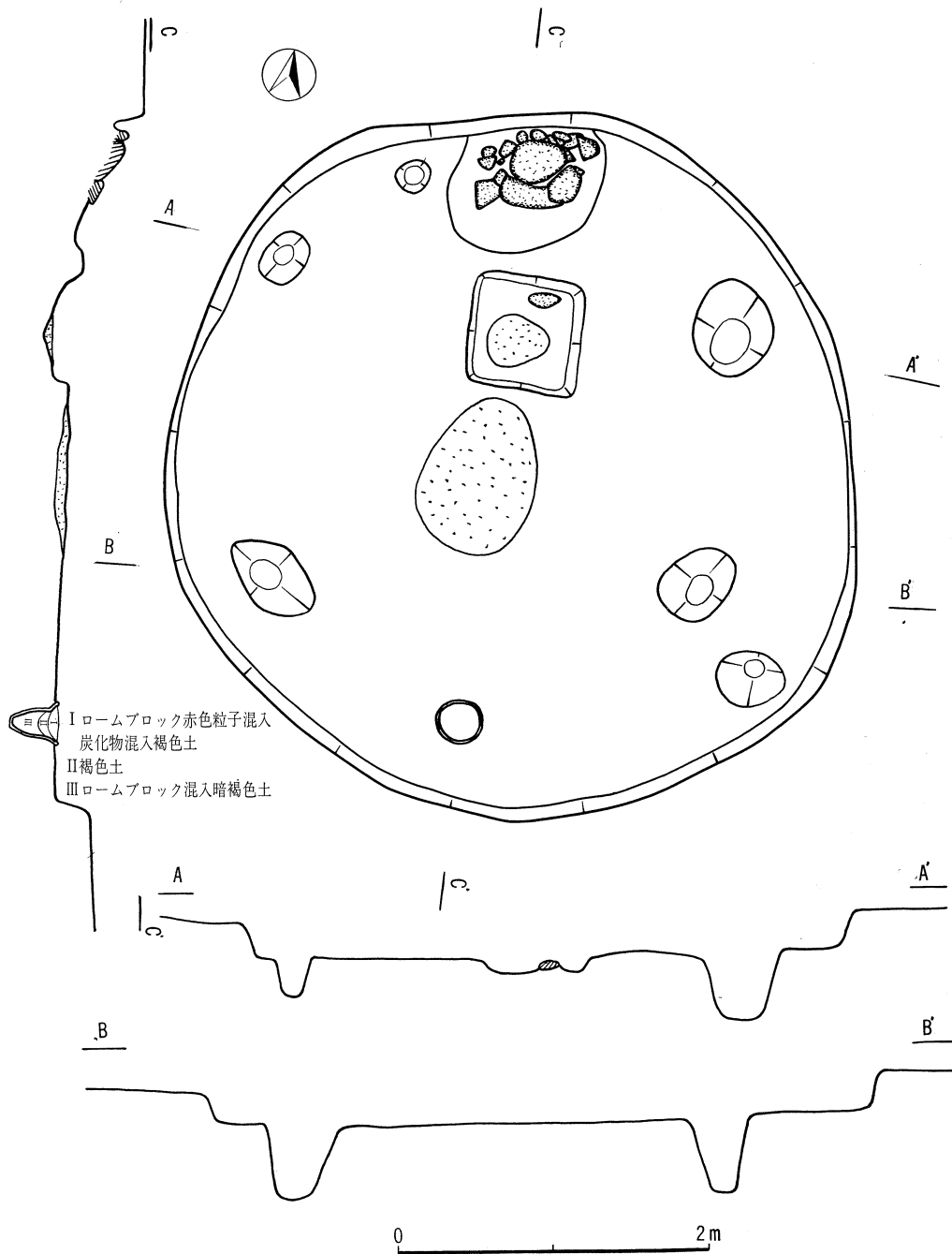
#### 16号住居址

(第85、86図、図版51)

昭和48年9月8日～9月22日

- プラン 円形、南北4.5m 東西4.4m  
 ○主軸 N-2°-W  
 ○柱穴 総数6本であるが、主柱穴と考えられるものは5本で、北西のNo.1は2×2.20cm、深さ1.5cm、及びNo.2は3.6×2.6cm、深さ30cm、南西のNo.3は6.5×4.0cm、深さ50cm、南東のNo.4は4.5×3.8cm、深さ5.5cm、及びNo.5は5.3×4.0cm、深さ50cm、北東のNo.6は6.5×5.3cm、深さ4.5cmである。  
 ○周溝 なし  
 ○壁 壁は全体に柔らかくソフトルームのようであるが、全体に確認することができた。

- 床 面 全体に良好で南にやや傾斜している。状態はかたく、よく踏みかためられており、炉南側の地床炉面は最も良好な部分である。又、埋甕の付近は周囲よりやや低く、確認しにくい。
- 炉 方形の掘込炉で住居中心より北側にある。かつては方形石囲炉であったと思われるが、炉石は1つも残されていない。この南側に地床炉があり、焼土も多く、炉の面積よりも広く焼けている。



第85図 柳坪B地区16号住居址平面図

- 出土遺物 埋甕を除いて他の遺物は浮いている。投げ込まれたものであるが、完形品は少ない。
- その他 住居北壁に接して石壇が造られている。本遺跡唯一のもので、石組中には凹石が2個組みこまれており、この下には小竪穴が存在する。小竪穴中から土器片、及び石鏟が出土している。埋甕と石壇のみが完存していることに問題がある。

(米田)

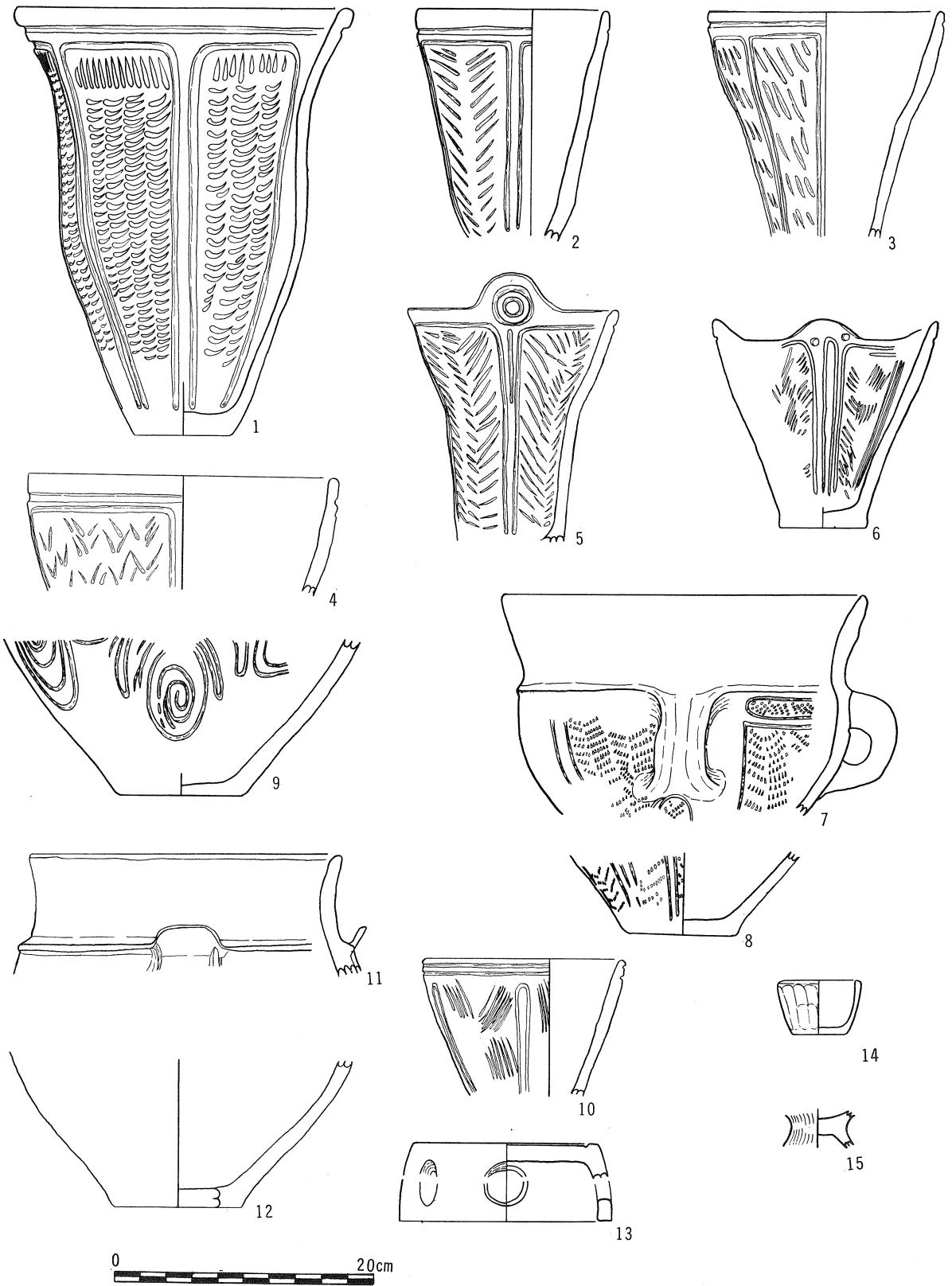
出土遺物

(第87、88図、図版52、53)

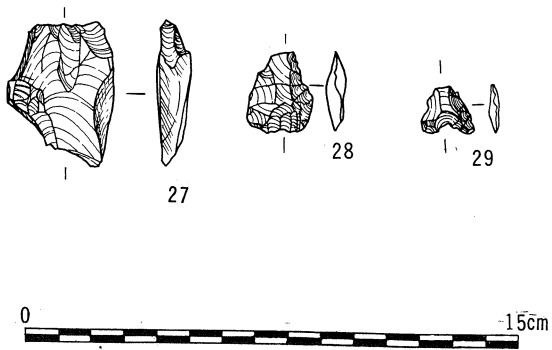
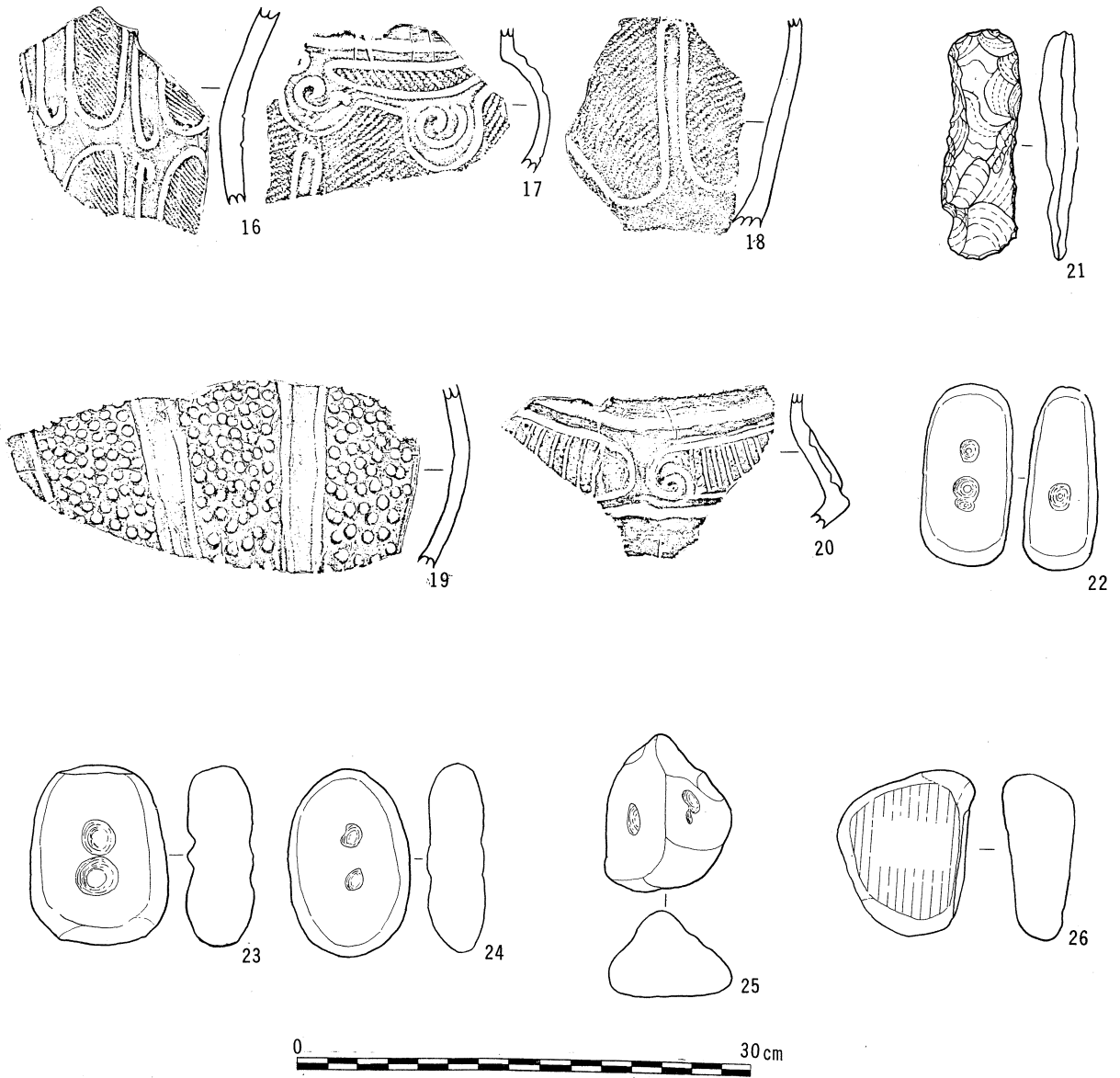
1は住居南側の正位埋甕で底部一部を欠く他は完全である。焼成の良好な赤褐色の土器で、胴部がやや膨む美しい形をしている。口縁部に一本の沈線を廻らし、内部を太い棒状工具で縦に一条廻らし、その下は横に幾列か引き上げるように描く文様は「ハの字」文の初源的なものであろうか。2～5は沈線で区画した中に「ハの字」を施す直線的な器形の深鉢形土器で、5が円形窓状把手を持つ。7、8は沈線の区画に櫛目状工具の刺突文を施す土器で、7には橋状把手が付けられる。9もおそらく同様の器形の土器と思われるが、沈線の連続渦巻文が見える。14は手ヅクネ小形土器、13は器台形土器の破片である。16～18は縄文を地文とし、曲線の沈線でU字、逆U字や渦巻文が描れるもの



第86図 柳坪B地区16号住居址遺物図



第87图 柳坪B地区16号住居址出土遺物(1)



第88图 柳坪B地区16号住居址出土遗物(2)

で、関東系の土器群であろう。27は黒曜石製曾根形石核で、28、29は覆土中出土の石鏃である。埋甕を除いていずれも覆土中より出土したものである。石壇下土拵より出土したものは図示していない。

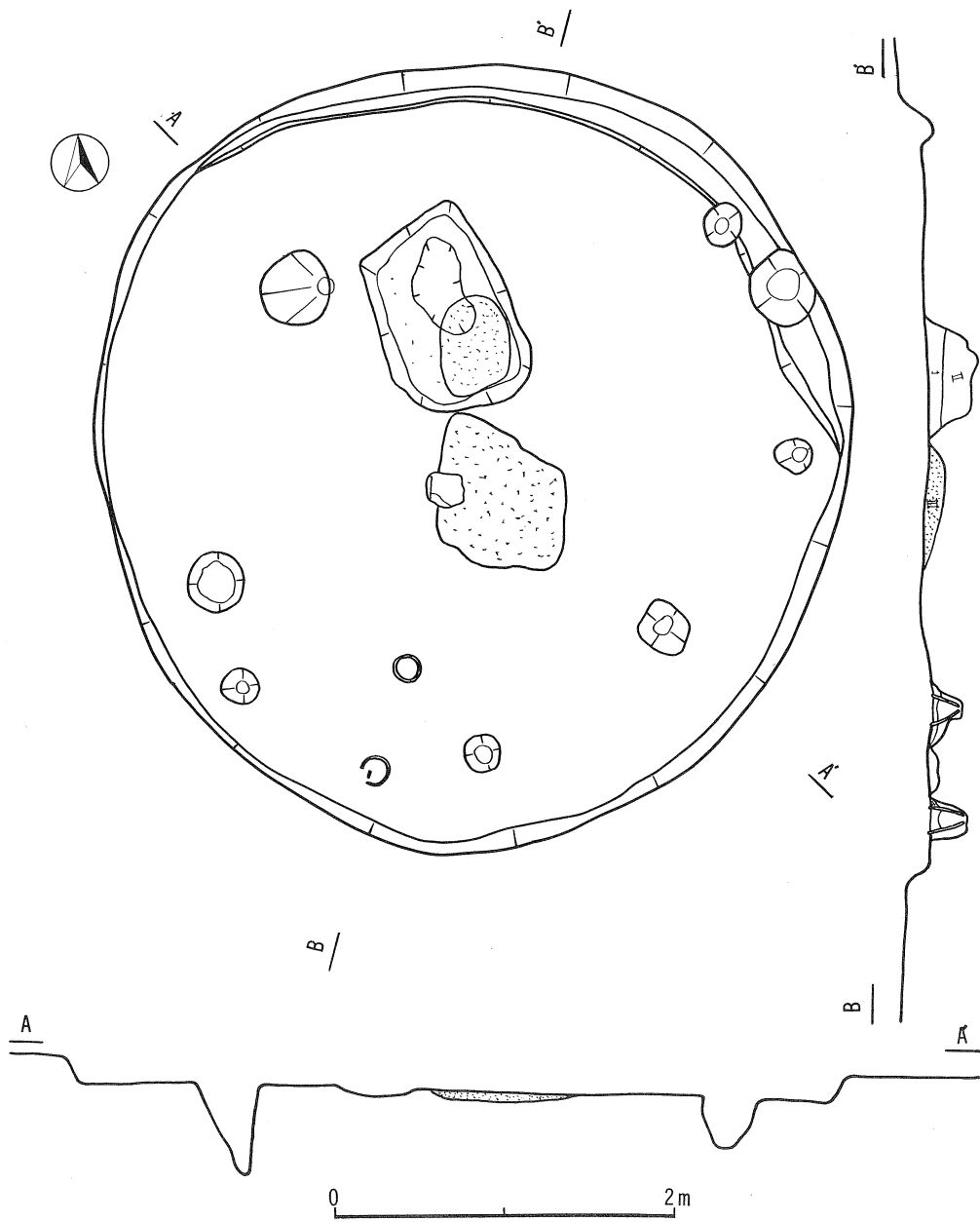
**23号住居址** (第89、90、図版54)

昭和48年9月17日～9月21日

○プラン円形 南北4.7m、東西4.4m

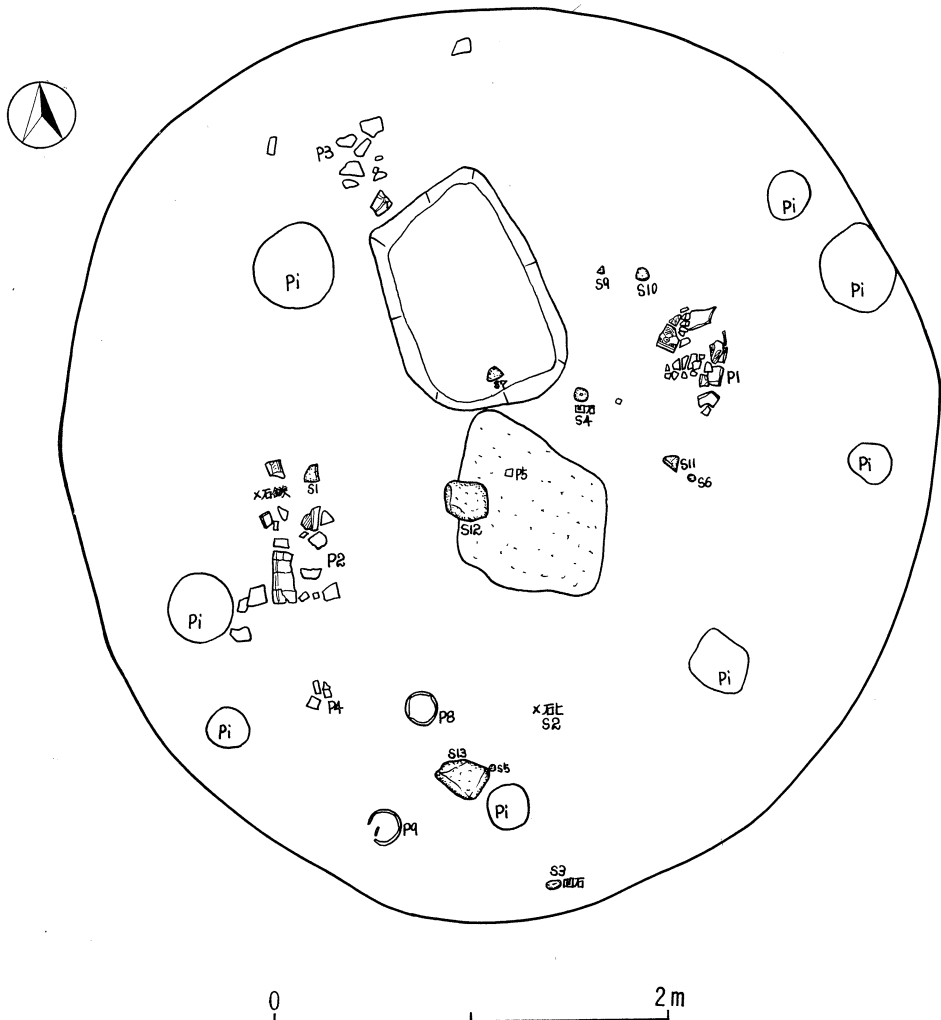
○主軸 N-8°-E

○柱穴 柱穴総数8本であるが、このうち主柱穴と思われる径35cm、深さ40～60cmのものが



第89図 柳坪B地区23号住居址平面図





第90図 柳坪B地区23号住居址遺物図

4本、支柱穴と思われる径20cm、深さ20～40cmのものが3本、周溝内に径40cm、深さ30cmのものが1本ある。

- 周溝 住居址北側に一部存在し、幅10～40cm、深さ10cmである。
- 壁 壁高は平均して15cmであるが、北壁を除いて軟弱であり、南側は掘りすぎているかもしれない。
- 床面 住居中央部は良好であるが、壁に近づくとしたがつて軟弱となり不明確である。南側部分は褐色土中に貼床があった可能性もある。
- 炉 住居中央北側にある方形の掘込炉であるが、かつて炉石で囲われていたようである。炉に接して住居中央に地床炉があり、他住居と性格を同一とする。
- 出土遺物 一括土器5点で3は床直で出土している。埋甕は2コあり、南北方向に並んでいる。又

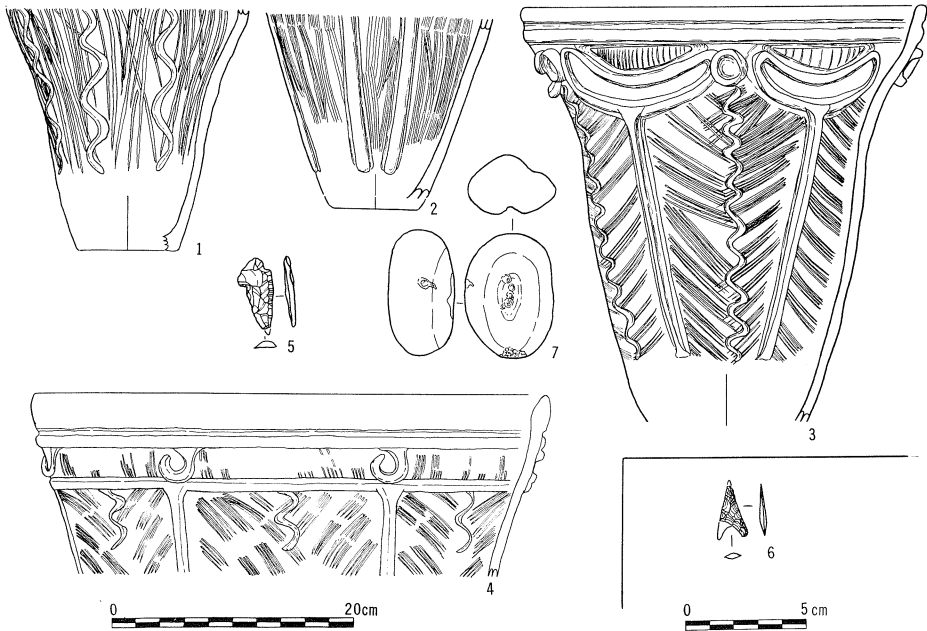
石器類は石鏃1、石匙1、玉石2、凹石3、スリ石1、石皿破片1が出土している。

○その他 なし

(伊藤)

出土遺物 (第91図、図版55)

1、2が住居南側の埋甕で、口縁部及び底部を欠くが、ほぼ同一文様構成を示し、地文櫛目状条線の上に1ではミミス状沈線の懸垂文、2では隆線の懸垂文が施文される。いずれも正位埋甕で南北に並ぶのは前後関係を示すものであろうか。3、4は床面上3~4cmから出土した一括土器で、口縁部に隆線の横帯区画と胴部に懸垂文が施される。5はチャート製石匙である。



第91図 柳坪B地区23号住居址出土遺物

24号住居址 (第92図、図版56)

昭和48年9月10日~9月16日

○プラン 円形、南北4.6m、東西5m

○主軸 N-82°-W

○柱穴 総数10本の柱穴が発見されているが、この中で支柱穴と思われるものは径約80cm、深さ約70cmのもの1本、他は径約30cm、深さ30cm位が9本ある。いずれも住居壁寄りに円形に配されている。

○周溝 なし

○壁 壁は非常に把握することが困難で、ローム上に二次堆積様のソフトロームがあり、このソフトロームを掘り込んで住居が造られている。地形が東傾斜で、西側25cmの壁高をもつのに比べ、東側は0cmである。

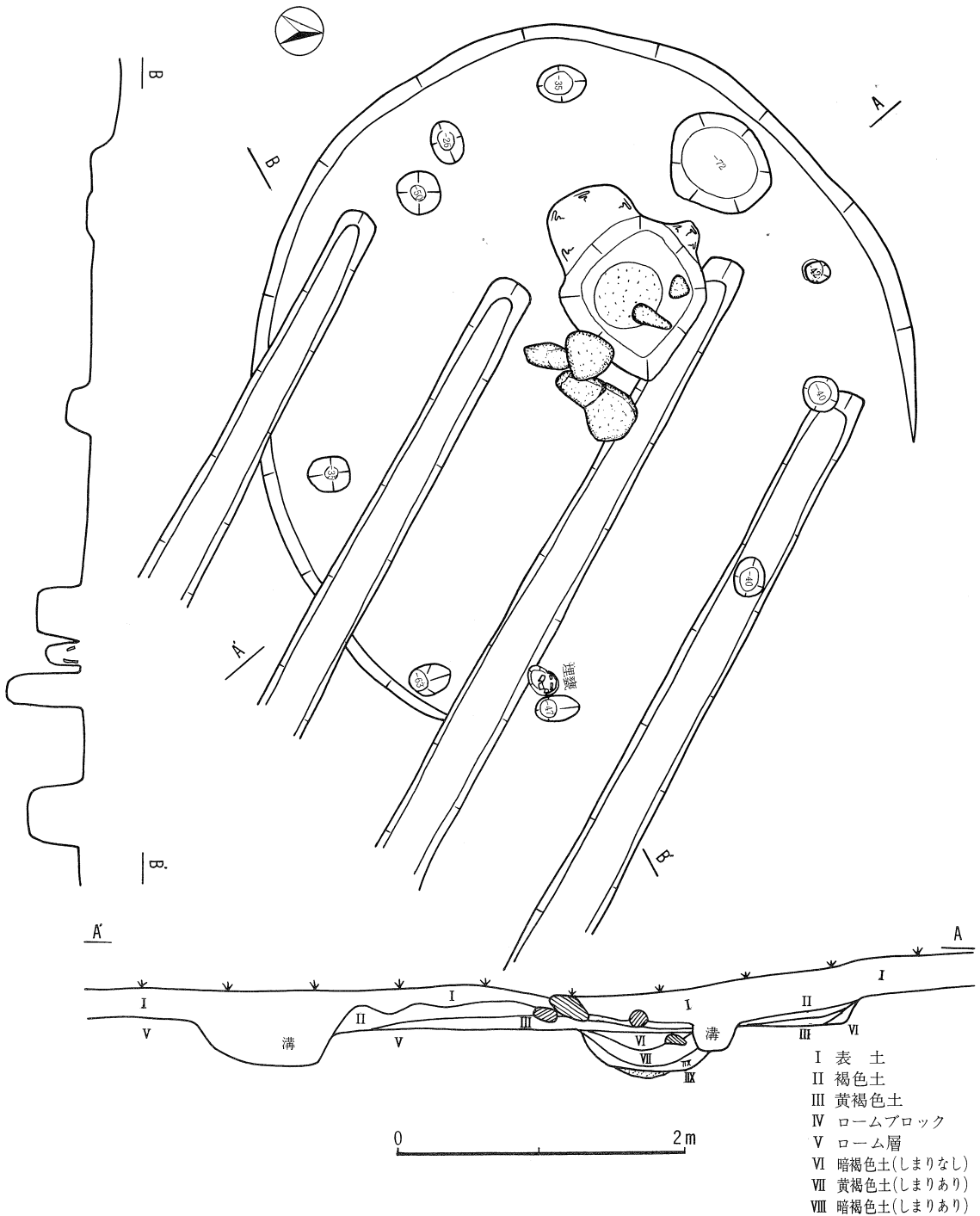
○床面 炉の周辺ではしまりがあるが、周辺部は軟弱である。又、住居を4本の耕作の溝が東西に走っており、これに破壊されている。

○炉 中央に位置する方形石囲炉で100×90cm、深さ20cmの規模をもつ。この炉の周囲に

石があるが、炉石として使用されていたものが破壊されたのであろう。

○出土遺物 遺物は少なく、埋甕1と他は破片が少し出土しているが未整理。

○その他 耕作で住居が荒されているが、住居東側に埋甕をもつ特異な住居である。 (伊藤)



第92回 柳坪B地区24号住居址平面図

## 26号住居址

(第93図、図版56)

この住居は2号住居北西コーナーのピットを炉とする住居で、2号住居に破壊されてプラン等遺構の状態は全く不明であるが、整理途上、出土遺物のまとめり、及びピット内焼土をもって縄文時代住居とすることにした。

出土遺物(第93図)

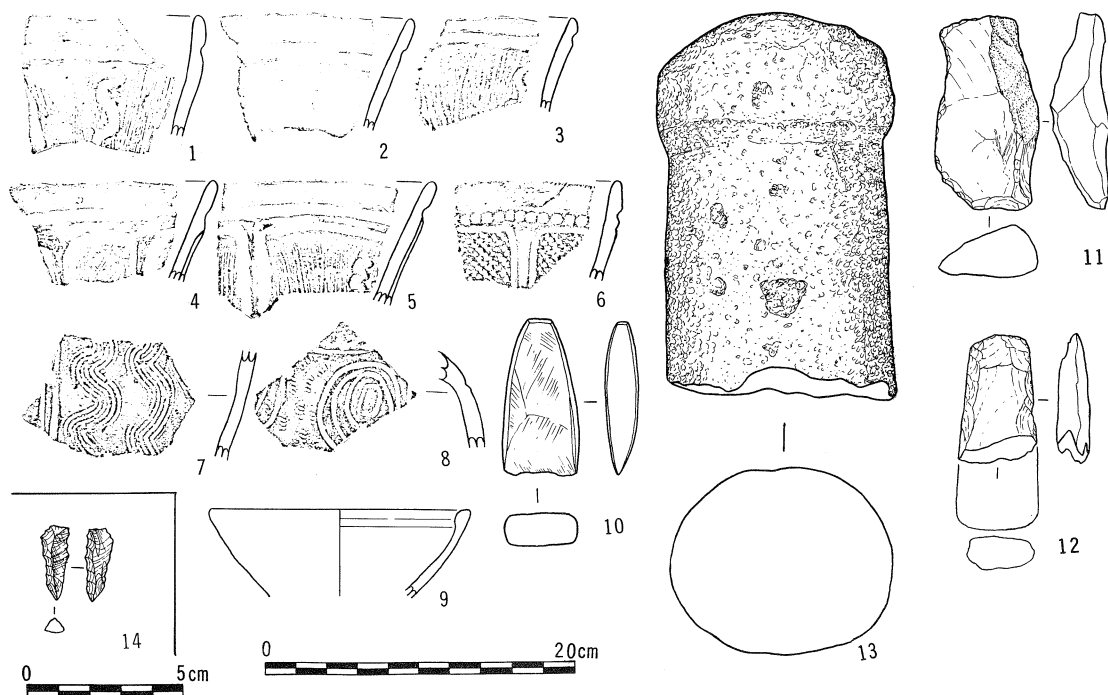
土器はいずれも覆土中のもので、口縁部に一本の沈線を廻らし、隆線及びミミズ状沈線の懸垂文内を楯目状条線が施されるものと、6のように口縁部沈線の代わりに円形刺突文を連続させる縄文地文のものもある。9は無文浅鉢、10は緑泥片石製小型定角磨製石斧、13は輝石安山岩製石棒、14は黒曜石製石錐で、10が2H住居北壁上段面、13は炉石として使用されていた。

## 3号土壇

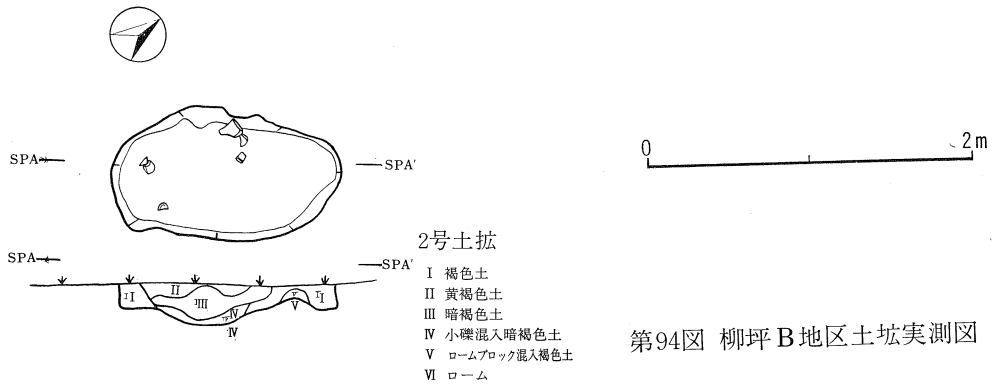
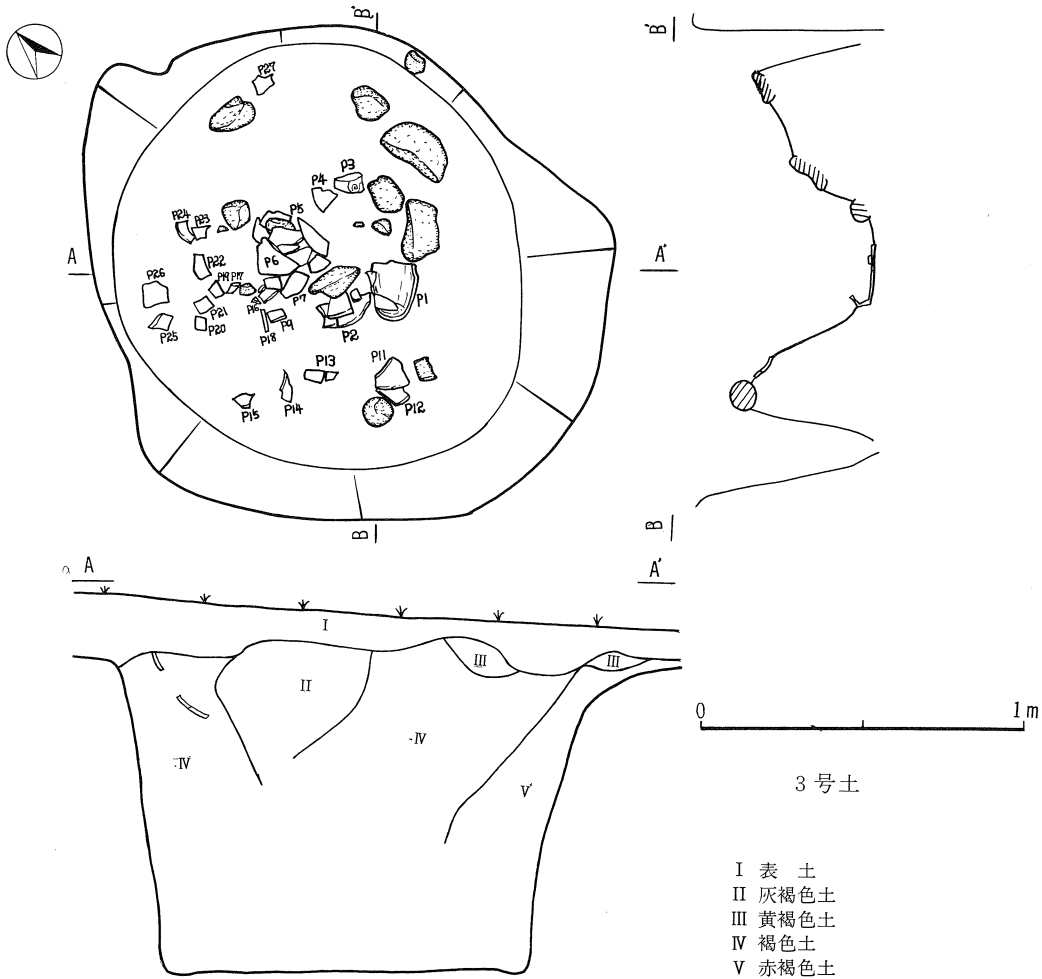
(第94図、図版56)

25号住居南東約10mにあつて直径約2mの円形土壇で、壁は垂直に1m70cm程掘り下げられている。壁際は比較的軟弱であるが、中央部は礫、土器片が多数投入されており、調査は困難であった。

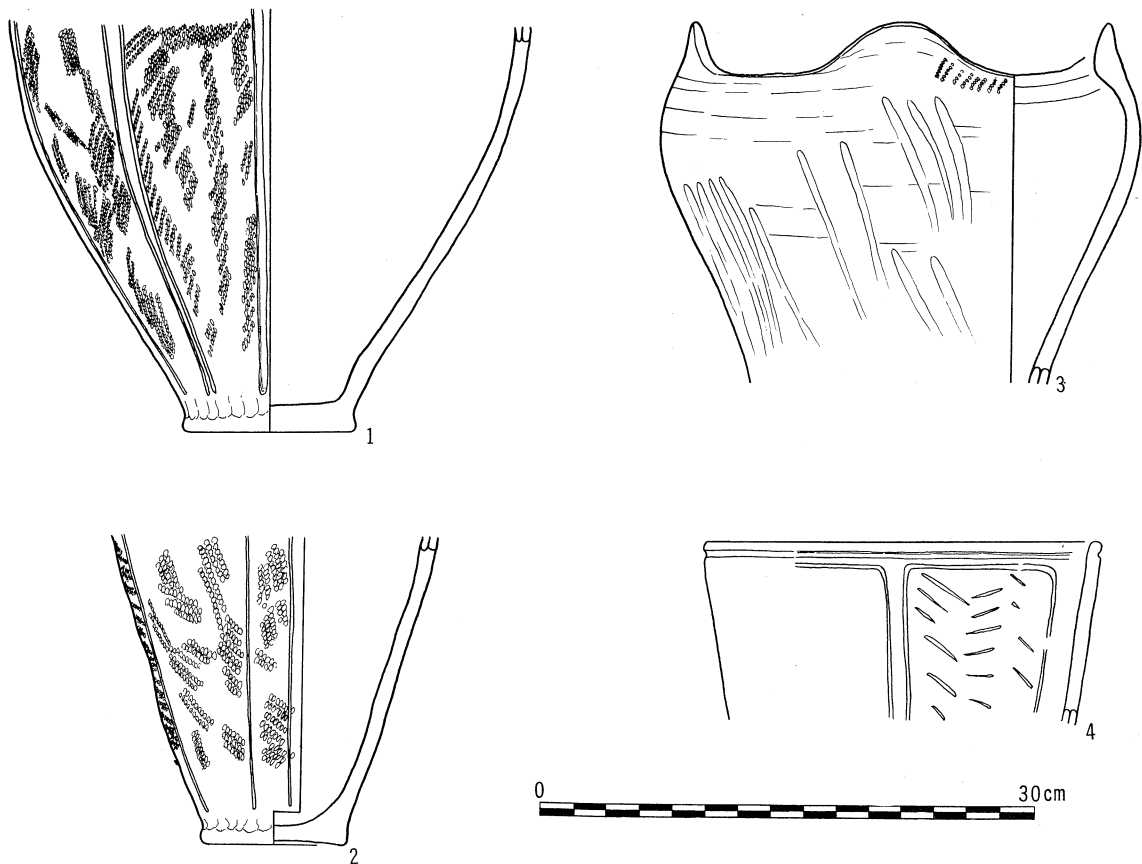
出土遺物(第95図)1、2の縄文地文の胴部が張る土器と波状口縁様把手の無文へら磨き土器、「ハの字」文の土器等が出土しており、中期末葉の遺物が多い。



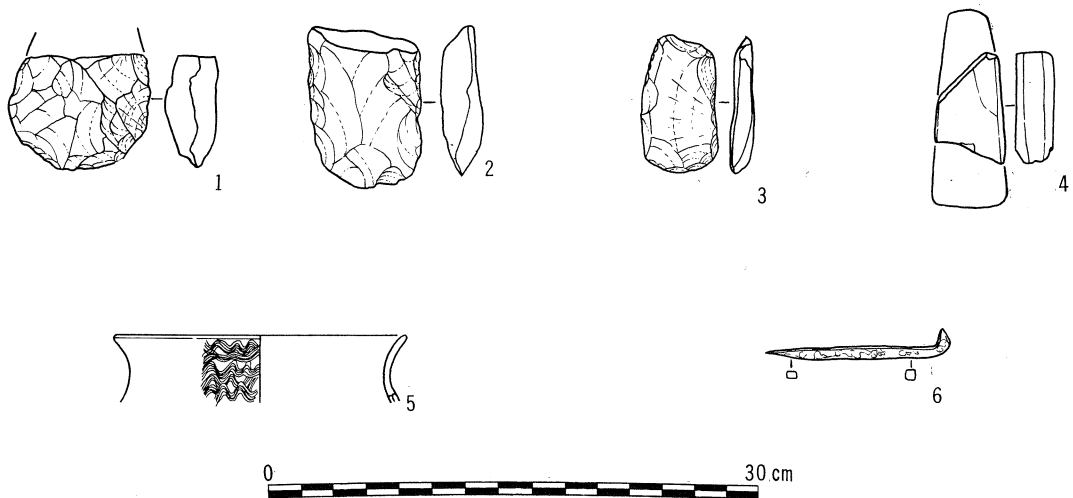
第93図 柳坪B地区26号住居址出土遺物



第94図 柳坪B地区土坑実測図



第95图 柳坪B地区3号土坛出土遗物



第96图 柳坪B地区Grid出土遗物

## ○ま と め

柳坪B地区の問題点を簡単にまとめて総まとめの材料としておきたい。

- 1, 23、24号住居を除いて、半円形に住居群がならぶ。
- 2, 時期(土器形式)をほとんど同一とし、重複関係がない。
- 3, 方形石囲炉南側住居中央部に地床炉をもつ。
- 4, 埋甕をもつ住居が多い。
- 5, 10号住居の遺物のあり方が特殊である。
- 6, 16号住居の石壇を持つ住居と他の住居の関連性は何か。
- 7, 23、24号が半円状の住居配置から離れている意味は何か。
- 8, 24号住居の入口が東面しているのは地形的制約によるのか。
- 9, 炉石の完存する住居に遺物が少ない。

## 平安時代

### 2号住居址

(第97、98図、図版57)

昭和48年8月3日～8月28日

○プラン 隅丸方形(やや台形に近い)北辺3.87m、東辺3.7m、南辺4.3m西辺3.8m

○主 軸 N-93°-E(カマドをもつ辺と直交する軸を主軸とした)

○柱 穴 なし

○周 溝 なし

○壁 北側、東側の壁はテラス状になっており、西側、南側の壁は表土に近いいためか攪乱された部分が多いが、各コーナーと壁の一部が確認され、これをつなげた。壁は攪乱部を除いてほとんど垂直である。

○床 面 住居南側の床面は木の根のためと思われる攪乱があり、凹凸が激しいが他は全面に良好と言える。北西コーナーに焼土、及び石棒をもつピットがあり、縄文時代中期の炉と同一であるが、そのプランは全く把握することができない。

○カマド 東壁中央やや南寄りに設置された石組カマドで、カマド内の焼土は少ないが、石組袖石は両袖ともほぼ完存している。ただ壁から若干離れている。

○出土遺物 この住居の遺物はほとんどがカマド内部及び周辺から出土しており、土師器がその大部分をしめるが、須恵器、灰釉陶器等が出土している。

また、覆土中に縄文時代遺物が多量に含まれている。

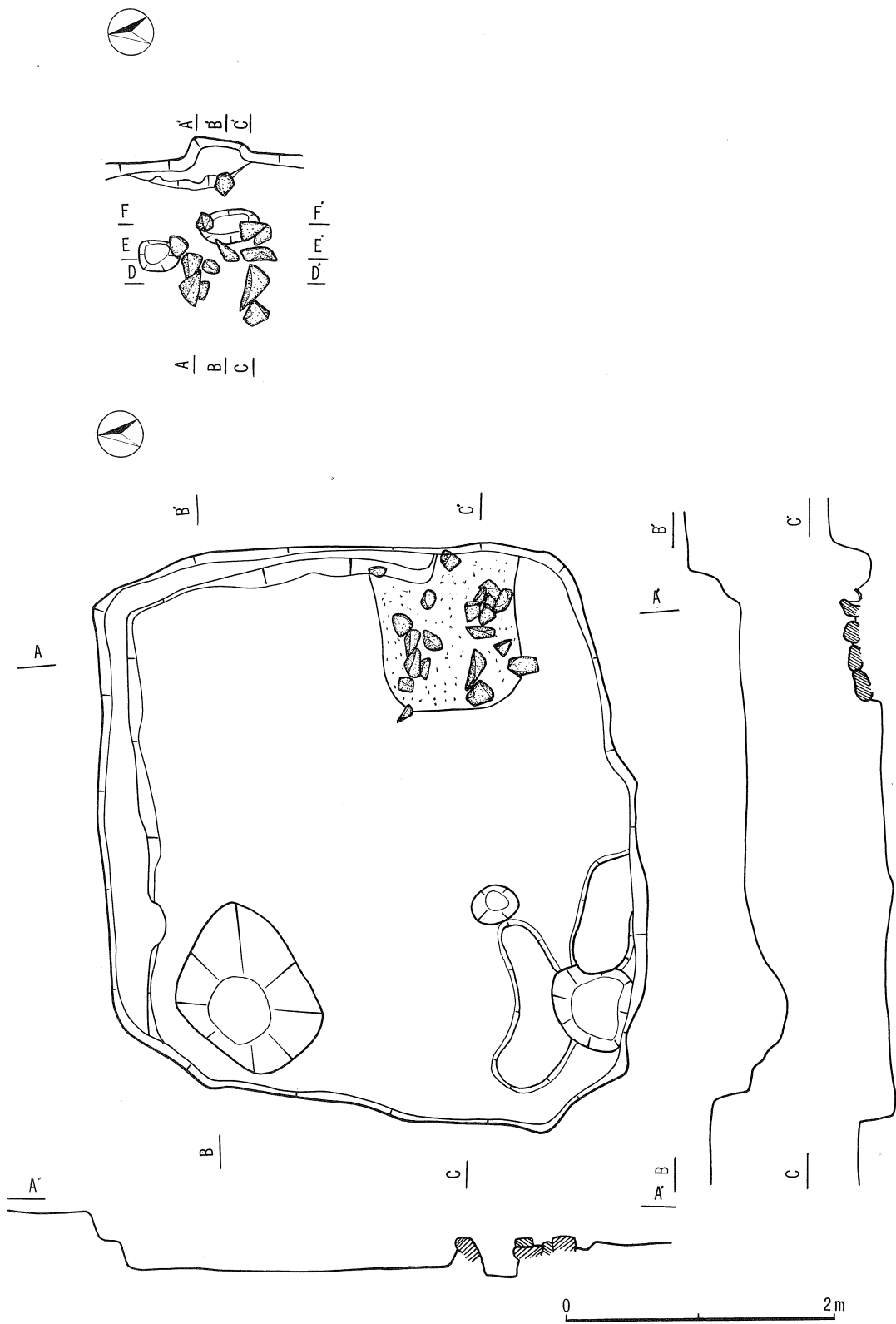
○その他 縄文時代住居との重複関係を明確にできなかった。

(米田)

### 出土遺物

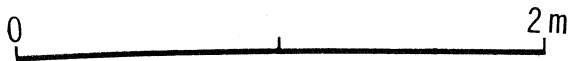
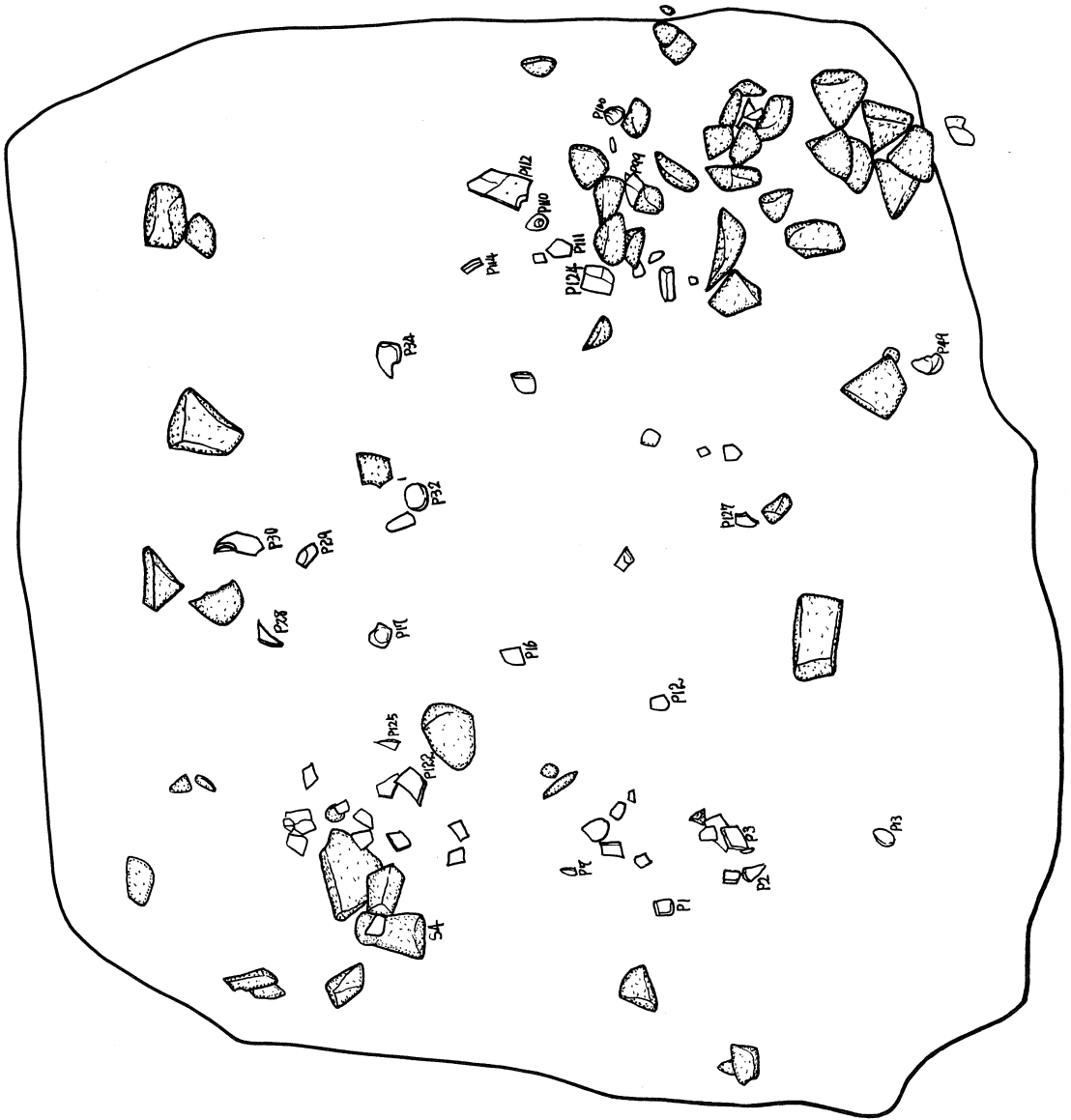
(第99図、図版57)

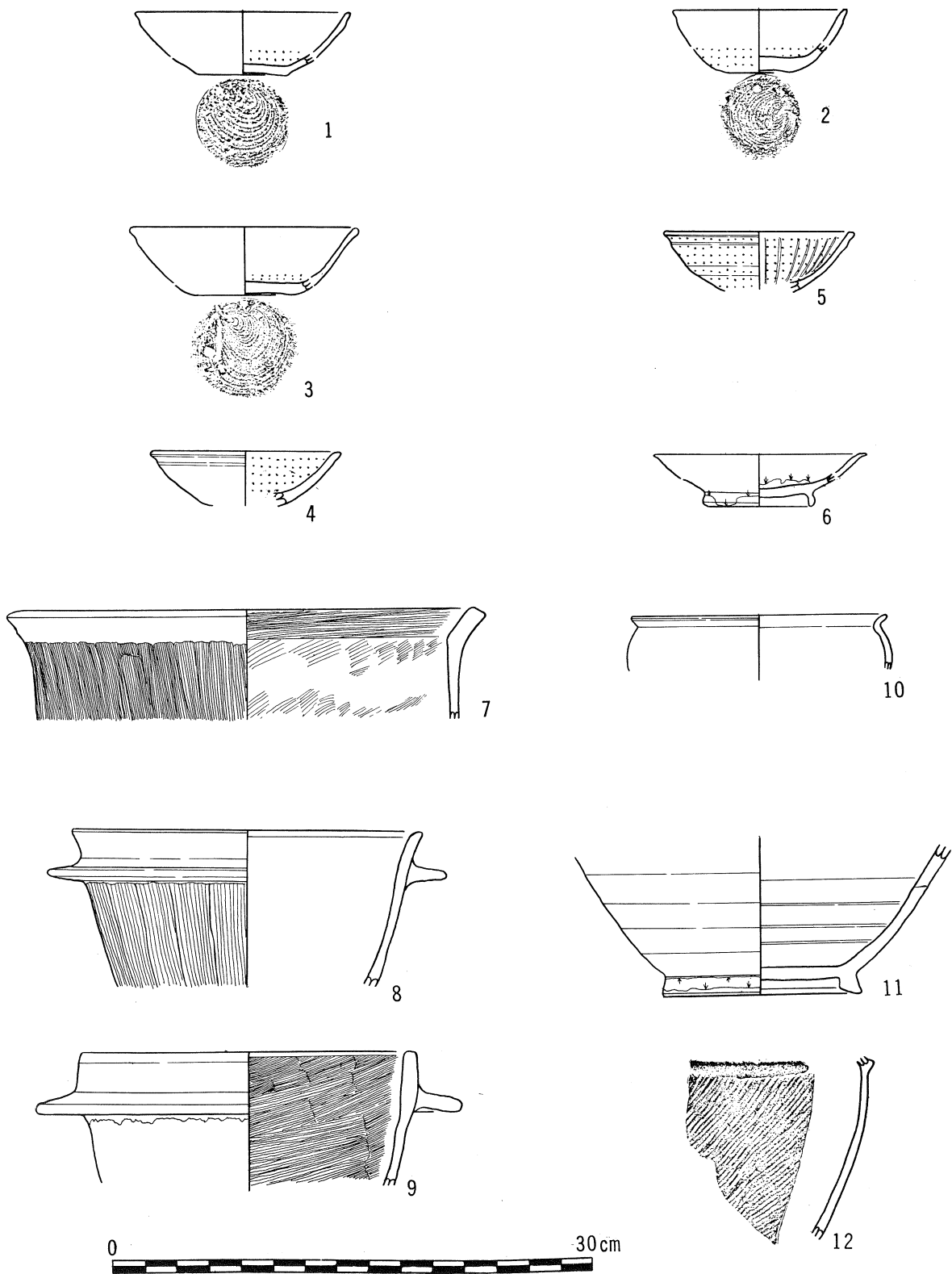
杯形土器1～4は内面黒色へらみがき、底部糸切りの土師器で、4は底部不明。5は内外面とも黒色で、内面に放射状暗文が施される。6は灰釉陶器で、胎土灰白色の細かい粒子であるが灰釉は乳白色の薄いもので、折戸53号窯式に比定されるものであろう。7は甕で口縁部が厚く、口唇はやや外反する。内外面とも刷毛目整形される。8、9は釜で、10は小形甕口縁であらう。7～10はいずれも土師器である。11は灰釉広口瓶で釉薬はほとんど施されないが、器面はへら削痕をみる。12は肩部に段のある壺形須恵器片で、外面には黒褐色の自然釉がかかり、叩目がある。



第97图 柳坪B地区2号住居址平面图







第99图 柳坪B地区2号住居址出土遺物

## 5号住居址

(第100図、図版58)

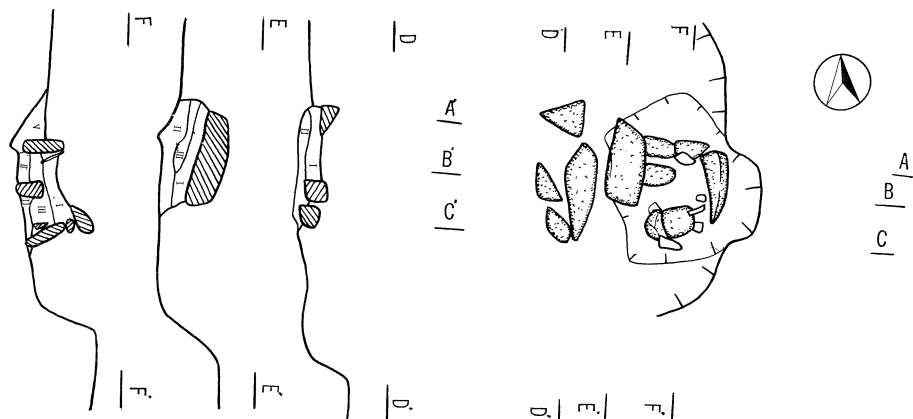
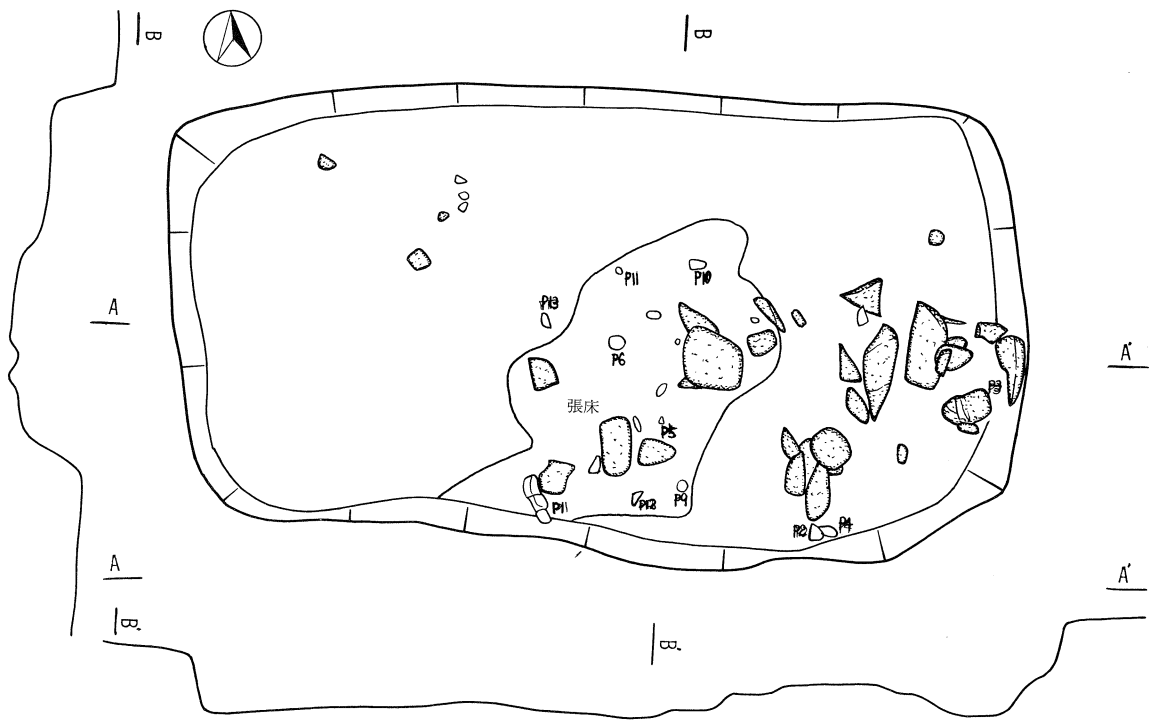
昭和48年8月12日～8月22日

- プラン 方形、東西4.8m、南北2.6m (拡張後の大きさ)
- 主 軸 N-98°-E (カマド中軸線)
- 柱 穴 なし
- 周 溝 拡張前の住居南西コーナー付近に幅10cm、深さ5cmの溝が約3mにわたって存在する。
- 壁 全体に良好であるが、南壁の一部が根によって攪乱を受けている。北壁35cm、東壁30cm、西壁37cm、南壁40cmでほぼ垂直であるが、床面と接する部分はなだらかになっている。
- 床 面 全体に良好であるが拡張前の住居カマド部を貼っている。厚さ10cm位で焼土粒子混入の褐色土である。この貼床下に焼土をもつ皿状のピットがあり。又、この南西に径60cmの皿状ピットがある。後者は前者住居の貼蔵穴あるいは灰溜ピットであろう。
- カマド 東壁中央に位置するが、拡張後のカマドは袖石が崩れており、ほぼ原形を残すものは北袖石1、南袖石2コのみである。煙道もわずかに認められ、東西90cm、南北100cmの掘り込みがあるが、焼土は少ない。又、拡張前の住居カマド掘込は東西150cm、南北110cmで拡張後のものよりも広く、焼土も認められる。
- 出土遺物 カマド周辺よりやや出土している
- その他 平安期住居拡張例として重要と思われるが、長方形住居として使用されたものであろうか。  
(橋本、小林 桂)

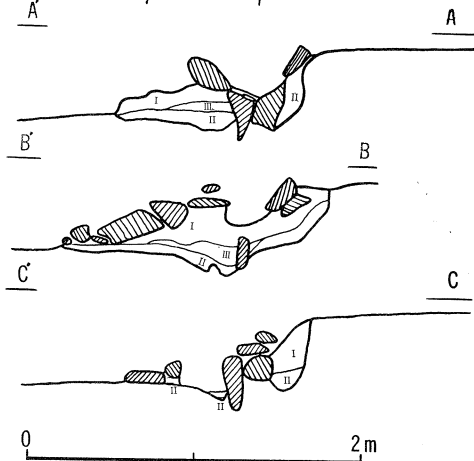
## 出土遺物

(第101図、図版58)

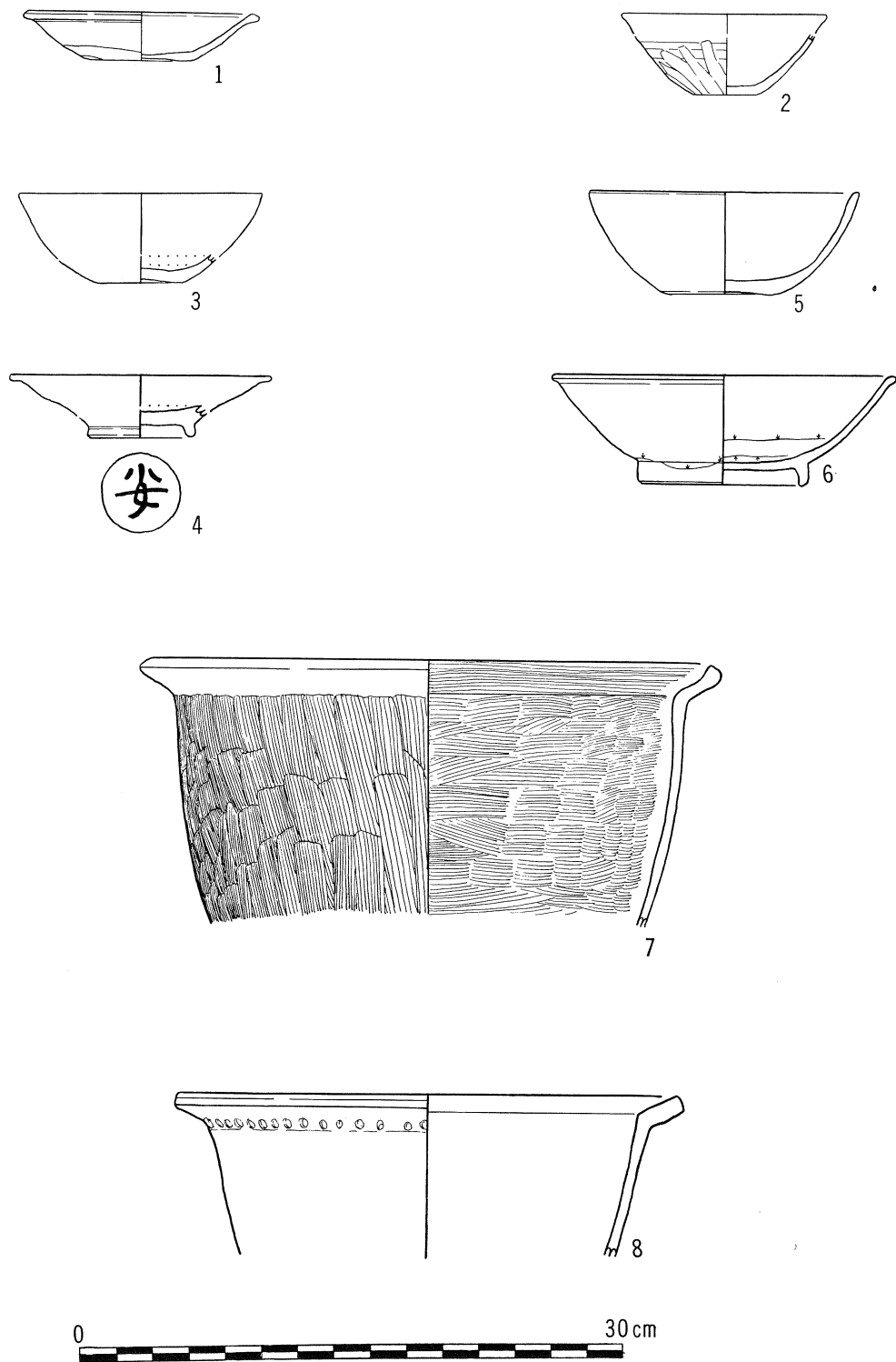
1は皿形土師器で玉縁口縁は外反し、内外面ロクロ横ナデ整形後、外面胴部下半をへら削りしており、底部は糸切り後へら整形している。2は杯で口縁部を欠くが、内外面ともロクロ横ナデ整形しており、内面底部にはロクロ水引きによる渦巻痕が見られ、外面胴部下半はへら削りしている。底部は糸切り底である。3は内面黒色へら磨きで、外面ロクロ横ナデ、糸切り底の土師器である。4は台付皿形土師器の底部で内面黒色へら磨き、外面底部には糸切り後高台貼付痕が見られ、中央に「安」の墨書がある。5は杯で内面へら磨き、外面ロクロ横ナデ、糸切り底部で、焼成が不良で胎土もやや荒いためザラザラしており、整形痕が不明確である。6は灰釉陶器盥で口径18.5cmを計る。胎土は赤味をおびた黄灰色で粒子は細かく、黄灰色釉薬は内外面に刷毛で塗られる。触着を防ぐために口縁部のみに釉を回し掛けしたものと思われ、黒笹90号窯末から折戸53号窯式前半に比定できると思われる。7、8は土師器甕で、7は口縁部外側を除いて刷毛目整形が施される。口縁は屈曲して外反するが、口唇部がやや突出したように厚くなる。8は内外面とも薄い刷毛目痕があり、口縁部は厚く、外面には粘土を押えたような指圧痕が並ぶ。



- I 褐色土層
- II 暗褐色土層
- III 褐色土層(ロームブロック混入)
- IV 焼土
- V 褐色土層(しまりがある)



第100図 柳坪B地区5号住居址平面図



第101图 柳坪B地区5号住居址出土遗物

6号住居址

(第102、103図、図版59)

昭和48年8月13日～8月28日

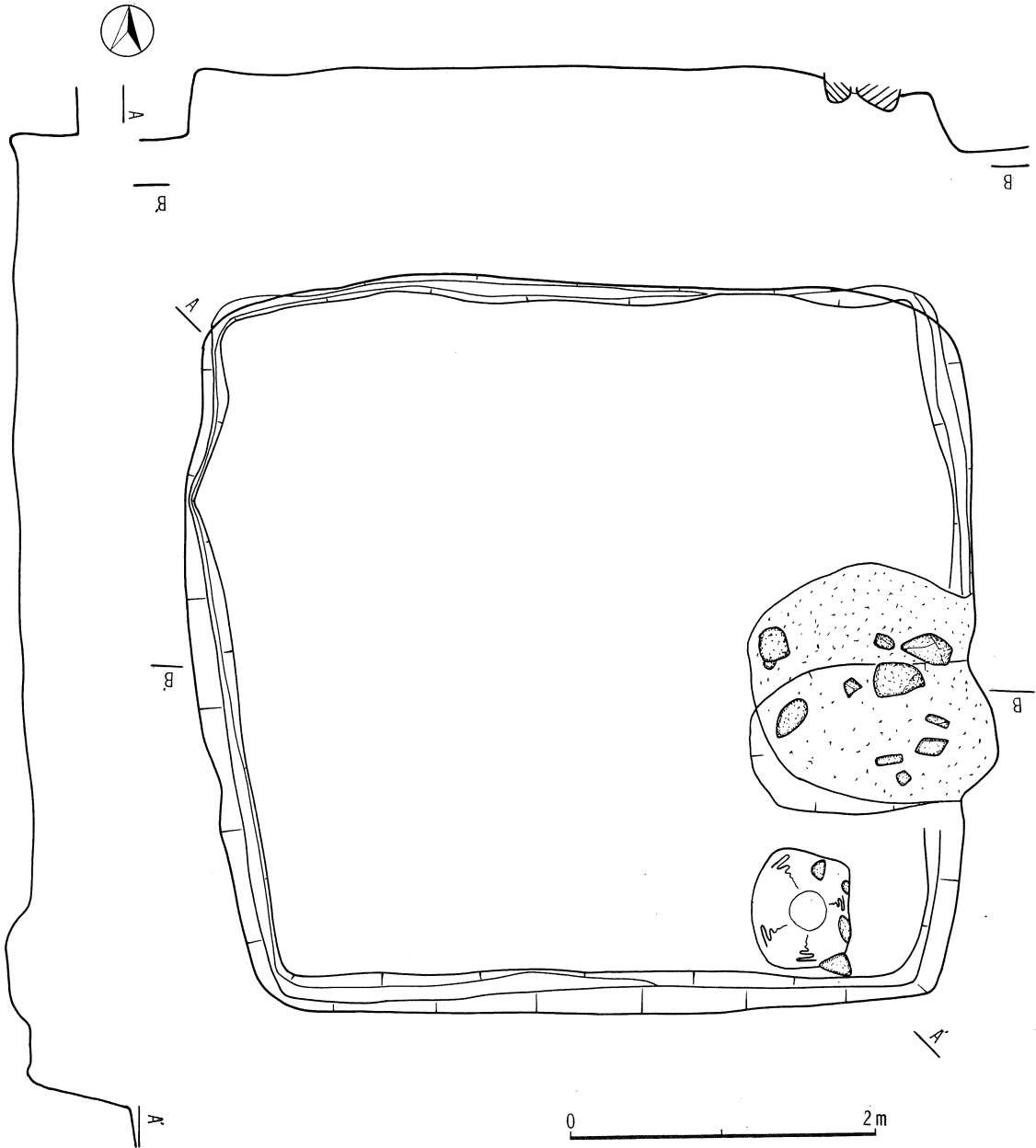
○プラン 方形、4.7×4.9m

○主軸 N-83°-E

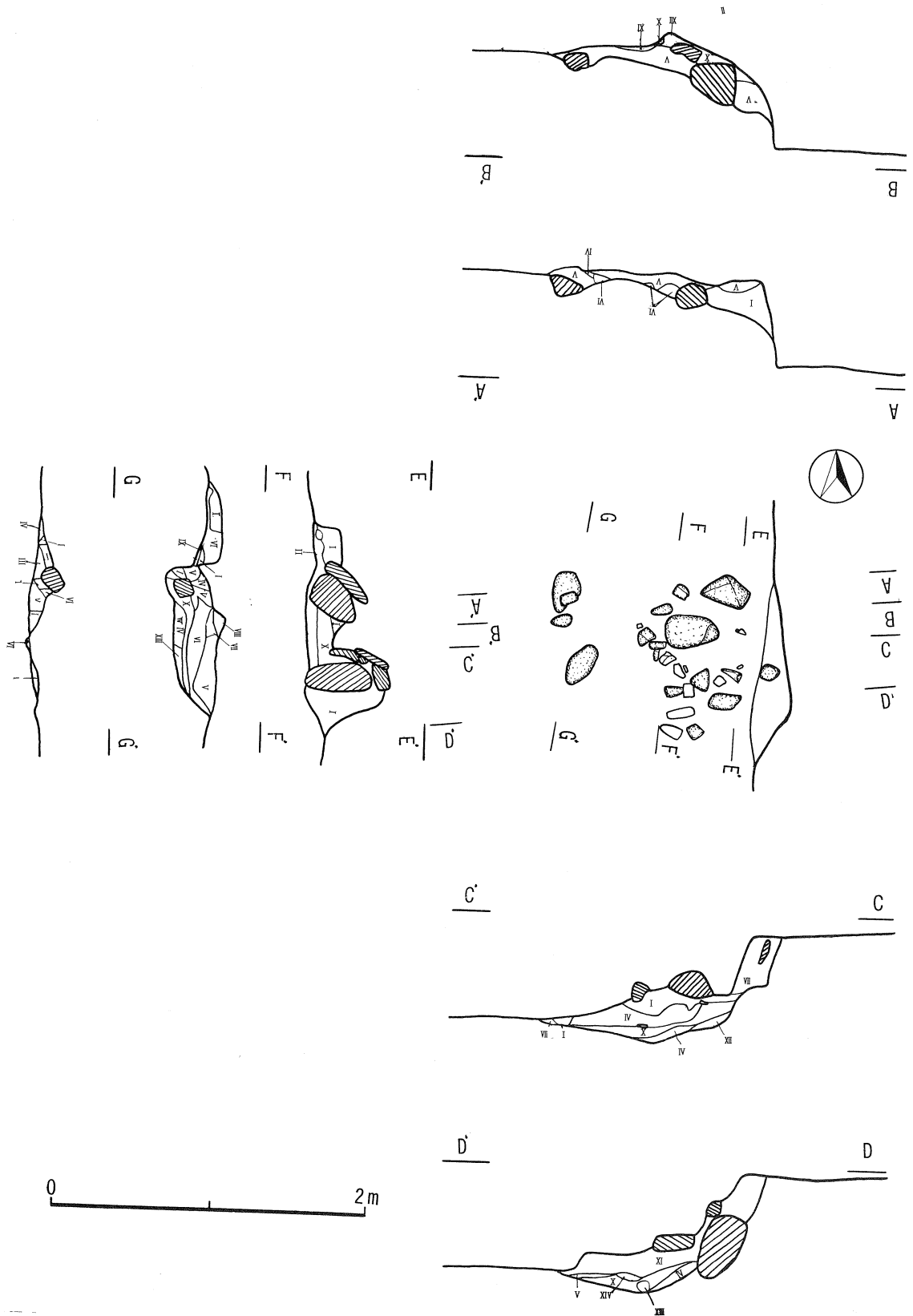
○柱穴 なし

○周溝 カマド及びカマド南の皿状ピット周辺を除いて全体に存在し、浅く、深い所で10cm以内である。

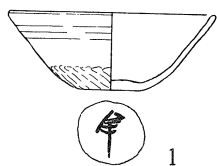
○壁 カマド南側の壁が木の根によって良好で、壁高約60cm、垂直に近く、部分的には内傾し



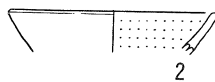
第102図 柳坪B地区6号住居址平面図



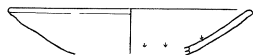
第103図 柳坪B地区6号住居址、カマド実測図



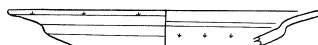
1



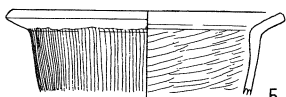
2



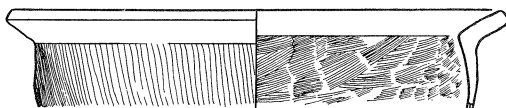
3



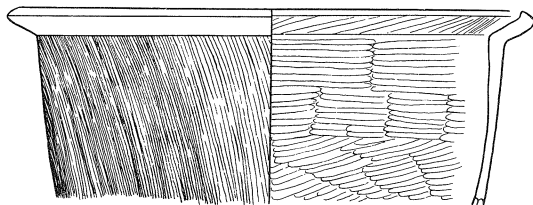
4



5



6



7



8



第104图 柳坪B地区6号住居址出土遗物



ている所もある。

- 床 全体によく踏みかためられて良好で水平である。
- カマド 東壁中央に設置され、石組で粘土も多量に使われている。規模は東西約160cm、南北100cmの掘り込みがあり、焼土も良好に残っている。
- 出土遺物 完形品はなく、カマド周辺に多いが、土錘のように住居外からの出土遺物もある。土師器片11、須恵器3、灰釉片2、土錘1、その他小破片
- その他 住居内に焼土が多く入り込んでいたが、住居に伴うものか不明である。

(宗、堀内)

#### 出土遺物 (第104図、図版59)

1は土師器杯で、内外面ともロクロ横ナデ後、胴部下半を細かくへら削りを行ない、底部もへら削りしている。底部には判読できない墨書が書かれている。口縁は外反せず、胴部器厚とほぼ同じで先端が丸まる。2は内面黒色研磨土師器で外面はロクロ横ナデ整形である。3、4は灰釉陶器で3は皿、4は段皿である。3は灰色の胎土で、内面に鉛緑色釉が施される。口縁はやや外反する。4は口唇から内面に緑灰色の釉を厚く施すもので、どちらも黒笹90号窯式に比定されると思われる。5～7は土師器甕で、口縁部外側を除いて刷毛目整形される。口縁部がやや肥厚化するが、直線的なもの6と、上に反るもの7がある。8は土錘で、本遺跡唯一のものである。住居西壁上から出土しているの、住居に伴うものか速断できない。

#### 8号住居址 (第105、106図、図版60)

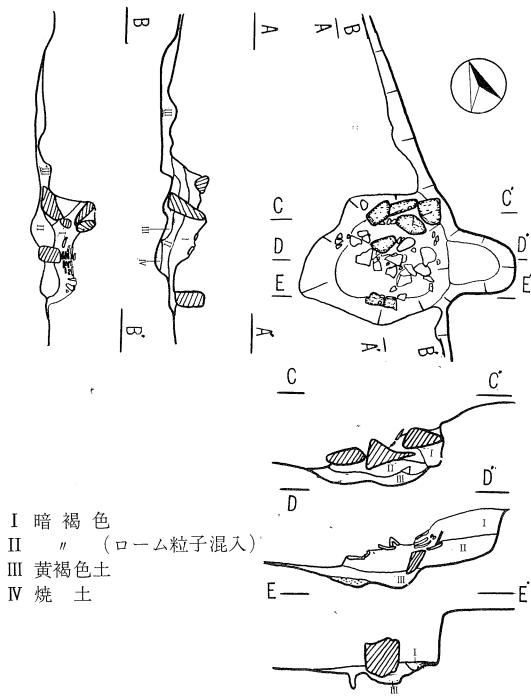
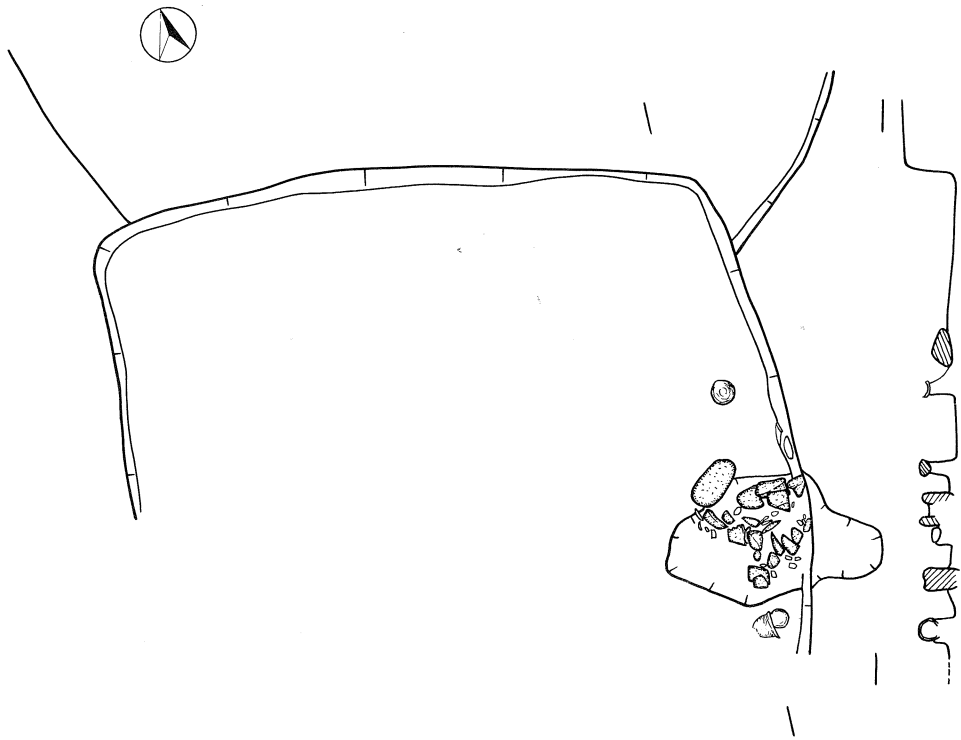
昭和48年8月20日～9月8日

- プラン 方形、(南側は調査地区外のため未調査)東西4.05m
- 主 軸 N-93°-E
- 柱 穴 なし
- 周 溝 なし
- 壁 東北部においては良好であり、ローム中に小礫が混入されてかたい、西側は、東北部にくらべロームが軟弱であり、木の根による攪乱があったと思われる。
- 床 面 床面は全体に小礫含有ロームでしまりがあるが、西側床面はやや軟弱で、又、カマド周辺5～60cmの付近には黒色土が踏みかためられていて、敷物が灰であるのか不明である。
- カマド 東壁に設置されており、石組カマドである。現存した袖石は5個で、北側に4個、南側に1個が残り、小礫が崩れて中に落ち込んでいる。規模は煙道まで入れると130cm(東西)84cm(南北)で、石組の下に皿状の掘り込みがある。又、カマド北側にピットがあり、焼土が20×20cmに広がっているところから、カマドの再築も考え得る。
- 出土遺物 カマド周辺及び、住居中央部が多く、灰釉3片、土師器一括3点、須恵器一括1点、鉄製品3点、砥石1点、灰釉常滑焼大甕1点が出土しており、この期としては遺物の量が多い住居である。
- その他 縄文時代4号住居を切って造られているが、南半分が調査地区外である。

(大森)

#### 出土遺物 (第107図、図版60、61)

1は器面内外ロクロ横ナデ後、外面胴部下半と底部をへら削りしている器肉の薄い土器である。2

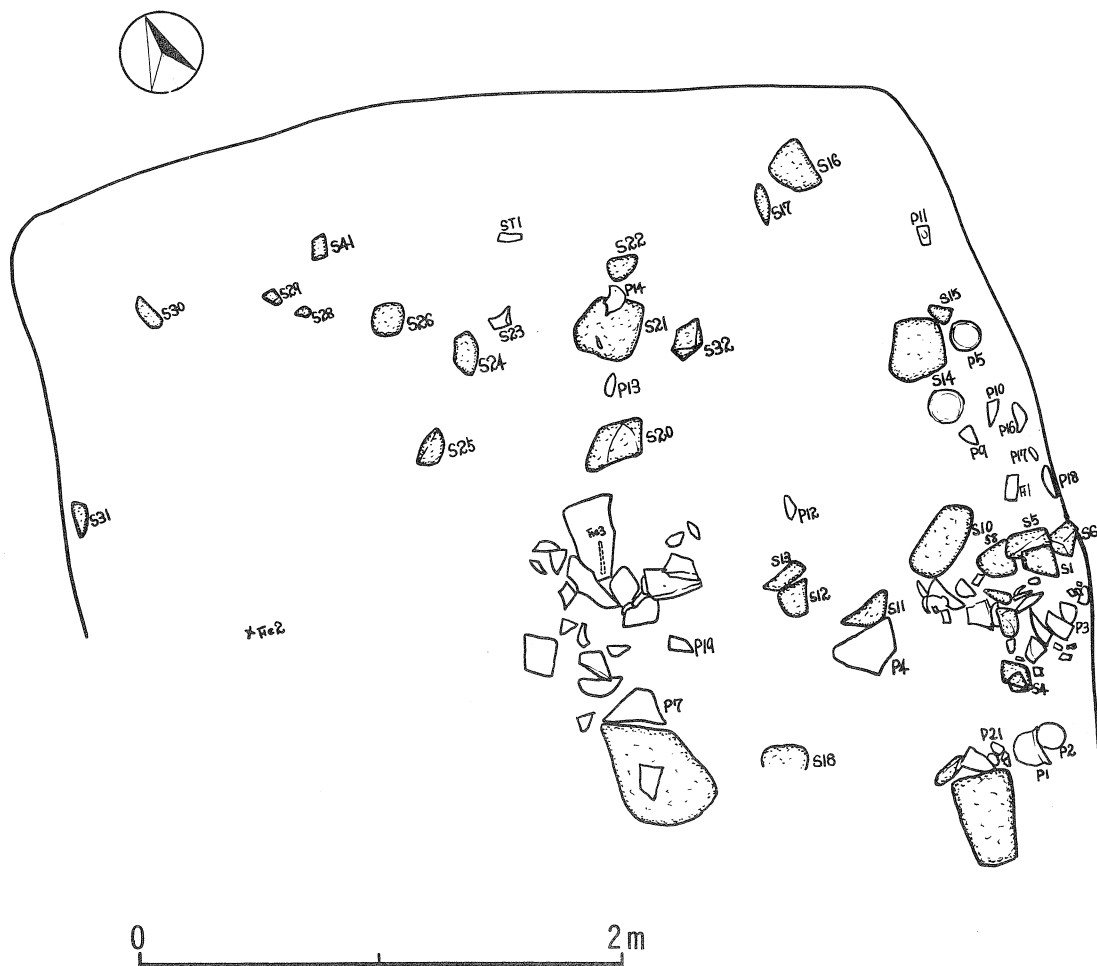


- I 暗褐色
- II " (ローム粒子混入)
- III 黄褐色土
- IV 烧土

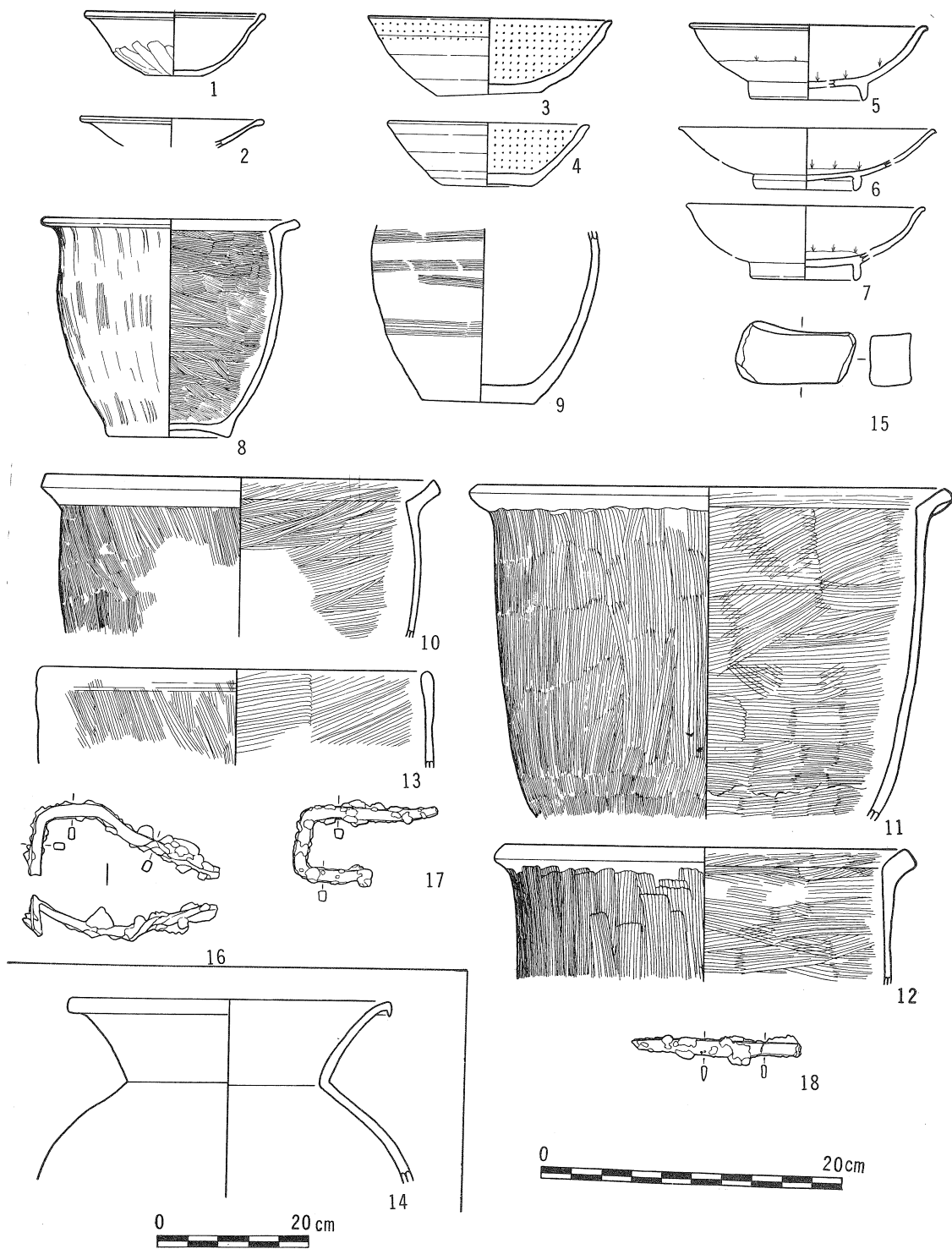
0 ————— 2m

第105图 柳坪B地区8号住居址平面图

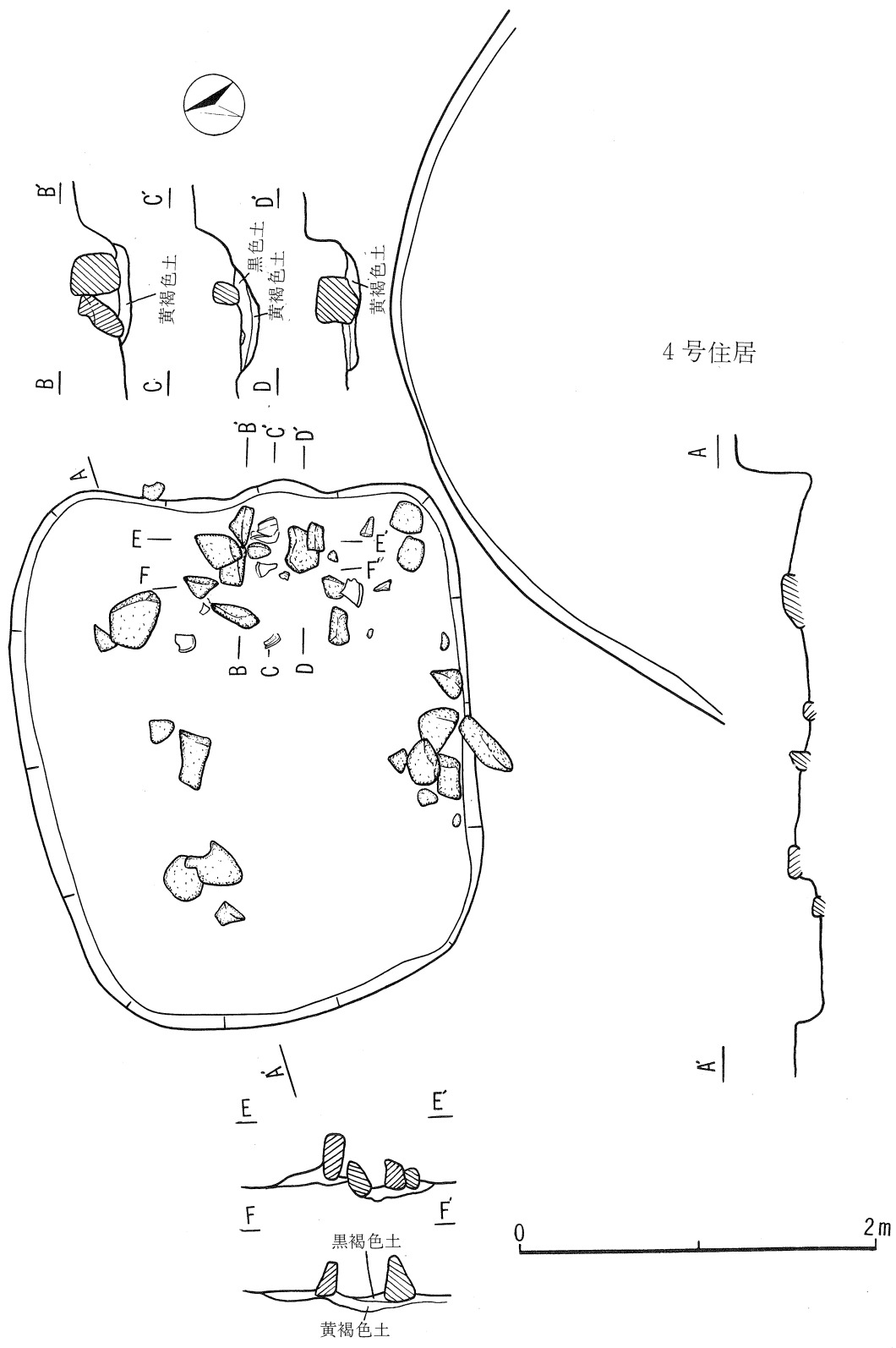
は皿形土器の口縁で1と同様に玉縁口縁をもち、内外面をロクロ横ナデしている。3、4は内面黒色研磨土師杯で、底部糸切り底である。外面はロクロ横ナデ整形をもつ。器肉が厚く、口縁部すぐ下はやや厚くなることを特徴とする。5～7は灰釉陶器で、6は皿であろうか。5、6は灰色胎土で、釉は回し掛けにより口縁部内外に施される。5は緑灰色、6は黄灰色の薄い釉である。7は黄灰色胎土黄灰色釉が外面は上半、内面は底まで施釉され、触着を見ないが、5、6は重ね焼の触着痕が残る。折戸53号窯式に比定されるであろう。8、9は小型甕で、口縁は屈曲して外反する。8は内外面とも刷毛目整形であるが、9は内外面横ナデ整形で、外面には横方向に幾条かの刷毛目が施され、胴部最大径内部にタール、外面にスガが付着する。8は底部木葉痕、9は糸切り底である。10～12は口縁部が外反し、胴部に膨みの少ない器形で、口縁部外面を除いて刷毛目痕がみられる。11、12は口縁部が肥厚化しており、補強粘土が貼り付けられるが、10はそれ程厚くない。13は口縁が直立する甕で、外面口縁部は横ナデされている。14は須恵器の大甕で、口唇は折り曲げられ、胴部には叩き目がある。15は砥石の破片で床直出土である。16、17は馬具の一部と思われる鉄製品で、平打ちのもので一部ねじられている。18は刀子である。



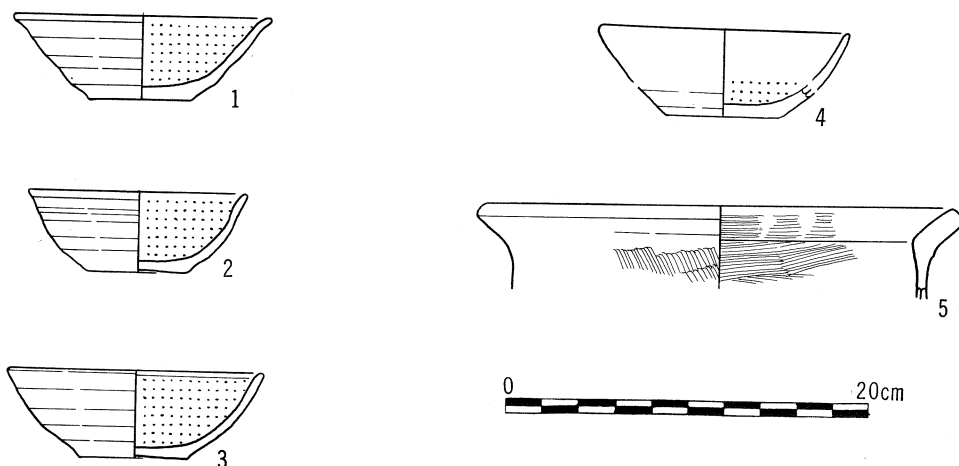
第106図 柳坪B地区8号住居址遺物図



第107图 柳坪B地区8号住居址出土遗物图



第108图 柳坪B地区9号住居址平面图



第109図 柳坪B地区9号住居址出土遺物

9号住居址

(第108図、図版62)

昭和48年8月15日～8月22日

○プラン 方形、東西2.97m、南北2.5m

○主軸 N-99°-E

○柱穴 なし

○周溝 なし

○壁 全体が確認されている。東北コーナー付近は軟弱で礫を含まないが、他は小礫を含んでかたく、良好である。

○床面 全体的に凹凸が少なく、平面的で小礫を含むかたいロームである。高低差は約9cmほどで東から西に傾斜している。

○カマド 東壁中央に位置する石組カマドは袖石の一部を除いて大部分が破壊されている。カマド内ピットの底面は小礫含有ロームで、焼土厚は約10cmある。袖石は5個残っており、粘土は少ない。

○出土遺物 カマド内及び周辺より一括3、(土師器)が出土しているだけである。

○その他 2号住居及び9号住居に近接している。

(竜前、小林)

出土遺物

(第109図、図版62)

1～4は内面黒色研磨土師器杯で、外面口クロ横ナテ横糸切り底である。口唇は外反するのが1だけで、他は先端が丸く器内は比較的厚い。5は口縁部外側が横ナテされる他は刷毛目整形で、口縁部は肥厚化している。

17号住居址

(第110図、図版63)

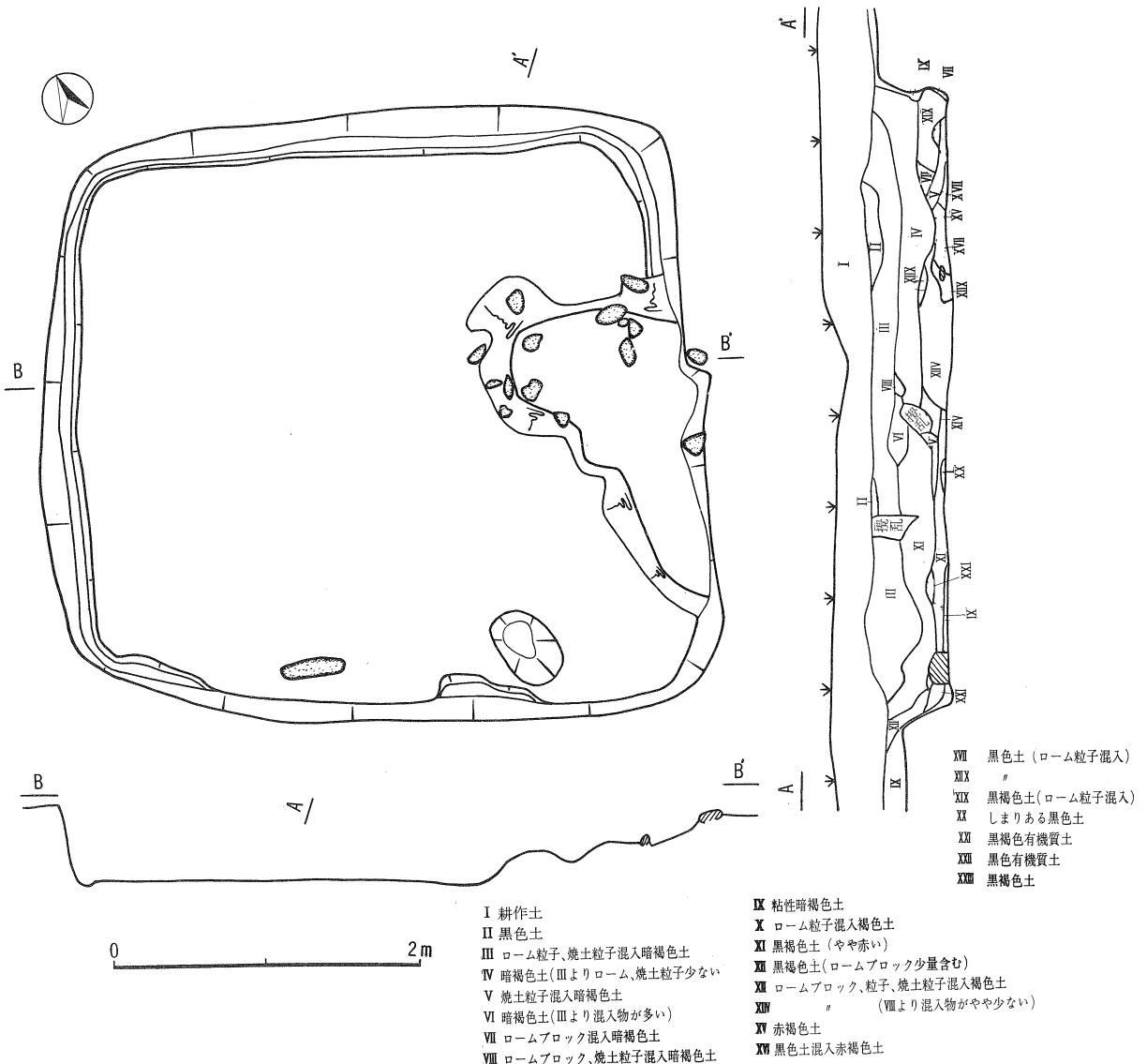
昭和48年9月8日～9月18日

○プラン 方形(隅丸方形)東西4.3m、南北4m

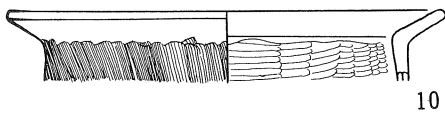
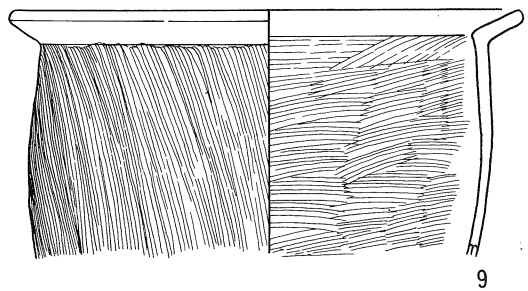
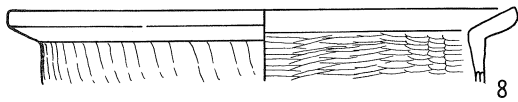
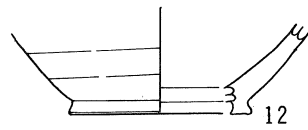
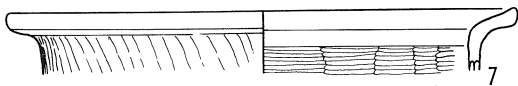
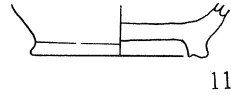
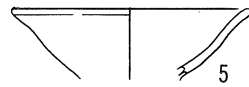
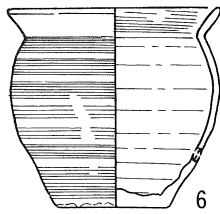
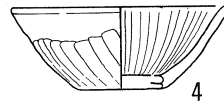
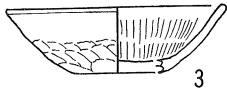
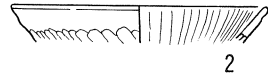
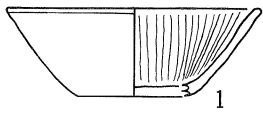
○主軸 N-114°-E(カマド中軸線)

○柱穴 なし

- 周溝 カマド及びその南側を除いて一周する。周溝の幅5cm~10cmで、深さは5~6cmである。
- 壁 全体に良好でかたくしまりがあり、垂直に立ち上っている。北壁で壁高約60cm、南壁で約45cmある。
- 床面 北西コーナー付近を除いて全面貼床であるが、その表面は凹凸が少なく、平面的でしまりもある。この貼床はローム土と黒褐色土を交互につきかためたような状態で、最大数が18層程ある。(図版63)
- カマド 東壁ほぼ中央に設置されているが、組石が少なく、粘土カマドのようである。粘土の範囲は120×80cmも広がり、焼土は10cm程残っていた。
- 出土遺物 出土量が少なく、一括土師器3点程である。
- その他 貼床が特異で、この貼床を全面的に取り除くと皿状ピットが7個発見されたが、このピット



第110図 柳坪B地区17号住居址平面図



第111图 柳坪B地区17号住居址出土遗物



トの用途も不明で遺物も少ない。又、入口部と思われる南壁下に踏み台様の石が置かれている。

(小林)

出土遺物 (第111図、図版63)

1～5は土師器杯で、1はロクロ横ナデ整形後、内面に放射状暗文を施す。2～4はロクロ横ナデ後、内面に放射状暗文、外面胴部下半はへら削りで、底部は不明である。6の小型甕は底部糸切り底で、胴部外面は刷毛目が横位に施される。7～10は甕口縁で、胴部内外面に刷毛目痕が施される。口縁部は薄く外反する。11、12は須恵器瓶の底部で12は器面外側を横方向にへら削り整形されている。

18号住居址 (第113図、図版64)

昭和48年9月16日～9月23日

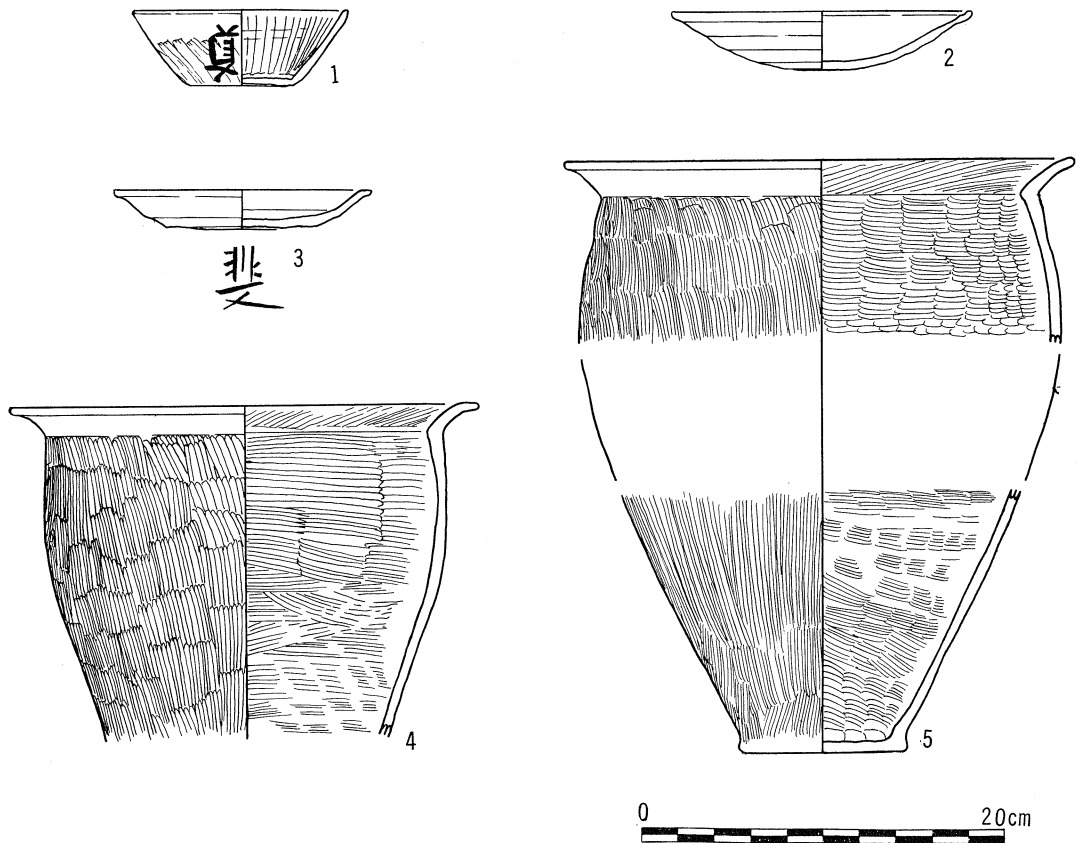
○プラン 方形、南北4.2m、東西4.2m

○主 軸 N-108°-E (カマド中軸線)

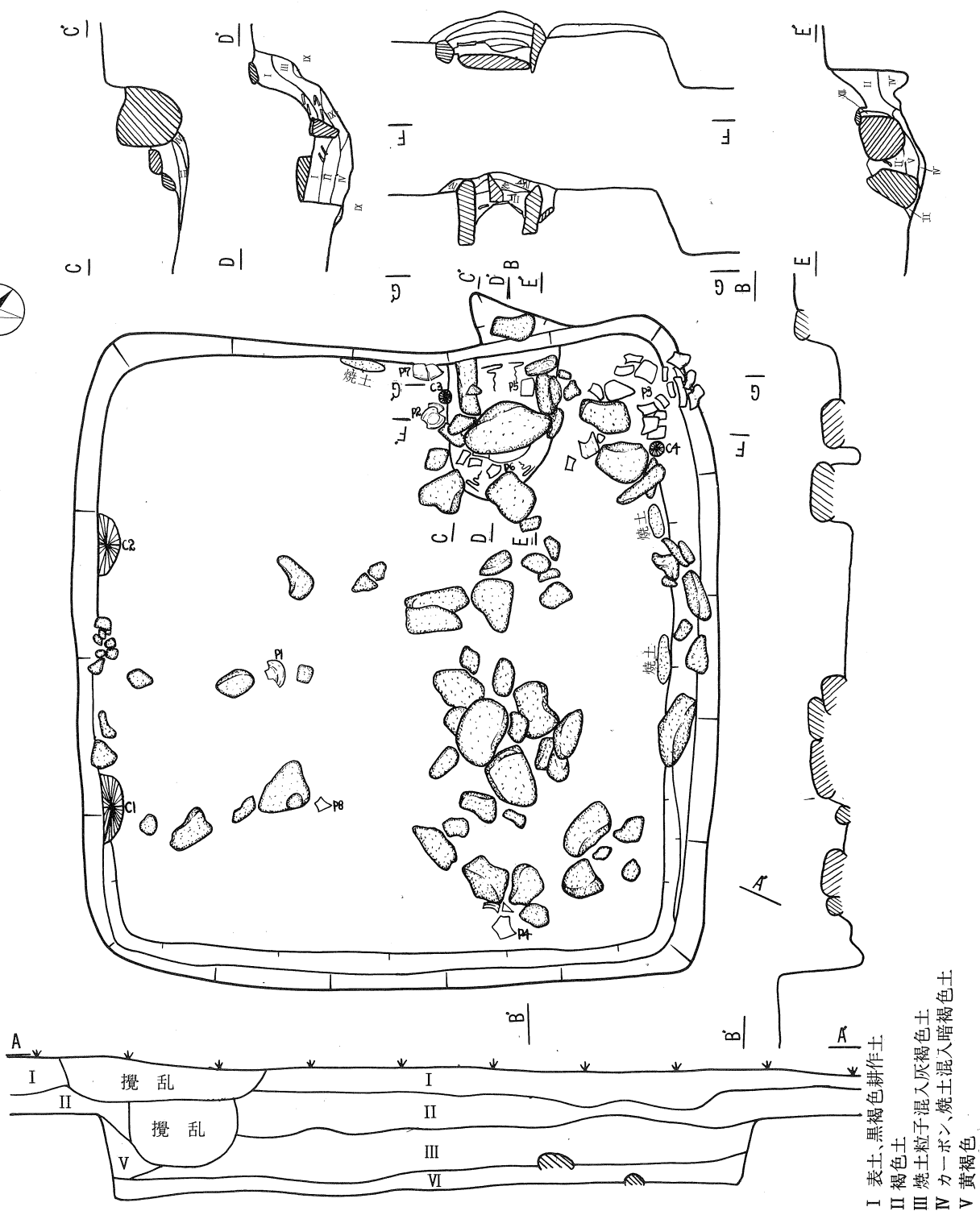
○柱 穴 なし (ただし住居壁に密着して三ヶ所程炭化物があり、これが柱と思われる)

○周 溝 住居南及び西壁下にあって幅12～13cm、深さ約10cmである。

○壁 全体的に約50cmの深さで、ほぼ垂直に近く、しまりもあって良好である。又、北壁には高さ23～25cm、幅40cmの木の炭化物が密着しており、柱穴と想定した。



第112図 柳坪B地区18号住居址出土遺物



- I 表土、黒褐色耕作土
- II 褐色土
- III 焼土粒子混入灰褐色土
- IV カ一ボソ、焼土混入暗褐色土
- V 黄褐色

0 2m

第113図 柳坪B地区18号住居址平面図

- 床 面 南壁近くに焼土の堆積が多量に見られ、北側の壁近くに皿状ピットがある他、全体として水平で良好なしまりをもつ。又、南半分の覆土に多量の石の流れ込みが見られる。
- カマド 東壁南寄りに設置され、両袖とも良好に残り、中央部に支脚があるが焼土は少ない。
- 出土遺物 土師器杯（カマド北側1、中央1）2、甕1、鉄片2、その他破片
- その他 住居内覆土の礫の在り方の示す意味は何であろうか。

（宗、長野）

出土遺物 （第112図、図版65）

1は土師器杯で、内外面ともロクロ横ナデで、内面にはヘラ放射状暗文が施され、外面胴部下半及び底部はヘラ削りで、胴部に墨書が施される。墨書は「真」であろうか。2、3は皿で、2は丸底に近く3は平底で、内外面ロクロ横ナデ後、外面胴部下半を横方向にヘラ削りする。2は口縁内部が沈線状に凹み、3は胴部が屈曲し、口縁は外反する。底部に墨書があり、「斐」とあるが、甲斐の「斐」であろう。4、5は口縁部が屈曲し、ゆるやかに外反して、胴部はイチジク状に膨らむ器形をもち、口縁部外面の横ナデを除いて内外面とも刷毛目整形痕がある。5は木葉痕底部である。

19号住居址 （第114図、図版66）

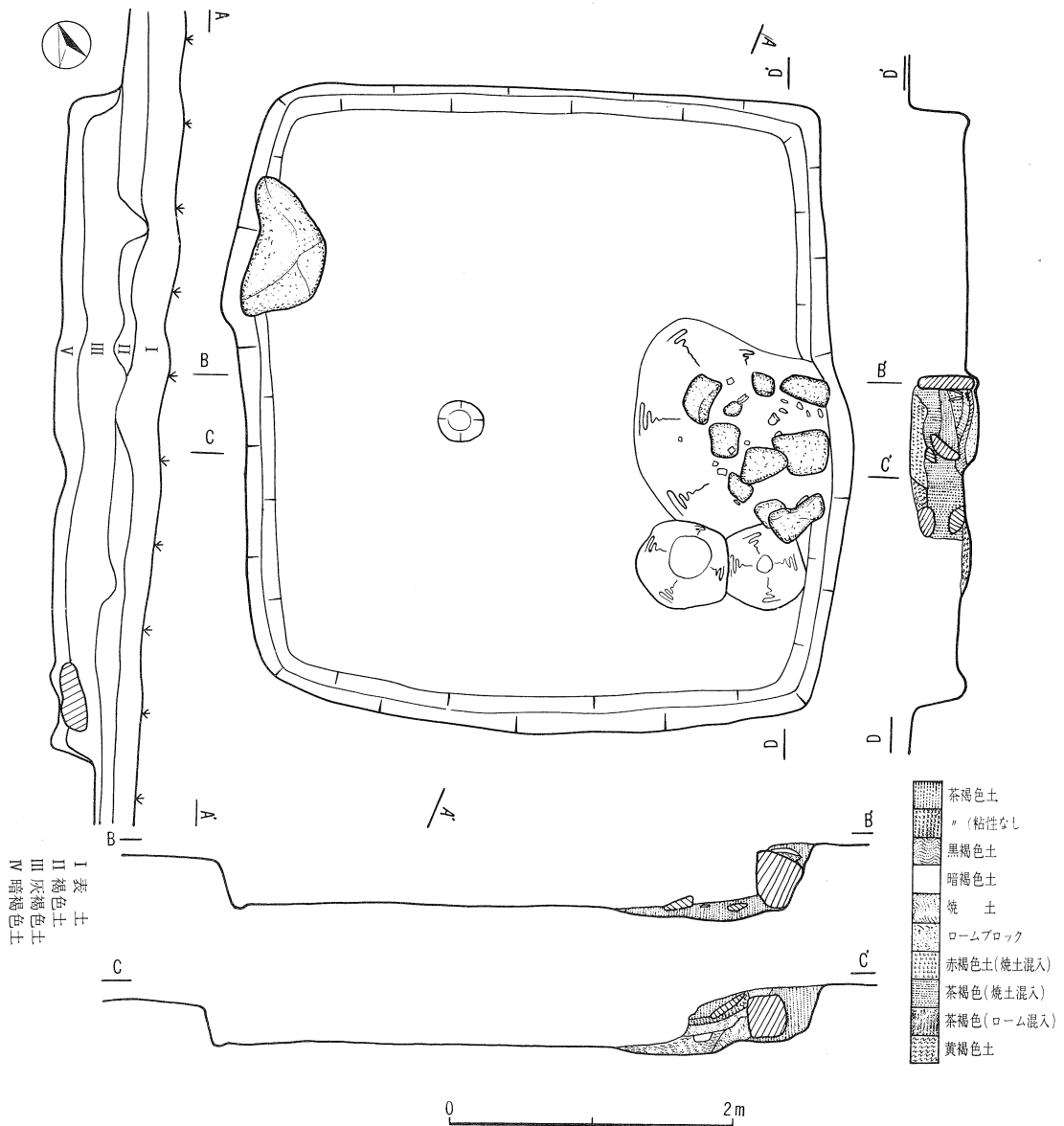
昭和48年9月16日～9月24日

- プラン 方形、東西3.9m、南北4.3m
- 主 軸 N-65°-E（カマド中軸線）
- 柱 穴 なし
- 周 溝 カマド部を除いて一周する。幅約10cm位、深さ2～4cm位であるが、南東コーナーでは、8cmの深さをもつ。
- 壁 壁高平均約30cmで、しまりの良いロームでほぼ垂直に立ち上っている。
- 床 面 全体にロームの良好な床で、カマド西側、住居址中央部は周囲より約4cmほど低くなっており、カマドの周辺は掘り込みのため除々に下っている。
- カマド 東壁中央に位置しており、袖石は良好に残っている。この周囲には礫が6個散乱しており、カマドの組石が崩れたものと考えられる。カマドの掘り込は東西1.5m南北約1.5mで、袖石を置いた掘り込みのピットが残っている。焼土はカマド内に約15cm程堆積しており、又、カマド南にも存在する。
- 出土遺物 土器が少なく、礫が著しく多い。土師器片がカマド周辺にあつて、カマド内からは土師器一括が出土している。又、南壁よりに須恵器があり、北東コーナーに近く刀子が出土している。
- その他 中央部に径23cm、深さ20cmのピットがあるが、柱穴か不明。又、カマド南側の径65cm、深さ21cmのピットは中央から焼土や、粒子の粗い黒色土が混ざっており、灰捨てピットであろうか。

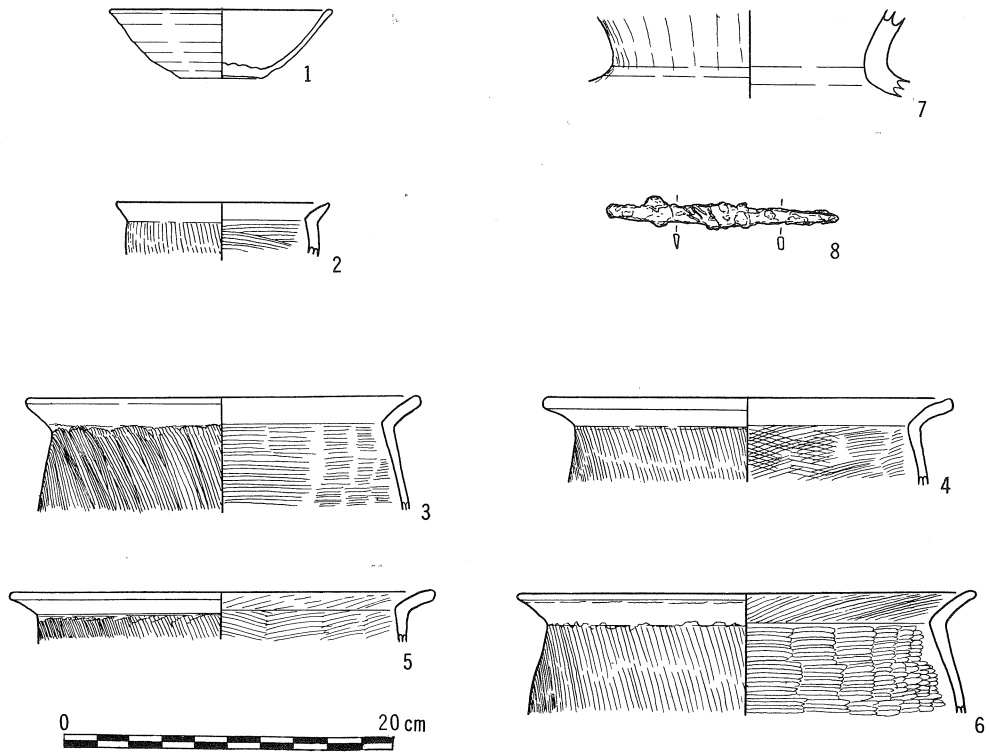
（永瀬）

出土遺物 （第115図、図版66）

1はロクロ横ナデ整形で、糸切り底の須恵器杯で、内面底部には渦巻状整形痕がある。2は小型甕で、口縁部は横ナデ整形で先端が尖り、胴部は刷毛目痕が見られる。3～6は甕形土器で、口縁部は胴部と同じ厚さで外反しており、胴部内外面刷毛目整形がある。7は外面ヘラ磨きの土器で、器形は不明である。8は刀子。



第114図 柳坪B地区19号住居址平面図



第115図 柳坪B地区19号住居址出土遺物

20号住居址

(第116図、図版67)

昭和48年9月9日～9月8日

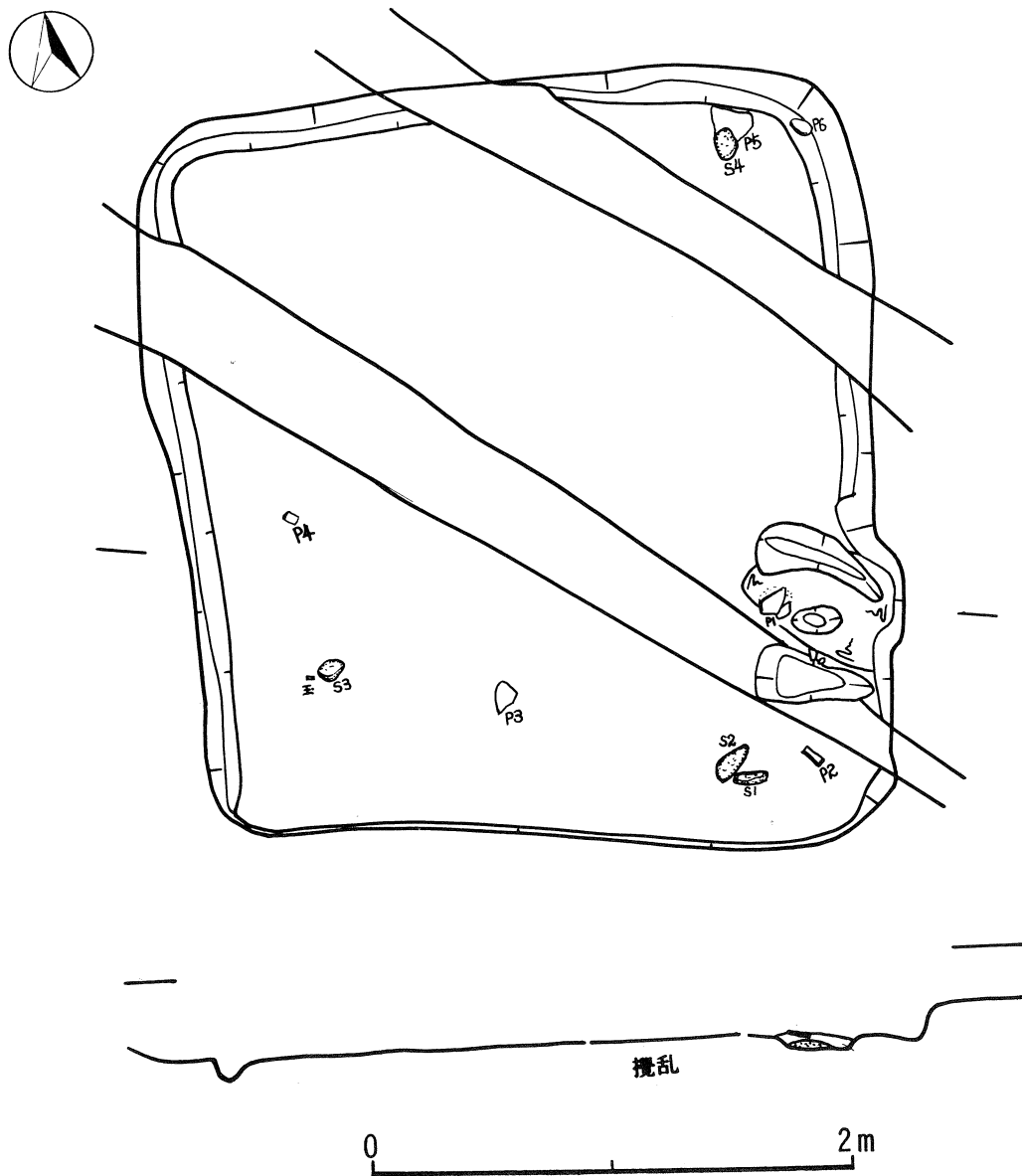
- プラン 方形、東西2.9m、南北3.15m
- 主軸 N-102°-E
- 柱穴 なし
- 周溝 南辺及び東辺カマド周辺では存在するが、南壁は耕作による攪乱の影響を受けたと思われ、確認できない。
- 壁 耕作による溝が住居を東西に切って3本ほど走っており、南壁中央部は床面と同一レベルまで壁が削られている。北壁においては高さ6cmのロームの壁が残り、北東コーナーが最も高く12cmある。
- 床面 攪乱部を除いて良好な状態で、かたくふみかためられたロームが平担になっているが、北から南にやや傾斜している。
- カマド 東壁中央南壁寄りに位置し、煙道は壁を20cm程掘り込んでいる。袖石は残存せず、袖石を置いた掘り込みが南北に平行してあり、中央に小ピットが存在する。支脚石を設置したピットだろうか。焼土は袖石掘り込みの付近より集中して発見された。
- 出土遺物 遺物は全体的に床面より約5cm程浮いた状態で出土しており、住居全体から散乱して出土する。土師器片5、須恵器片2、玉1、

○その他 なし

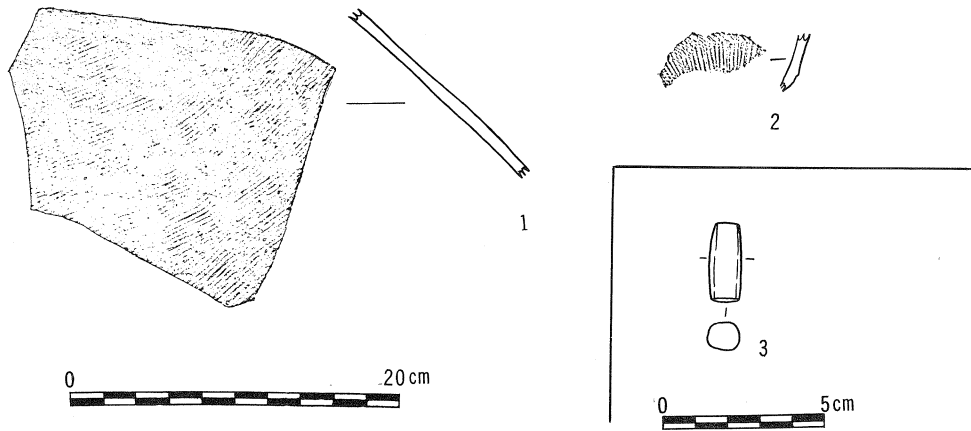
出土遺物

(第117図、図版67)

1は常滑窯陶器と類似しており、暗褐色を呈し、叩き目がある。2は条痕文が施されるが器形は不明である。3は石製円柱形玉で、管玉ではない。



第116図 柳坪B地区20号住居址平面図



第117図 柳坪B地区20号住居址出土遺物

### 21号住居址

(第118図、図版68)

昭和48年9月7日～9月11日

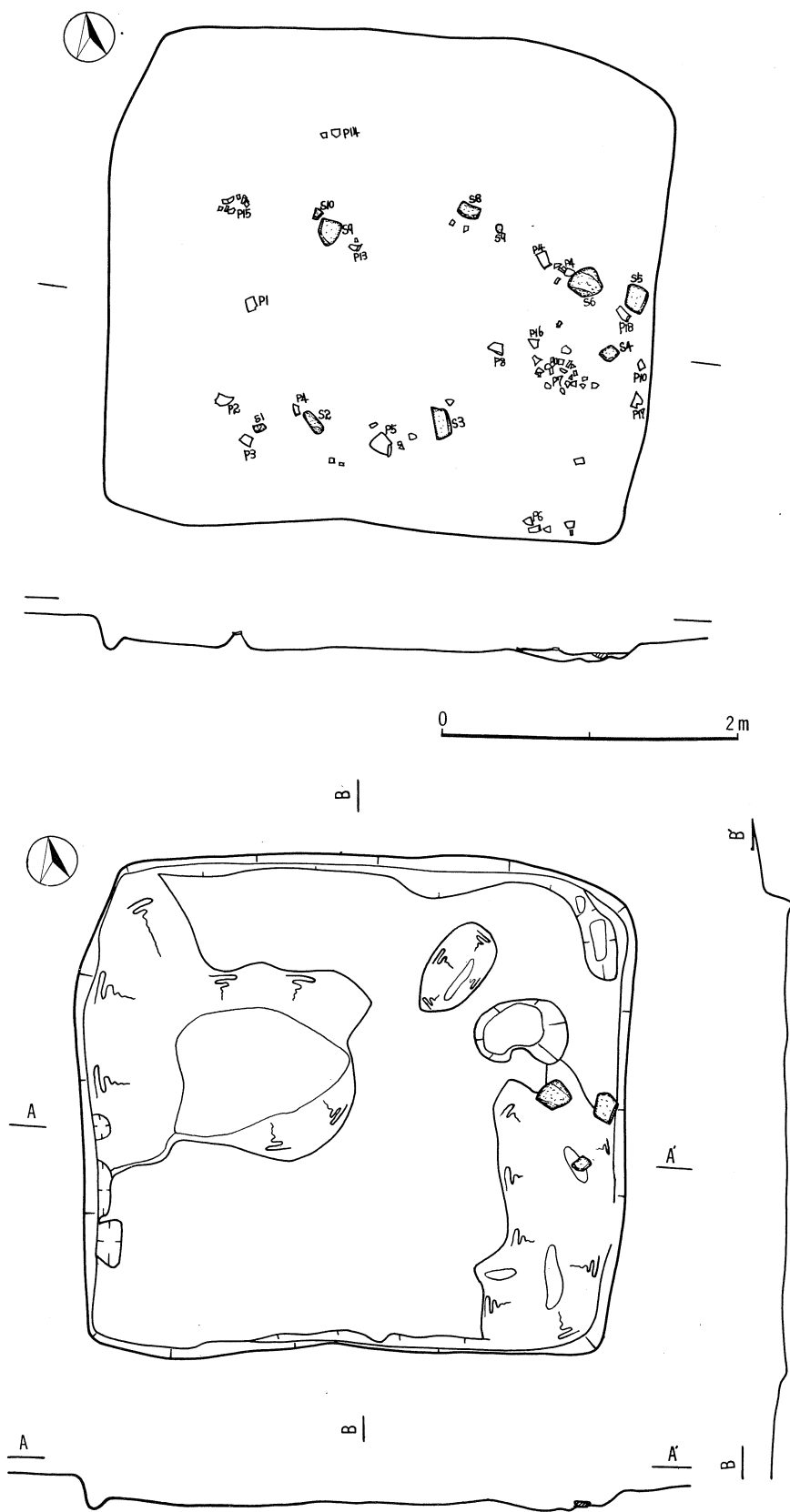
- プラン 方形、南北辺3.4m、東辺3.2m 西辺3.3m
- 主軸 N-110°-W
- 柱穴 なし
- 周溝 住居北壁に沿って存在するが、北東コーナーは幅20cmにもなる。又、南辺及び西辺も部分的で、杭を打ち込んだ様に凹凸が激しく、小ピットが連続している。
- 壁 北側と西側は床面からの立ち上りがロームで明確に把えられたが、南側はロームブロックの混入があり、立ち上りは部分的である。また、カマドをもつ東壁は攪乱を受けて正確ではないが、部分的なロームブロックの立ち上りを結んだ。壁高約10cmである。
- 床面 中央部はハードロームの床面を確認できたが、北側の床面は黒色土混入ローム土の貼り床で約7cm下にローム層がある。南東部はコーナーの付近に焼土が堆積しており、それより内側になると南西部床面と似て硬いロームで凹凸が激しい。又、南辺中央内側に黒色土とロームを交互に薄く貼り重ねた貼床が部分的に存在するが、これが入口部ではないかと思われる。
- カマド 東壁中央に礫が散乱しており、これをカマドとするが、この南側に50cm×70cmの焼土の堆積があり、焼土からだけ見てゆくと、この南東コーナーがカマドとも思われるが、やはり石組が部分的に残っている所をカマドとしたい。焼土の堆積部は灰溜めピットであろう。
- 出土遺物 灰釉陶器片5、他土師器内黒杯若干が出土している。
- その他 なし

(永瀬)

### 出土遺物

(第119図、図版68)

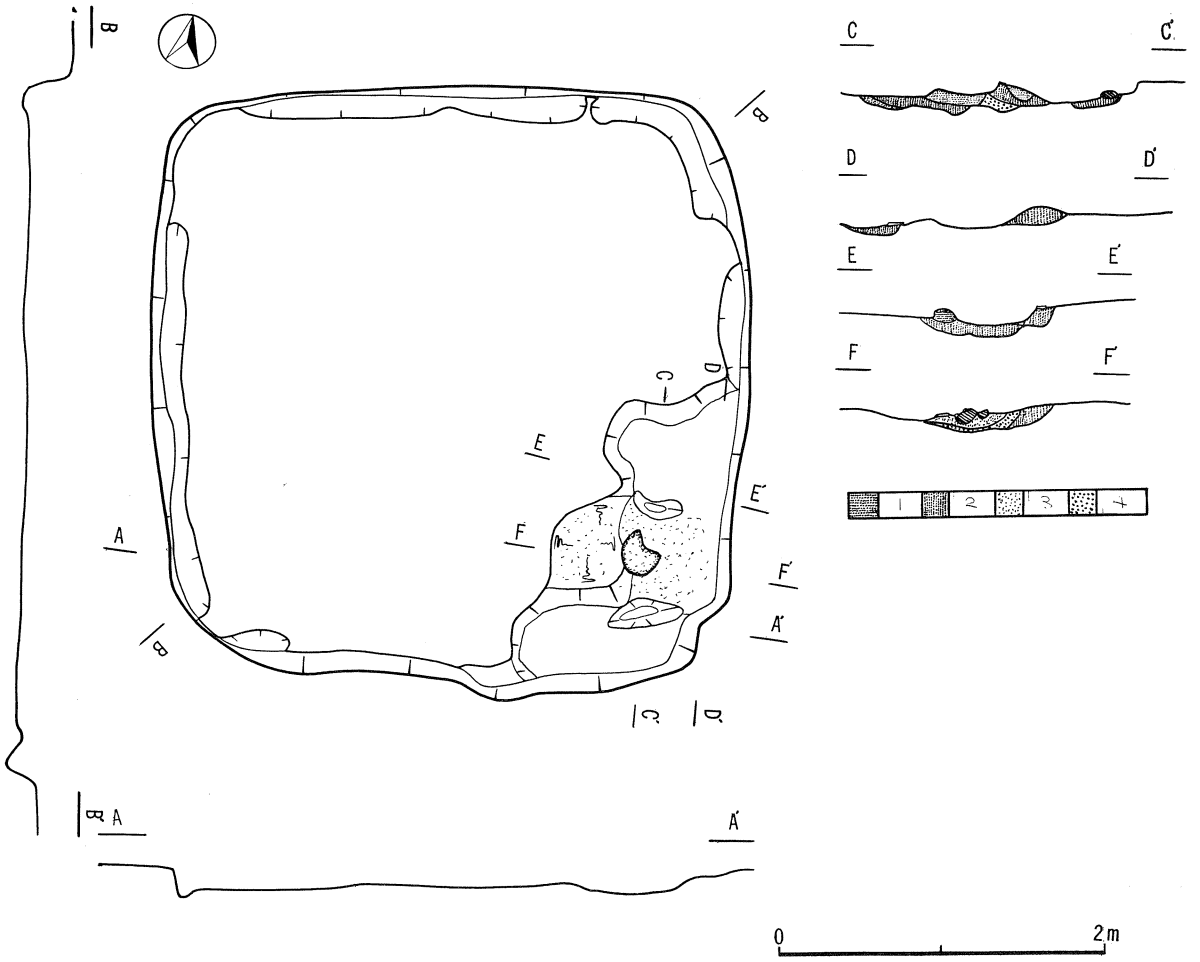
1～5は土師器杯及び皿で、玉縁の口縁は外反し、胴部下面はへら削りされ、1、4はへら削り底部、2、3は糸切り後へら整形されている。6は灰釉陶器で内外面に釉が回し掛けされている。黒笹90号窯式以降に比定されるであろう。7は小型甕で、8は灰釉瓶で、釉が肩から幾条か垂れさがっ



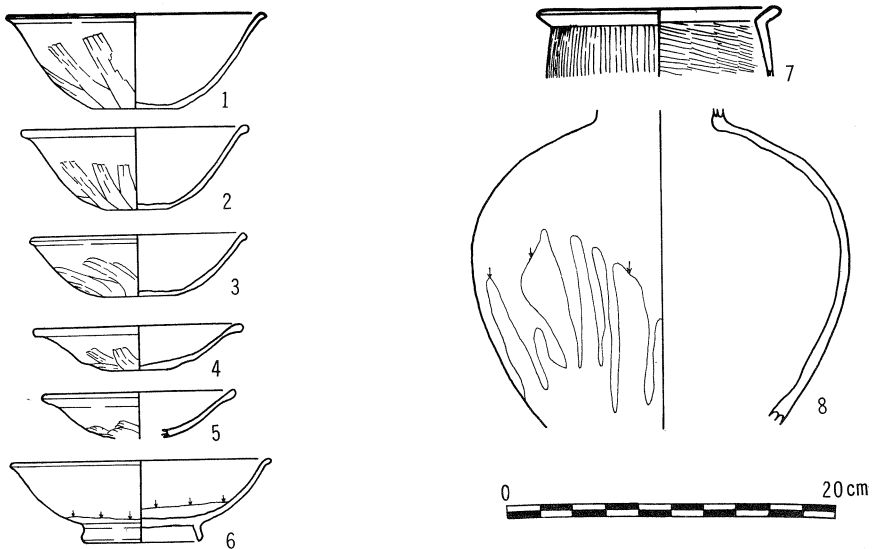
第118图 柳坪B地区21号址平面图、遗物图



21号住居址出土遺物



第120图 柳坪B地区22号住居址平面图



第119图 柳坪B地区21号住居址出土遺物

ている。釉は鉛緑色で、頸部接合部の簡素化から6と同様の時間が考えられる。

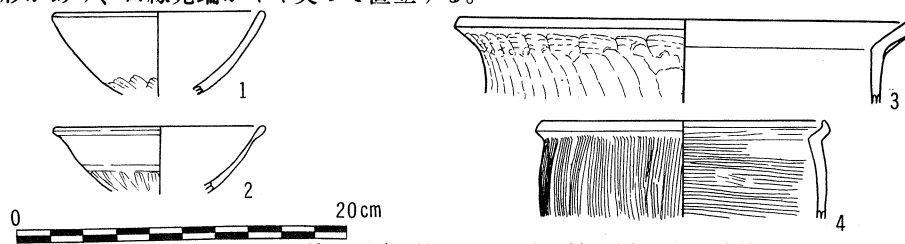
## 22号住居址 (第120図、図版69)

昭和48年9月9日～9月14日

- プラン 方形(やや台形か)東辺3.5m、南辺3.1m、西辺3.2m、北辺3.3m
- 主軸 N-78°-E
- 柱穴 なし
- 周溝 東辺南側と南辺を除いて断続的に存在するが、幅約15cm、深さ6cm位である。
- 壁 北壁、西壁とも良好でしまりもあるが、東壁、南壁は攪乱を受けており部分的に不明確である。
- 床面 全体として良好で、ほぼ平面的であるが、南側、カマド焚口部前面には2~3枚の貼り床がある。
- カマド カマド位置は東壁南寄りに位置し21号住居と焼土のあり方等が類似しているが、この住居の方が形態を残していると考え。袖石は崩れているが、掘り込みが残り、焼土も充分である。
- 出土遺物 遺物は豊富ではなく、土師器、須恵器、灰釉等の破片が出土している。
- その他 なし (永瀬)

## 出土遺物 (第121図、図版69)

1、2は胴部下半へら削りの杯で、2は玉縁口縁で器肉の薄い土師器である。3、4は甕であるが、3は胴部外面へら削りで、この時期としては珍しい整形方法と言える。4は小型のもので内外面刷毛目整形があり、口縁先端がやや尖って直立する。



第121図 柳坪B地区22号住居址出土遺物

## 25号住居址 (第122図、図版70)

昭和48年9月22日～9月23日

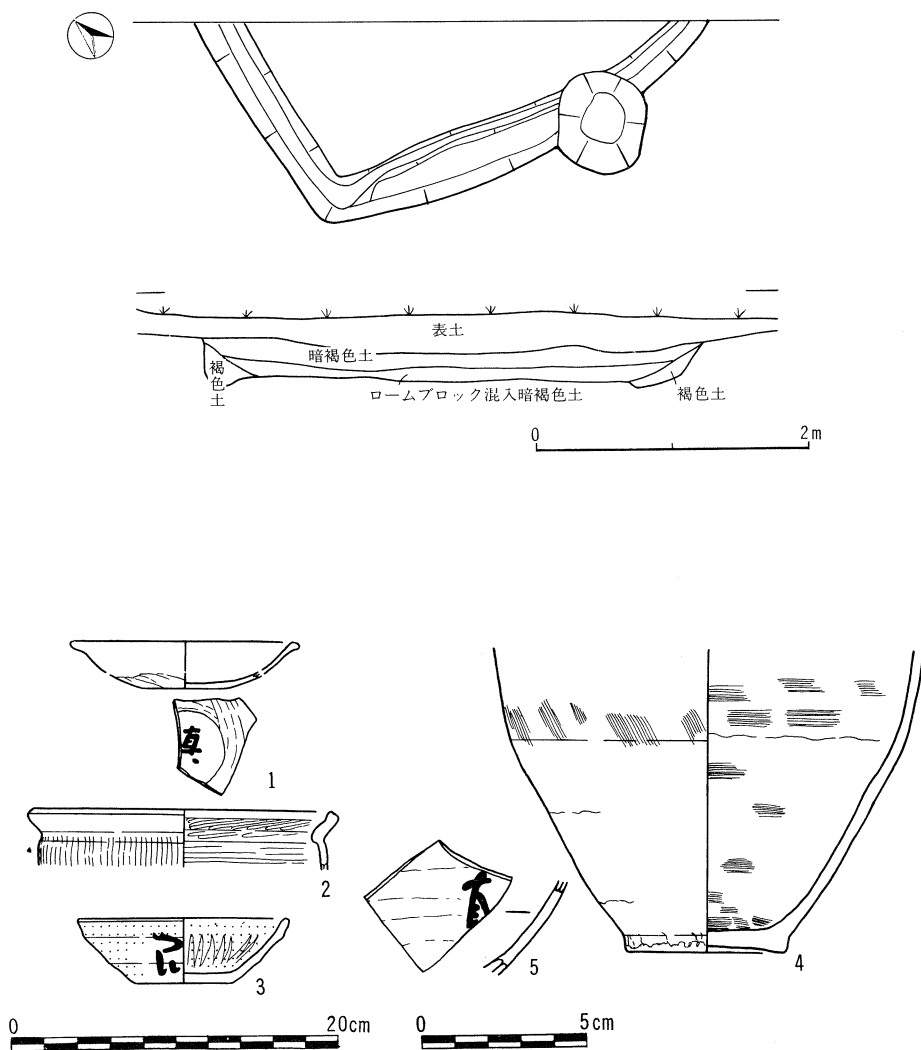
- プラン 方形、規模不明
- 主軸 N-86°-E (南辺)
- 柱穴 壁柱穴1本径7.5cm、深さ50cmのほぼ円形ピットで、入口部の柱穴であろうか。
- 周溝 プラン確認されている所では、ピットに切られている所を除いて周溝が存在する。幅10~20cm、深さ約10cmである。
- 壁 全体に良好で壁高約20~30cmを計る。
- 床面 床は貼床であるが、水平でかたくしまっている。貼床の土は黒色土、褐色土、ロームブロック混入している。
- カマド 調査地区外にて不明
- 出土遺物 覆土中より土師器、須恵器、墨書土師器が出土している。又、住居南より土師器甕形土器が掘られ、中より内黒土師器杯がある。

○その他 住居の大部分が調査地区外にあるため、遺構主要部分は検出できなかった。

出土遺物 (第123図、図版70)

25号出土遺物は1、2のみで、住居南から3、4が出土し、5はH41グリッドからの出土品である。1は底部と胴部下半にへら削り整形がなされ、底部に「真」の墨書がある。2は小型甕で、内外面とも刷毛目整形であるが、口唇は尖って直立する。

3、4は遺面が黒く、3は内面黒色研磨後放射状暗文があり、外面はロクロ横ナデで、ススの付着か全面が黒くなっている。胴部に判読不明の墨書がある。底部は糸切り底で、全体の器肉は厚く、口唇部下がやや膨むのを特徴とする。4は底部木葉痕のある甕で、刷毛目整形が粗雑に施されるが、器面は比較的滑らかで、他の甕と成形整形技法が異なるよえである。

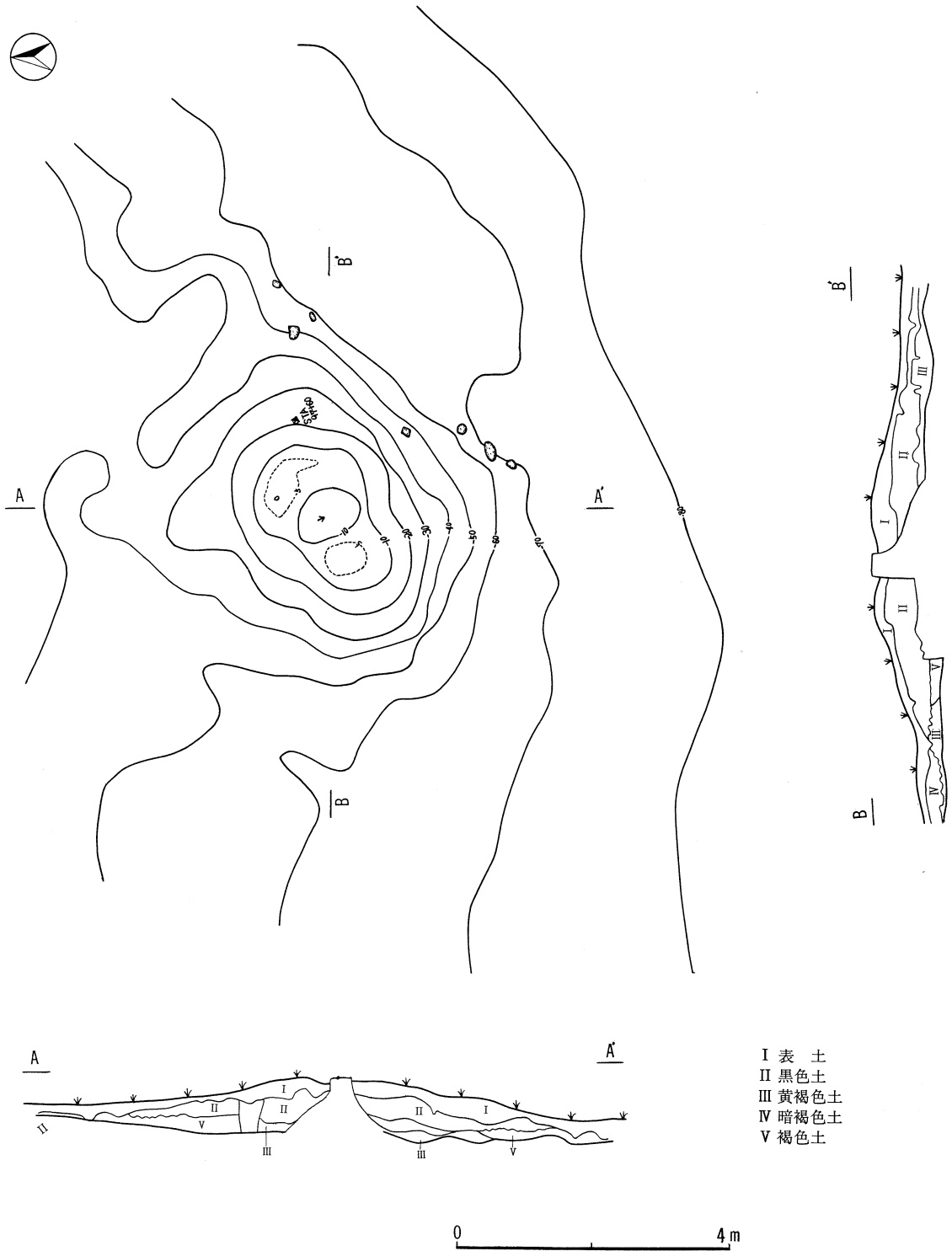


第123図 柳坪B地区23号住居址他出土遺物

境原古墳

(第124図)

柳坪B地区東側のSTA 97+60にあって円墳の形状をもつが、調査結果によると疑似古墳で、農作業中に草及び土を盛り上げたものと判明した。



第124図 柳坪B地区境原古墳実測図

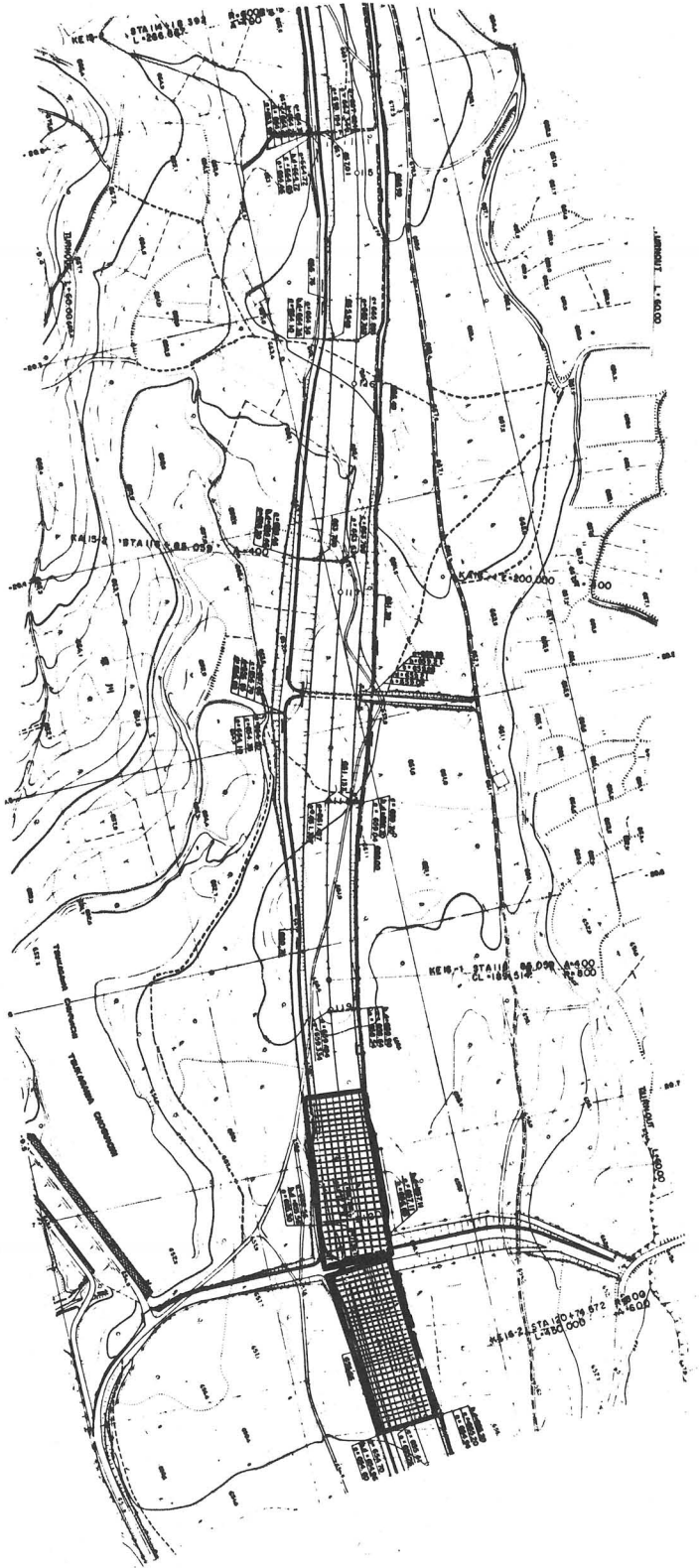
## 6 頭無遺跡

(第125、126、127図、図版72、73)

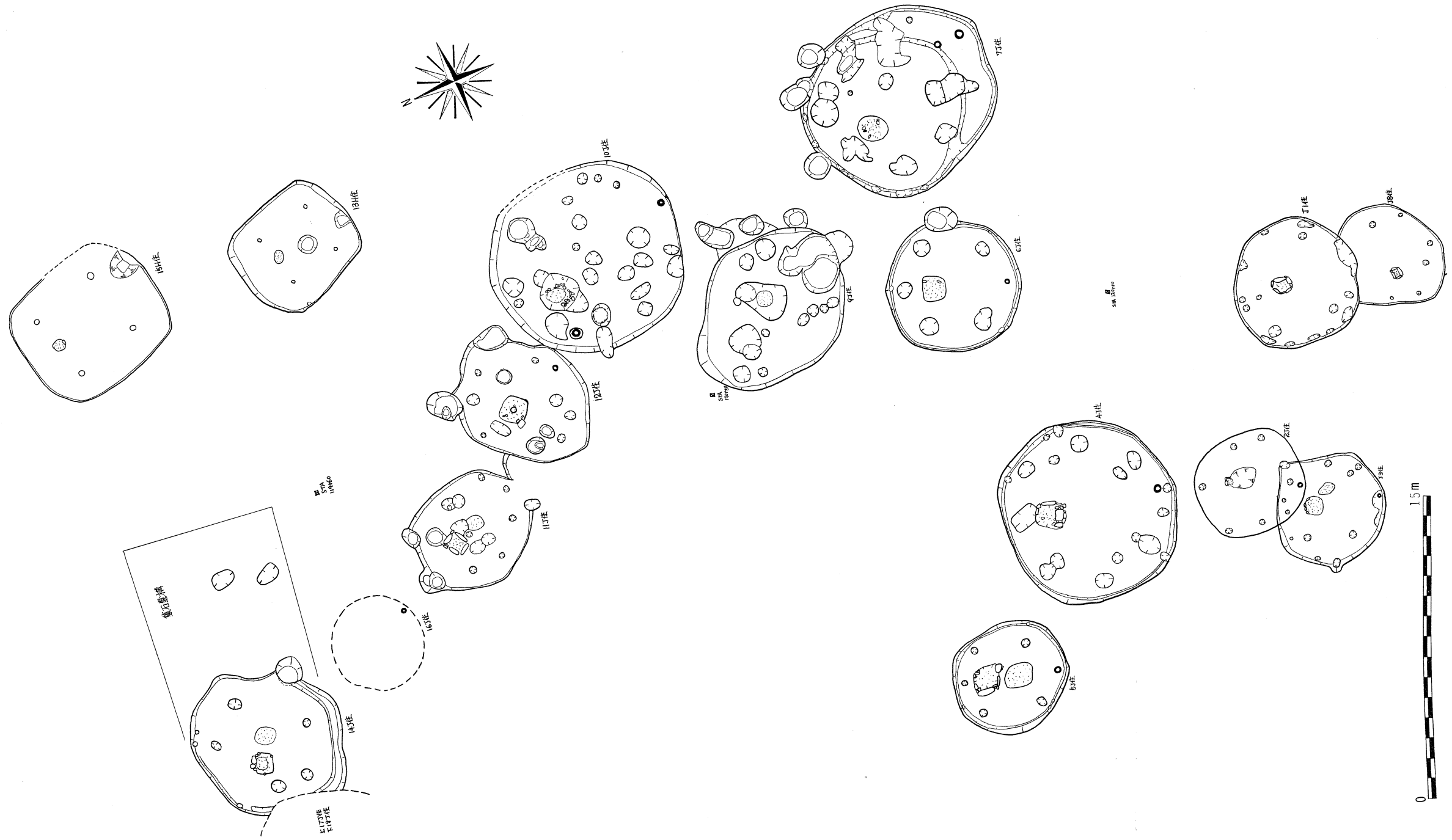
長坂町塚川字頭無所在のこの遺跡は、柳坪遺跡より南約2.3kmの舌状台地上にあって、高根町と台地東端で接している。中央道は柳坪遺跡からこの台地に沿って南下し、頭無遺跡のほぼ中央を約40mの幅で通過する。台地幅は北側で約100m、南側は200m程あって、遺構の集中している地区は、これの境を中心に広がっているようである。

台地西側に沢があり、これをせき止めて塚川貯水池が造られ、東側は沢に水田が並んでいる。又、地質は表土が約30～50cm、ローム層が2m程で、その下は円礫層になる。この円礫層が、遺跡内の多凹石、凹石の多量の原因、あるいは集石址を造ることができた理由と考えたい。

頭無遺跡の南に新田部落があって、これを抜けて東西に走る道路がSTA122の中央道と交差する。ここからSTA120+50までの北側は表土も浅く、遺構も溝が1本発見されただけである。溝の幅約5mで深さ1m50cmの曲りくねったV字溝であるが、遺物もほとんど無く、堆積土は黒色有機質土である。これと類似する溝がA地区とB地区の境にも2本あり、この性格が調査中問題となったが、黒色有機質土が柔らかく、遺物も磨滅した破片等しか出土しないことから、開墾した時に、山林と畑地とを分ける根切りの溝と



第125図 頭無遺跡地形図



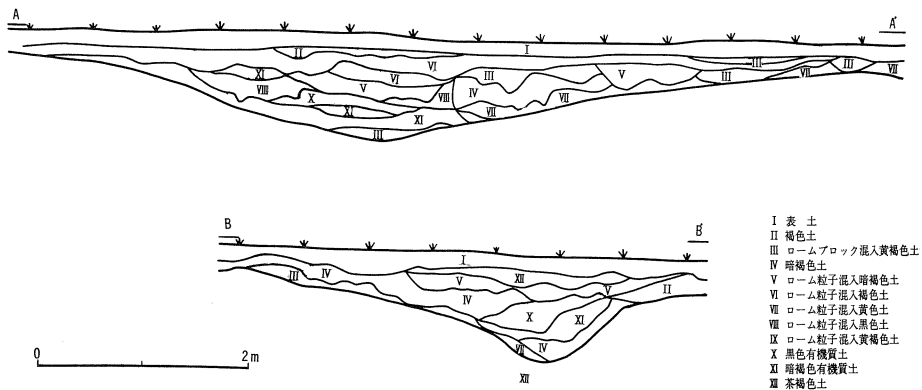
第126図 頭無遺跡全体図

いう判断を強くした。

ここから発見された遺構は、縄文時代住居16軒、古墳時代初頭の住居址2軒の計18軒であるが、縄文時代16軒のうち1軒は試掘し、16号の下の17号は存在を確認したのみである。集石遺構は集落の北側に位置して、規則制等は見られない。しかし土偶胴部1、足1、磨製石斧2の出土が見られ土拡もあるところから特殊な遺構とされるのであろう。

縄文時代の住居址のうち3軒は特に大きな住居で、直径約9mあって、それぞれ数回の拡張が見られる。この9mの巨大な住居には埋甕がいずれも埋設されている。埋甕は全掘した13軒の縄文時代住居のうち8軒。発見されなかった家でも埋甕埋設位置にピットがあったり、土拡があって確認できないものが3軒あった。中期後葉の埋甕埋設住居増加は一般的傾向にあるにしても、特に多い感じを受けるし、覆土の一括土器との関連で、土器廃棄のパターンと住居埋没の関連が把握することができればと考えている。

集落の配置からして、そのほぼ半分が道路敷にかかっている円形の配列をした住居跡群が発見されたが、小竪穴が住居に接して発見されていることは特徴あることであろう。又、住居址の重複が少ないことは、集落の一時期の同時存在を把握の上で貴重になると思う。



第127図 頭無A地区溝セクション

## 1) 縄文時代

### 1号住居址

(第128、199図、図版74)

昭和48年10月16日～11月3日

○プラン 円形、南北6.27m×東西5.97m

○主軸方向(推定) N-10°-E

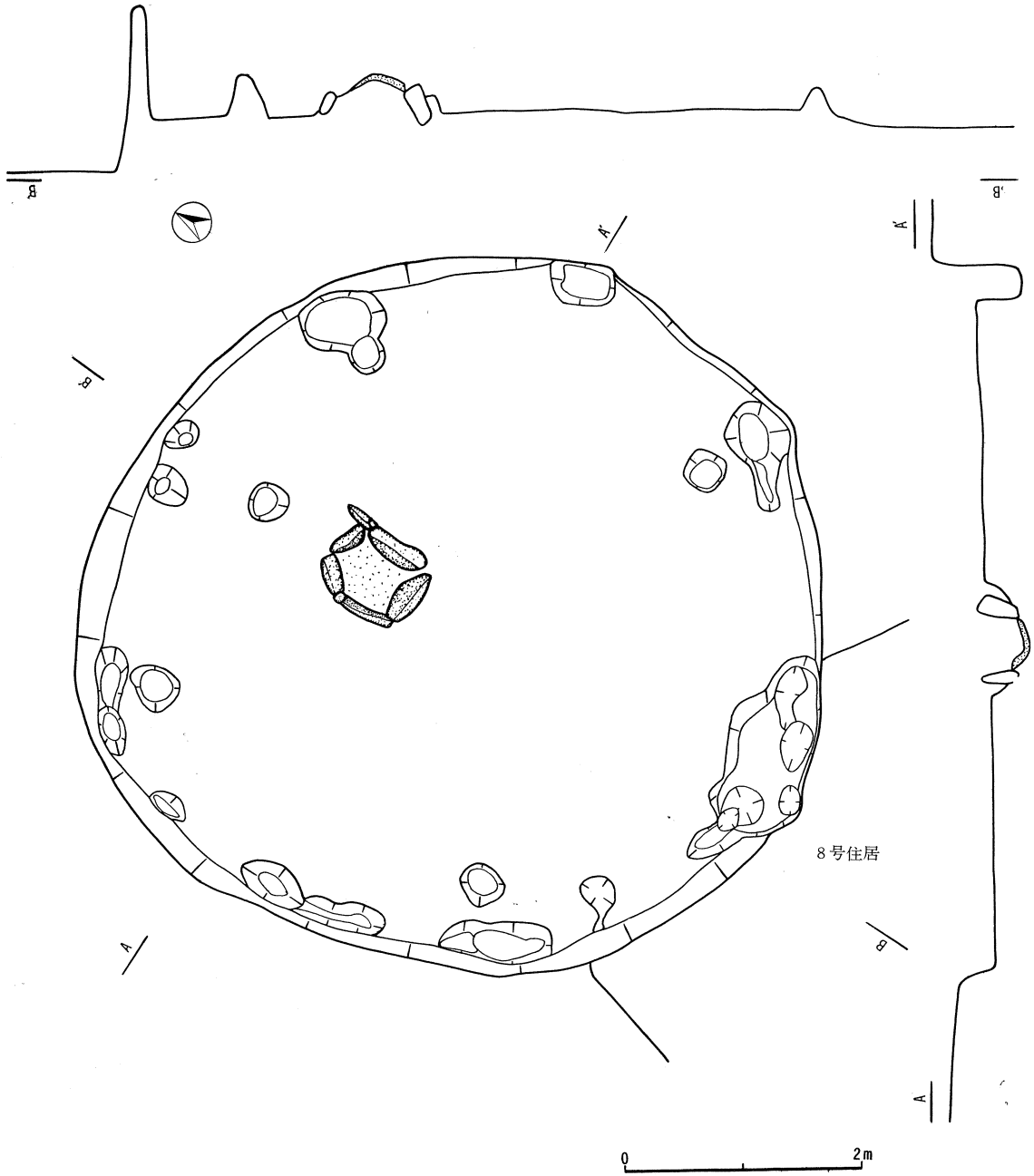
○柱 穴 支柱穴と思われるもの6本、ただしその外側に支柱穴ピットが存在しており、南側入口部と推定される位置に小ピット群が存在し、壁に沿って並んでいる。

○周 溝 点列状の小ピットが部分的に存在し周溝とはならない。

○壁 南側入口部と想定される部分は軟弱であるが、他は全体的に良好で北、西側が壁高40～50cm、東側30～35cmを計り、ほぼ垂直である。

○床 面 ほぼ水平でたたく踏みかためられている。

- 炉 五角形石囲炉で、南北87cm、東西70cm。炉内焼土は約5cm位である。
- 出土遺物 全般に一括土器が少なく、床面から浮いて出土している。逆三角堆土に含まれる遺物がほとんどで、中期末葉曾利Ⅳ～Ⅴ式に相当する遺物が大勢をしめる。一括土器4、凹石8、小型石臼1、打製石器1、多凹石1、その他黒曜石等が出土している。  
特殊遺物としては、土偶足部破片1個がある。
- その他 8号住居と南側で切り合っている。 (河合)



第128図 頭無1号住居址平面図



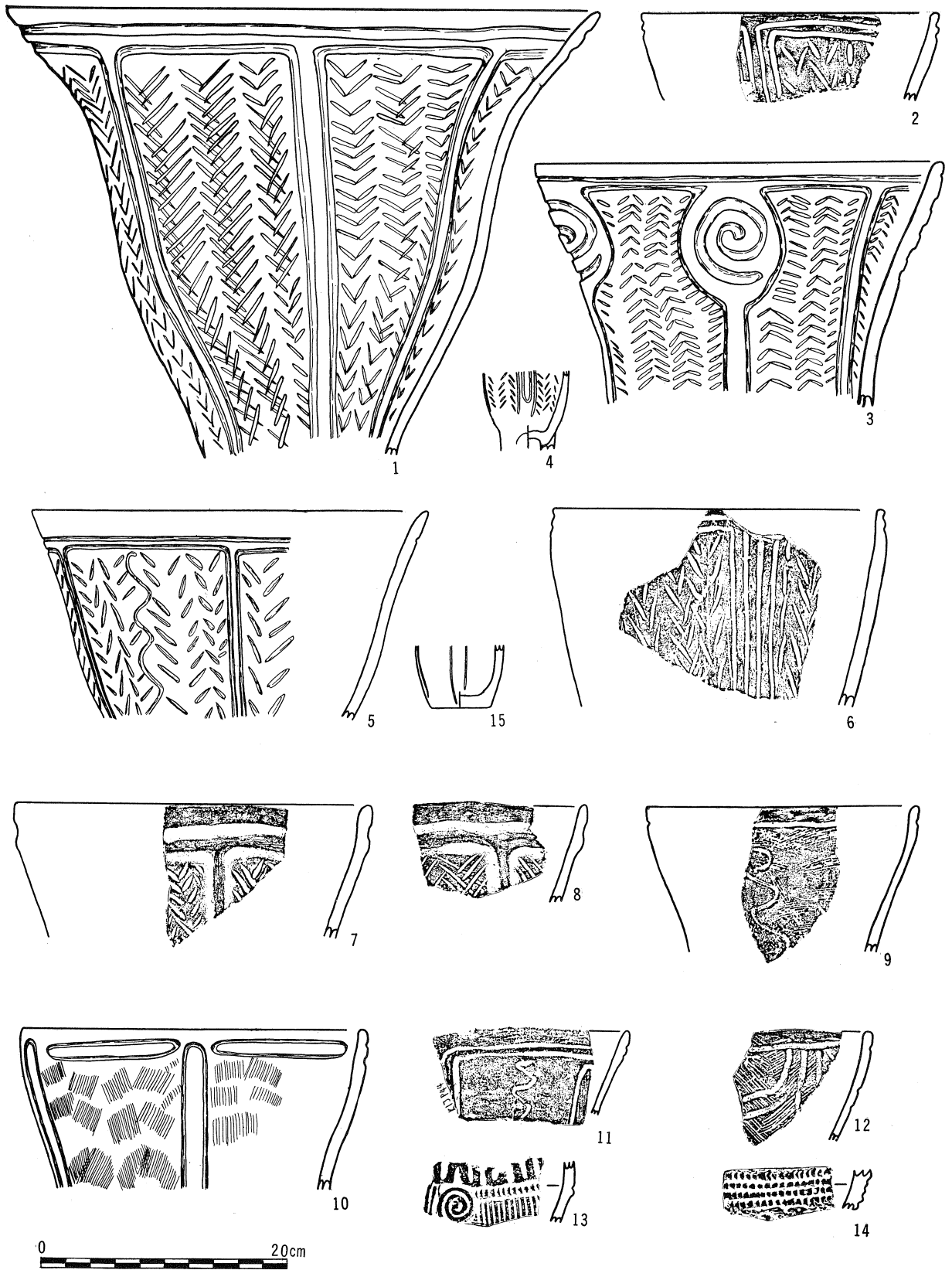


第129図 頭無1号住居址遺物図

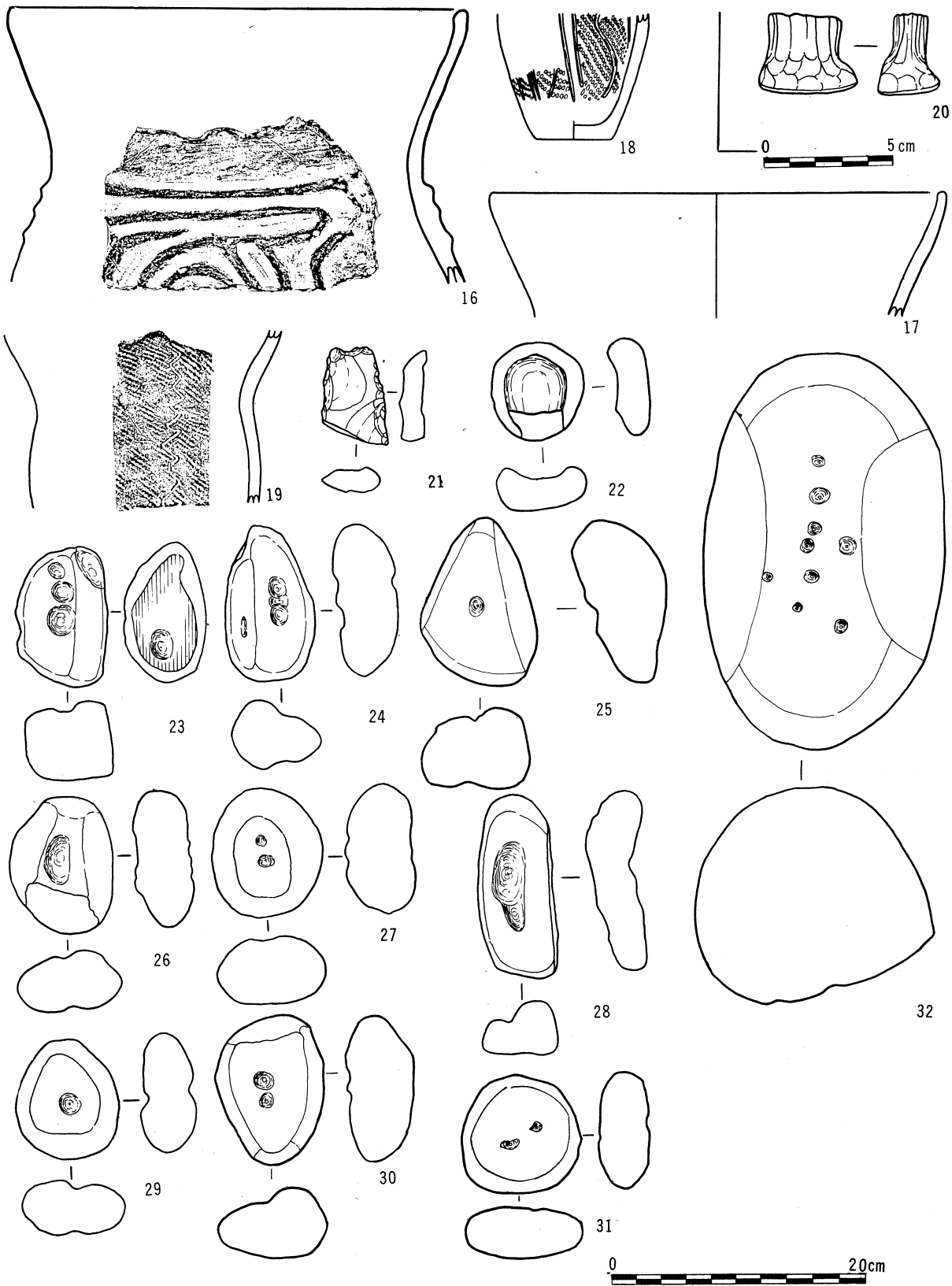
出土遺物

(第130、131図、図版75)

出土遺物のほとんどが覆土中より出土したもので、1～8は沈線の区画内に「ハの字文」を施す中期終末期の土器で、4は台付小形土器である。9、10は楕目状条線地文に沈線区画の破片で、11も地文無文であるが同一期とされる。18、19の縄文地文にミミズ状沈線の懸垂文が施されるものの混入もみられ、13、14、の隆線上を半割竹管押引連続文で飾る特徴的な破片は、8号住居からの流入かもしれない。石器については、21の打製石斧を除いて輝石安山岩製で、22の小型石皿のように例の少ない遺物も含まれる。



第130図 頭無 1号住居址出土遺物(1)



第131图 頭無1号住居址出土遺物(2)

**2号住居址** (第132、133図、図版76)

昭和48年10月14日～11月2日

- プラン 円形、(推定)南北5.5m×東西5.4m
- 主軸方向 (推定) N-28°-E
- 柱 穴 主柱穴5本、40～60cmの深さ、径20～30cm
- 周溝 なし
- 壁 なし
- 床面 軟弱で、はっきりしない。
- 炉 石囲炉と思われるが、破壊されており炉石1枚と、焼土が若干検出されている。規模は不明
- 出土遺物 住居内覆土には多量の礫が投棄され、曽利末葉の土器等も床面より浮いて出土している。  
凹石3、打製石斧2、石皿1、埋甕1、一括土器2、
- その他 3号住居を貼っているが、床面は良好ではなかった。(米田)

**出土遺物** (第134、135図、図版77)

1は埋甕で、住居南側に正位の状態で埋設されていた。口縁に1本の沈線を廻らし、 $\Pi$ 形の懸垂文の間を櫛目状条線で施文している。2以降のNo.は覆土中出土の土器で、2が算盤玉形胴部に把手のあるやや埋甕より古手の土器である。3、4、5、6、7、8、14は地文に櫛目状条線が施され、沈線の懸垂文(3、6、7、8、14)隆線の懸垂文(4)をもつものがそれぞれ見られる。又、6と9は同一土器片である。10、15～18は「ハの字」文の土器であるが一括土器が見られず、1号及び3号住居出土遺物との内容が異なる点で注意すべきものである。なお、11、12の小型土器は台付土器で、1号住居出土のものと同類似する。

**3号住居址** (第132、133図、図版78)

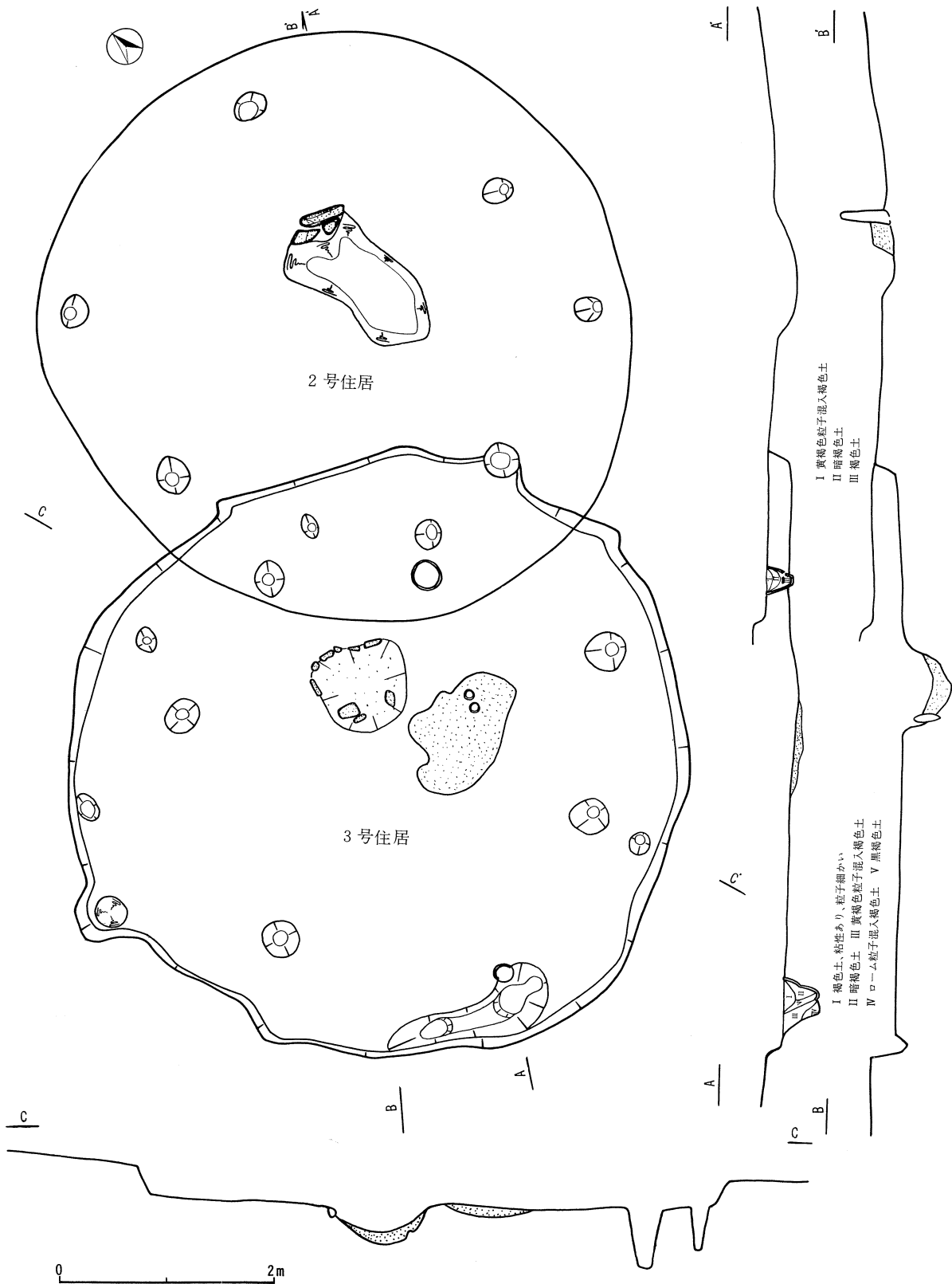
昭和48年10月14日～11月2日

- プラン 円形、南北5.7m×東西5.7m
- 主軸 N-18°-E
- 柱 穴 主柱穴と思われるもの6本、支柱穴5本の計11本
- 周溝 なし
- 床 水平でかたく、しまりがある。
- 炉 方形石囲炉であったと思われるが、炉の掘り込みの肩部に小円礫が並べられているにすぎない。また、この炉の南側、住居中央には地床炉があり、土器底部が2つ並んで置かれている。
- 出土遺物 遺物は少なく、埋甕を除いて一括土器は5、
- その他 2号住居に貼られている。埋甕は北側半分であった。

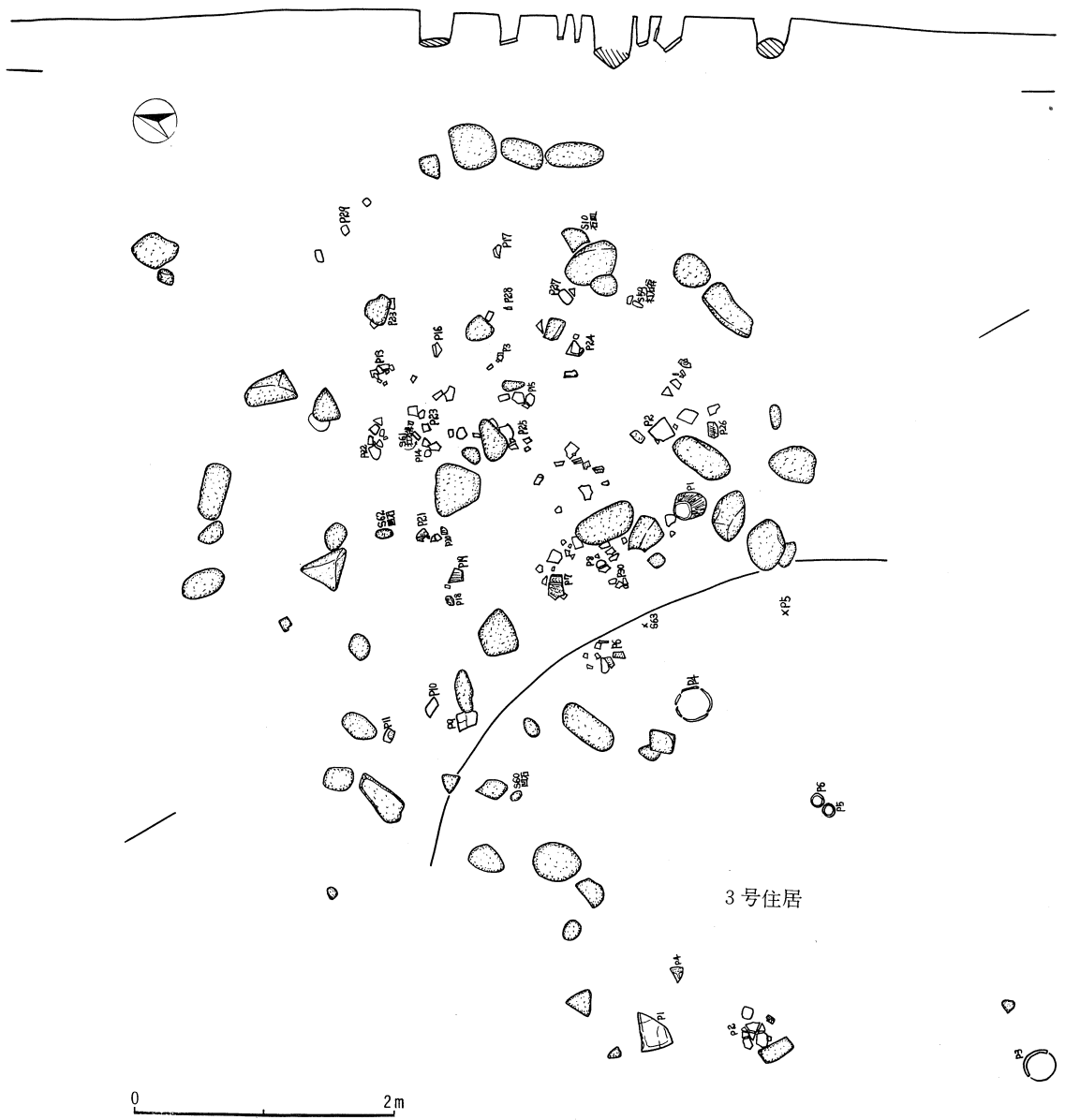
(米田)

**出土遺物** (第136図、図版79)

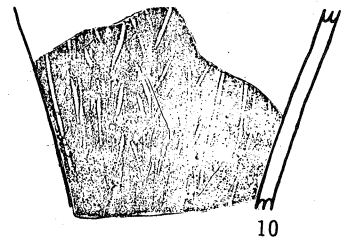
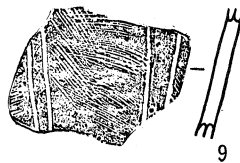
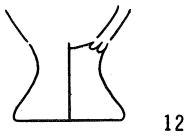
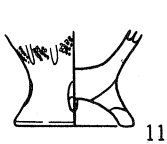
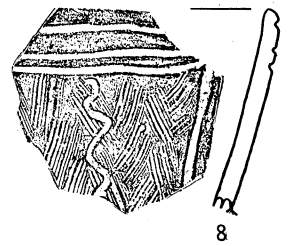
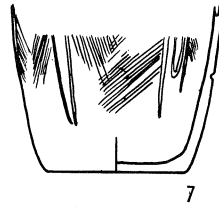
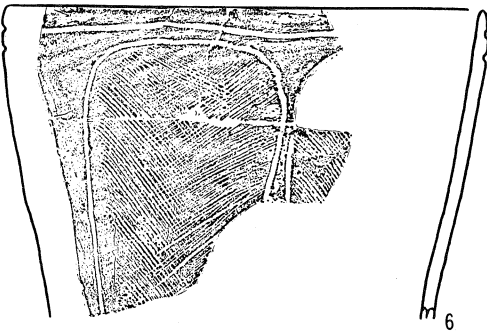
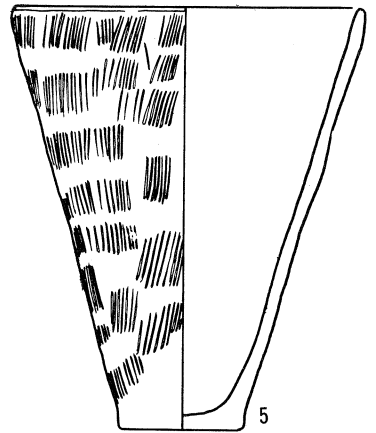
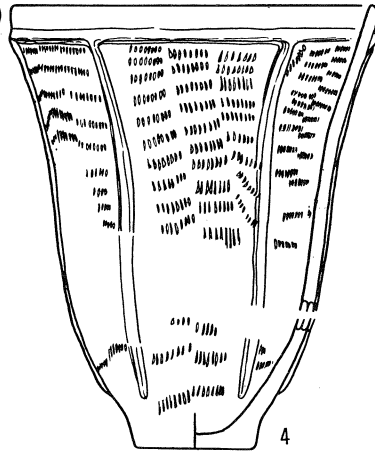
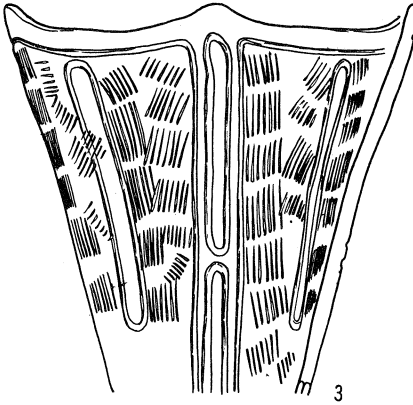
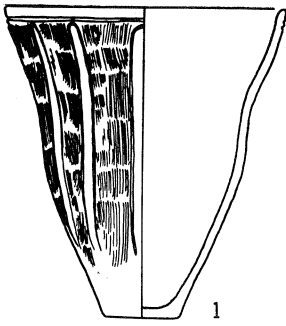
1は住居南端の埋甕で正位に埋設されていたが、片面のみで、完形一括ではない。旧来口縁部及び底部の欠損した埋甕は一般的であったが、縦割りに半分埋設されるものとして特筆される。2、3は石囲炉南側焼土直上に正位の状態で2個並んで発見されたものであるが、文様を見ない。4は床面上に棄てられた大破片で、隆線の区画中央にミミズ状沈線による懸垂文があって、空間を「ハの字」文のな杉綾文を施す。8は覆土中発見の黒曜石フレイクで使用痕はない。



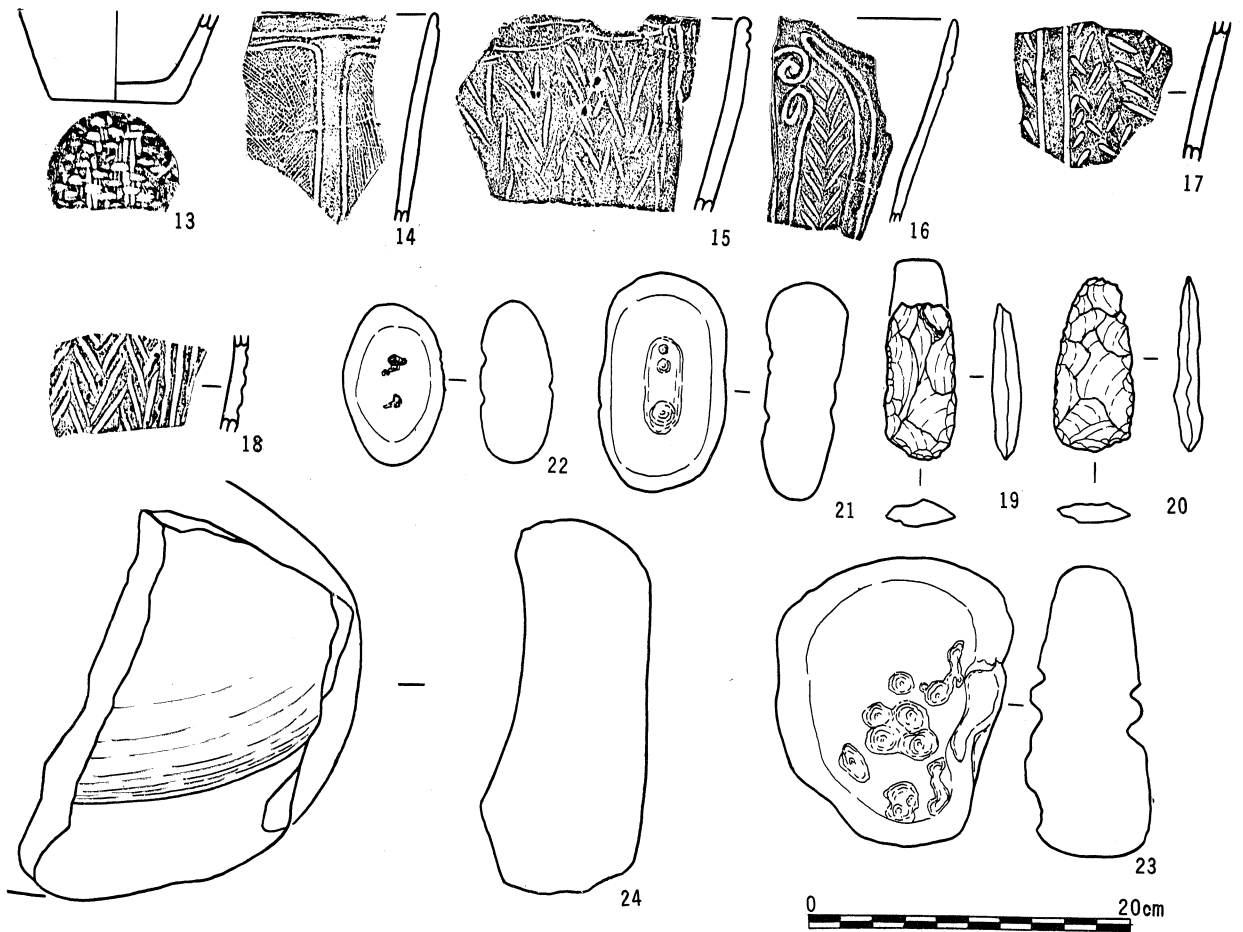
第132図 頭無2,3号住居址平面図



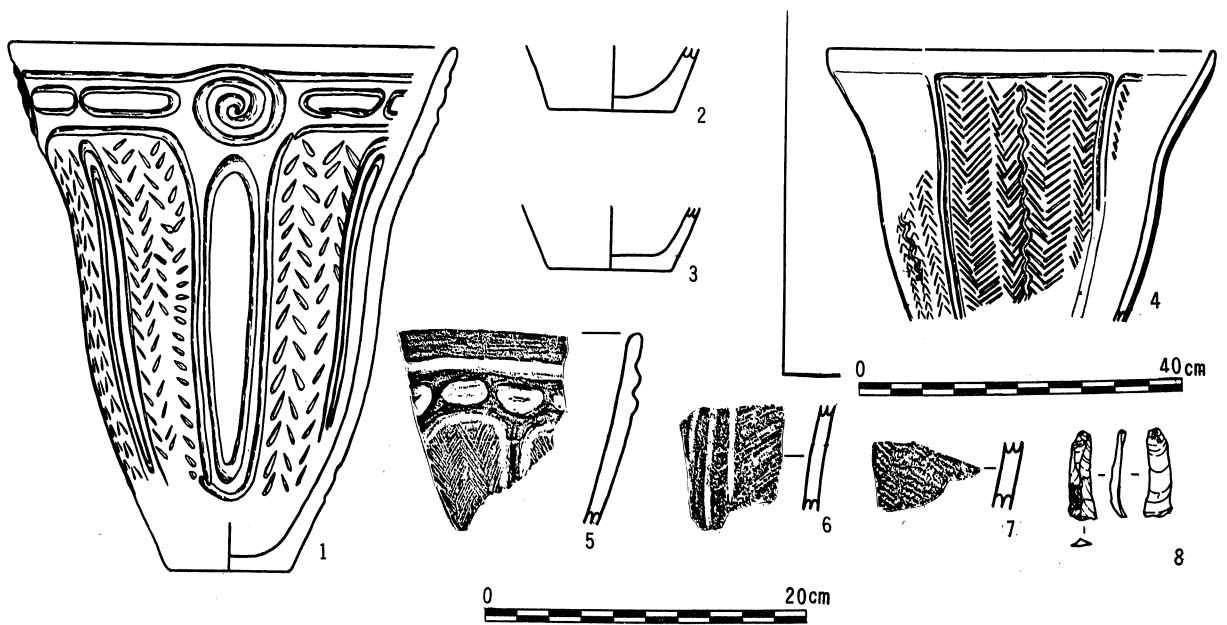
第133図 頭無2,3号住居址遺物図



第134図 頭無 2号住居址出土遺物図(1)



第135図 頭無 2号住居址出土遺物(2)



第136図 頭無 3号住居址出土遺物



4号住居址

(第137、138図、図版80)

昭和48年10月20日～11月1日

○プラン 円形、南北9m×東西9m

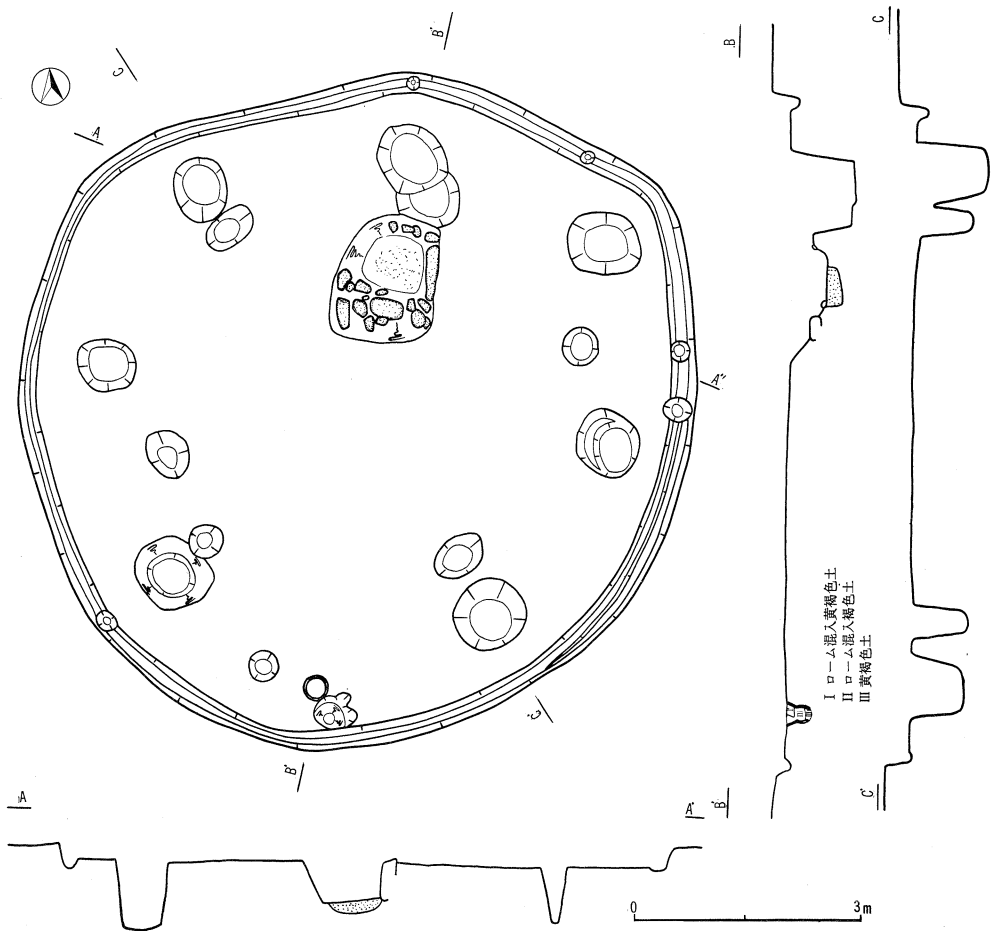
○主軸 N-15°-E

○柱穴 計14本の柱穴を確認し、それらは2群に大別することができる。まず柱穴の径90cm、深さ約80cmのものが7本で、径80cm、深さ70cmのものが6本あり、1本は不明である。この2群は覆土にも差があり、外側の大型柱穴覆土が黒褐色に比べ、内側の小型柱穴覆土は、黄褐色がかった。又、外側の柱穴覆土はロームブロックを多量に含むのに比べ、内側のものは、ロームブロックを含まない。

○周溝 一周し、幅約20～30cmで、深さ約10～15cmである。南東壁に於て、周溝が壁から約10cmはなれているが、壁の掘りすぎかもしれない。周溝内ピットが5本発見され、約20～40cm、深さ20～35cmである。

○壁 壁高は北側が高く10cm～30cmで垂直に近く、しまりがある。

○床 壁周辺は確認しやすく、かたく、しまりがあるが、中央部は張床等があるらしく、軟らか



第137図 頭無4号住居址平面図

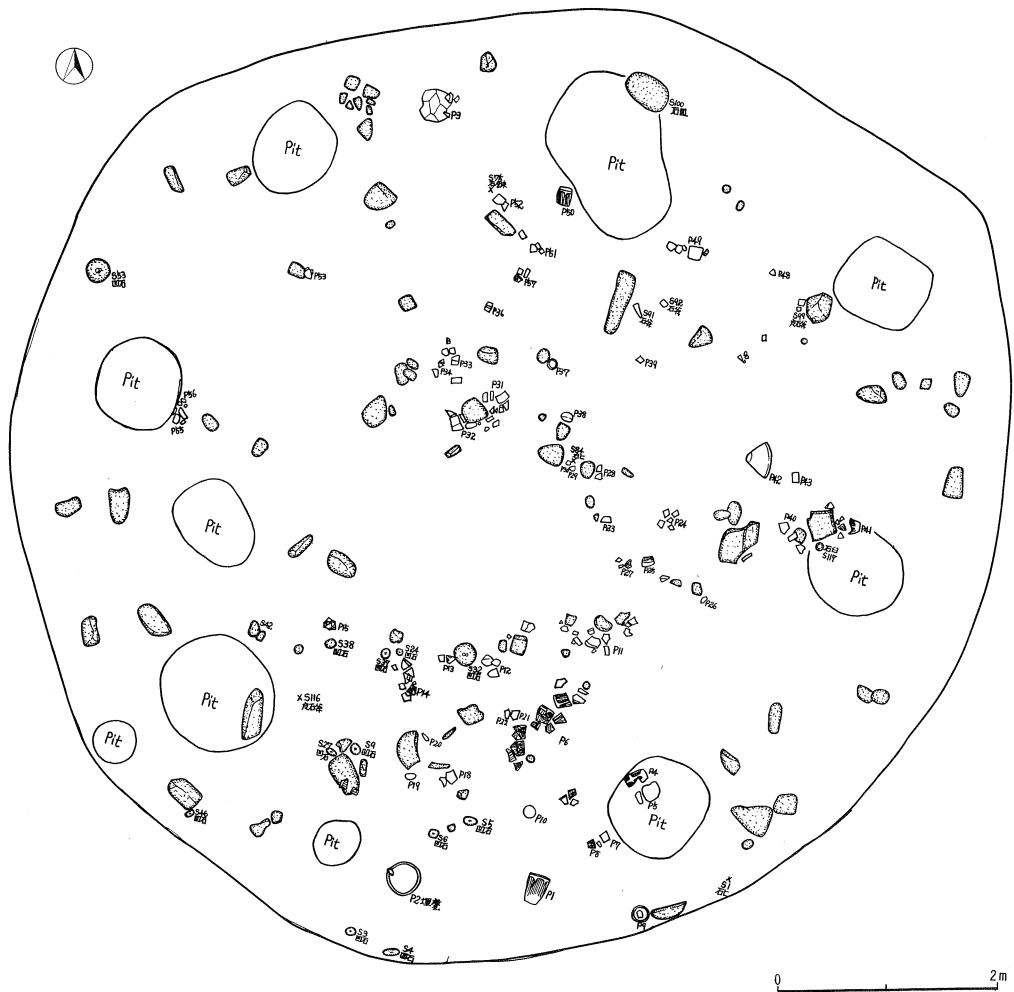
く確認が困難であった。中央部がやや凹んだ浅い皿状を呈している。

- 炉 本住居址炉は石囲い炉で南辺130cm、北辺100cm、東辺170cmの台形プランを呈し、掘り込みは約50cm、焼土の厚さ約10cmを計る。東辺に板石が立てられ、南北辺には、炉石を置くための根石状の小礫が10数個見られる。
- 出土遺物 一括土器8ヶ、埋甕1、石匙3、序石斧2、石皿1、小型石臼1、凹石多数が出土し、遺物のほとんどが、覆土中である。土器は曾利Ⅲ式に含まれるか。
- その他 なし

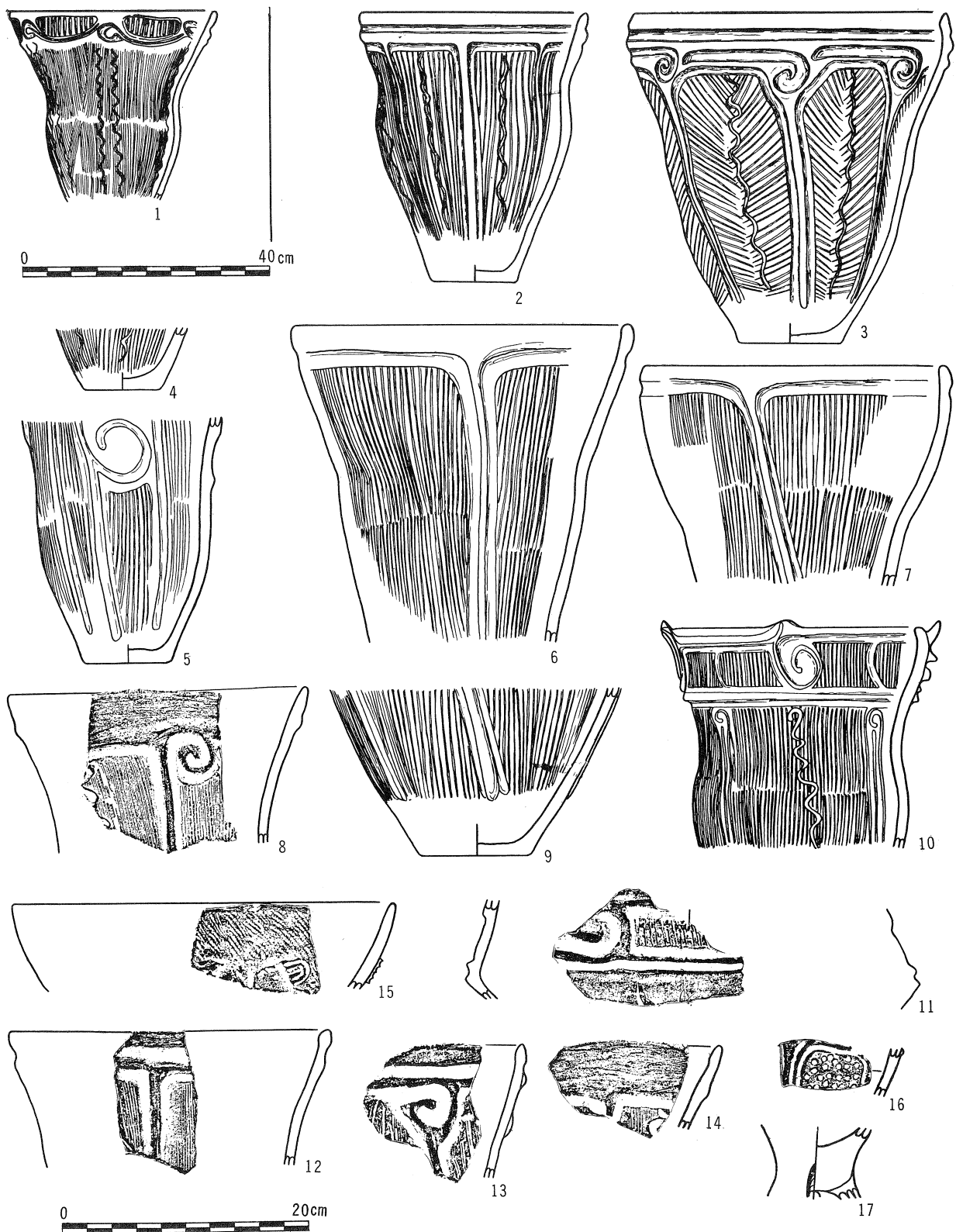
(伊藤)

出土遺物 (第139、140、141、142、図版81、82)

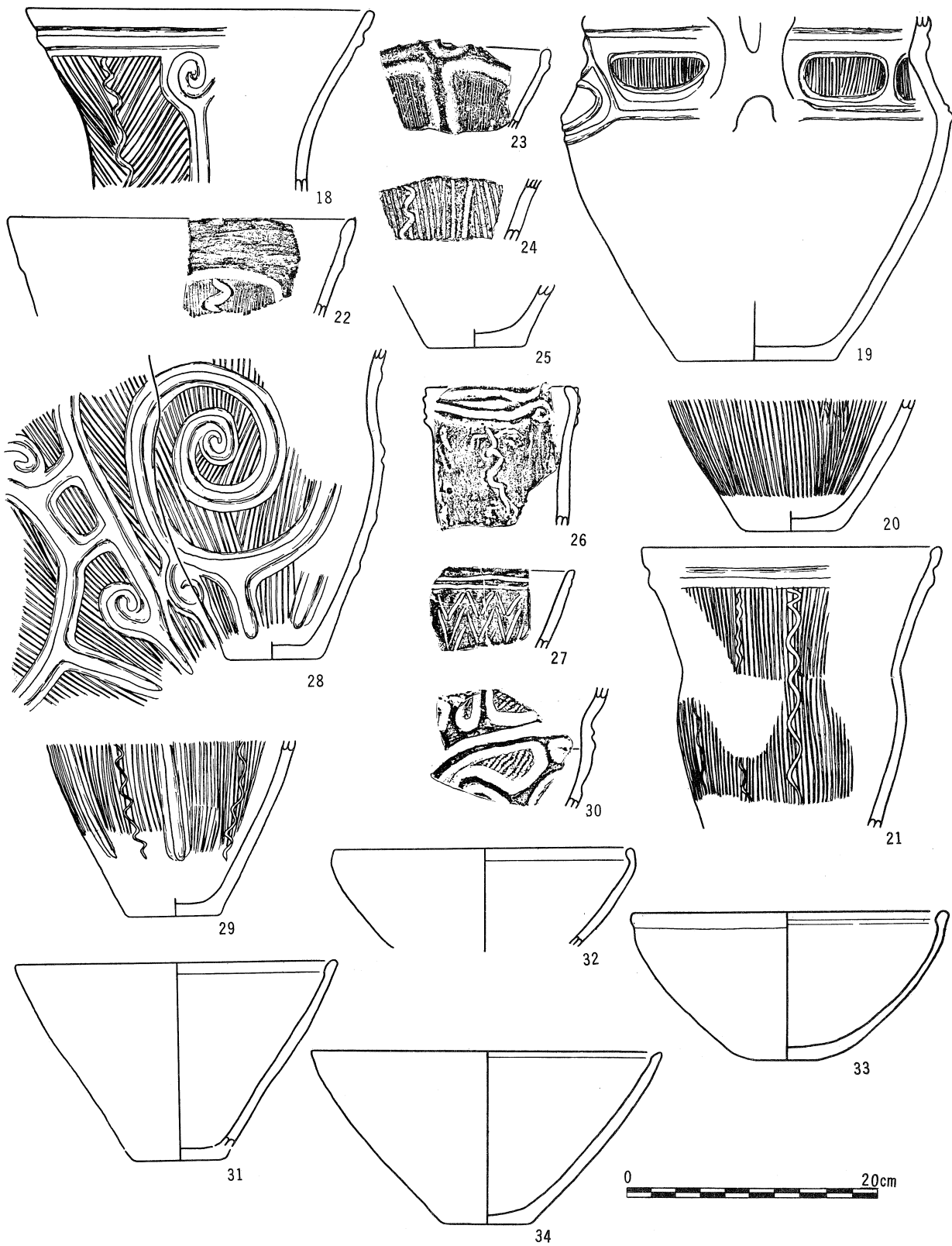
1が埋甕で住居南端に正位で埋設されるが、底部を欠いている。口縁部に半円状区画を渦巻文の流れた沈線で区画し、その内側と胴部全体を櫛目状条線で縦に施文して、渦巻部よりミミズ状沈線の懸垂文を2本施す。1以外の土器はいずれも覆土中出土のもので、浅鉢形土器を除いたほとんどが隆線



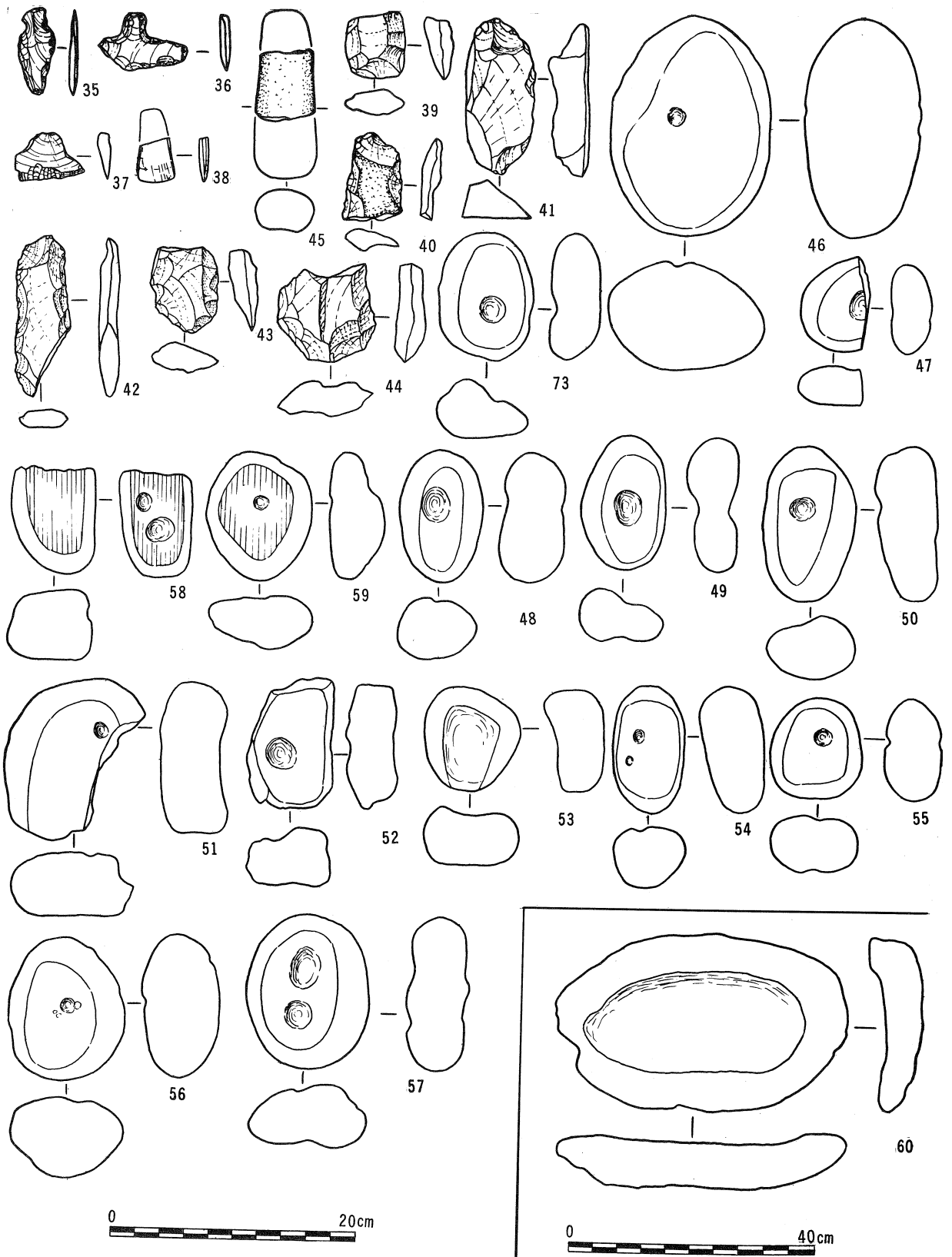
第138図 頭無4号住居址遺物図



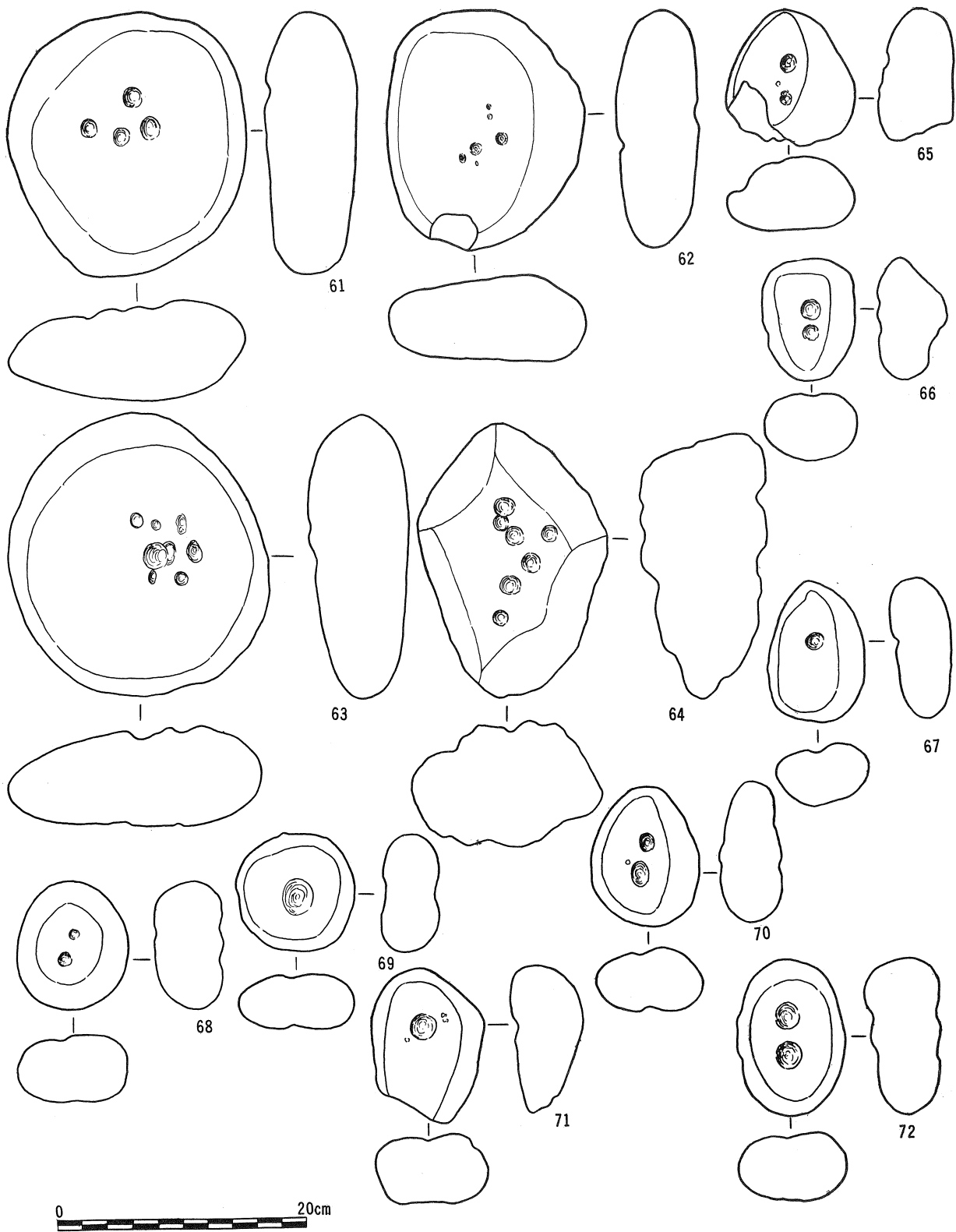
第139图 頭無4号住居址出土遺物图(1)



第140図 頭無4号住居址出土遺物(2)



第141図 頭無 4号住居址出土遺物(3)



第142図 頭無4号住居址出土遺物(4)

による渦巻文から懸垂文を施し、条線で器面を施文する。渦巻文の有無、ミミズ状沈線の懸垂文の有無によって幾つかに分けることができる。31～34は無文の浅鉢で、胴部に丸みをもつものと直線的なものがある。17は1号、2号住居出土の小型台付土器と同様のものである。

石器のうち60の石皿が石囲炉北側床面直上に伏せられており、他は覆土中から出土している。35、36の石匙は硬砂岩製で、37は黒曜石製不定形石器、38は緑泥片岩製小型定角磨製石斧、45は乳棒状磨製石斧の欠損品で、38と同石質である。40～42の打製石斧は安山岩製で、他は硬砂岩製であるが、石斧はすべて欠損品である。凹石、スリ石は輝石安山岩製で、53の小型石皿は1号住居出土のものと同様である。

**5号住居址** (第143,144図、図版83)

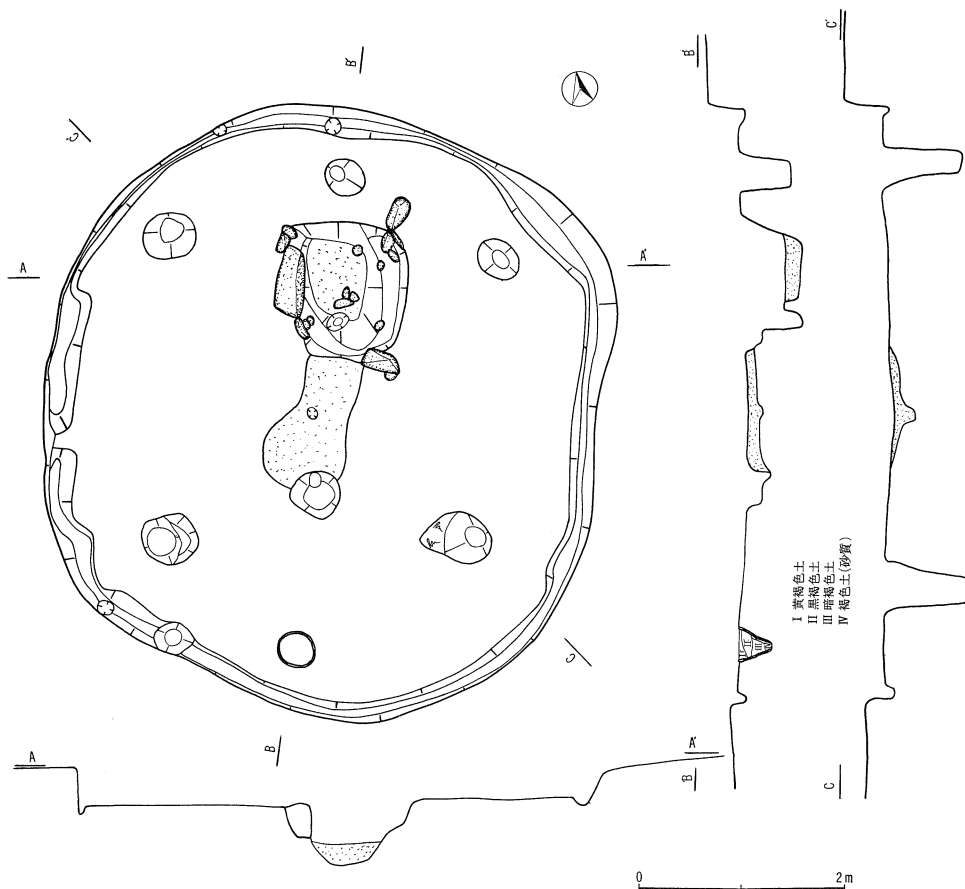
昭和48年10月21日～10月31日

○プラン 隅丸方形、南北5.86m×東西5.30m

○主 軸 N-23°-E

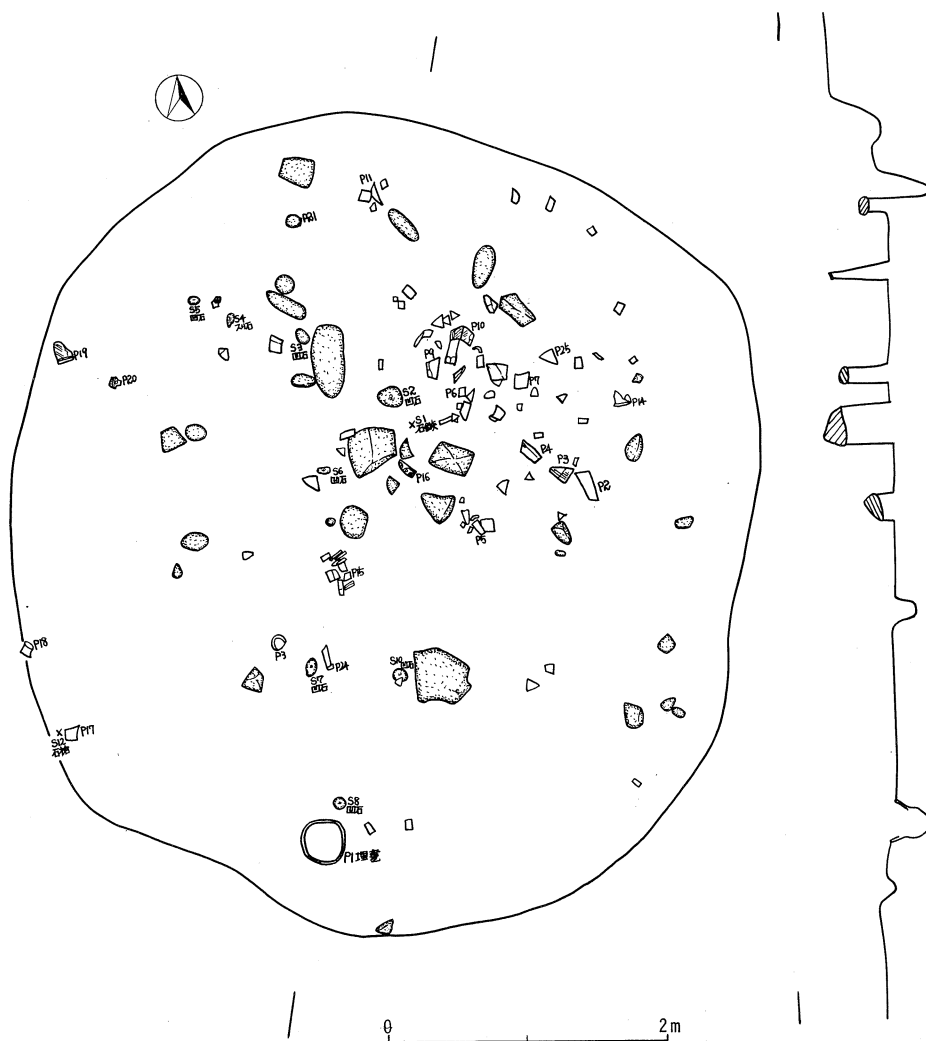
○柱 穴 支柱穴5本で、径50～60cm、深さ70～80cm、周溝内に4本の小ピットがある。

○周 溝 西壁下で一部切れているが、ほぼ一周する。幅20cm、深さ15～20cmで南側及び北側に2本ずつの小ピットがある。



第143図 頭無5号住居址平面図

- 壁 ほぼ良好で、垂直に近い。西～北側においては、ほぼ黄褐色の比較的しっかりした壁が検出された。南側は、壁の状態が軟弱で壁高10～14cm、北～西壁は30～35cmの高さである。
- 床 面 しまりがあ黄褐色土が床面全体にあり、床として非常に硬く、識別が容易である。床面は南側に緩傾斜しており中央部に地床炉と石囲掘込炉がある。
- 炉 中央北寄りに石囲掘込炉が存在し、その南側に地床炉がある。石囲炉の方は西辺を残すだけで他は抜き取られ、100cm×130cmの規模を持つ。炉内には焼土が15cm位あって、床面までの高さは50cmを計る。地床炉は60×130cmの広がりを持ち、焼土も厚い。
- 出土遺物 一括土器8、(うち埋甕1)凹石15、石鏃1、打製石斧1、石槍1、覆土中より大部分の土器が出土しており、住居時期決定は埋甕による。
- その他 なし (蛭間)



第144図 頭無5号住居址遺物図





第145図 頭無 5号住居址出土遺物図

出土遺物

(第145図、図版84)

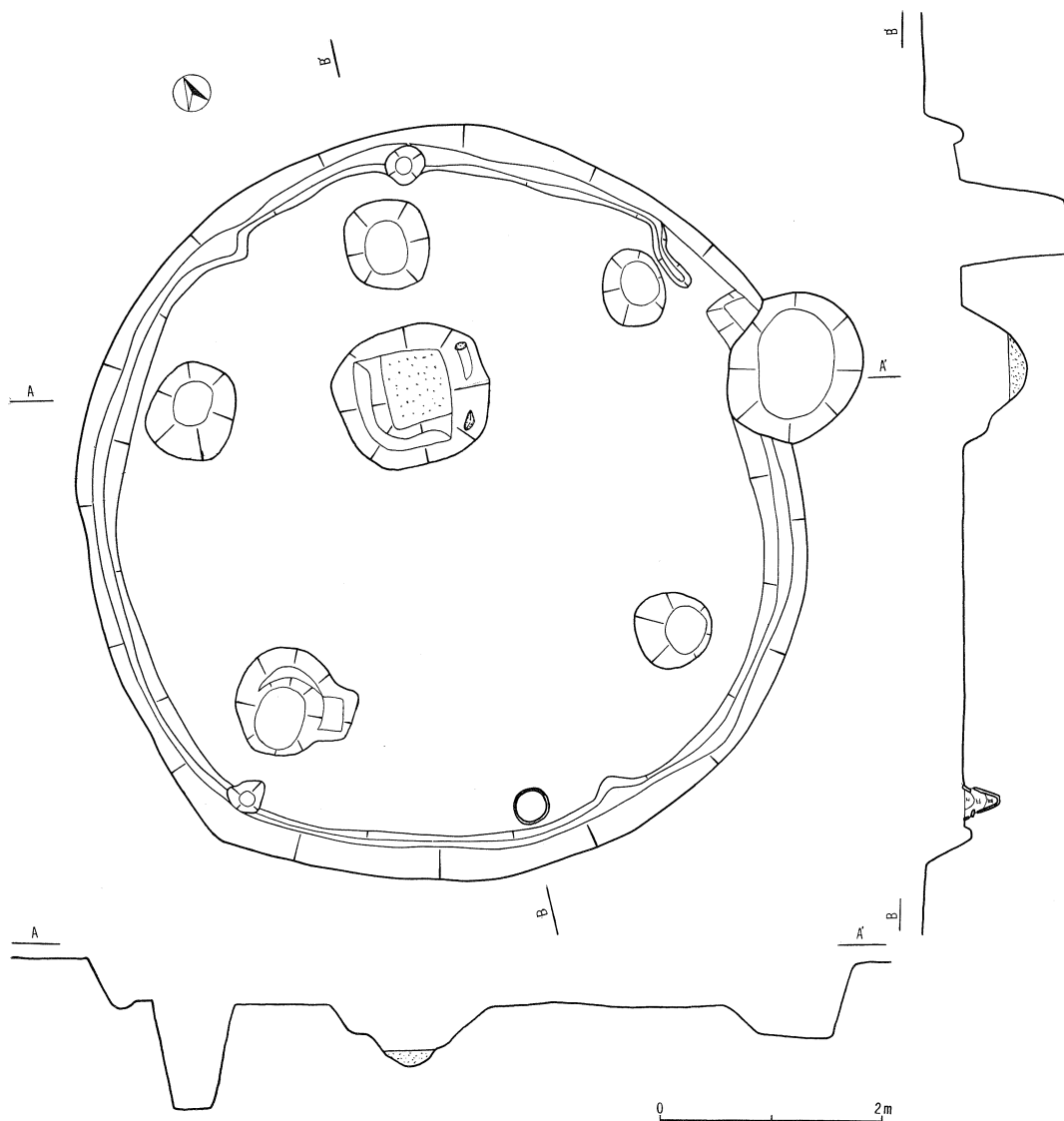
1は住居南端に正位で埋設された埋甕で、口縁部に隆線による連続渦巻文の横帯を区画し、胴部及び口縁部に櫛目状条線が施される。これを除いて覆土から出土しているが、ほとんど破片ばかりで一括土器は少ない。2~5は隆線による渦巻文及び懸垂文を施し、櫛目状条線で胴部を埋め尽くす。6は胴部算盤玉形土器破片で、1~5の文様構成と特徴を同一とする。8のポイント状石器は住居西壁側面に貼り付くような状態で出土した黒曜石製石器である。9は安山岩製乳棒状磨製石斧。凹石は輝石安山岩製である。

6号住居址

(第146、147図、図版85)

昭和48年10月22日~11月8日

○プラン 円形、南北6.72m×東西6.40m



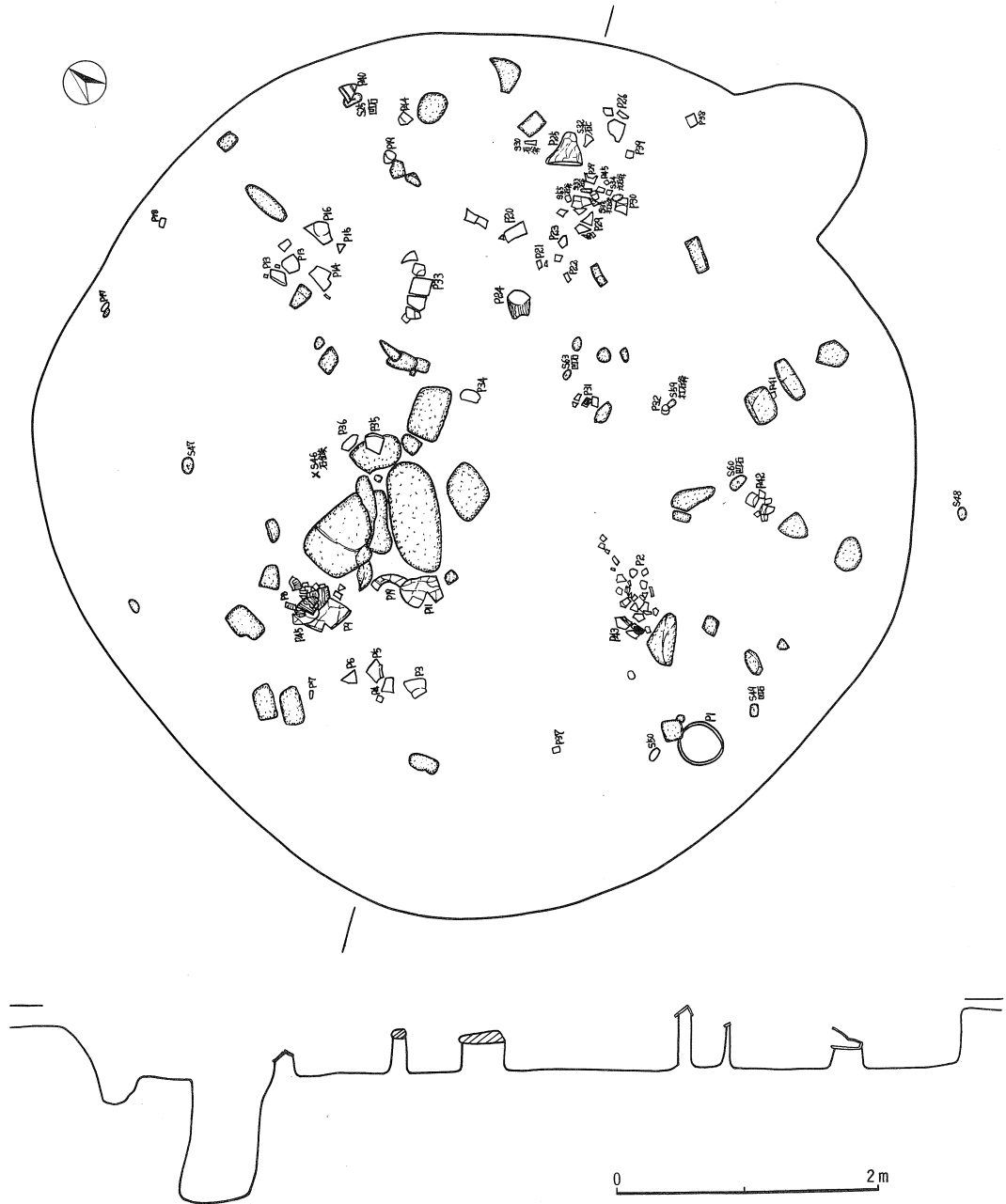
第146図 頭無6号住居址平面図

○主 軸 N-19°-E

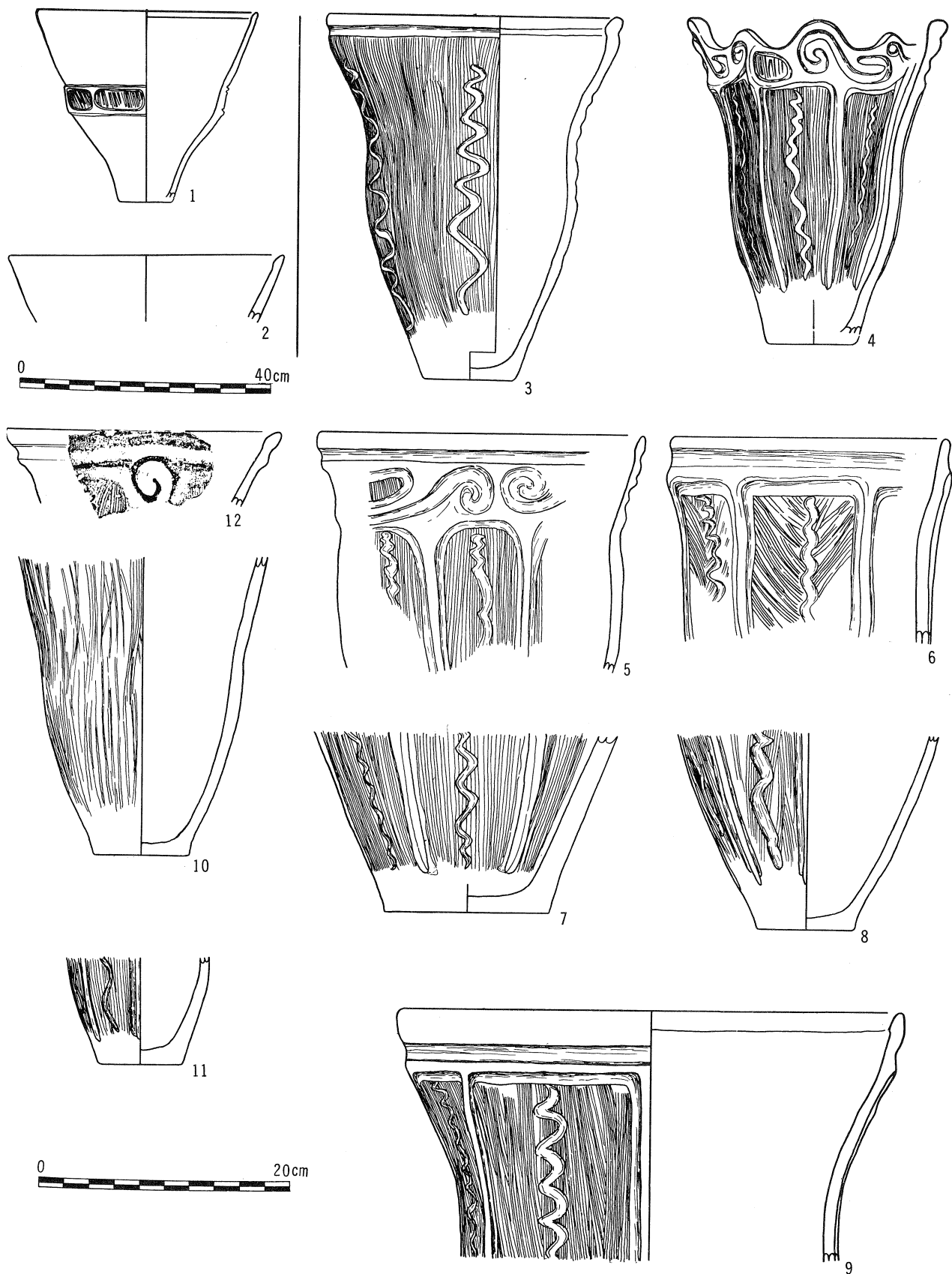
○柱 穴 支柱穴5本、直径70cm~118cm、深さ90~97cm

○周 溝 住居址東側一部と1号小竪穴に切られているところを除外してほぼ一周する。幅10cm~30cm、深さ3~15cmである。

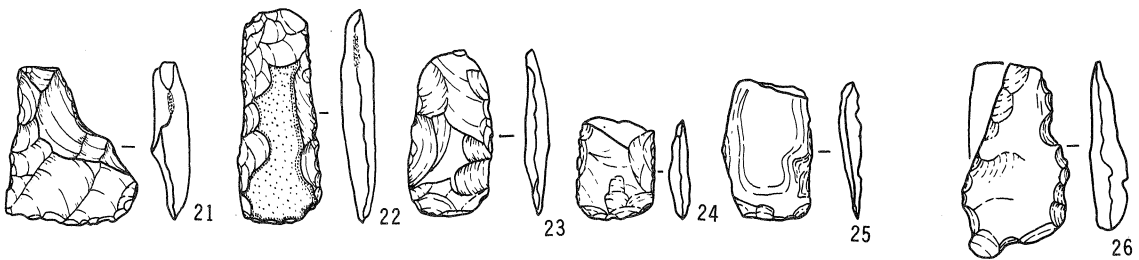
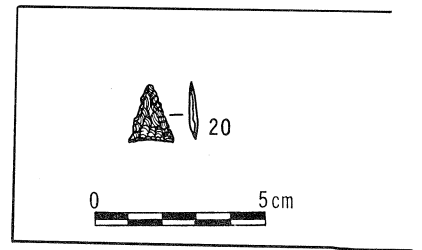
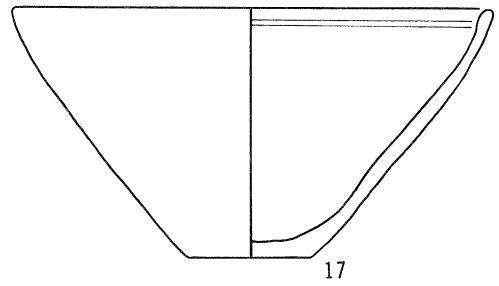
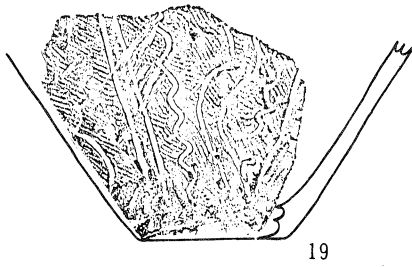
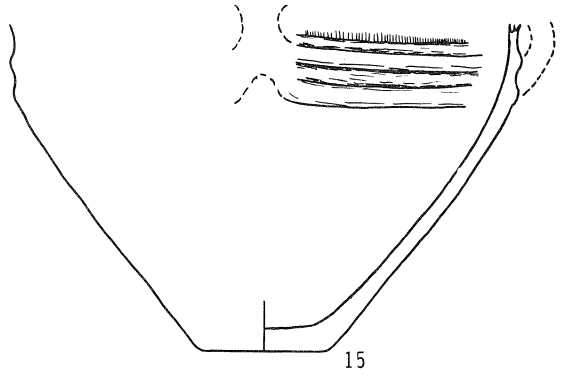
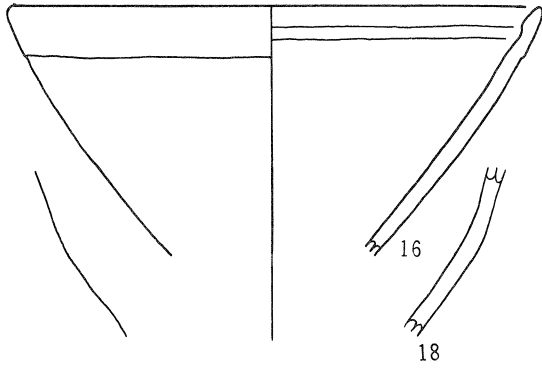
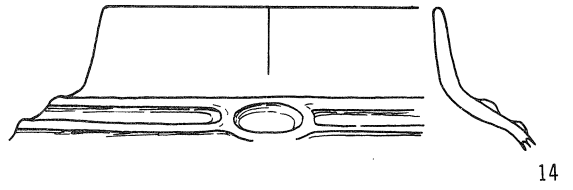
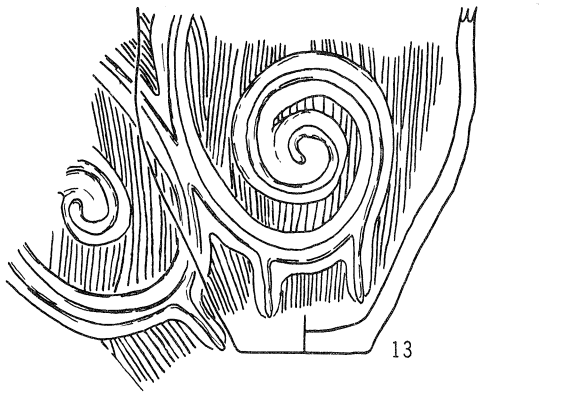
○ 壁 1号小竪穴に切られている所を除いてロームで非常に良好。南壁は幾分傾斜しているが、他はほぼ垂直である。壁高は50~40cmである。



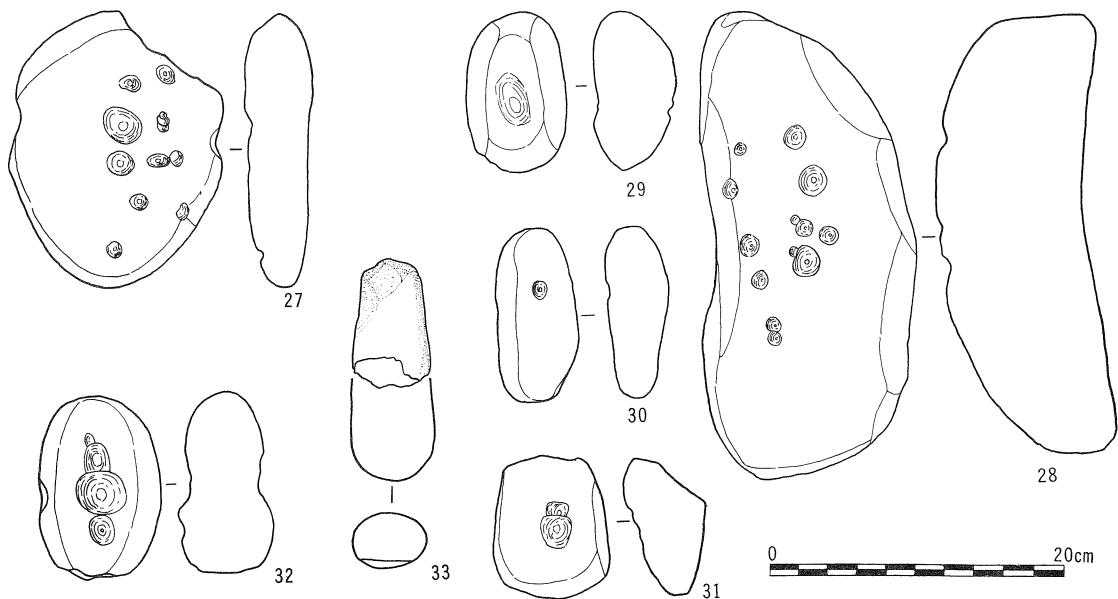
第147図 頭無6号住居址遺物図



第148図 頭無6号住居址出土遺物図(1)



第149図 頭無6号住居址出土遺物(2)



第150図 頭無6号住居址出土遺物(3)

- 床 面 ロームでかたくしまりほぼ水平で良好である。
- 炉 炉石は抜き取られており、置かれていたテラスが認められる。他例と同様に北側に寄り、南北100cm×東西130cmの規模をもち、焼土も充分である。
- 出土遺物 一括土品5、(うち埋甕1)凹石7、打製石斧5、序製石斧1、多凹石1、石匙1、石鏃1。遺物の大部分は覆土中に存在する。
- その他 入口部埋甕(正位)1 (米田)

出土遺物 (第148、149、150図、図版86、87)

1は住居南の正位埋甕で、算盤玉形胴部の退化土器で、胴部にのみ文様帯があり、横帯の長円形断面は櫛目状条線が施され、底部を欠く。2は1と類似した土器の無文口縁である。3、10は隆線の区画をもたないが、地文の櫛目状条線の上からミミズ状沈線の懸垂は4～9、11と類似する。12は隆線の連続渦巻文を胴部に施すもので、地文は櫛目状条線である。13、14は同器形同文様の壺形土器で把手が付けられるようである。隆線の横帯の他、地文は無文である。15、16は無文浅鉢で17は器形不明である。18は縄文地文に沈線文が施される破片である。

石器では19が黒曜石製三角鏃の完形品である。20は揆形石斧で、石匙の未成品かもしれない。21は安山岩製、22は硬砂岩製、23は安山岩製、24は粘板岩製、25は安山岩製の打製石斧で、32は緑閃変岩製乳棒状磨製石斧である。多孔石、凹石は輝石安山岩製である。

### 7号住居址 (第151、152図、図版88)

昭和48年10月20日～11月20日

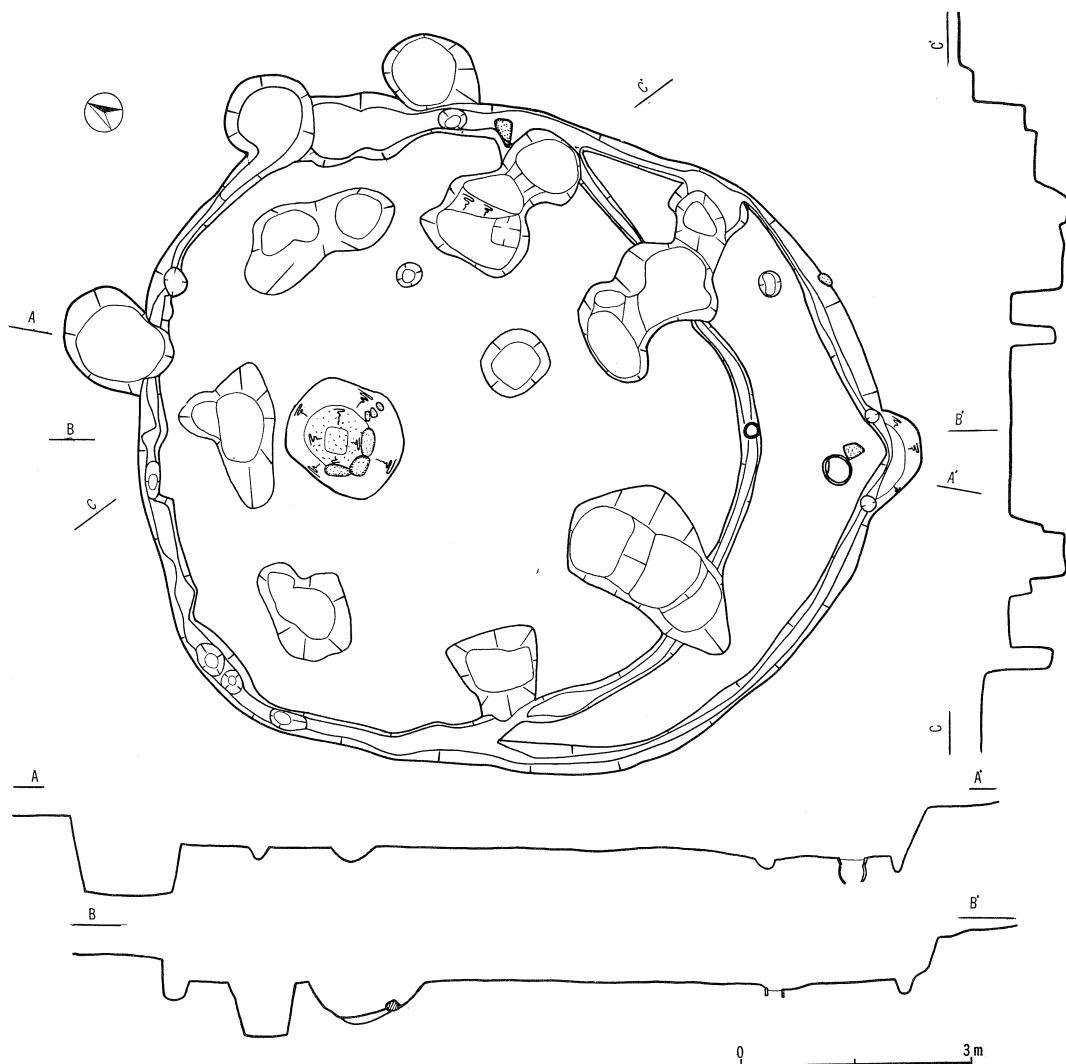
- プラン 拡張前、円形、南北8m×東西8m (A)  
拡張後、長円形、南北9.5m×東西8m (B)
- 主 軸 A・N-13°-W  
B・N-11°-W
- 柱 穴 小ピットを含めると27個で、2回以上の拡張があったであろう。

- 周溝 A・Bプランとも一周するが、Aは貼り床が見られる。
- 壁 4ヶ所を小竪穴に切られている他は垂直で良好
- 床面 比較的良好であるが、北側と南側では約10cmの高低差があり、拡張部は凹凸が若干見られる。
- 炉 かつては石囲炉であったと思われるが、抜き取られて底部近くに小礫を残すのみである。  
大きさは150cm×150cm、深さ50cmで、焼土が底面に約10cm堆積している。
- 出土遺物 覆土中に一括土器11個体、埋甕2、凹石22、石匙2、石鎌3、打製石斧3、石皿1
- その他 拡張の回数及び、埋甕の関係に注意する必要がある。小竪穴6、7、8、9号が北壁を切っている。

(山路)

出土遺物 (第153、154、155、156、157図、図版89、90、91)

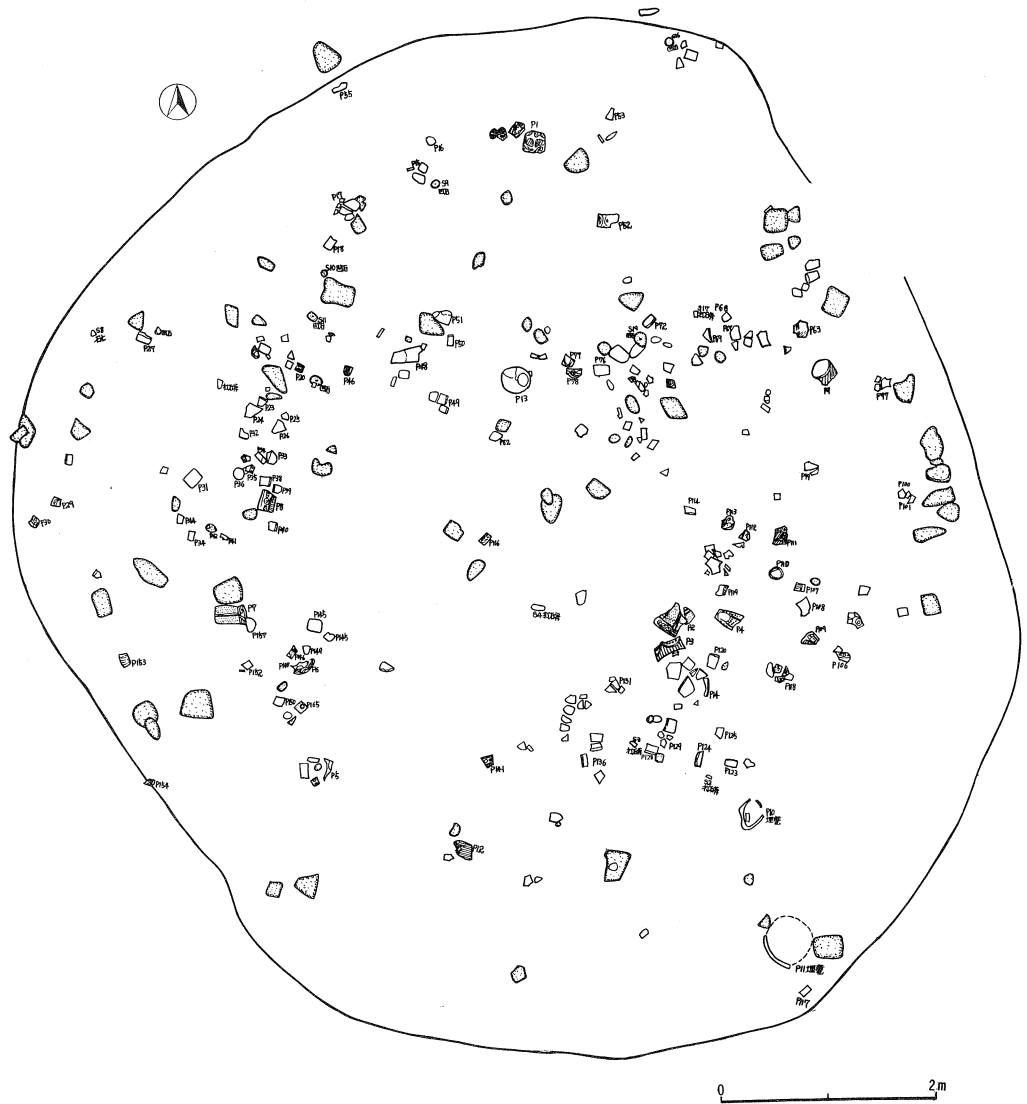
1が拡張前、2が拡張後の埋甕で、1は口縁、底部を欠き、胴部も半周残っているだけである。2は底部を欠くが正位に埋められていたもので、口縁部から器面全体に平行沈線を施し、頸部及び胴部



第151図 頭無7号住居址平面図

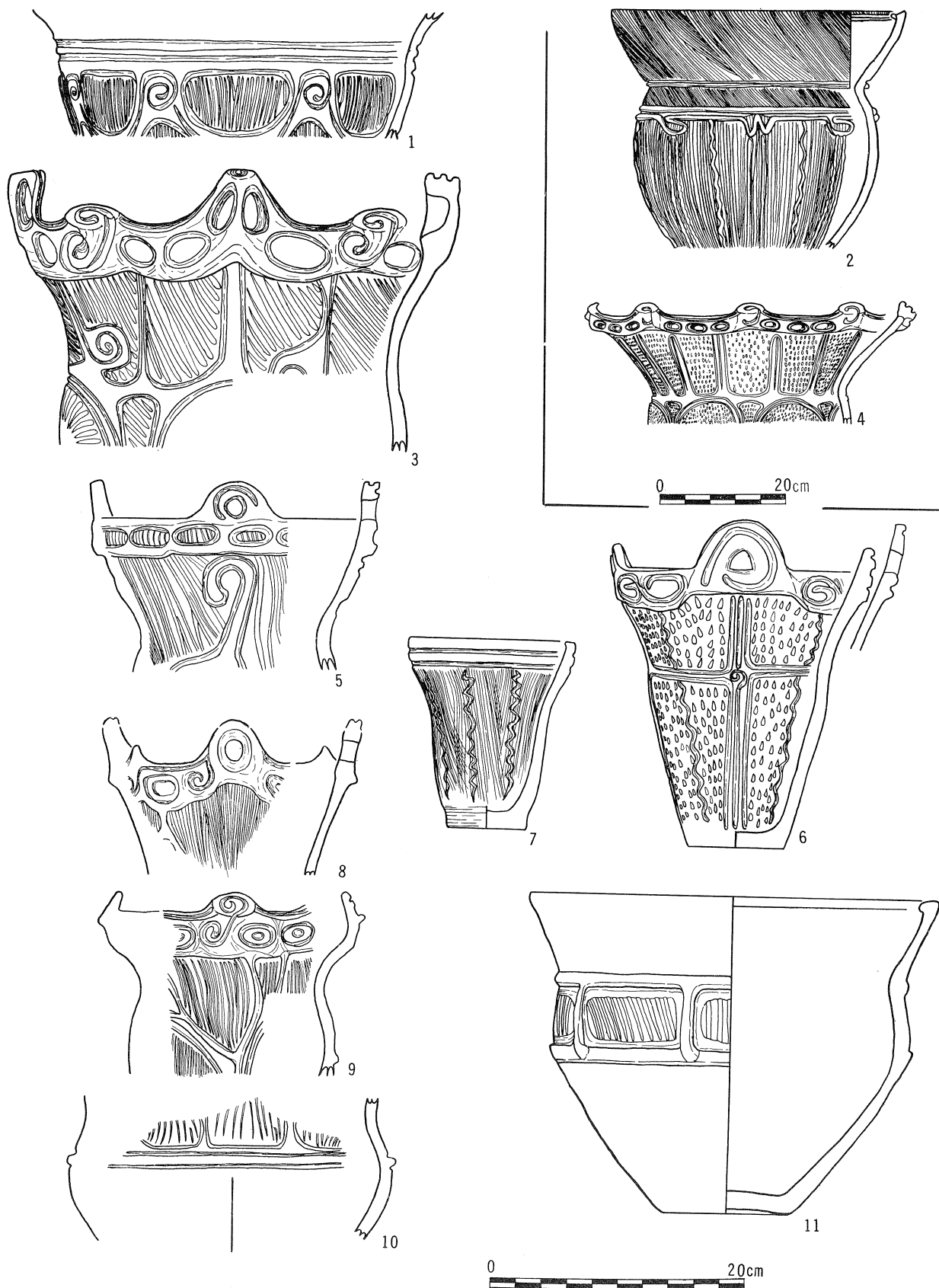
に粘土紐貼り付けによる横帯と懸垂文がある。3、4、5、6、8、17、21、22、23はアーチ状渦巻文の把手をもつ深鉢形土器で、胴部文様がやや複雑に連続するものもある。地文は楯目状条線が大部分であるが、刺突文を施すものもある。10、11は胴部算盤形土器の変化したものであろう。12は関東地方の加曾利E式に比定される。13は縄文地文の上に半割竹管で波状平行沈線が口縁に沿って施文される。14～15は無文であるが、16は上に文様が施されるかもしれない。17は口縁部に把手と窓状の文様帯を施した浅鉢で、床面よりやや上から大破片で出土した。39、43は地文撚糸文の土器片である。44は吊手土器の破片で黒褐色を呈し、へら整形で焼成の良好な胎土をもつ。

石器について、45は縦形石匙と思われるが、ややえぐり込みが浅く、粗雑な剝離面がある。51～53は黒曜石製石鏃で、51は脚部欠損、52は三角鏃に近く、53は脚の長い鏃である。59は小型石皿で、石質は凹石、多凹石と同じ輝石安山岩である。

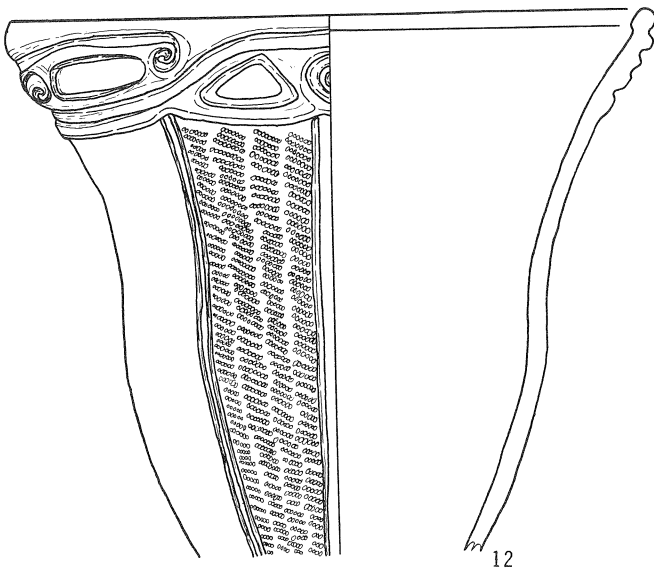


第152図 頭無7号住居址遺物図

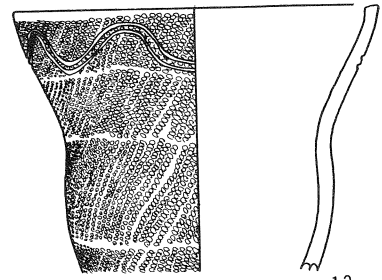




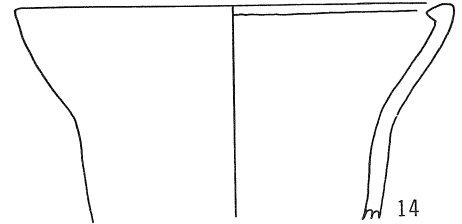
第153図 頭無7号住居址出土遺物図(1)



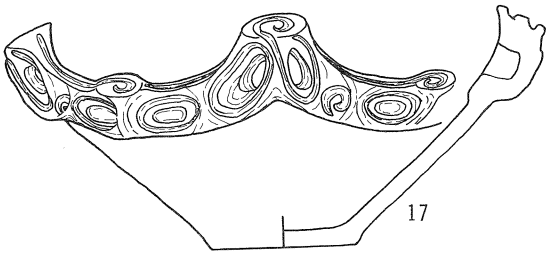
12



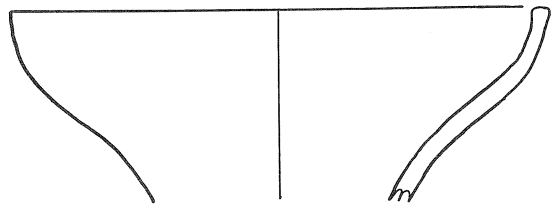
13



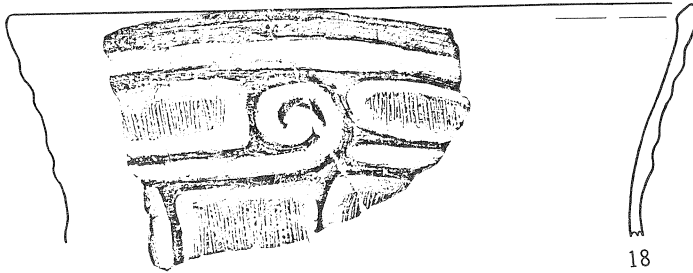
14



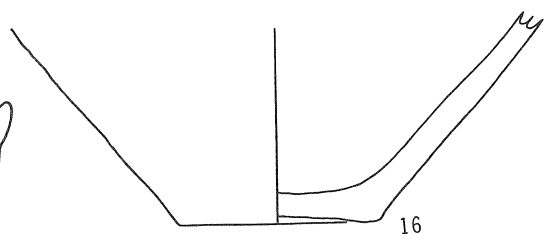
17



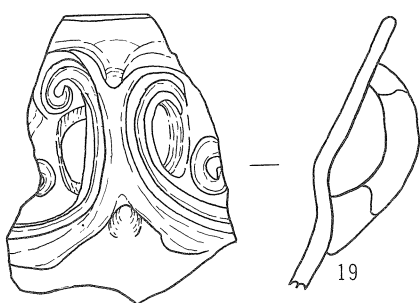
15



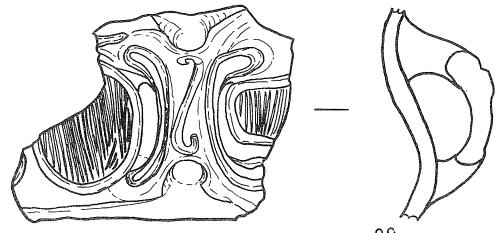
18



16

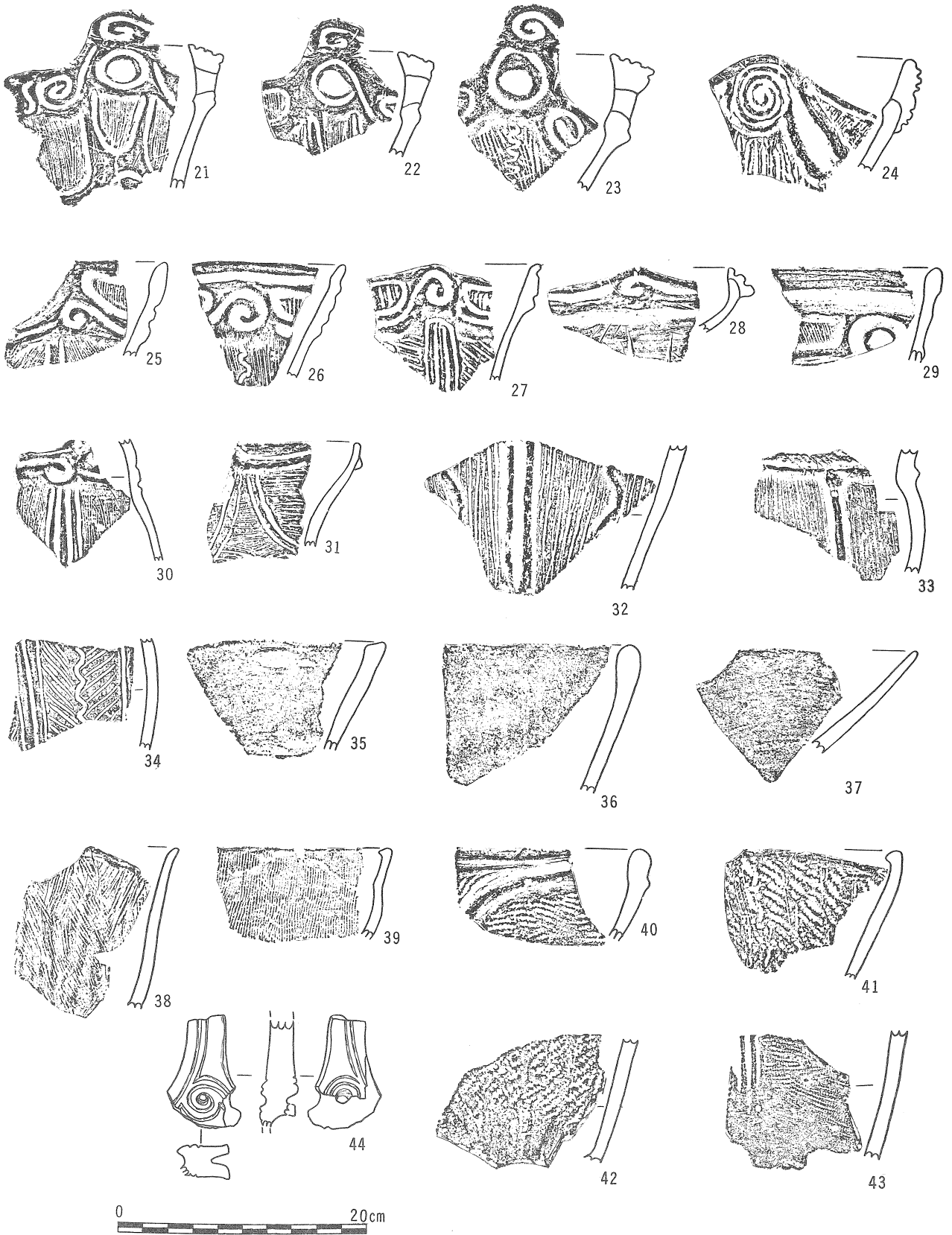


19

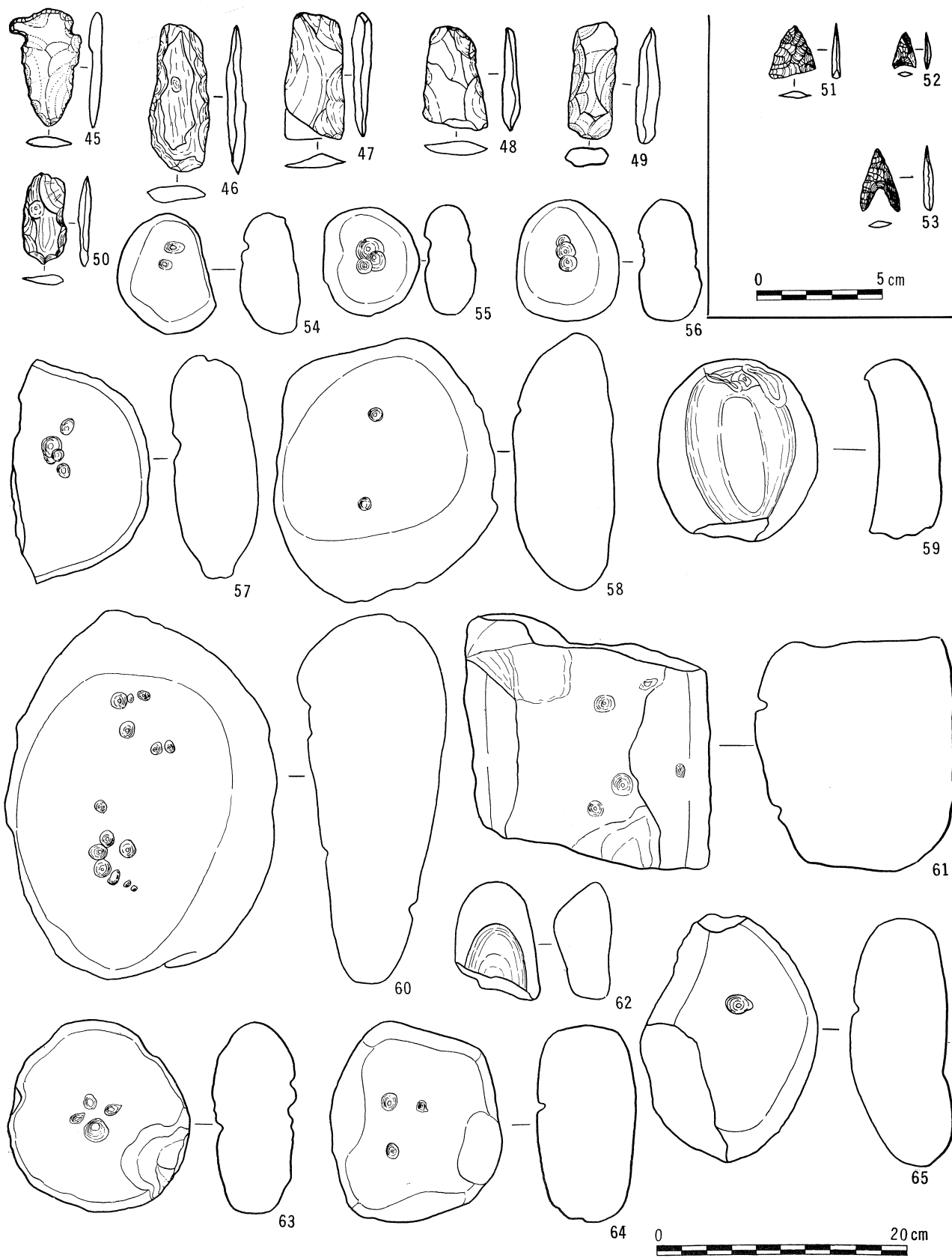


20

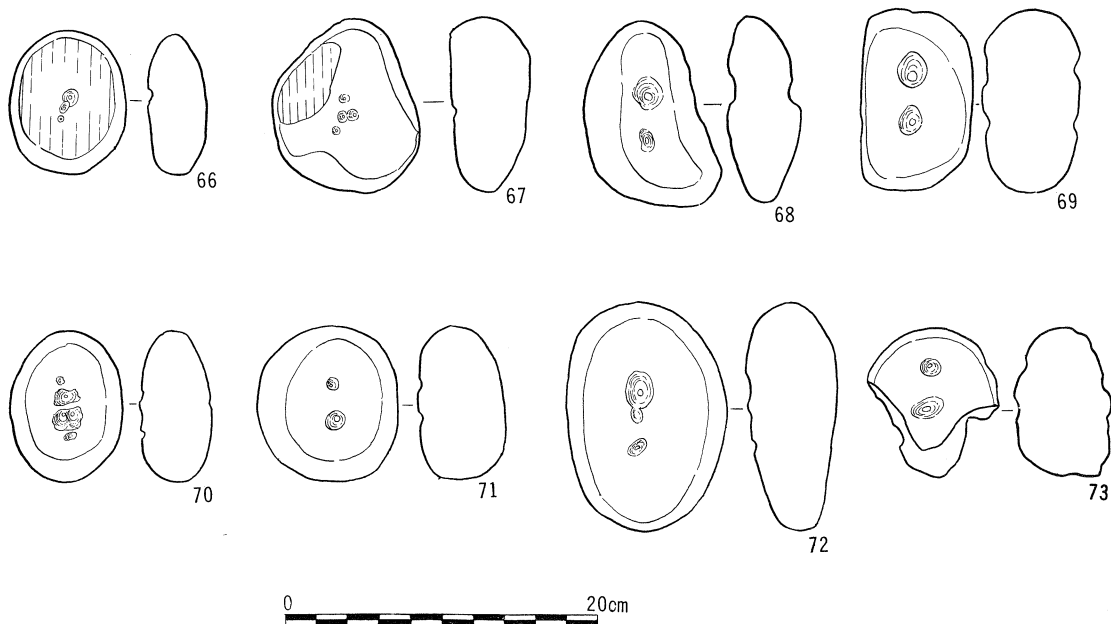
第154図 頭無 7号住居址出土遺物図(2)



第155図 頭無7号住居址出土遺物図(3)



第156図 頭無7号住居址出土遺物図(4)



第157図 頭無7号住居址出土遺物(5)

### 8号住居址

(第158図、図版92)

昭和48年11月3日～11月9日

○プラン 円形、東西4.75m

○主 軸 不明

○柱 穴 住居内に6本、1号住居に切られており、重複部のピットが8号住居のものか。

○周 溝 なし

○ 壁 全体として良好でなく、ロームも柔らかく、把握しにくい。壁高は東側16cm、南側10cm、西側10cmである。

○床 面 全体に平坦な床面で、上に褐色土混入ソフトロームが薄く堆積していた。木の根による攪乱も多く、炉の近辺のみがよく踏みかためられている。

○ 炉 平石4個と丸石1つの方形の石囲炉で南北74cm×東西72cm。又、炉東側に地床炉が存在する。

○出土遺物 曾利期土器片、打製石斧2、凹石1、

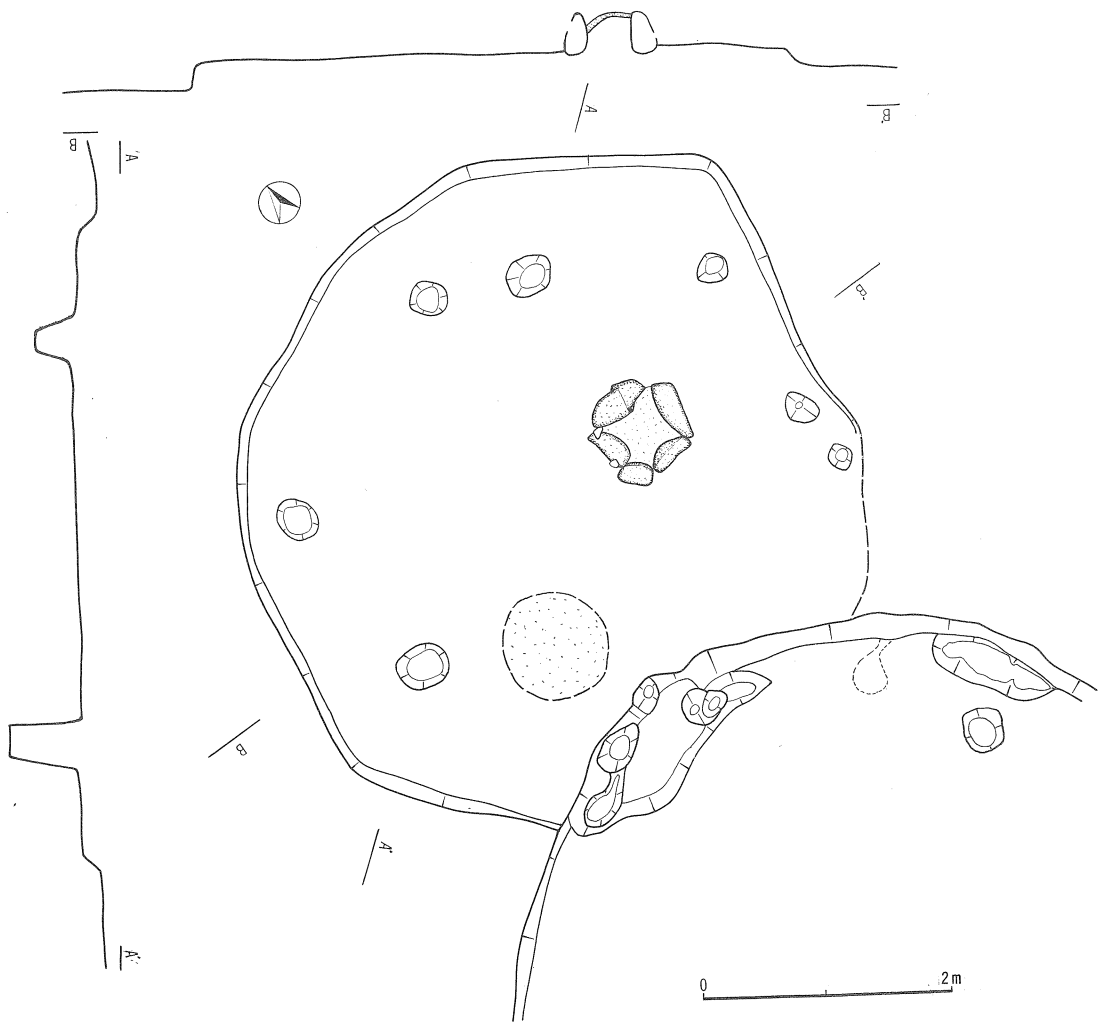
○その他 北壁を1号住居に切られている。

(香月)

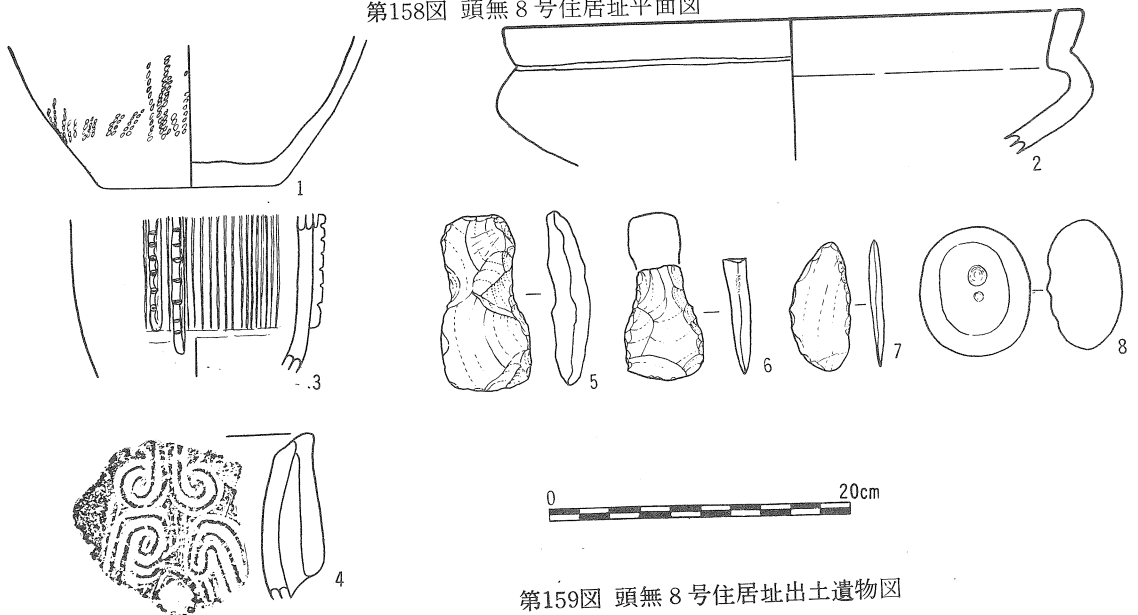
出土遺物

(第159図、図版92)

いずれも破片で、覆土中から出土したものである。1は縄文地文、2は半割竹管平行沈線を縦に強くひいた平行条線を地文に、懸垂文は粘土紐貼り付けの上にへらで刻みを入れる。4は渦巻文が施される把手片で、赤褐色のややもろい土器である。2はへら磨きの浅鉢である。打製石斧5、6は安山岩製、7は粘板岩製、凹石8は裏面がスリ石となっている。



第158図 頭無 8号住居址平面図



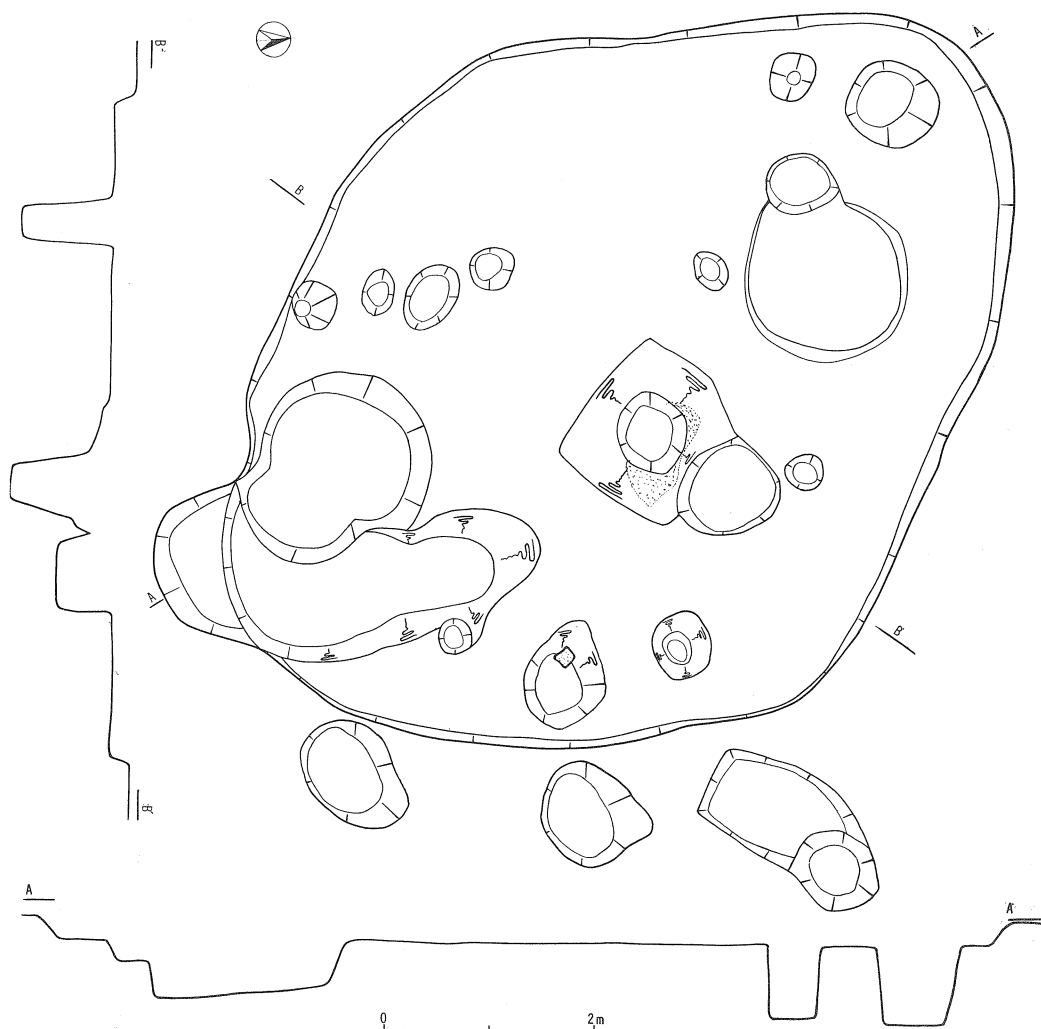
第159図 頭無 8号住居址出土遺物図

### 9号住居址

(第160、161図、図版93)

昭和48年11月2日～11月20日

- プラン 不整円形、北面～南東8.70m×南西～北東6.45m
- 主軸 不明
- 柱穴 13本
- 周溝 なし
- 壁 北側を除いて良好でなく、傾斜もゆるやかである。南側は小竪穴により切られて不明。
- 床面 中央部のみ比較的しまりがあり、検出も容易であったが、周辺部は軟弱である。
- 炉 東西140cm×南北130cmの方形堀込で、皿状の方形掘込みから中央に円形ピットが存在する三段がまへの掘込で、かつては石囲方形炉ではなかったか。
- 出土遺物 遺構が不明確で把えにくかったのに比べ遺物量は多く、一括土器6、石鏃1、磨製石斧1、



第160図 頭無遺跡9号住居址平面図

凹石 9、石匙 9、打石斧 8、スリ石 1、qit1 より炭化物、qitVI より木の實の炭化物が出土している。土器型式は、中期初頭より末葉に至るが、その中心をしめるのはやはり曾利 II ~ III の土器群である。

○その他 住居東側に小竪穴 3 ~ 5 が存在する。又、2号小竪穴が南壁を切っている。

(野中)

出土遺物

(162~164図、図版94、95)

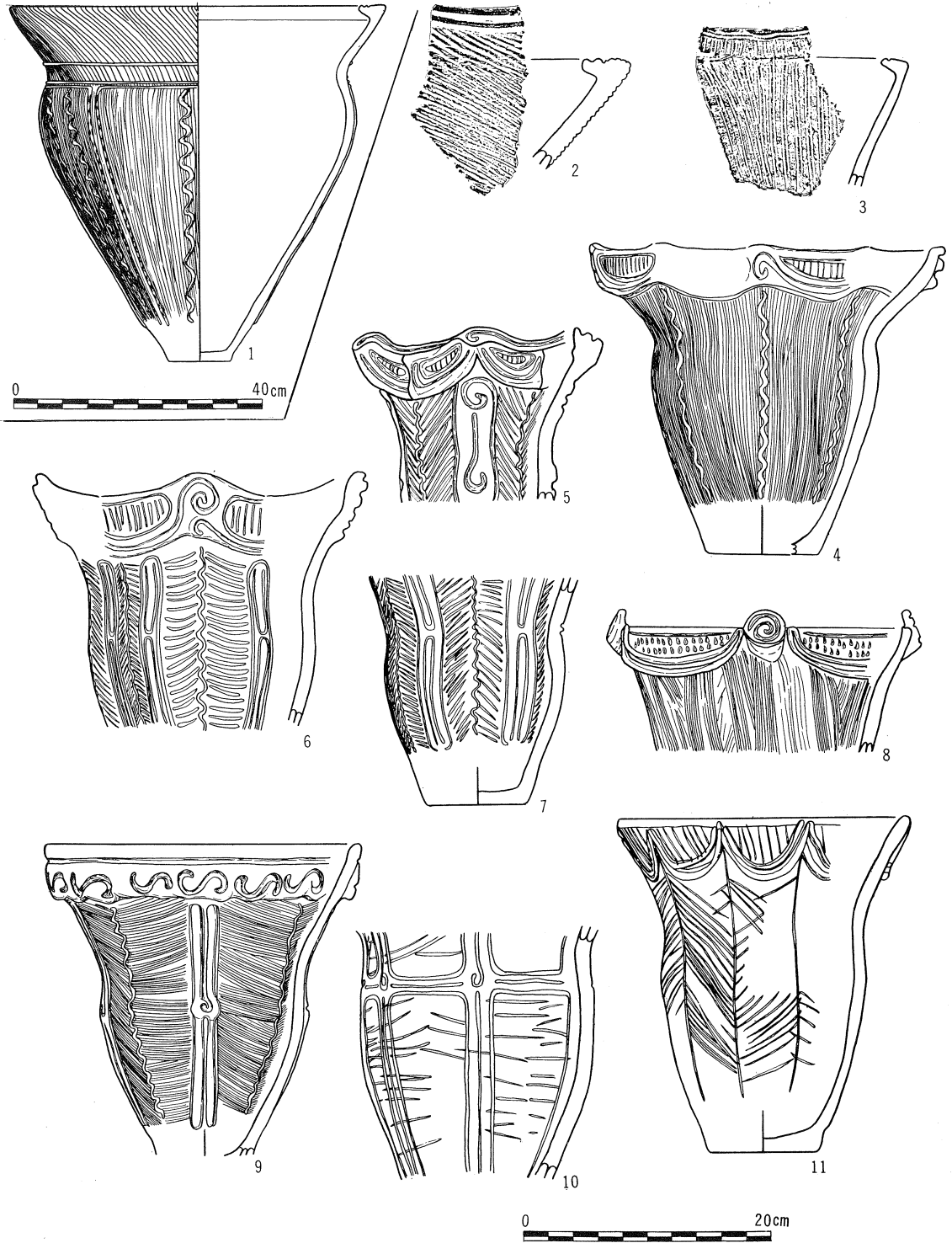
覆土中出土の土器ばかりで、1~3は口唇が内曲し、そこから胴部下まで沈線平行条線で飾られる土器で、粘土紐貼り付け懸垂文も見られる。4、8は口縁部に半円状区画をし胴部に楕目状条線が施される。5~7は胴部にH形懸垂文とミミズ状沈線の懸垂文が交互に垂れ、その空間を棒状、あるいは楕目状沈線で斜めに埋める。口縁部は連続渦巻文と粘土隆線によって半円状区画やS字文が横帯に連続する。10はH形懸垂文が横に連結したもので、地文の沈線はやや粗雑である。11は粘土紐によって半円状区画を8個施したもので、胴部文様は沈線によって懸垂文と斜条線に飾られる。12~14は撚糸文を地文とするもので、12は沈線の半円状区画と懸垂文が施され、13はキャリパー口縁の



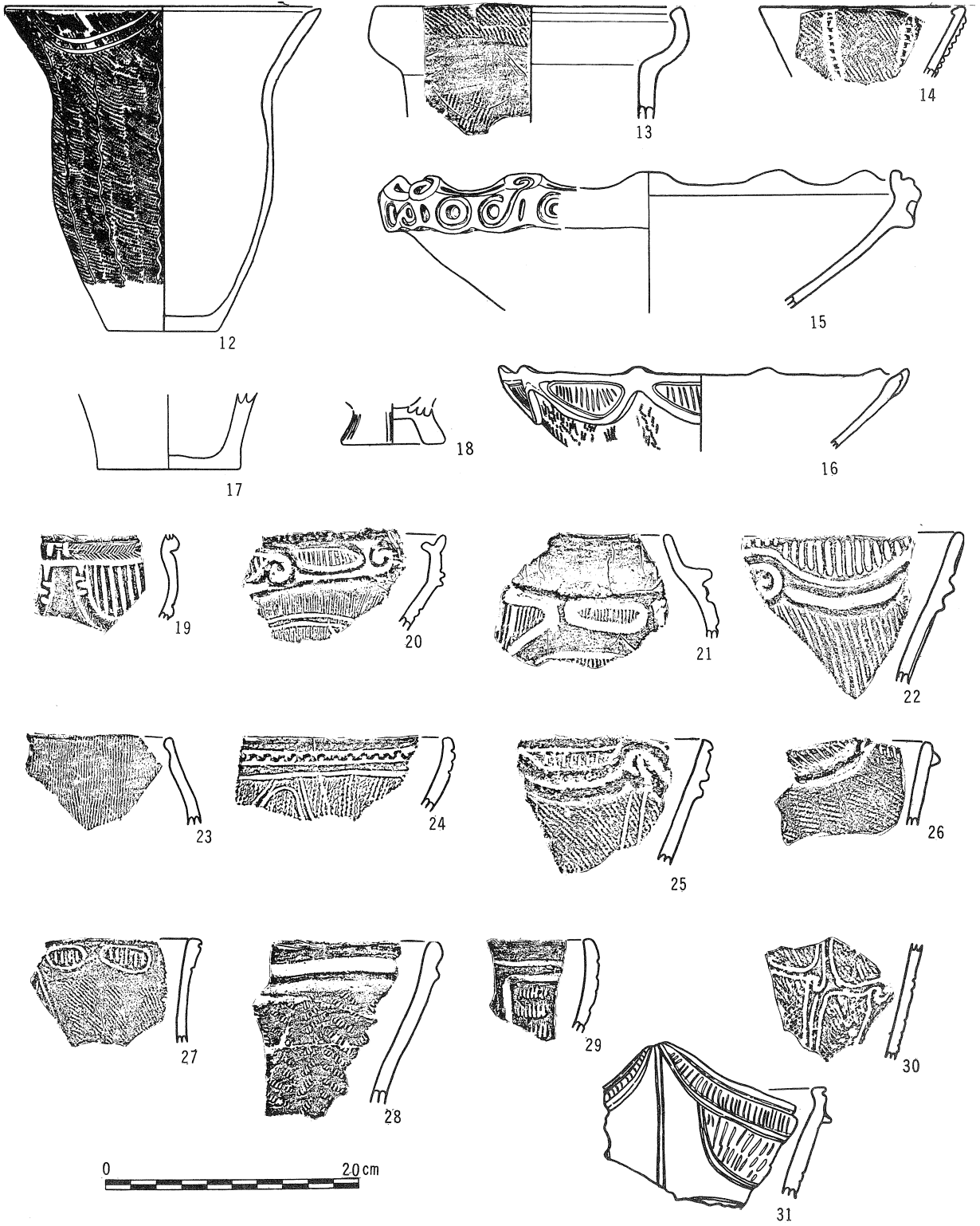
第161図 頭無 9号住居址遺物図



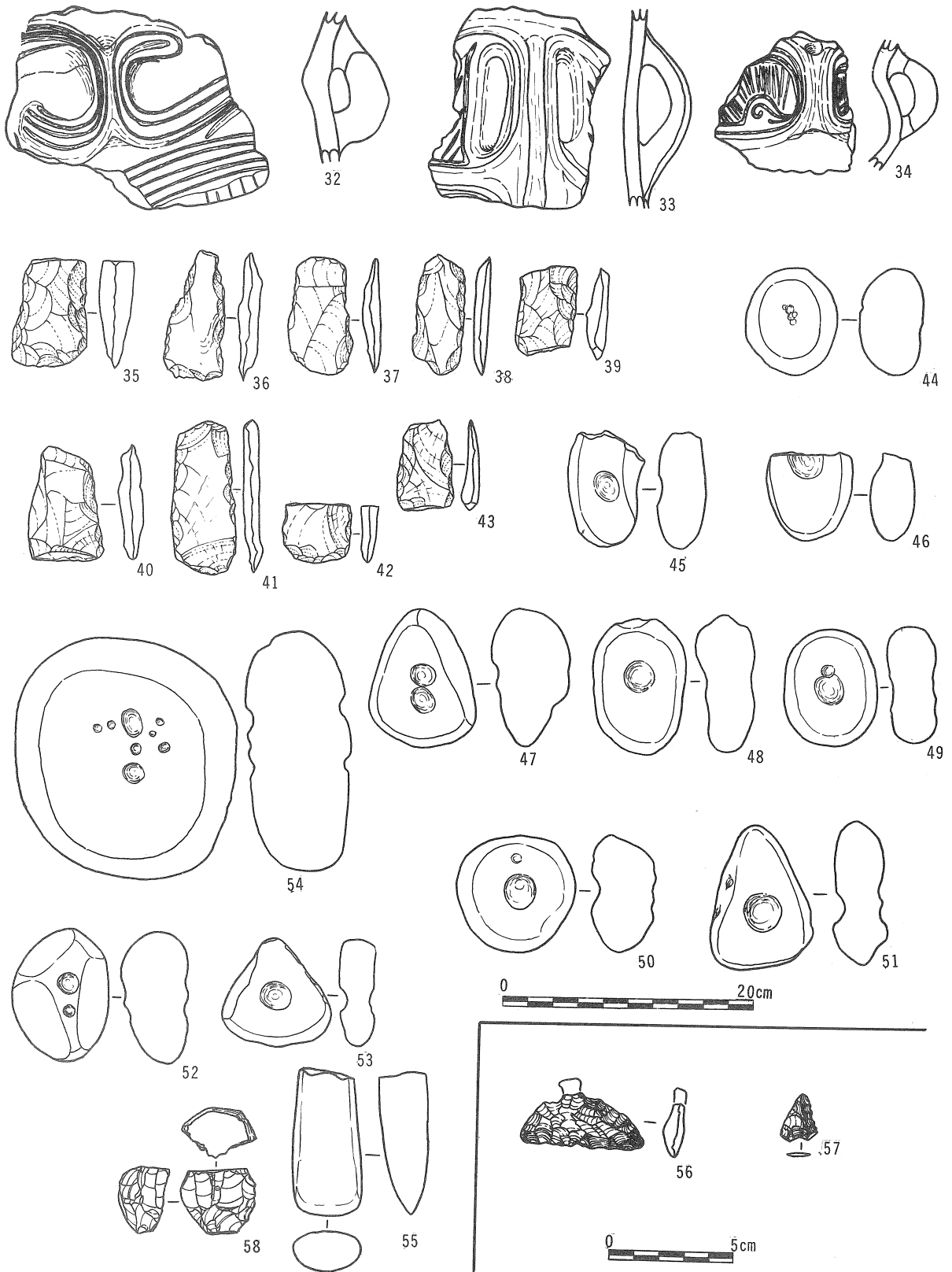
屈曲部は無文である。1 4 は縦に粘土紐が貼り付けられ、その上に半割竹管の押引連続文が施される。1 5 は浅針で、18は台付小型土器である。5 4 は黒曜石製石核で、56はチャート製横形石匙、57は黒曜石製石鎌の脚部欠損品である。



第162図 頭無9号住居址出土遺物図(1)



第163图 頭無 9号住居址出土遺物(2)



第164図 頭無 9号住居址出土遺物(3)

10号住居址

(第165、166図、図版96)

昭和48年11月3日～11月26日

○プラン 円形(胴張、隅丸方形か)、東西8.76m×南北9.38m

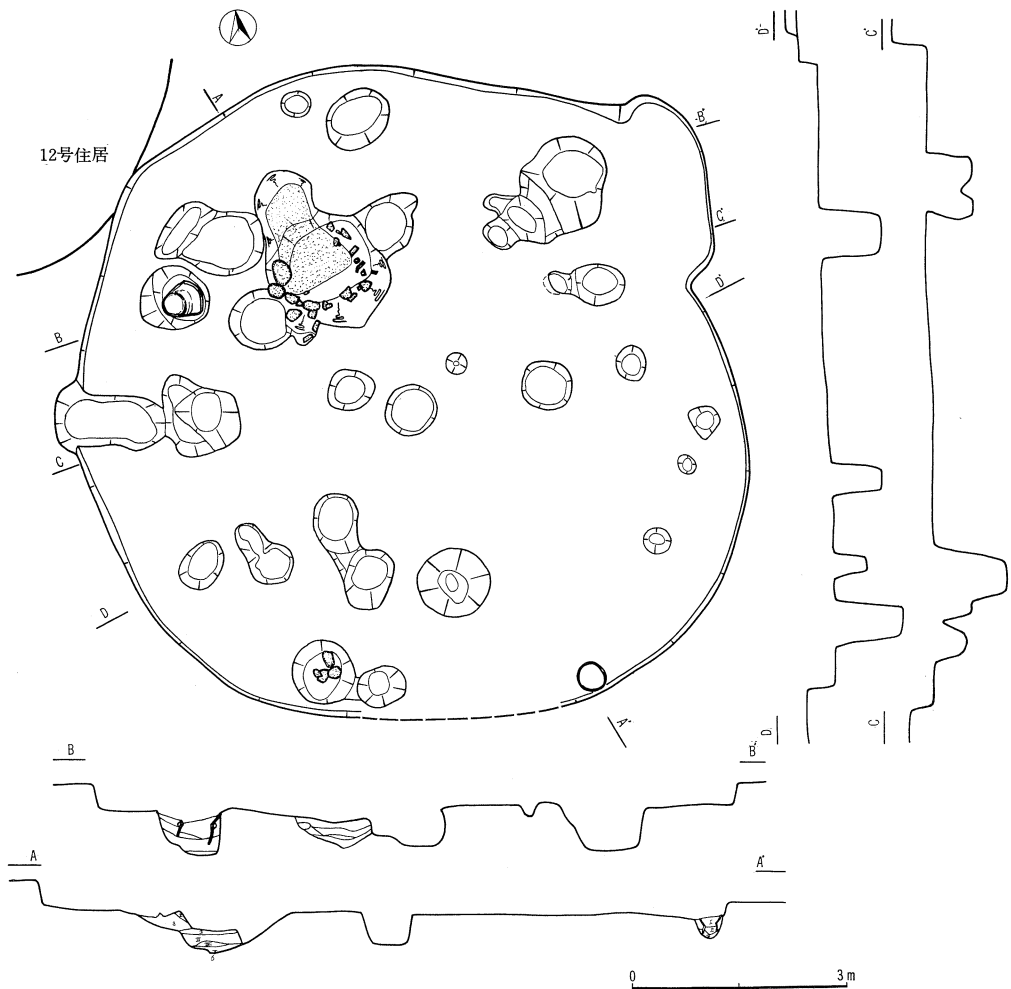
○主軸 N-20°-E

○柱穴 総数30。この中には小竪穴と思われるものもある。柱穴の数からして建直し、拡張等を考えなければならない。

○周溝 なし

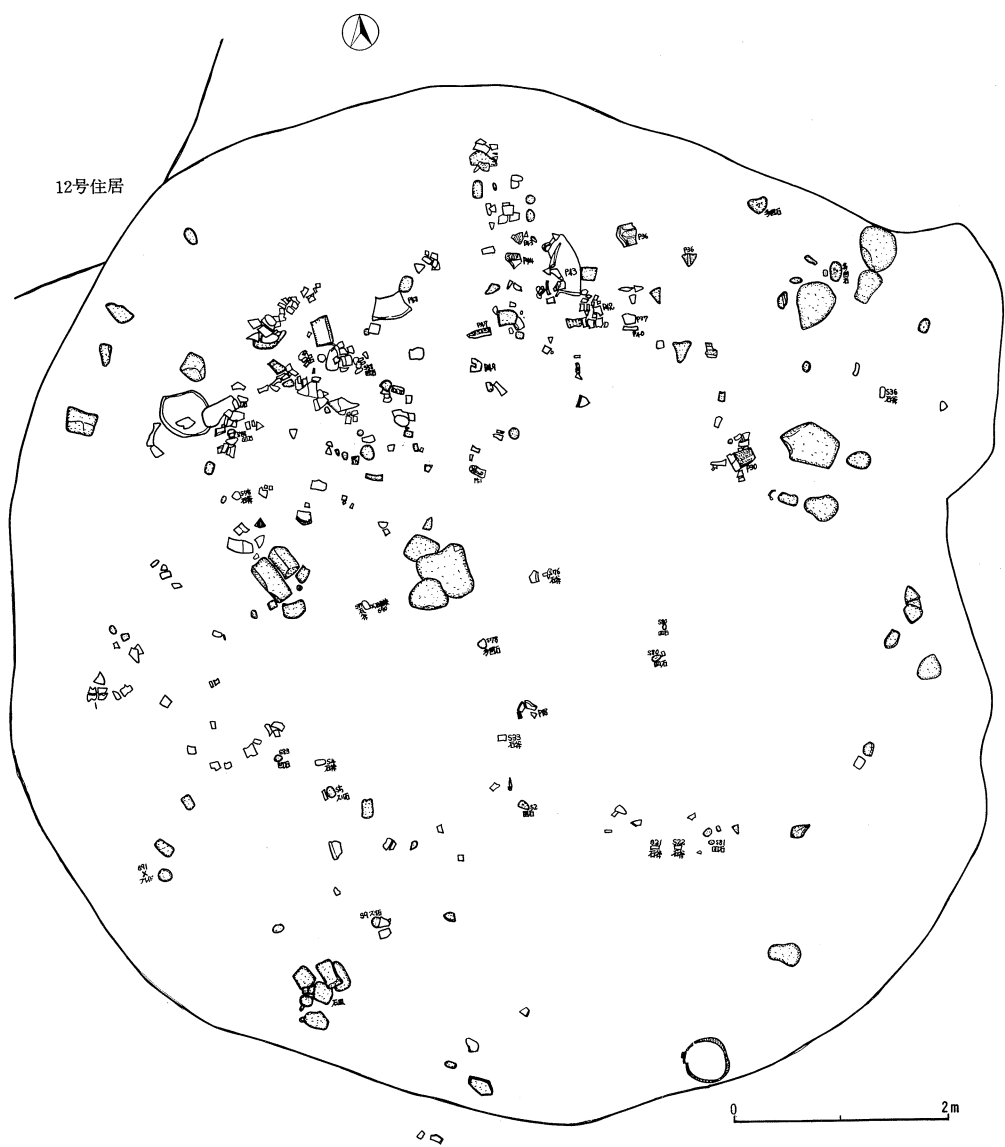
○壁 北西部で12号住居と重畳し、北東部は攪乱を受けている。又、南側は、攪乱の為か壁を発見することができない。西高について北38cm、西35cm、南35cm、東30cmである。

○床面 中央部はよくしまつて良好な状態であるが、南部は明瞭な床面を確認することができなかった。北部には貼床が若干見られる。ピット上に部分的な貼床が見られたところも存在するが良好ではない。

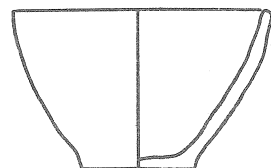
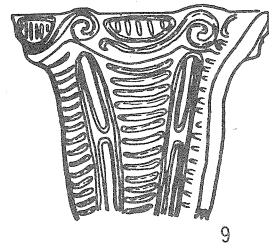
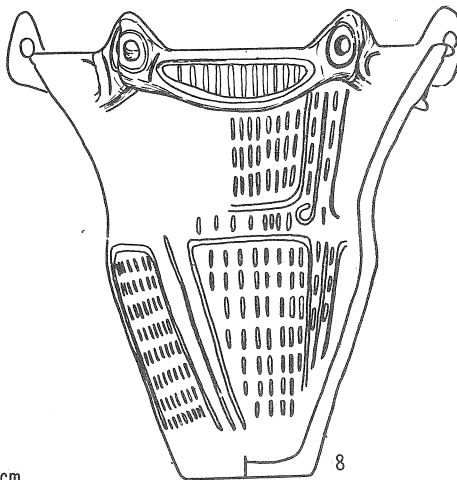
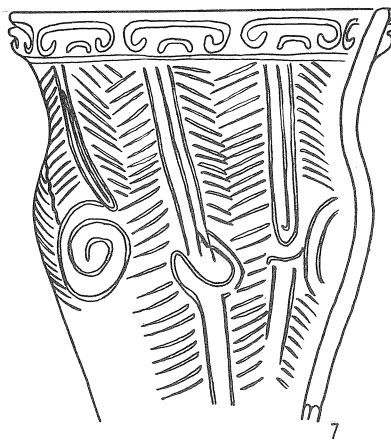
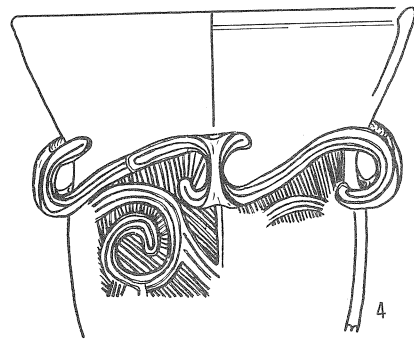
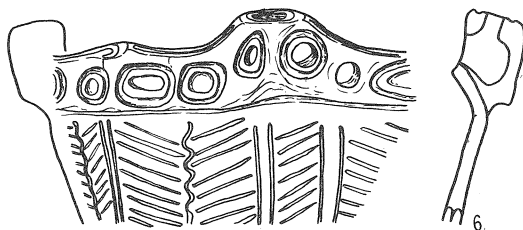
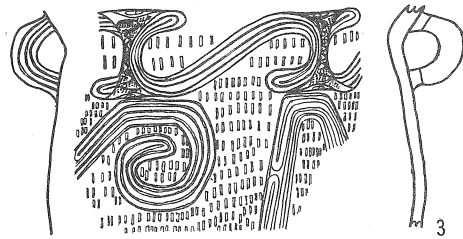
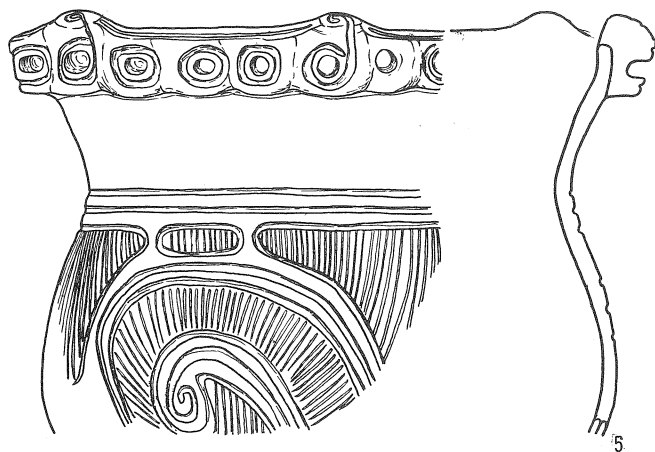
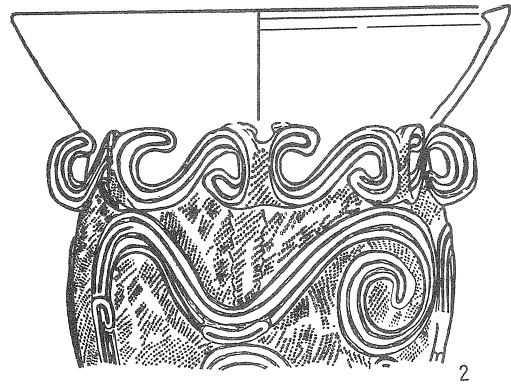
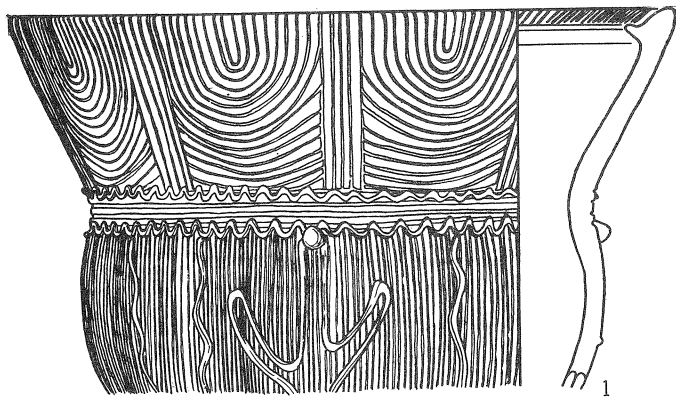


第165図 頭無10号住居址平面図

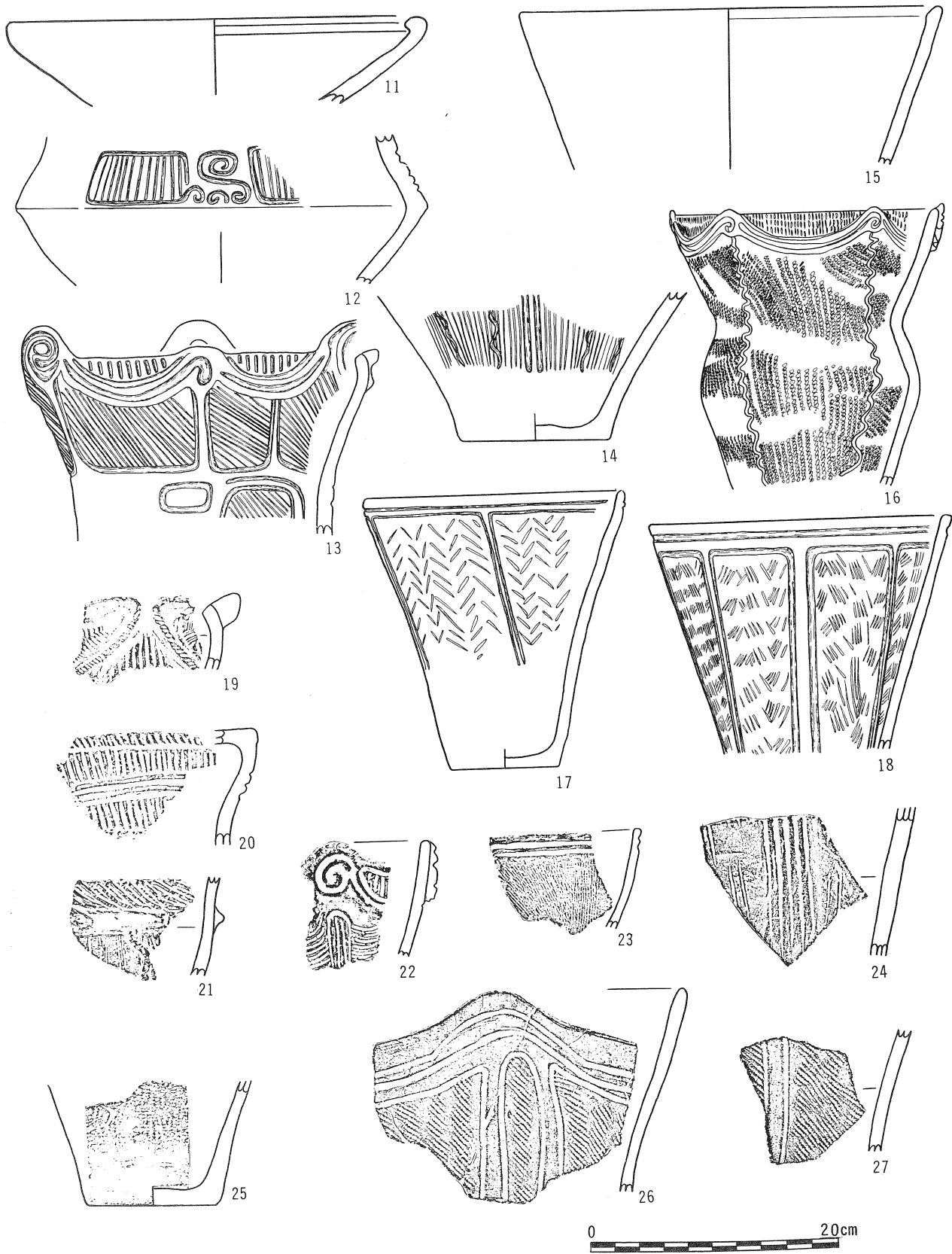
- 炉 炉が重複している。大きな掘込炉の址側に焼土が覆っており、これが新らしく、大きな下の炉は方形で小礫や、焼を受けて割れた石が北側を除いてコの字形に並べられているところから、石囲炉であったことが推察される。径は135cm×120cm
- 出土遺物 中期末葉曾利Ⅱ～Ⅲ式に含まれる土器が大勢をしめており、入口部埋襲、炉西側埋襲いづれも曾利Ⅱ式に該当する。  
磨製石斧1、打石斧8、多凹石2、凹石15、石皿2、石槍1、遺物は北半分集中している。
- その他 12号住居と北西で重複している。 (宮崎)



第166図 頭無10号住居址遺物図



第167図 頭無10号住居址出土遺物(1)

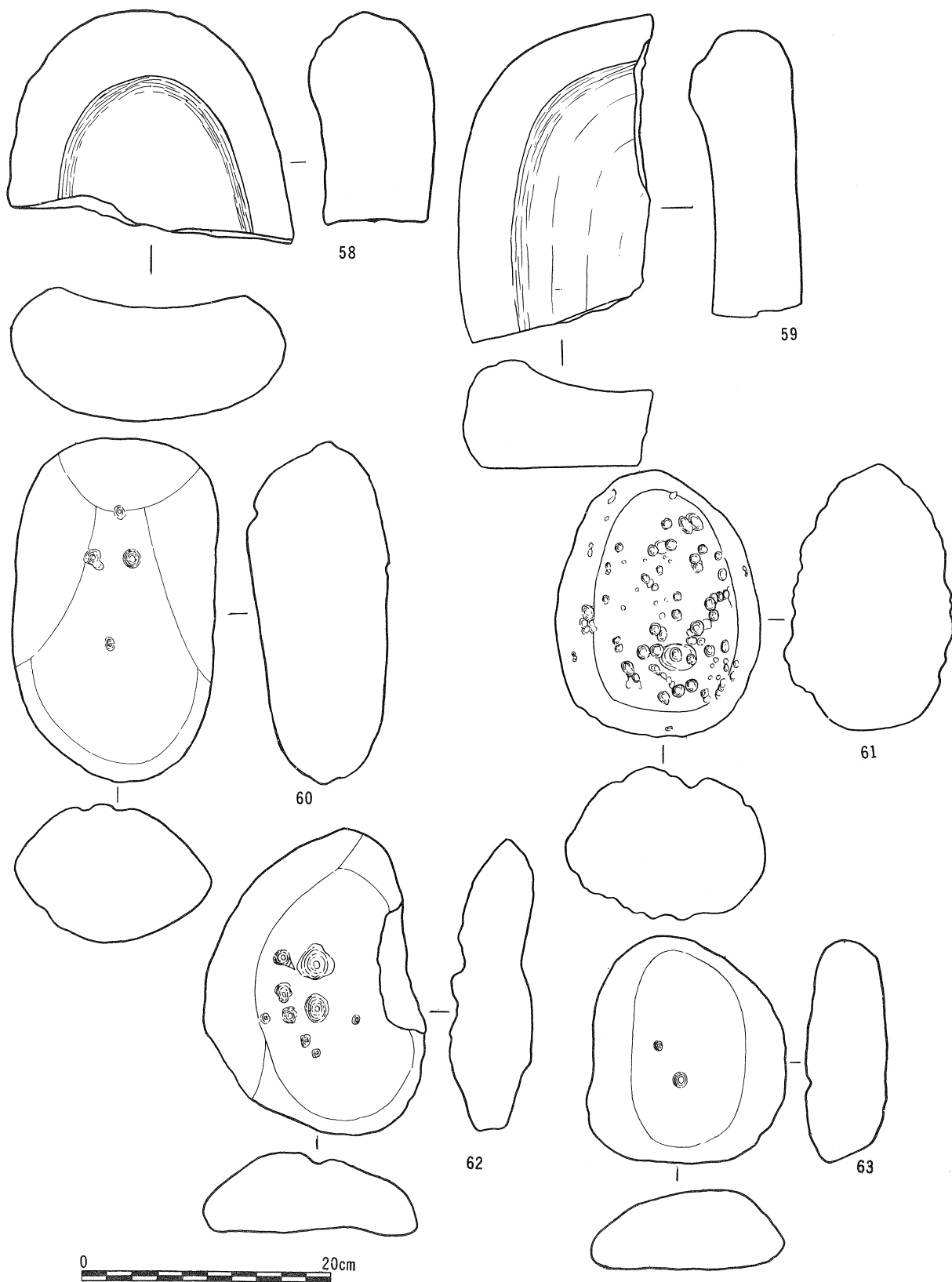


第168図 頭無10号住居址出土遺物(2)



第169図 頭無10号住居址出土遺物(3)





第170図 頭無10号住居址出土遺物(4)

出土遺物

(第167、168、169、170図、図版97、98)

1、2がこの住居の埋甕で、1は住居南、2は炉西側からそれぞれ正位で出土しているが、底部は欠けている。1は半割竹管平行沈線で器面全体に平行沈線及び口縁部の同心円文を描き、頸部及び胴部に粘土貼り付けのボタン状突起と波状粘土紐、懸垂文を施す。2は口縁部が無文で頸部に8個のX字把手をS字半隆線で連続させ、胴部縄文地文の上に大きな渦巻文が3個配される。焼成もかたく、胎土粒子も同質なものが精選されている。3、4は2と同じ大甕で、3はX状把手が推定6個、4は5個付けられ、地文が刺突と平行沈線の差がある。3は胴部破片のみで、4は胴部がほぼ一周する土器である。5、6は口縁部に把手と窓状同心円文が横帯に配されるもので、5は渦巻文が沈線で描かれ、空白部を沈線で埋めている。頸部と胴部の間は無文である。6の胴部文様は7、8と類似する。10、11は浅鉢で無文である。17、18は炉東側の土坑から出土した土器で、中期終末期に位置する。26、27は加曾利E式後半によく見られる土器である。

石器のうち、59の石皿は12号住居出土の石皿と接合する石皿破片である。

11号住居址

(第171、172、図版99)

昭和48年11月13日～11月26日

○プラン 不整円形、東西5.18m、南北は不明

○主 軸 不明

○柱 穴 総数13。住居内に柱穴に比較して大きなものまで含めているが、この大きなもので浅いものは小竪穴であるかもしれない。

○周 溝

○壁 北側は小竪穴14、15により一部が重複しており、また東側は木の根により攪乱されていた。南側は攪乱を受けているのか、壁が検出されず南北の径を計ることはできない。壁は垂直に近く良好であるが、西側は柔らかい。

○床 面 住居中央部及び、南東部は比較的しまりもよく踏みかためられているが、西側は軟弱でピットとも重複して、床面は水平ではない。

○炉 石囲方形炉で、南北1.07m×東西1.06m、深さ48cmある。

○出土遺物 曾利期の遺物で、一括土器は少ない。石器類は凹石7、打石斧5、スリ石2、多凹石2、この他軽石が8個出土している。

○その他 なし

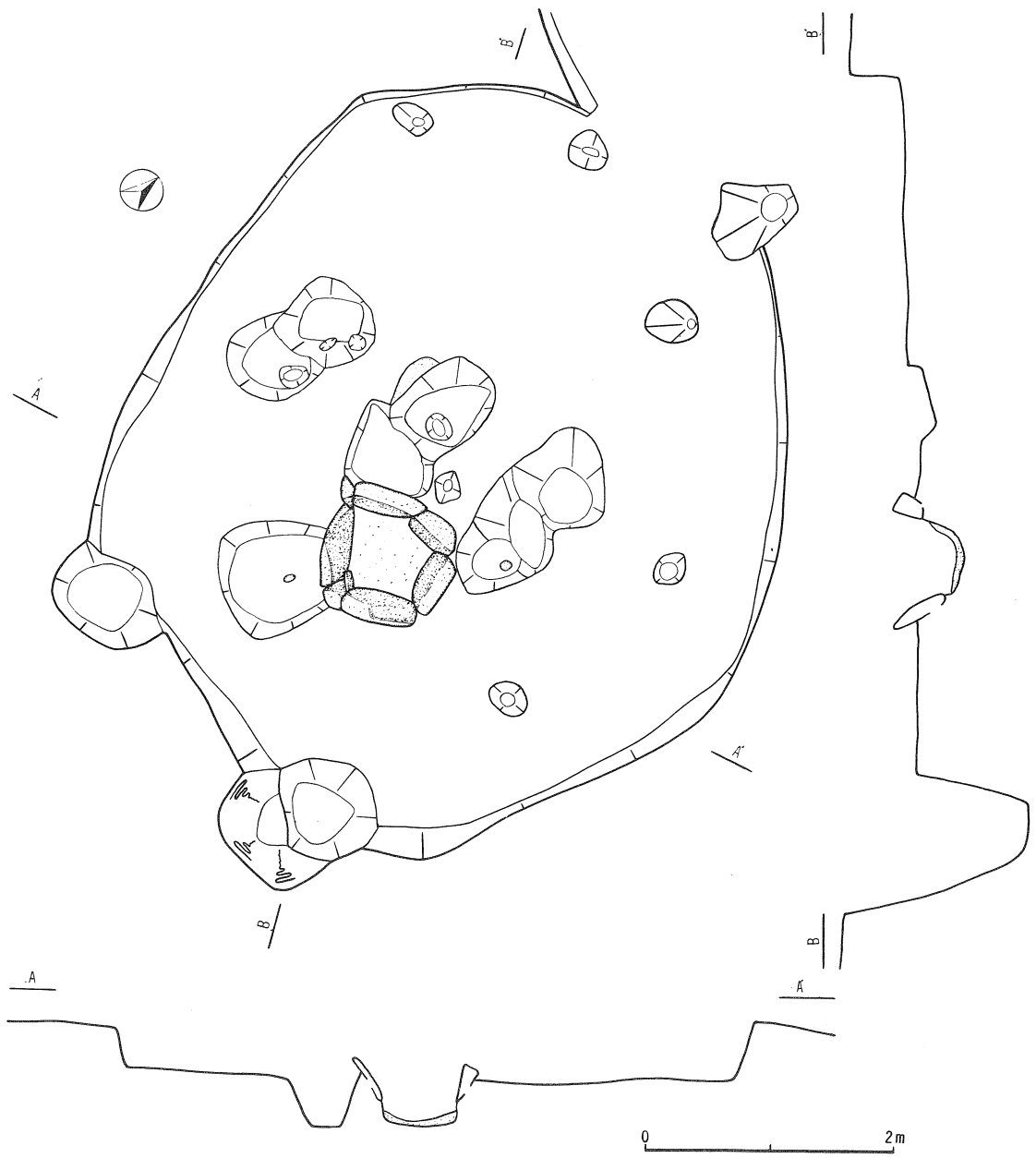
(香月)

出土遺物

(第173、174図、図版100)

覆土中出土の遺物ばかりで1、4、6、17、18は条線地文の土器。11、12は細かい縄文が器面にしっかり施文され、粒土紐の両側をへらで押えた隆線の渦巻文、懸垂文が描かれる中部地方に少ない土器である。18は台付土器の接合部で、胴部に穴が幾つか穿れている。

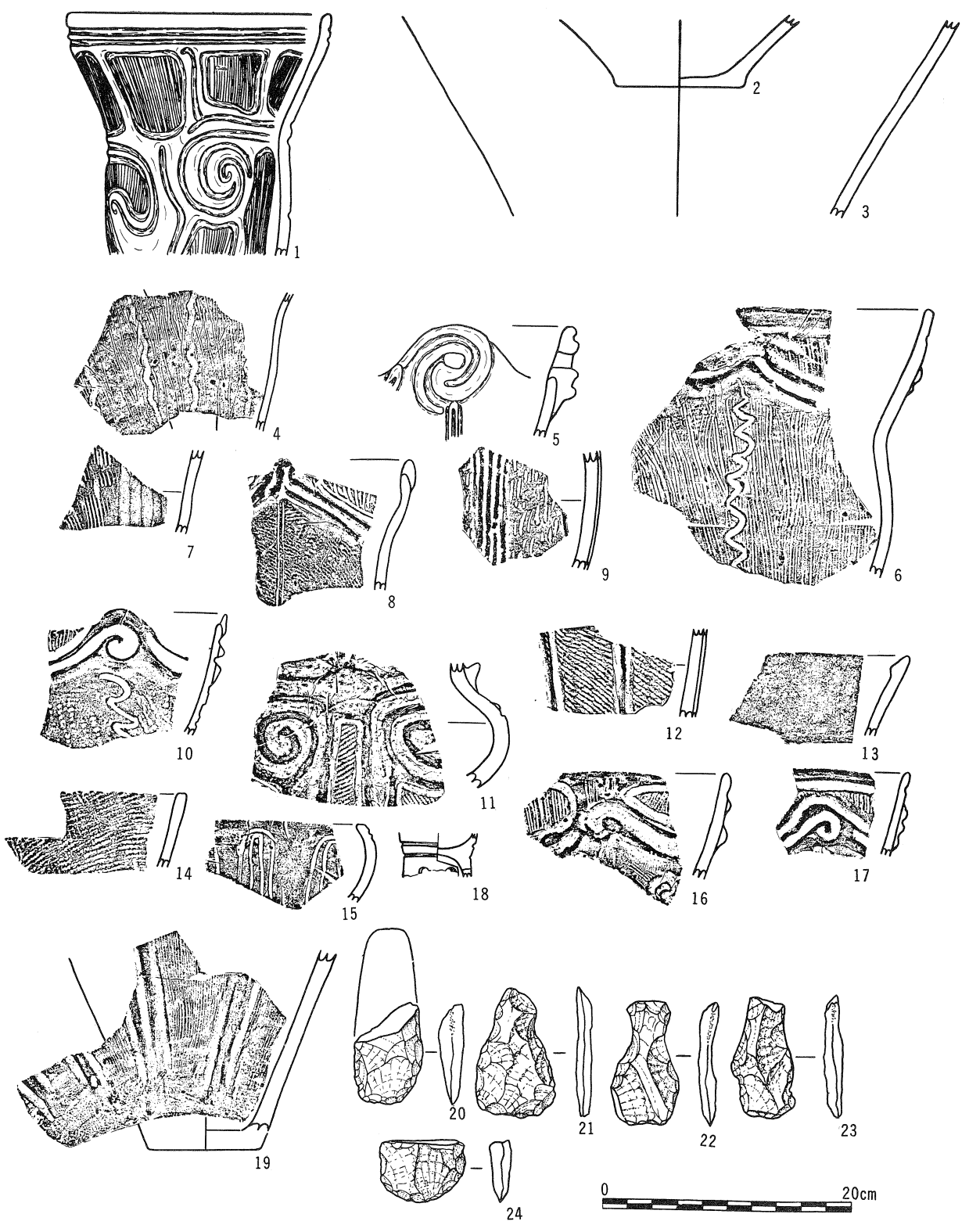
打製石斧の21、22は粘板岩製で、他は砂岩製で39～44は軽石である。



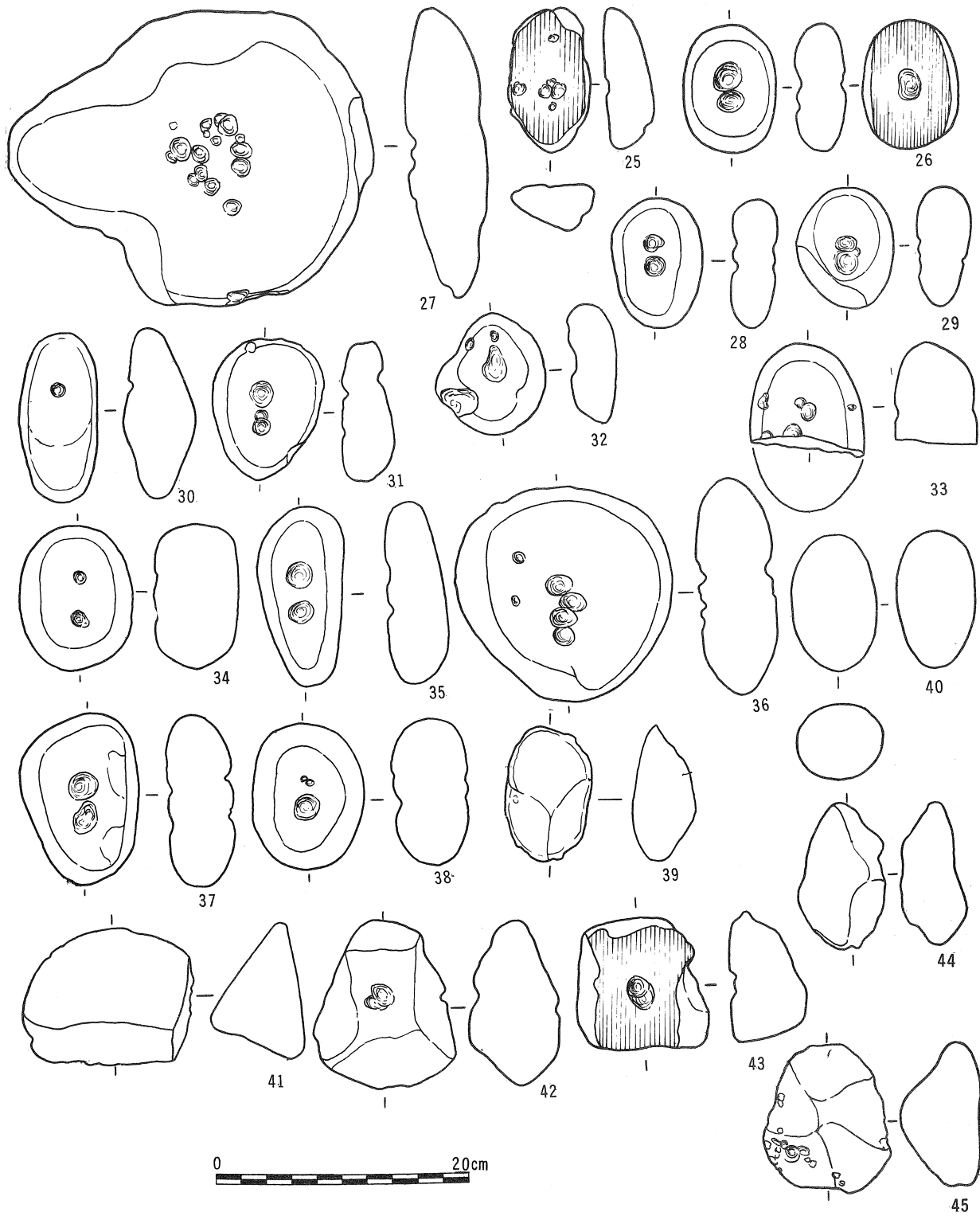
第171図 頭無11号住居址平面図



第172図 頭無11号住居址遺物図



第173图 頭無11号住居址出土遺物图(1)



第174图 頭無11号住居址出土遺物図(2)

## 12号住居址

(第175図、図版101)

昭和48年11月14日～11月25日

○プラン 不整円形、東西7.4m×南北5.5m

○主軸 たし

○柱穴 総数12、そのうち柱穴と考えられるもの8本で、径20cm前後、深さ60cm位である。柱穴内覆土は軟弱である。

[柱穴には、ボーリング棒が楽に入る場合と、そうでない場合がある。これは住居の廃棄状態と強いつながりを持つものと考えておかなければならない。何故なら、柱が立ち腐れた場合には(住居構造を残したまま移動する)、覆土が柔らかいであろうし、家を解体しその住居を完全に使用できない状態にし、その材料を使用して同一集落内に移築した場合、前者に比較して覆土はしまりが良くなるであろう。]

○周溝 なし

○壁 全体的に壁は柔らかく、11号住居との間にあたる住居西側は攪乱により壁が存在せず、南側埋甕東部を10号と重複している。また北側と東に、小竪穴が重複している。

○床面 全体的にほぼ良好で、特に東半分については極めて良好である。西側攪乱部は床面も軟弱で、ロームは踏みかためられていない。

○炉 住居址中央北側に位置して方形石囲炉であったものが石を抜き取られたものである。焼成を受けて割れた石の一部が西辺に3個程残っている。100cm×95cm、深さ35cmの底面に焼土もある。又、炉中央に胴部上半を欠損する正位の土器底部が置かれており、土器の使用方法を示すものとして重要である。

○出土遺物 住居入口部埋甕、炉内置甕を除いてほとんどの遺物が住居覆土中により出土している。時期は曾利Ⅱ～Ⅲ期に属するものが大勢をしめる。

石器類は、凹石9、石匙1、打石斧5、序石斧3、石皿1、石棒1、スリ石2、石鎌1等で、他の住居と同様に凹石の量が多い。

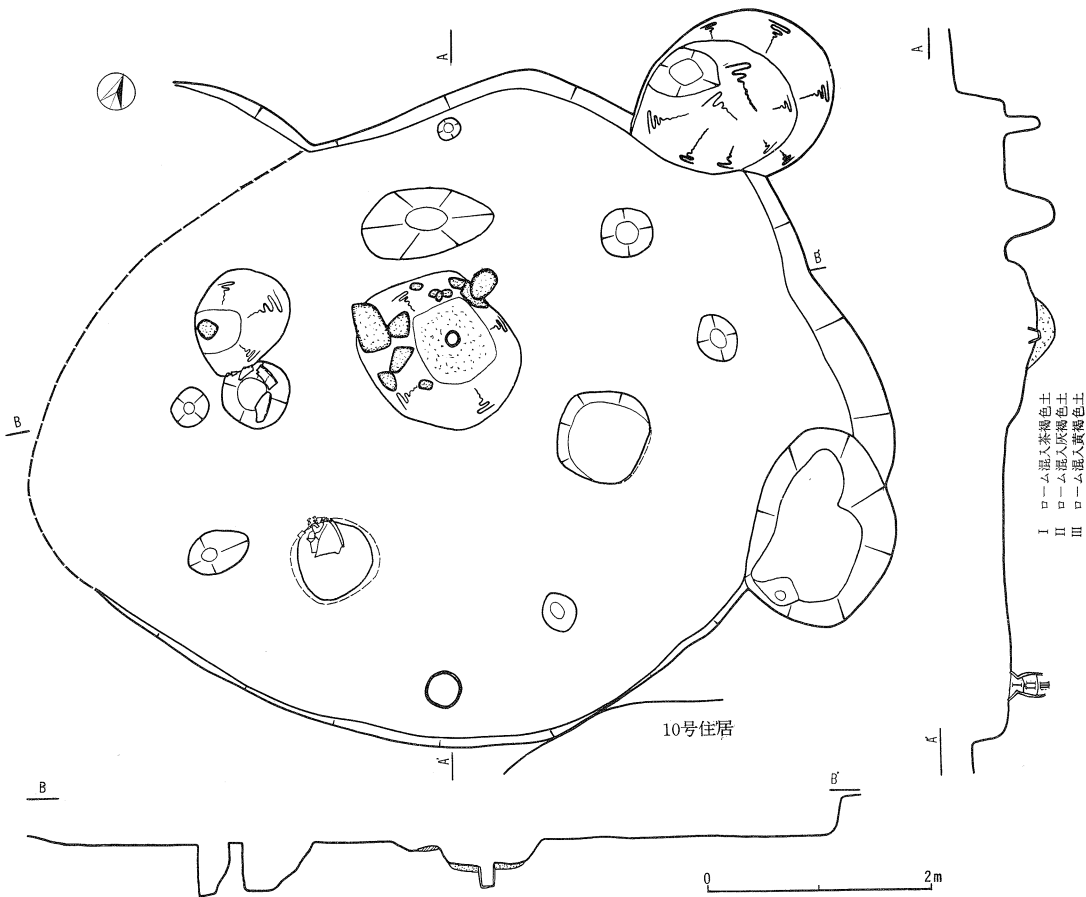
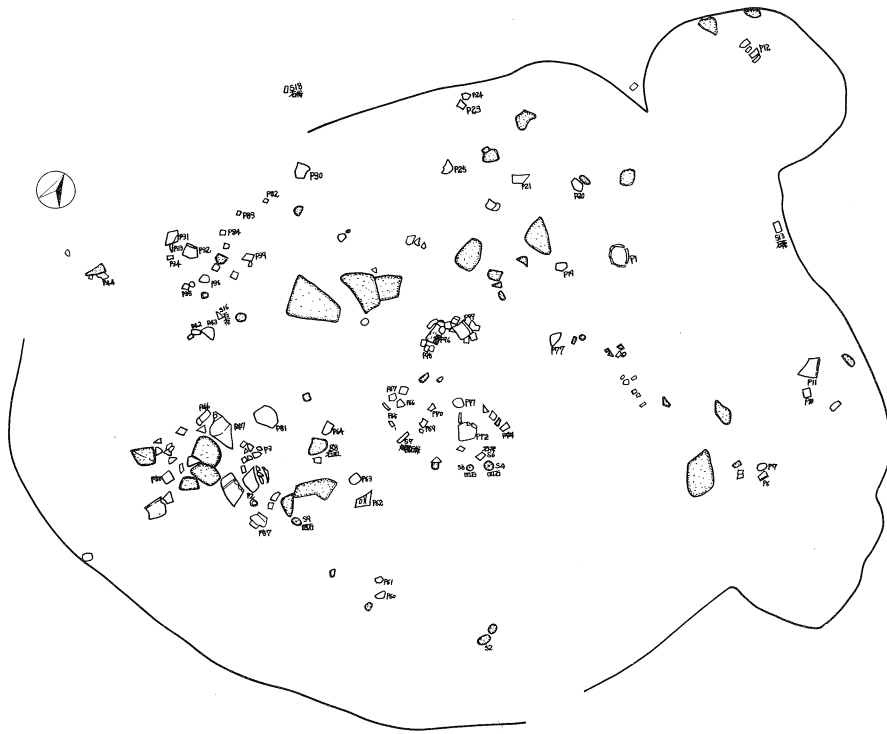
○その他 なし

(斉藤)

## 出土遺物

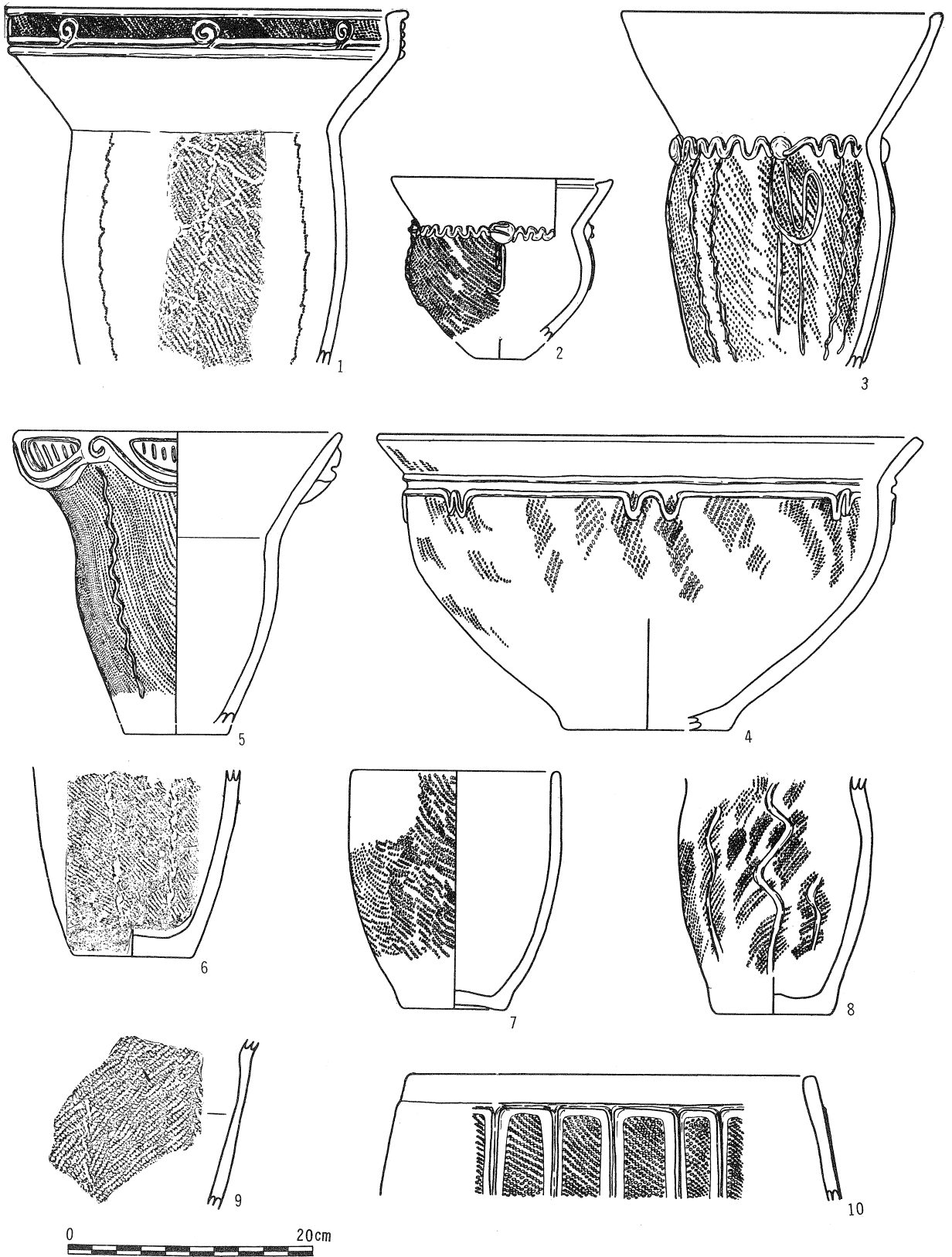
(第176、177、178図、図版102～104)

1は住居南側の埋甕で正位に埋設される。口縁部は直立し、8個の渦巻文が縄文地文の上に粘土紐で配され、無文帯をはさんで胴部縄文地文にコイル状縄文の懸垂文が施される。これは6、9の胴部文様に見られる特徴のある土器で、いずれも胎土はもちろ、6は炉内中央に正位で置かれた甕で、口縁を欠いている。2～4は同時製作による一括土器と思われ、荒い縄文地文の上にボタン状突起及びミミズ状隆線を頸部に配する。10は口縁部に無文帯があり、下には縄文地文の上に微隆線で方形に区画しているが、タル形土器の口縁部で縄文施文が明瞭である。11は口縁部に粘土紐で方形区画を横帯に施し、胴部は縦の条線で埋める。頸部は屈曲し、内面に陵が見られる。12、13は浅鉢で、22は土偶腰部破片であろう。23は黒曜石製石鎌の完形品である。42は輝石安山岩製石棒、43は10号石皿と接合する。

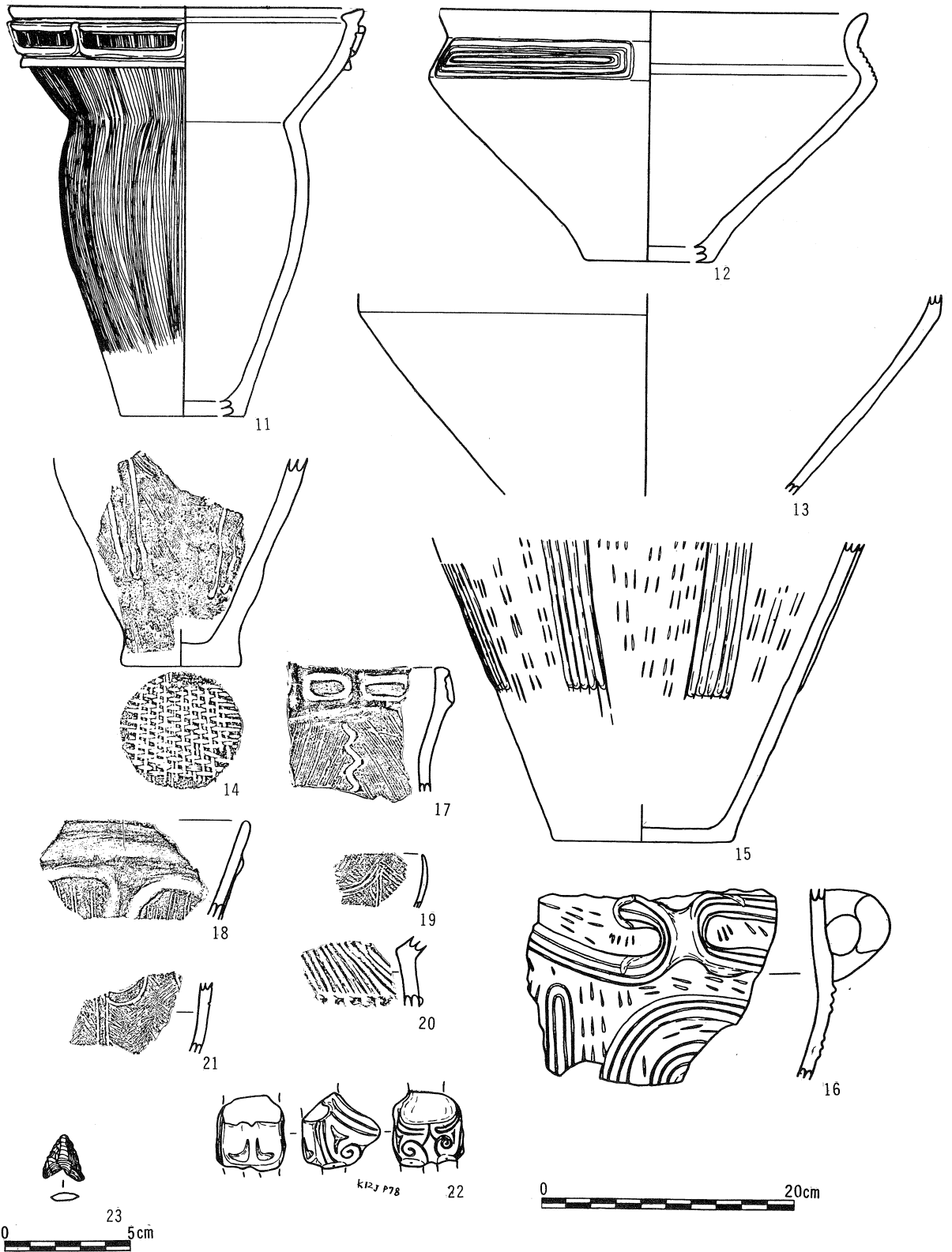


第175図 頭無12号住居址平面図、遺物図

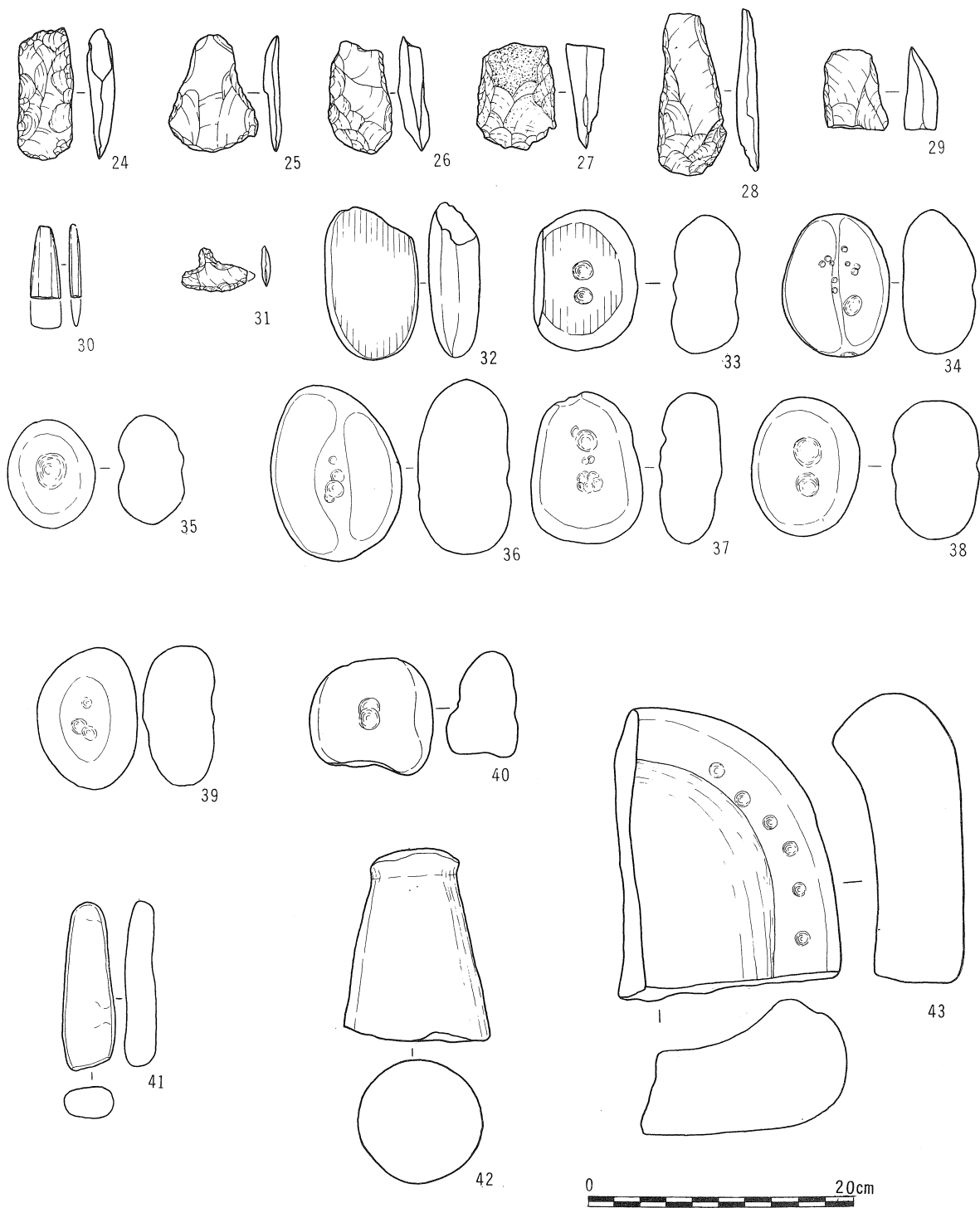




第176図 頭無12号住居址出土遺物図(1)



第177图 頭無12号住居址出土遺物(2)



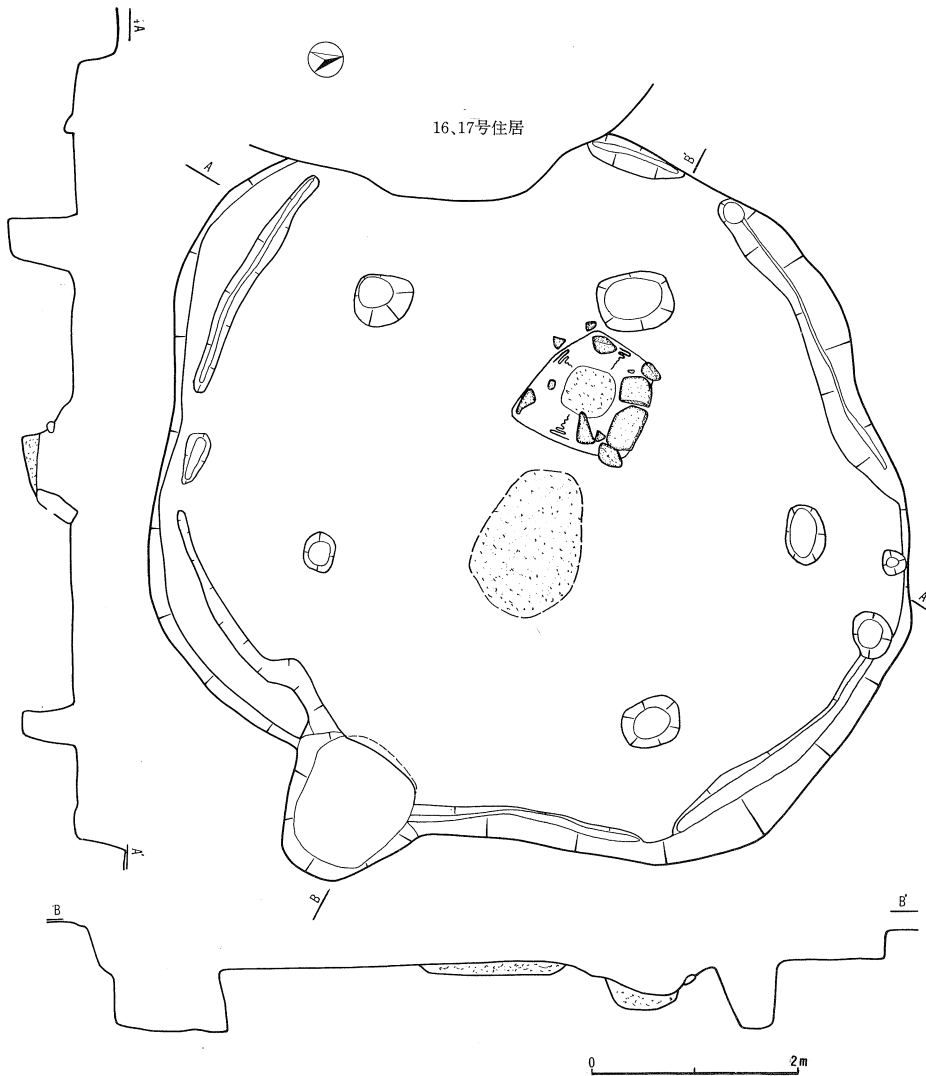
第178図 頭無12号住居址出土遺物(3)

14住居址

(第179、180図、図版105)

昭和48年11月25日～12月1日

- プラン 胴張隅丸方形、7 m × 7 m
- 主 軸 N-49°-W
- 柱 穴 5本、直径45～55 cm、深さ50～65 cm
- 周 溝 西側重複部を除いてほぼ一周するが、所々切れている。幅45～15 cm、深さ5～28 cmを計る。
- 壁 良好で垂直に近い。
- 床 面 かたくしまり良好である。炉東側に地床炉があり、150×100 cm、厚さ8 cmの焼土がある。

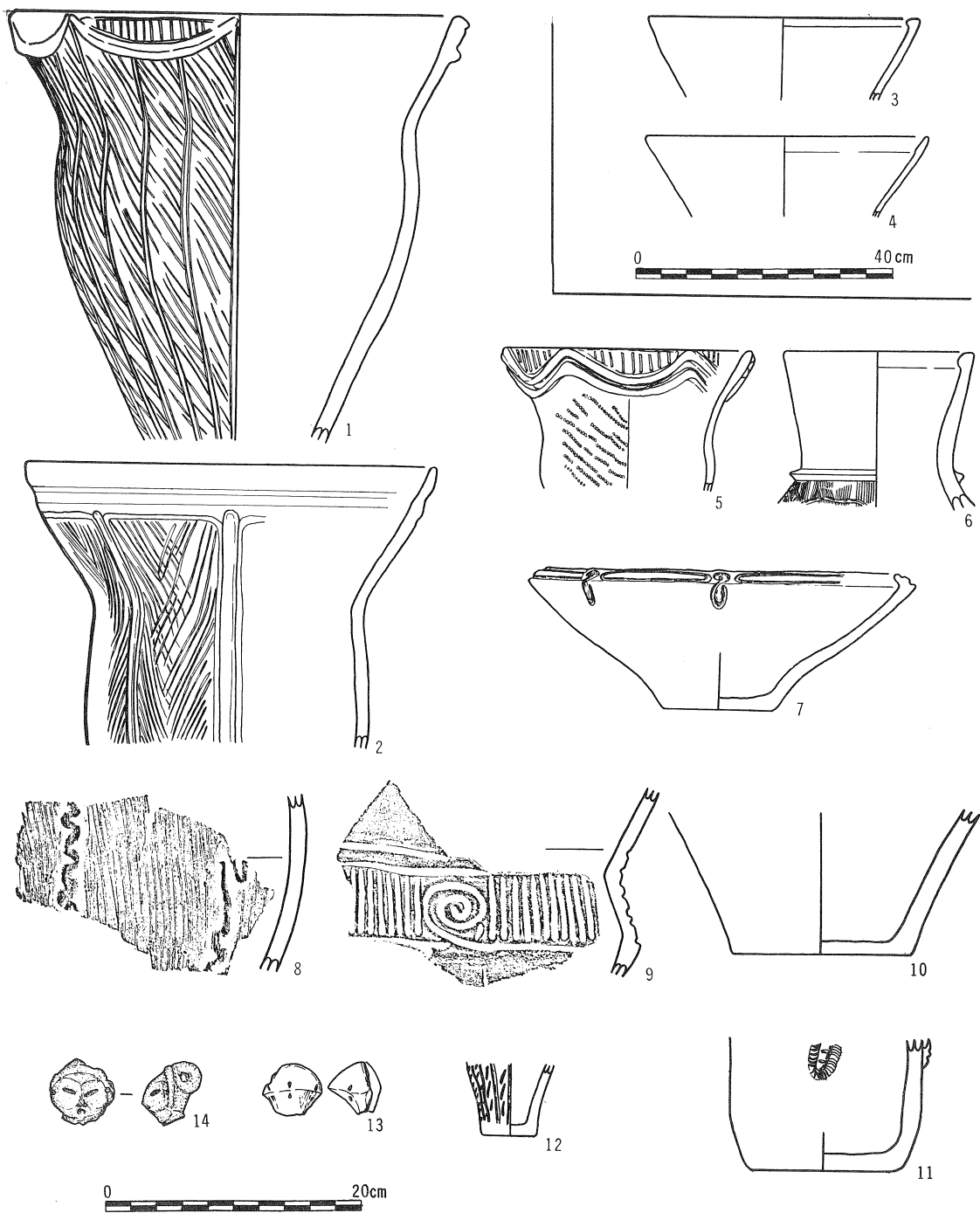


第179図 頭無14号住居址平面図

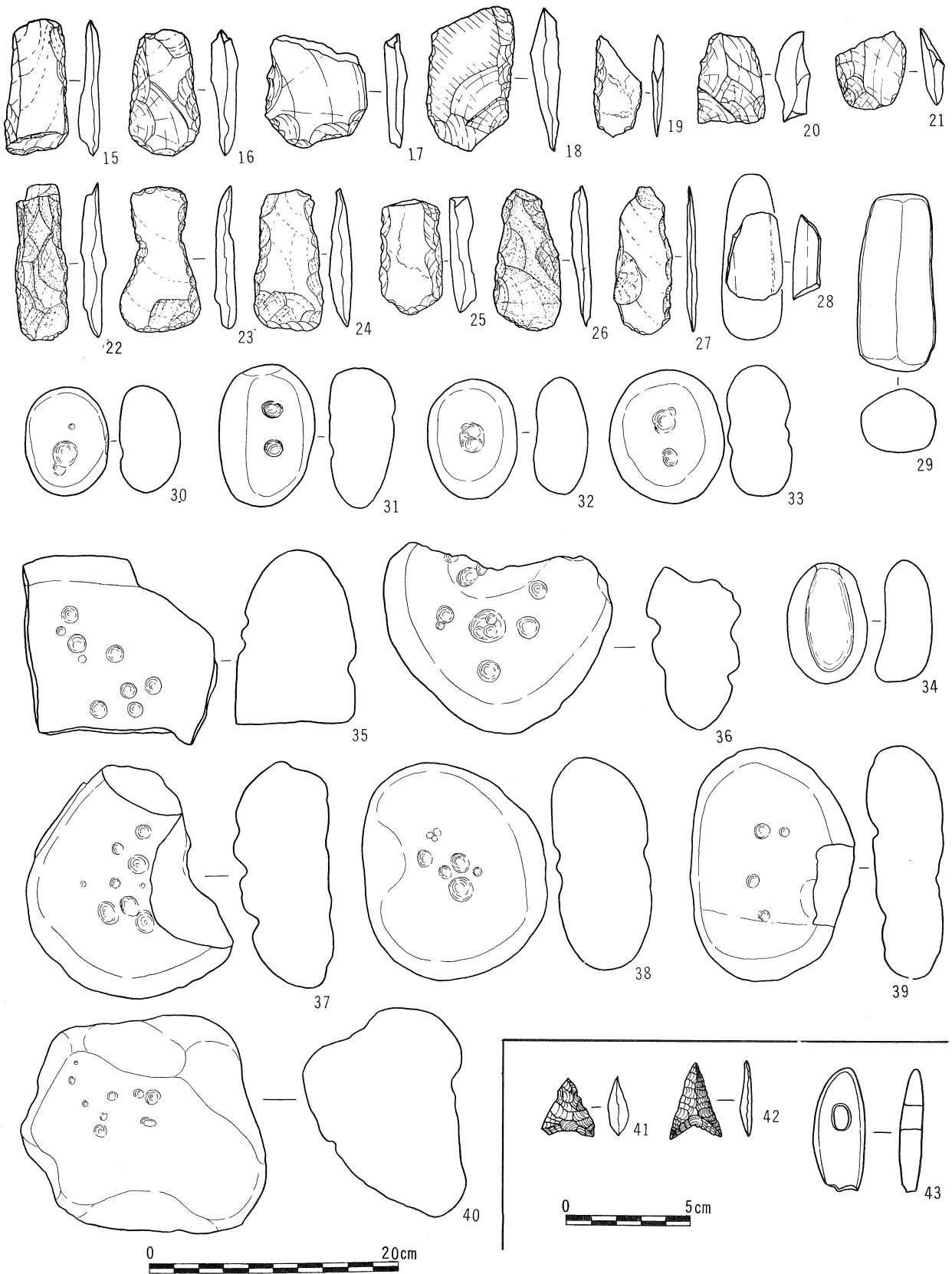
- 炉 住居中心北西1cm位に110×110の方形石囲炉で、北東辺を除いて石は抜かれている。  
〔住居内の石囲炉と地床炉の関係をどの様に把えてゆくかが今後の問題になるであろう。〕
  - 出土遺物 出土遺物はほとんど覆土中より出土し、特殊遺物も多い。一括土器、土偶2、硬玉製大珠1、石鉄2、凹石8、多凹石2、石斧9、スリ石3が出土している。
  - その他 東南入口部と想定されるところに小竪穴20号がある。住居と重複する小竪穴と把えるのか、あるいは住居に伴うものか不明である。多くの住居の場合、これら小竪穴は貼床されていない場合が多い。
- (浦野)



第180図 頭無14号住居址遺物図



第181図 頭無14号住居址出土遺物(1)



第182図 頭無14号住居址出土遺物(2)

出土遺物

(第181、182図、図版106、107)

覆土中出土のものばかりで、1は口縁部に半円形区画を粘土紐貼り付けで行ない、半割竹管平行沈線で懸垂文を24本位垂らしている。地文は荒い沈線で斜めにひかれている。2は口縁部に太い沈線を廻らし、隆線懸垂文の間に杉綾状沈線が施される。3、4は大甕の無文口縁と思われる。6は口縁無文の壺形土器で肩部に罅がつけられ、胴部は櫛目状沈線が見られる。7は口縁部が内曲する浅鉢で、S字文が沈線で8個配されるのが推定できる。11は流れ込みの底部と思われ、粘土紐貼り付けの両側に連続瓜形文がある。胎土はやや荒い。13、14は土偶頭部で、13は顔面が剥離して不明であるが、後頭部に穴が3個ある。

石器のうち43はヒスト製大珠で、良く磨かれている。41、42は黒曜石製石鏃である。この住居出土の打製石斧、凹石等は隣接集石遺構と混在している。

### 16号住居址

(第126、183図、図版108)

いずれも覆土中の土器、石器で、1～3、6、7は底部が小さく、口径の大きい胴部の直線的な土器で、「ハの字」文と櫛目状条線が施されるもので、8は同土器破版の円盤土製品、9は台付小型土器。4は胴部がくの字に張る無文土器等がある。10は硬砂岩製打製石斧、11、12は輝石安山岩製である。

### 18号住居址

(第184図、図版109)

昭和48年11月30日

プランや柱穴等、住居遺物の内容は全く不明で、11号住居と14号住居との中間に位置する小型住居で、埋甕のみを取り上げた。第184図1は埋甕で底部と口縁の一部を欠くが、器形をほとんど推定できる。連続渦巻文の土器は、長野県伊那及び諏訪地方でタル形土器に施される文様であるが、ここでは深鉢形土器の文様となっている。この文様の土器は柳坪、頭無遺跡出土の唯一のものと思われる。

### ○その他

(第185～189図、図版110、111)

1は7号住居址北側の土坑より出土した一括土器で、7号住居埋甕との関係から土坑が新しいことが理解される。2、3は12号住居北東の13号土坑出土遺物である。

4～7はA地区溝中より発見された土器で、溝に伴うものではない。

8～42は集石遺構内から出土した土器及び石器で、凹石の量が多い。8の土偶は県内御坂町黒駒発見の三本指の土偶と腕、背中が類似している。

その他、グリッド出土遺物発見のものとして特別な遺物は、74の安山岩製大珠、及び土師器の台破片47であろう。47は類例が昭和48年度勝沼バイパス発掘調査報告書「古代甲斐の国の考古学調査」にある。

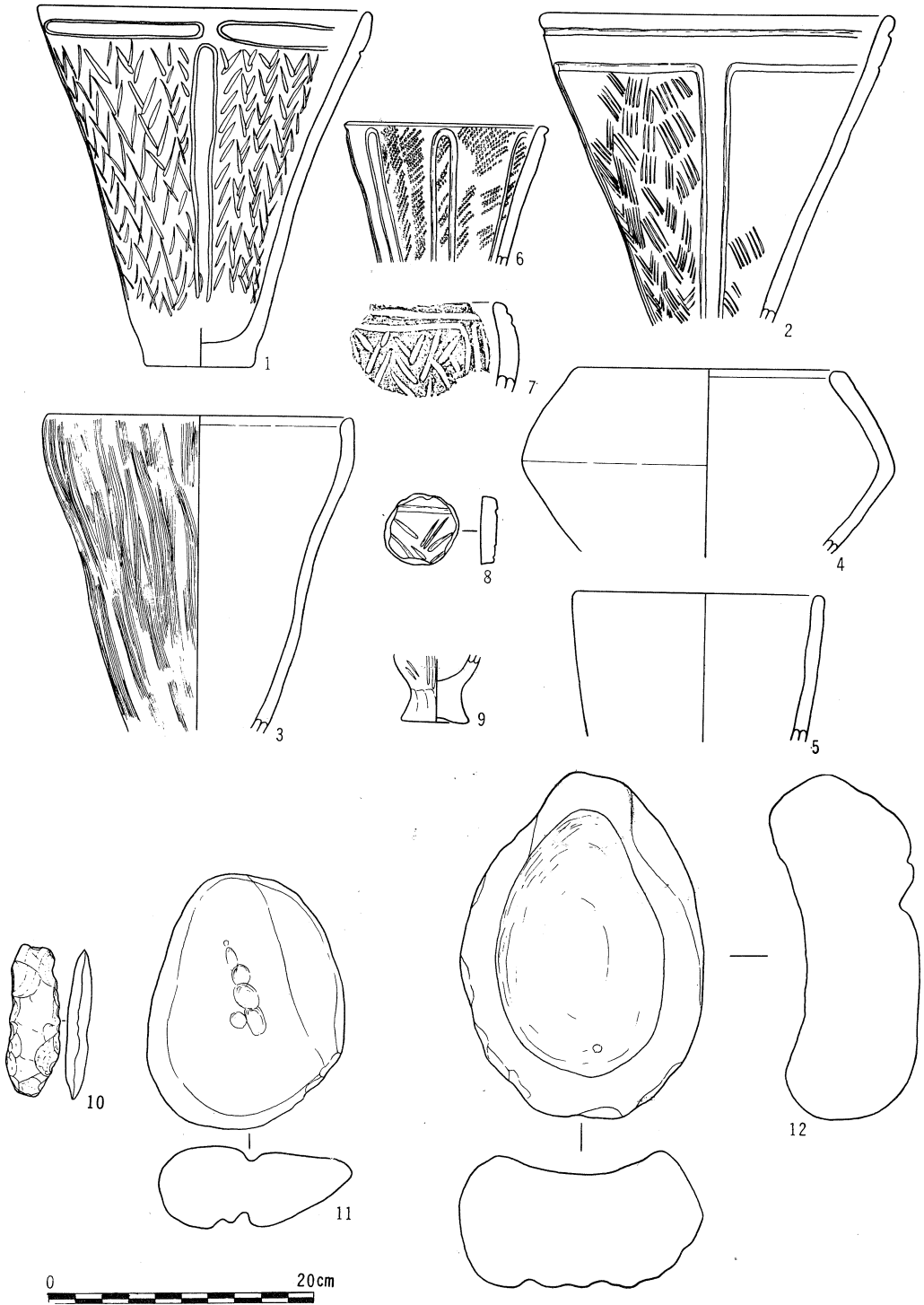
### ○まとめ

頭無遺跡の縄文時代住居群の特徴を列記すると以下のとおりである。

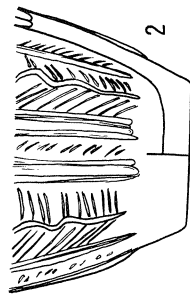
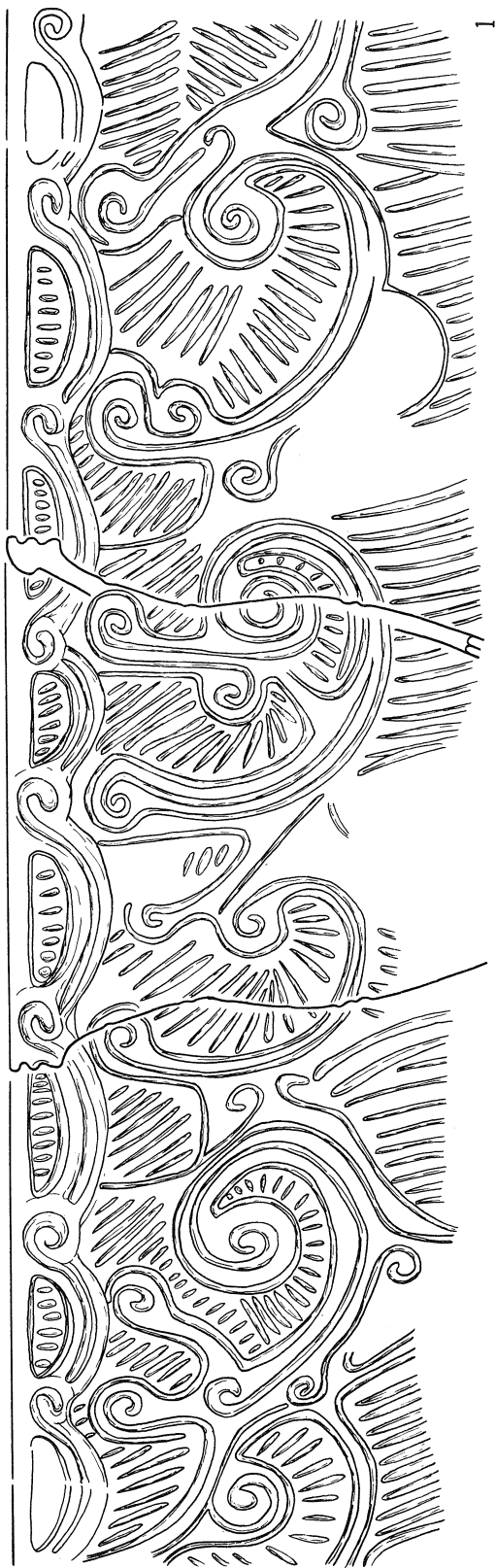
- 1, 中央道路線内の住居群は西側に開いた弧状を呈する。
- 2, 縄文時代中期末葉(曾利期と言える)のほぼ同時期に営まれた集落跡である。
- 3, 直径5m前後の住居と、9m前後の住居に大別できる。
- 4, 埋甕を持つ住居が多い。
- 5, 方形石囲炉と地床炉を伴出するものが多い。柳坪遺跡も同様。
- 6, すべて方形石囲炉を持つ。
- 8, 3号、8号を除いて、ほとんどの住居が多量の土器を覆土より出土させる。



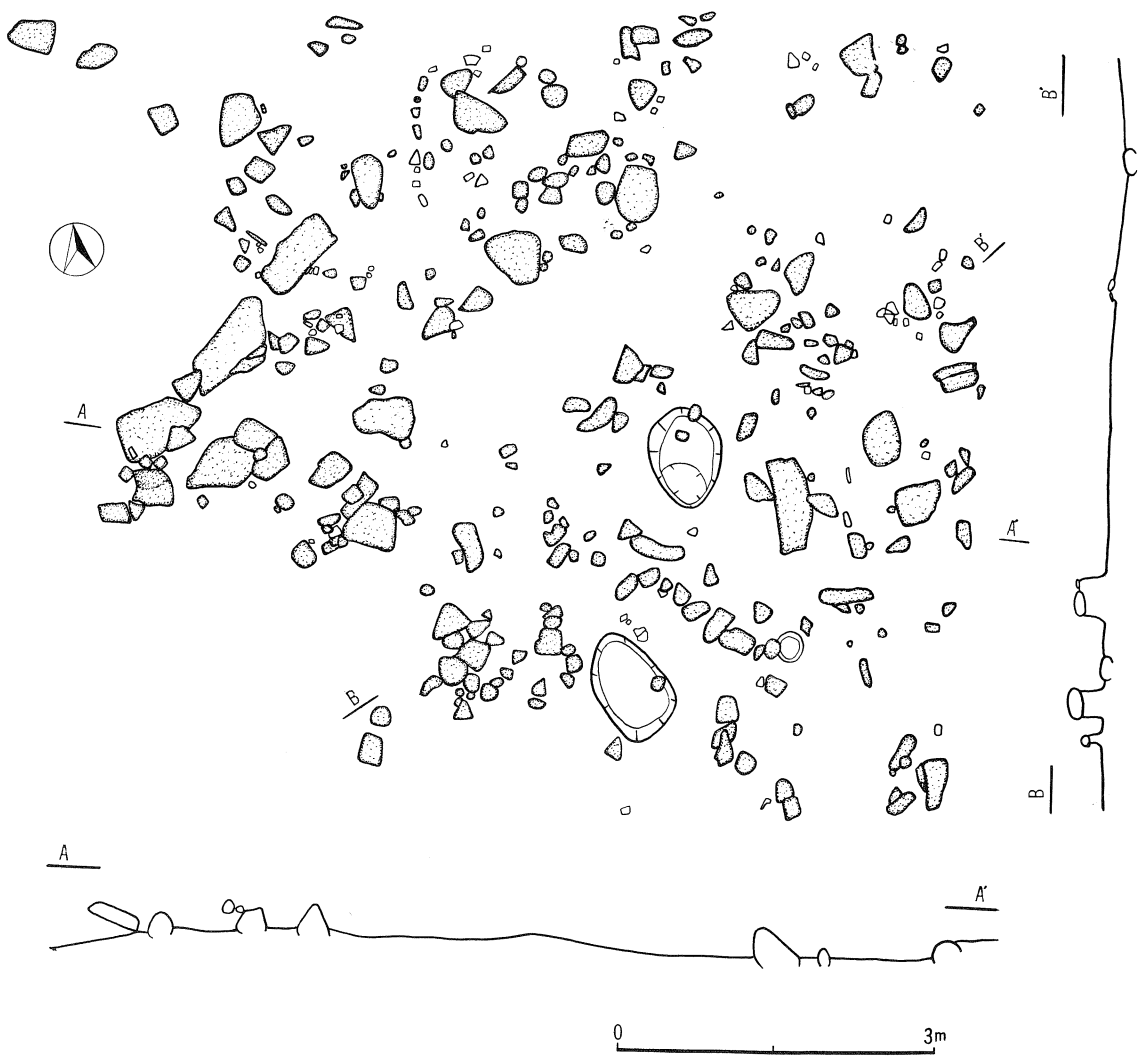
- 9, 凹石の出土量が多い。
- 10, 単独の小竪穴が少なく、住居に重複したものが多く。
- 11, 大型住居は数回の拡張結果による。
- 12, 埋葬と覆土出土器の同時性or異時性。



第183図 頭無16号住居址出土遺物



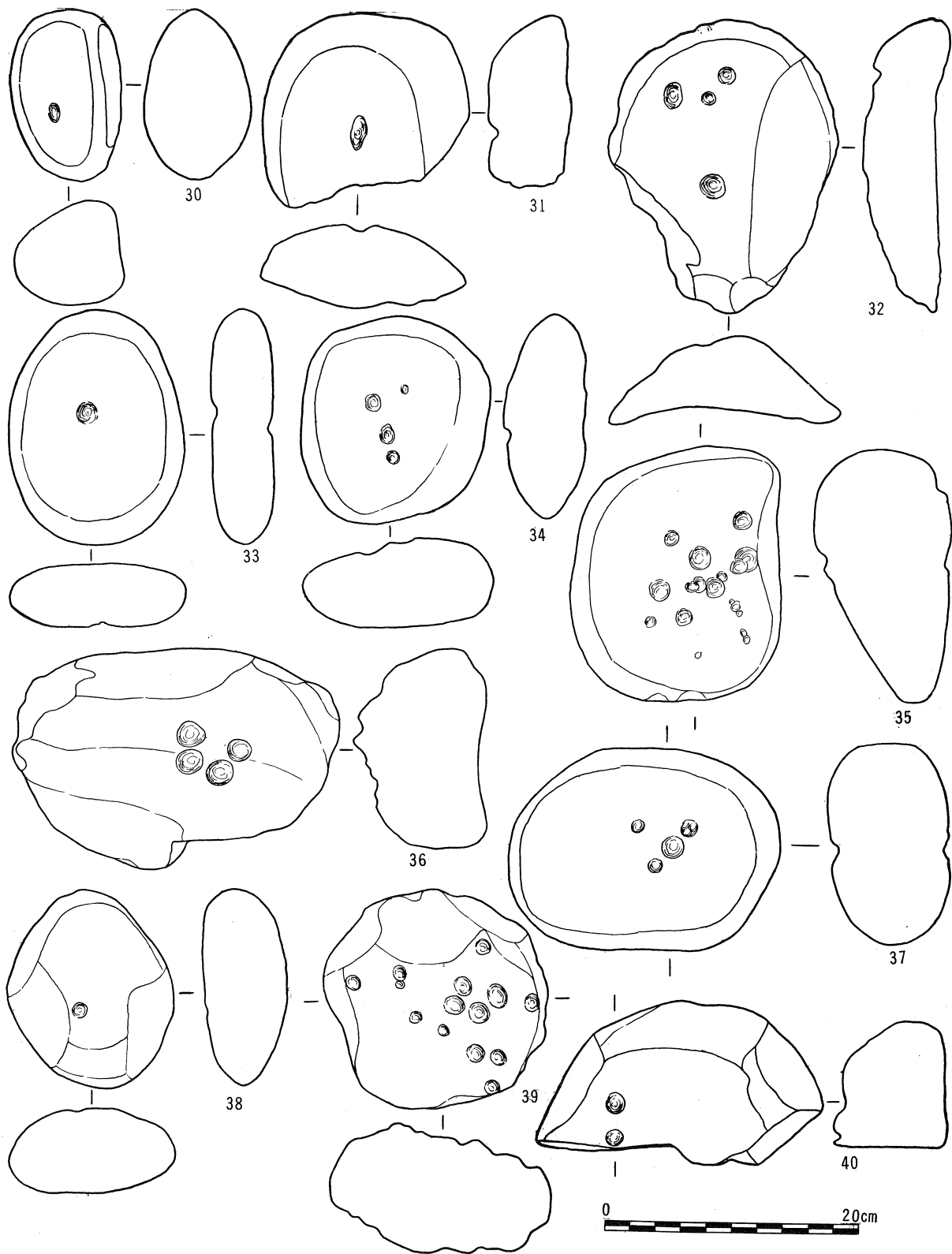
第184図 頭無18号住居址出土遺物



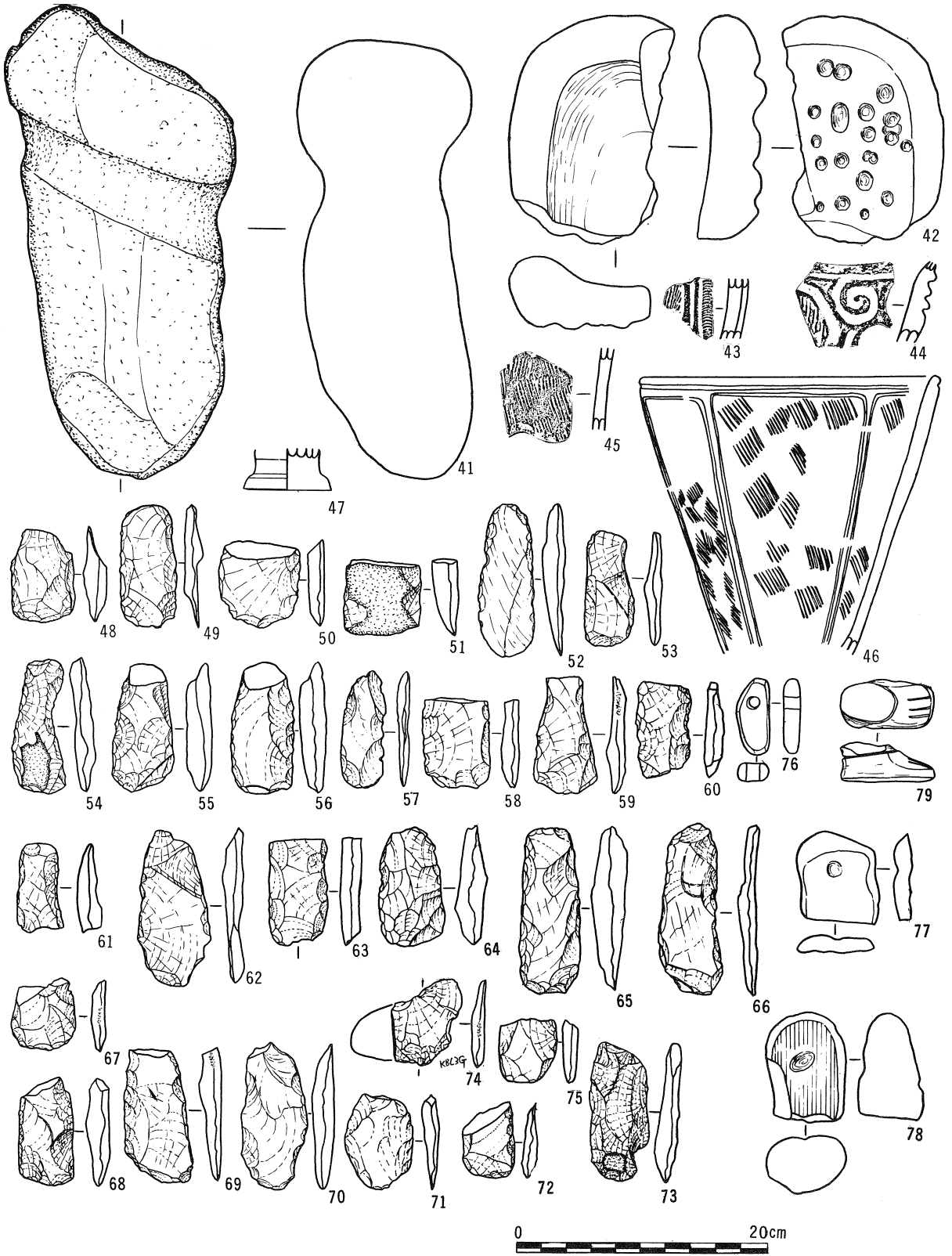
第185図 頭無遺跡集石遺構



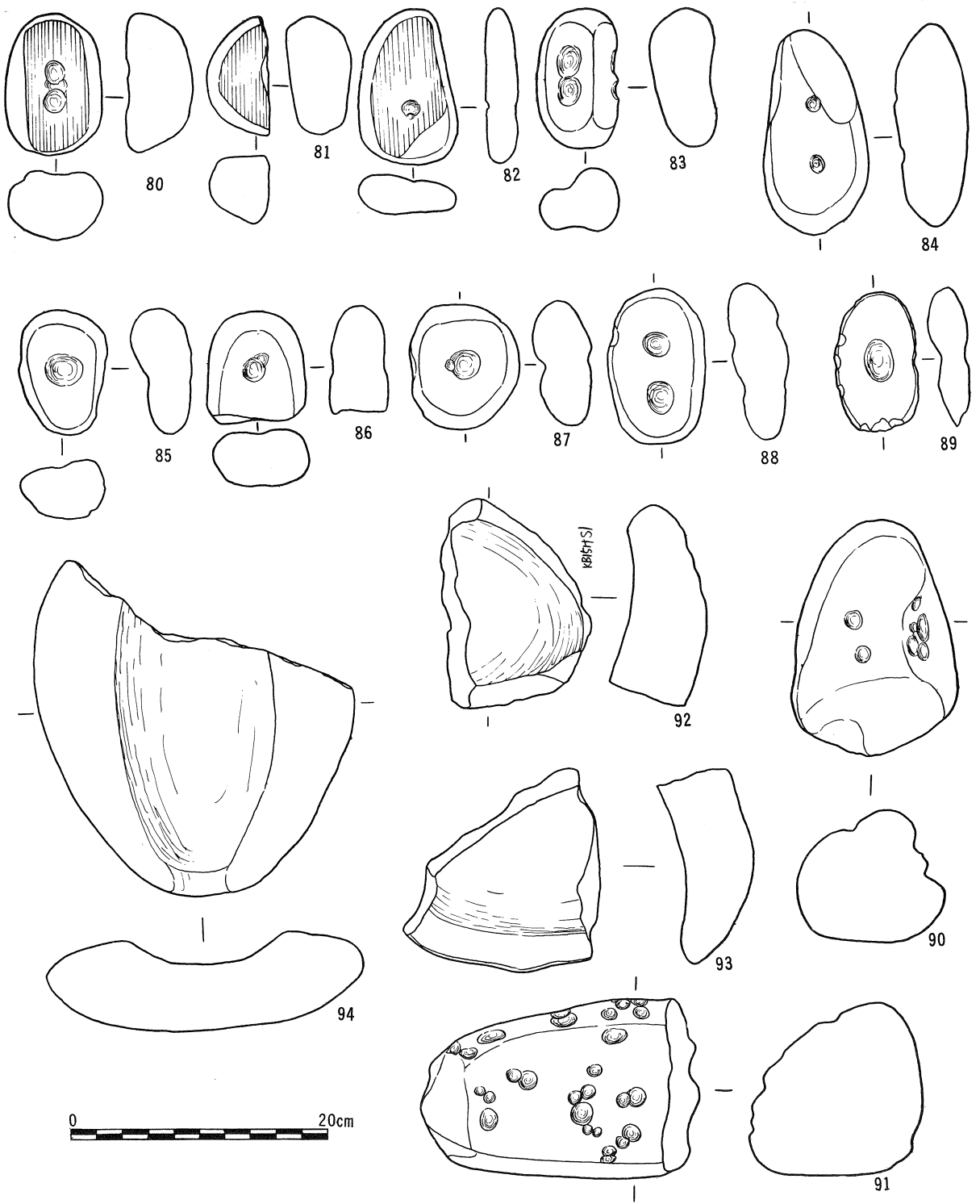
第186図 頭無遺跡土壇(1~3)溝(4~7)集石遺構(8~29)出土遺物(1)



第187図 頭無集石遺構出土遺物(2)



第188図 頭無遺跡集石遺構(3)その他(1)出土遺物



第189図 頭無遺跡、その他出土遺物(2)

古墳時代住居址

13号住居址

(第190図、図版112)

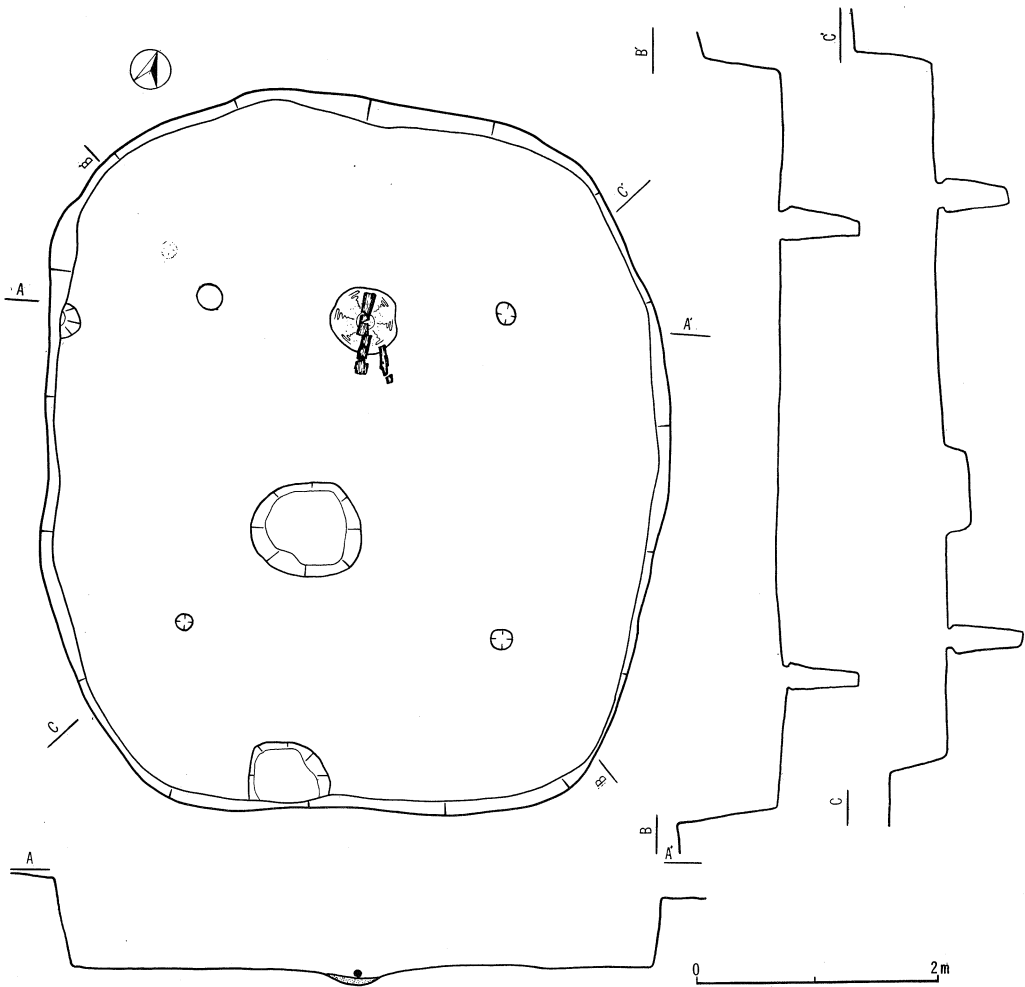
昭和48年11月16日～11月25日

○プラン 胴張隅丸方形、それぞれ中央部で東西5.2m、南北5.98m

○主軸 N-12°-W

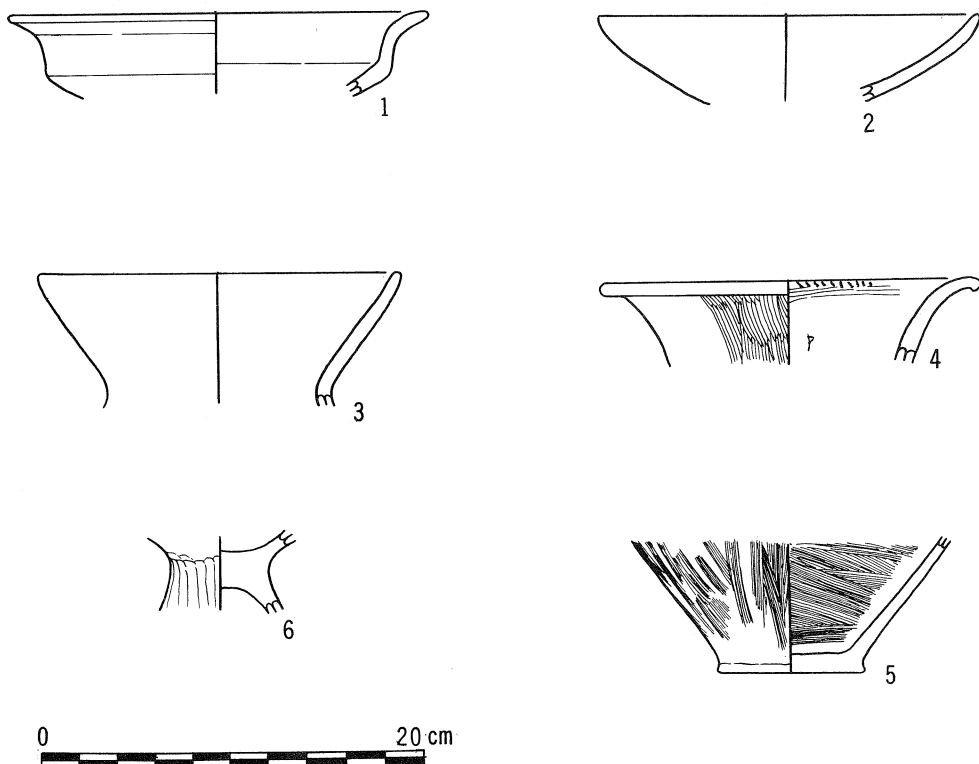
○柱穴 4本、各コーナーの対角線上にあり、床面から発見された径は20cm前後である。深さは60～70cmあるが、中は直径30cm前後に広がり、明らかに柱穴を掘った後に、上面を貼床していることが分る。柱穴の覆土は腐った木材の様で柔らかく、抵抗なくボーリング棒を差し込むことができた。

柱穴間の間隔はpit1～pit2は2.5m pit2～pit3は2.7m、pit3～pit4は2.4m、pit4～pit1は2.



第190図 頭無遺跡13号住居址平面図





第191図 頭無遺跡13号住居址出土遺物

5 m、pit1～pit3は3.7 m、pit2～pit4は3.5で、ほぼ正方形に近いと言える。

- 周溝 なし
- 壁 ほぼ垂直に立ち上っており、床面からの高さは次のとおりである。北東コーナー61.5cm、北壁61cm、北西コーナー65cm、西壁50cm、南西コーナー49cm、南壁47cm、南東コーナー78cm（表土まで）東壁78cm（表土まで）
- 床面 ほぼ平坦な状態で確認でき、ロームはブロック状に固まっていた。なお床面はハードロームを約40cm程切り込んだ位置に存在する。炉の周囲は床面がなだらかに傾斜し、地床炉の掘り込みへと続いている。又、南壁周辺は比較的高くなっている。
- 炉 住居北側に寄り、北側柱穴中央に位置する皿状ピットの炉で、中央に炭が丁度炉にくらべられた様な状態で2本出土している。南西56cm、南北54cmのほぼ円形を呈し、焼土は北寄りに約6cmある。
- 出土遺物 土師器（古墳時代前期のものか。）5、他縄文時代遺物
- その他 遺構として南壁中央下に小竪穴があり、貯蔵穴なのか。この周囲は特に西側に於て貼床がある。

又、住居中央に90×80cmの皿状ピットがあり、中から土師器が出土している。（金箱）

出土遺物 (第191図、図版113)

1は高杯杯部口縁で、内外面とも丹塗りされている。2は杯口縁、3は壺形土器口縁でへら磨きされている。4は口縁が外反し外面刷毛目、内面上部に刷毛目が見られる。5は底部で内外面に刷毛目

がある。6は高杯接合部であろうか、ヘラ磨きされている。

**15号住居址** (第192図、図版114)

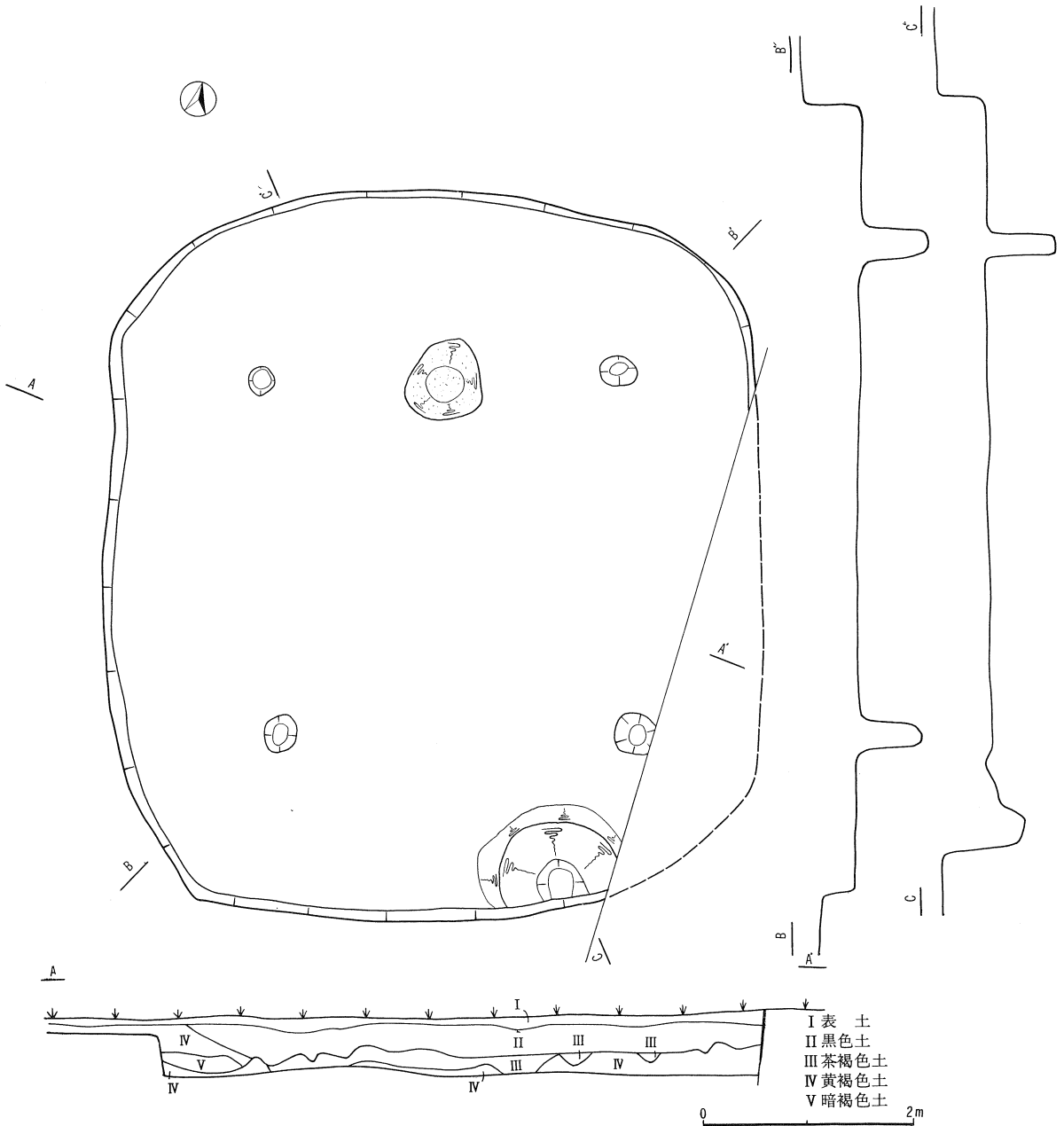
昭和48年11月26日～11月30日

○プラン 胴張隅丸方形 6.8 m × 6 m

○主 軸 N-15°-W

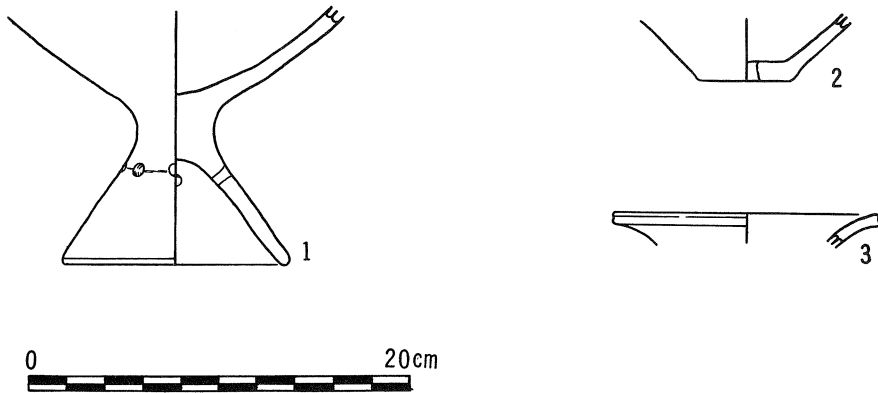
○柱 穴 13号住居と同様に各コーナー対角線上に位置しており、壁からいづれも1.3～1.4 mで、柱穴間は約3.4 mを計る。又、ピットの径は30～40 cmで、深さ60～65 cmで垂直になっている。

○周 溝 なし



第192図 頭無15号住居址平面図

- 壁 東部及び東南コーナーは調査地区外で他は垂直に近く、しまりもある。壁高北西57cm、北60cm、北東65cm、南40cmを計る。
- 床 面 ほぼ水平で、しまりも良い。ただ南側入口部と思われる所に貯蔵穴が存在し、この周囲に堤状に高くなり、あたかも水の流入を防ぐ様に造られている。
- 炉 住居北寄りで、北側柱穴間中央に位置する皿状ピットの炉である。掘り込は60cm（南北）×80cm（東西）で不整円形を呈し、深さ20cmで、焼土は約10cmほど堆積している。
- 出土遺物 古墳時代前期の台付甕の台部及び土師片5、その他縄文土器片及び石器類。
- その他 (宮崎)



第193図 頭無15号住居址出土遺物

## 7. 早道場遺跡

北巨摩郡明野村は茅ヶ岳（死火山、標高1703.5m）の山麓に位置する農山村である。茅ヶ岳の裾野は南西に向って広がっている傾斜のゆるやかな山麓地形をなし、裾野は塩川まで至っている。塩川付近は塩川の河岸段丘上に火山噴出物が堆積している。茅ヶ岳山麓は水が非常に少なく、所々に小さな沢があるが常時水の流れている沢は少ない。これらの台地上は開墾が進められ、桑畑を中心とした畑地となっている。裾野の中程から先端部で標高では600mから400mにかけて縄文時代中期を中心とした遺物がある所に散布している。農耕その他の工事によって発見された完形の土器は数十個以上にも及んでいる。八ヶ岳山麓と同様、縄文中期文化の開花していた地と考えられる。

早道場遺跡は明野村上手字早道場に位置し、茅ヶ岳山麓の先端部近くの台地上で、約100m南方で台地が切れ塩川となっている。中央自動車道STA194～195の間に位置する。標高は473mである。

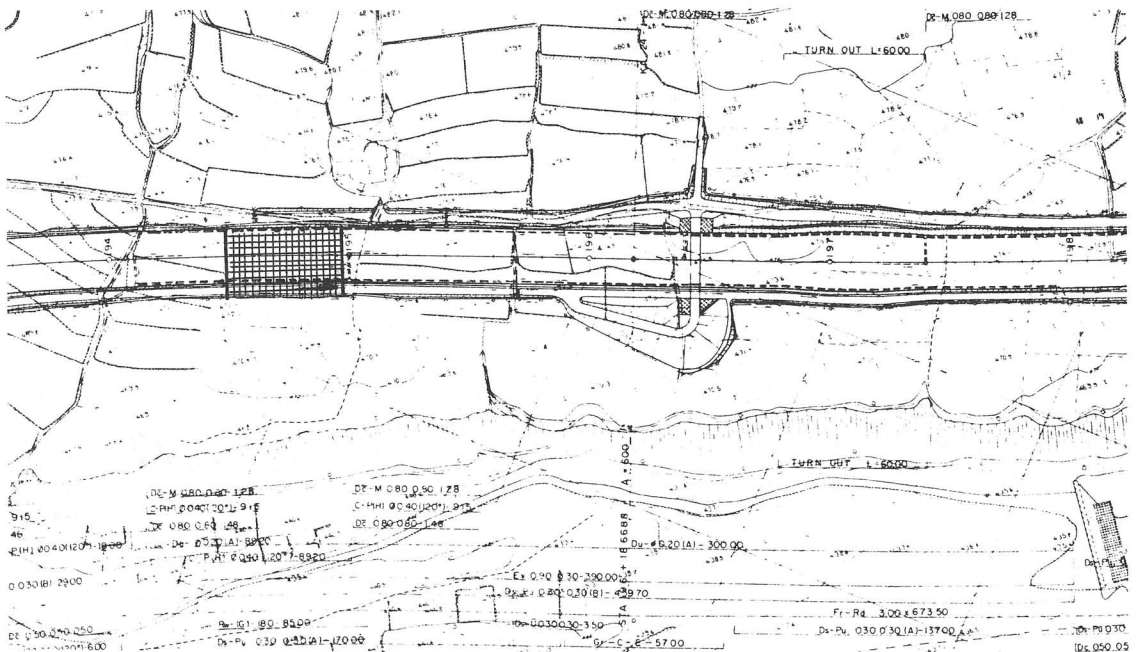
表土は30～60cmあり、その下が石を含む流入土で厚さは10～50cm以上を計り、その下に鉄分の集積層がわずかに認められ、ローム層、又は流入土となっている。

遺物は表面採集で、中期縄文式土器片、土師器片等が採集されたが、発掘調査では遺物は少ししか発掘できず、又、遺構は何ら検出できなかった。

### 早道場遺跡調査日誌

7月10日（晴）

午後から発掘現地の除草の後、南北30m×東西24mのグリッドの設定を行なう。午後2時半から鍬入式を行ない、表面採集をした後発掘作業に取りかかる。なおグリッドの名称は南からA、B…O、東側から1、2…12とふり、グリッド名はA1、B2…と呼ぶ。表土は固く30cm～60cm、その下が礫を含む流入土となっている。遺物は土器片がわずかに発掘できた。



第194図 早道場遺跡地形図

7月11日(晴)

グリッドの測量を行なう。M2、4、05グリッドは出水の為途中で作業を中止する。全般的に礫を含む流入土が存在する。B10、012グリッドを掘り下げる。土師器片等が若干出土した。

7月12日(晴)

B10及び0列グリッドを掘り下げる。B10グリッドで深さ1mでローム層に達し、012グリッドでは120cmでローム層になった。礫が多く、又遺物も極く少ない為、放棄し、北側に拡張グリッド(16m×16m、R~Y、5~12)を設定して調査を開始した。

7月13日(晴)

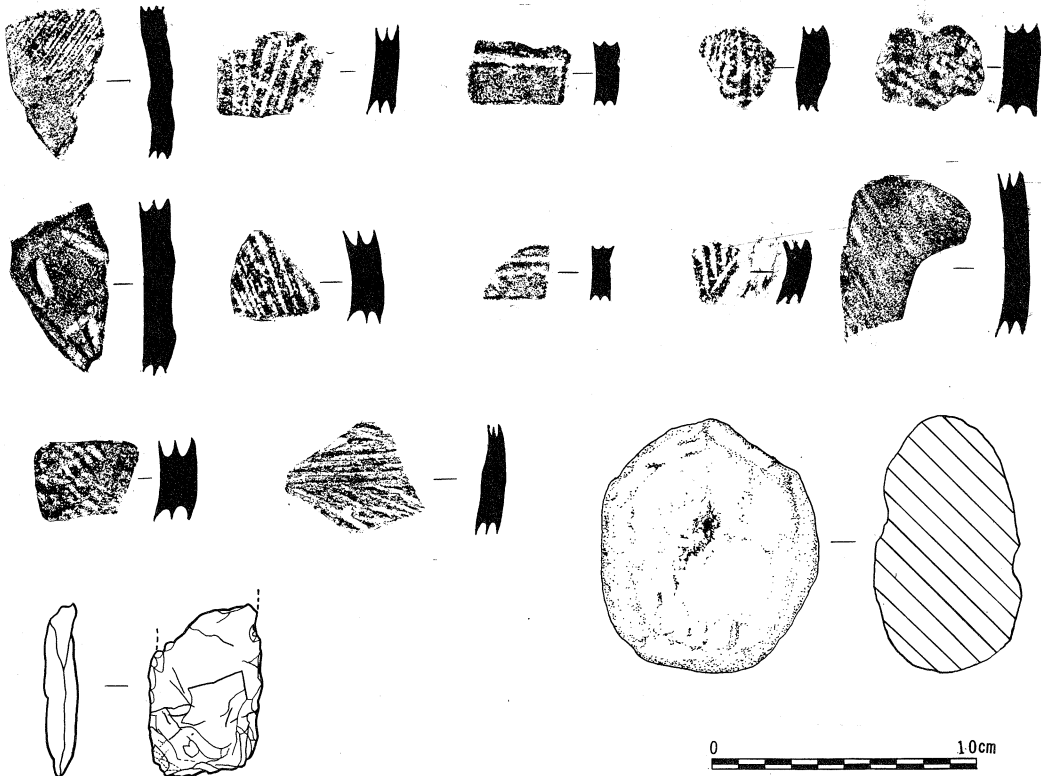
B列0列のセクションを取った後、前日拡張したグリッドの作業を行なう。V7グリッドは80cm掘り下げた所で出水があり放棄する。東側は水田が近くであり、その為に出水があつて調査は西側を主体的に行なう。土器片が若干出土した。

7月14日(晴)

A12からY12までの西壁のセクションを取り始める。その間新設のグリッド内で調査を行なつたが、遺構は全く見あたらない。遺物も若干しか出土しなかつた。道具を整理して西田遺跡へ移動する準備を行なう。

7月15日(晴)

西田遺跡の旧地主との関係で発掘作業は明日からで、本日は器材運搬と早道場遺跡の遺物整理を行なう。



第195図 早道場遺跡出土遺物

## 8、西田遺跡

北巨摩郡明野村三之蔵字西田に所在する本遺跡は早道場遺跡と同様、茅ヶ岳の裾野の先端に近い大きな舌状台地上に位置し、遺跡地のすぐ西側には深さ20cmの沢があり、又、南方80mで塩川となって台地が終っている。中央自動車道STA2222~224の間に位置する。標高は430mである。又、A地点の東方50mの所に穴塚古墳という横穴石室をもつ古墳が一基あり、封土は少し崩れ石室は残されている。なお出土遺物等の記録は残されていない。又、地元民の話によると穴塚古墳とA地点の中程の桑畑中に剣塚という名の古墳があり、かつて剣が出土したというが、現在はそれらしい痕跡は見あたらない。

A地点は本線から北に伸び県道に至る側道で、中心から100m程離れている。表面採集によって縄文時代中期の土器片が多数採集できたので発掘調査を行なった結果、溝状の遺構が発掘できた。

B地点でA地点の南方100m、本線の中心近くに巨石が数個あり、又150m離れた所に穴塚古墳が存在するため、古墳ではないかと調査を行なったが遺構との関連性は認められず、自然堆積したものと考えられる。

A、B地点とも溝状遺構以外の遺構は検出できなかった。

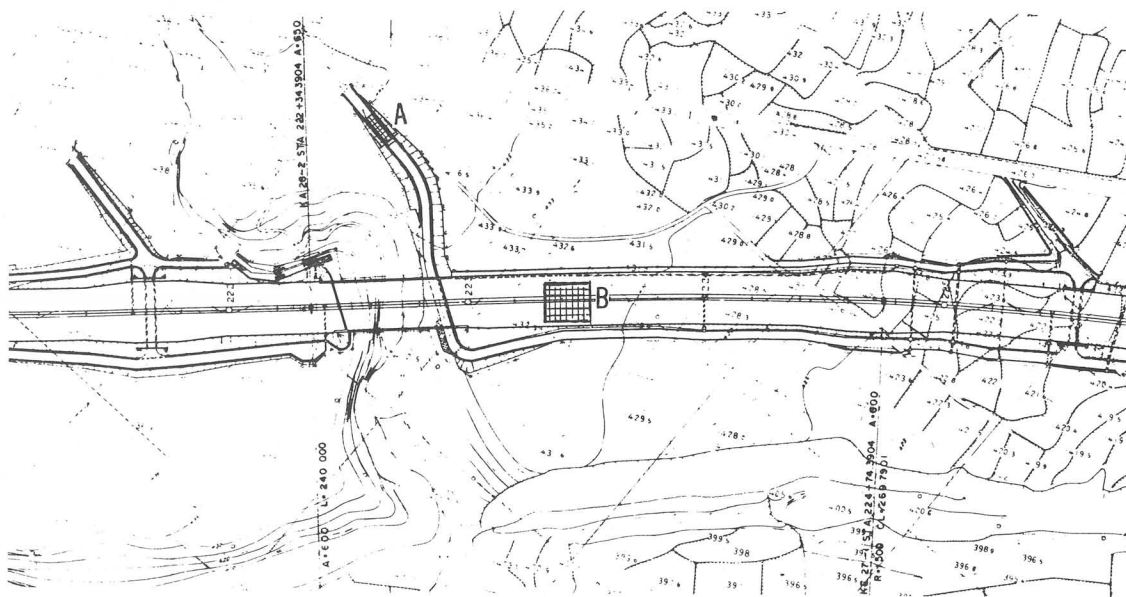
西田遺跡調査日誌

7月16日(晴)

西田遺跡の発掘作業を開始。除草の後、A地点に南北方向に長さ22mと8m、幅2mのトレンチを2本設定しB地点に東西2m×南北5m、東西3m×南北1mのトレンチをそれぞれ設定した。前者からA、B、C、Dトレンチと呼ぶ。Aトレンチから遺物が若干出土したが、他のトレンチからは遺物はほとんど出なかった。

7月17日(晴)

各トレンチの発掘を続ける。Aトレンチの南側からローム層面からの溝状の落ち込みを発見し、南



第196図 西田遺跡地形図

側に拡張トレンチを設定して調査を行なう。幅2 m程深さ25 m前後の溝状の遺構が検出できた。なおB、C、Dの各トレンチから何ら遺構は検出できず、又遺物も皆無に近く、調査を終え埋めもどしに入る。

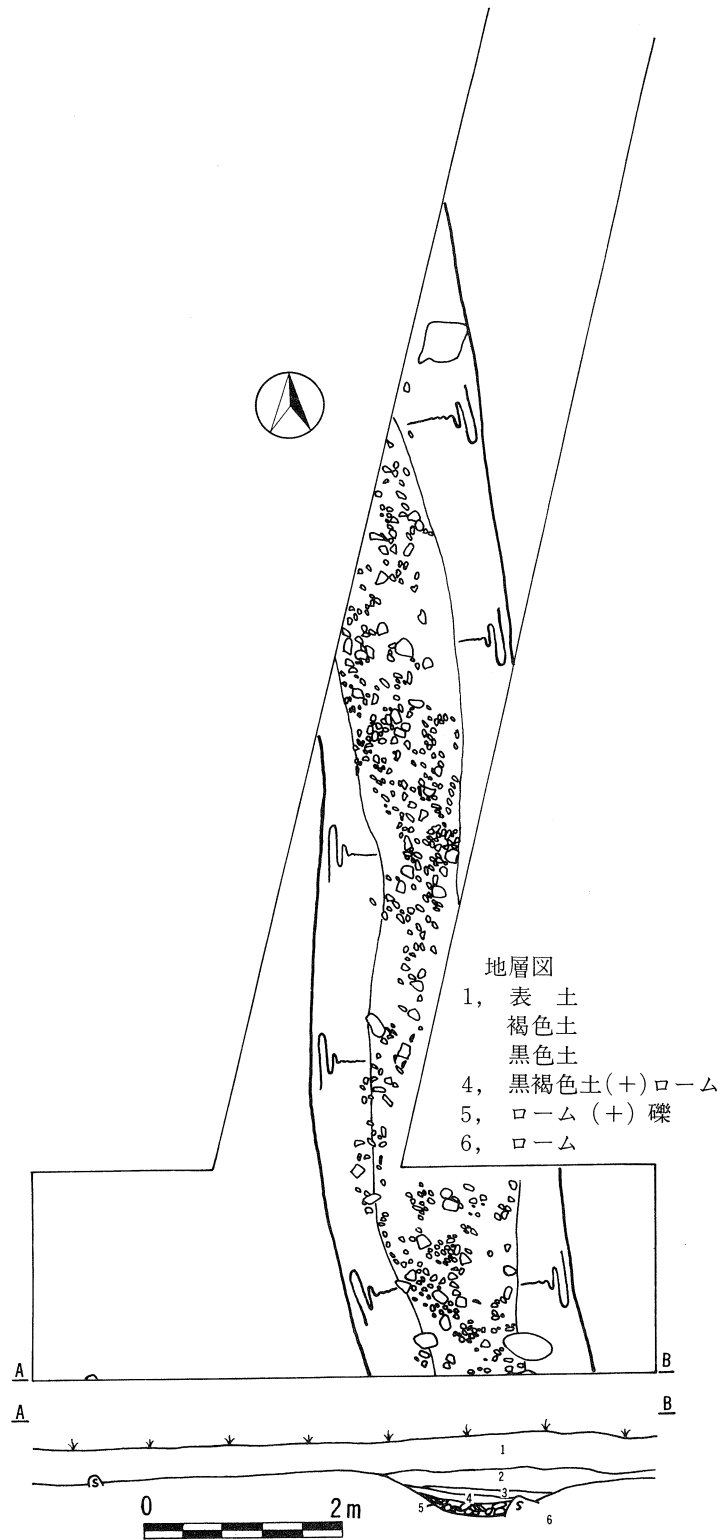
7月18日(晴)

Aトレンチの作業を行なう。溝状遺構を掘り終えた後、セクション、実測図、写真をとって埋め戻しを行った。器材整理を行ない作業を終了する。

**溝状遺構** (第197図参照)

A地点で発掘した溝状遺構は掘り込み部分においては2 m前後、底面の幅80-150cm、深さ20-30cmのカーブのゆるい「U」字型でほぼ南北方向に延びている溝で、ローム層を掘り込んで造られている。底部は概ね径15cm以下の石が厚さ15cm程に敷き詰められ、石の間にはローム層が入っている。又、南側が低くなっており、底面は非常に固くよくしまっている。なお、この他には落ち込み等の検出することはできなかった。

なお、遺物としては古銭が2枚溝状遺構の底面から出土した他、黒曜石製の石鏃1個、縄文式土器片が若干出土した。古銭は「天嬉通宝」(宗銭、1017-1021年)、「天盛元宝」(西夏銭、1071-1075年)であり、共に青銅製の輸入貨幣



第197図 溝状遺構実測図

であり、表面が摩滅している。

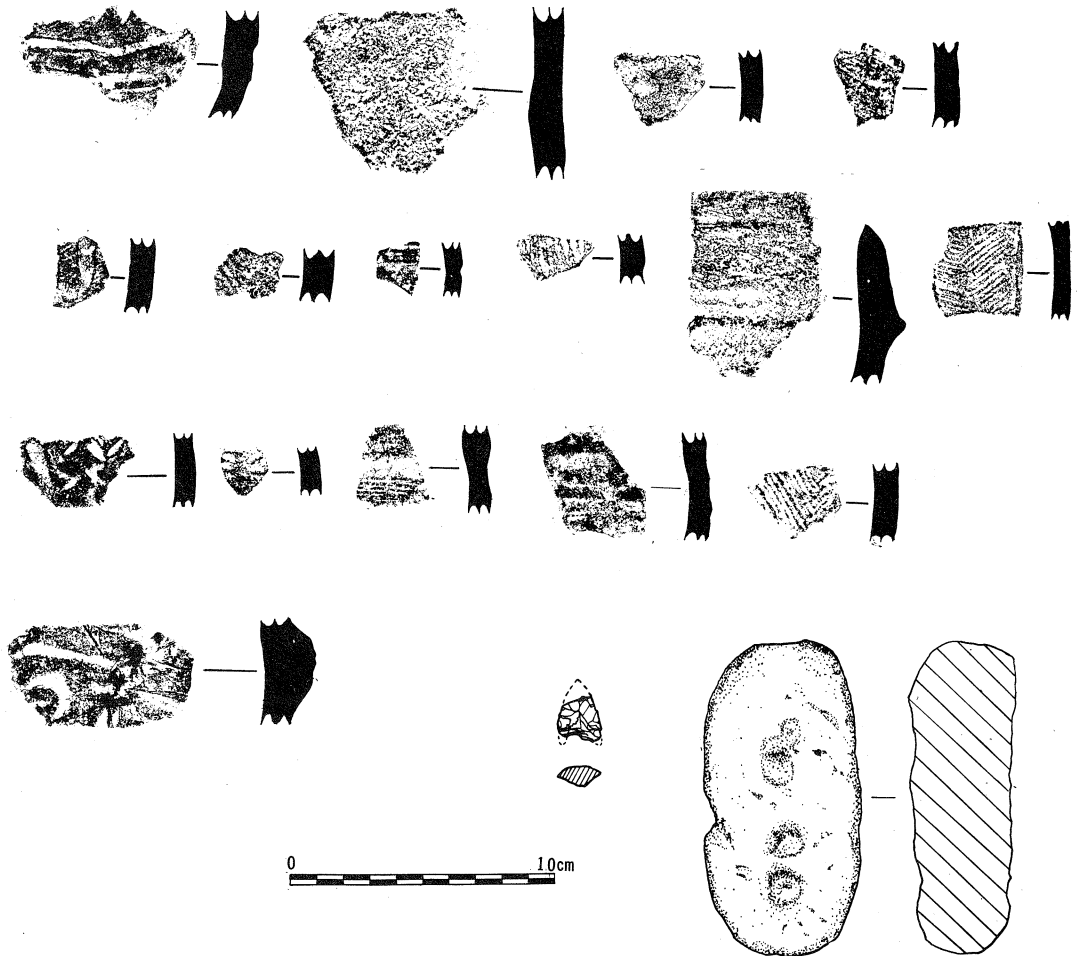
この溝状遺構の周辺部のボーリング調査を行なった結果、南方は確認できなかったが、北方へ50m程続いて沢の近くまで続いていることが確認できたが路線外のため、発掘調査を行なう事ができなかった。

この溝状遺構がどのような目的のため、いつ頃作られたのか。遺物として輸入貨幣が2枚出土し、これらの輸入貨幣は平安時代後半から鎌倉時代にかけて国内でも貨幣として使用されており、又、貨幣は2枚ともよく摩滅していること等からして鎌倉時代以降の遺構と考えられる。目的としては、今回発掘した溝は層の状態もよく、又、底部に石が敷きつめられている様子等からして用水路、道、等が用途として考えられる。

かつて平安時代に造られた「小笠原の牧」は紀貫之（946年没）等の歌にもよまれ、又「吾妻鏡」によれば鎌倉時代にも私牧として存在していた記録もある。「小笠原の牧」の範囲は現在確認する事はできないが、今回の調査地点が少なくとも牧の周辺部に位置することは明らかである。

今回発掘した溝状遺構が「小笠原の牧」との関連性も十分考えられるが、調査面積が狭く、明らかにすることができなかった。

(森本)



第198図 西田遺跡出土遺物図

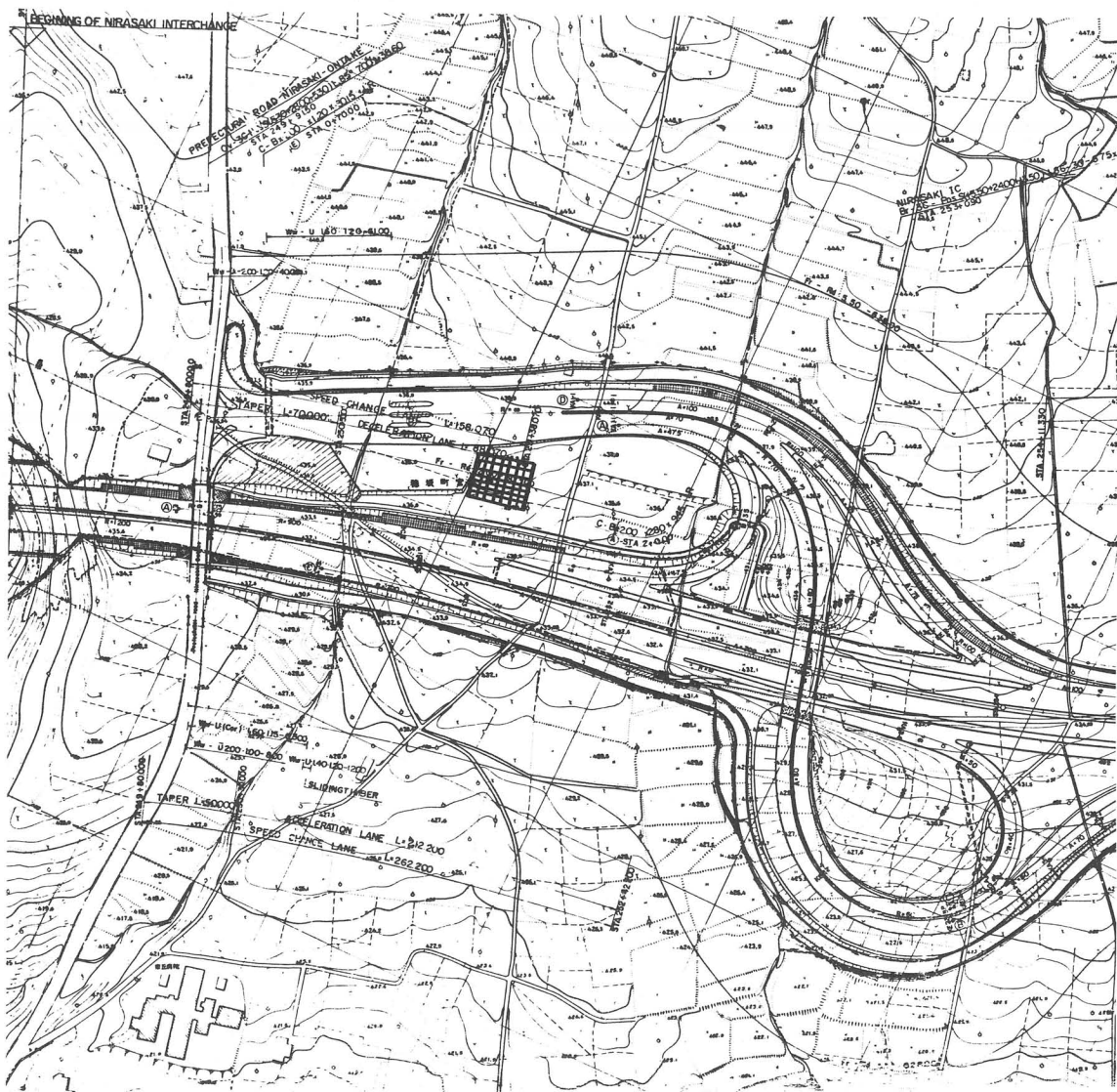


## 9, 三百水遺跡の概要 (第199図、図版117)

この遺跡は韮崎市穂坂町宮久保字三百水に所在し、中央道韮崎インターチェンジが建設されることになっている。この地は茅ヶ岳(標高1703.5m)の裾野、標高435mのなだらかな西面傾斜の台地上にあって、表面採集の時は縄文中期の土器片及び土師器片が得られたのだが、発掘調査では中期中葉の一括土器が出土したのみで、遺構は発見されなかった。

発掘面積は40m×30mの1200㎡であるが、土が粘土質でたくしまり、表土より1.8mで茅ヶ岳泥流の岩板に達する。この間の土層は粒子が細かく、水分を含んだ粘土層は10層に分けることができる。この10層にはローム層が入らないことから、これら土層は流れているのかもしれない。出土遺物も磨滅を受けている。

出土遺物(図版参照)は中期中葉の土器が出土している。



第199図 三百水遺跡地形図

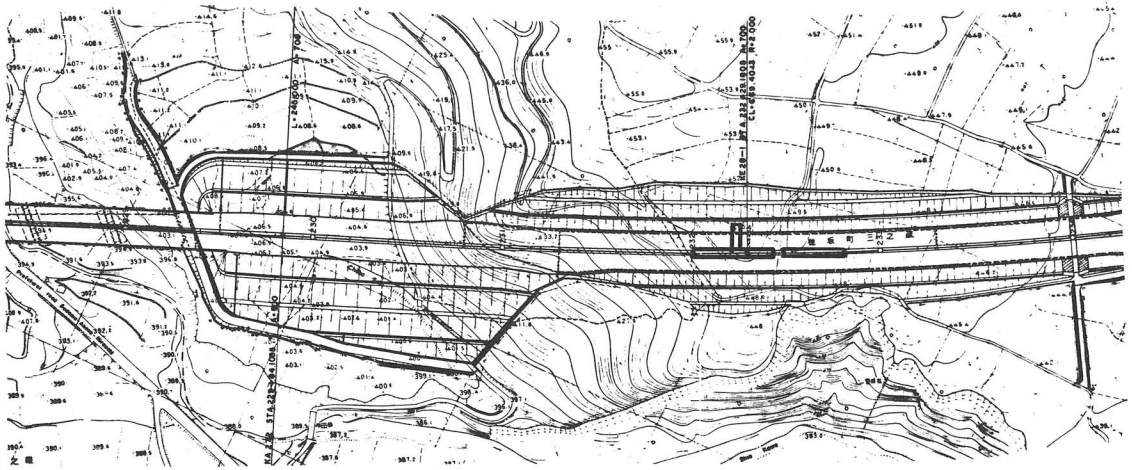
## 10、タカノス城址（トリデ）（第200図）

韮崎市穂坂町三之蔵字タカノスに所在する通称タカノス城址は、塩川左岸にそそり立つ鷹巢石の上にある。

この城址は歴『日の出城』とも『日之城』とも呼ぶ。この城址の西岩上にタカの巢があり、毎年の生育地であったとも伝えられる。西は塩川に臨み断崖となり、東南は宮の窪、上の山部落へと出る旧穂坂路である。1582（天正10年）の『徳川家康日記』『編年集成』などの記録にある「向い原の城」とはこの城のことである。新府城から見ての位置を示している。1394（応永）—1429（永享）年間の日一揆の根拠地であったことも『鎌倉大草紙』に記録されている。三之蔵から尾根続きの塩川の東岸上にあり、旧穂坂路と旧逸見筋との境をなす。古府中、北山筋、穂坂路、逸見筋と通路上、茅ヶ岳東ろくの要地である。〈大森明〉」（山梨百科事典1972 山梨日日新聞社）と説明される。

こうした点から考えると一揆の根拠地としてのみ存在した点から中世山城の構築を全く発見しえなかったのも当然と思われる。

発掘は昭和49年3月22日より3日間行ない、幅1m長さ100mのトレンチを設定したが、縄文時代石鏃一点を得たのみである。



第200図 タカノス城址地形図

# 第3章 考 察

## 第1節、縄文時代

### 1. 移動としての吹上パターン

#### 1)、はじめに

今回の調査で発見された住居数は柳坪A地区7軒、同B地区14軒、頭無18軒(うち3軒は調査未了)で、計39軒に達する。この3ヶ所の遺跡は前述した遺物内容を観察すれば理解される通り、単一時間のみ集落は存在していない。いずれの遺跡からも中部山岳地帯で言う曾利式に属する幾型式かの住居が混在しているが、重複住居は柳坪A地区1ヶ所(縄文住居2軒)、頭無3ヶ所(重複2軒つつ2ヶ所、接しているもの1ヶ所)で極めて少ない。隣県長野富士見町所在の井戸尻、曾利遺跡の住居群の大半が重複住居であるのに対して、本県小沢沢町中原遺跡、上平出遺跡(1)にしても時代差が相当あるものを除いて、ほとんど重複していない。この重複住居は遺物編年上は勿論前提として、集落変遷及び集落構造解明に必要な様々な手懸りを与えてくれる(2)訳だが、逆に重複の少ない住居群は、当然短時間の居住占地を示し、集落の基本構造を知らしめてくれるであろう(3)。しかし、単一時期の集落は多くの場合皆無であり、時間的な連続あるいは断続的居住によって埋没住居内に投棄される遺物(4)(海浜地方に於ては貝等)は埋葬との時間差があるにもかかわらず、今日まで同一時期とされてしまった例が多い(5)。一般的に井戸尻パターン(6)とは、まさしくこの例で、これを批判している下総考古学研究会の塚田光氏は住居の重複関係、床面埋設土器(埋葬、埋葬炉)、覆土中の土器の関係から土器型式及び編年の検討、再編成を企てている(7)。いずれにしても、小林達雄氏によって吹上パターンが提唱され、井戸尻遺跡群の井戸尻パターンの名命(8)以降、住居の埋没と覆土中の遺物のあり方に注意され、更に西耕地パターン(9)、平和台パターン(10)の新パターンが続々と生まれてきた。又、それに伴ってパターンの総合的理解から集落構造の復元を追求する意欲的な論文も数多く見られた(11)が、小林達雄氏は「吹上パターン」の豊富な将来性を無視したように、パターン論の清算を行なった(12)。ここでは、元祖小林氏が自分で播いた種を刈り取るように、「土器作り」とその「廃棄」にシーズン制の存在を想定することによって(13)縄文世界の「宇宙」を止揚し、言葉だけの縄文世界を覗いているが、集落の定着、移動、や「吹上パターン」に於ける「第一次堆積層」の形成理由について論述せず、可児氏のみが「時間的不一致」を認識している(14)。

いずれにしても、小林氏が止揚した「吹上パターン」は今日もまだ上記2点で未知数を抱えていると言って良いであろう。したがって柳坪及び頭無遺跡の集落を語る以前に、このパターン論の方向性を示しておかなければならない。

#### 2)、吹上パターンの理解

小林達雄氏が米島貝塚発掘調査で把握した吹上パターンは、すでに周知のとおり、住居の埋没過程と土器等の遺物の廃棄過程の関連を叙述したものであるが、その過程は自然現象と人工現象によって結果されている。ところが提唱者小林達雄氏はこの自然埋没過程について全く理解していない。即ち、氏は自然的埋没過程と人工的投棄過程を次のように説明する。「土器の廃棄にかかわる行動の 때가、パターンA(吹上パターン)に於て、竪穴住居の廃絶および貝殻の投棄との二つの行動の間に相対的に位置づけられることを知るのである。なお、土器の廃棄が土器の補充・製作と背中合せの関係にあ

り、また竪穴住居の廃棄絶は少くとも住むべき代りの新しい住居の構築をその背景にもっているのである。さらに、貝殻の投棄は、貝類の盛んな捕食を前提としている。このように、何れの行動もそれぞれで独立するものではなく、様々な行動の連鎖のなかの一環をなすものである。(中略)貝殻の投棄が春とともに開始されていることからすれば、土器の廃棄は春に先駆けた頃であったということになる。従って土器の廃棄行動と背中合せの関係にある土器を補充するための土器製作もまた春以前の季節であったといわねばならない。その時期は、竪穴住居が廃絶されてから、床面に第一次埋没土が堆積するだけの時間の経過後にある。(15)

そこでこの説明での不明な点を列記してみたい。

- ① 廃絶した竪穴住居と新築される住居の集落内に於ける位置的関係。
- ②、第一次埋没土が堆積する時間とは春先以前、即ち秋から冬にかけての季節を示すのか。
- ③、②を前提にすると、冬期の第一次埋没土は10～50cmに達するのか。
- ④、又、②を前提とすると、秋は収獲の時であり、冬に向けての狩猟、採集、貯蔵の最も多忙な時期に竪穴住居を新築、あるいは移動することになるのか。
- ⑤、②を前提として、冬期間中土器等の廃棄はされなかったのか。
- ⑥、①～⑥までの疑問に加えて、廃絶直後の住居は第一次堆積後の住居より多量に捨てることができるが、第一次堆積土中に何故土器の投棄が無いのか。(放置されて残ったものは含まないが)。

即ち、以上の点を要約すると〈第一次埋没土の堆積中人々は何をしていたのか〉という疑問である縄文人達が冬眠をしていたと考えられない以上、小林達雄氏のように吹上パターンを「一括出土の土器と竪穴住居の炉に埋設されている土器とが同一時期の様式に属するという事実」が「竪穴住居を作り、そこに起居した人々の意識のなかに、竪穴住居跡の凹地に、土器を運んできて廃棄するという行動もまた予め含まれていた」(16)と、単絡的に結論付けることはできないのである(17)。確かに可児通宏氏が指摘しているように「〔破片の廃棄〕が土器の壊れた各時点で、任意に何回かに亘って行なわれたため」「覆土中(完形一括土器堆積面より上)にかなりのばらつきをもって存在する」(18)事実、土器を投棄する人間の存在無しには考えられないことである。従って、一括土器の投棄以降の居住者の存在は誰れもが了解する事であるのに対して、それ以前の住居が廃絶され、第一次堆積(自然堆積)が行なわれる間の人間の所業を解明してゆかなければならない。さもなければ〈第一次堆積後に一括土器を廃棄して初めてゴミ捨て場としての機能が開始され、一括土器の廃棄がその機能を与える儀式である(19)〉というような精神領域にまで届く明察をされそうである。

遺跡を埋没させる土壌の成因は、空中からの降下物と主に植物遺体の土壌化による(20)とされるが、竪穴住居跡の第一次堆積の場合、それに加えて壁の崩壊現象によって形成される。だが、余程深い住居でない限り、住居中心の炉上を10～20cmの厚さで覆うことはできず、長期間の植物遺体の土壌化による堆積を前提にしなければならないであろう。実に長野県寄助尾根遺跡に見られる発掘住居跡の凹地は20年以上の年月を経ても凹地の状態が続いており、更に第一次堆積層上が埋まるには人工作業、即ち遺物の投棄、食物カスの投棄を想定しなければならない。(21)。

住居廃絶後の第一次堆積層の形成は自然的要因であることを述べてきたが、この層に遺物がほとんど含まれていない点について、小林達雄、可児通宏両氏は全く問題としていない。むしろ積極的にシーズン制による土器廃棄の理由としているが、シーズン制に帰結してしまうことは、縄文時代の動態

を平面化して理解してしまうであろう。可児通宏氏が把え、又把えきれなかった点に解明の鍵が存在すると思われるので、これを引用しておく(22)。

『土器の廃棄をB'（新築住居）→B（廃絶住居）と考えないで、A'（Aの新築住居）→B（廃絶住居）と考えたのは、Bへの〔完形一括土器の廃棄〕がBの廃絶後かなりの時間を経てから行なわれていることによる。即ち、〈吹上パターン〉をとる住居址においては、住居址への“もの”の廃棄は〔完形一括土器の廃棄〕をもって開始している。そこでB'→Bの廃棄を考えた場合、〔BからB'への移転〕→〔完形一括土器の廃棄〕までの間に生じた破損品の廃棄の問題が起こる。A'→Bを考えた根拠は、如上のB'→Bと他の事象との関係にみられる①時間的不一致による。

また〔完形一括土器の廃棄〕の行なわれる時点、理由については判然としないがP・H両サイクルの在り方から推定してみると次の如くなる。Pサイクルについてみると、住居址への土器の廃棄は〔完形一括土器の廃棄〕を出発点とし、それに後続して〔破片の廃棄〕が行なわれる。Hサイクルにおいては、〔住居の新設〕を出発点とし、〔住居の廃絶〕を終点とする。この終点は、次の住居の出発点と表裏一体の関係にある。従って、P・H両サイクルに於て、〔完形一括土器の廃棄〕はPサイクルの、〔新設住居への移転、住居の廃絶〕はHサイクルのそれぞれ回帰点と考えられるから、P・H両サイクルの回帰点が時間的に一致するという仮定が許されるならば、〔完形一括土器の廃棄は、新設住居への移転〕時に求められよう。（②土器、石器等の付器は、住居の廃絶に際し人とともに移動しているから、その一括廃棄は住居の廃絶後に行なわれていることは確実である）』

ここで問題となる点に幾つかあるが、まず、①の時間的不一致である。A'→Bの設定理由として掲げられる第一次堆積層の形成時間が満たされないのは何故であろうか。Aが廃絶され、A'が新設された段階で什器を全部A'に移し、Bのレンズ状凹地を選んで完形一括土器を廃棄する想定は、第一次堆積層形成時間内の人々の行動を無視した想念に近いものであろう。同じ台地上に居住し、生活を営んでいる限り、捨場としてAはBより容量が多く、かつ②で搬出する際に要、不要の選別も可能で、不要不用の什器をそのまま遺存させることによって労働の簡略化もできる訳である。ところが、この矛盾を止揚するものとして設定したく“土器作り”と、その“廃棄”のシーズン制の存在は、武藤雄六、堀越正行らの感想(23)と同じく肯首できないものであり、〈完形一括土器〉という土器のほとんどが破損品であることも充分再考に役立てなければならない。更に、住居の第一次埋没と、シーズン制による土器作りとその廃棄の時期が常に符合するように縄文世界が回転していたとは考えられない。即ち、吹上パターンは次のように理解すべきものとしてある。

### 3)、移動の所産としての吹上パターン

移動とは、特に縄文時代の生業を狩猟採取経済生活と規定するならば、動植物相の変化によって引き起こされる行動と把えられる。しかし移動する前提となるものは、移動する先方の領域が、その集団の領域でなければ平安に移動することができないはずであり、とりわけ中部地方にも見られるように、中期の遺跡の急増現象からして、一集団が単一の領域の所有だけで数百年を過していたことは考えられないであろう。そこで縄文人の行動（移動）の想定を試みてゆきたい。

まず移動の時期であるが、これは原則として春先に行なわれる。勿論収獲の無い秋も考えられる。当然夏、冬でも移動するであろうが、夏、及び秋は狩猟、採集の時期であり、冬期の為の貯蔵物を豊富に持っているため移動するには不適当である。もちろんその貯蔵物が少なく越冬できない場合には、

移動を余儀なくされる訳だが、別の領域で越冬できる食糧を得られる保障はどこにもないであろう。春は動植物、特に海岸地帯では貝、山岳地帯では植物があり、少なくとも秋までの生活は保障される訳で、小林氏の言う春の生産活動に繋がるものと言える。

この移動によって〈一括土器廃棄→土器片及び貝殻（残飯）廃棄〉が次のように説明される。

- ①、A台地からB台地への集落の移動→B台地には以前同じ集落の残した住居及び、内部には土器や石器等がある。（A台地から出発する時、そこには住居や土器等が移動中の必需品を除いて残される。）
- ②、B台地の住居や土器、石器等について、使用できるものと使用不能なものを選別し、使用できない住居は、使用できるものと出さないものに材料を分ける。この片付け作業の中で、壊れた土器は近くの凹地（以前に廃絶された住居址）に捨てる。使用できる住居は修復を行ない（この時、材料は崩壊した住居の使用できる材料を使用する）拡張、あるいは補強をする。この住居内には以前から置かれていた土器が残されているが、様々な原因によって壊れている(25)土器は凹地に捨てる。  
この場合に廃絶された住居は、不燃物以外のものはその住居内に残され、屋根材はマキとして使用される。同一期に幾軒も廃絶されることは少ないから、廃絶住居は燃料置場として使用される。
- ③、B台地での住居。凹地には不燃物の土器破片や石器（海浜地方では貝殻等）及び残飯等が投棄されつづけ、凹地は完全に埋没する。
- ④、B台地から移動、①の場合と同様に行なわれるが、マキ置場として使用されていた廃絶住居はそれ以降第一次堆積層を形成し始める→凹地が形成される。

①～④について住居サイクルを中心に土器、人間行動を要約すると次のように整理される。

人 間サイクル	住居サイクル		土器サイクル	
1、移 動（来） 定 着 移 動（出） 無 人	新 築 居 住 放 置 荒 廃		片付、一括投棄、製作 製 作 ・ 投 棄 置 き ざ り 破 損	
2、移 動（来） 定 着 移 動（出） 無 人	片 付 燃料置場 空 地 一次堆積	新 築 居 住 放 置 荒 廃	片付、一括投棄、製作 製 作 ・ 投 棄 置 き ざ り 破 損	
3 移 動（来） 定 着 移 動（出） 無 人	一括土器投棄 破片等投棄 完全埋没	片 付 燃料置場 空 地 一次堆積	新 築 居 住 放 置 荒 廃	片付、一括投棄、製作 製 作 ・ 投 棄 置 き ざ り 破 損

※ 1と2の移動の間に修理、あるいは拡張等の住居サイクルが存在するので、新築から完全埋没の間には4～5回の移動、定着が考えられる。

このように短時間のうちに移動を繰り返した場合、集落を把える方法としての土器型式による住居

選別はほとんど不可能になるが、埋葬と覆土中の土器の時期が比較的近い時代である場合に時期区分する根拠として有効である。

すでに了解されていることではあるが、ここでの移動とは、高橋 護氏のように(26)遺跡間の連続的移動を説くものではなく、むしろもっと短時間の内に繰り返されたところの移動についての解明を試みている訳であるが、どの遺跡でも同一テンポで移動を行っていた訳ではないだろう。又、その地域によって領域の範囲や、セツルメントパターンに支配された構造との複雑な結合、及び相互性として把えてゆかねばならないであろう。

移動を繰り返す前提として、一集団は幾つかの領域を所有していなければならないが、中期末葉の中部山岳地帯に於ては次のような仮説を提出しておいた。

「近接する2集落は(茅野和田東、西遺跡・尖石、与助尾根遺跡等)は1領域を交互に管理する共同体ではないか。茅野和田東、西遺跡の住居数変遷はそのことを物語っている。A領域動植物増加率、(1年)をXとすると収穫数Yは $X \geq Y$ でなければならない。しかるに、集団aの(人口)増加は常にXに近付こうとするし、Xは自然条件の変化により少なくなることも多々ありうる。したがって、 $X \geq Y$ は不定期に $X \leq Y$ となり、集団aの生計を脅かし、遂にはA領域からの移動を余儀なくさせたであろう。a集団の去ったA領域は空白地とはならず、a集団と同族の、a集団より人口の少ないb集団によって管理される。b集団は $X \geq Y$ ではなく、 $X > Y$ の収穫によって生計できる集団であり、 $X > Y$ の生産活動によってXの増加を計り、減少したX量をa集団が維持できる量に増す役目をもっている。」(27)

この仮説は具体的に遺構の関連性を追求する方法論をも求めているのであり、中部山岳地帯のみならず、関東貝塚群の解明に於ても有効な方法となるであろう。後藤和民氏は、千葉市貝塚町貝塚群の時期的連続性に着眼し、集落の定住生活を知る上で重要な遺跡群として保存活動をしておられるが(28)、中期に属する2遺跡のうち荒屋敷遺跡が馬蹄形貝塚で、荒屋敷北遺跡が点列状貝塚、又、後期の草刈場遺跡がほぼ環状貝塚で、同期の草刈場南遺跡が点列状貝塚であることは、それぞれの時期に、貝の採取活動が少なくとも2集団の相互管理によって維持されていたことを示すものではないだろうか(29)。

領域の管理体制の問題にまで立ち入ってしまったが、これらは集落論と密接な関係として稿を改め、後日の発表としたい。

## 2. 土器型式について

柳坪A、B地区及び頭無遺跡から検出された縄文時代の住居36軒から発見された土器群は非常に豊富なものであるが、その時期は縄文時代中期末葉から後葉に位置付けられるものである。出土土器の文様構成及び器形から大部分が大椀として井戸尻編年の中に組み込まれるべきものであるが、関東編年での加曽利E式に酷似する一群の土器も併存して発見されている。

しかし、これら井戸尻編年及び関東編年での住居時期決定を行ない、短絡的に一時期の住居群=一集落と結論する前に、特に中期後半の埋葬設備住居を基本とし、床面、覆土に土器を分けて時間的な照合を行なってゆくことが正論かと思われる。そこで、井戸尻編年による区分を利用し、6時期に分けた。I期は曾利I式以前、II期は曾利II式、III期は曾利III式を2分して前半、後半と分け、IV期は曾利IV式に、V期は曾利V期とした。

表2で示した土器型式の分類は「井戸尻」(1)から援用したもので時期決定を行なった。従ってこれら中間に位置するものについては、その文様構成を考慮して近いものの中を含めた。元来土器型式は概念的であって、実際には常に流れを持ち続け、その流れの中で変化してゆくものである限り、一刀両断的に分けることは出来ないものではあるが、中核をなす土器群、器形、文様構成によって時期を区分することができ、又、そうした方法によって編年が組まれて来たが、その中核をなす土器群とは一体どのようにして把え得るものであろうか。住居の廃絶と土器等の投棄については前述したように当然時間差を前提とすべきものであり、又埋甕と床直の土器の時間差（製作時差）も考慮に入れなければならない。

しかし、こうして製作時差の問題まで追求するには土器胎土組成、施工工具の同一を証明してゆかなければならないのは必定で、現状では困難であることを認めざるを得ない。

埋甕と床直一括（直立及び倒立）の土器を出土している住居はY A 10、Y B 3、10の3軒がある。Y B 3号には埋甕が2個あるが、いずれも底部を欠いて直立しており、その性格はやや問題があるが、住居に伴うものとして良いだろう。Y B 10号の3個の倒立した土器の1個は壁上から住居内に倒れ込むように傾斜し、他の2個は直面に密着して倒立してあったが、移動の場合に土器を直立させて置くより、倒立させた方が安定度が高いことは肯首できるものである。K 12号では石囲炉内中央に置甕が存在し、K 3号では焼土直上に底部2個が発見されているが、製作時間差を器形及び文様で考察するには困難と言える。

表2で示した埋甕、床直一括、覆土一括、破片等の時間差追求には多くの問題点があり、井戸尻編年では十分に把握しきれないことを今後の整理課題としてゆくつもりである。（末木）

● 埋 甕                      △ 床 直                      ○ 覆 土（一括は◎）

時期 住居No	I	II	III		IV	V	VI	時期 住居No	I	II	III		IV	V	VI
			前	後							前	後			
Y A ①		○	●	◎				Y B ②							
Y A ②		●◎	◎					Y B 26					◎		
Y A 4	◎							K 1	○						◎
Y A 6				◎				K ②							●
Y A 8		○○	◎	◎				K ③					●	◎	
Y A ⑩		◎	◎	●	△◎			K ④				●◎	◎		
Y A ⑭					●			K ⑤				●	◎		
Y B 1					◎	○		K ⑥					●◎		
Y B ③		○	◎		●	◎		K ⑦		●●○	◎	◎	◎		
Y B 4								K 8	○						
Y B ⑦					●◎			K 9	○	◎	◎	◎			
Y B ⑩		◎		●△				K ⑩		●●		◎			◎土抔
Y B 11		◎	◎	◎				K 11				◎			
Y B ⑫						●		K ⑫		●◎	○	○			
Y B 13					◎	◎		K 14	○	○	◎	◎			
Y B ⑭					●			K 16							◎
Y B ⑮				◎	●◎			K 17							
Y B ⑯						●◎		K ⑬				●◎			
Y B ⑳				●◎											

第2表 住居出土遺物時期表



(註)

- (1) 拙稿 1974、「山梨県中央道埋蔵文化財調査報告書」山梨県教育委員会
- (2) 中部山岳地帯の井戸尻編年とは、すでに周知のとおり、こうした方法によったものである。
- (3) 神奈川県川崎市潮見台遺跡で発見された9軒の住居址中全部が住居南、あるいは南西部入口部に正位の埋甕を設置していた例は、加曽利EⅡ式(曾利Ⅱ式)に比定されるものとして、「埋甕の偏在」観念を払拭するに十分なものと言えるであろう。
- (4) 即ち吹上パターン、あるいは西耕地パターン
- (5) 戸沢充則、1966、「諏訪山遺跡」大和町教育委員会
- (6) 小林達雄(1965、米島貝塚)によって名命されている。又、藤森栄一、及び武藤雄六らは富士見町遺跡群の調査の中から、「上になった家は下にあった家を重なった部分だけ埋め立てて貼床をつくる。又、新しい家が古い家の床を切り込んでいる。たとえ1日の差でもこの新旧は絶対である」として、組み立てられた出土土器→一括セット→一型式へと集約され「井戸尻」報告書の出版となっている。
- (7) 塚田 光、1969、「下総考古学研究会の歩み」考古学研究16-2
- (8) (6)と同様
- (9) 白石浩之、1969、「西耕地パターンの想定」発掘者No.6 2(未読)
- (10) 可児通宏、1969、「住居の廃絶と土器の廃棄」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ
- (11) 長崎元広、1970、「吹上パターンの諸問題」ふれいく10号  
長崎元広、1971、「方法論ノート」  
堀越正行、「パターン論の清算」共同体の基礎理論所収  
樋口昇一、1971、「土器廃棄に関する問題—とくに“吹上パターン”を中心として—」信濃24-12  
可児通宏、(10)と同様、他、
- (12) 小林達雄、1974、「縄文世界における土器の廃棄について」国史学9 3号
- (13) (10)の註⑥より引用 (16) (12)と同様
- (14) (10)の註⑤P、115 (17) (15)と同様
- (15) (12)と同様 (18) (10)と同様
- (19) 可児通宏も指摘しているように「一括土器廃棄→継続的廃棄」が観察されるが、その理由については不明としており、この点については本文で検討してゆきたい。
- (20) 小林 清、1974、「遺跡上の堆積土壌の成因と生成」考古学研究8 2
- (21) 関東貝塚から発見される住居の堆積層のあり方は、中部山岳地帯の住居覆土にもあてはめることができると思われるが獣骨等は酸化されて遺存しない。
- (22) (10)註⑤より引用 (23) (11)と同様
- (24) 各時代の領域の広さによって移動方式が変化するわけで、特に中期の急増、前期・後期などの過疎的現象との差は当然考え得るであろう。
- (25) 例えば建築材料が腐って家が壊れたり、獣に荒されたりして
- (26) 高橋 護、1965、「縄文時代における集落分布について」考古学研究4 5
- (27) (1)と同様
- (28) 後藤和民、1974、「東京湾東岸の貝塚群とその保存」考古学研究8 2
- (29) 貝塚と遺物包含地の割合が約46%であることが千葉市史(1975)で報告されている。貝塚形成地と包含地が隣接している場合も多く存在するが、まだ未調査地区の山林内に多くの包含地の存在が期待される。千葉県等の調査は従来貝塚中心であった為に、遺跡の発見のかたよりが見られるものと考えている。

### 3、 柳坪B地区10号住居址出土土器について、 (図71参照)

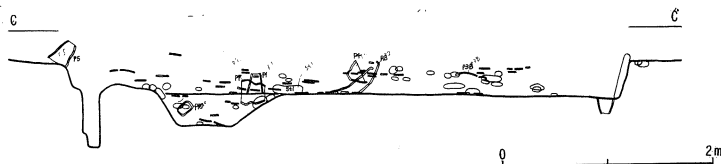
ここでは柳坪遺跡B地区10号住居址の遺物出土状態の観察から、この住居址が埋没完了に至るまでの諸現象について検討してみたい。

まず縄文人の生活面である住居址床面に注目すると実に興味深い現象が見られる。床面に倒立したままの状態の深鉢(P1)。床面に倒立していたが上部から押し潰されたと思われる状態の深鉢(P2)。更に石皿(St1)が床面に密着して出土し、床面ではないが北壁上から正に転落しそうな状態の深鉢(P5)がある。土器は倒立させられるものは倒立させた状態がそれを置く場合に、最も安定した状態といえる。P1、P2は倒立させて「置かれていた」と解釈するのが妥当である。決して不要になった土器が「棄てられた」状態ではない。即ち最も安定した状態で土器を置くという行為は、縄文人の「まだ土器を使用する」という意志の現われである。住居もその時点では健在であったろうししかし現実には土器はそのままの状態に住居址は埋没を開始している。この不可解な現象は人間集団がその集落に居住していかなかった、即ち、他地へ移動してしまったと考えることによって理解が可能となる。それも床面の土器の状態から考えれば「一時的な移動」であろう。集団が移動した後に住居は自然倒壊埋没を開始した。北壁上のP5の今にも転落しそうな状態はそれを示しているし、P2は住居倒壊の際に潰されたと考えられる。そして集団の移動が一時的なものであったことを証明するように、住居址埋没開始後に再び人為的な現象が現われる。まず炉石が抜かれていることである。移動の際に運んでいったとは考え難い。即ち集団が集落に復帰し、この住居の廃絶を決定した際に、新しく構築した住居で使用するために抜きとったと考えられる。それに反して破損してしまった土器はそのまま放置してある。即ちこの2つの現象から、住居構造材や生活用具で使用できるものは再使用し、使用できるものはそのまま廃棄するという縄文人の行為を想定できる。さて更に注目すべきは住居址覆土への土器廃棄の開始である。それらには完形一括の浅鉢(P4)をはじめ、大小の土器片などがある。つまり、これら住居構造材の抜きとりや覆土への土器廃棄の開始こそが集団の集落への復帰を示していると共に、縄文人の住居廃絶の意志の現われでもある。さてその後、ある程度土器の廃棄が続き、住居址の埋没は完了する。そこで今までの検討をまとめると、この住居址は埋没完了に至るまでに次のような経過をたどったと推定できる。

- (1)住居の一時的放置(生活用具の部分的置き去り、集団の他地への一時的移動)
- (2)住居が自然倒壊埋没開始(生活用具の転落破損)
- (3)集団が集落へ復帰
- (4)住居廃絶(使用可能な住居構造材や生活用具の抜きとり→新住居構築)
- (5)住居址凹地への土器の廃棄
- (6)住居址埋没完了

今後、特に縄文時代集落研究の場合などは他の住居址との関連性を考えながら各住居址について、このような検討を進めていかなければならないだろう。(米田)

(註) 長崎元広 1970 「吹上パターンの諸問題」ふれいく10号



第201図 柳坪B地区10号遺物出土状態

## 第2節 弥生時代出土遺物について

弥生時代に属する住居は今回の調査で皆無であったにもかかわらず、西下屋敷遺跡、柳坪遺跡では水神平系土器群が一括で発見され、柳坪・頭無両遺跡のグリッドや住居覆土中より後期土器片が若干発見されたことは、北巨摩地方に於て多大なる成果として受け取って良いと考えている。

柳坪遺跡で一括出土した水神平系の土器群はA地区2号住居西側の攪乱層中で、2号住居が約半分切り取られている。この攪乱は焼土、ロームブロック等が突き固められたようにしまり、ボーリング棒を20cmと受けつけない、その為、約50cm幅のトレンチを入れたが、地表下1.5mでもローム面に達せず、又、時間的制約、土捨場等の関係で調査続行を断念したもので、あるいは柳坪A地区16Y（弥生）住居として正確に報告できたものであったかもしれない。したがって、一応ここから出土した一群の土器を16Y出土として報告しておいたが、その内容は広口壺、甕、深鉢、小型埴形土器等が見られる。広口壺、甕、深鉢のいずれも胴部に荒い条痕文をもち、縄文時代から弥生時代への移行期の水神平式土器として良いであろう(1)。しかしながら県内に於てこの土器が明確にされていないため、その流入経路、分布について今後の調査問題となろう(4)

後期に属する土器片はいずれも口縁部が外反し、頸部が広く、胴部がほぼ球形に膨むもので、器面には櫛目波状文が幾条か横に描かれている。これらは信濃にみられる櫛目文を施文の主とする岡屋式(2)に比定されるものであろう。

資料が不十分であって弥生時代遺跡として十分な検討をすることができないが、いずれにしろ八ヶ岳周辺に続々と発見される日は近いであろう(3)。 (末木)

- (1) a 紅村 弘 1963、「東海の先史遺跡総括編」  
b 桐原 健 1970、「信濃考古総覧、下巻」弥生時代  
c 長野県考古学会 1967、「長野県考古学会誌4号」  
d 太田 保 1966、「上伊那の考古学的調査総括編」弥生時代  
e 久永春男 1969、「中部一東海地方」新版考古学講座4  
f " 1966、「弥生文化の展覧と地域性一東海」日本の考古学Ⅲ
- (2)、桐原 健 1967、「海戸 I」岡谷市教育委員会、
- (3)、長野県教育委員会 1974、「富士見町遺跡一覧表」長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書一諏訪郡富士見町内その1で、足場、井戸尻の2遺跡で弥生時代後期の遺物が発見されている。
- (4)、ウノシマ遺跡及びその周辺遺跡から条痕文系土器片と混在して水神平系土器が出土しているのをはじめ、中道町米倉山B遺跡及び北巨摩地方にも散見すると伝えられる(1968, 山本寿々雄「山梨県の考古学」)

## 第3節 古墳時代

### 1. 古墳時代後期の住居址について

柳坪A地区で発見された鬼高期の住居は7軒で、5、7、9、11、12、13、14の各住居がそれぞれである。方形住居の4本柱、北カマドが一般的傾向であるが、規模と貯蔵穴の位置に差があり、特に貯蔵については興味深い点がある。5、12、13、14の4軒は住居西南隅にスリ鉢状のピットがあり、いずれも円形か楕円形のプランで、中からは遺物がほとんど出土しない。7号住居は南壁中央で住居

内側に長方形ピットがあり、その壁はほぼ垂直に立っている。遺物はピット覆土の床面と同一レベル位から高杯が出土している。9号の貯蔵穴は南壁中央にある張出ピットで、11号は円形ピットが南壁中央外側にある。いずれも遺物がほとんど無く、9号張出ピット内には地山の巨石が顔を見せている。11号の円形ピットは張出ピットの一例としてよいと思われる。

以上の3形態に分類できる訳だが、7軒の住居のうち規模の大きな住居に張出しピットが設備される傾向は、八王子中田遺跡と同様であろう。

中田遺跡に於て鬼高前期に比定される住居19軒のうち、張出しピットの住居が11軒で圧倒的に多く、南西コーナーにピットをもつ住居が2軒、南壁中央内側にピットをもつ住居2軒、東南コーナーにピットをもつ住居2軒、南壁両側にピットをもつ住居1軒、不明1軒である。

ちなみに鬼高中期も調べてみるならば、28軒のうち、無いものあるいは不明なものが12軒、北東コーナーにあるもの7軒、南東コーナーにあるもの5軒、南西コーナーのもの2軒、カマド両側のもの1軒、北西コーナー1軒である。

この数字からも分かる通り、住居南側中央から西側に存在するピット（貯蔵穴）を持つ住居は、一般的に中田遺跡鬼高前期に位置づけることができる。しかし、千葉県夏見台遺遺では、鬼高IIの7軒の住居のうち3軒までが張出しピットをもっており、地域差があることが語られている。（夏見台1976、下津谷達男）ただし、鬼高Iの7軒の住居のうち5軒までがカマドを設置しない地床炉の住居である点、中田遺跡との時間差が認められるものであろう。

カマドについては、攪乱を受けている12号住居を除いて北壁中央に設置されている。構造は、やや北壁を切り、皿状ピット両側に袖石を幾つか並べる石組カマドで、いずれも構築されている。支脚に土製品を使用したものは全く無く、石柱支脚と考えられるものもある。又、煙道はほとんど発見されていない。

なお、14号住居が一度拡張されており、その方法は、北西コーナーを基軸として変えず、北辺と西辺を伸して拡張している。従って、北辺上のカマドがやや東に移り、南西コーナーにあったと思われる貯蔵穴がやや南へ移っている。柱穴も新たに対角線上の一定の割合に移されて完了している。第202図を参照されたい。

(末木)

○参考資料

○八王子中田遺跡 1966、八王子市中田遺跡調査会

○土師式土器集成（本編3）1974、

杉原荘介・大塚初重編

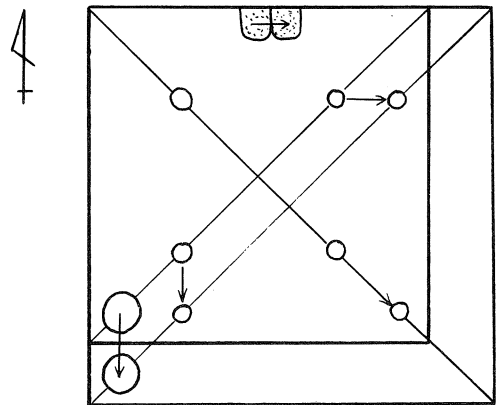
○日本の考古学V・1966

住居及び建築 喜谷美宣

集落と共同体 和島誠一、金井塚良一

○夏見台 1967

下津谷達雄



第202図 柳坪A地区14号住居址拡張略図

## 2. 古墳時代出土土器について

柳坪遺跡及び頭無遺跡の縄文時代から土師時代に至る50軒を上回る住居跡の発掘調査出土品の中から、本県では資料が少なかった古墳時代の貴重な遺物を見ることができた。前期の五領式の遺物は柳坪では住居外及び住居内覆土より出土したもので、量的にも少なく、頭無遺跡発見の2軒の隅丸方形の住居址からは遺物が若干発見されているだけである。しかし、鬼高式前半の住居は柳坪で7軒発掘され、幸いにも遺物も豊富に出土しているため、本県のこの時期の標式ともなり得る貴重なものと考えている。晩期Ⅰの真間式土器とその住居が発見されてはいないが、国分式に比定される12軒の住居と豊富な遺物は、隣県長野諏訪地方と甲府盆地をつなぐ街道沿にあって、国分式の内容を本県なりに確認する上で欠く事のできない資料と思われる。勿論、すでに報告済の小淵沢町上平出遺跡(1)や、未発表の須玉町大豆生田遺跡(2)の重複住居を根拠として考えてゆきたい。

### 1)、古墳時代前期(五領期)

柳坪A地区3号住居内覆土から出土した土器群及び頭無遺跡13号、15号住居床面覆土から出土した一群の土器を言い、甕、壺、こしき、杯、高杯等の器種が見られるが、柳坪A3号住居の覆土より出土した胴部に波状櫛目文が施される甕形土器は弥生時代後期に比定されるもので、諏訪地方岡屋式の関連を想定させる。(5)、又、口辺部がくの字に屈曲した杯は器内外面がへら研磨されているが、口径と器高の比率を考える時、五領期のものに類似してはいるが、器高が高く、器肉は薄く、内外面とも良好にへら磨きされている点も見合わせると鬼高期の遺物の混入も考え得る。

その他の遺物は壺形土器口辺を除いていずれも刷毛目痕が見られるのを同一とするが、頸部から口縁にかけての特徴を全く異にしている。6はいわゆるS字状口縁を持つ台付甕口辺で、五領期後半に考えられているものである。この遺物は土師器集成に山本寿々雄氏が報告した大塚、西原遺跡などの他に甲府東小学校々庭遺跡(6)、同市伊勢町地内(7)、甲府工業高校々庭遺跡(8)、境川村京原遺跡(9)など甲府周辺に多く発見されているが、北巨摩郡内では韮崎市坂井遺跡から器台、甕(頸部が「くの字」に屈曲するもの)、埴、コシキ等の遺物は見られるがS字状口縁は掲載されていない(10)。又、高根町宮地遺跡からはS字状口縁の台付甕が出土している。したがって、長坂町で五領期の遺物と住居が発見された点は、今後古墳文化流入経路を考察する上で重要となるであろう。(11)。

なお、頭無遺跡の遺物を概観すれば、甕形土器の底部を除いて他は刷毛目整形ではなくへらみがきによる点である。コシキは焼成前に底部に一孔穴が穿たれ、壺形土器口辺は丹塗されている。遺物がいずれも破片で、一括資料には不十分であるが、今後の発見に対し参考になれば幸いである。

### 2)、古墳時代後期(鬼高期)

柳坪A地区の7軒の住居から発見された遺物でほぼ同一時期、即ち鬼高期前半に位置付けることができる。北巨摩地方の鬼高期後半の遺物は高根町小池所在小池区共同土取場遺跡から発見された一括資料がある(12)ので、参考に第203図に示しておいた。

5号住居の遺物は図版24の破片若干で、図示したものはないが、他の7、9、11、13、14の5軒は遺物も比較的豊富で、杯、監、甕、高杯、埴などがほぼセットとし見ることが出来る。12号はカマドが攪乱を受けていた為に子持勾玉が主な遺物で、土器片はほとんど無い。ここで注意した

いのはコシキの破片が発見されていない点であるが、整理中にこの破片を得ることはできなかったし、カマド内の発掘中に於ても確認していない。

それでは各々の住居の土器組成を示し、特徴を把握してゆきたい。

まず7号住居出土土器は、頸部が「くの字」に屈折した甕形土器口辺と、薄手で口縁部が内湾している盥。胴部に陵をもち、口辺がほぼ直立し、底部は皿状の浅い杯、口縁が薄く、先端が尖り、脚柱部と杯部の接合点やや土に一本の陵が見られ、脚部はスソに達して屈曲する高杯がある。この住居の特徴は高杯で、杯部と脚部の比率が約1:1で、バランスの取れた美しい姿をしている。中田遺跡の鬼高式土器の3分類に於て、高杯形土器でこれに類似するものを「杯部外面に稜をもつ23、24がI類土器の中心的なものと考えられ、杯部がまるみをもち、太く短かい脚部をつける25、26は、むしろII類に多く見られる器形」としている。しかし、中田遺跡鬼高式土器編年図表(1)のいずれにも7号住居出土の高杯が酷似せず、むしろ和泉期の高杯杯部と類似する感もあって、ここではとりあえず鬼高前半の中に含めておきたい。なお、中巨摩郡甲西町江原遺跡でこの高杯と類似するものが出土していることを付言しておく(20)。

9号住居出土の土器は杯、盥、柑、甕、手ツクネ小型土器、台付土器があつて、特に杯及び盥の内容が豊富である。ここでは球形を半分にしたような盥の姿を見ることができず、外面胴部に陵をもたないへら磨きの盥は器高が4cm内外で、口径との比率が3.5:1である。前記7号住居の盥が2.4:1の比率であるから、いかに扁平であるか分るであろう。又、この盥の中には平底に近いものが想定されるものも含まれている。この他に盥形をしながら胴部一本の沈線をめぐらし、口辺を横ナデ、丸底部をへら磨きしている杯類似のものが2個あり、器肉は底部より口縁の方が厚くなる。これの口径と器高の率が2.7:1で、器高の上から $\frac{1}{4}$ のところに沈線がめぐる。杯形土器は内面黒色研磨のものと、そうでない2種類があつて、外面器高のほぼ $\frac{1}{2}$ のところに陵が見られる。口縁はいずれも外反傾向をもち、陵より上部は横ナデ、下部はへら磨きがなされている。特異なものとして盥形土器で胎土が厚く、外面下半にへら削り痕を残し、内面口縁は内湾し、幾条かの刷毛目痕があるものがある。須恵器は杯の破片があり、陶邑TK23期(13)に比定される。

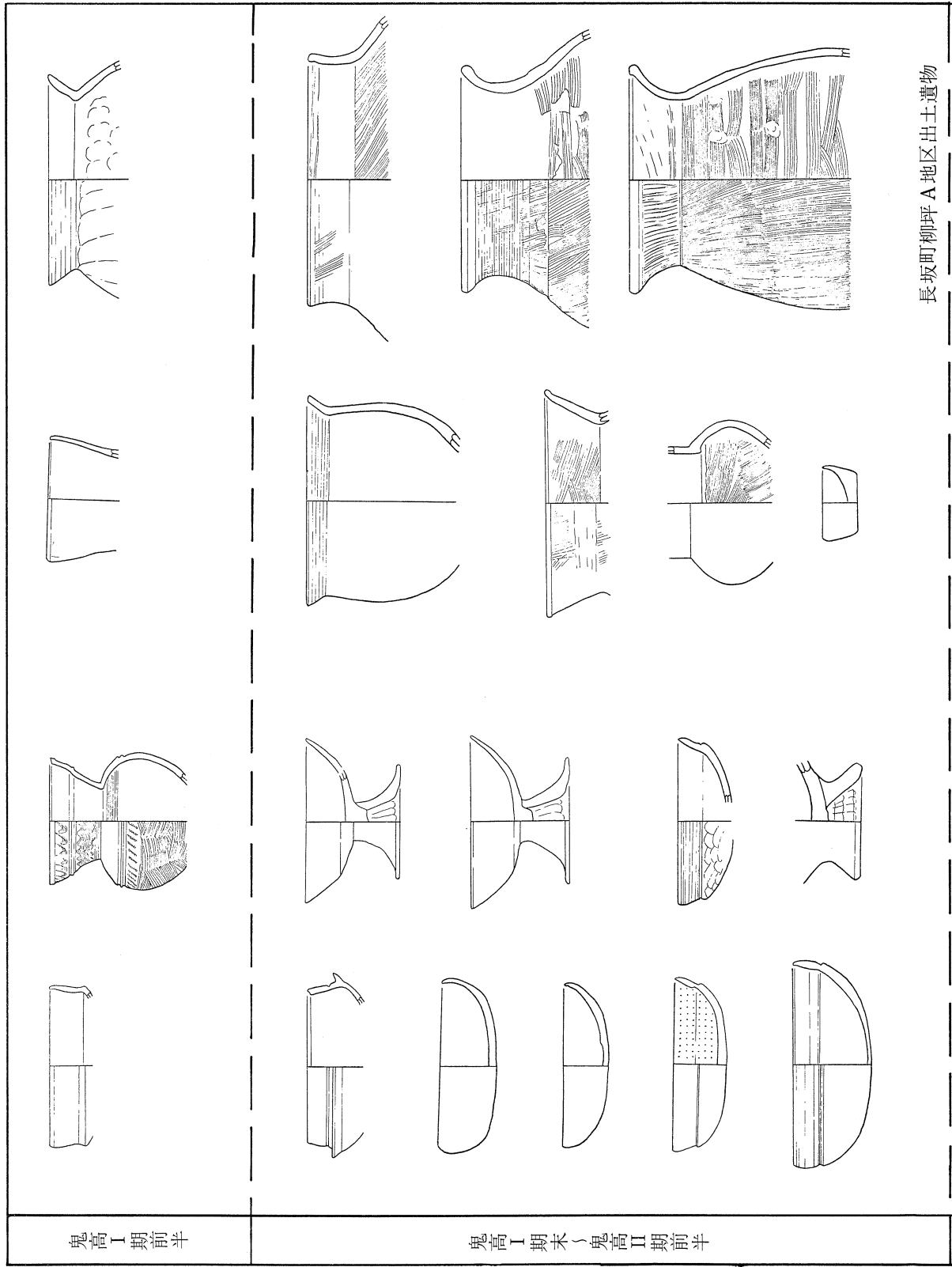
次に甕形土器であるが、これは頸部の屈曲で2種類に分けることができる。即ち、1つは頸部がいわゆる「くの字」に屈曲するもので、内面に陵を持つ。頸部上には間隔の荒い楡目文が縦に刻まれ、胴部には細かい刷毛目が縦方向に走り、内面は横方向にやや荒い刷毛目整形が施されている。又、別形態のものは頸部がゆるやかに胴部のふくらみへと続くもので、刷毛目が外面には縦、内面には横方向に施されている。「くの字」の頸部の甕は長胴形に移行しつつあるが、他は球形胴部と思われる。

張出しピットの住居及び杯、甕形土器から9号住居は鬼高II期前半に属するものであろう。

11号住居は盥、杯、甕が出土しており、盥は口径と器高との比率が2.6:1で球形を切り取った形をしている。杯は薄手と厚手があつて、薄手の杯は9号址出土のものと類似するが、口縁先端が尖る。4は高杯の杯部破片であるが7号と比較した場合、器形が直線的である。甕形土器は頸部がゆるやかなもののみで、頸部から口縁にかけての横ナデが特徴である。甕底部はほぼ丸底を呈し、底部まで刷毛目整形が施される。

12号住居出土遺物は甕形土器のみで、「くの字」頸部の長胴化する甕と、球形に近く底部も丸底の甕の他に小型甕形土器が出土しており、杯類の出土を見ない。

14号住居の出土土器は、口縁の内湾した盥と柑口縁、須恵器甕、甕が出土しており、甕は陶邑T



高根町小池所在、小池区共同土取場遺跡  
(菊島美夫氏原図)

第203図 鬼高式土器編年試案

K 2 3 期に比定される。又、直立した口辺の甕は鬼高 I 期より出現しているもので、中田遺跡にも発見されている。

以上、各住居出土土器をまとめたが、これを各器種についてまとめてみると次のようになる。

#### ○杯形土器

A 類 1 (7号3、9号10)、器高 $\frac{1}{2}$ の所の外面に陵をもつ器形で、外面の口縁部は横ナデ、内面及び外面下半が篋磨きされているもので、口縁は直立、外反、内湾する各種があり、内面黒色研磨のものを含まない。

A 類 2 (9号6,7,8,9)、A 類 1 と類似し、内面黒色研磨土器をいい、A 類 1 より底部の器肉が厚い。口縁は直立、あるいはやや外反する。

A 類 3 (14号1)、口辺から $\frac{2}{3}$ のところに陵があり、口縁が直立している。

B 類 (11号2)、外面陵が器高 $\frac{1}{3}$ の上方にあり、横ナデ整形によって造り出されたような陵である。器肉が厚く、内面に刷毛目痕が若干見られる。

〔C類〕(9号11、12)、盃形土器と器形が同一で、口縁より器高 $\frac{1}{3}$ のところに沈線によって造り出された陵をもち、口辺内外面とも横ナデが見られ、下半はへら磨きで、口辺部より底部が薄い。

#### ○盃形土器

A 類 1 (7号1)、球形を半載した器形で、口径と器高の比が22:1で器内は薄く、口縁はやや内湾する。

A 類 2 (7号2、11号3)、A 類 1 と器形は同じで口径と器高の比が2.2:1前後であるが、口縁部が横ナデされ、外面下半がへら、又は刷毛目整形痕がある。器内は薄く、杯形土器C類と近似する。

B 類 (9号1,2,3,4,14号2)、口径と器高の比が3~4:1で、A 類と比較した場合扁平な感を与える。内外面ともへら磨きで器肉は薄い。

C 類 (9号5)、B 類と外器形は似ているが内面口縁部に陵をもち、器肉厚く、内面へら削り、内面刷毛目痕が施される。

#### ○高杯形土器

A 類 (7号4,5,6)、器高で杯部と脚部の比率が1:1で、杯部下面に陵があり口縁までゆるやかに湾曲しながら口唇はやや尖る。脚柱裾部は屈曲して広がり、屈曲部が厚く、内面は脚柱内部に差し込まれた突起をへら、又は指でつぶし、へらでなでつけている。

B 類 (11号4) 杯部だけしか発見されていないが、底部下方に陵をもち、陵から口縁まで直線的に広がるもので、外面下半にはへら磨きが見られる。

C 類 (9号15)、高杯と言うより高台付土器と呼べるものかもしれない。脚はハの字に開き、内面にはへらで押えた整形痕が残り、脚高は約2.5cmである。

D 類 (9号13)、杯と同様に外面に陵をもち、杯A類1と似ており脚部不明

#### ○甕形土器

A 類 (7柱7、9住18,19、13住2,14住4,5,6,7)、頸部が「くの字」に屈曲し、その内面に陵をもつもので最大径が胴部ほぼ中央にあり、内外面に刷毛目整形が見られる。長胴化傾向のみられるものである。



B類、(9住20、21、11住5、6、13住3)、頸部が半円状にしまり、胴部が球形に脚らむもので、内外面とも刷毛目が施され、丸底に近い底部下面にも施される。

C類、(13号1、14号1)、小形甕形土器で、最大径を口径にもち、口縁部内外面とも横ナデで、胴部には細かい刷毛目が薄く施される。

D類、(14号9)、口縁が直立し、胴部が球形に膨むもので刷毛目整形される。

E類、(14号1)、頸部が「くの字」に屈曲し、胴部が球形に膨むもので、口縁部は横ナデ、胴部はへら削りを行なっている。内面は指圧痕が見られる。

これら盃、杯、高杯、甕の土師器の他に、手捏小形土器、埴、須恵器杯、甕などが出土しておりまず手捏の小形土器の伴出は鬼高Ⅰの特徴として中田遺跡では把えられているし、小形埴形土器も同様である。特に14号出土の小形埴形土器は古い形態を持つものとして理解される。次に須恵器杯及び甕であるが、どちらも陶邑古窯TK23出土のものと同器整形方法を同一とするもので、陶邑古窯Ⅰ期(5C末～6C)に比定される。しかし、これら鬼高式土器群の編年的な位置を明確にしておかなければならないであろう。

杯、盃、高杯、甕の在り方を各住居について再度まとめて表に示した。この表から伴出するものとならないものの組合せが理解できる訳であるが、ほぼ鬼高Ⅰ～Ⅱ式に含まれるもので、高根町小池(12)、境川村薊在家遺跡出土(12)のものより古い時期に位置付けられるであろう。

第203図でその編年試案を提示した。

(末木)

	杯	盃	高杯	甕	他	数
7	A、 1—1	A、 1—1 A、 2—1	A—3	A—1		
9	A、 1—1 A、 2—4 C、 —2	A、 2—1 B、 —4 C、 —1	C—1 D—1	A—2 B—2	須恵器杯 手捏小形土器 小形埴形土器	19
11	B、 —1	A、 2—1	B—1	B—2		5
13				A—1 B—1 C—1		3
14	A、 3—1	B—1		A—3 C—1 D—1 E—1	須恵器甕 埴形土器	8
数	10	10	6	16		42

第3表 土器分類表

#### 第4節 歴史時代の土師器について (第204図)

ここで歴史時代としたのは、本県北巨摩郡内において奈良時代、及び平安時代の遺物が明瞭ではな

く。特に真間期に位置付けられる土器及び集落群が発見されていないので、ここであつかう土師式土器晩期の上限が示されていない。したがって、柳塚遺跡B地区発見の12軒の竪穴住居出土遺物を検討する前に、すでに北巨摩地方で発見されている小沢町上平出遺跡(1)及び、須玉町大豆生田遺跡の重複住居を基本に、韮崎市清哲遺跡(14)を添えて、従来上野晴朗が日下部式としてきた(15)土師器の一群の系譜を明確にしてゆきたい。

まず、上野氏の言う日下部式は1949年、1957年の二度の日下部中学校々庭遺跡の調査によって設定され、「奈良時代～平安時代」の長い時間を与えられているが(16)、山本寿々雄、菊島美夫らの努力により国分式に比定され(17)ることが最近の研究で判明してきた。しかし、何らその成果を受け入れることはなく日下部式として存在させている上野氏は、日下部式形式内容の「薄手であり、口縁は玉縁(中略)底面の糸切りはヘラにてカットしており、器面全体にヘラ調整が行なわれているので、国分式に見られるようなロクロ目は見られない。また、しばしば器面に渦状、花卉状のヘラによる篋磨きのあとが見られる。墨書を伴う」としているが、その各点は前記3遺跡の遺物の移り変わりから5時期に分けることができる。この変遷こそ日下部式の内容の不明確さを示す証拠となるであろうし、日下部式が国分式の流れの中でしか扱えられぬことを知ることができる。とりわけ、上野氏が日下部式以降に比定している内面花卉状のヘラ磨き、即ち放射状暗文をもつ一群の杯は、むしろ国分式の前半に属することが明確となった(15)。

#### ○須玉町大豆生田遺跡

この遺跡は中央道須玉インターチェンジ内であって、昭和49年度に調査し未発表であるが、9軒の住居のうち3号と4号住居の重複住居から編年上貴重な資料が得られたので、4号住居、3号住居の順に遺物を説明してゆきたい。

4号住居の出土遺物はカマド南の貯蔵穴、及びその周辺から出土したもので、23は須恵器で全体に直線的な感じを与える。22、24はロクロ横ナデ整形後、内外面ともヘラ磨きをていねいに行ない。最後に内面に放射状暗文が施される。断面は台形で、口縁部先端は尖り、焼成もかたく、粒子も細かい。甕形土器は土師器で口縁が大きく外反し、強い屈曲を示す頸部と肩部の張りがめだつ。胴部は底部にいたるまでほとんど直線的で、真間式に近い特徴をもつ(4)。整形は巻き上げ痕が器面内外に残り、刷毛目が若干施されるものでもある。

3号住居の杯はすべて土師器で、ロクロ横ナデ糸切り底で、胴部下半から底部にかけてヘラ削りを施す13、14と、内面黒色研磨土師器があつて、口唇はいずれもやや外反はするものの玉縁とはならず、胴部器厚と同じか多少膨む程度で、胴部のカーブがそのまま口縁に達しているのを特徴とする。17、18、19の甕形土器は内外面とも刷毛目で整形される。胴部はほとんど膨らまずに頸部で極端に屈曲して外反する。屈曲部内面につまみ出したような陵をもつ。

#### ○小沢町上平出遺跡。

中央道建設予定地内の調査として、昭和48年3月に発掘された遺跡で、7軒の竪穴住居のうち1号住居と5号住居の重複住居址間に見られた土器群の差である(18)。5号住居が1号住居を切り、9号住居を埋めている。

1号住居の遺物はカマド周辺から出土したもので、杯はカマド南側の貯蔵穴から出土している。杯は須恵器が2個、土師器が2個の計4個が出土しており、須恵器杯は胴部にロクロ整形痕が明瞭に認められる。土師器杯はロクロ横ナデ整形後、外面胴部下半から底部のヘラ削りと内面ヘラ磨き後に放射状の暗文がある。甕2個は整形器形が異なり、70は口径と胴部最大径がほとんど同じで、外面ヘラ削りに対し、71は頸部が屈曲し、内外面とも刷毛目整形がある。どちらも器肉が薄い点で共通する。

5号住居は灰釉陶器を伴出する。土師器杯は内面黒色研磨の杯と胴部下半ヘラ削りの杯の2種が見

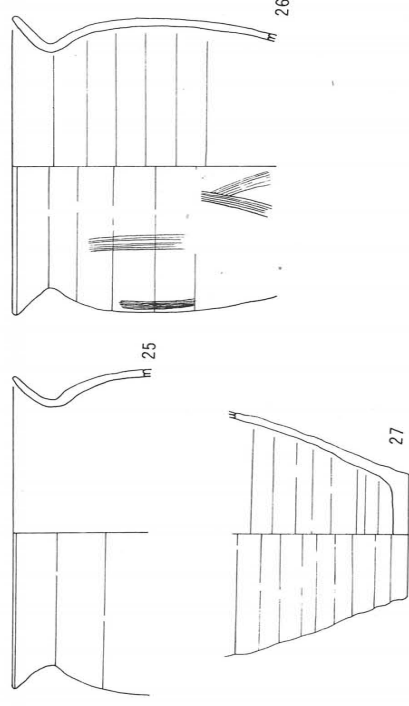
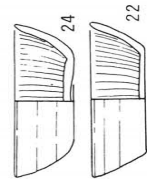
		内 面	外 面	底 部	口 唇	柳 坪 住 居 位 置
1	杯	ロクロ横ナデ へラ横磨き 放射状暗文	ロクロ横ナデ へラ横磨き	糸 切 り (へラ整形)	尖 る  (胴部より薄く)	
II	杯	ロクロ横ナデ へラ横磨き 放射状暗文	ロクロ横ナデ へラ縦磨き	糸 切 り (へラ整形)	丸 い  (胴部厚と同じ)	
III	杯	ロクロ横ナデ 放射状暗文	ロクロ横ナデ へラ縦削り	糸 切 り (へラ整形)	やや外反し 玉縁に近い	18、 17、
	皿	ロクロ横ナデ (へラ磨き)	ロクロ横ナデ へラ横削り	糸 切 り (へラ整形)	やや外反し 玉縁に近い	19、
IV	杯	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ へラ縦削り	糸 切 り (へラ整形)	やや外反し 玉縁に近い	6、 22、
V	杯	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ へラ縦削り	糸 切 り へラ整形	外反・玉縁	5、 8、 2、
	皿	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ へラ縦削り	(糸 切 り) へラ整形	外反・玉縁	9、 21、 25、

第4表 杯 整 形 方 法

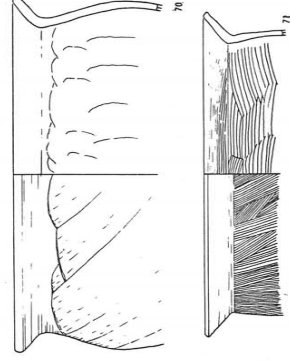
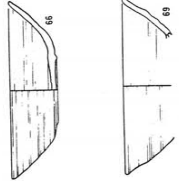
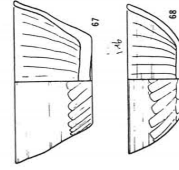
土師器(杯、皿) 須惠器(杯) 灰釉(杯、皿)

土師器、灰釉(甕、他)

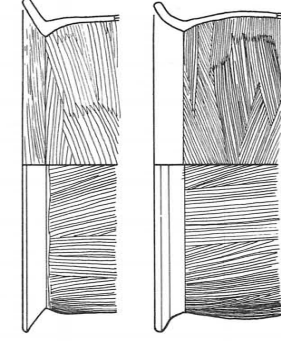
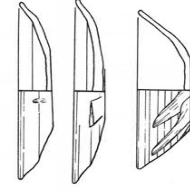
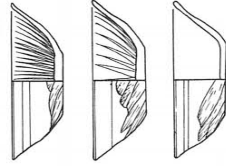
I 期 (大豆生田四号)



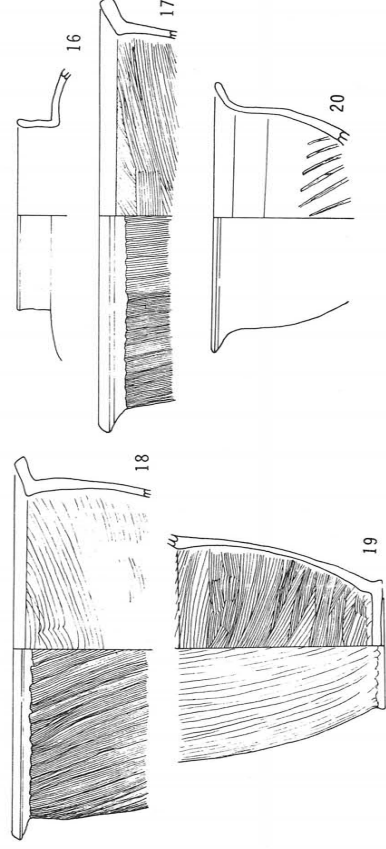
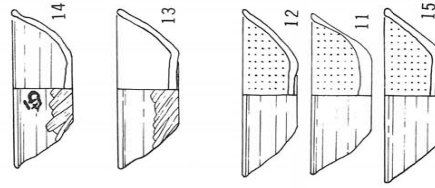
II 期 (上平出一号)



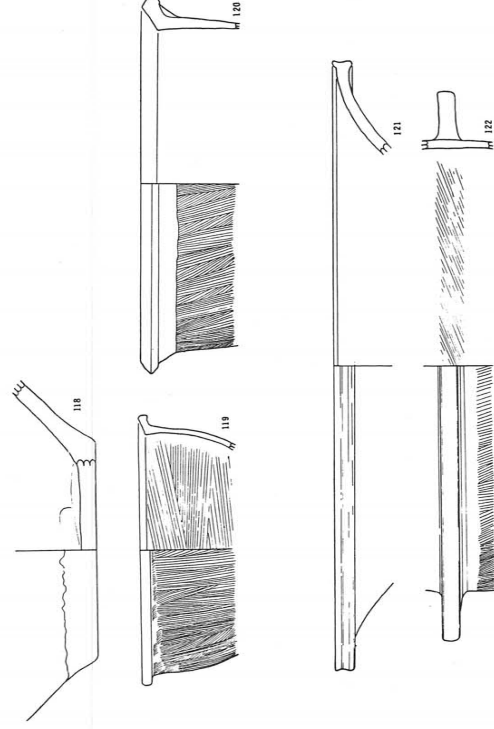
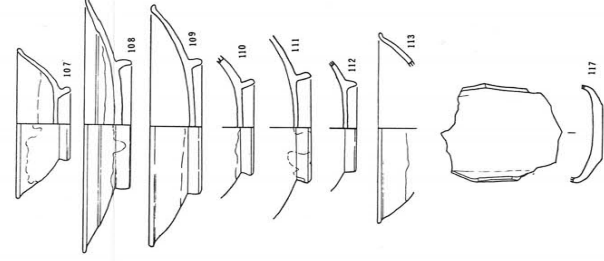
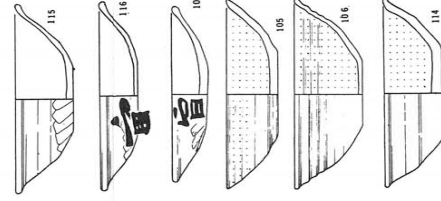
III 期 (上平出六号 重平出六号 重平出六号)



IV 期 (大豆生田三号)



V 期 (上平出五号)



られるが、後者には杯と皿の器形がある。又、甕形土器は口縁部を補強してあるので口縁部が厚く、釜形土器の出土も見られる。

以上、大豆生田遺跡と上平出遺跡の重複住居を概観してきたが、第 204 図を参照するとそれぞれの住居間の遺物が前後の關係に一例に配列されることに気付くであろう。ただし、Ⅲ期として葦崎市清哲遺跡を掲げたが、この他に上平出 4 号住居の出土遺物が相当するであろう。Ⅲ期の器種の特徴は、皿状土器の出現であり、底部及びその周辺を横にへら削りを行ない、器肉を減じている。この皿形土器がⅤ期に現われる玉縁口縁の皿に先行するものであろう。杯、皿の整形方法の変遷は第 4 表に整理される。なお、甕の変遷の概観はⅠ期が真間期の器形に近く、巻き上げ整形痕を明瞭に残すもので、頸部が屈曲し肩が張る。Ⅱ期はⅠ期の甕に近いもので胴部へら削りを行なうものと、頸部が「くの字」に屈曲し、胴部がほとんど膨らまずに底部に達するもので、胴部から口縁部の器厚は全く同じである。胴部内外面には刷毛目が施され、頸部屈曲内面に陵がある。Ⅲ期の甕は頸部が屈曲するものに統一され、内面陵が鋭角に突出するが特徴で、口縁の厚さは胴部よりやや厚い。胴部の膨らみは少ない。Ⅳ期は口縁部が肥厚化傾向を見せ始め、内面頸部の陵はⅢ期と同様に突き出している。Ⅴ期の甕に達すると口縁部が極端に肥厚化し、その上に頸部に補強粘土を貼り付けている。内面陵の突出しは少なくなり、ほとんど垂直に胴部に続く。

以上述べてきたⅠ～Ⅴ期の流れを土師時代晩期に位置付ける場合、Ⅰ期の杯と甕が重要となるであろう。大豆生田 4 号住居出土遺物は真間Ⅱ式との共通点から真間式に続くものとして良い根拠となるであろう(19)。しかし、このⅤ期に含まれる土器群の中の、内面黒色研磨土器の存在が今日の段階では把えきれていない。又、菊島氏が提案している灰釉陶器による編年もまだ充分ではないだろう(17)。

さて、本題である柳坪遺跡の遺物については、第 4 表右側に示した通り位置付けられるが、やや特異な傾向を持つ内面黒色研磨土器群が存在し、それらの黒色土器は現在のところ前記 5 時期の伴出遺物から時期区分をする以外はなく、細分は後日としてゆきたい。

以上が土師式土器の概観であるが、この考察を書くにあたって多くの人々の協力を得たことは勿論特に菊島美夫氏には適切な指導助言をいただいた。

(末木)

(註)

- (1) 1974、山梨県教育委員会「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡小淵沢町地内一」
- (2) 1974年 6 月～7 月に北巨摩郡須玉町大豆生田遺跡を中央道インターチェンジ建設のため山梨県教育委員会が調査を実施し、報告は1976年春に出版予定。
- (3) 1973、杉原荘介、大塚初重「土師式土器集成 1～4」
- (4) 1966～1968、八王子市中田遺跡調査会「八王子中田遺跡Ⅰ～Ⅲ」
- (5) 1967、桐原 健、「海戸Ⅰ」
- (6) 1969年に上野晴朗によって緊急調査が行なわれているが未発表。
- (7) 1958、上野晴朗「山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報」甲斐史学第 7 号
- (8) 1968、山本寿々雄「山梨県の考古学」
- (9) 1974、山梨県教育委員会「京原」
- (10) 1965、志村滝蔵「坂井」
- (11) 1966、藤森栄一「古墳文化の地域的特色一中部高地」日本の考古学Ⅳ  
1974、菊島美夫「甲斐国古墳出土の剣および直刀の消長」甲斐考古11の 2
- (12) 1950、菊島美夫「高根町小池出土の鬼高式土器について」甲斐考古12の 1

この他に東八代郡境川村薊在家遺跡から良好な資料が発見され、萩原三男が(1974「辻遺跡と薊在家遺跡」山梨県教育委員会)で鬼高Ⅱ式と報告している。

- (13) 1966、平安学園考古学クラブ「陶邑Ⅰ」
- (14) 1974、菊島美夫「韮崎市清哲遺跡出土の土師器」甲斐考古11—1
- (15) 上野晴朗「一宮町史」
- (16) 上野晴朗「原之京鍛冶遺跡報告」山梨県教育委員会
- (17) 1968、山本寿々雄「山梨県の考古学」  
1974、菊島美夫「山梨県に於ける晩期土師器編年について」古代甲斐国の考古学調査」山梨県教育委員会  
1973、「山梨県における土師器編年」古代甲斐国埋没条里の研究、山梨県教育委員会
- (18) 5号住居は9号住居を埋め、9号住居は8号住居とほとんど接している。
- (19) (4)と同様
- (20) 1974、上野晴朗「町の歴史」甲西町誌

\* お わ り に \*

昭和48年度の韮崎～小淵沢間の中央道関係埋蔵文化財発掘調査は梅雨の6月に下フノリ平を振り出し、翌年3月末に三百水の調査を終了するという長い道程であった。当初には10ヶ所の遺跡を1班で駆足調査しながら長坂町の北から韮崎市の南まで終了する予定であったが、柳坪遺跡が7月から9月末の3ヶ月間、頭無遺跡が10、11月の丸2ヶ月間と、夏から冬まで釘付けにされ、総計60軒の住居址及び包含層の精査に追われている中で、第2班が明野村早道場遺跡と西田遺跡の調査を順調に終わらせた。第2班の担当者、飯島進氏及び調査員の菊島美夫、森本圭一、山崎金夫各氏を始め都留文化大学補助調査員諸氏の苦労も空しく、遺構としては溝状遺跡が検出されただけで、遺物散布地と認識された早道場、西田両遺跡は、この地域の基礎資料として重要視しておかなければならないであろう。特に官牧として大規模な穂坂牧の関連を追求する上で今後の課題を含むものである。

柳坪A、B遺跡、頭無遺跡は前記した遺構に伴出して、縄文時代から平安時代に至る豊富な遺物が出土しており、旧来不明確であった中部地方と関東、東海地方の文化的繋りの解明に貢献すること大であると信じるが、遺物整理期間が短く、持ち帰った遺物を残らず報告することはできなかつたし、必要でも図示することのできなかつた遺物もある。又、遺物の分類、型式についてや集落構造について検討することも不十分であった。遺物の出土位置図をできる限り挿図としたが、遺物のレベルや土層についても説明不足という不満足な報告書となっているが、諸事情を理解していただき最大限に活用していただきたい。

考古学は数千年の眠りから原始古代の遺構遺物を現在の光の中に引き出す作業を黙々と行なっているが、それだけであってはならないであろう。過去とは今日を規制しているところの大部分であり、特に原始、古代とは人間のより根源的な本能や無意識に行なわれる習慣を形づくった意識で、進歩するために解かねばならない、すぐれて今日的な学問として存在しなければならない。分類のための分類、趣味の土器遊びから脱脚しつつある学会の動向をふまえて、調査の成果を県内に於てより一般化してゆきたいものである。

今回の調査にあたって下記の方々の過分な協力を得た。日本道路公団東京建設局の宮崎、宗氏、甲府工事事務所の所長を始め山崎工事長、庶務課長各氏には無理な我儘を通していただいたり、長坂町教育委員会の浅川氏、明野村教育委員会の清水氏、韮崎市の雨宮氏などには職務をこえて協力していただいた。又、地元区長各氏には作業員の手配や支払の手伝いをしていただいた。

この他に来跡され、調査の相談にのっていただいた井出佐重、戸沢充則、武藤雄六、堀越正行、長崎元広等の各氏に深く感謝している。

図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	出土 No.	図No.	出土 No.
柳坪A 1号住居	埋ガメ	6	po. - 2	3 9	S. - 7	4	po. - 1	2 3	S. - 40	6	11号土坑po-1	2 7	I. - 2	1	po. - 13	
		7	po. - 6	4 0	7 7 土	5	po. - 6	2 4	S. - 88	7	12号土坑po-1	2 8	1F S. - 1	2	po. - 3	
		8	po. - 33	4 1	7 7 土	6	7 7 土	2 5	S. - 101	8	12号土坑	2 9	H-2 S. - 3	3	po. - 6	
		9	7 7 土	4 2	S. - 4	7	po. - 3	2 6	S. - 94	9	2号、12号土坑	3 0	I. - 1	4	po. - 1	
		1 0	po. - 1	4 3	7 7 土	8	7 7 土	2 7	S. - 75	1 0	12号土坑	3 1	A. - 6	5	po. - 4	
		1 1	po. - 16	柳坪A 4号住居	柳坪A 4号住居	9	7 7 土	2 8	S. - 120	1 1	13号土坑	3 2	I-2 S. - 5	6	po. - 2	
		1 2	po. - 18			1 0	S. - 1	柳坪A 10号住居	柳坪A 10号住居	柳坪A Gnid		3 3	3H 墓内	7	po. - 11	
		1 3	po. - 22	2	po. - 8	1 1	7 7 土	1	po. - 9	J. - 2	1	3 4	7H S. - 2	柳坪A 9号住居		
		1 4	po. - 26	3	po. - 12	1 2	7 7 土	2	po. - 3	J. - 1	2	3 5	E. - 8	1	po. - 7	
		1 5	po. - 13	4	po. - 4	1 3		3	7 7 土	A. - 6	3	3 6	3H S. - 2	2	po. - 97, 99	
1 0	po. - 8	1 6	po. - 9	5	7 7 土	柳坪A 8号住居		4	po. - 11	I. - 5	4	3 7	16Y S. - 3	3	po. - 66	
1 1	炉内	1 7	po. - 14	6	po. - 7			5	po. - 13	I. - 5	5	3 8	71H S. - 3	4	po. - 99	
1 2	7 7 土	1 8	po. - 10	7	po. - 10	1	po. - 9	6	po. - 5	H. - 2	6	3 9	表 採	5	po. - 1	
1 3	po. - 30	1 9	po. - 17	8	po. - 11	3	po. - 5	7	po. - 30	H. - 9	7	4 0	11H S. - 4	6	po. - 32カマ内	
1 4	7 7 土	2 0	po. - 8	9	S. - 9	4	po. - 2	8	po. - 10	F. - 5	8	4 1	11H S. - 2	7	po. - 13	
1 5	po. - 29	2 1	7 7 土	1 0	S. - 2	5	po. - 14	9	po. - 2	F. - 5	9	4 2	11H S. - 1	8	po. - 36	
1 6	po. - 19	2 2	po. - 3	1 1	S. - 7	6	7 7 土	1 0	po. - 4	F. - 5	1 0	柳坪A 16号住居		9	po. - 101	
1 7	po. - 37	2 3	po. - 31	1 2	S. - 6	7	po. - 6	1 1	po. - 7	H. - 2	1 1		1	1 0	po. - 83(88, 89)	
1 8	7 7 土	2 4	po. - 21	1 3	S. - 1	8	po. - 7	1 2	po. - 62	I-2 po. - 17	2	2	po. - 2	1 1	po. - 2	
1 9	po. - 12	2 5	po. - 4	1 4	S. - 4	9	po. - 19	1 3	7 7 土	H. - 2	3	3	po. - 10	1 2	po. - 16	
2 0	po. - 28	2 6	po. - 24	1 5	S. - 5	1 0	7 7 土	1 4	S. - 8	I. - 4	4	4	po. - 8	1 3	po. - 96	
2 1	po. - 6	2 7	po. - 25	1 6	S. - 11	1 1	po. - 23	1 5	S. - 7	I. - 4	5	5	po. - 9a	1 4	po. - 17	
2-2	7 7 土	2 8	po. - 20	1 7	7 7 土	1 2	po. - 12	1 6	S. - 1	G. - 2	6	6	7 7 土	1 5	po. - 35	
2 3	7 7 土	2 9	po. - 36	1 8	S. - 17	1 3	po. - 8	1 7	S. - 5	16-Y S. - 1			po. - 1	1 6	po. - 16	
2 4	S - 11	3 0	po. - 32	1 9	S. - 3	1 4	po. - 21	柳坪A 15号住居	15号住居	9 HS. - 77	1 8	9 HS. - 77	po. - 9b	1 7	po. - 82	
2 5	7 7 土	3 1	S. - 2	2 0	7 7 土	1 5	po. - 15	1	埋ガメ	J. - 7	1 9	J. - 7	柳坪A 3号住居	1 8	po. - 1カマ内a	
2 6	7 7 土	3 2	S. - 5	2 1	S. - 12	1 6	po. - 3	2	7 7 土	16Y S. - 4	2 0	16Y S. - 4	1	7 7 土	1 9	po. - 1カマ内b
柳坪A 2号住居		3 3	7 7 土	2 2	S. - 8	1 7	pit 内	柳坪A 土坑	土坑	J. - 34	2 1	J. - 34	2	7 7 土	2 0	po. - 58
1	埋ガメ	3 4	S. - 10	2 3	S. - 13	1 8	S. - 63	1	1号土坑po-3	H - 14 S - 22	2 2	H - 14 S - 22	3	7 7 土	2 1	po. - 37
2	po. - 12	3 5	S. - 3	柳坪A 6号住居	柳坪A 6号住居	1 9	S. - 1	2	1号土坑	A-3 S-1	2 3	A-3 S-1	4	7 7 土	2 2	po. - 50
3	po. - 5	3 6	S. - 9	1	po. - 2	2 0	S. - 17	3	2号土坑	9H S-15	2 4	9H S-15	5	7 7 土	2 3	po. - 40
4	po. - 7	3 7	S. - 1	2	po. - 3	2 1	S. - 80	4	9号土坑S-2	F. - 4	2 5	F. - 4	6	7 7 土	2 4	po. - 30
5	po. - 35	3 8	S. - 6	3	po. - 10	2 2	S. - 37	5	9号土坑	7H S-7	2 6	7H S-7	柳坪A 7号住	柳坪A 11号住居		

図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.				
柳坪B1号住居	1 7	S. - 1	1 0	po. - 27, 43	4 3	7 7	土	柳坪B1号住居	1 7	S. - 1	1 0	po. - 27, 43	4 3	7 7	土		
1	po. - 11	1 8	S. - 25	1 1	po. - 62	4 4	7 7	土	1	po. - 11	1 8	S. - 25	1 1	po. - 62	4 4	7 7	土
2	po. - 5	1 9	S. - 17	1 2	po. - 4	4 5	7 7	土	2	po. - 5	1 9	S. - 17	1 2	po. - 4	4 5	7 7	土
3	po. - 6	2 0	S. - 34	1 3	po. - 17	4 6	7 7	土	3	po. - 6	2 0	S. - 34	1 3	po. - 17	4 6	7 7	土
4	po. - 8	2 1	7 7	1 4	7 7	4 7	S. - 5	土	4	po. - 8	2 1	7 7	1 4	7 7	4 7	S. - 5	土
5	po. - 12	2 2	7 7	1 5	po. - 3	4 8	S. - 14	土	5	po. - 12	2 2	7 7	1 5	po. - 3	4 8	S. - 14	土
6	7 7	柳坪B7号住居	1 6	po. - 70	4 9	S-10.50p-83		土	6	7 7	柳坪B7号住居	1 6	po. - 70	4 9	S-10.50p-83		土
7	po. - 14	1	埋	1 7	po. - 113	柳坪B11号住居		土	7	po. - 14	1	埋	1 7	po. - 113	柳坪B11号住居		土
8	7 7	2	po. - 5	1 8	po. - 64, 77, 81, 83	1 1	po. - 9	土	8	7 7	2	po. - 5	1 8	po. - 64, 77, 81, 83	1 1	po. - 9	土
9	po. - 3	3	po. - 6	1 0	po. - 56	2 2	po. - 8	土	9	po. - 3	3	po. - 6	1 0	po. - 56	2 2	po. - 8	土
10	S. - 6	4	po. - 16	2 0	po. - 69	3 3	po. - 5	土	10	S. - 6	4	po. - 16	2 0	po. - 69	3 3	po. - 5	土
11	S. - 39	5	po. - 7	2 1	po. - 49	4 4	po. - 1	土	11	S. - 39	5	po. - 7	2 1	po. - 49	4 4	po. - 1	土
12	S. - 314	6	po. - 14	2 2	po. - 36	5 5	po. - 3	土	12	S. - 314	6	po. - 14	2 2	po. - 36	5 5	po. - 3	土
13	S. - 40	7	po. - 43	2 3	po. - 43	6 6	po. - 12	土	13	S. - 40	7	po. - 43	2 3	po. - 43	6 6	po. - 12	土
14	S. - 20	8	po. - 22	2 4	po. - 21	7	S. - 2:1	土	14	S. - 20	8	po. - 22	2 4	po. - 21	7	S. - 2:1	土
15	S. - 1	9	po. - 12	2 5	po. - 29	8	S. - 2:2	土	15	S. - 1	9	po. - 12	2 5	po. - 29	8	S. - 2:2	土
柳坪B3号住居	1 0	po. - 3	2 6	po. - 18	9	S. - 1		土	柳坪B3号住居	1 0	po. - 3	2 6	po. - 18	9	S. - 1		土
1	1 1	po. - 24	2 7	po. - 95	1 0	S. - 4		土	1	1 1	po. - 24	2 7	po. - 95	1 0	S. - 4		土
2	po. - 31	1 2	7 7	2 8	po. - 11	1 1	S. - 5	土	2	po. - 31	1 2	7 7	2 8	po. - 11	1 1	S. - 5	土
3	po. - 43	1 3	S. - 51	2 9	po. - 32	1 2	S. - 7	土	3	po. - 43	1 3	S. - 51	2 9	po. - 32	1 2	S. - 7	土
4	po. - 4	1 4	S. - 56	3 0	po. - 95	1 3	S. - 6	土	4	po. - 4	1 4	S. - 56	3 0	po. - 95	1 3	S. - 6	土
5	po. - 82	1 5	S. - 23	3 1	7 7	土		土	5	po. - 82	1 5	S. - 23	3 1	7 7	土		土
6	po. - 15	1 6	S. - 24	3 2	7 7	土		土	6	po. - 15	1 6	S. - 24	3 2	7 7	土		土
7	po. - 20	柳坪B70号住居	3 3	po. - 108	2	po. - 5		土	7	po. - 20	柳坪B70号住居	3 3	po. - 108	2	po. - 5		土
8	7 7	1	埋	3 4	S. - 8	3	S. - 13	土	8	7 7	1	埋	3 4	S. - 8	3	S. - 13	土
9	po. - 16	2	po. X 1	3 5	S. - 9	柳坪B13号住居		土	9	po. - 16	2	po. X 1	3 5	S. - 9	柳坪B13号住居		土
10	po. - 33	3	po. - 2	3 6	S. - 15	1	po. - 7	土	10	po. - 33	3	po. - 2	3 6	S. - 15	1	po. - 7	土
11	po. - 30	4	po. - 6	3 7	S. - 4	2	7 7	土	11	po. - 30	4	po. - 6	3 7	S. - 4	2	7 7	土
12	7 7	5	po. - 13	3 8	S. - 6	3	po. - 6	土	12	7 7	5	po. - 13	3 8	S. - 6	3	po. - 6	土
13	7 7	6	po. - 14	3 9	S. - 2	4	po. - 4	土	13	7 7	6	po. - 14	3 9	S. - 2	4	po. - 4	土
14		7	po. - 117	4 0	S. - 13	5	po. - 8	土	14		7	po. - 117	4 0	S. - 13	5	po. - 8	土
15	ベルト内	8	po. - 12	4 1	S. - 11	6	po. - 1	土	15	ベルト内	8	po. - 12	4 1	S. - 11	6	po. - 1	土
16	S. - 14	9	po. - 16.49	4 2	S. - 1	7	S. - 7	土	16	S. - 14	9	po. - 16.49	4 2	S. - 1	7	S. - 7	土

図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.
1	po. - 4												
2	カマド内												
3	po. - 5												
4	7 7												
5	カマド内												
6	po. - 1												
7	po. - 7												
8	po. - 2												
柳坪A12号住居													
1	マカ玉												
2	fe. - 2												
柳坪A13号住居													
1	カマド内												
2	po. - 3カマド内												
3	po. - 6												
柳坪A14号住居													
1	カマド近辺												
2	po. - 3												
3	7 7												
4	po. - 1												
5	po. - 5												
6	po. - 6												
7	po. - 8												
8	po. - 2												
9	po. - 7												
10	po. - 11												
11	po. - 4												
12	S. - 3												
13	白玉												
14	小玉底面												



図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.
8	S. - 8	1 0	po. - 60	5	po. - 721	1 1	po. - 36	1 3	7 ク 土	2	po. - 2		
柳坪B 14号住居		1 1	po. - 8	6	po. - 20	1 2	po. - 34	1 4	po. - 8	3	po. - 4		
1	po. 1 ヲガ	1 2	7 ク 土	7	po. - 13	柳坪B 5号住居		1 5	S. - 1	4	po. - 9, 24		
2	S. - 1	1 3	po. - 124	8	po. - 101	1	po. - 7	1 6	F. - 1	5	po. - 11		
3	S. - 6	1 4	7 ク 土	9	po. - 2	2	po. - 6	1 7	F. - 1	6	po. - 8		
柳坪B 15号住居		1 5	7 ク 土	1 0	S. - 3	3	po. - 8	1 8	F. - 3	7	po. - 1		
1	po. - 46	1 6	po. - 102	1 1	S. - 5	4	po. - 9	柳坪B 9号住居		8	Fe. - 1		
2	po. - 2	1 7	po. - 69	1 2	7 ク 土	5	po. - 2, 4	1	po. - 1	柳坪B 20号住居			
3	po. - 1	1 8	po. - 63	1 3	S. - 2	6	po. - 24	2	po. - 2	1	po. - 5		
4	po. - 5	1 9	po. - 141	1 4	S. - 1	7	po. - 3	3	po. - 4	2	po. - 6		
5	po. - 16	2 0	po. - 3	柳坪B 3号土壇		8	po. - 5	4	po. - 7	3	S. - 6		
6	po. - 7	2 1	S. - 1	1	po. - 1, 8, 14, 24, 26, 33, 10	柳坪B 6号住居		5	po. - 5	柳坪B 21号住居			
7	po. - 14	2 2	S. - 32	2	po. - 11, 12	1	po. - 11	柳坪B 18号住居		1	po. - 7 ~ 2, 10		
8	po. - 3	2 3	S. - 28	3	po. - 5, 6, 7, 8	2	po. - 8	1	po. - 2	2	po. - 7 ~ 3		
9	po. - 15	2 4	S. - 35	4	7 ク 土	3	カマド内	2	カマド内	3	po. - 11		
1 0	po. - 19	2 5	S. - 14	柳坪B Gnid		4	po. - 4	3	po. - 1	4	po. 9 ~ 1		
1 1	po. - 6	2 6	S. - 1	1	18H. S. - 1	5	カマド内	4	カマド内	5	po. - 6		
1 2	S. - 1	2 7	S. - 5	2	E-7 Gnid	6	カマド内	5	po. - 3	6	po. - 3		
1 3	S. - 3	2 8	S. - 3	3	F-3 Gnid	7	po. - 6	柳坪B 17号住居		7	po. - 4, 18		
1 4	S. - 6	2 9	S. - 2	4	F-3 Gnid	8	po. - 1	1	po. - 28	8	po. - 1, 2, 5, 12, 16		
1 5	S. - 5	柳坪B 23号住居		5	D-41 Gnid	柳坪B 8号住居		2	po. - 14	柳坪B 22号住居			
1 6	S. - 7	1	埋 ガ ヌ	6	E-70 Gnid	1	po. - 20	3	po. - 25	1	po. - 44		
1 7	S. - 2	2	po. - 8 埋ガ ヌ	柳坪B 2号住居		2	po. - 13	4	po. - 3	2	po. - 50		
柳坪B 16号住居		3	po. - 1	1	po. - 110	3	po. - 5	5	po. - 7	3	po. - 45		
1	埋 ガ ヌ	4	po. - 3	2	po. - 17	4	po. - 4	6	po. - 1, 2	4	po. - 46		
2	po. - 2	5	S. - 2	3	po. - 100	5	7 ク 土	7	po. - 11, 1	柳坪B 25号住居			
3	po. - 121	6	S. - 1	4	po. - 6	6	po. - 11	8	po. - 19	1	po. - 4		
4	po. - 137	7	S. - 3	5	po. - 143	7	po. - 10	9	カマド内	2	po. - 14		
5	po. - 1	柳坪B 26号住居		6	po. - 112	8	po. - 1	1 0	po. - 20	3	po. - 19		
6	po. - 91	1	po. - 13	7	po. - 43, 55, 125	9	po. - 6	1 1	カマド内	4	po. - 18		
7	po. - 6	2	po. - 19	8	po. - 80, 105, 144	1 0	カマド内	1 2	po. - 5	5	7 ク 土		
8	po. - 56	3	po. - 21	9	po. - 42, 75, 79, 99, 114, 128	1 1	po. - 4	柳坪B 19号住居					
9	po-62, 131, 133	4	po. - 8	1 0	po. - 46	1 2	po. - 21	1	po. - 15				

図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.
8	S. - 8	1 0	po. - 60	5	po. - 721	1 1	po. - 36	1 3	7 ク 土	2	po. - 2		
柳坪B 14号住居		1 1	po. - 8	6	po. - 20	1 2	po. - 34	1 4	po. - 8	3	po. - 4		
1	po. 1 ヲガ	1 2	7 ク 土	7	po. - 13	柳坪B 5号住居		1 5	S. - 1	4	po. - 9, 24		
2	S. - 1	1 3	po. - 124	8	po. - 101	1	po. - 7	1 6	F. - 1	5	po. - 11		
3	S. - 6	1 4	7 ク 土	9	po. - 2	2	po. - 6	1 7	F. - 1	6	po. - 8		
柳坪B 15号住居		1 5	7 ク 土	1 0	S. - 3	3	po. - 8	1 8	F. - 3	7	po. - 1		
1	po. - 46	1 6	po. - 102	1 1	S. - 5	4	po. - 9	柳坪B 9号住居		8	Fe. - 1		
2	po. - 2	1 7	po. - 69	1 2	7 ク 土	5	po. - 2, 4	1	po. - 1	柳坪B 20号住居			
3	po. - 1	1 8	po. - 63	1 3	S. - 2	6	po. - 24	2	po. - 2	1	po. - 5		
4	po. - 5	1 9	po. - 141	1 4	S. - 1	7	po. - 3	3	po. - 4	2	po. - 6		
5	po. - 16	2 0	po. - 3	柳坪B 3号土壇		8	po. - 5	4	po. - 7	3	S. - 6		
6	po. - 7	2 1	S. - 1	1	po. - 1, 8, 14, 24, 26, 33, 10	柳坪B 6号住居		5	po. - 5	柳坪B 21号住居			
7	po. - 14	2 2	S. - 32	2	po. - 11, 12	1	po. - 11	柳坪B 18号住居		1	po. - 7 ~ 2, 10		
8	po. - 3	2 3	S. - 28	3	po. - 5, 6, 7, 8	2	po. - 8	1	po. - 2	2	po. - 7 ~ 3		
9	po. - 15	2 4	S. - 35	4	7 ク 土	3	カマド内	2	カマド内	3	po. - 11		
1 0	po. - 19	2 5	S. - 14	柳坪B Gnid		4	po. - 4	3	po. - 1	4	po. 9 ~ 1		
1 1	po. - 6	2 6	S. - 1	1	18H. S. - 1	5	カマド内	4	カマド内	5	po. - 6		
1 2	S. - 1	2 7	S. - 5	2	E-7 Gnid	6	カマド内	5	po. - 3	6	po. - 3		
1 3	S. - 3	2 8	S. - 3	3	F-3 Gnid	7	po. - 6	柳坪B 17号住居		7	po. - 4, 18		
1 4	S. - 6	2 9	S. - 2	4	F-3 Gnid	8	po. - 1	1	po. - 28	8	po. - 1, 2, 5, 12, 16		
1 5	S. - 5	柳坪B 23号住居		5	D-41 Gnid	柳坪B 8号住居		2	po. - 14	柳坪B 22号住居			
1 6	S. - 7	1	埋 ガ ヌ	6	E-70 Gnid	1	po. - 20	3	po. - 25	1	po. - 44		
1 7	S. - 2	2	po. - 8 埋ガ ヌ	柳坪B 2号住居		2	po. - 13	4	po. - 3	2	po. - 50		
柳坪B 16号住居		3	po. - 1	1	po. - 110	3	po. - 5	5	po. - 7	3	po. - 45		
1	埋 ガ ヌ	4	po. - 3	2	po. - 17	4	po. - 4	6	po. - 1, 2	4	po. - 46		
2	po. - 2	5	S. - 2	3	po. - 100	5	7 ク 土	7	po. - 11, 1	柳坪B 25号住居			
3	po. - 121	6	S. - 1	4	po. - 6	6	po. - 11	8	po. - 19	1	po. - 4		
4	po. - 137	7	S. - 3	5	po. - 143	7	po. - 10	9	カマド内	2	po. - 14		
5	po. - 1	柳坪B 26号住居		6	po. - 112	8	po. - 1	1 0	po. - 20	3	po. - 19		
6	po. - 91	1	po. - 13	7	po. - 43, 55, 125	9	po. - 6	1 1	カマド内	4	po. - 18		
7	po. - 6	2	po. - 19	8	po. - 80, 105, 144	1 0	カマド内	1 2	po. - 5	5	7 ク 土		
8	po. - 56	3	po. - 21	9	po. - 42, 75, 79, 99, 114, 128	1 1	po. - 4	柳坪B 19号住居					
9	po-62, 131, 133	4	po. - 8	1 0	po. - 46	1 2	po. - 21	1	po. - 15				

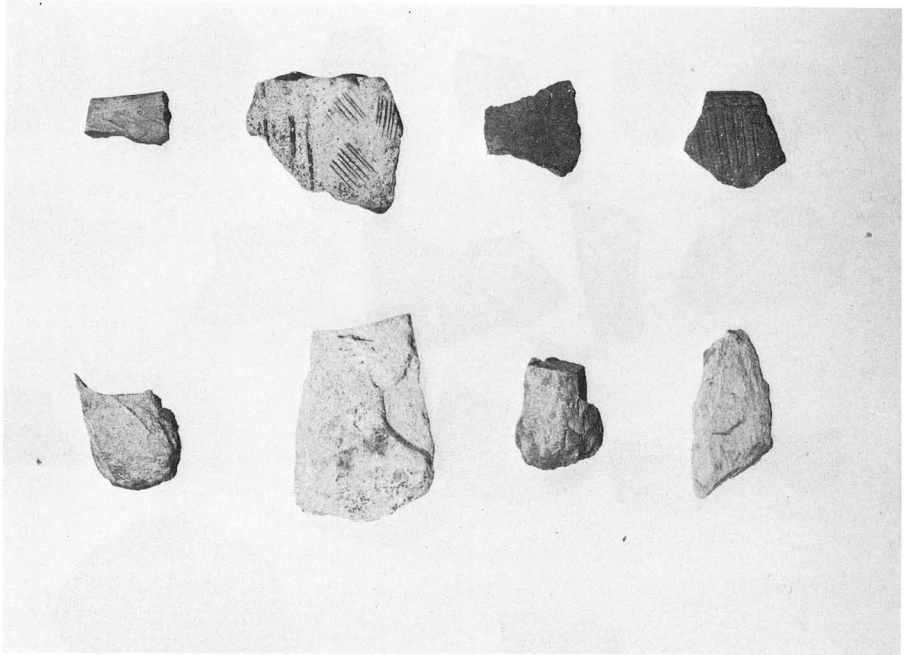
図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.
6 5	S. - 2	5	po. - 15	4	po. - 27, 39, 48 51, 147, 148, 149	3 7	po. - 123				
6 6	S. - 6	6	po. - 40	5	po. - 12	3 8	po. - 116				
6 7	S. - 64	7	po. - 24	6	po. - 4	3 9	po. - 45				
6 8	S. - 87	8	po. - 13	7	po. - 7	3 0	po. - 114				
6 9	S. - 38	9	po. - 18	8	po. - 131	4 1	po. - 103				
7 0	S. - 178	1 0	po. - 28	9	po. - 130	4 2	po. - 121				
7 1	S. - 102	1 1	po. - 27	1 0	po. - 118	4 3	po. - 112				
7 2	S. - 4	1 2	po. - 4	1 1	po. - 5	4 4	炉 内				
7 3	7 7 土	1 3	po. - 2@	1 2	po. - 27115	4 5	S. - 1				
頭無	5 号住居	1 4	po. - 43	1 3	po. - 9	4 6	S. - 4				
1	po. - 埋ガメ	1 5	po. - 11	1 4	po. - 14	4 7	7 7 土				
2	po. - 15	1 6	po. - 12	1 5	po. - 50	4 8	S. - 12				
3	po. - 11	1 7	po. - 9	1 6	po. - 13	4 9	7 7 土				
4	po. - 19	1 8	po. - 10	1 7	浅バチ	5 0	S. - 3				
5	po. - 9	1 9	po. - 35	1 8	po. - 8	5 1	S. - 6				
6	7 7 土	2 0	S. - 46	1 9	po. - 31	5 2	S. - 7				
7	po. - 17	2 1	S. - 32	2 0	po. - 52	5 3	S. - 5				
8	S. - 12	2 2	S. - 33	2 1	po. - 33	5 4	S. - 25				
9	S. - 4	2 3	S. - 25	2 2	po. - 113	5 5	S. - 16				
1 0	埋ガメ内	2 4	S. - 45	2 3	po. - 101	5 6	S. - 28				
1 1	S. - 6	2 5	S. - 59	2 4	po. - 33	5 7	S. - 17				
1 2	炉 内	2 6	S. - 30	2 5	po. - 16	5 8	S. - 21				
1 3	S. - 11	2 7	S. - 25	2 6	po. - 141	5 9	S. - 35				
1 4	S. - 5	2 8	S. - 13	2 7	po. - 164	6 0	S. - 31				
1 5	S. - 7	2 9	S. - 48	2 8	po. - 142	6 1	S. - 23				
1 6	S. - 3	3 0	S. - 63	2 9	po. - 128	6 2	S. - 18				
1 7	7 7 土	3 1	S. - 49	3 0	po. - 44	6 3	7 7 土				
1 8	S. - 2	3 2	S. - 47	3 1	po. - 132	6 4	S. - 20				
頭無	6 号住居	3 3		3 2	po. - 24	6 5	炉 内				
1	埋ガメ	頭無	7 号住居	3 3	7 7 土	6 6	S. - 24				
2	po. - 20, 33	1	po. - 107, 117	3 4	po. - 32	6 7	S. - 27				
3	po. - 25	2	po. - 117, 118	3 5	po. - 145	6 8	S. - 9				
4	po. - 14	3	po. - 1	3 6	po. - 92	6 9	7 7 土				

図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.
頭無	1 号住居	頭無	2 号住居	8	S. - 63	3 2	po. - 52
1	po. - 26, 28, 9	1	po. - 4埋ガメ	頭無	4 号住居	3 3	po. - 56
2	7 7 土	2	po. - 28	1	埋ガメ	3 4	po. - 42
3	po. - 3, 5	3	po. - 1	2	po. - 1	3 5	S. - 84
4	po. - 1	4	po. - 2	3	po. - 14	3 6	S. - 1
5	po. - 4	5	po. - 6	4	po. - 38	3 7	S. - 119
6	po. - 17	6	po. - 24	5	po. - 9	3 8	S. - 116
7	po. - 12	7	po. - 9	6	po. - 11, 13	3 9	S. - 99
8	po. - 28	8	po. - 25	7	7 7 土	4 0	べ ル ト
9	po. - 41	9	po. - 29	8		4 1	S. - 8
1 0	po. - 20	1 0	po. - 7	9		4 2	S. - 91
1 1	po. - 44	1 1	po. - 3	1 0	po. - 6	4 3	べ ル ト
1 2	7 7 土	1 2	po. - 14	1 1	7 7 土	4 4	7 7 土
1 3	po. - 14	1 3	po. - 11	1 2	po. - 50	4 5	S. - 92
1 4	7 7 土	1 4	po. - 9	1 3	po. - 40	4 6	S. - 85
1 5	po. - 7	1 5	po. - 5	1 4	po. - 43	4 7	S. - 24
1 6	po. - 2	1 6	po. - 28	1 5	po. - 45	4 8	S. - 46
1 7	po. - 31	1 7	po. - 30	1 6	7 7 土	4 9	S. - 37
1 8	po. - 6	1 8	po. - 18	1 7	po. - 54	5 0	7 7 土
1 9	po. - 11	1 9	S. - 61	1 8	po. - 31	5 1	S. - 10
2 0	7 7 土	2 0	S. - 59	1 9	po. - 3	5 2	べ ル ト
2 1	S. - 14	2 1	S. - 62	2 0	po. - 2	5 3	S. - 117
2 2	S. - 11	2 2	S. - 60	2 1	po. 41 (b)	5 4	S. - 27
2 3	S. - 43	2 3	S. - 54	2 2	po. - 25	5 5	S. - 97
2 4	S. - 18	2 4	S. - 10	2 3	7 7 土	5 6	S. - 9
2 5	S. - 13	頭無	3 号住居	2 4	po. - 8	5 7	S. - 3
2 6	S. - 10	1	埋ガメ	2 5	po. - 37	5 8	ド 8
2 7	S. - 60	2	po. - 5	2 6	po. - 7	5 9	S. - 5
2 8	S. - 25	3	po. - 6	2 7	po. - 36	6 0	S. - 100
2 9	S. - 20	4	po. - 2	2 8	po. - 5	6 1	S. - 40
3 0	7 7 土	5	po. - 4	2 9	po. - 41 (a)	6 2	S. - 32
3 1	S. - 57	6	7 7 土	3 0	po. - 15	6 3	S. - 82
3 2	S. - 17	7	7 7 土	3 1	po. - 49	6 4	S. - 88

図No.	出土No.	団No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	図No.	出土No.	出 土 No.	出 土 No.	出 土 No.
6 0	S. -10	2 9	S. -6	1 6	po. -90	5	po. -16					
6 1	S. -35	3 0	S. -90	1 7	po. -10	6	po. -22					
6 2	S. -84	3 1	7 7 土	1 8	po. -6	7	po. -30					
6 3	S. -95	3 2	S. -86	1 9	po. -21	8	po. -33					
頭無 11号住居		3 3	7 7 土	2 0	7 7 土	9	po. -4					
1	po. -48	3 4	7 7 土	2 1	po. -28	1 0	po. -39~1					
2	po. -11	3 5	S. -4	2 2	po. -78	1 1	po. -15					
3	po. -70	3 6	S. -1	2 3	S. -62	1 2	po. -35					
4	po. -67	3 7	7 7 土	2 4	S. -12	1 3	po. -38 土偶					
5	7 7 土	3 8	7 7 土	2 5	S. -6	1 4	po. -1 土偶					
6	po. -1	3 9	S. -29 整石	2 6	S. -16	1 5	7 7 土					
7	po. -21	4 0	S. -101	2 7	S. -10	1 6	7 7 土					
8	po. -12	4 1	S. -3 整石	2 8	S. -18	1 7	S. -30					
9	7 7 土	4 2	S. -2 整石	2 9	S. -11	1 8	7 7 土					
1 0	po. -14	4 3	S. -9 整石	3 0	S. -15	1 9	7 7 土					
1 1	po. -23	4 4	S. -27 整石	3 1	S. -1	2 0	S. -81					
1 2	7 7 土	4 5	S. -75	3 2	7 7 土	2 1	7 7 土					
1 3	po. -33	頭無 12号住居		3 3	S. -17	2 2	S. -57					
1 4	7 7 土	1	po. -4 埋方	3 4	S. -9	2 3	S. -101					
1 5	po. -75	2	po. -48	3 5	S. -5	2 4	S. -50					
1 6	po. -10	3	po. -2,30	3 6	S. -3	2 5	7 7 土					
1 7	po. -52	4	po. -3 炉内	3 7	7 7 土	2 6	S. -82					
1 8	7 7 土	5	po. -1	3 8	S. -4	2 7	S. -86					
1 9	po. -51	6	po. -95	3 9	S. -14	2 8	S. -85					
2 0	S. -85	7	7 7 土	4 0	7 7 土	2 9	S. -61					
2 1	S. -19	8	po. -72	4 1	S. -7	3 0	S. -89					
2 2	S. -147	9	po. -30	4 2	S. -13	3 1	7 7 土					
2 3	S. -87	1 0	po. -75	4 3	S. -8	3 2	S. -98					
2 4	S. -94	1 1	po. -36	頭無 14号住居		3 3	S. -2					
2 5	S. -97	1 2	po. -89	1	po. -23	3 4	7 7 土					
2 6	S. -85	1 3	po. -29	2	po. -39~1	3 5	7 7 土					
2 7	S. -163	1 4	po. -29	3	7 7 土	3 6	S. -74					
2 8	S. -05	1 5	po. -2	4	po. -32	3 7	S. -52					

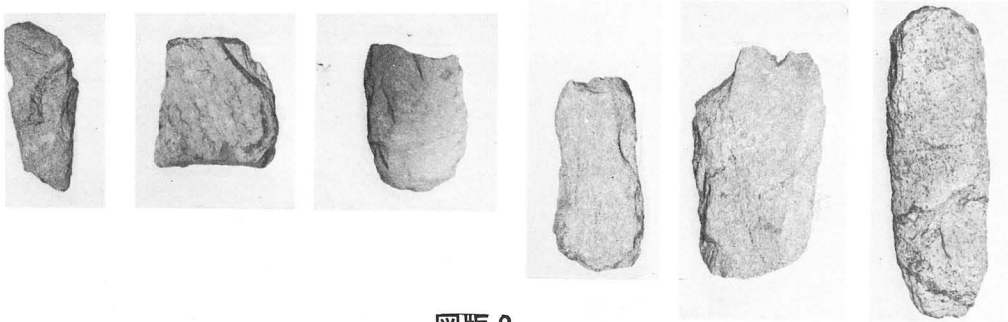
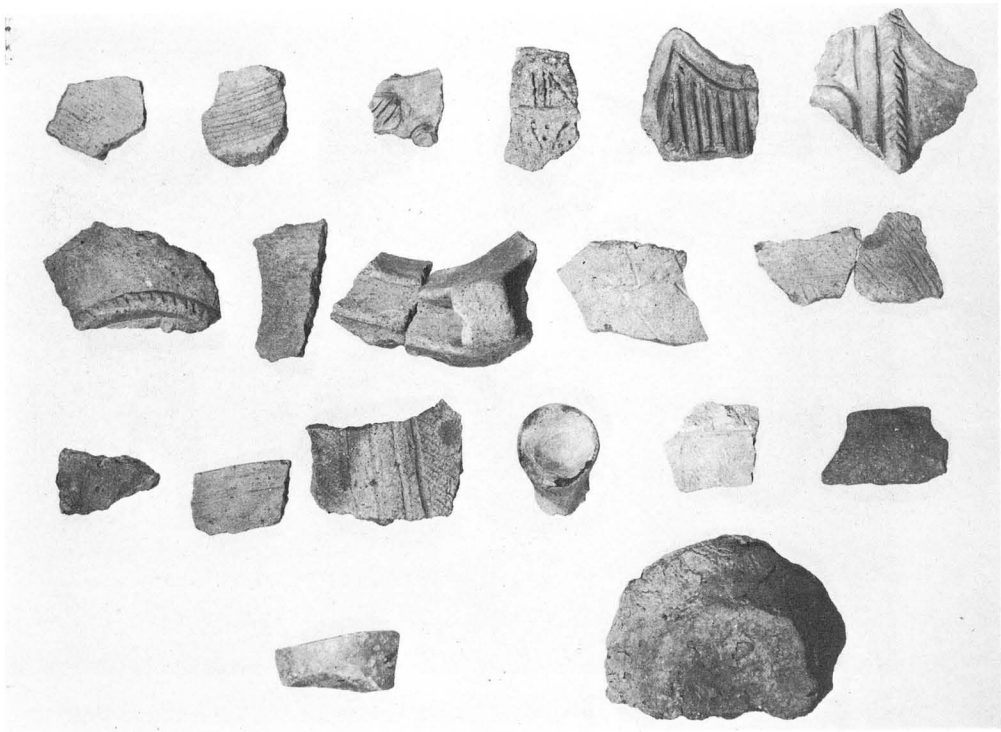
図No.	出土No.	団No.	出土No.	図No.	出土No.	出 土 No.	出 土 No.
7 0	S. -31	2 0	po. -40	5 3	S. -57	6 0	po. -46
7 1	S. -29	2 1	po. -69	5 4	S. -24	2 8	S. -33
7 2	7 7 土	2 2	7 7 土	5 5	S. -2	2 9	7 7 土
7 3	S. -10	2 3	土 坂 2	5 6	S. -3	3 0	S. -77
頭無 8号住居		2 4	7 7 土	5 7	7 7 土	3 1	S. -4
1	po. -1	2 5	po. -16	5 8	S. -1	3 2	S. -61
2	po. -2	2 6	po. -62	頭無 10号住居		3 3	S. -21
3	7 7 土	2 7	po. -11	1	po. -129	3 4	S. -85
4	po. -3	2 8	po. -29	2	po. -127	3 5	西 壁 上
5	S. -1	2 9	po. -22	3	po. -76.87.106	3 6	7 7 土
6	7 7 土	3 0	土 坂 2	4	po. -43	3 7	S. -89
7	S. -2	3 1	po. -45	5	po. -57	3 8	S. -90
8	S. -8	3 2	po. -9	6	po. -170	3 9	S. -91
頭無 9号住居		3 3	po. -41	7	po. -74,109	4 0	7 7 土
1	po. -29.34.36	3 4	po. -58	8	po. -42	4 1	S. -93
2	po. -36	3 5	S. -13	9	po. -65	4 2	7 7 土
3	po. -66	3 6	S. -14	1 0	po. -48	4 3	S. -88
4	po. -10(72.1)	3 7	S. -36	1 1	po. -111	4 4	S. -87
5	po. -83	3 8	S. -17	1 2	po. -37,47	4 5	S. -5
6	po. -84	3 9	S. -16	1 3	po. -127	4 6	S. -81
7	po. -4	4 0	S. -11	1 4	po. -79	4 7	S. -66
8	po. -3	4 1	S. -8	1 5	po. -45	4 8	S. -80
9	po. -1	4 2	S. -15	1 6	po. -82	4 9	S. -103
1 0	po. -6	4 3	S. -5	1 7	po. -114	5 0	S. -9
1 1	po. -3	4 4	S. -7	1 8	po. -30	5 1	S. -30
1 2	po. -72	4 5	S. -4	1 9	po. -13	5 2	S. -83
1 3	po. -8	4 6	S. -6	2 0	po. -10	5 3	S. -102
1 4	po. -80	4 7	S. -18	2 1	po. -71	5 4	S. -82
1 5	po. -7	4 8	S. -59	2 2	po. -51	5 5	7 7 土
1 6	po. -78	4 9	S. -20	2 3	po. -16	5 6	7 7 土
1 7	po. -55	5 0	S. -19	2 4	po. -85	5 7	S. -92
1 8	po. -82	5 1	S. -21	2 5	po. -58	5 8	S. -13
1 9	po. -21	5 2	S. -19	2 6	po. -36	5 9	S. -10

図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.	図No.	出土 No.
3 8	S. - 87	1 1	集石 po. - 39	4 4	BR-19Grid	7 7	BL-3 Grid
3 9	S. - 75	1 2	集石 po. - 35	4 5	BR-19 Grid	7 8	BL-3 Grid
4 0	S. - 47	1 3	集石 S. - 237	4 6	BR-19 Grid	7 9	BC-29 Grid
4 1	S. - 84	1 4	集石 S. - 228	4 7	AI-29 Grid	8 0	BL-27, 28Grid
4 2	S. - 100	1 5	集石 S. - 262	4 8	HL-3 Grid	8 1	BL-3 Grid
4 3	ヒスト 大珠	1 6	集石 S. - 258	4, 9	BL-3, Grid	8 2	BL-3 Grid
頭無	16号住居	1 7	集石 S. - 121	5 0	BH-27 Grid	8 3	BL-3 Grid
1	po. - 7	1 8	集石 S. - 25	5 1	BL-3 Grid	8 4	B15HS. - 4
2	po. - 4	1 9	集石 S. - 60	5 2	BC-29 Grid	8 5	BL-3 Grid
3	po. - 5	2 0	B. L. - 36Grid	5 3	BL-3 Grid	8 6	BE-30 Grid
4	po. - 11	2 1	集石 S. - 16	5 4	AL-3 Grid	8 7	BHS. - 3
5	po. - 1	2 2	B. L. - 3 Grid	5 5	AG-29 Grid	8 8	15HS. - 2
6	po. - 6	2 3	集石	5 6	AC-22 Grid	8 9	5H 7ク土
7	7ク土	2 4	H. - 27Grid	5 7	AM-34 Grid	9 0	15HS. - 3
8	po. - 9	2 5	集石 S. - 250	5 8	AC-26 Grid	9 1	BI-36 Grid
9	po. - 3	2 6	集石 S. - 263	5 9	B12J ±13	9 2	B15HS. - 1
1 0	S. - 2	2 7	集石 S. - 92	6 0	BI-22 Grid	9 3	12J 13ト
1 1	S. - 4	2 8	集石 S. - 192	6 1	B-HS-33	9 4	BP-22 Grid
1 2	S. - 1	2 9	集石 S. - 157	6 2	15HS. - 7	頭無	13号住居
頭無	18号住居	3 0	集石 S. - 182	6 3	BE-27 Grid	1	po. - 9
1	po. - 1	3 1	集石 S. - 10	6 4	13HS. - 34	2	po. - 14
2	po. - 2	3 2	集石 S. - 188	6 5	BHS. - 1	3	po. - 1, 2
そ	の他	3 3	集石 S. - 97	6 6	BHS. - 2	4	po. - 12
1	土 壇 7	3 4	集石 S. - 44	6 7	BC-27 Grid	5	po. - 3
2	土 壇 13	3 5	3-DGrid	6 8	BP-30 Grid	6	po. - 17
3	K A 1号溝	3 6	集石 S. - 64	6 9	BL-3 Grid	頭無	15号住居
4	K B 溝	3 7	集石 S. - 10	7 0	BH-29 Grid	1	po. - 1
5	K A 溝	3 8	集石 S. - 150	7 1	BL-3 Grid	2	po. - 7
6	K 溝	3 9	集石 S. - 33	7 2	BG-30 Grid	3	po. - 4, 5
7	集石道和	4 0	集石 S. - 236	7 3	BF-10 Grid		
8	集石	4 1	集石 S. - 137	7 4	BL-3 Grid		
9	集石 po-25	4 2	集石 G-31Grid	7 5	BG-3 Grid		
1 0	集石 po. - 53	4 3	BR-19Grid	7 6	BN-6 Grid		

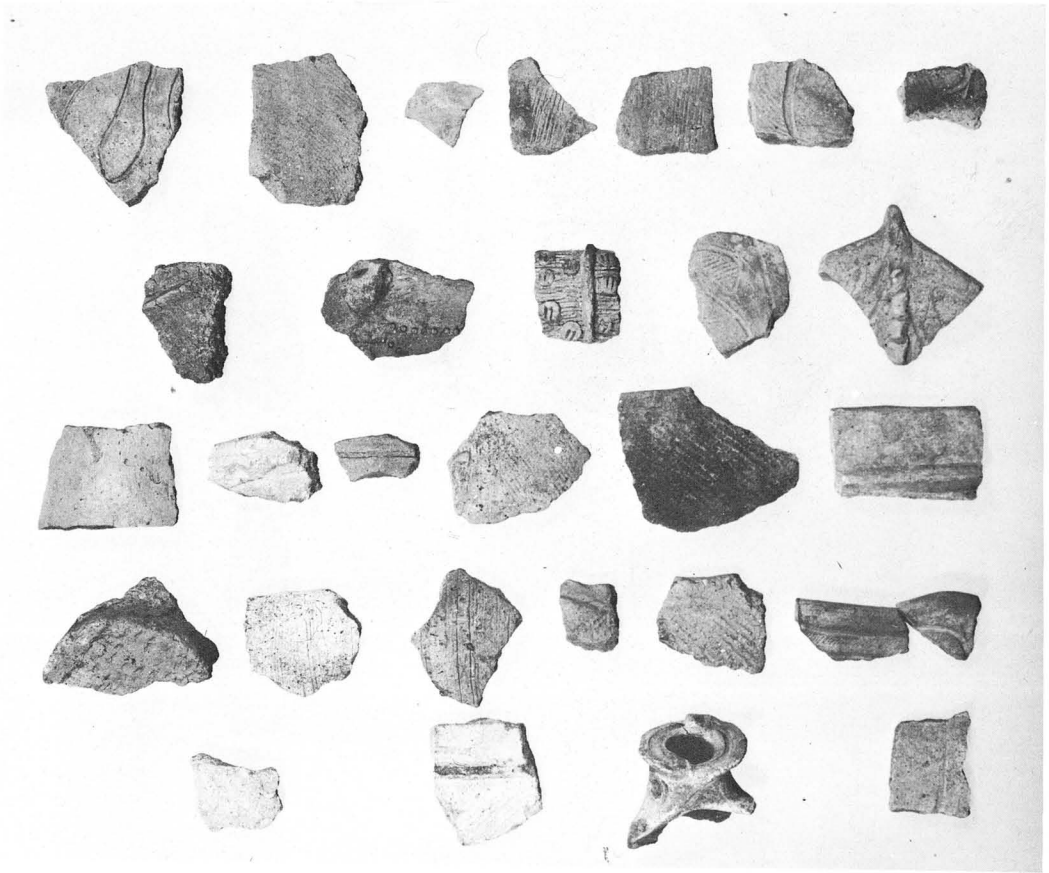


図版1

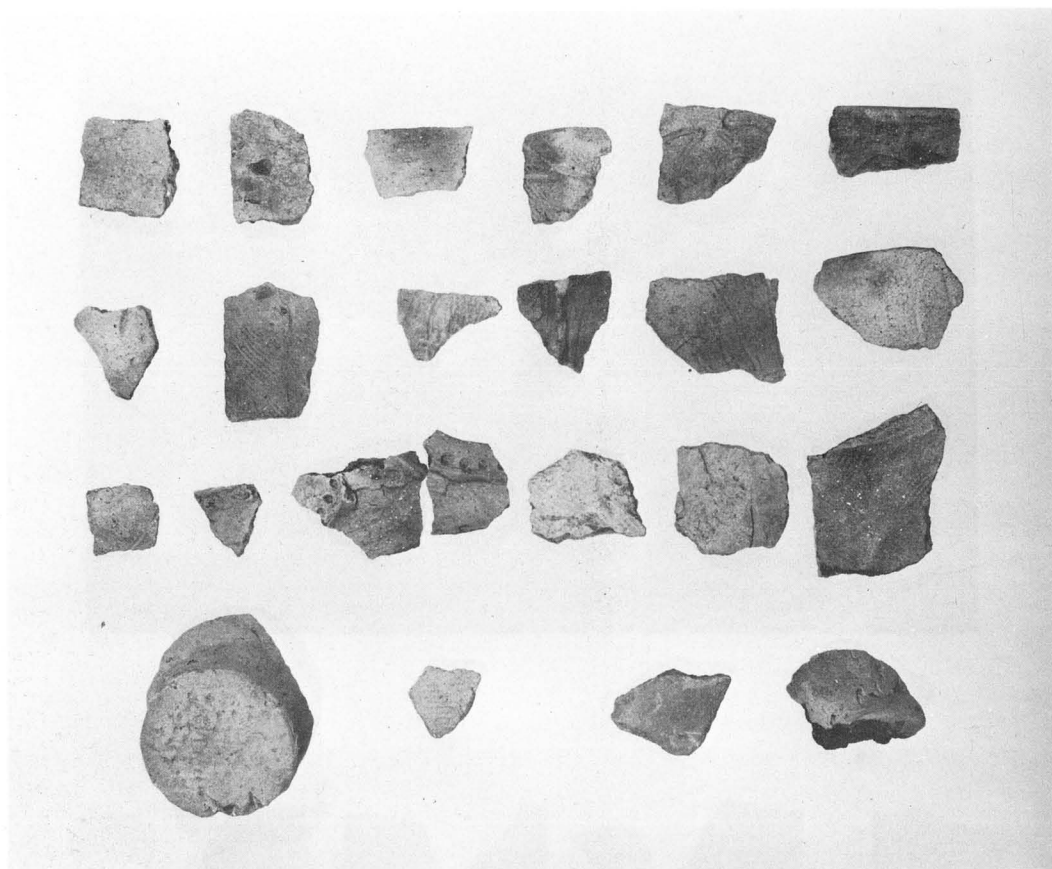
下フノリ平遺跡



图版 2  
葛原遺跡



图版 3  
西下屋敷遺跡(1)



图版 4

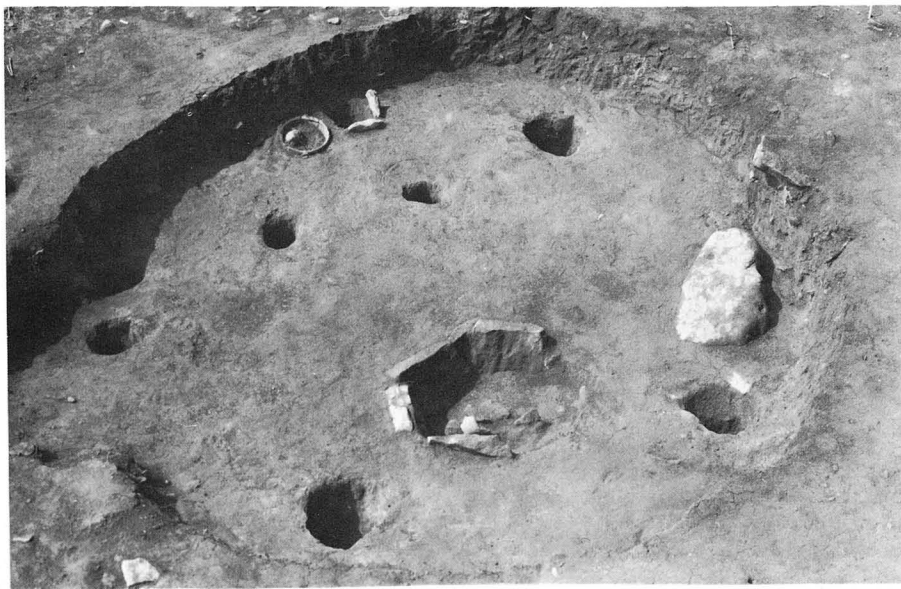
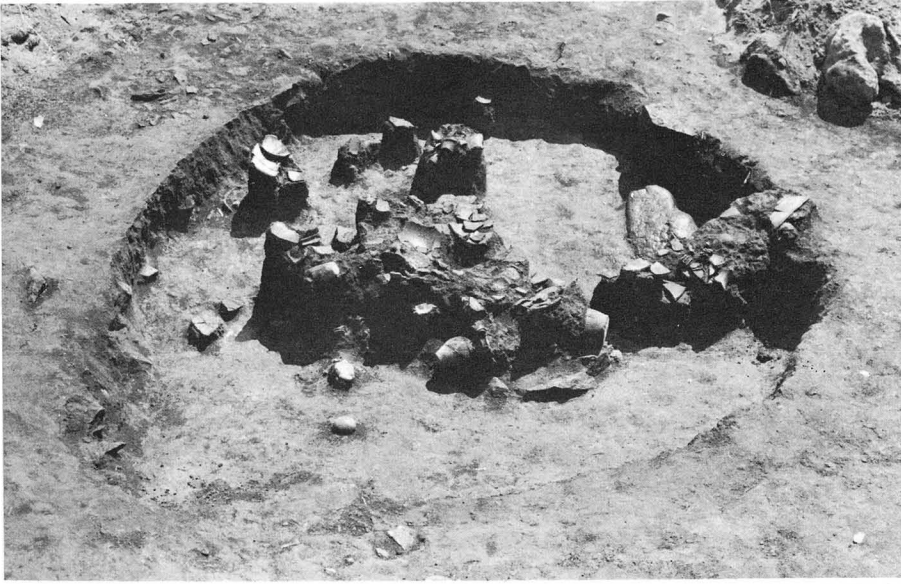
西下屋敷遺跡 (2)

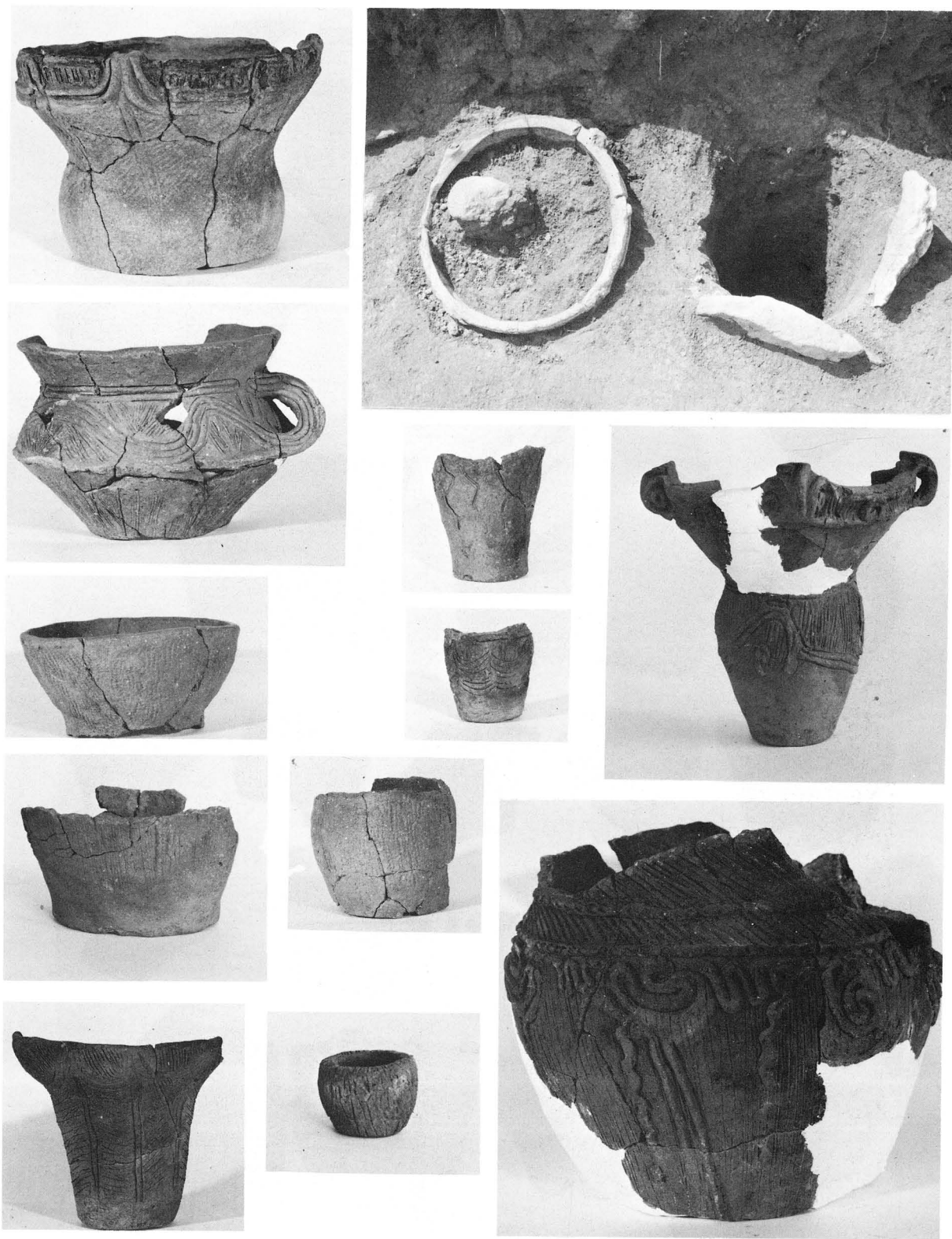


図版 5

柳坪遺跡 A 地区全景

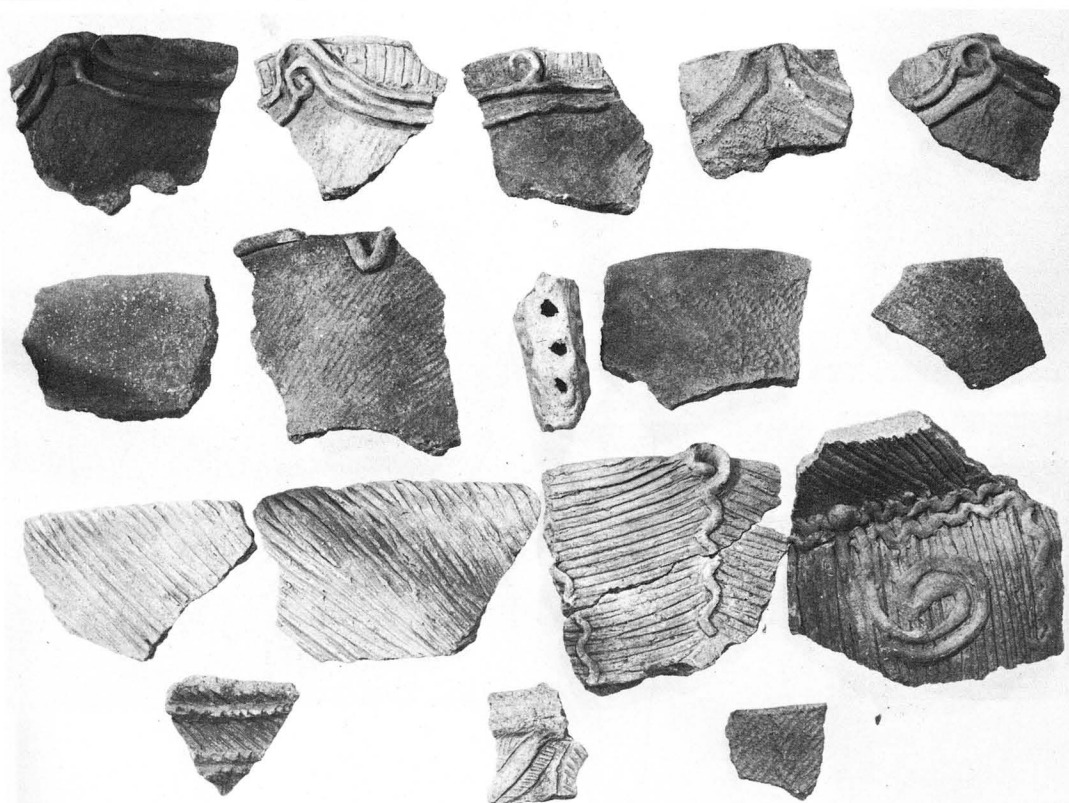
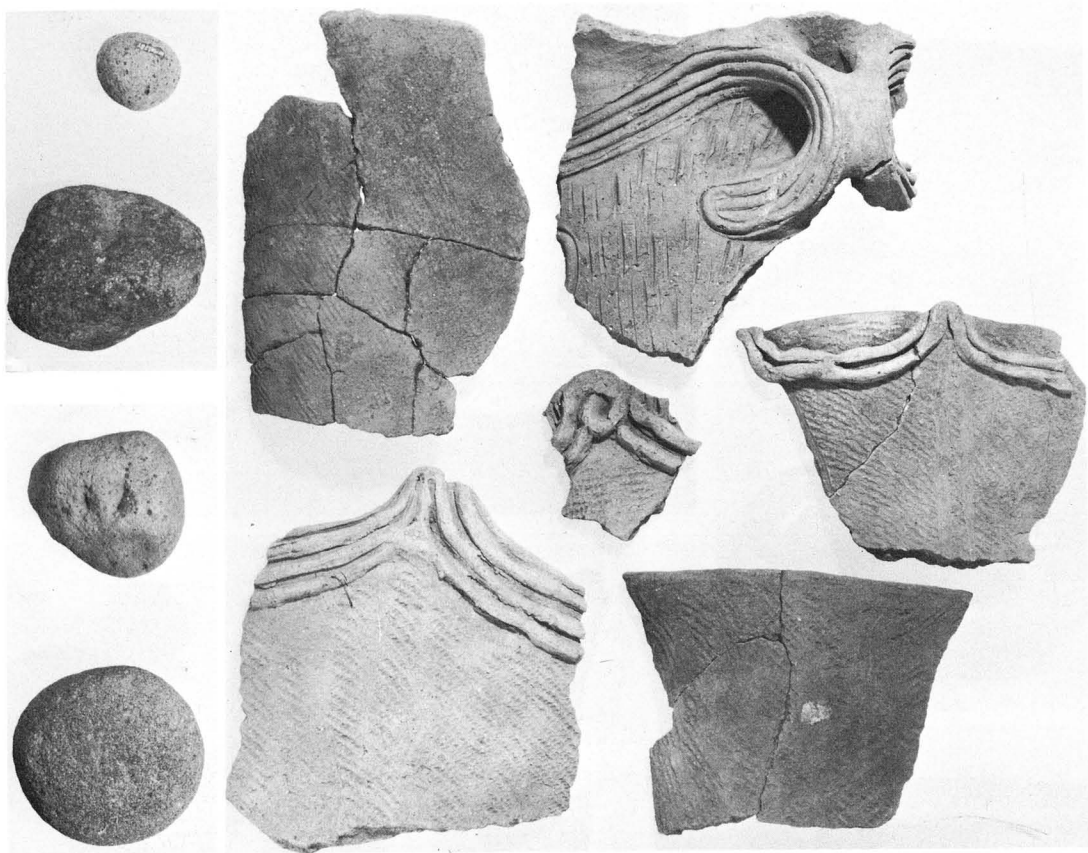






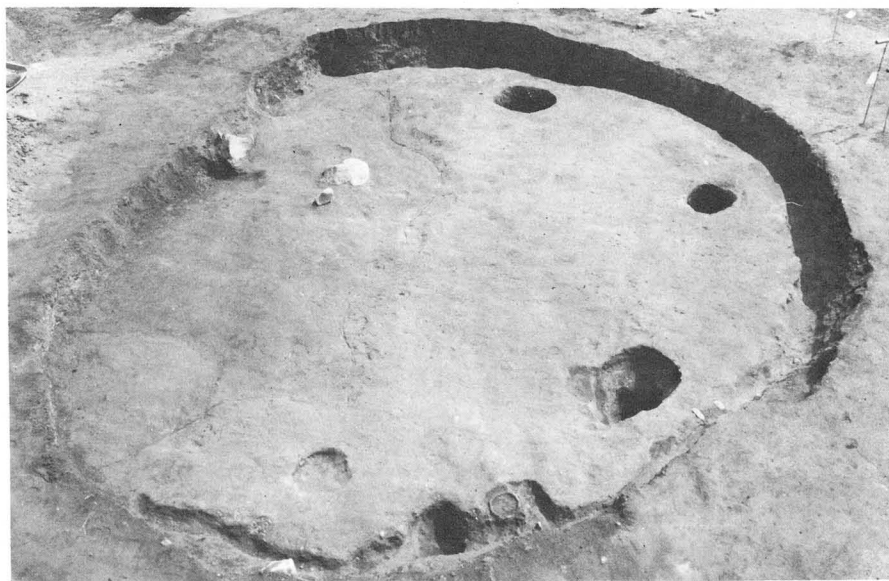
图版 7

柳坪遗址 A 地区 1 号住居址出土遗物(1)

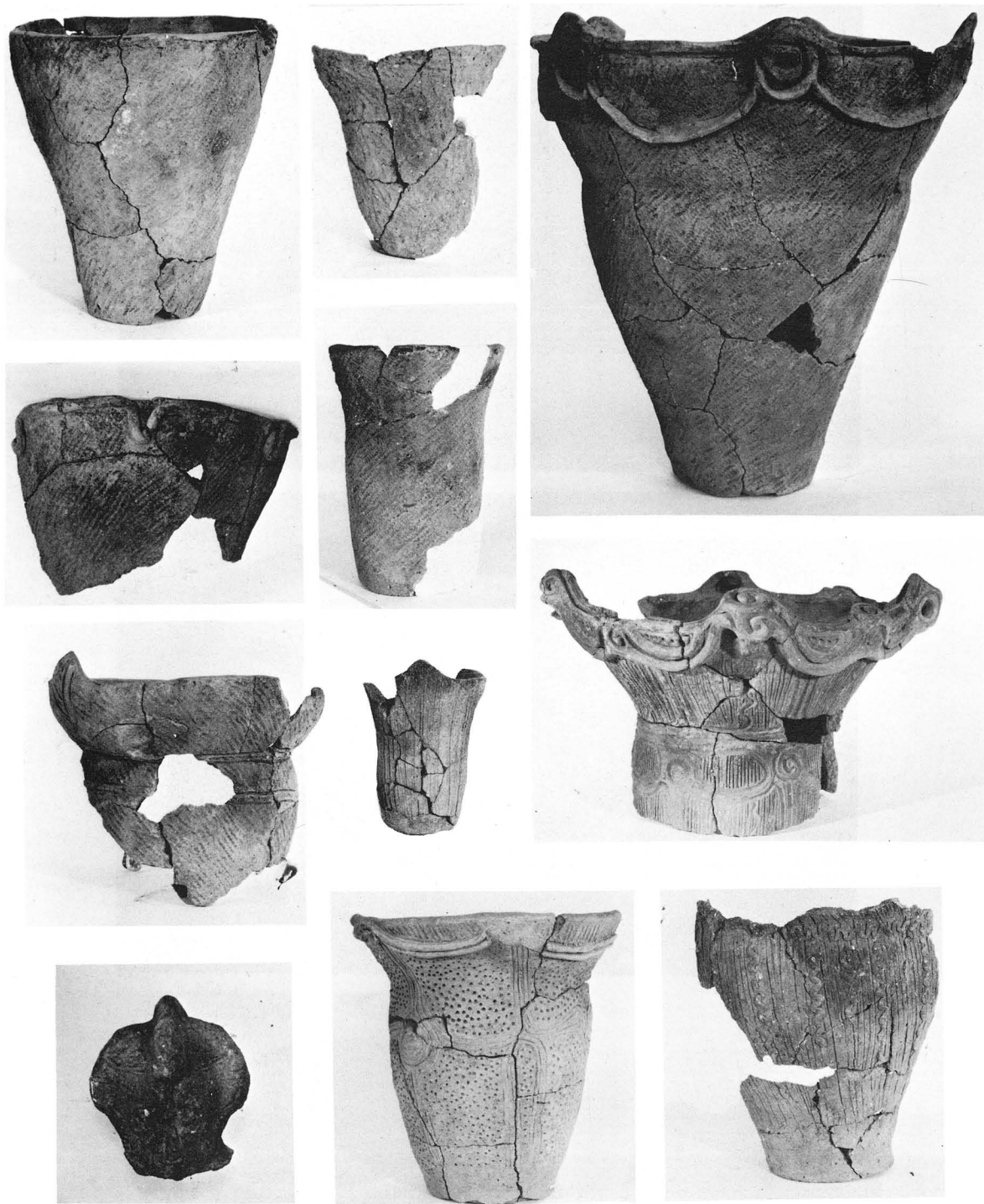


图版 8 柳坪遗址A地区1号住居址出土遗物(2)



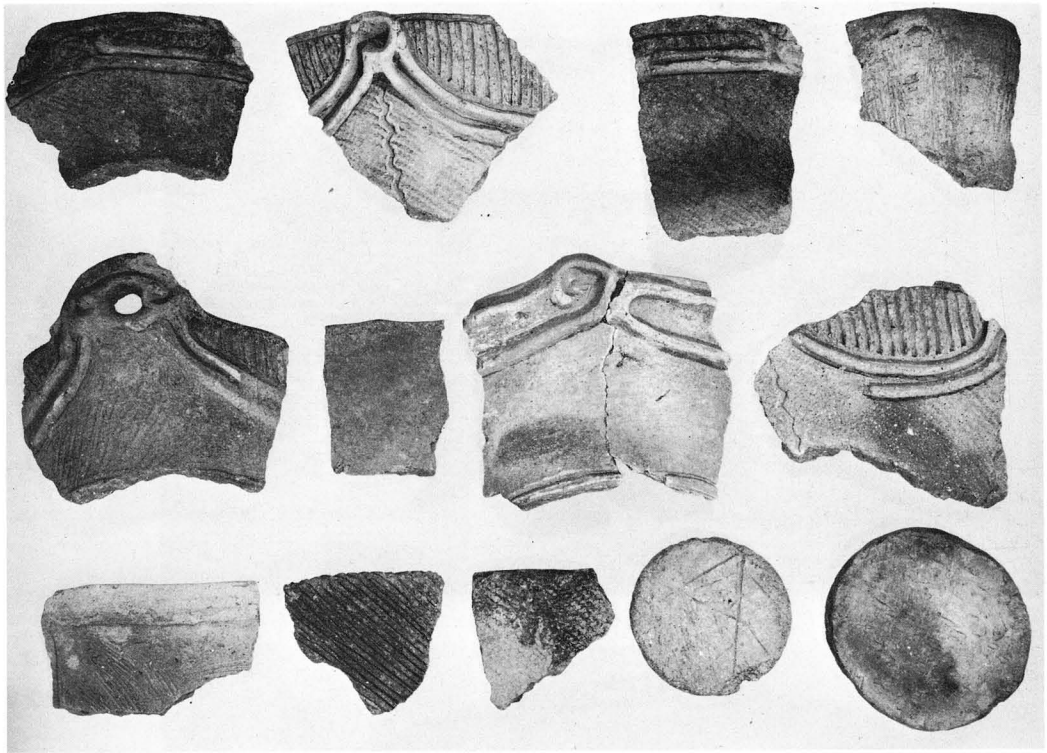


图版 9  
柳坪遗迹 A 地区 2 号住居址



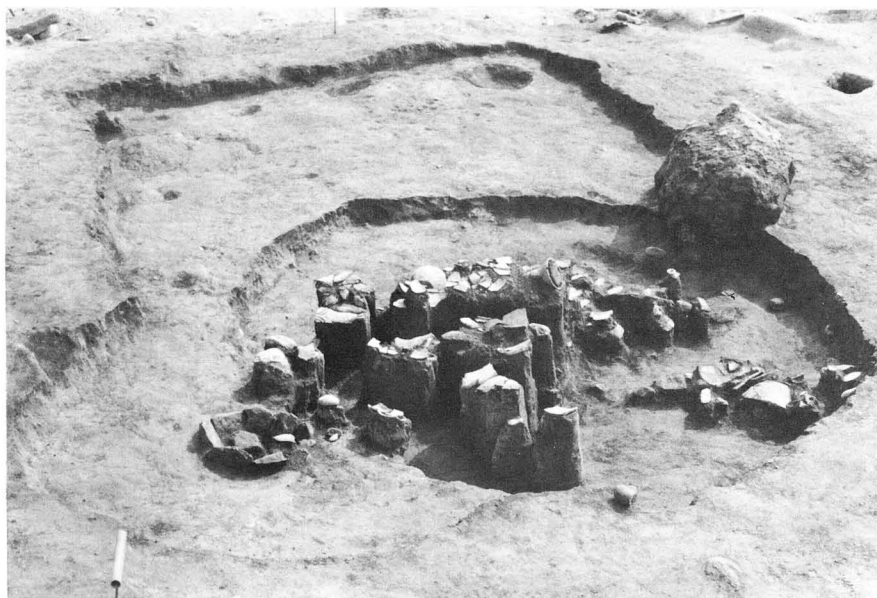
图版10

柳坪遗址A地区2号住居址出土遗物(1)



图版11

柳坪遗迹A地区2号住居址出土遗物(2)



上 5H  
 右 4J  
 左下 6J



YA 4J、6J  
 遺物出土状態



YA 4, 左下  
 5, 右  
 6, 左上

図版12

柳坪遺跡A地区4, 6号住居址



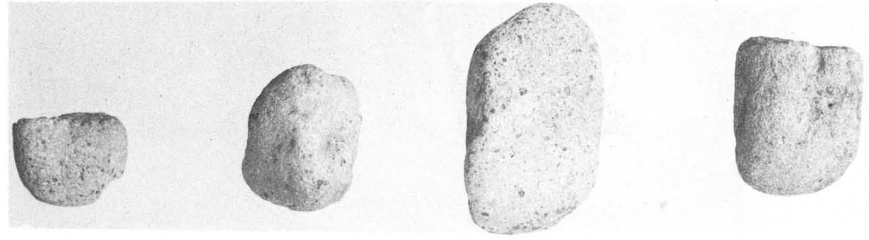
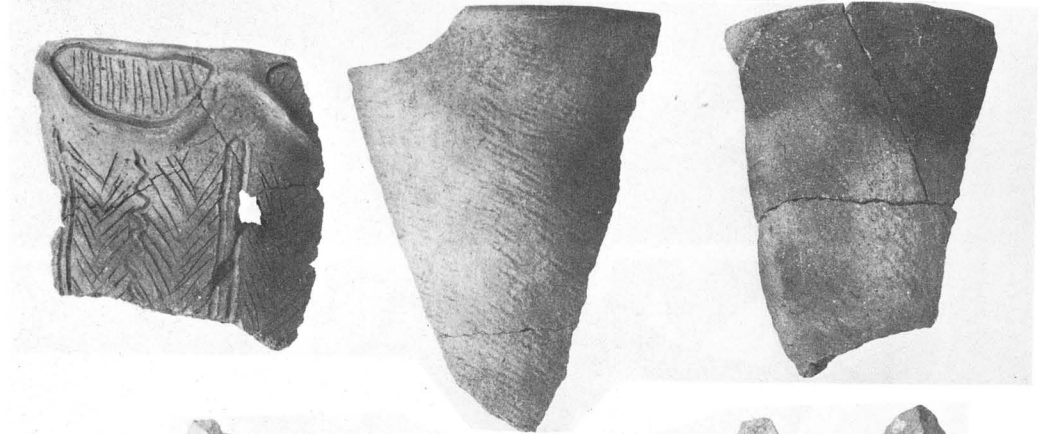
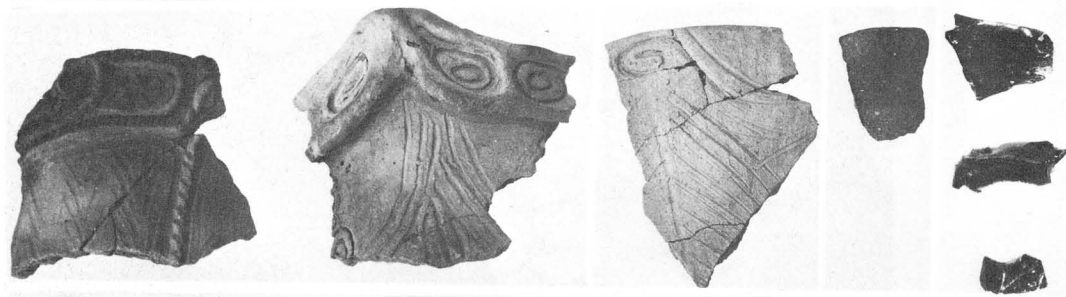




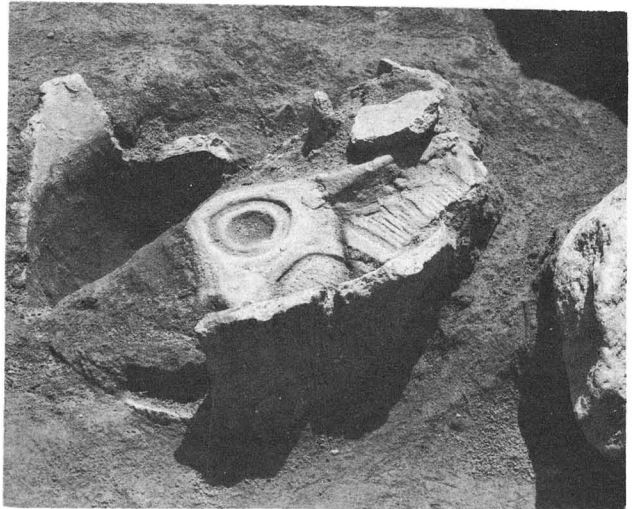
图版14

柳坪遗址A地区6号住居址出土遗物



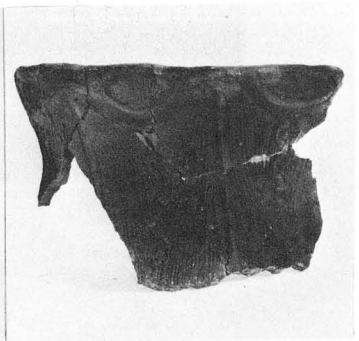
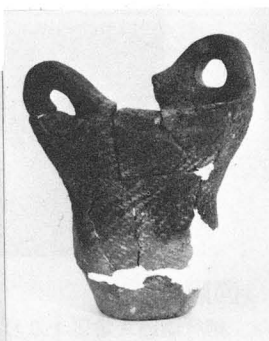
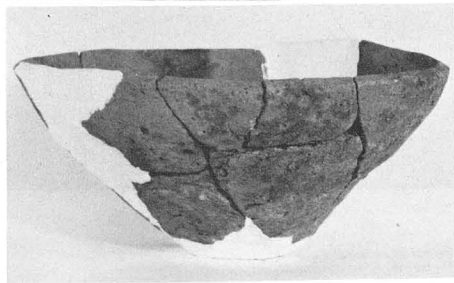
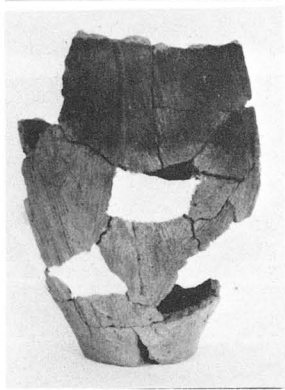
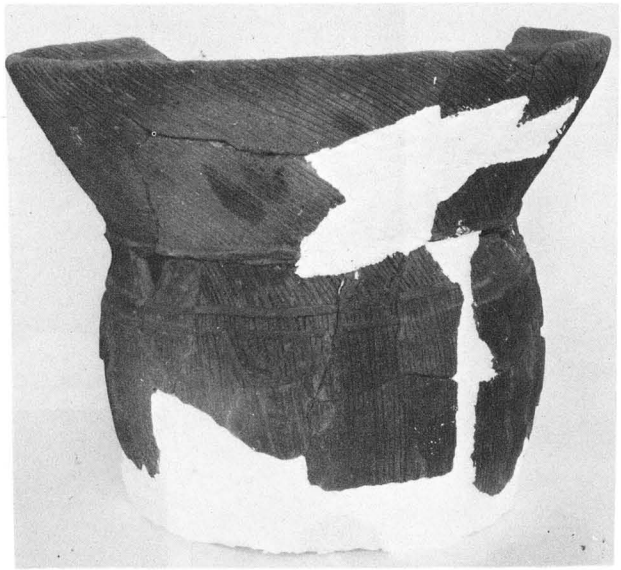
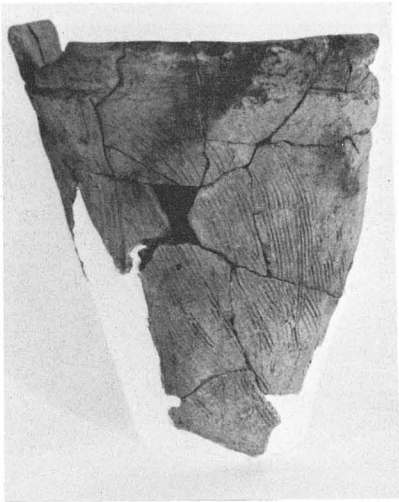
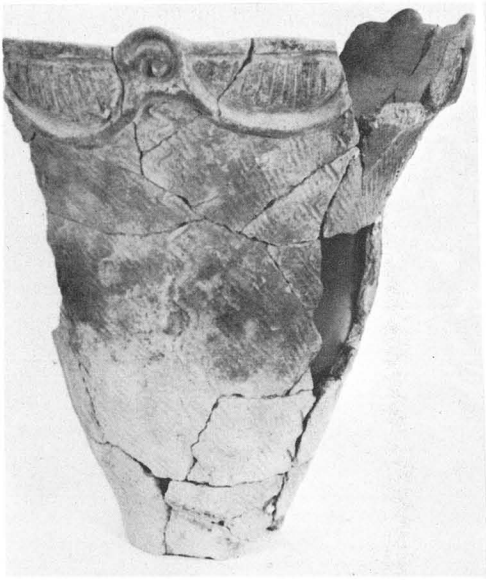


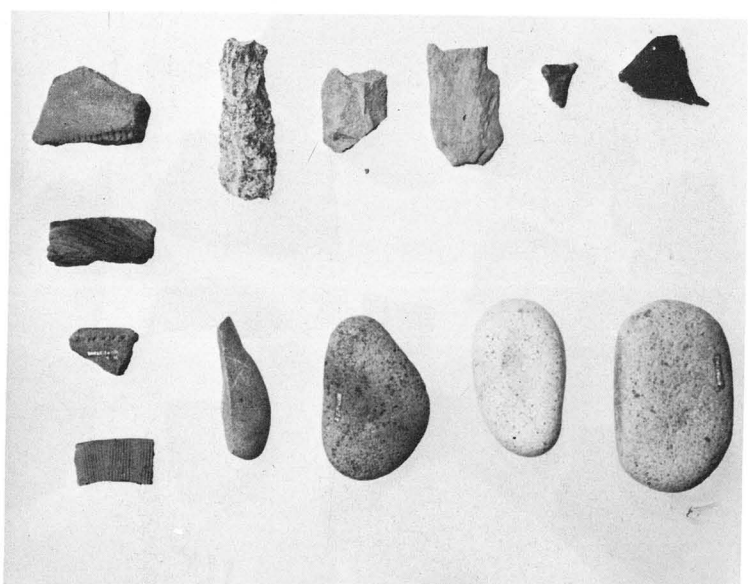
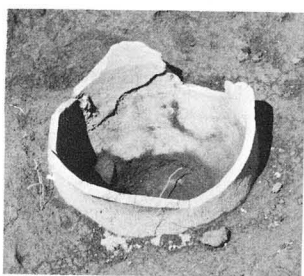




图版17

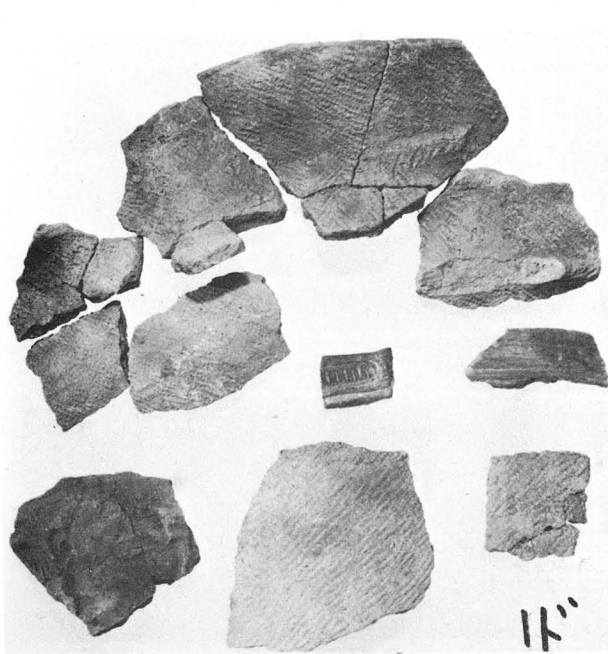
柳坪遗址A地区10号住居址





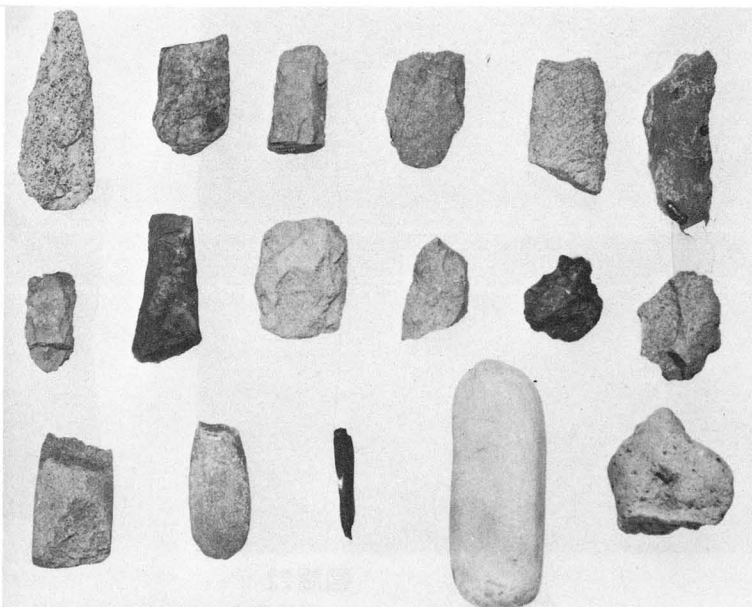
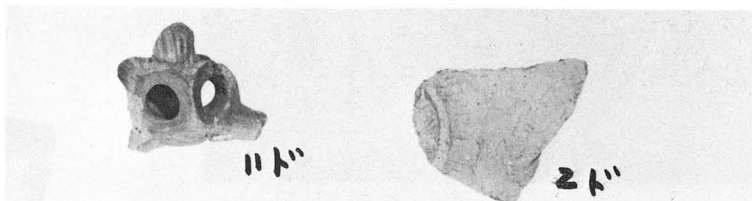
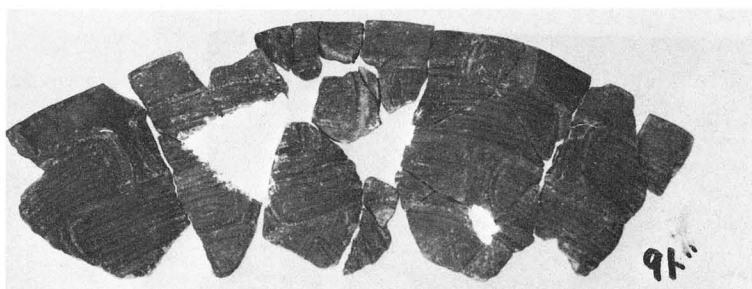
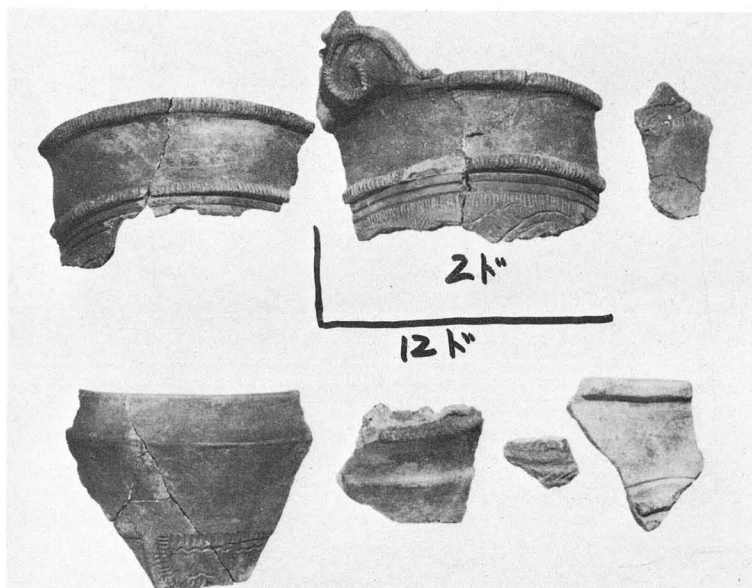
图版 19

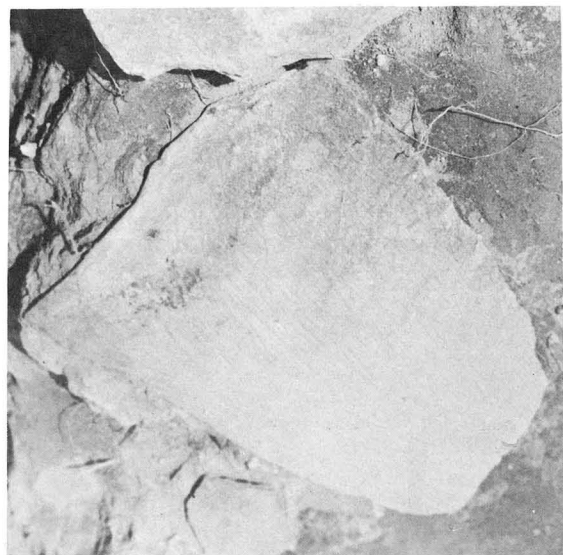
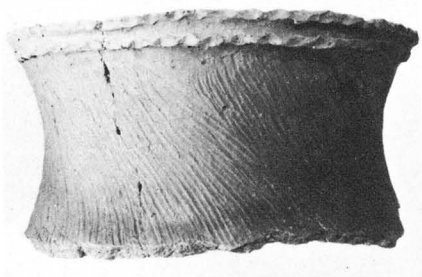
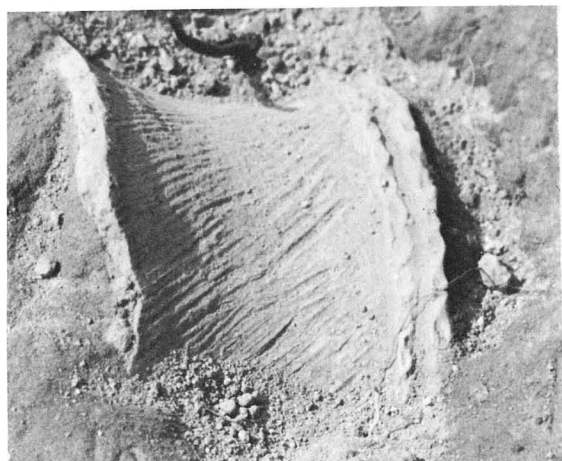
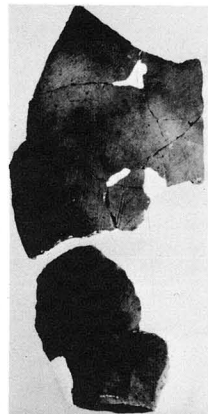
柳坪遗迹 A 地区 I 5 号住居址



图版20  
柳坪遺跡 A 地区土坑

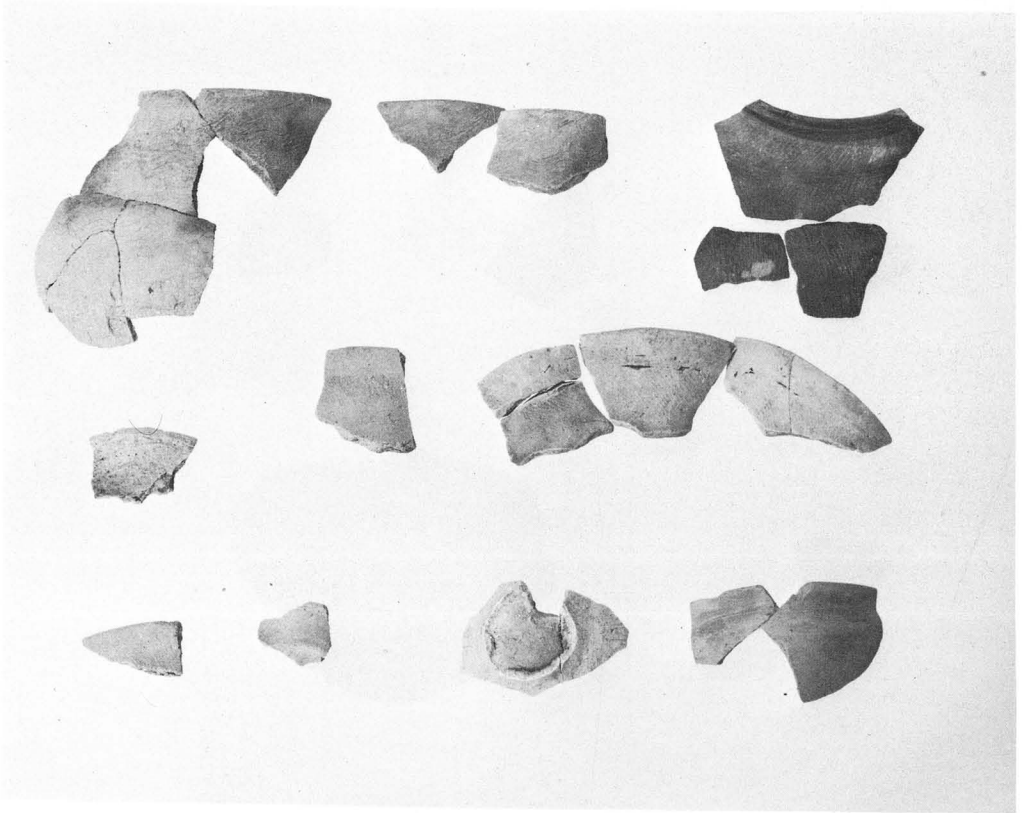






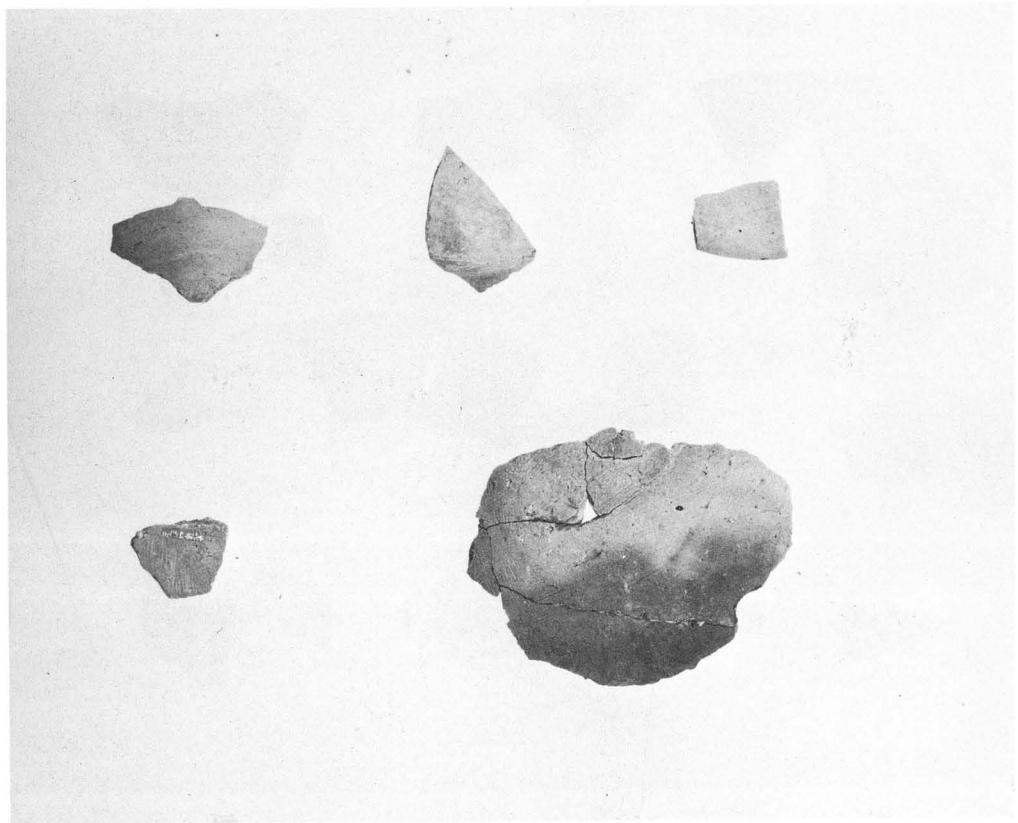
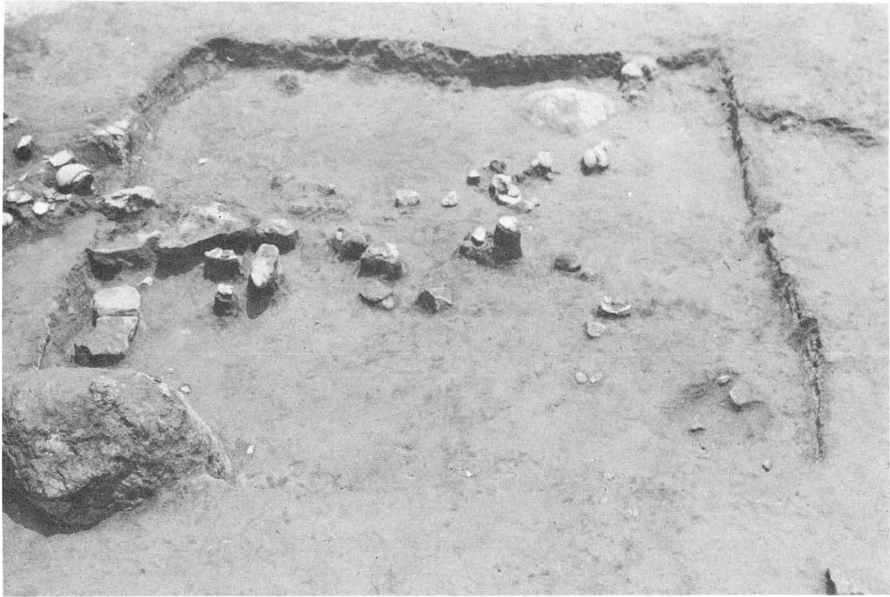
图版22

柳坪遗迹A地区I6号住居址



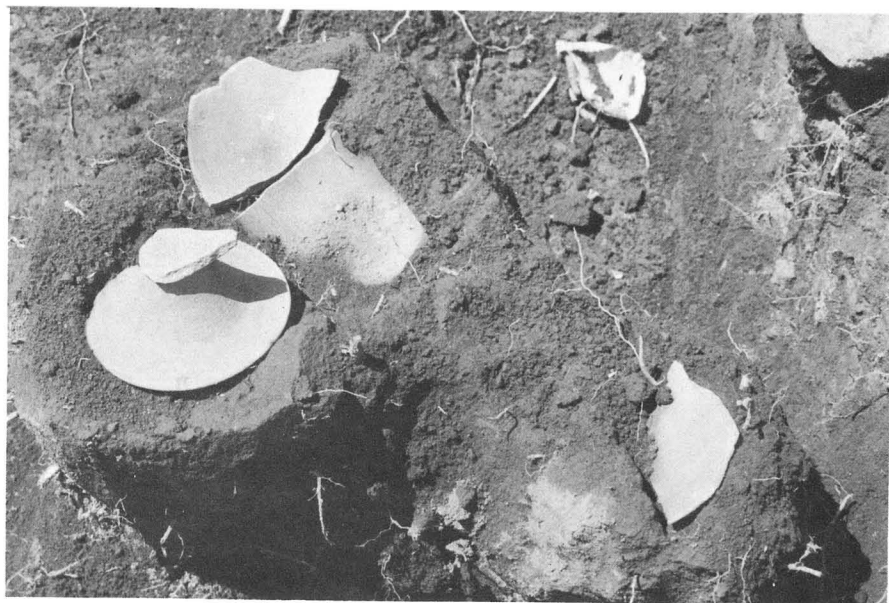
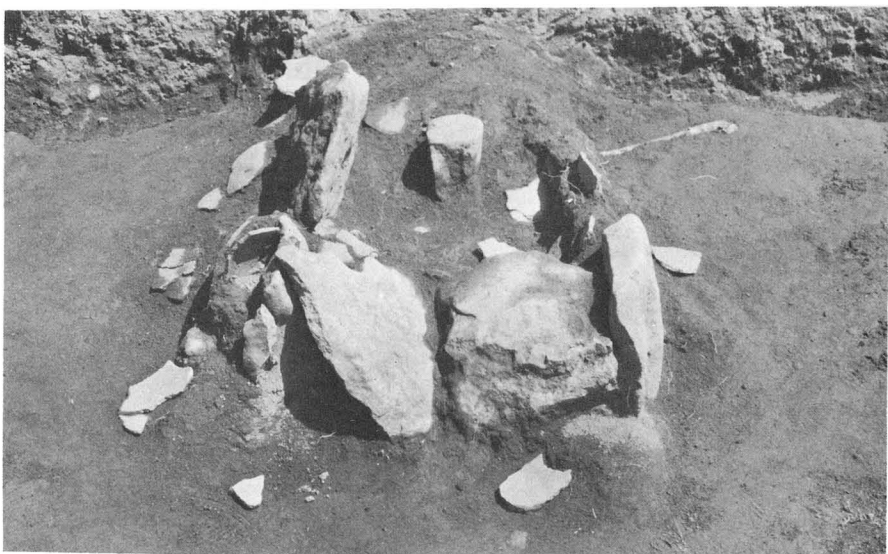
图版23

柳坪遗迹A地区3号住居址

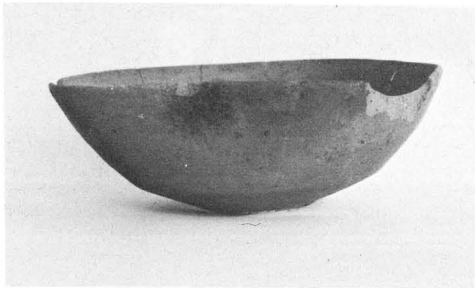
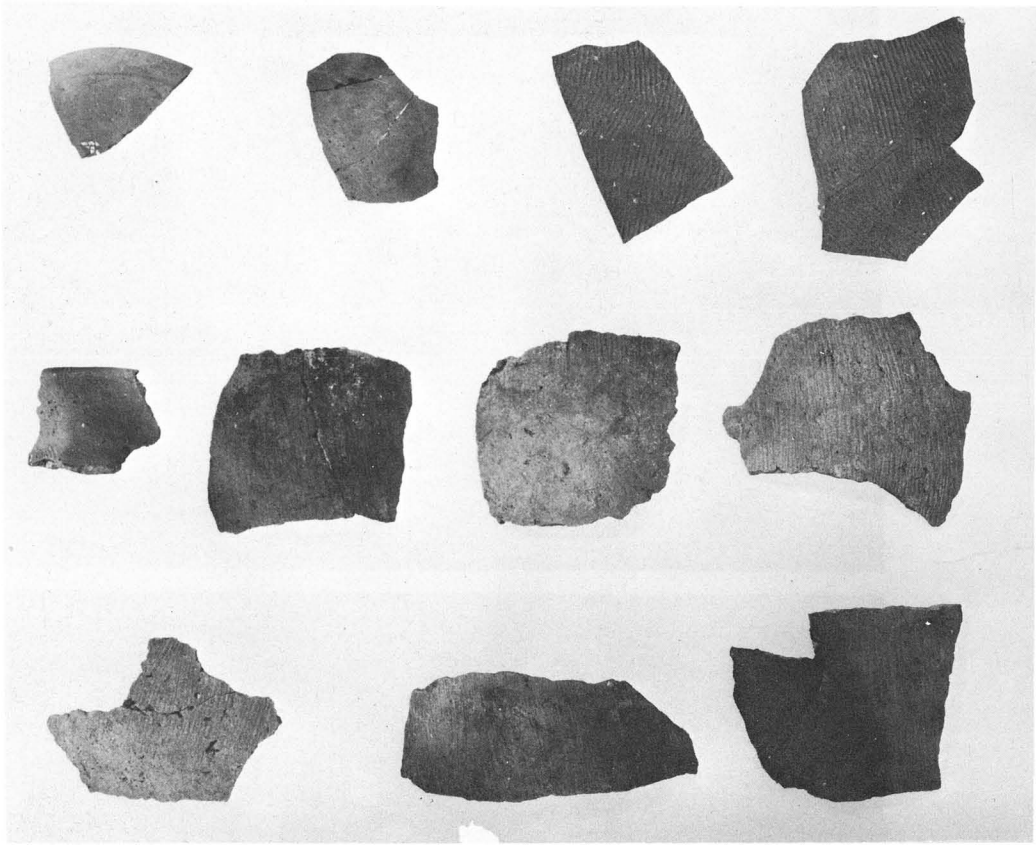


图版24

柳坪遗迹A地区5号住居址



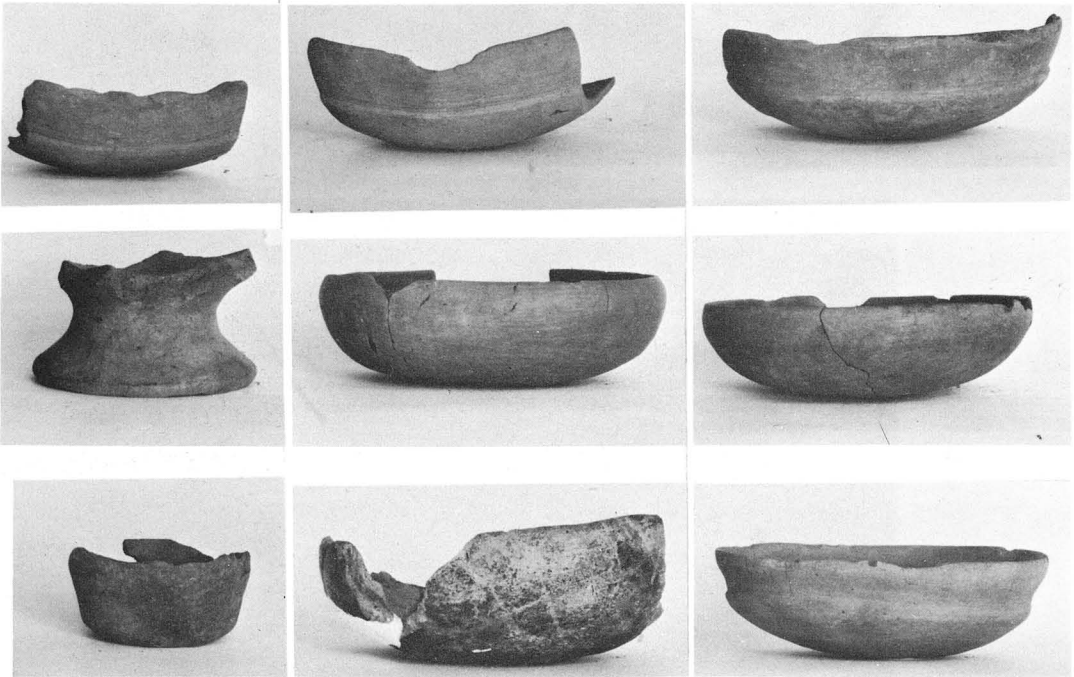
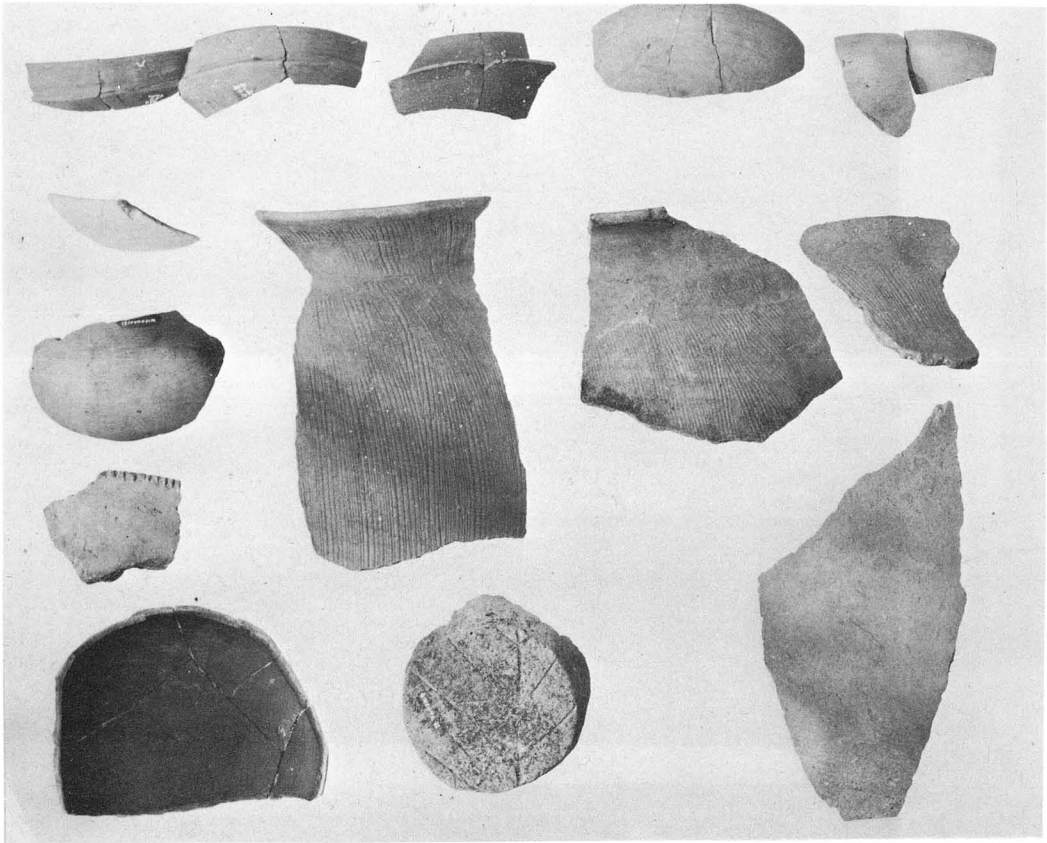




图版26

柳坪遺跡A地区7号住居址出土遺物

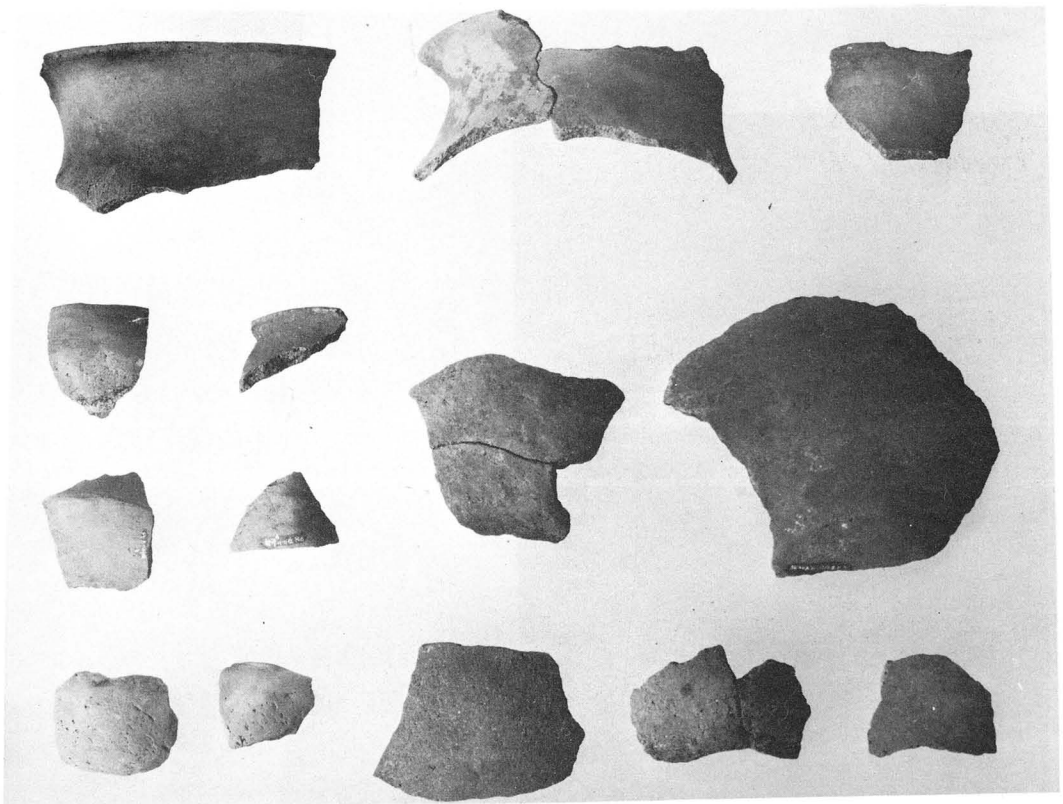
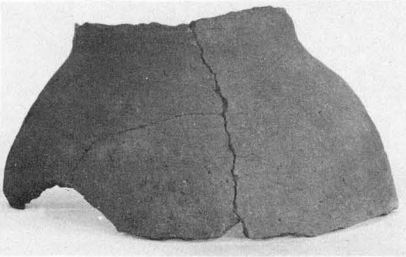
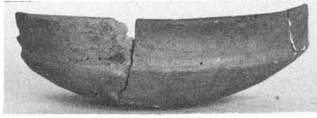




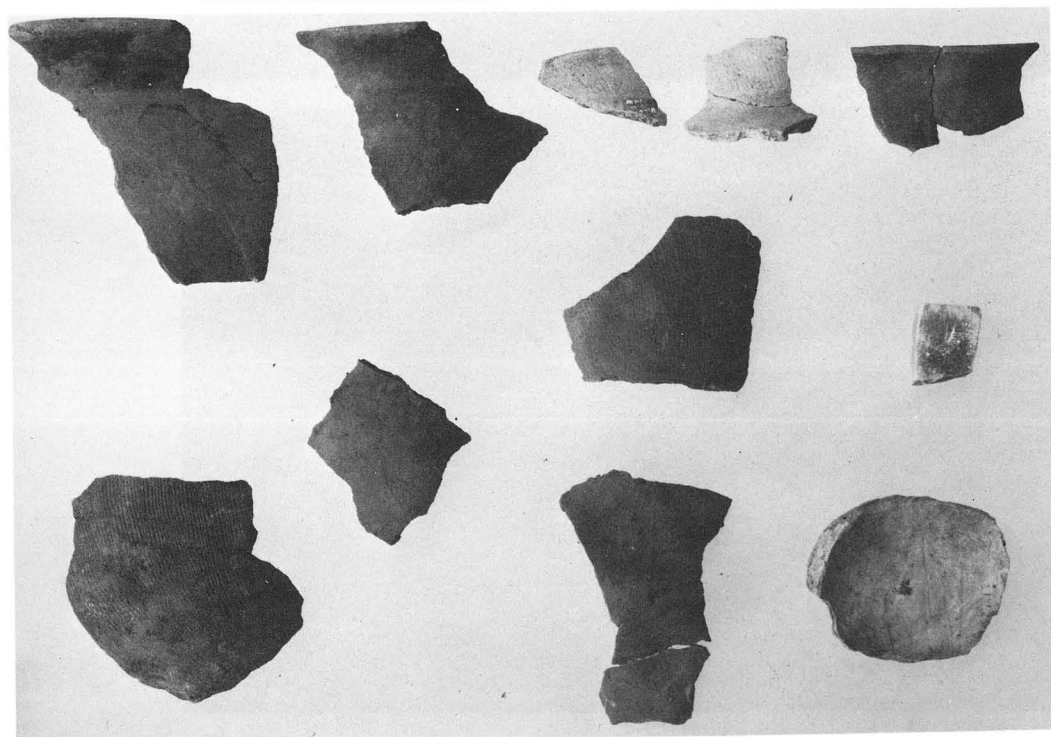
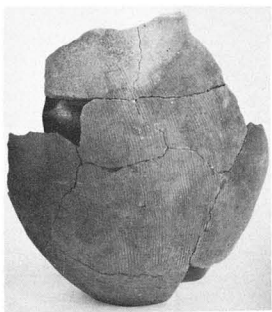
图版28

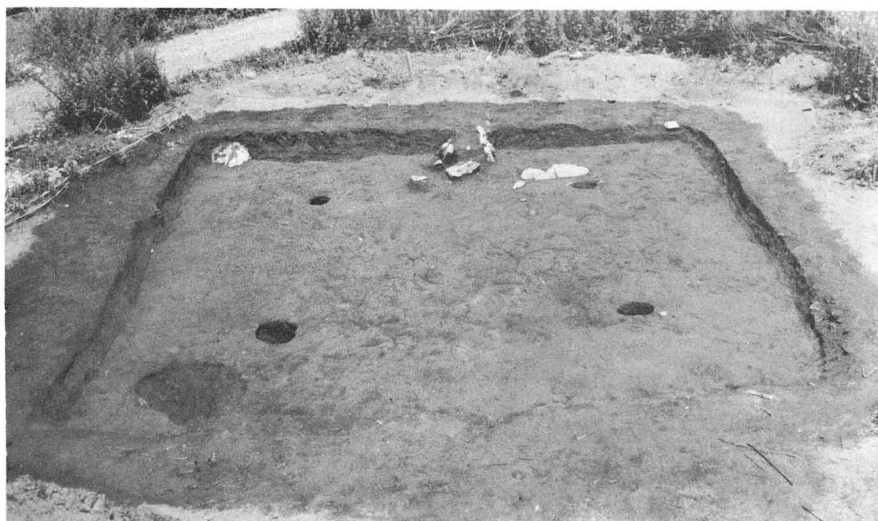
柳坪遗迹A地区9号住居址出土遗物



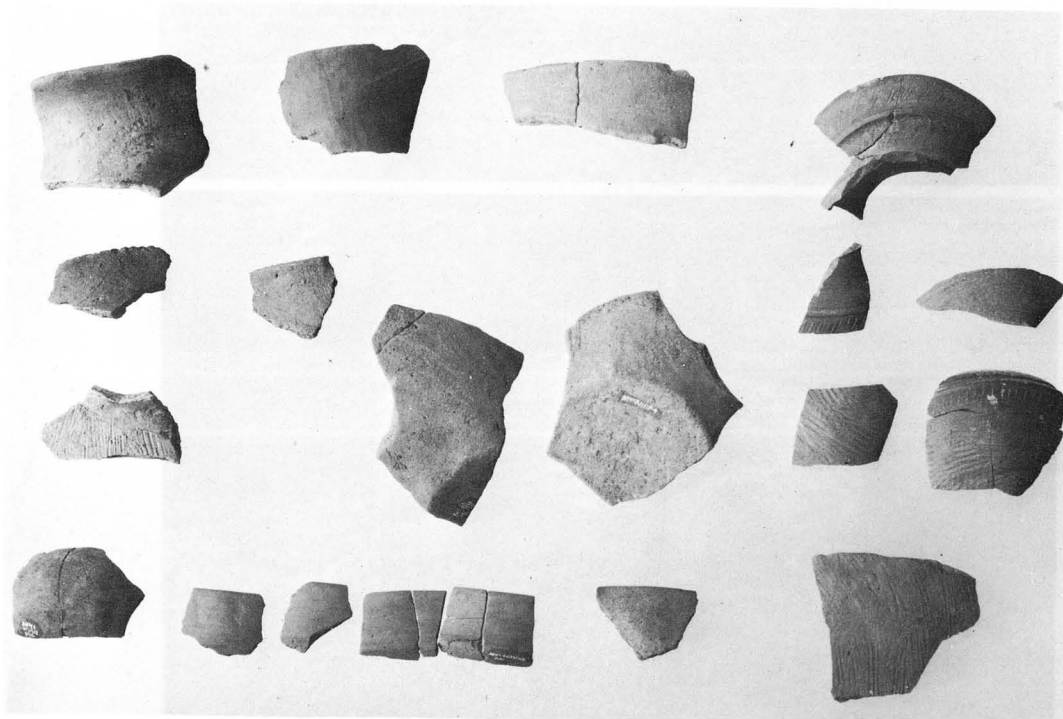
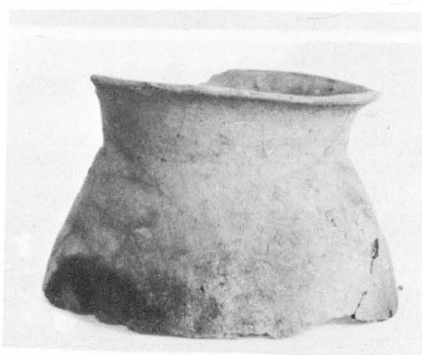
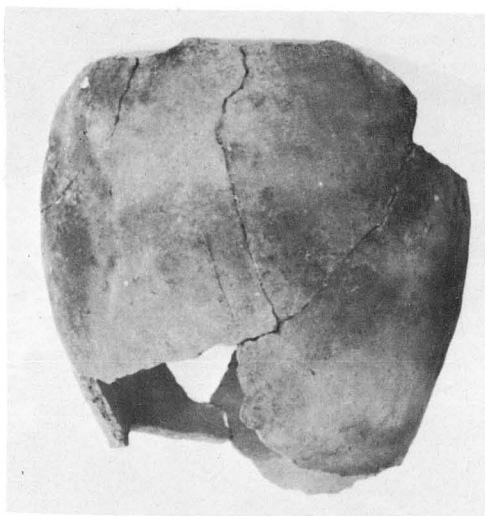
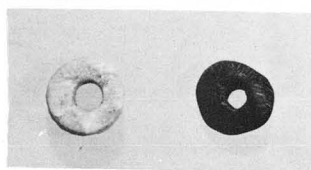
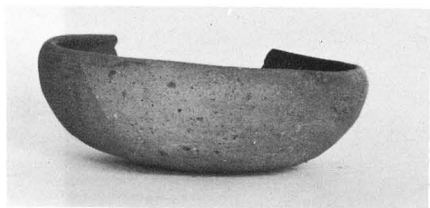




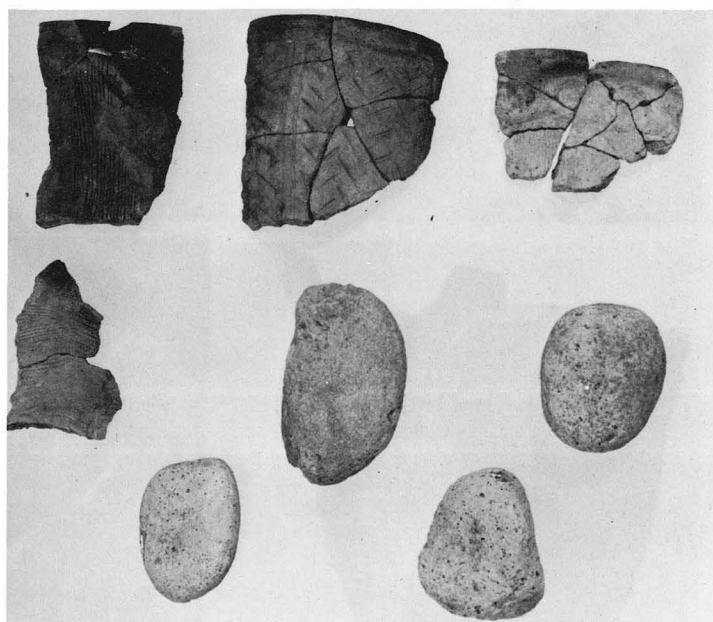
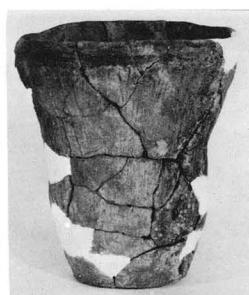
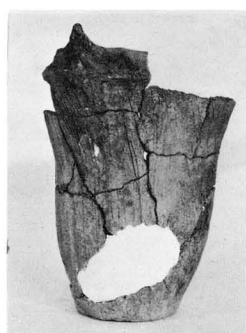


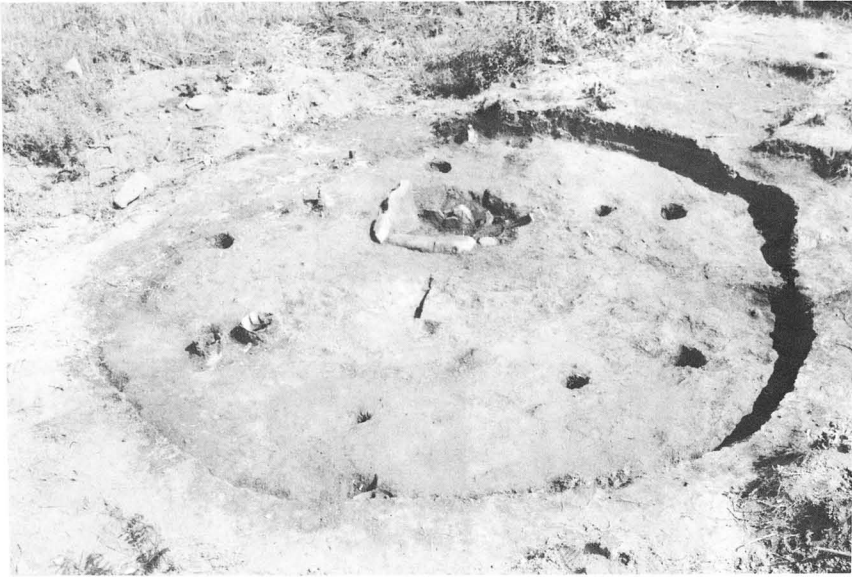
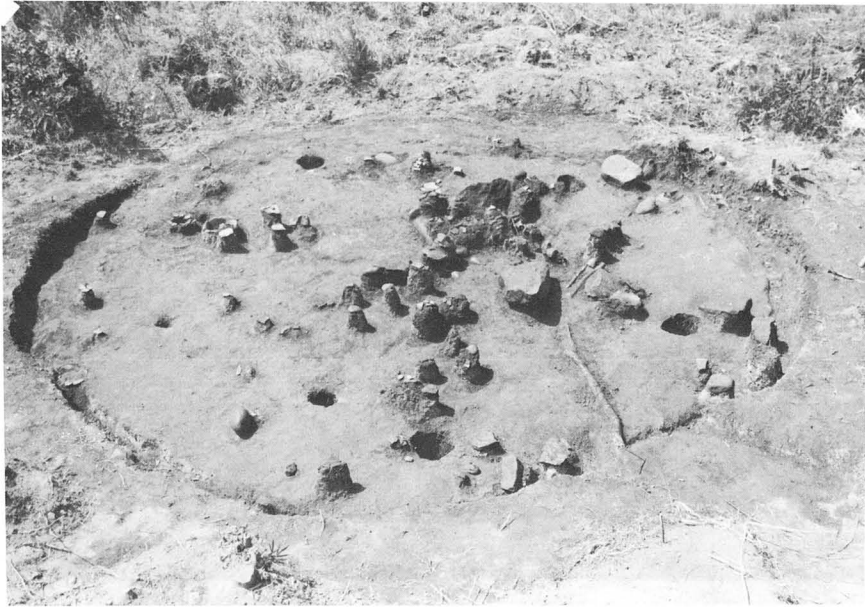








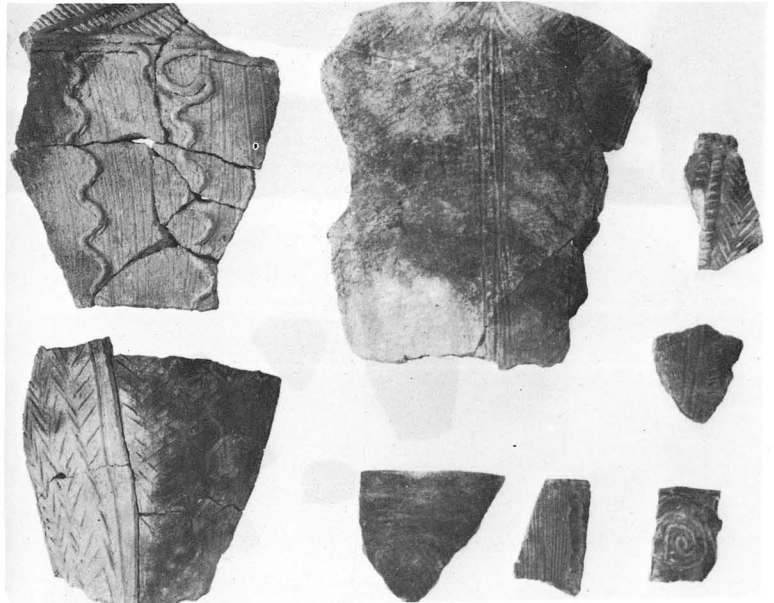
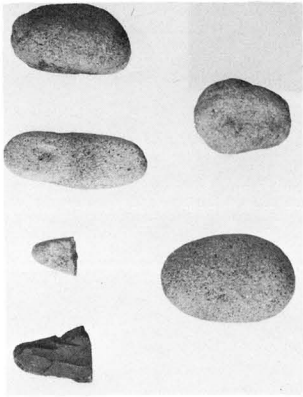




图版36

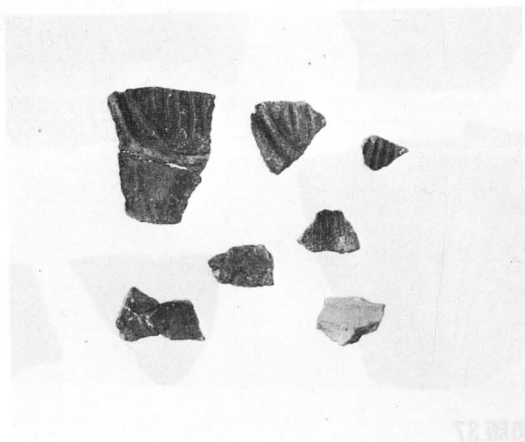
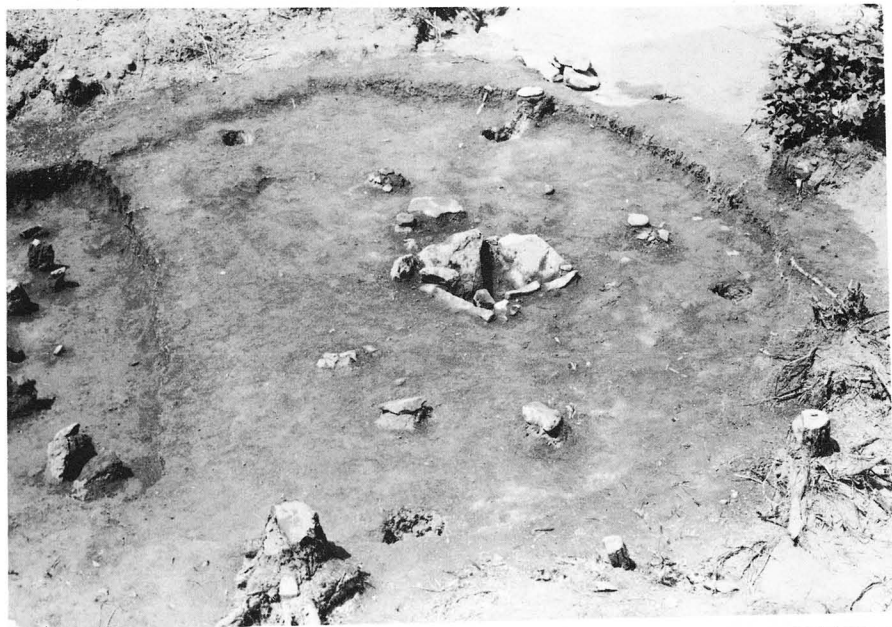
柳坪遗迹B地区3号住居址

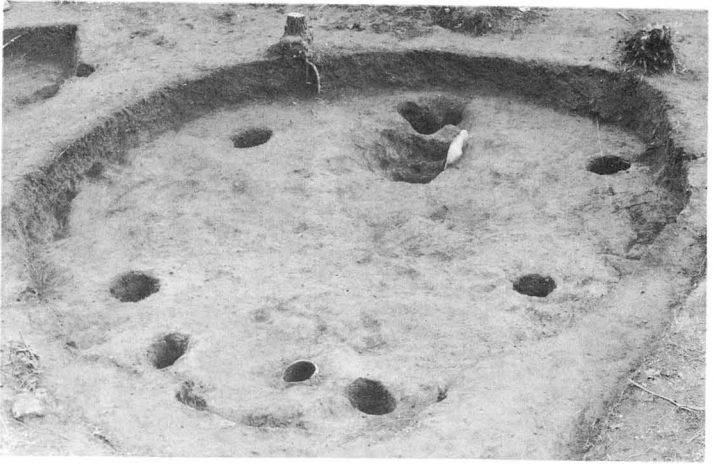




图版37

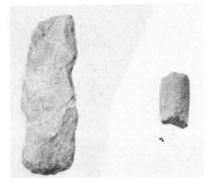
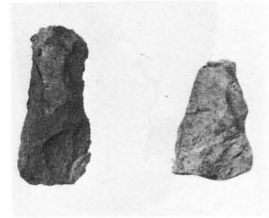
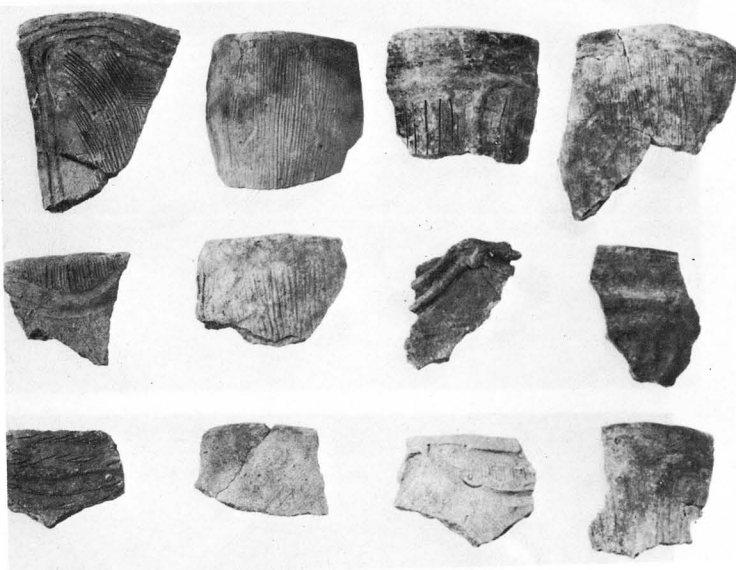
柳坪遺跡B地区3号住居址出土遺物





图版39

柳坪遺跡B地区7号住居址

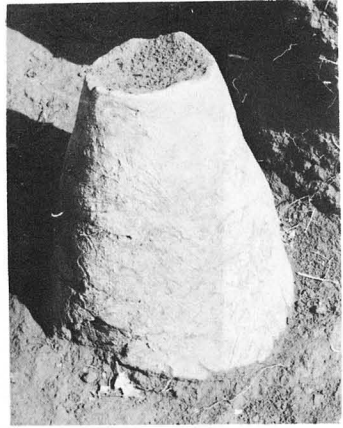
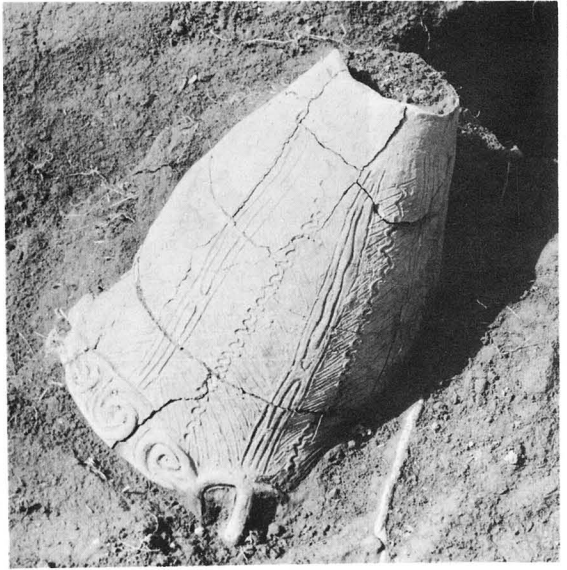


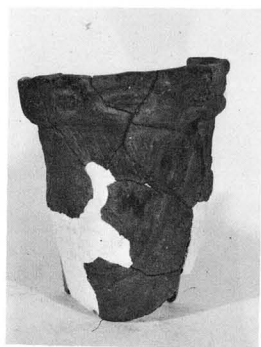




图版41

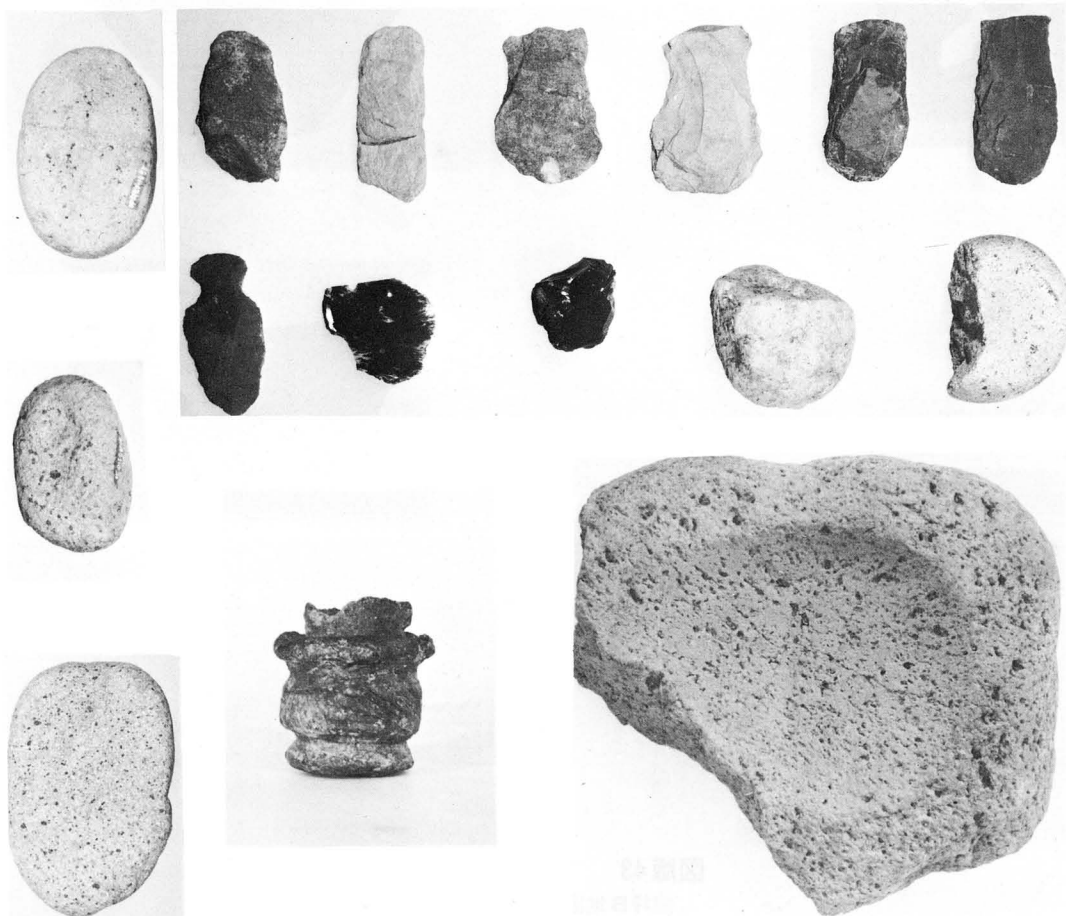
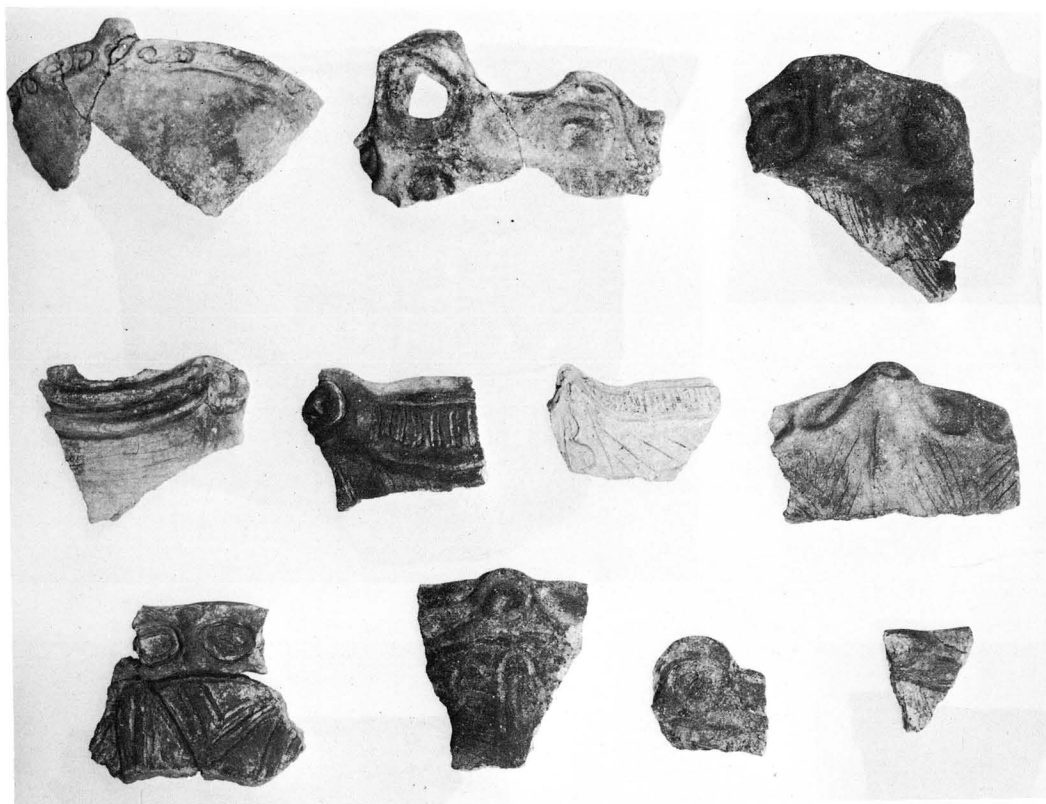
柳坪遗迹B地区10号住居址



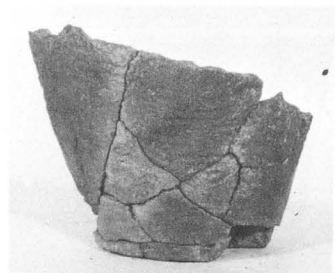
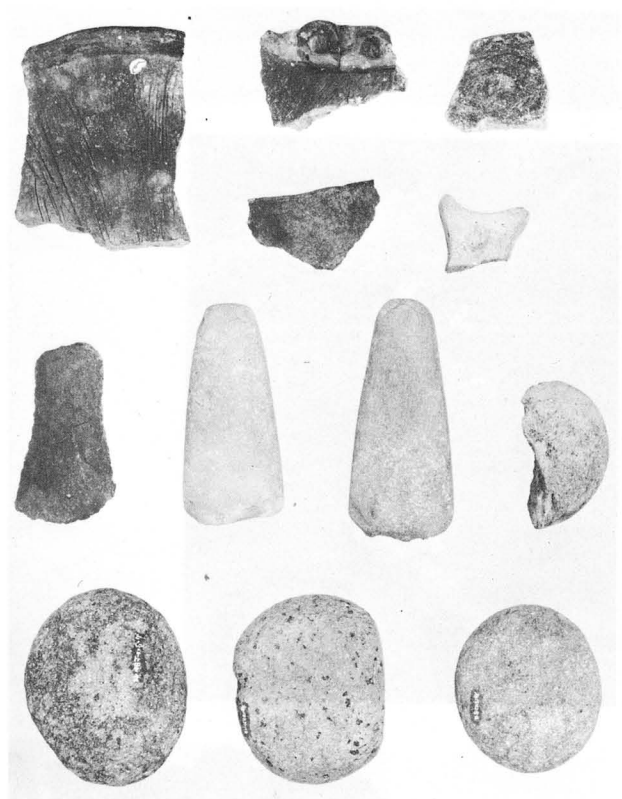


图版43

柳坪B地区10号住居址出土遺物(2)

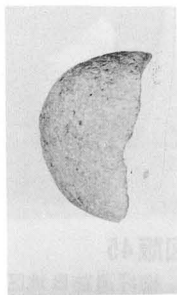
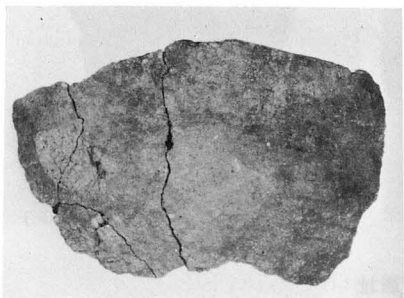
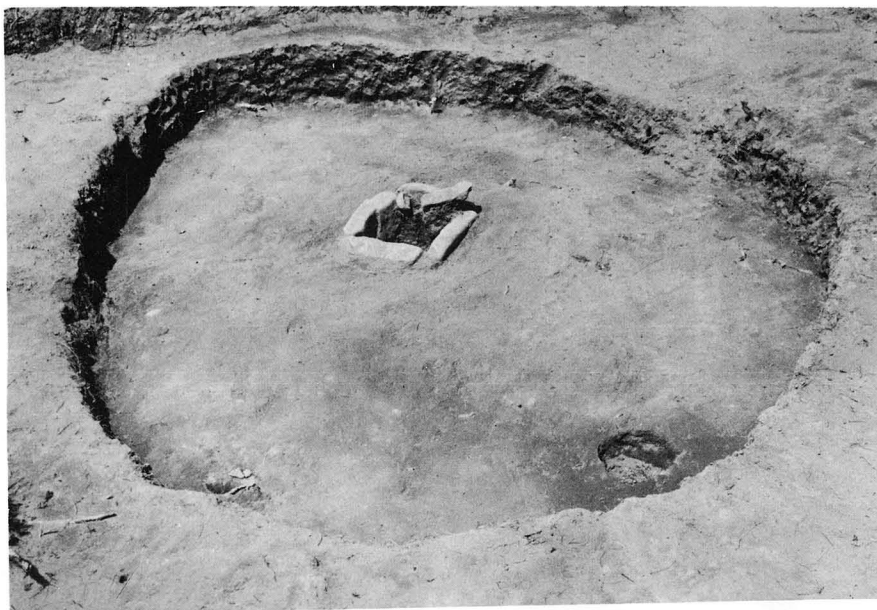


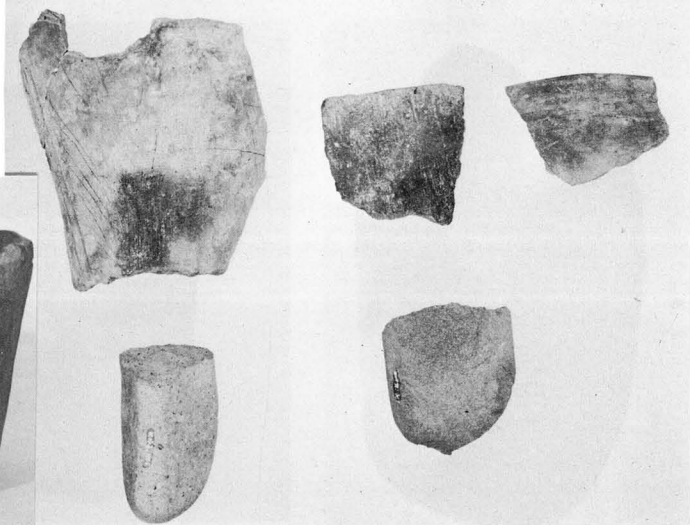
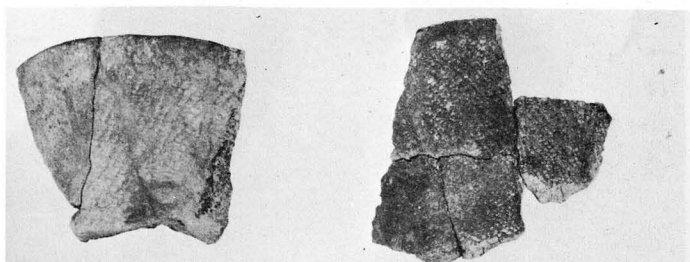
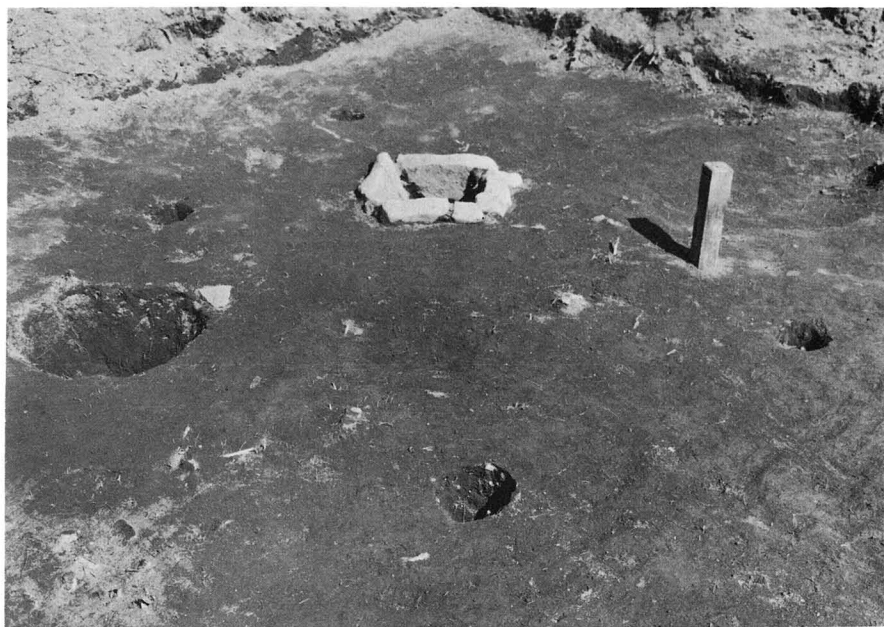




图版45

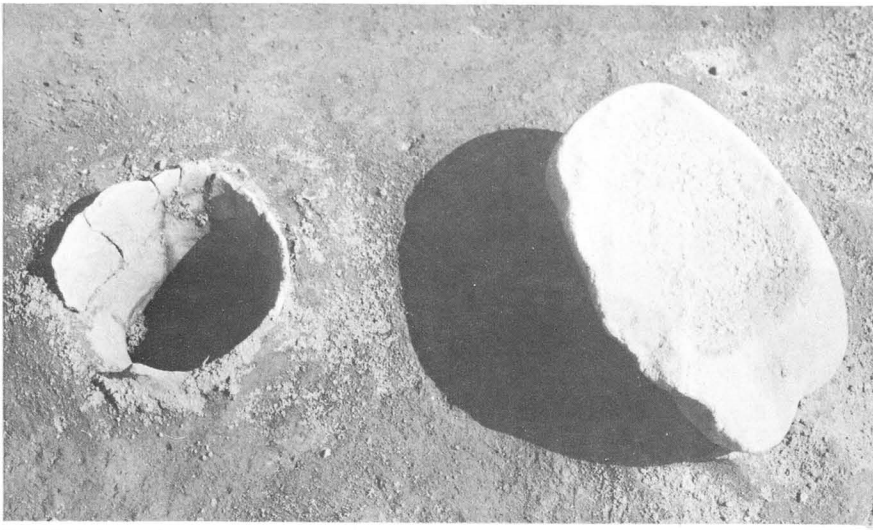
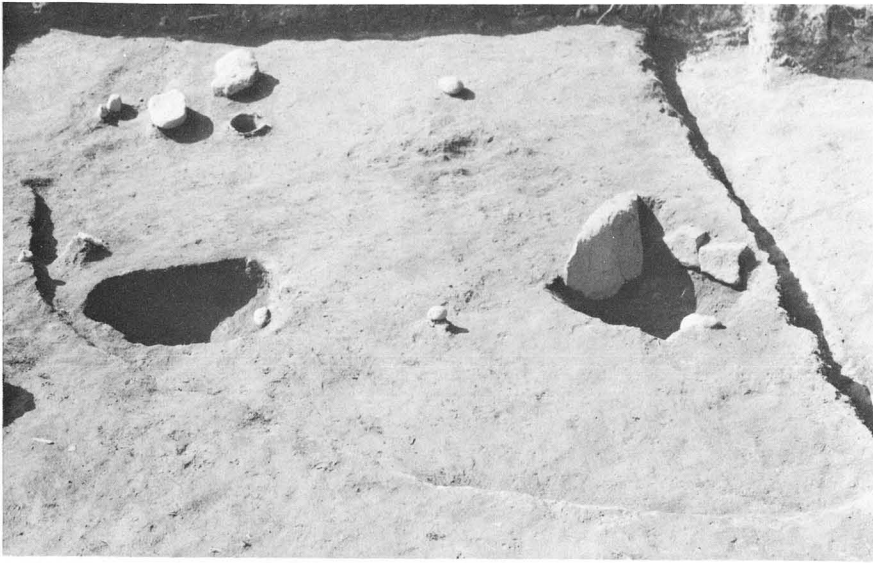
柳坪遗址B地区11号住居址





图版47

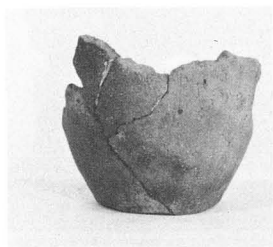
柳坪遗迹B地区 | 3号住居址

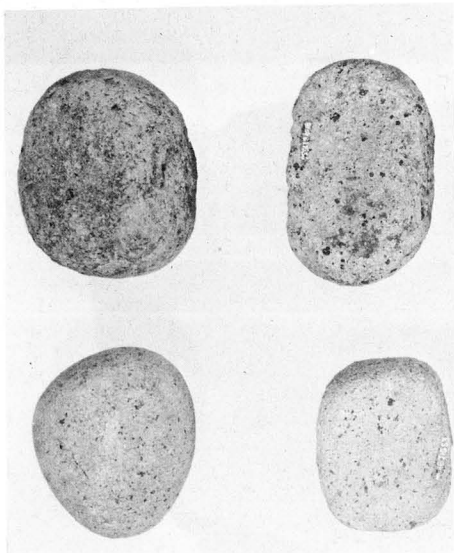
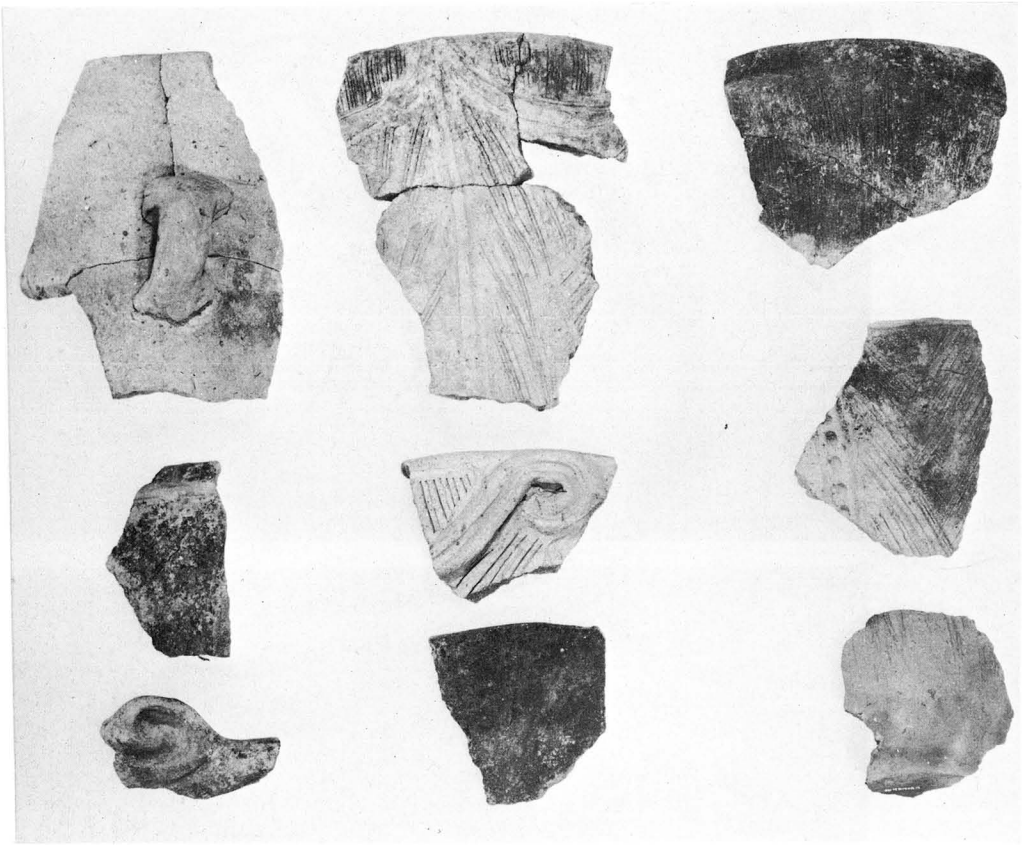


图版48

柳坪遗迹B地区14号住居址

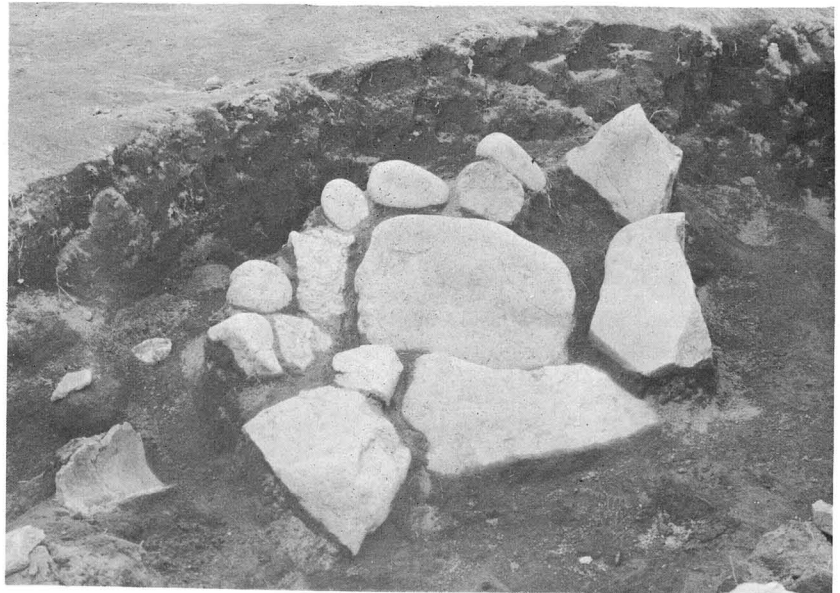
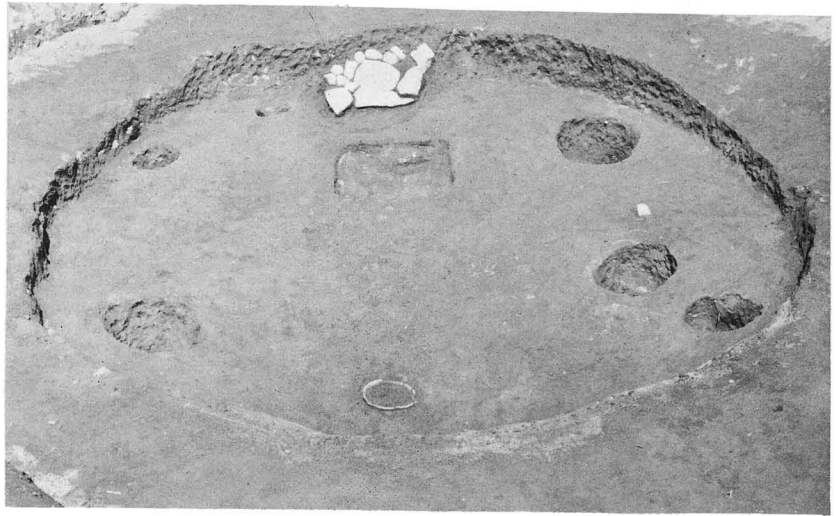
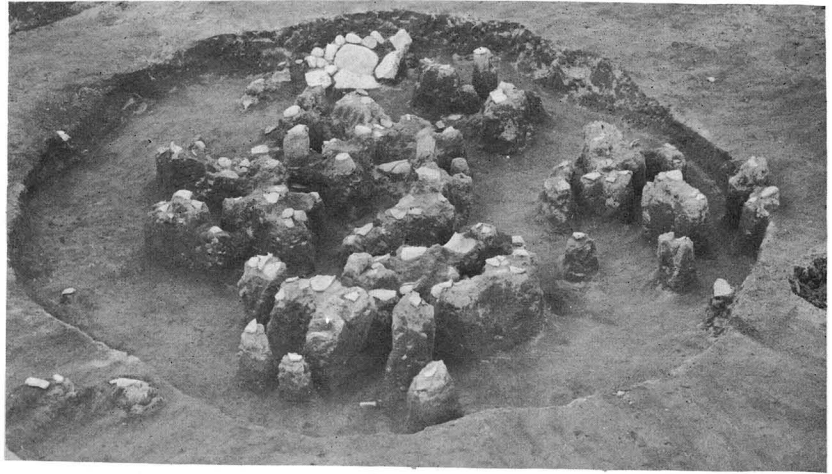
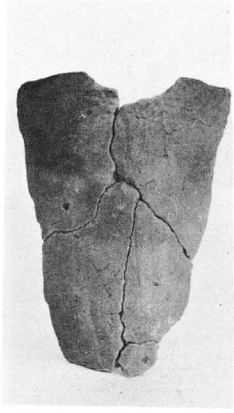






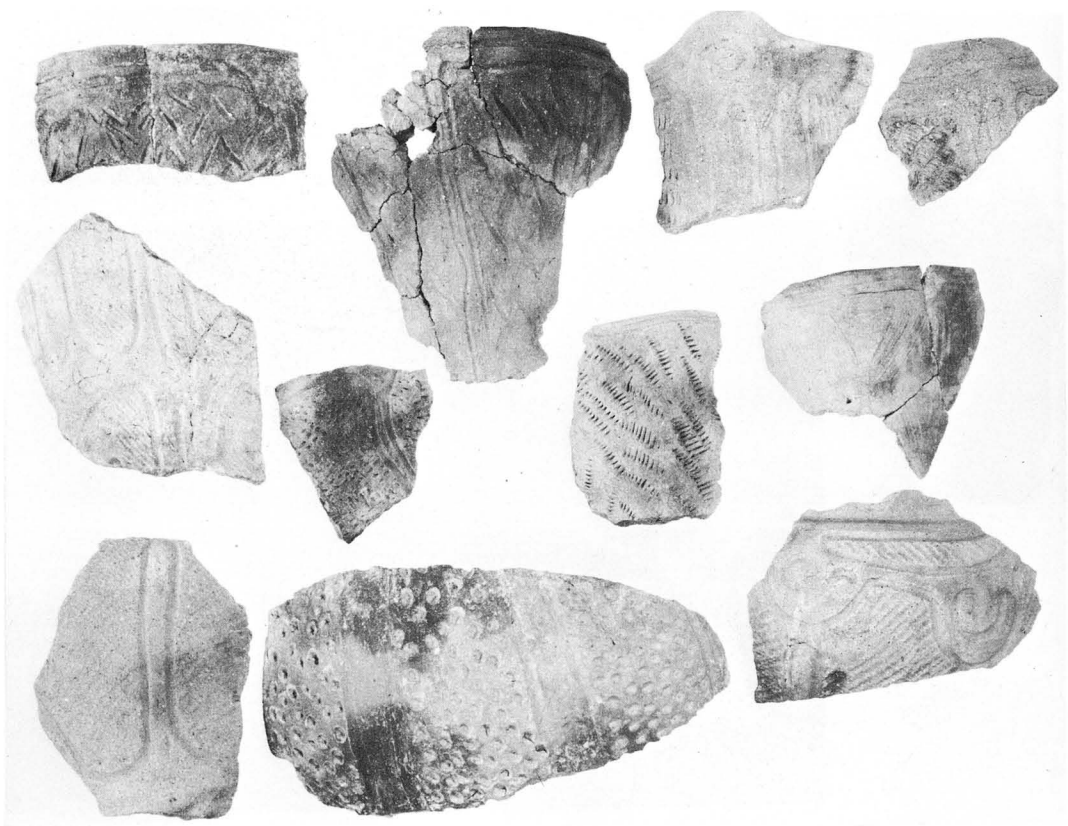
图版50

柳坪遗迹B地区I5号住居址出土遗物



图版51

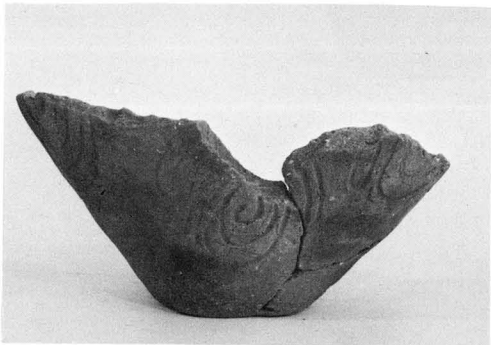
柳坪遗址B地区I6号住居址



图版52

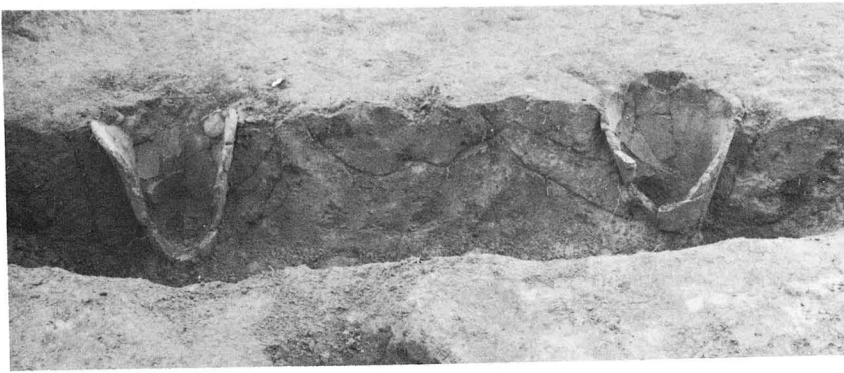
柳坪遗址B地区16号住居址出土遗物(1)





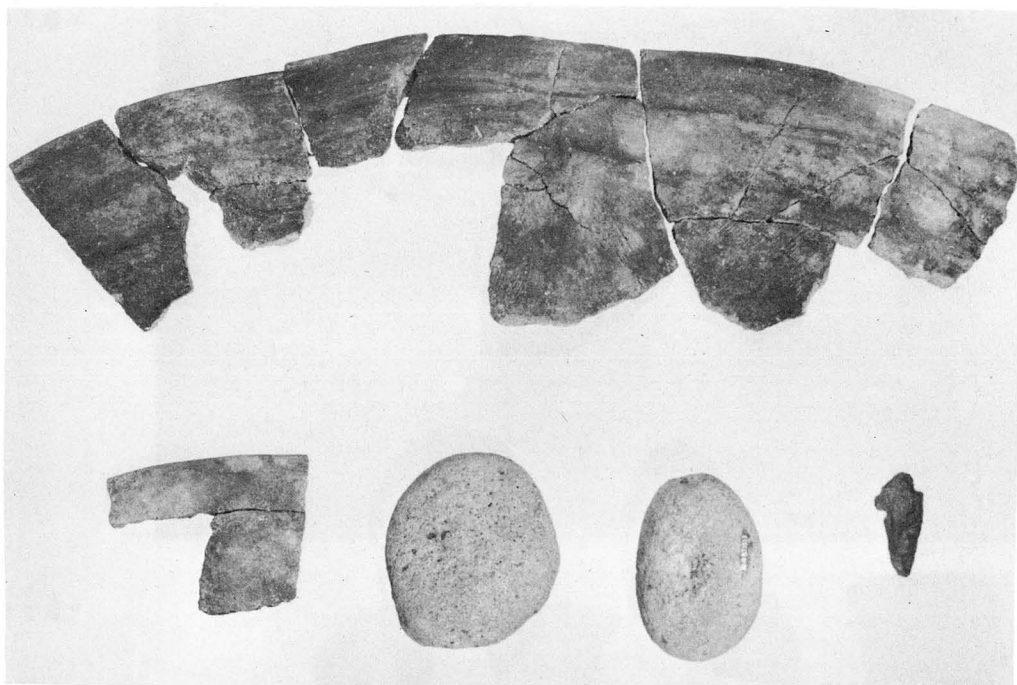
图版53

柳坪遗迹B地区16号住居址出土遗物(2)



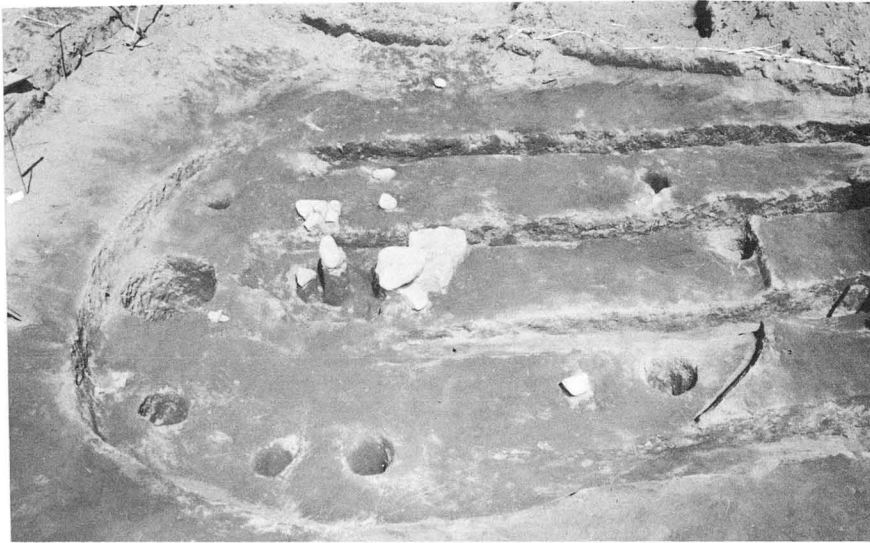
图版54

柳坪遗址B地区23号住居址



图版55

柳坪遺跡B地区23号住居址



YB 2 4 J 图版 56

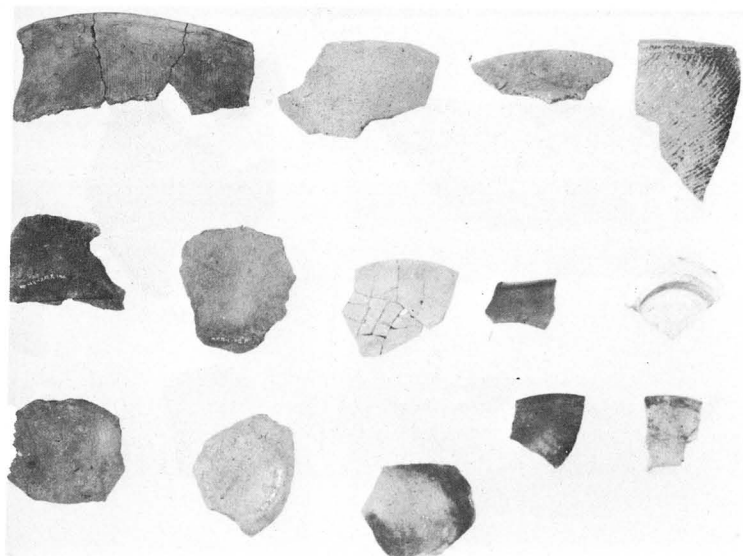
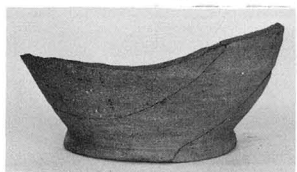
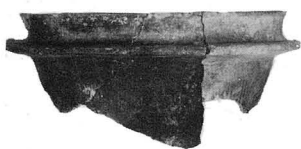
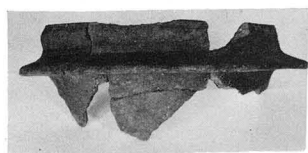
柳坪遺跡B地区24号住居址、他



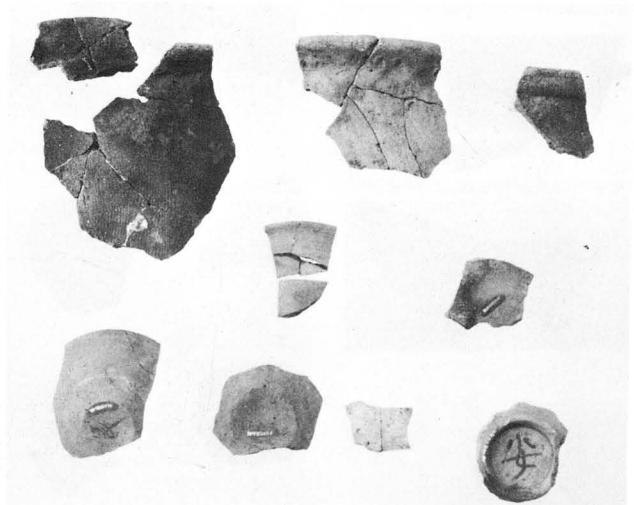
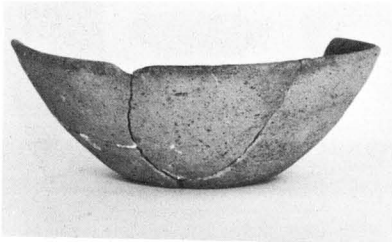
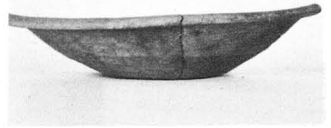
YB 2 6 J

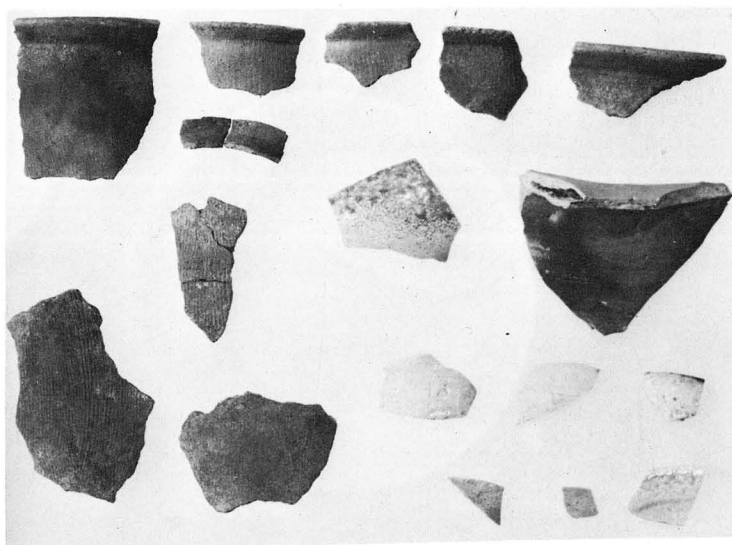
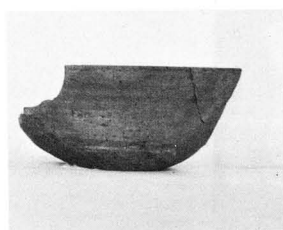


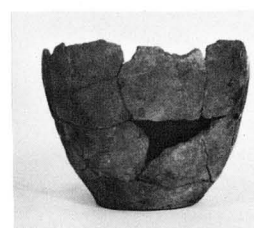
YB 3 F







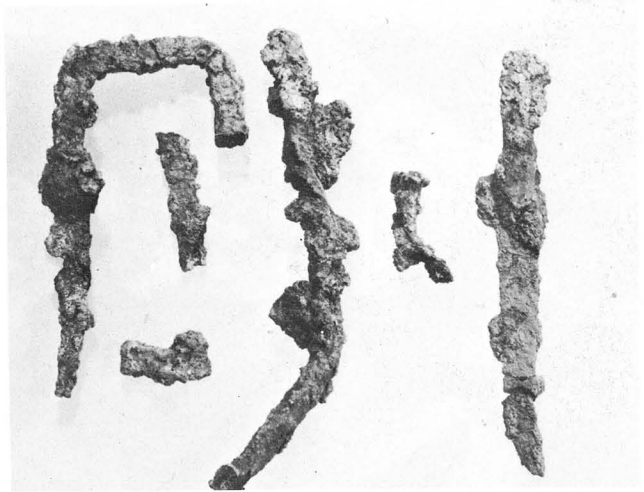
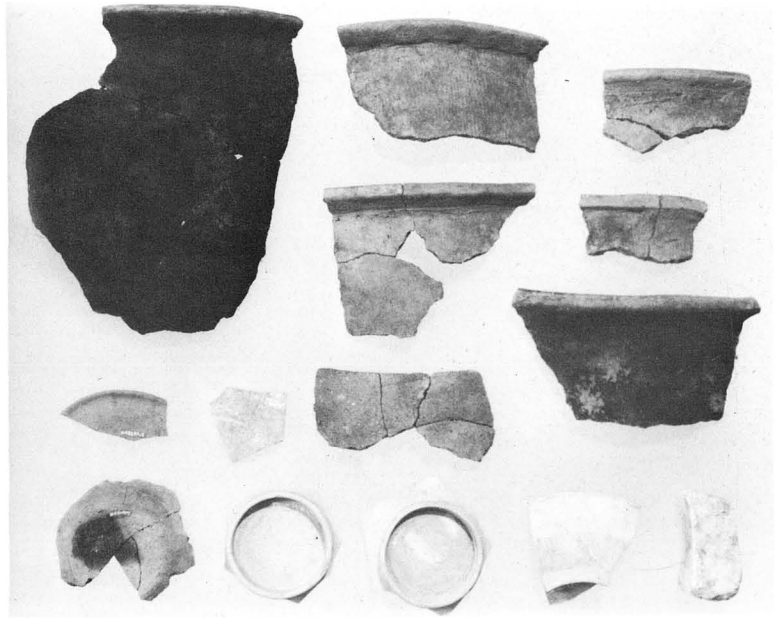




图版 60

柳坪遺跡  
B地区8号住居址

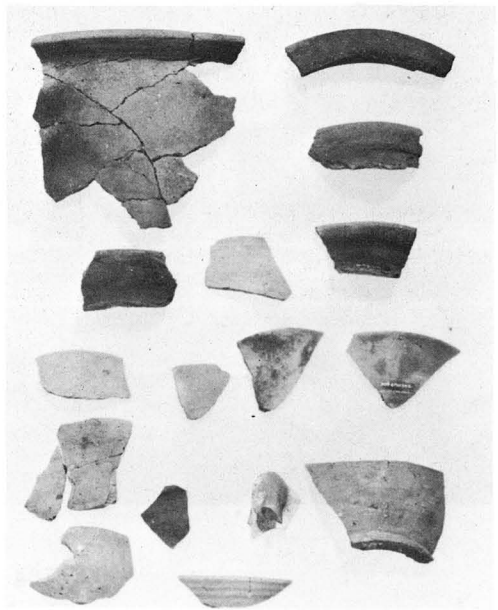
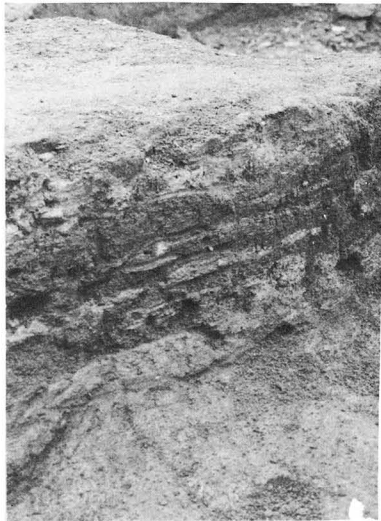




图版61

柳坪遗迹B地区8号住居址出土遗物



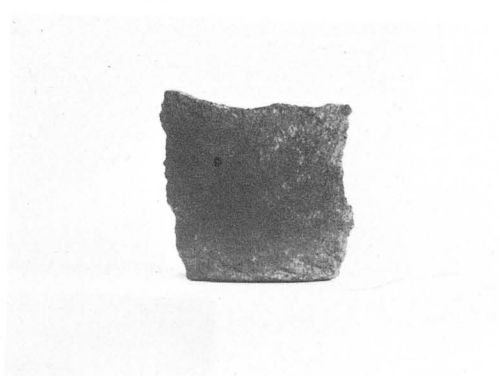
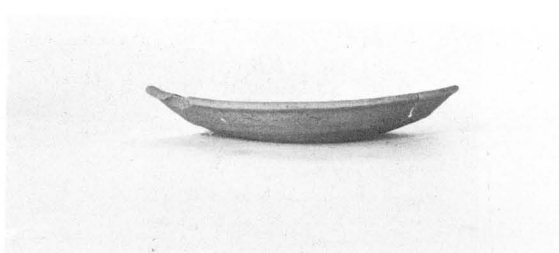
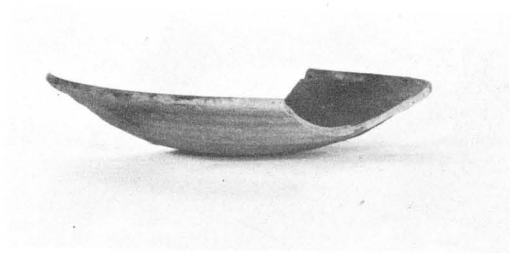


床面貼床狀態



图版64

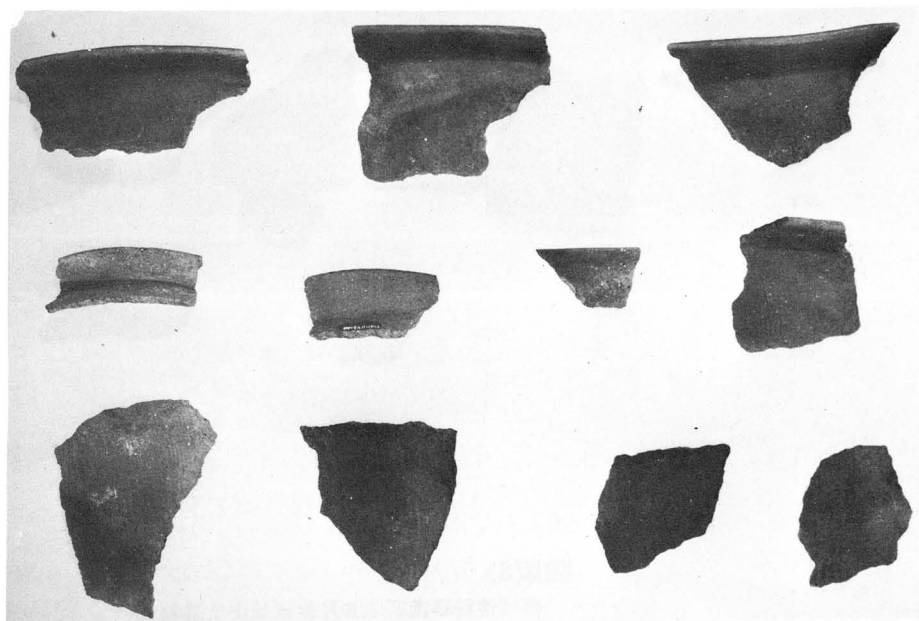
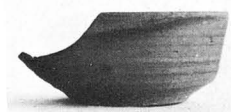
柳坪遗迹B地区 | 8号住居址

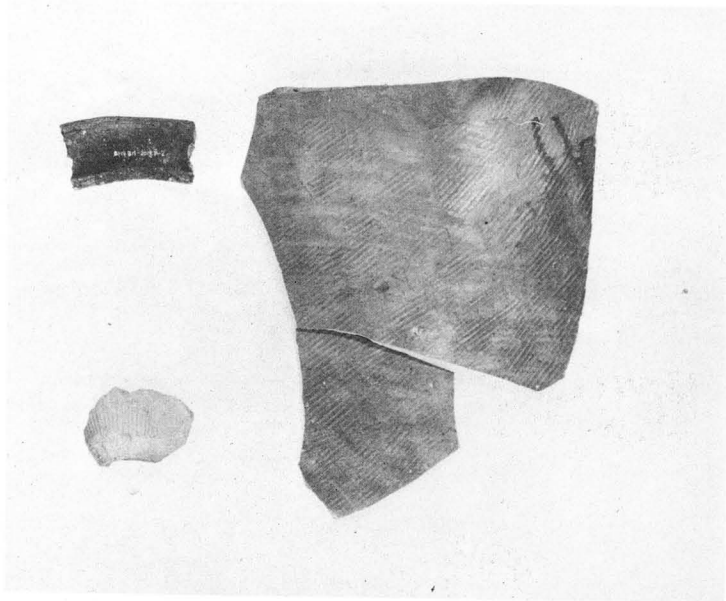


图版65

柳坪遗迹B地区18号住居址出土遗物

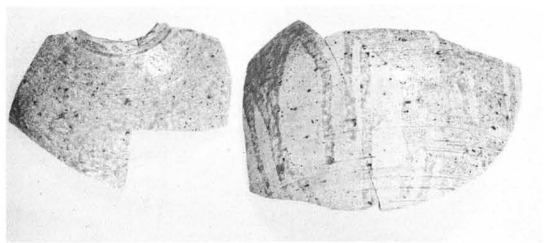
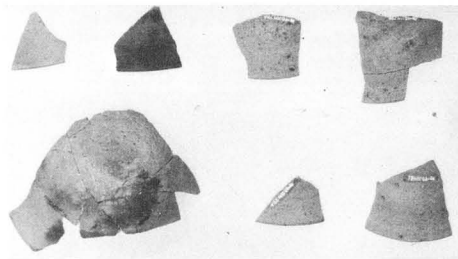
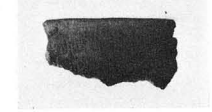
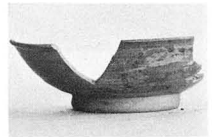
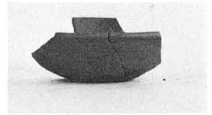
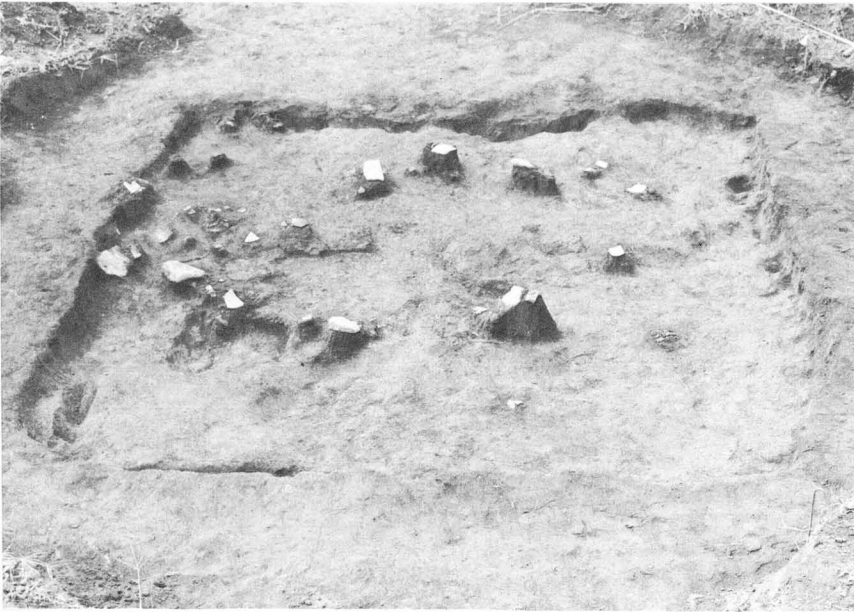






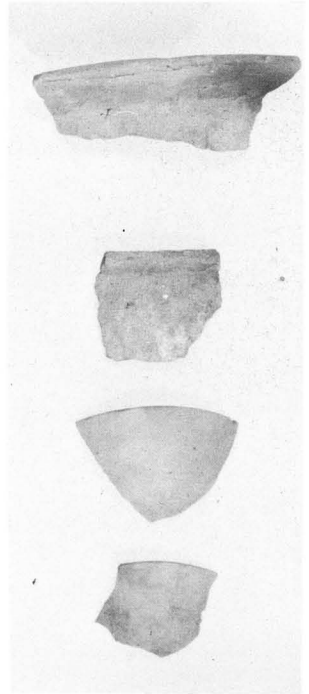
图版67

柳坪遗迹B地区20号住居址



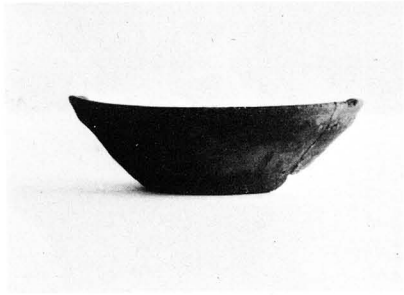
图版68  
柳坪遗址21号住居址





图版 69

柳坪遺跡 2 号住居址



图版70

柳坪遺跡 2 3号住居址



柳坪A地区石鏃他



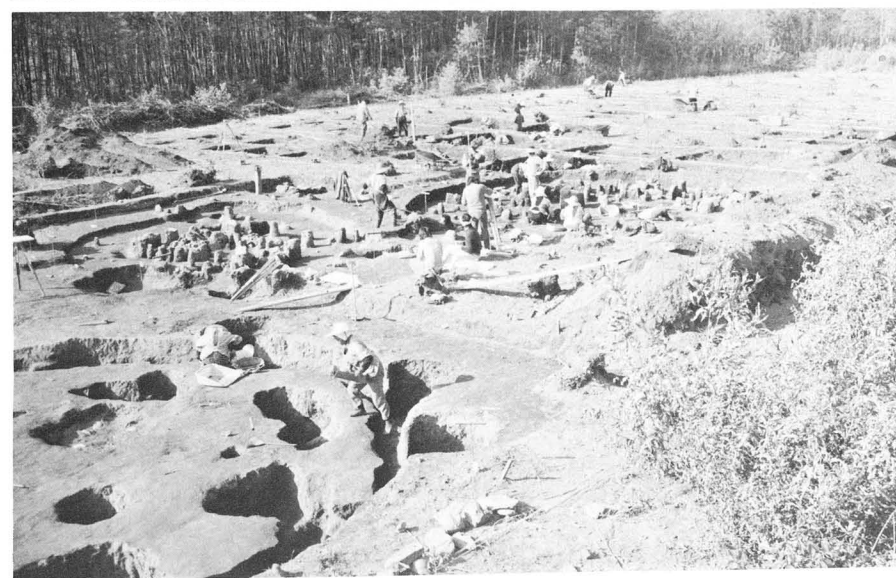
柳坪B地区石鏃他



柳坪B地区出土墨書土器

图版71

柳坪遺跡、A、B地区石器及びB地区墨書土器

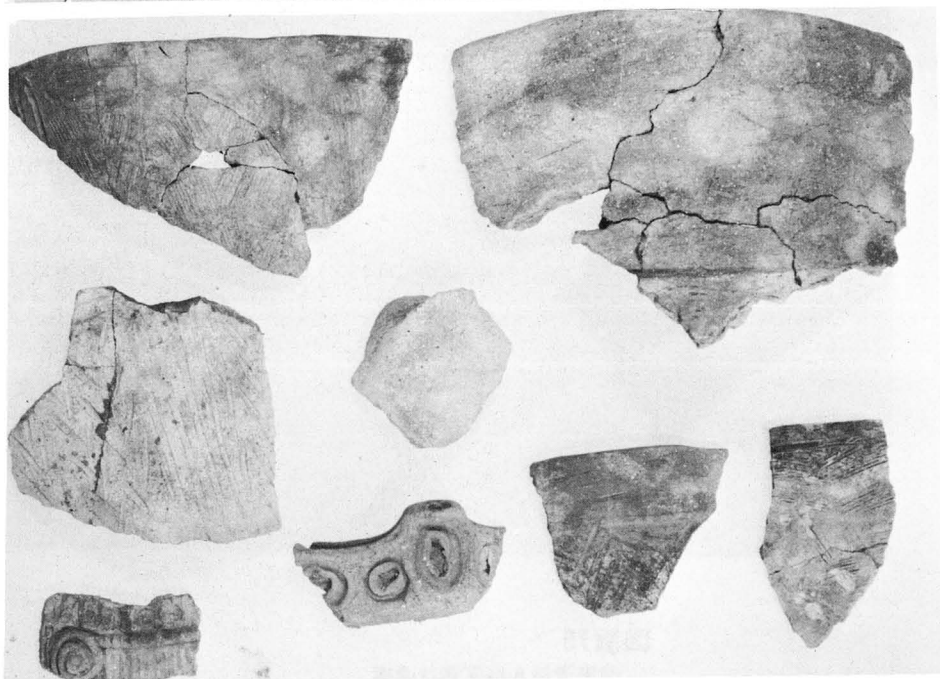
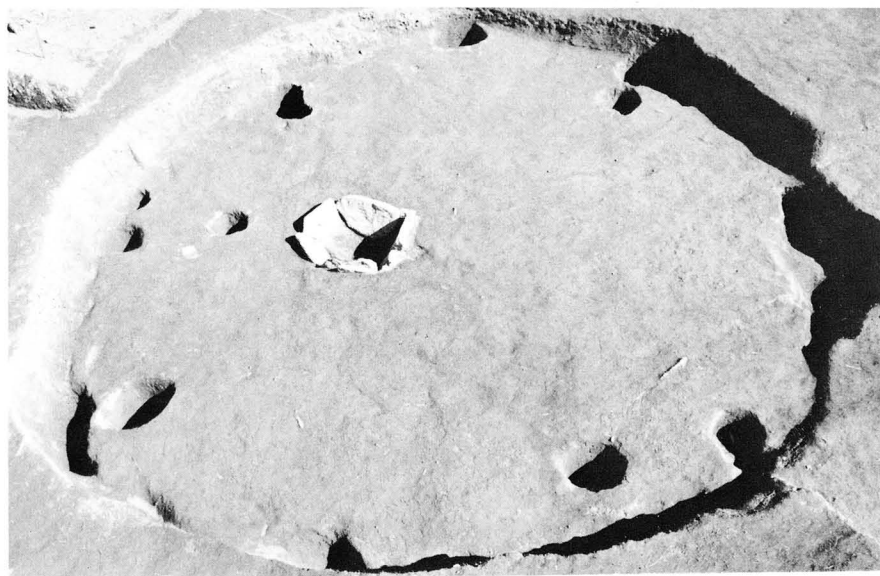


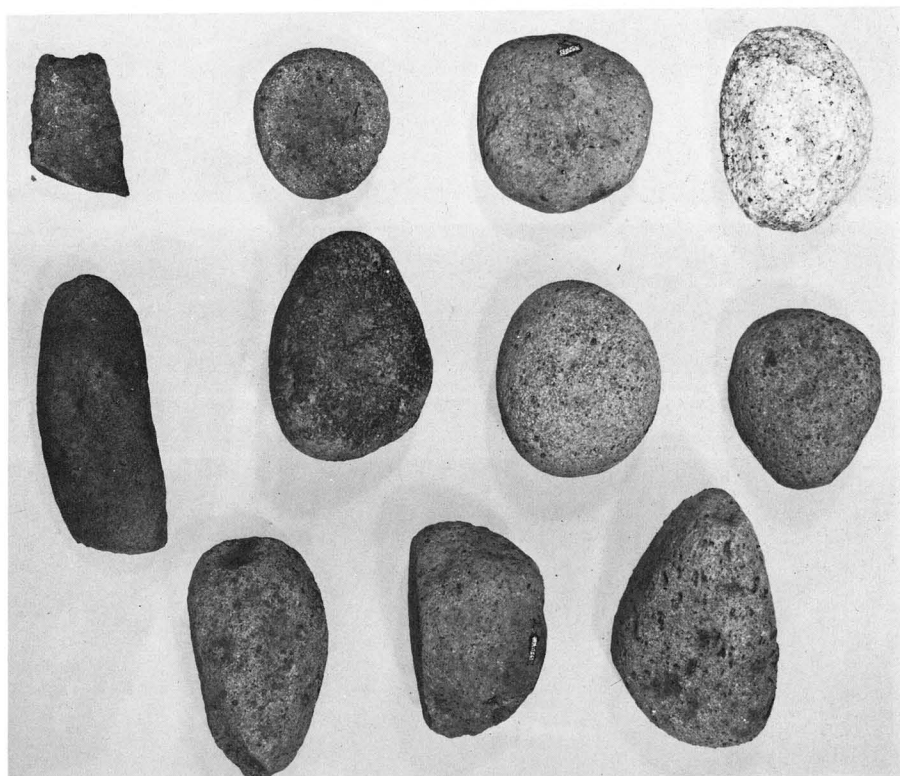
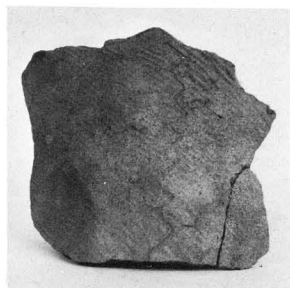
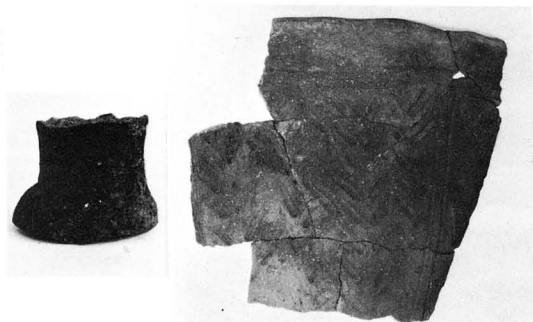
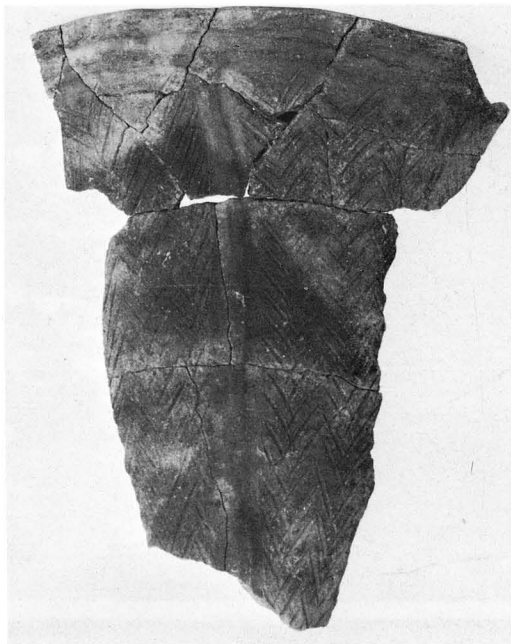


图版73

頭無遺跡A地区溝状遺構

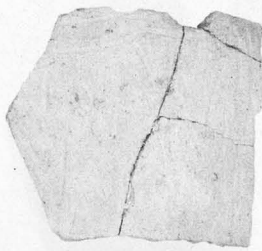
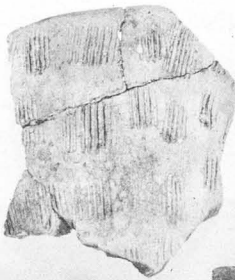
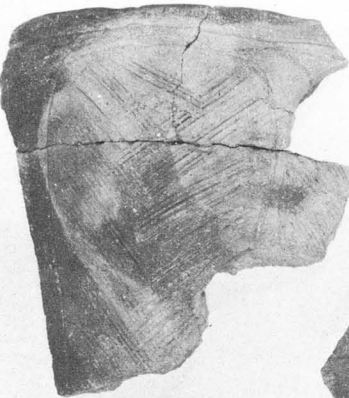
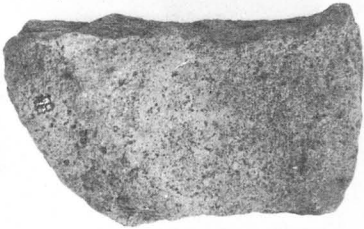
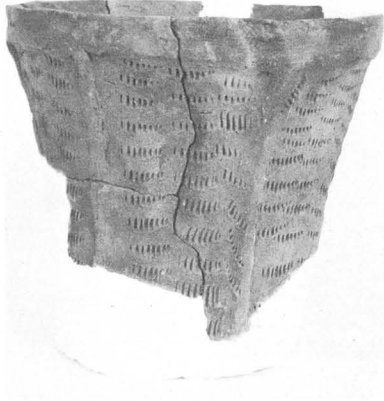


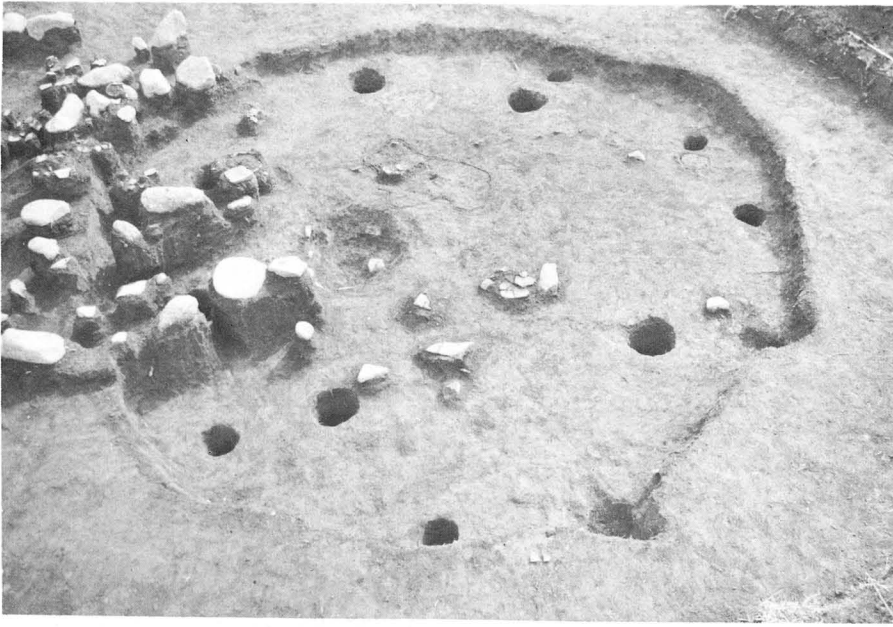


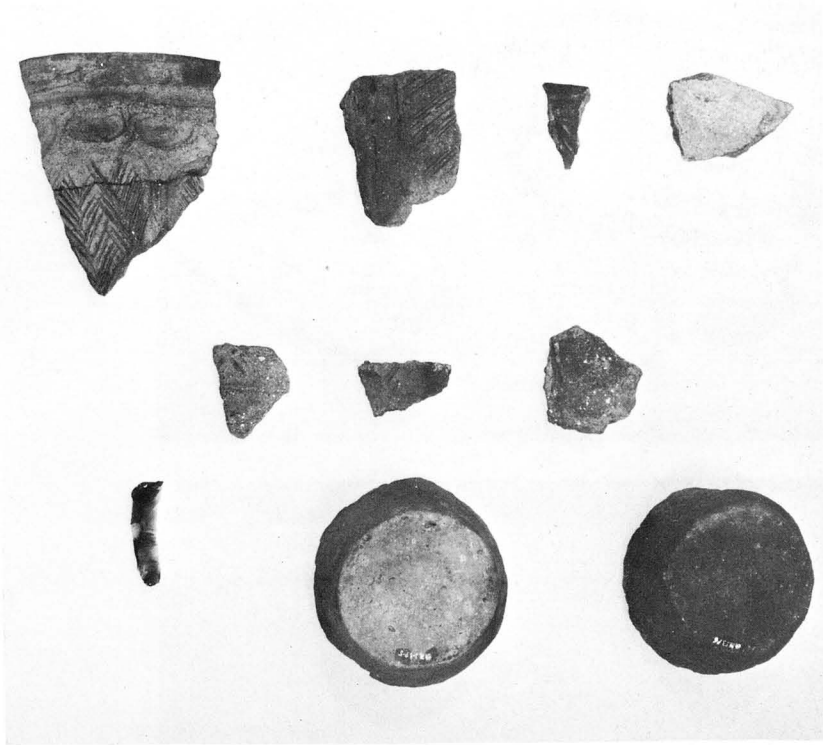






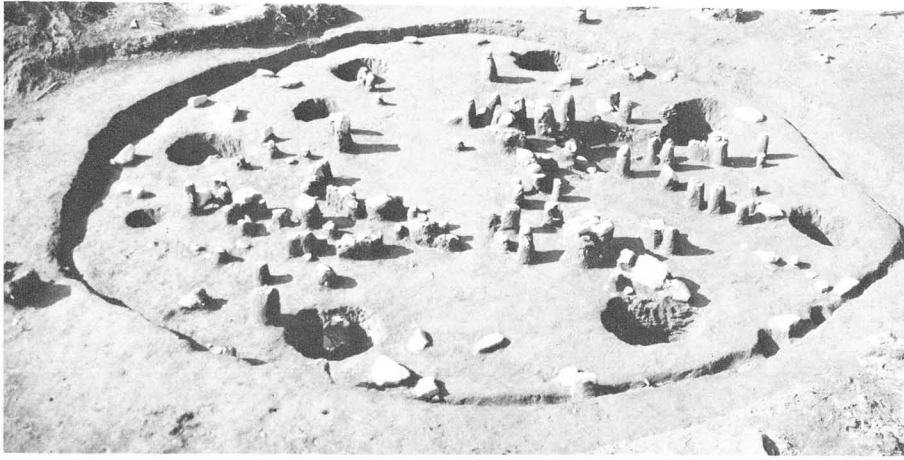






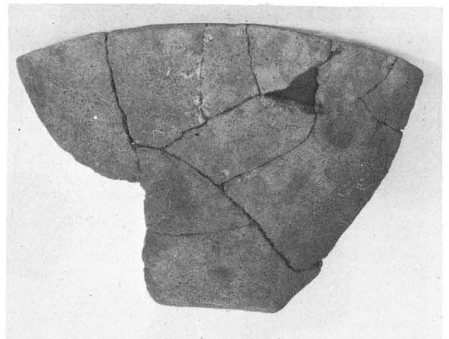
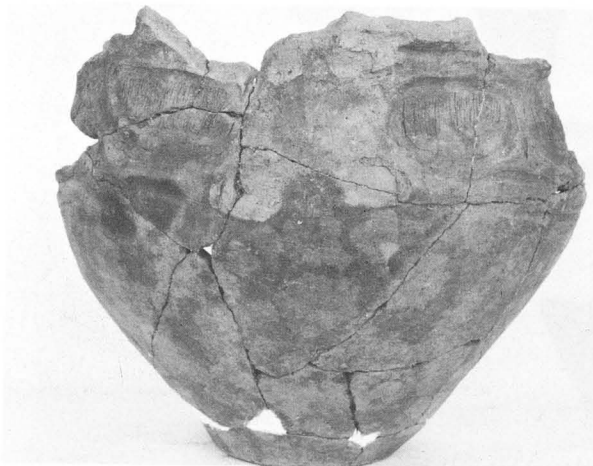
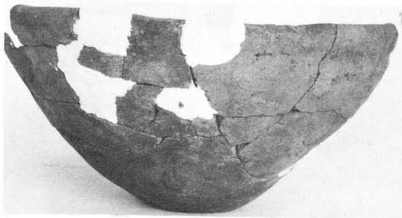
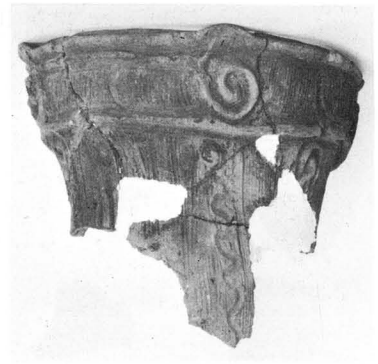
図版79

頭無遺跡3号住居址出土遺物

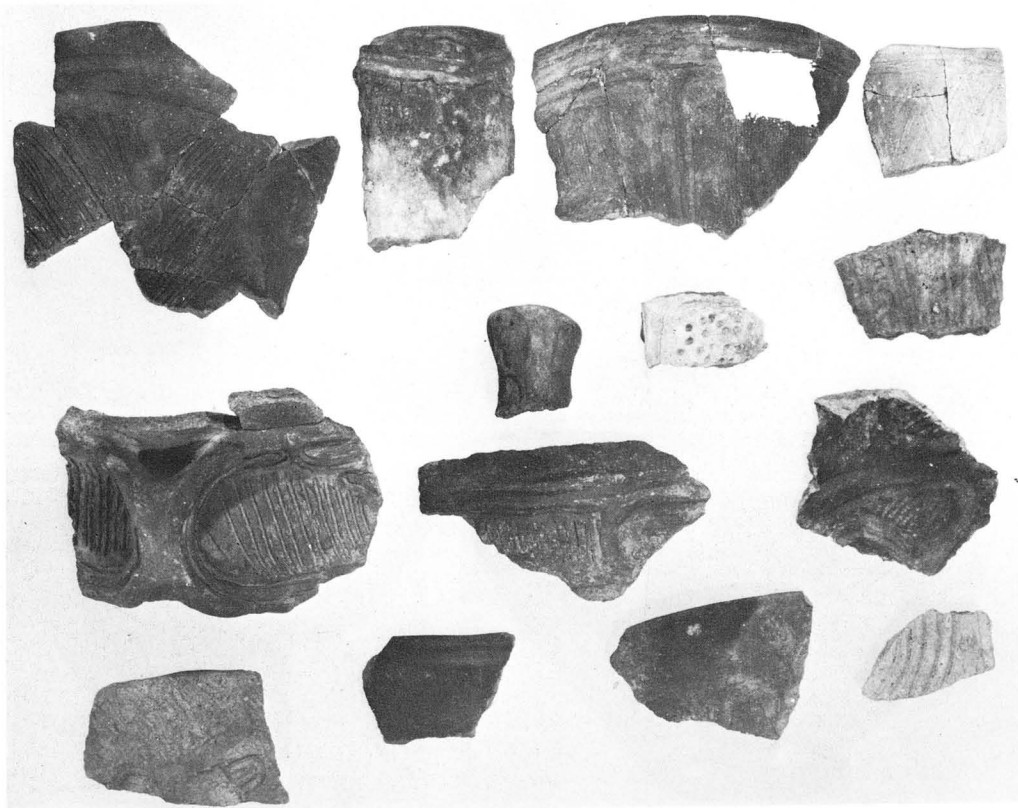


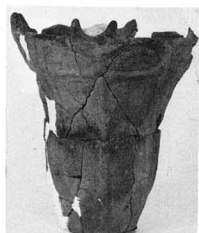
図版80

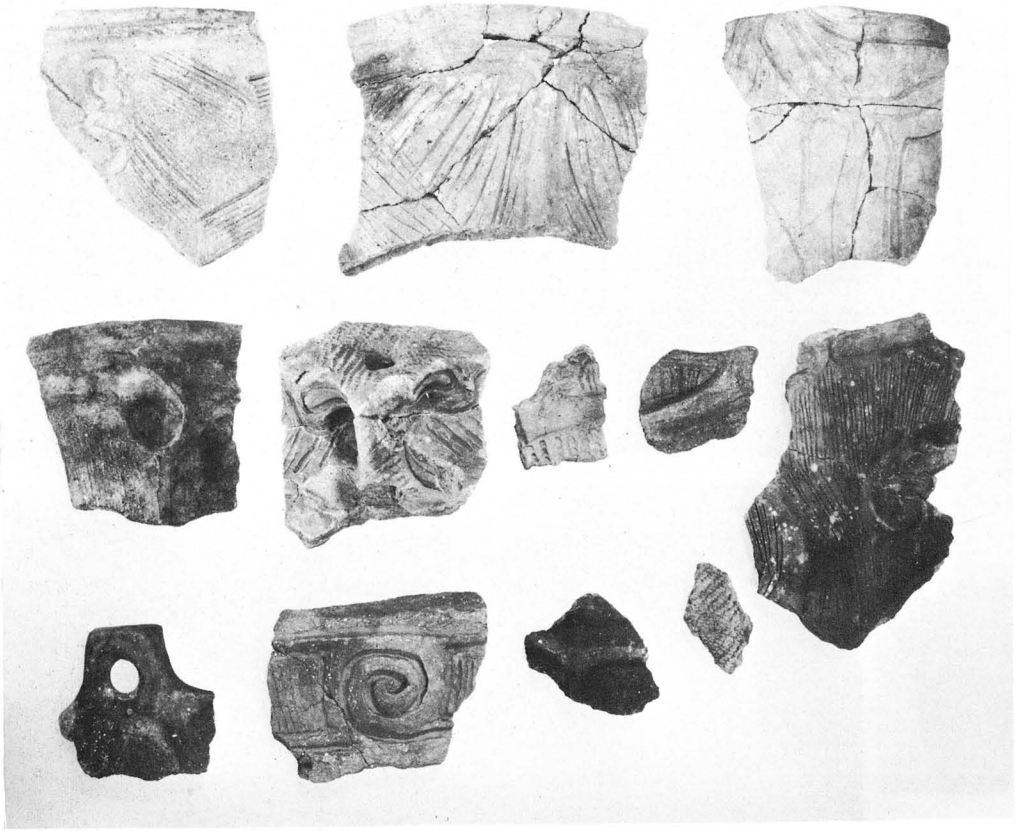
頭無遺跡4号住居址



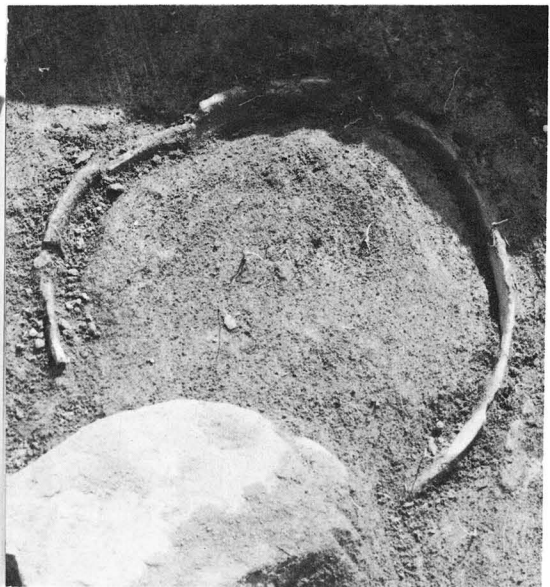
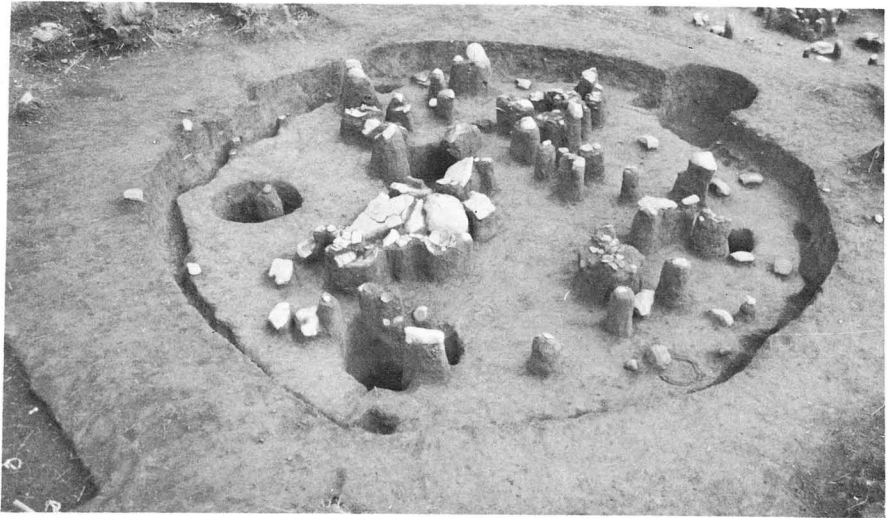


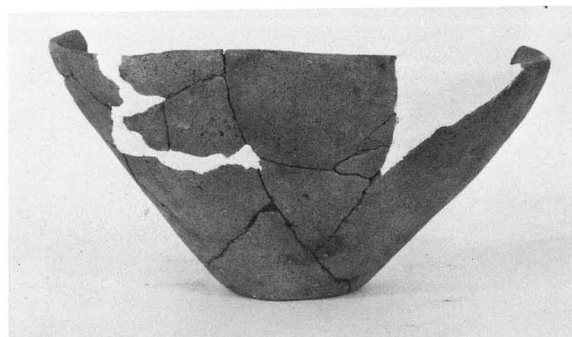
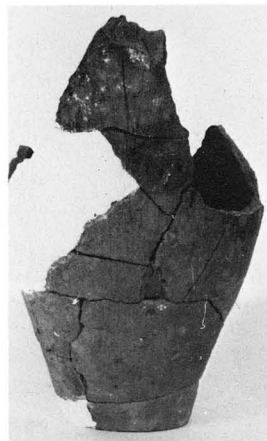
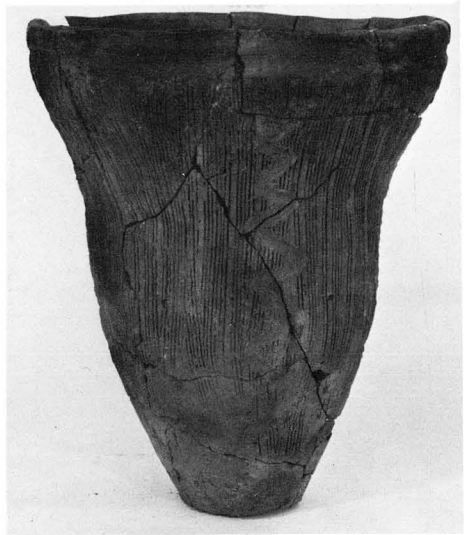
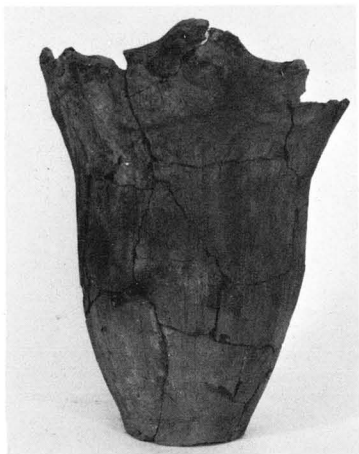


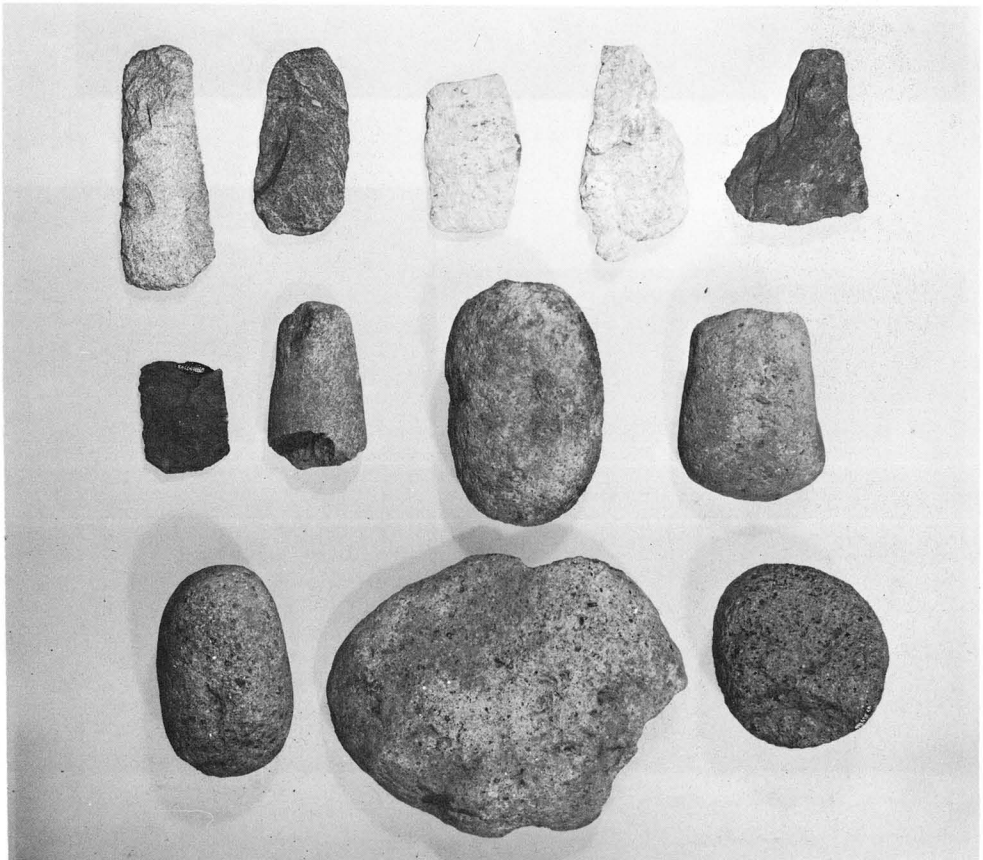
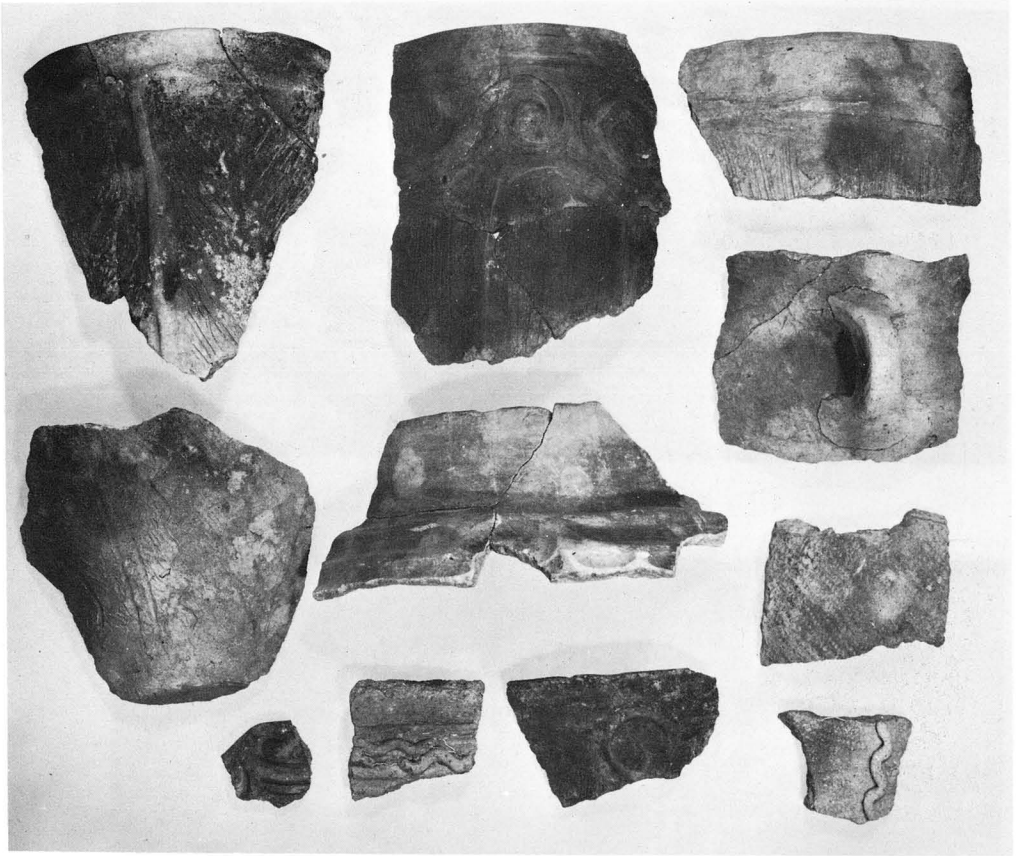


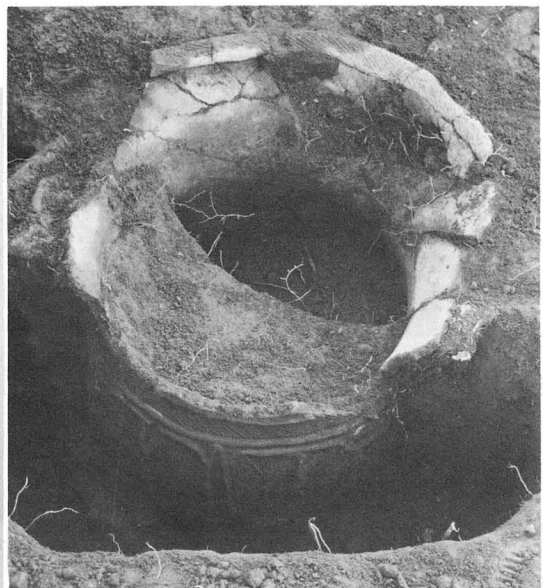








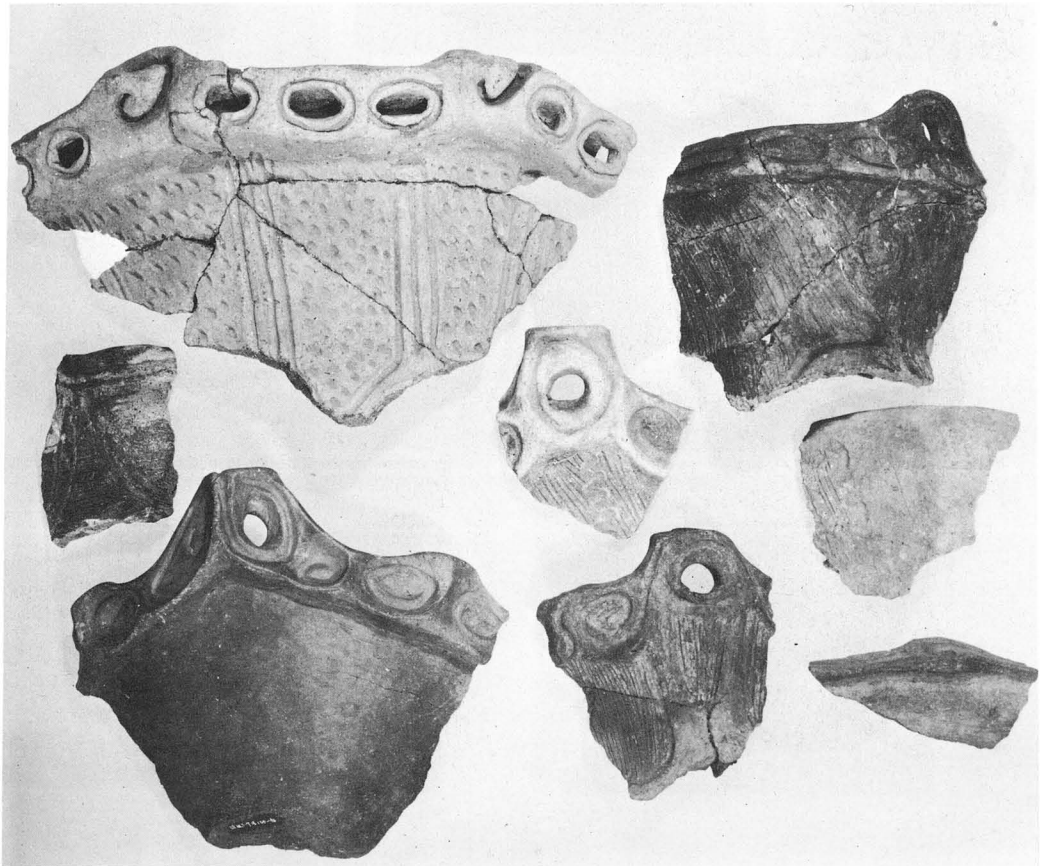
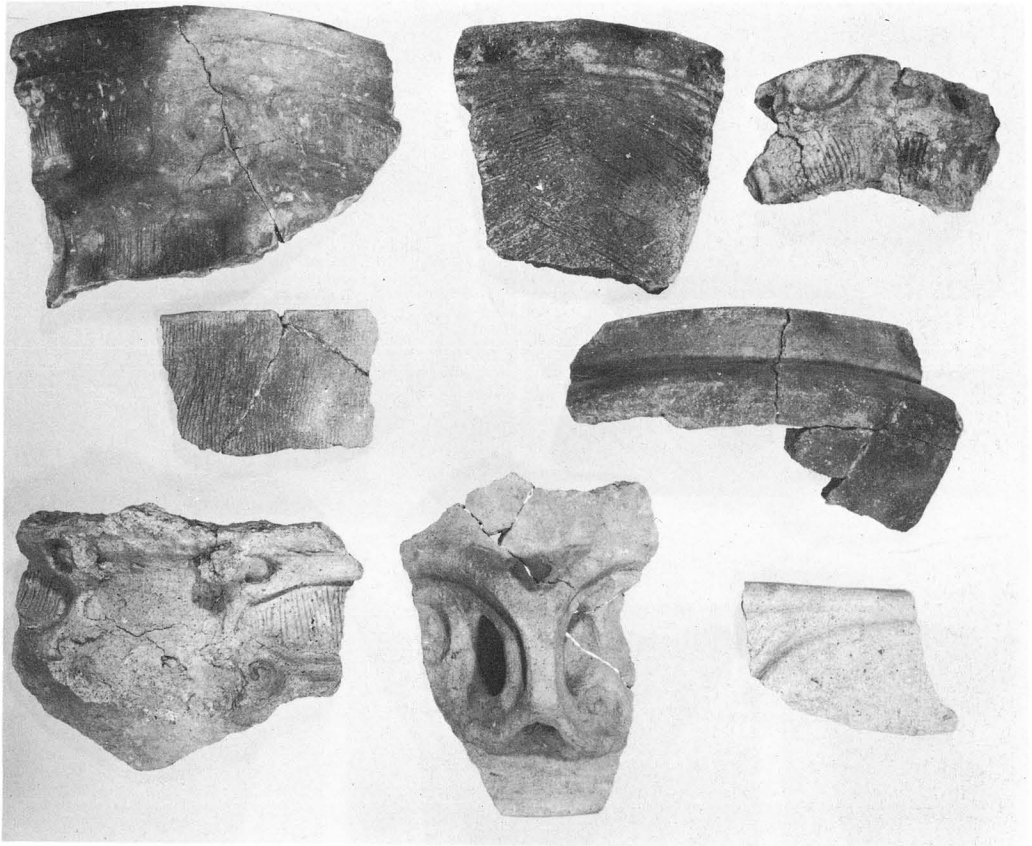


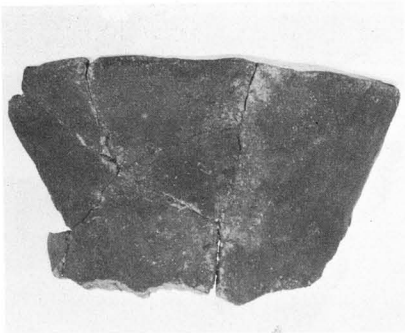


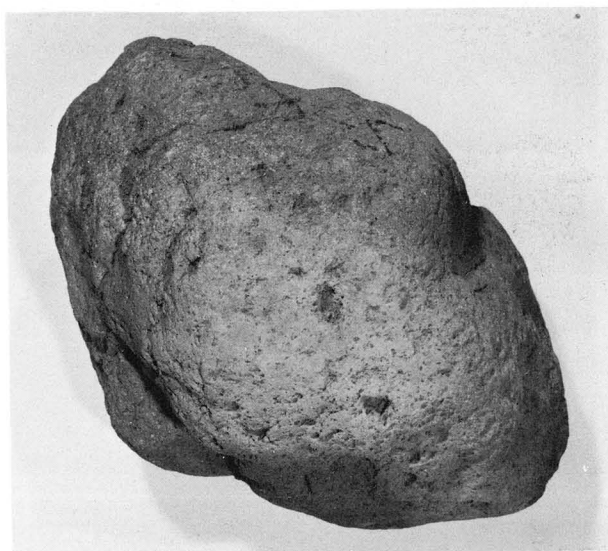
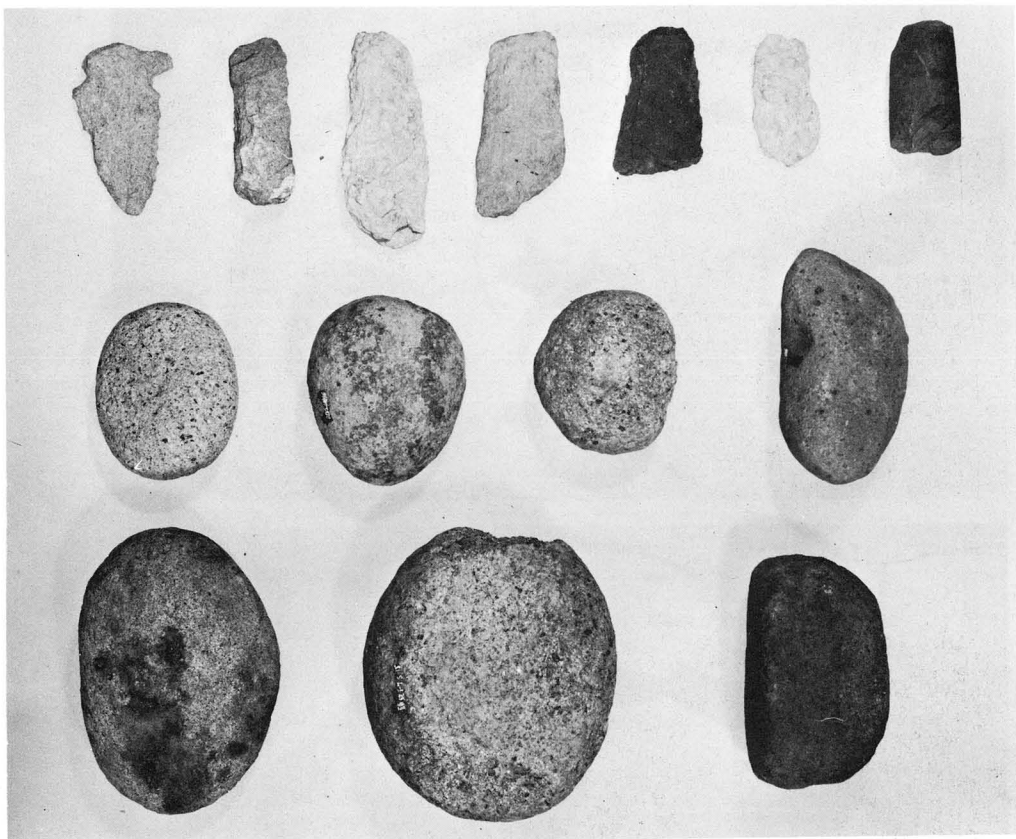
图版88

頭無遺跡 7号住居址



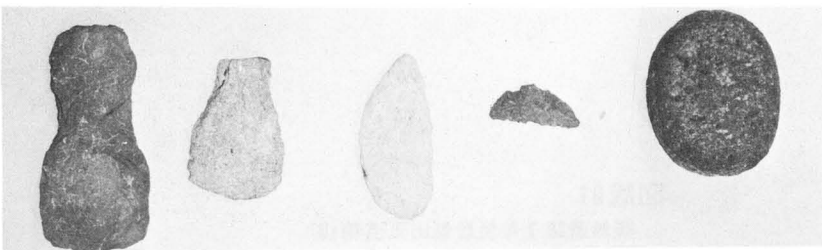
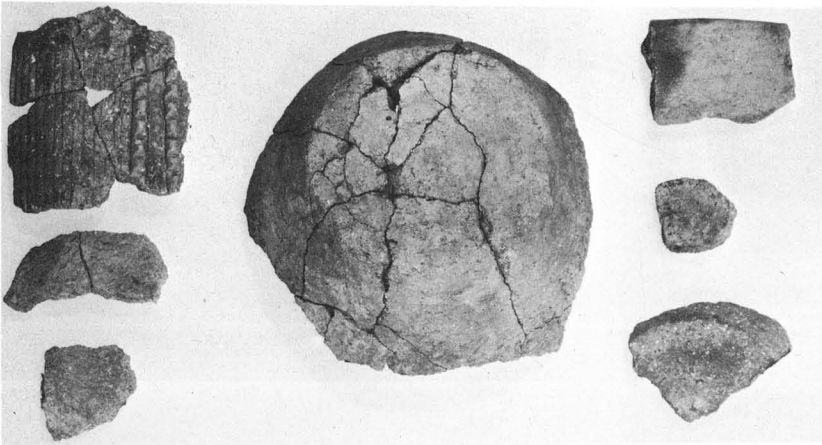
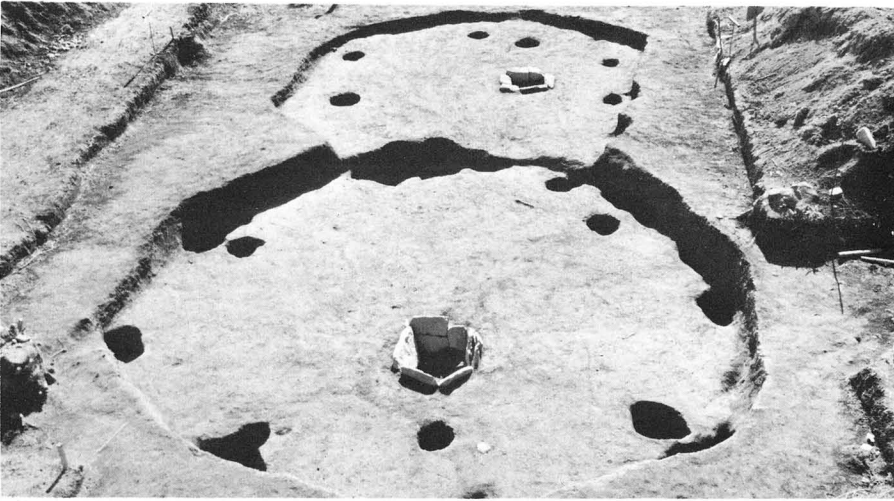






図版91

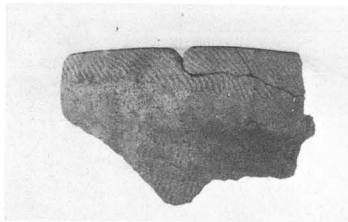
頭無遺跡 7号住居址出土遺物(3)

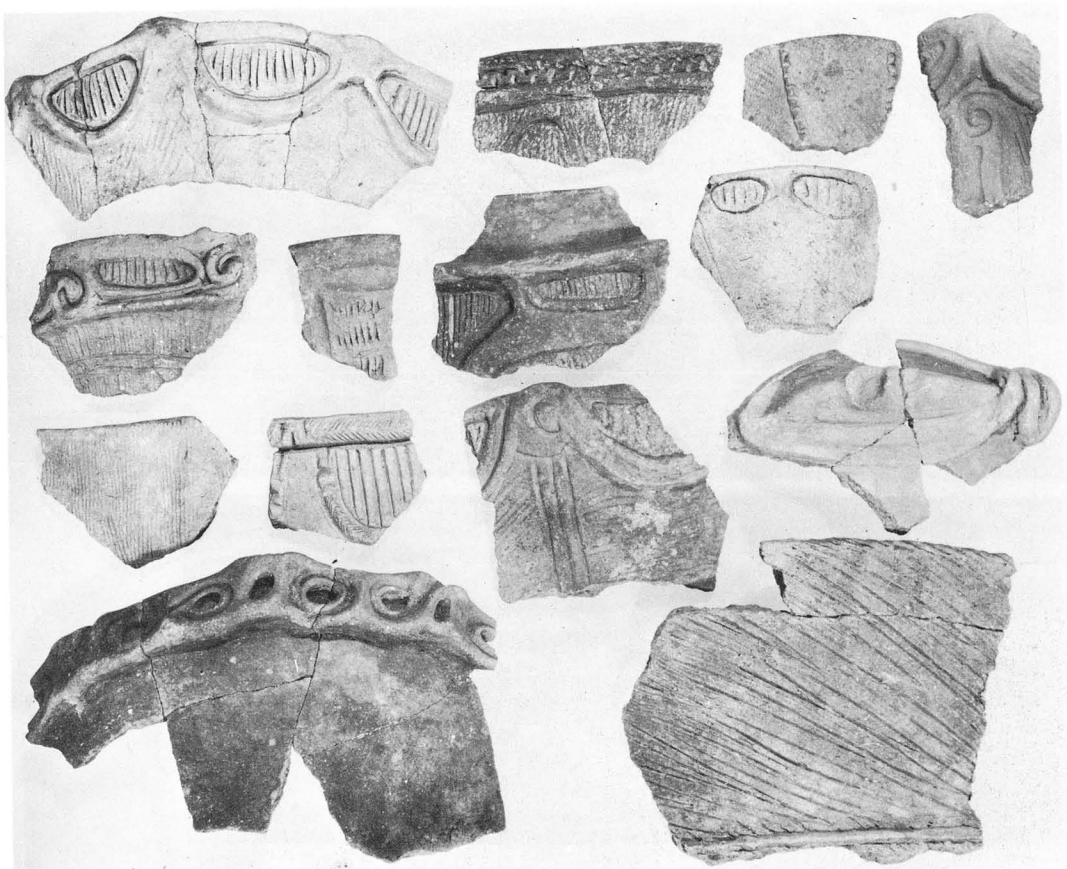


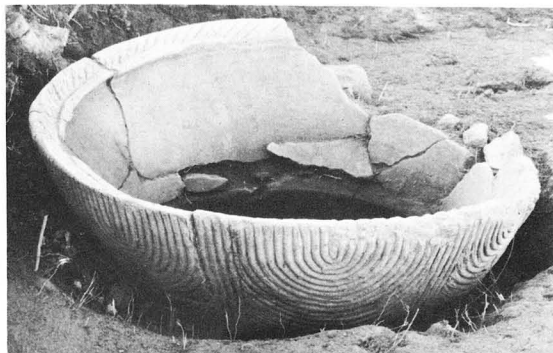
(上 8号、下 1号住居)



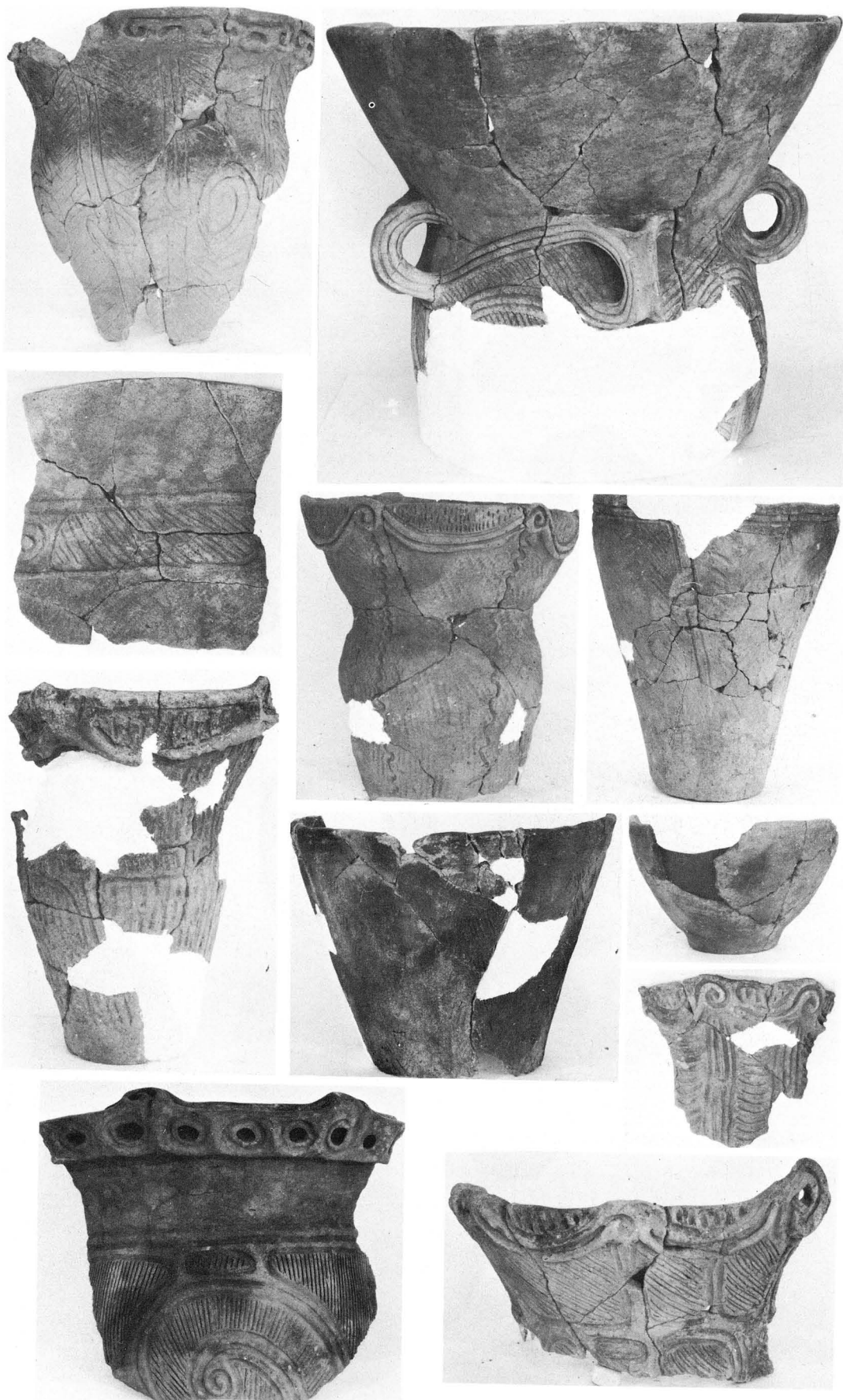


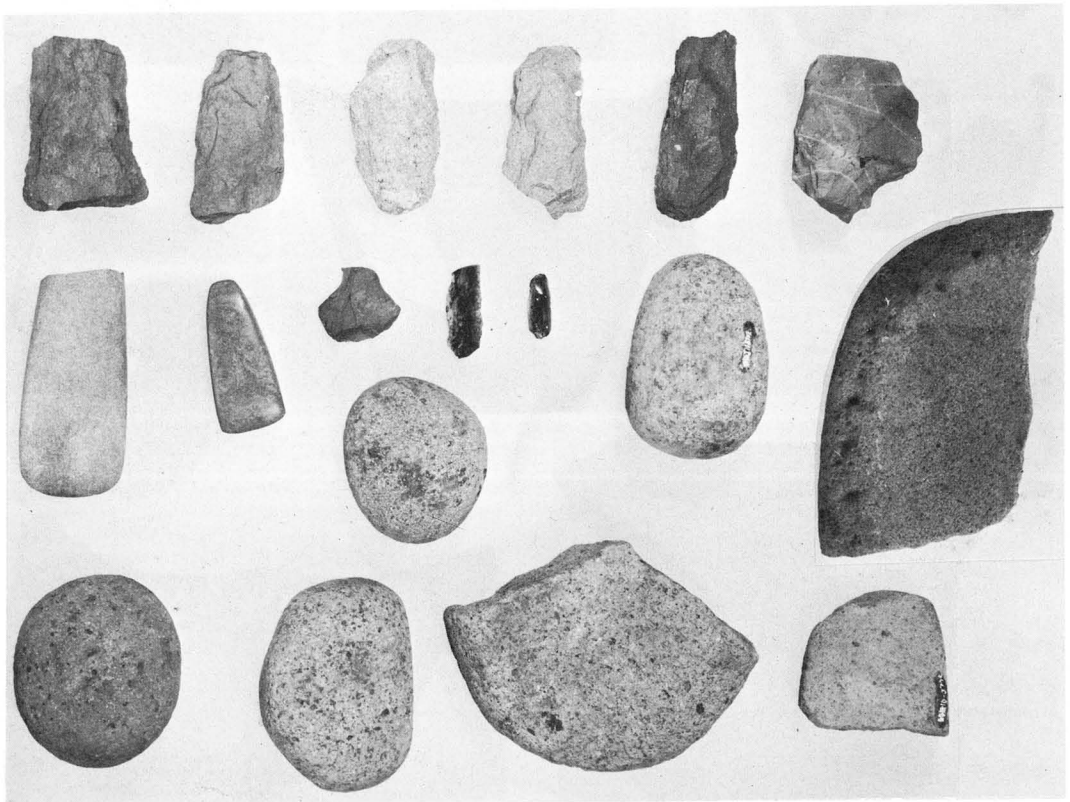
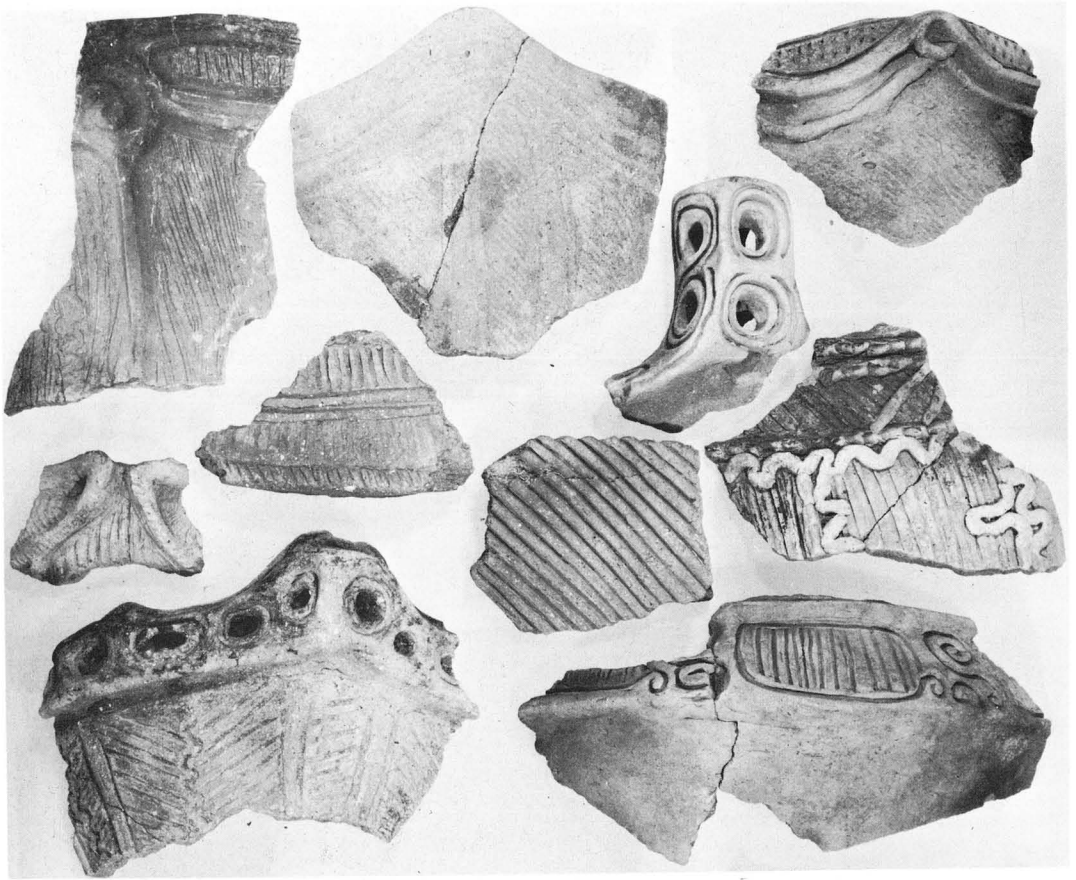


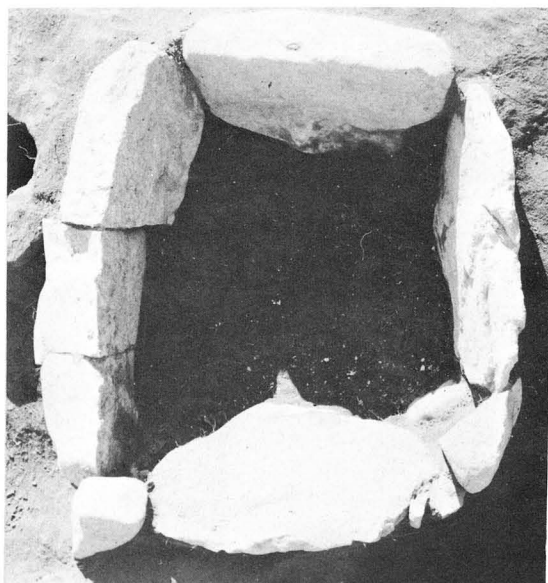


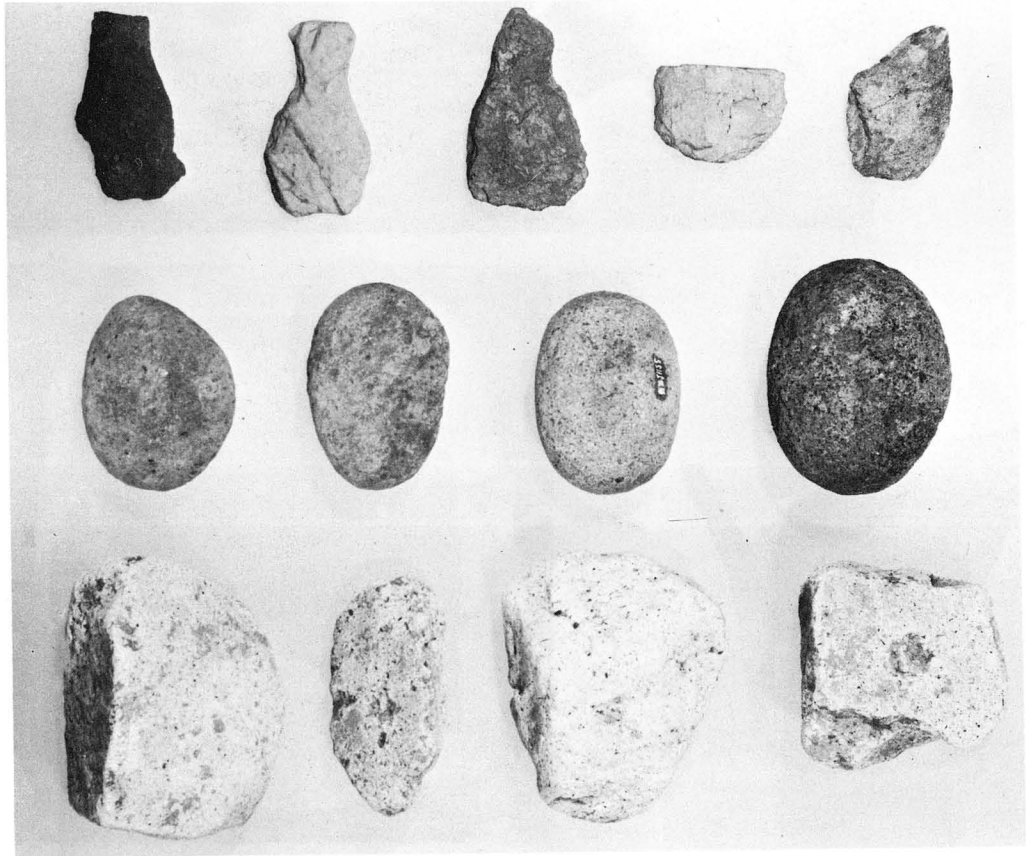
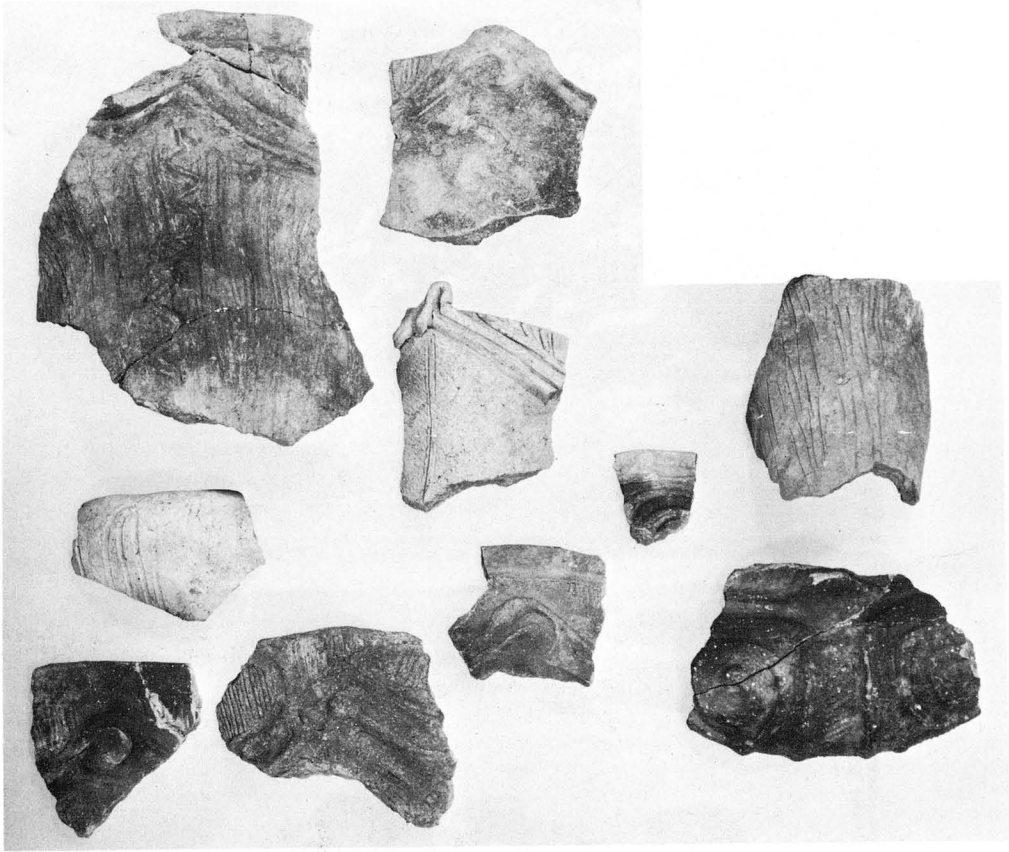








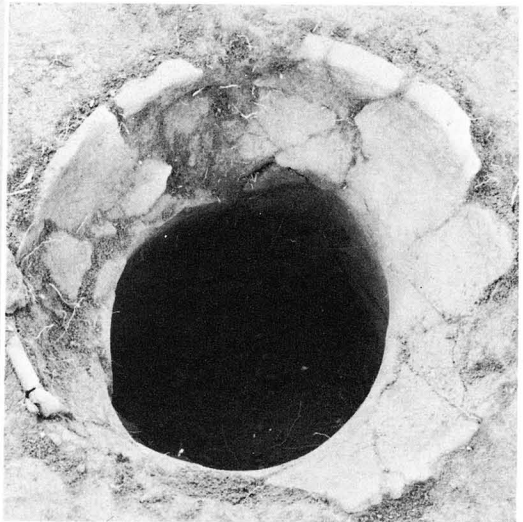
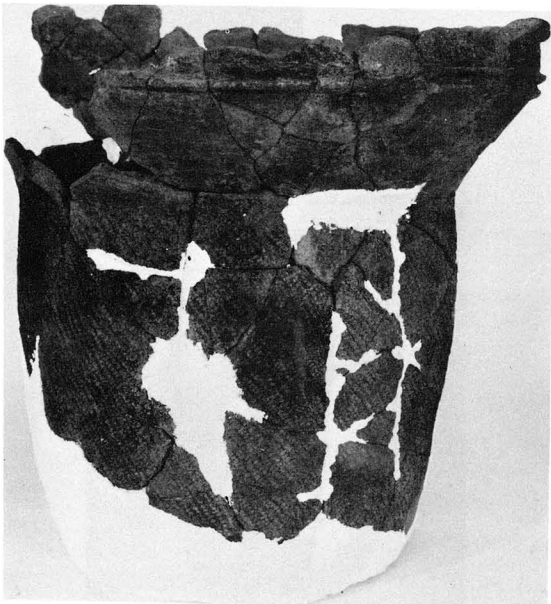


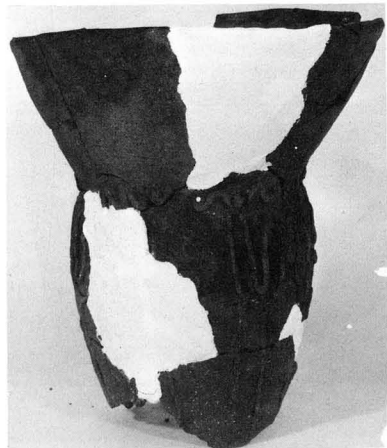
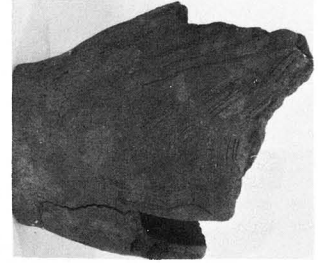
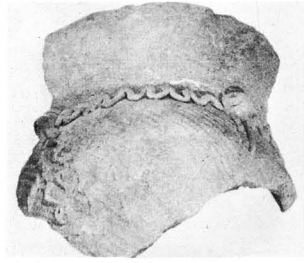


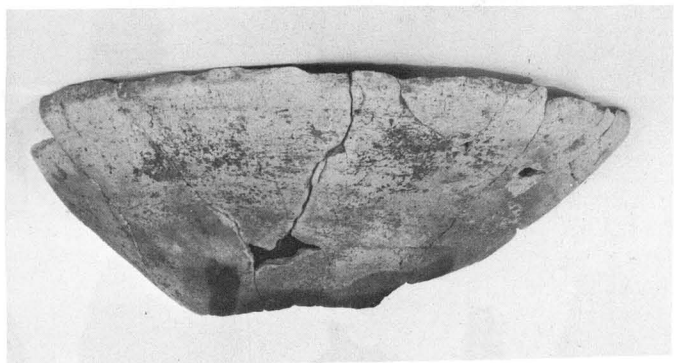


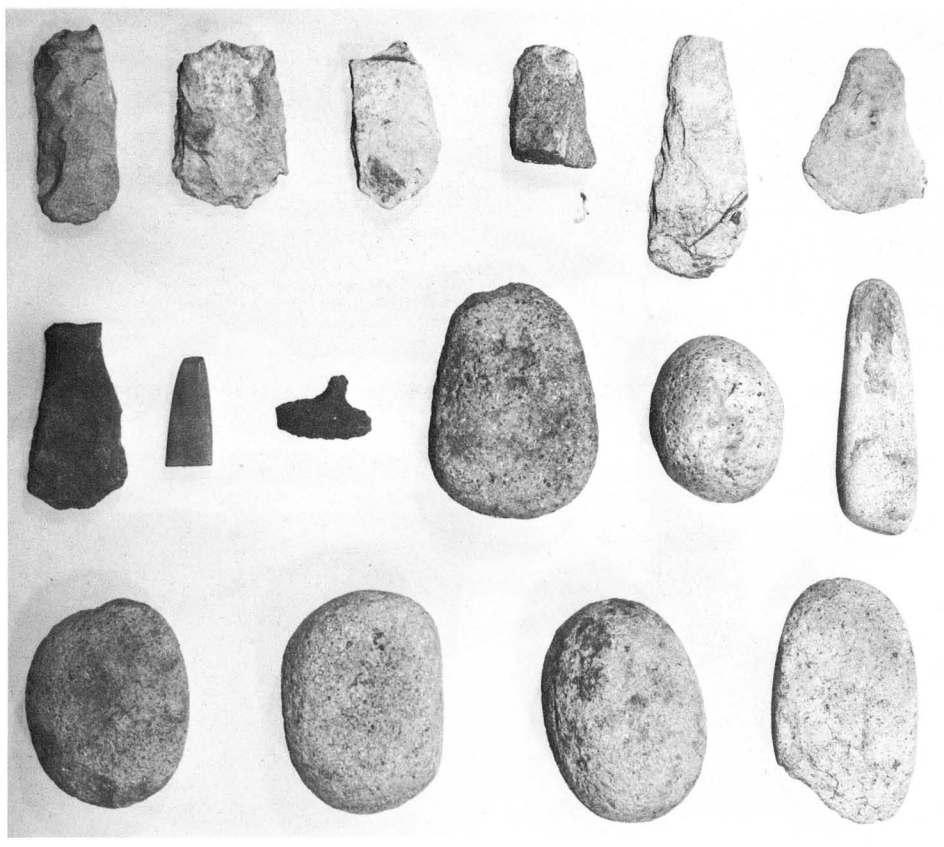
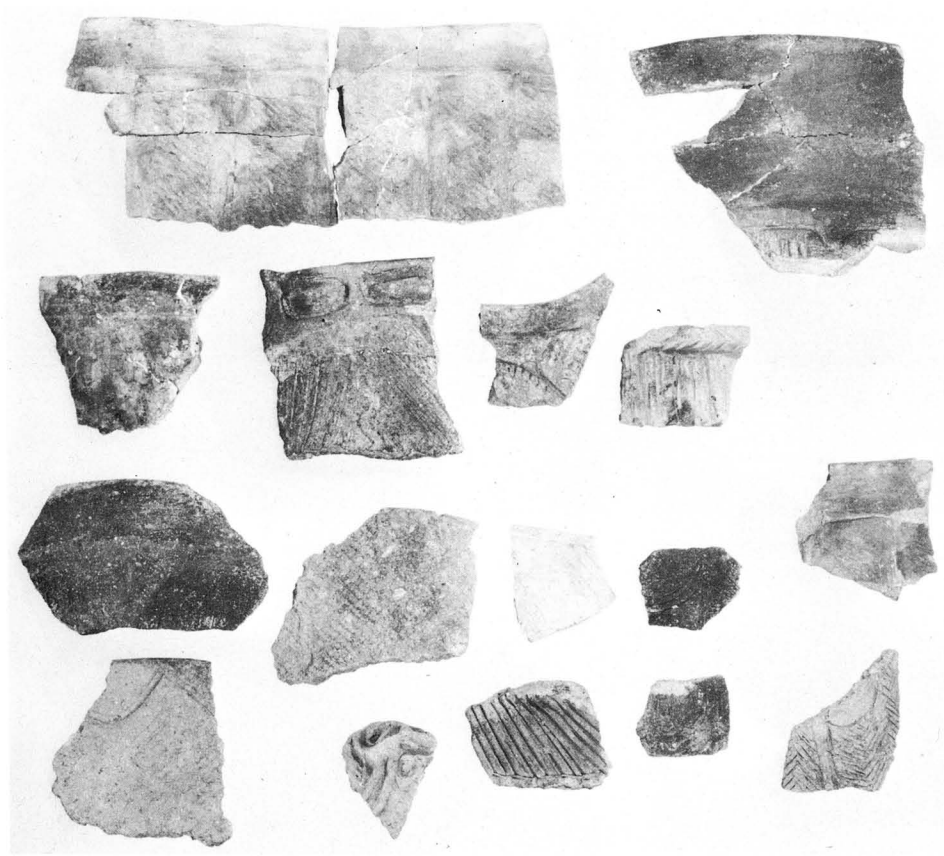


(右上11号住居・左下12号住居)

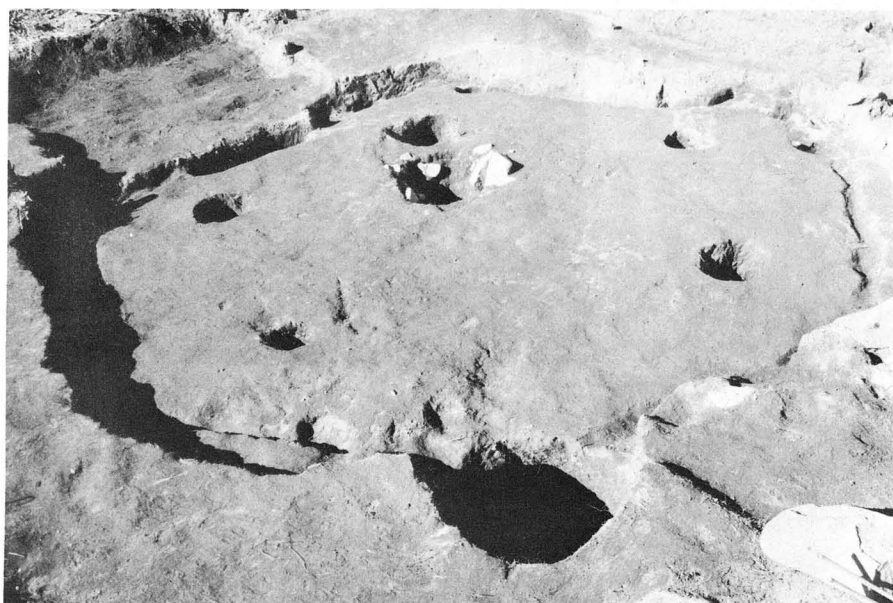


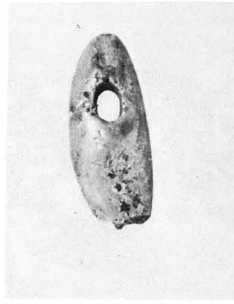






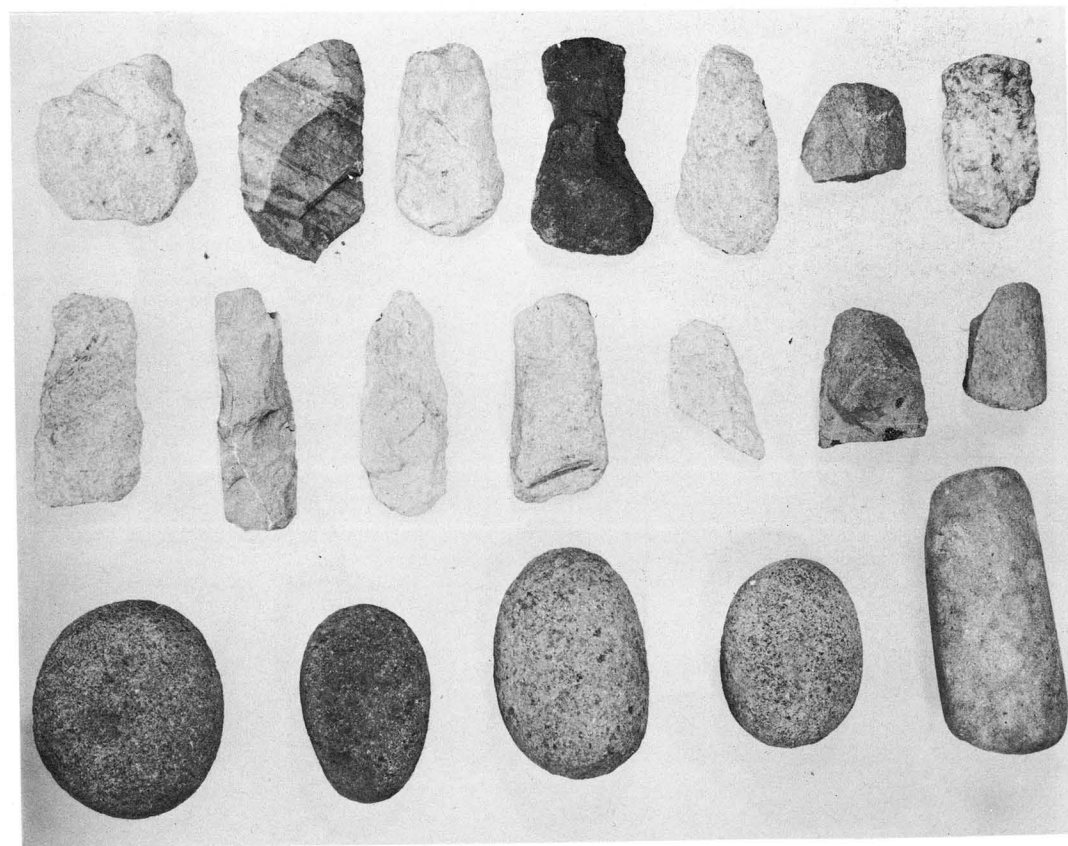
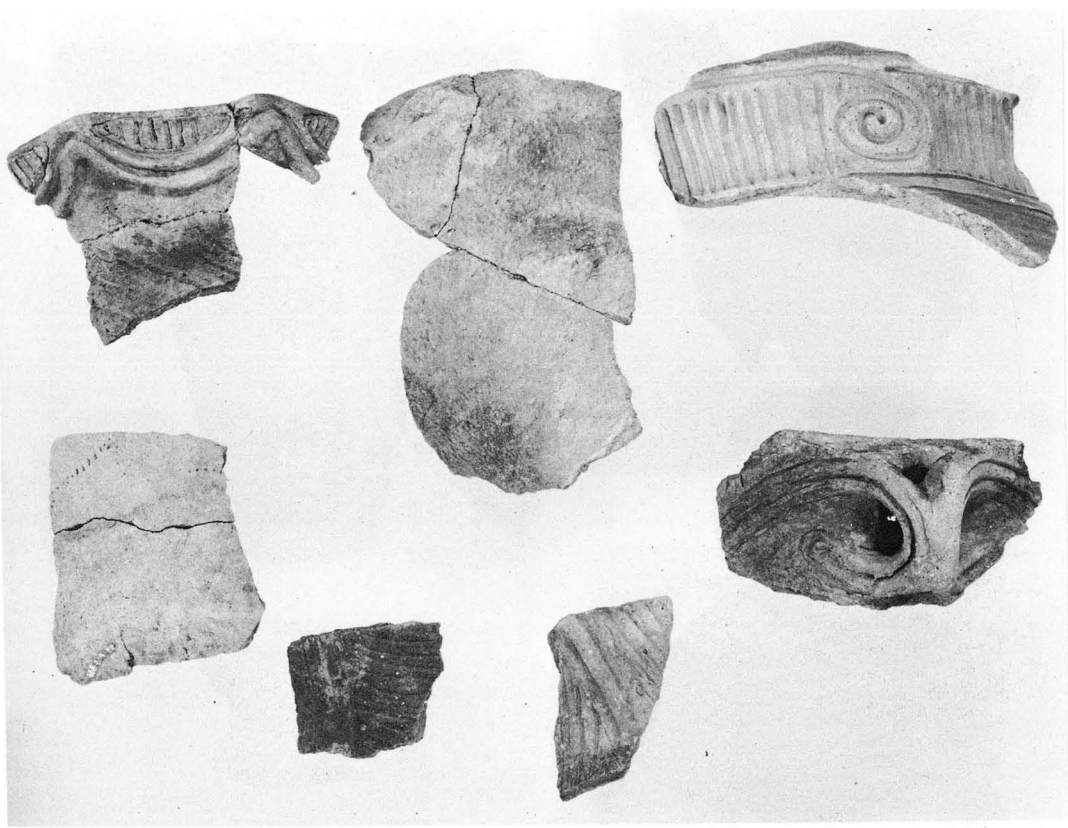


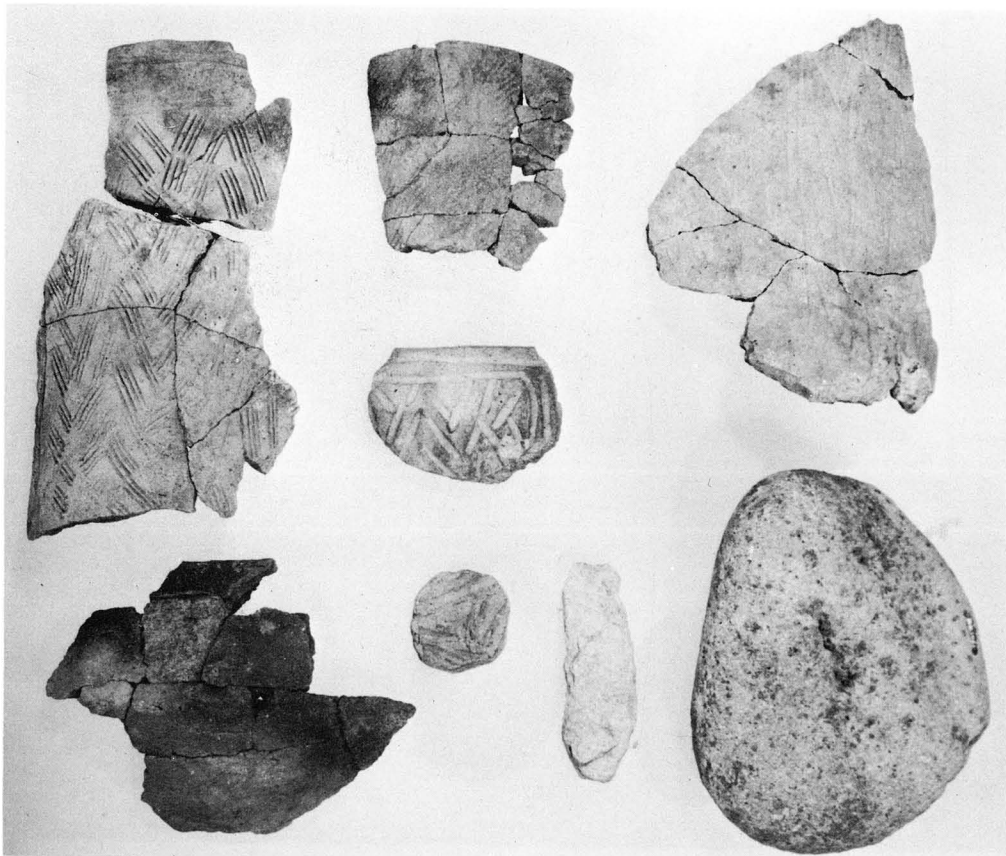
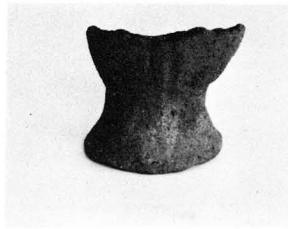
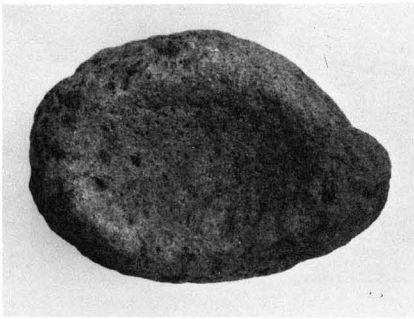




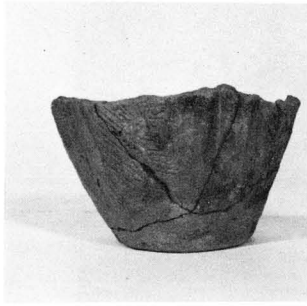
图版 106

頭無遺跡 | 4号住居址出土遺物(1)

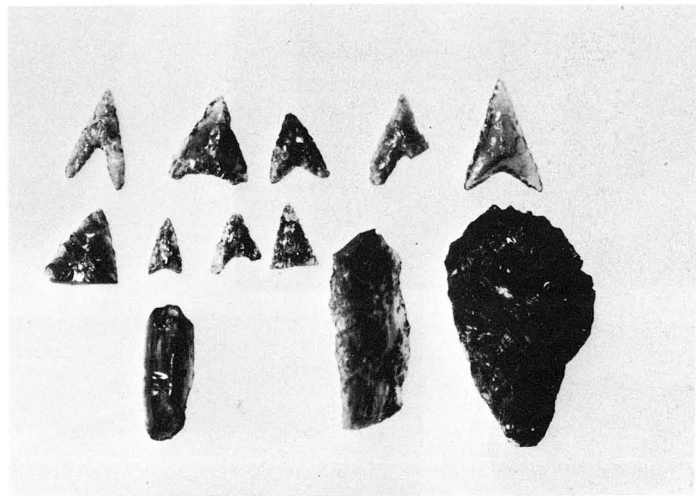




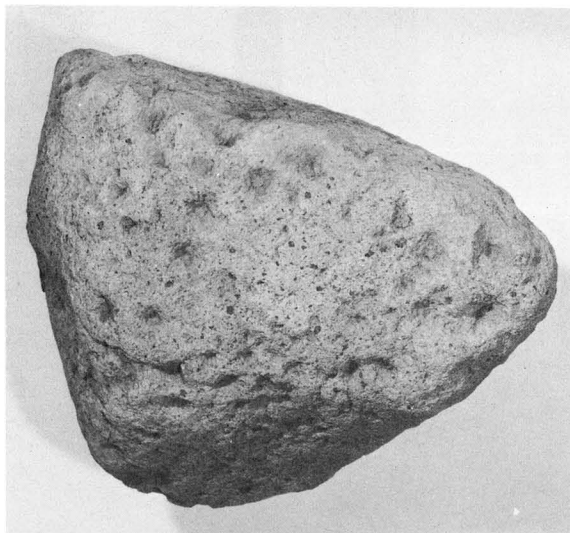
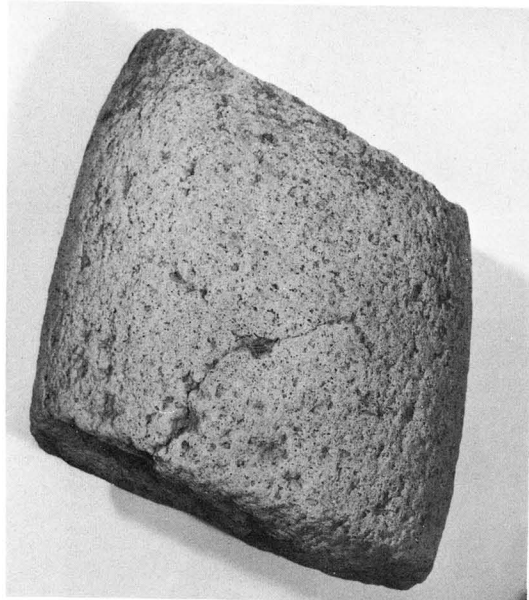


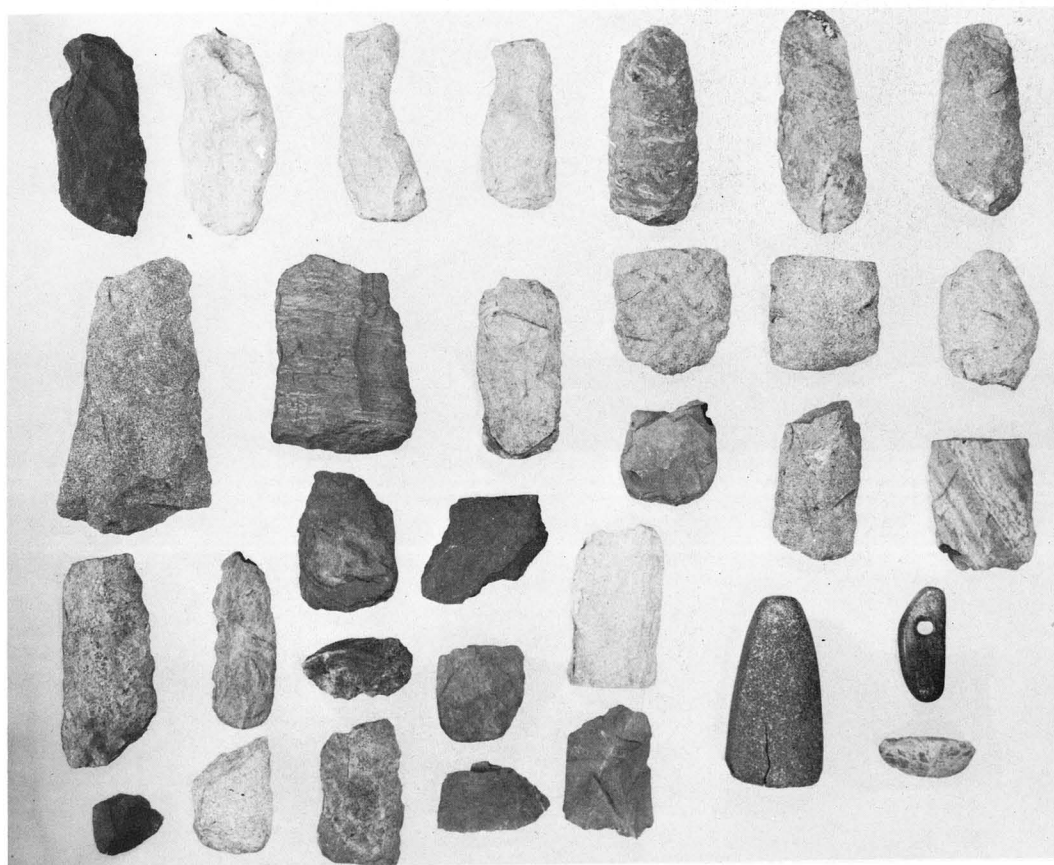
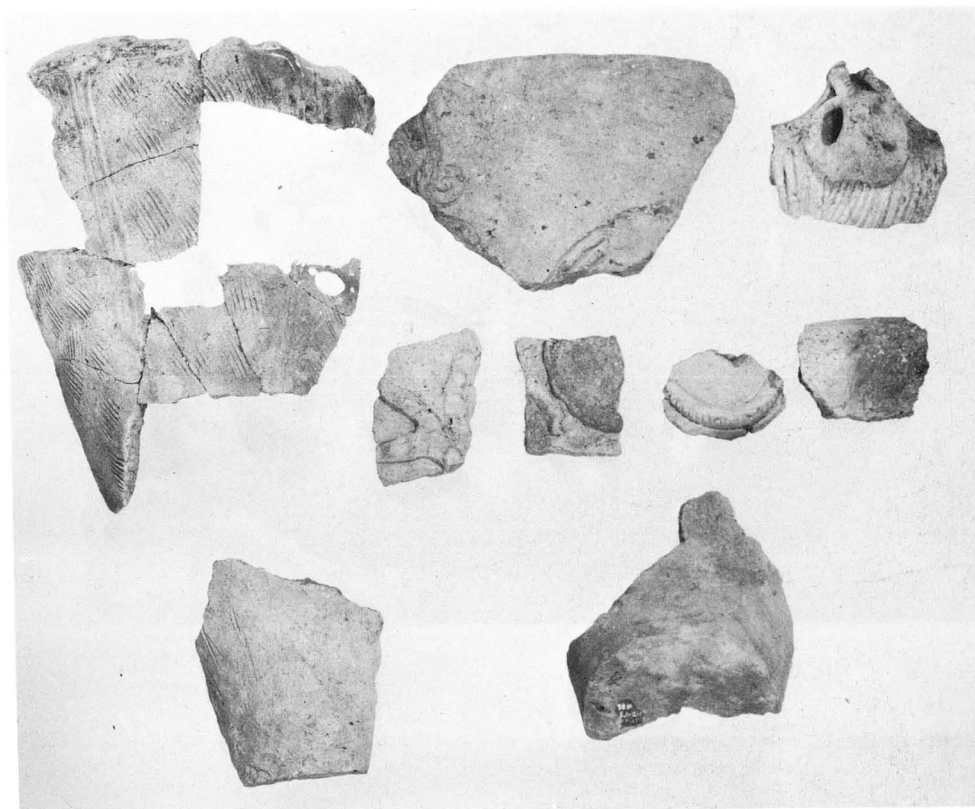


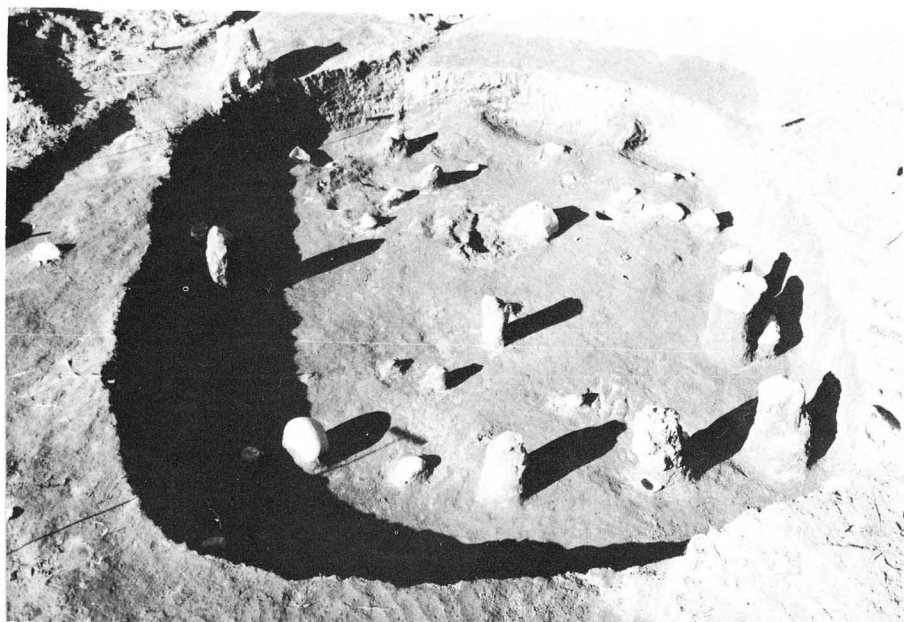
頭無遺跡 | 8号住居址出土遺物



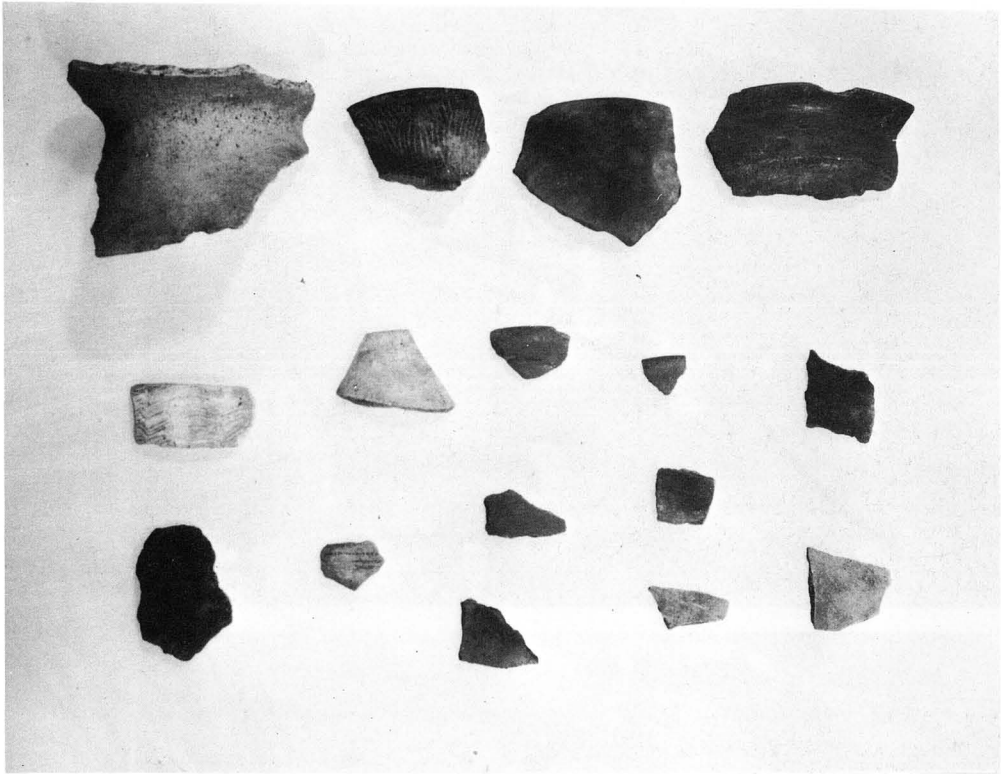
頭無遺跡出土石器



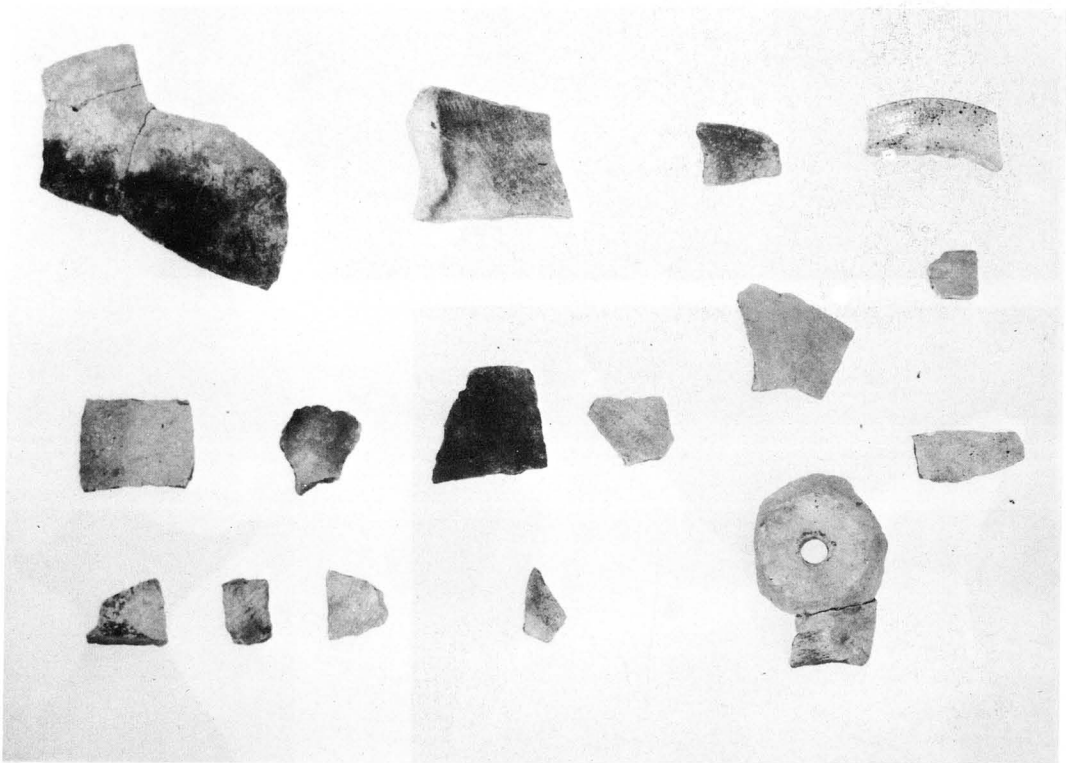




13号住居出土遺物



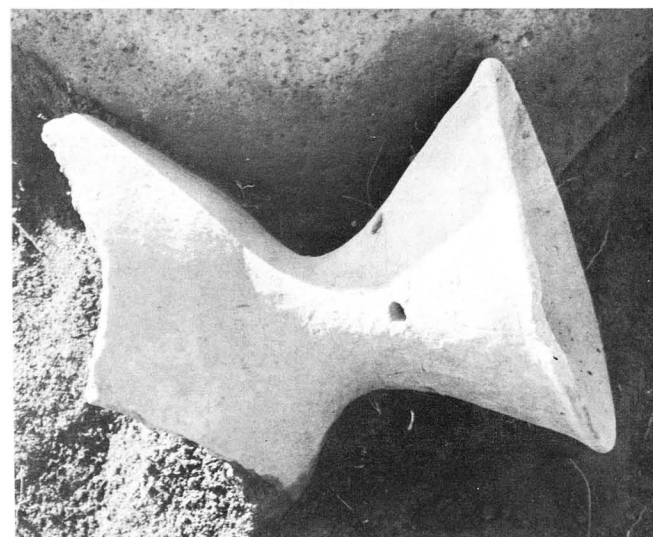
15号住居出土遺物



図版113

頭無遺跡13, 15号住居出土遺物





早道場遺跡鍬入式



同上発掘風景



同上セクション



西田遺跡溝状遺構



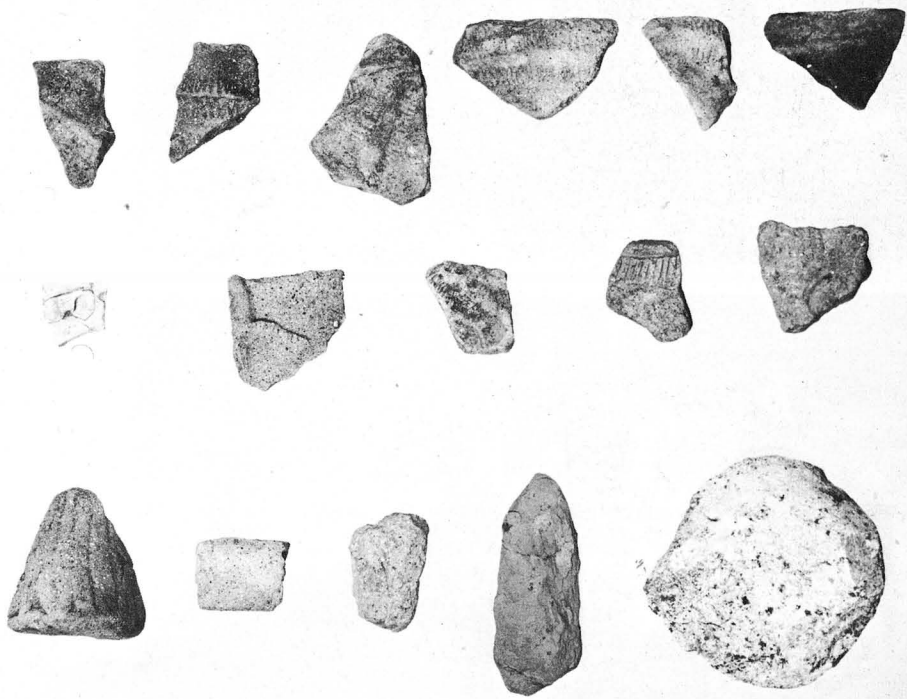
同上



同上セクション







図版117

三百水遺跡全景及び出土遺物

下フノリ平  
葛原  
西下屋敷



柳坪  
A、B、地区



頭 無



昭和50年3月25日印刷

昭和50年3月31日発行

山梨県中央道埋蔵文化財

包蔵地発掘調査報告書

— 北巨摩郡長坂、明野、葦崎地内 —

発行所 山梨県教育委員会

日本道路公団東京第二建設局

印刷所 サ ン ニ チ 印 刷

